市原市番後台遺跡・神明台遺跡

1982

千葉県土木部
財団法人千葉県文化財センター

市原市番後台遺跡・神明台遺跡

養老川総合開発高滝ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

1982

千葉県土木部
財団法人千葉県文化財センター

序　文

清澄山系に源を発し、東京湾に注ぐ養老川流域には、その恵まれた自然環境等のため数多くの遺跡が残されております。

千葉県における水の供給源は、大部分が利根川水系に依存しておりますが、京葉地帯の急激な人口増加に伴う生活用水や、臨海工業地帯に工業用水の需用を満たすことが急務となっていました。

このため、千葉県では、養老川総合開発事業の一環として、養老川の治水、生活・工業用水の供給等を目的とした高滝ダムの建設を計画しました。

千葉県教育委員会は、高滝ダム建設に伴う集団移転地内に所在する埋蔵文化財について事前に実態を把握するとともに、その取扱いについて、事業主体者である千葉県土木部河川課をはじめ関係諸機関と協議を重ねてまいりました。

その結果、予定地内の遺跡については、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとし、(財)千葉県文化財センターを調査機関として指定しました。

当センターは、発掘調査の実施について県土木部河川課と詳細な打合わせを行い、昭和54年4月から昭和55年7月まで発掘調査を実施しました。

2年間にわたる番後台遺跡の調査では、縄文、弥生、古墳の各時代の遺構及び遺物が多数発見され、当地域における原始・古代文化の一端を明らかにすることができました。

このたび、調査結果を高滝ダム埋蔵文化財発掘調査報告書として刊行するに当たり、この報告書が学術的な資料としてはもとより、文化財の保護、普及のために広く一般の方々に活用されることを望んでやみません。

終りに、千葉県土木部河川課の御協力と千葉県教育庁文化課の御指導、助言にお礼を申し上げるとともに、酷寒、酷暑の中で調査に協力された調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和57年3月

財団法人　千葉県文化財センター

理事長　今　井　　正

凡　例

1．本書は、千葉県土木部河川課による養老川総合開発事業高滝ダム建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2．本書に所収される内容は、昭和54・55年度に調査の対象となった市原市養老に所在する番後台遺跡（遺跡コード番号219－005）と昭和54年度に調査の対象となった市原市高滝に所在する神明台遺跡（遺跡コード番号219－006）についての資料報告である。

3．発掘調査は、千葉県土木部河川課の依頼をうけ、千葉県教育委員会の要請と指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが実施した。番後台遺跡の調査は昭和54年4月2日から昭和54年12月31日までと昭和55年3月1日から昭和55年7月31日、神明台遺跡の調査は昭和55年1月1日から昭和55年2月29日に実施し、整理を昭和55年8月1日から昭和56年12月31日まで行った。

4．調査は、次の組織により実施した。

調査部長　白石竹雄

部長補佐　栗本佳弘（55．4．1～56．3．31）

〃　中山吉秀（56．4．1～）

班長　栗本佳弘（54．4．1～55．3．31）

〃　山田常雄（55．4．1～）

調査研究員　瀬戸久夫（54．4．1～55．3．31）

藤崎芳樹

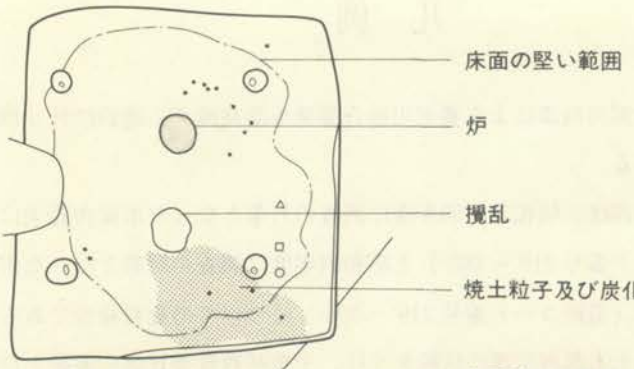
白石　浩（55．4．1～55．12．31、56．3．1～56．3．31）

5．整理作業は、藤崎・白石（浩）が行った。

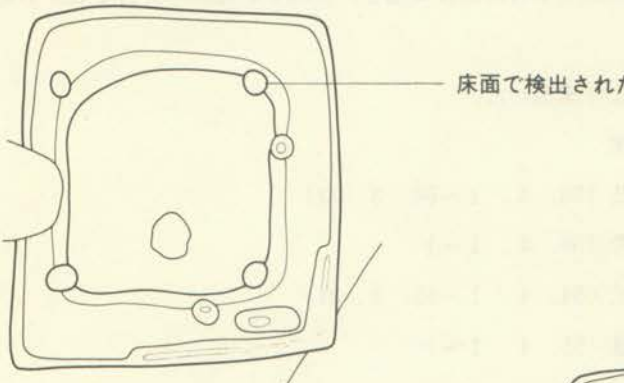
6．本書の執筆は、藤崎が行い、山田が加筆・修正を行った。

7．本書における遺構番号は、すべて現地で付したものと同一である。各遺構は001からの通し番号であるが、欠番が存在する。

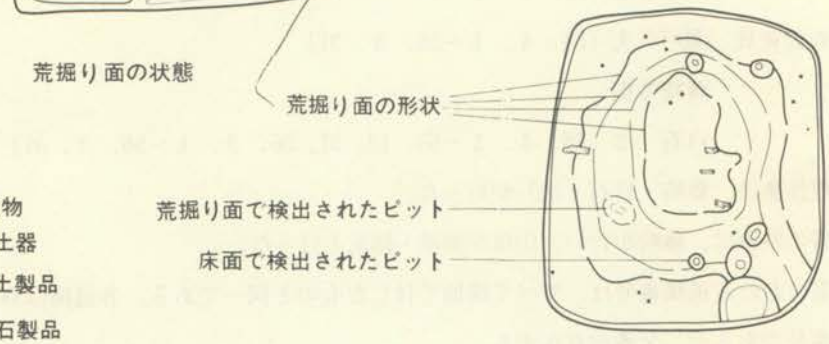
8．発掘調査から本書の刊行に至るまで、千葉県教育庁文化課・千葉県土木部河川課・養老川総合開発事務所の関係者各位をはじめとして、多くの方々から御指導・御助言をいただいたことに深く謝意を表します。



床面の状態



荒掘り面の状態



出土遺物

- • 土器
- ○ 土製品
- △ 石製品
- □ 鉄製品

目　次

序文
凡例

Ⅰ　発掘調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 1

Ⅲ　発掘調査の経過と方法 …… 4

Ⅳ　番後台遺跡 …… 9

1．検出された遺構と遺物 …… 9

(1)　住 居 跡

縄文時代

002B号住居跡…… 9

弥生時代

001号住居跡…… 10
002A号住居跡…… 11
004号住居跡…… 17
021号住居跡…… 22
029F号住居跡…… 25
036B号住居跡…… 27
037号住居跡…… 29
038C号住居跡…… 31
038G号住居跡…… 33
040C号住居跡…… 35
040D号住居跡…… 36
048号住居跡…… 37
049号住居跡…… 38
050A号住居跡…… 41
050B号住居跡…… 42
050C号住居跡…… 43
051号住居跡…… 44
052号住居跡…… 46
056B号住居跡…… 47
056C号住居跡…… 51
056D号住居跡…… 52
059B号住居跡…… 53
059C号住居跡…… 55
059D号住居跡…… 56
060B号住居跡…… 58
061B号住居跡…… 59
064A号住居跡…… 61
069G号住居跡…… 62
070号住居跡…… 64
072A号住居跡…… 66

古墳時代

003号住居跡…… 67
005号住居跡…… 70
006号住居跡…… 71
008A号住居跡…… 74
009号住居跡…… 76
010A号住居跡…… 80
010B号住居跡…… 82
011号住居跡…… 83
012号住居跡…… 84
014A号住居跡…… 86
014B号住居跡…… 86
015号住居跡…… 90
016A号住居跡…… 92
016B号住居跡…… 95
017号住居跡…… 96
018号住居跡…… 97
019号住居跡…… 99
020号住居跡…… 106
022号住居跡…… 111
023号住居跡…… 114
024号住居跡…… 115
025号住居跡…… 117
026号住居跡…… 122
027号住居跡…… 129
028号住居跡…… 131
029A号住居跡…… 133
029B号住居跡…… 136
029C号住居跡…… 136
029D号住居跡…… 140
029E号住居跡…… 140
031B号住居跡…… 153
031C号住居跡…… 153
031D住居跡…… 155
031E住居跡…… 158
031F住居跡…… 161
032号住居跡…… 163
033号住居跡…… 168
034A号住居跡…… 171
034B号住居跡…… 172
034C号住居跡…… 173
035B号住居跡…… 176
038A号住居跡…… 184
038B号住居跡…… 189
038D号住居跡…… 190
038E号住居跡…… 191
039B号住居跡…… 196
039C号住居跡…… 196
039E号住居跡…… 202
040B号住居跡…… 205
042号住居跡…… 206
043A・B号住居跡…… 210
044号住居跡…… 211
047号住居跡…… 220
054号住居跡 …… 224
055B号住居跡…… 226
059A号住居跡…… 228
060A号住居跡…… 229
061A号住居跡…… 230
069A号住居跡…… 232
069B号住居跡…… 235
069C号住居跡…… 237
069D号住居跡…… 238
069E号住居跡…… 241
069F号住居跡…… 242

071号住居跡…… 243
072B号住居跡…… 245
072C号住居跡…… 247
073A号住居跡…… 247
073B号住居跡…… 251
073C号住居跡…… 254
074A号住居跡…… 256
074B号住居跡…… 260
075号住居跡…… 260
076号住居跡…… 262
077A号住居跡…… 265
077B号住居跡…… 271
078号住居跡…… 272
079A号住居跡…… 274
079B号住居跡…… 276
007号住居跡…… 278
008B号住居跡…… 281
013号住居跡…… 284
029G号住居跡…… 287
030号住居跡…… 289
031A号住居跡…… 291
035A号住居跡…… 294
036A号住居跡…… 297
038F号住居跡…… 298
039A号住居跡…… 300
040号住居跡…… 302
040E号住居跡…… 305
041号住居跡…… 306
045号住居跡…… 312
046号住居跡…… 315
055A号住居跡…… 321
057A号住居跡…… 325
059E号住居跡…… 326
064B号住居跡…… 328
(2) そのほかの遺構と遺物
081A号方形周構遺構…… 331
081B号方形周構遺構…… 331
082号土壙…… 333
083号土壙…… 334
084号土壙…… 334
085号土壙…… 334
086号土壙…… 334
088号土壙…… 342
089号土壙…… 348
090号土壙…… 348
091号溝状遺構…… 350
092号溝状遺構…… 350
093号溝状遺構…… 350
096号溝状遺構…… 352
ピット群…… 363
053・057B・059F・062・063・065・3D45・46グリット…… 364
2. 小結…… 399
V 神明台遺跡 …… 408
VI 番後台遺跡の土壌鉱物分析 …… 410

挿 図 目 次

第１図　番後台遺跡・神明台遺跡の位置…… 2
第２図　番後台遺跡周辺地形図…… 6
第３図　番後台遺跡遺構配置図…… 7
第４図　002Ｂ号住居跡…… 9
第５図　002Ｂ号住居跡出土遺物…… 10
第６図　001号住居跡…… 11
第７図　002Ａ号住居跡…… 13
第８図　002Ａ号住居跡出土遺物(1)…… 15
第９図　002Ａ号住居跡出土遺物(2)…… 16
第10図　004号住居跡…… 18
第11図　004号住居跡出土遺物(1)…… 19
第12図　004号住居跡出土遺物(2)…… 20
第13図　004号住居跡出土遺物(3)…… 21
第14図　021号住居跡…… 23
第15図　021号住居跡出土遺物…… 24
第16図　029Ｆ号住居跡…… 26
第17図　029Ｆ号住居跡出土遺物…… 26
第18図　036Ｂ号住居跡…… 27
第19図　036Ｂ号住居跡出土遺物…… 28
第20図　037号住居跡…… 29
第21図　037号住居跡出土遺物…… 30
第22図　038Ｃ号住居跡…… 31
第23図　038Ｃ号住居跡出土遺物…… 32
第24図　038Ｇ号住居跡…… 33
第25図　038Ｇ号住居跡出土遺物…… 34
第26図　040Ｃ・Ｄ号住居跡…… 35
第27図　040Ｃ号住居跡出土遺物…… 36
第28図　048号住居跡…… 37
第29図　048号住居跡出土遺物…… 38
第30図　049号住居跡…… 39

第31図　049号住居跡出土遺物…… 40
第32図　050A・B・C号住居跡…… 41
第33図　050B号住居跡出土遺物…… 42
第34図　050C号住居跡出土遺物…… 43
第35図　051号住居跡…… 45
第36図　051号住居跡出土遺物…… 45
第37図　052号住居跡…… 46
第38図　052号住居跡出土遺物…… 47
第39図　056B・C・D号住居跡…… 48
第40図　056B号住居跡出土遺物…… 49
第41図　056C号住居跡出土遺物…… 50
第42図　056D号住居跡出土遺物…… 52
第43図　059B・C・D号住居跡…… 54
第44図　059B号住居跡出土遺物…… 55
第45図　059C号住居跡出土遺物…… 56
第46図　059D号住居跡出土遺物…… 57
第47図　060B号住居跡…… 58
第48図　060B号住居跡出土遺物…… 59
第49図　061B号住居跡…… 60
第50図　061B号住居跡出土遺物…… 60
第51図　064A号住居跡…… 61
第52図　069G号住居跡…… 62
第53図　069G号住居跡出土遺物…… 63
第54図　070号住居跡…… 64
第55図　070号住居跡出土遺物…… 65
第56図　072A号住居跡…… 66
第57図　072A号住居跡出土遺物…… 67
第58図　003号住居跡…… 68
第59図　003号住居跡出土遺物…… 69
第60図　005号住居跡…… 70
第61図　005号住居跡出土遺物…… 71
第62図　006号住居跡…… 72
第63図　006号住居跡出土遺物…… 73

第64図　008A号住居跡…… 75
第65図　008A号住居跡出土遺物…… 75
第66図　009号住居跡…… 77
第67図　009号住居跡出土遺物(1)…… 78
第68図　009号住居跡出土遺物(2)…… 79
第69図　010A・B号住居跡…… 81
第70図　010A・B号住居跡出土遺物…… 82
第71図　011号住居跡…… 84
第72図　011号住居跡出土遺物…… 84
第73図　012号住居跡…… 85
第74図　012号住居跡出土遺物…… 85
第75図　014A・B号住居跡…… 87
第76図　014A号住居跡出土遺物…… 88
第77図　014B号住居跡出土遺物…… 88
第78図　015号住居跡…… 90
第79図　015号住居跡出土遺物…… 91
第80図　016A・B号住居跡…… 93
第81図　016A号住居跡出土遺物…… 94
第82図　017号住居跡…… 96
第83図　018号住居跡…… 98
第84図　018号住居跡出土遺物…… 99
第85図　019号住居跡(1)…… 101
第86図　019号住居跡(2)…… 102
第87図　019号住居跡出土遺物(1)…… 103
第88図　019号住居跡出土遺物(2)…… 104
第89図　020号住居跡…… 107
第90図　020号住居跡出土遺物(1)…… 108
第91図　020号住居跡出土遺物(2)…… 109
第92図　022号住居跡…… 111
第93図　022号住居跡出土遺物…… 112
第94図　023号住居跡…… 114
第95図　023号住居跡出土遺物…… 115
第96図　024号住居跡…… 116

第97図　024号住居跡出土遺物…… 117
第98図　025号住居跡…… 118
第99図　025号住居跡出土遺物(1)…… 119
第100図　025号住居跡出土遺物(2)…… 120
第101図　026号住居跡…… 123
第102図　026号住居跡出土遺物(1)…… 124
第103図　026号住居跡出土遺物(2)…… 125
第104図　026号住居跡出土遺物(3)…… 126
第105図　027号住居跡…… 130
第106図　027・028号住居跡出土遺物…… 131
第107図　028号住居跡…… 132
第108図　029号住居跡群重複関係…… 133
第109図　029A号住居跡…… 134
第110図　029A号住居跡出土遺物…… 135
第111図　029B・C号住居跡(1)…… 137
第112図　029B・C号住居跡(2)…… 138
第113図　029B・C号住居跡出土遺物…… 139
第114図　029D・E号住居跡(1)…… 141
第115図　029D・E号住居跡(2)…… 143
第116図　029D号住居跡出土遺物…… 145
第117図　029E号住居跡出土遺物(1)…… 146
第118図　029E号住居跡出土遺物(2)…… 148
第119図　029E号住居跡出土遺物(3)…… 150
第120図　029E号住居跡出土遺物(4)…… 151
第121図　031号住居跡群重複関係及び031B・C号住居跡…… 154
第122図　031B号住居跡出土遺物…… 155
第123図　031D号住居跡…… 156
第124図　031D号住居跡出土遺物…… 157
第125図　031E号住居跡…… 159
第126図　031E号住居跡出土遺物…… 160
第127図　031F号住居跡…… 161
第128図　031F号住居跡出土遺物…… 162
第129図　032・034A・B号住居跡…… 164

第130図　032号住居跡出土遺物(1)…… 165
第131図　032号住居跡出土遺物(2)…… 166
第132図　033号住居跡(1)…… 169
第133図　033号住居跡(2)…… 170
第134図　033号住居跡出土遺物…… 171
第135図　034A・B号住居跡出土遺物…… 172
第136図　034C号住居跡…… 173
第137図　034C号住居跡出土遺物…… 174
第138図　035B号住居跡…… 177
第139図　035B号住居跡出土遺物(1)…… 178
第140図　035B号住居跡出土遺物(2)…… 180
第141図　035B号住居跡出土遺物(3)…… 182
第142図　035B号住居跡出土遺物(4)…… 183
第143図　038号住居跡群重複関係…… 185
第144図　038A号住居跡…… 186
第145図　038A号住居跡出土遺物(1)…… 187
第146図　038A号住居跡出土遺物(2)…… 188
第147図　038B・D号住居跡…… 189
第148図　038B号住居跡出土遺物…… 190
第149図　038E号住居跡…… 191
第150図　038E号住居跡出土遺物(1)…… 193
第151図　038E号住居跡出土遺物(2)…… 194
第152図　038E号住居跡出土遺物(3)…… 195
第153図　039号住居跡群重複関係及び039B号住居跡…… 196
第154図　039C号住居跡(1)…… 198
第155図　039C号住居跡(2)…… 199
第156図　039C号住居跡出土遺物(1)…… 201
第157図　039C号住居跡出土遺物(2)…… 202
第158図　039E号住居跡…… 203
第159図　039E住居跡出土遺物…… 204
第160図　040B号住居跡…… 205
第161図　040B号住居跡出土遺物…… 205
第162図　042号住居跡(1)…… 207

第163図　042号住居跡(2)…… 208
第164図　042号住居跡出土遺物…… 209
第165図　043A・B号住居跡…… 210
第166図　043A号住居跡出土遺物…… 211
第167図　044号住居跡(1)…… 212
第168図　044号住居跡(2)…… 213
第169図　044号住居跡出土遺物(1)…… 215
第170図　044号住居跡出土遺物(2)…… 216
第171図　044号住居跡出土遺物(3)…… 218
第172図　044号住居跡出土遺物(4)…… 219
第173図　047号住居跡…… 220
第174図　047号住居跡出土遺物(1)…… 222
第175図　047号住居跡出土遺物(2)…… 223
第176図　054号住居跡…… 225
第177図　054号住居跡出土遺物…… 226
第178図　055B号住居跡…… 227
第179図　055B号住居跡出土遺物…… 227
第180図　059A号住居跡…… 228
第181図　059A号住居跡出土遺物…… 229
第182図　060A号住居跡…… 230
第183図　061A号住居跡…… 231
第184図　061A号住居跡出土遺物…… 231
第185図　069号住居跡群重複関係…… 232
第186図　069A号住居跡…… 233
第187図　069A号住居跡出土遺物…… 234
第188図　069B号住居跡…… 236
第189図　069B号住居跡出土遺物…… 237
第190図　069C号住居跡…… 238
第191図　069D号住居跡…… 239
第192図　069D号住居跡出土遺物…… 240
第193図　069E・F号住居跡…… 241
第194図　069E号住居跡出土遺物…… 242
第195図　071号住居跡…… 243

第196図　071号住居跡出土遺物…… 244
第197図　072Ｂ・Ｃ号住居跡…… 245
第198図　072Ｂ・Ｃ号住居跡出土遺物…… 246
第199図　073Ａ・Ｂ号住居跡(1)…… 248
第200図　073Ａ・Ｂ号住居跡(2)…… 249
第201図　073Ａ号住居跡出土遺物…… 250
第202図　073Ｂ号住居跡出土遺物(1)…… 252
第203図　073Ｂ号住居跡出土遺物(2)…… 253
第204図　073Ｃ号住居跡…… 255
第205図　073Ｃ号住居跡出土遺物…… 256
第206図　074Ａ・Ｂ号住居跡(1)…… 257
第207図　074Ａ・Ｂ号住居跡(2)…… 258
第208図　074Ａ号住居跡出土遺物…… 259
第209図　075号住居跡…… 261
第210図　075号住居跡出土遺物…… 262
第211図　076号住居跡…… 263
第212図　076号住居跡出土遺物…… 264
第213図　077Ａ・Ｂ号住居跡…… 266
第214図　077Ａ号住居跡出土遺物(1)…… 267
第215図　077Ａ号住居跡出土遺物(2)…… 268
第216図　077Ａ号住居跡出土遺物(3)…… 270
第217図　078号住居跡…… 273
第218図　078号住居跡出土遺物…… 274
第219図　079Ａ・Ｂ号住居跡…… 275
第220図　080号住居跡…… 277
第221図　080号住居跡出土遺物…… 277
第222図　007号住居跡及びカマド…… 278
第223図　007号住居跡出土遺物…… 279
第224図　008Ｂ号住居跡(1)…… 281
第225図　008Ｂ号住居跡カマド(2)…… 282
第226図　008Ｂ号住居跡出土遺物…… 283
第227図　013号住居跡…… 285
第228図　013号住居跡出土遺物…… 286

第229図　029Ｇ号住居跡及びカマド…… 288
第230図　029Ｇ号住居跡出土遺物…… 288
第231図　030号住居跡及びカマド…… 290
第232図　030号住居跡出土遺物…… 291
第233図　031Ａ号住居跡及びカマド…… 292
第234図　031Ａ号住居跡出土遺物…… 293
第235図　035Ａ号住居跡及びカマド…… 295
第236図　035Ａ号住居跡出土遺物…… 296
第237図　036Ａ号住居跡…… 298
第238図　036Ａ号住居跡出土遺物…… 298
第239図　038Ｆ号住居跡…… 299
第240図　038Ｆ号住居跡出土遺物…… 300
第241図　039Ａ号住居跡及びカマド…… 301
第242図　039Ａ号住居跡出土遺物…… 302
第243図　040Ａ・Ｅ号住居跡及び 040Ａ号住居跡カマド…… 303
第244図　040Ａ号住居跡出土遺物…… 304
第245図　040Ｅ号住居跡出土遺物…… 306
第246図　041号住居跡及びカマド…… 307
第247図　041号住居跡出土遺物(1)…… 309
第248図　041号住居跡出土遺物(2)…… 310
第249図　041号住居跡出土遺物(3)…… 312
第250図　045号住居跡及びカマド…… 313
第251図　045号住居跡出土遺物…… 314
第252図　046号住居跡及びカマド(1)…… 316
第253図　046号住居跡(2)…… 317
第254図　046号住居跡出土遺物(1)…… 318
第255図　046号住居跡出土遺物(2)…… 319
第256図　055Ａ号住居跡…… 320
第257図　055Ａ号住居跡出土遺物…… 321
第258図　056Ａ号住居跡及びカマド…… 322
第259図　056Ａ号住居跡出土遺物…… 323
第260図　057Ａ号住居跡…… 325
第261図　057Ａ号住居跡出土遺物…… 326

第262図　059Ｅ号住居跡…… 327
第263図　059Ｅ号住居跡出土遺物…… 328
第264図　064Ｂ号住居跡及びカマド…… 329
第265図　064Ｂ号住居跡出土遺物…… 330
第266図　081Ａ・Ｂ号方形周溝遺構…… 332
第267図　081Ａ号方形周溝遺構出土遺物…… 333
第268図　082・083・084・087号土壙…… 335
第269図　083号土壙出土遺物…… 336
第270図　085･086号土壙…… 337
第271図　085号土壙出土遺物(1)…… 338
第272図　085号土壙出土遺物(2)…… 339
第273図　086号土壙出土遺物…… 340
第274図　087号土壙出土遺物…… 341
第275図　088号土壙…… 342
第276図　088号土壙出土遺物(1)…… 343
第277図　088号土壙出土遺物(2)…… 344
第278図　088号土壙出土遺物(3)…… 346
第279図　088号土壙出土遺物(4)…… 347
第280図　089号土壙出土遺物…… 349
第281図　090号土壙出土遺物…… 349
第282図　091･096号溝状遺構…… 351
第283図　089･090･092･093号遺構…… 353
第284図　092号溝状遺構出土遺物…… 355
第285図　093号溝状遺構出土遺物(1)…… 356
第286図　093号溝状遺構出土遺物(2)…… 357
第287図　093号溝状遺構出土遺物(3)…… 358
第288図　093号溝状遺構出土遺物(4)…… 359
第289図　096号溝状遺構出土遺物…… 362
第290図　ピット群 …… 363
第291図　053・057Ｂ・057Ｆ・062・063・065・066・067・068号遺構…… 365
第292図　３Ｄ45・46 グリット遺物出土状況…… 367
第293図　３Ｄ45・46 グリット出土遺物(1)…… 368
第294図　３Ｄ45・46 グリット出土遺物(2)…… 369

第295図　縄文時代の土器(1)…… 372
第296図　縄文時代の土器(2)…… 373
第297図　縄文時代の土器(3) …… 374
第298図　縄文時代の土器(4) …… 375
第299図　縄文時代の土器(5) …… 376
第300図　縄文時代の土器(6) …… 377
第301図　弥生時代の土器(1) …… 378
第302図　弥生時代の土器(2) …… 380
第303図　弥生時代の土器(3) …… 381
第304図　弥生時代の土器(4) …… 382
第305図　弥生時代の土器(5) …… 383
第306図　弥生時代の土器(6) …… 384
第307図　古墳時代の土器(1) …… 385
第308図　古墳時代の土器(2) …… 386
第309図　古墳時代の土器(3) …… 388
第310図　櫛描文等を有する土器(1) …… 389
第311図　櫛描文等を有する土器拓影 …… 390
第312図　櫛描文等を有する土器(2) …… 392
第313図　櫛描文等を有する土器(3) …… 393
第314図　タタキメを有する土器 …… 395
第315図　番後台遺跡出土の石器(1) …… 396
第316図　番後台遺跡出土の石器(2) …… 397
第317図　番後台遺跡出土の石器・石製品・鉄器 …… 398
第318図　神明台遺跡出土遺物 …… 409
第319図　重鉱物分析組成図 …… 412

図　版　目　次

図版１　　遺跡遠景

図版２　１．遺跡遠景（北西から）

　　２．遺跡全景

図版３　　遺構配置状況

図版４　１．002Ｂ号住居跡

　　２．002Ａ号住居跡

図版５　１．004号住居跡

　　２．004号住居跡遺物出土状況

図版６　１．021号住居跡

　　２．051号住居跡

図版７　１．003号住居跡

　　２．008Ａ号住居跡

図版８　１．009号住居跡

　　２．010Ａ・Ｂ号住居跡

図版９　１．014Ａ号住居跡

　　２．014Ｂ号住居跡

図版10　１．015号住居跡

　　２．016Ａ号住居跡

図版11　１．019号住居跡

　　２．019号住居跡遺物出土状況

図版12　１．020号住居跡

　　２．022号住居跡

図版13　１．024号住居跡

　　２．025号住居跡

図版14　　026号住居跡

図版15　１．029Ａ・Ｂ・Ｃ号住居跡荒掘り

　　２．029Ｅ号住居跡遺物出土状況

図版16　１．029Ｄ・Ｅ号住居跡荒掘り

　　２．031Ｄ号住居跡

図版17　1．031A・B・C・E・F号住居跡荒掘り
　　2．032号住居跡
図版18　1．033号住居跡荒掘り
　　2．034C号住居跡
図版19　　035B号住居跡
図版20　1．038A号住居跡
　　2．037、038A・B・C・D・E・F・G号住居跡荒掘り
図版21　1．039C号住居跡
　　2．042号住居跡
図版22　1．044号住居跡
　　2．047号住居跡
図版23　1．054号住居跡
　　2．054号住居跡遺物出土状況
図版24　1．069A号住居跡
　　2．069B・C・E・F号住居跡荒掘り
図版25　1．073A・B号住居跡
　　2．073B号住居跡遺物出土状況
図版26　1．073C号住居跡荒掘り
　　2．074A・B号住居跡荒掘り
図版27　1．076号住居跡
　　2．077A号住居跡
図版28　1．078号住居跡荒掘り
　　2．080号住居跡荒掘り
図版29　1．007号住居跡
　　2．008B号住居跡
図版30　1．013号住居跡
　　2．029G号住居跡遺物出土状況
図版31　1．030号住居跡
　　2．031A号住居跡
図版32　1．035A号住居跡荒掘り
　　2．041号住居跡
図版33　1．041号住居跡遺物出土状況
　　2．045号住居跡

図版34　046号住居跡
図版35　1．056A号住居跡
2．056A号住居跡遺物出土状況
図版36　064B号住居跡
図版37　081A・B号方形周溝遺構
図版38　1．082号土壙・091号溝状遺構
2．083号土壙
図版39　1．085号土壙
2．086号土壙
図版40　1．088号土壙遺物出土状況
2．088号土壙
図版41　092・093号溝状遺構
図版42　002A・002B・004・021・029F号住居跡出土土器
図版43　003・038C・048・056B号住居跡出土土器
図版44　009号住居跡出土土器
図版45　010A・10B・014A・014B号住居跡出土土器
図版46　014B・015・016A・018号住居跡出土土器
図版47　019号住居跡出土土器
図版48　019・020・022号住居跡出土土器
図版49　022・024・025号住居跡出土土器
図版50　026号住居跡出土土器
図版51　029A・029D号住居跡出土土器
図版52　029E号住居跡出土土器
図版53　029E・031B号住居跡出土土器
図版54　031D・031E・031F・032号住居跡出土土器
図版55　032号住居跡出土土器
図版56　032・033・034A・034C号住居跡出土土器
図版57　034C・035B号住居跡出土土器
図版58　035B号住居跡出土土器
図版59　035B号住居跡出土土器
図版60　035B号住居跡出土土器
図版61　035B・038A号住居跡出土土器
図版62　038A・038B・038E号住居跡出土土器

図版63　039C・039E号住居跡出土土器
図版64　042・043A・044号住居跡出土土器
図版65　044号住居跡出土土器
図版66　044・047号住居跡出土土器
図版67　047・054号住居跡出土土器
図版68　054・069A・069B・069E号住居跡出土土器
図版69　072B・073A・073B号住居跡出土土器
図版70　073B・073C・075号住居跡出土土器
図版71　077A号住居跡出土土器
図版72　007・077A号住居跡出土土器
図版73　007・008B・013号住居跡出土土器
図版74　013・029G・030号住居跡出土土器
図版75　030・031A・035A・036A・039A号住居跡出土土器
図版76　039A・040A・040E・041号住居跡出土土器
図版77　041号住居跡出土土器
図版78　041・045号住居跡出土土器
図版79　046・056A号住居跡出土土器
図版80　056A・064B住居跡・083号土壙出土土器
図版81　085号土壙出土土器
図版82　085・086・088号土壙出土土器
図版83　088号土壙出土土器
図版84　088号土壙出土土器
図版85　088・089号土壙・093号溝状遺構出土土器
図版86　093号溝状遺構出土土器
図版87　093号溝状遺構出土土器
図版88　096号溝状遺構・3D45・46グリッド等出土土器
図版89　櫛描文等を有する土器
図版90　土器
図版91　石器
図版92　石器及び石製品
図版93　鉄器及び銅鉄

I　発掘調査に至る経緯

番後台遺跡（23,270㎡）・神明台遺跡（6,095㎡）は、千葉県土木部河川課によって計画された、養老川総合開発高滝ダム建設工事に際して、その関連用地内で記録保存の対象となった遺跡である。

番後台遺跡は、昭和51年度に千葉県教育委員会が実施した、県内各市町村埋蔵文化財分布調査の折に発見された遺跡である。また、神明台遺跡は、近接する柏野遺跡（縄文時代中・後期の集落遺跡）に含まれると考えられ、事前に行われた分布調査でも、縄文式土器が採集された。

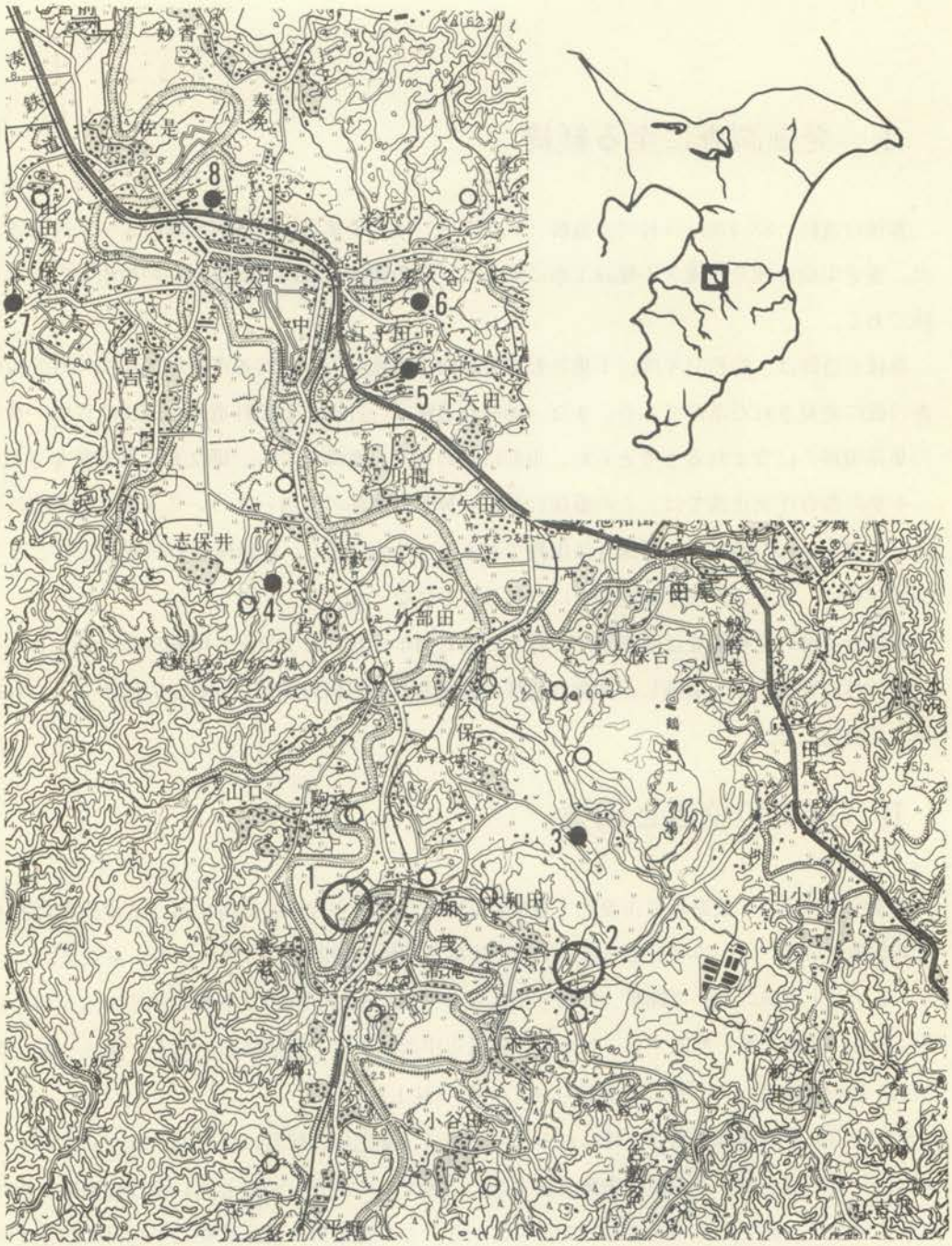
千葉県教育庁文化課では、この番後台遺跡・神明台遺跡の取扱いについて千葉県土木部河川課と協議を重ねた結果、現状保存は困難であるとの結論に達し、記録保存の措置をとることで協議が整い、当センターが発掘調査に当たることになった。

番後台遺跡の発掘調査は昭和54年4月2日から同年12月27日までと、昭和55年3月1日から同年7月31日にかけて実施し、神明台遺跡の発掘調査は昭和55年1月5日から同年2月29日にかけて実施した。

II　遺跡の位置と環境

番後台遺跡は、千葉県市原市養老字番後台北方及び養老字代中に位置する。清澄山系に源を発する養老川は、ほかの河川と同様に浸食・運搬・堆積の作用を常に行いつつ、東京湾に注いでいるが、上流域において開析、蛇行を何度となく繰り返し、同市牛久町のやや下流で川の両側に細長い沖積平野を形成する。しかし、養老川中流域から下流域においても、曲流・蛇行等の流路変遷が幾度かあったことが知られている。(註1)

遺跡の所在する通称番後台と呼ばれるこの台地は、養老川の蛇行により囲まれた0.6×0.75㎞程の三角形状を呈する台地の東側の最上部に位置する。番後台の最も高い所は標高53m程で、東側は急峻で、養老川との比高差は30mをはかる。この番後台一帯は昭和42年10月に畑地であったのを水田に改修され、台地の一部は削平されているが、台地は東から西に緩やかに傾斜していたものと考えられ、更に、番後台の下の台地も、明治28年以後水田として利用されているものであり、それ以前は緩やかに傾斜する台地であったと考えられる。(註2)



1. 番後台遺跡
2. 神明台遺跡
3. 永田・不入窯址
4. 岩横穴
5. 江古田古墳群
6. 南総中学校遺跡
7. 西国吉横穴
8. 牛久古墳群

第1図　番後台遺跡・神明台遺跡の位置

縄文時代の遺跡は、番後台遺跡の0.5㎞東方の同じ台地上に久保堰の台遺跡（註３）、東方２㎞に柏野遺跡（註４）が所在している。柏野遺跡は養老川の支流である古敷谷川の右岸の台地上に位置し、踏査を実施した際、道路際に加曽利ＥⅡ式土器を出土する住居跡の落ち込みを発見したが、報告されている土偶・石剣を考慮すると、縄文時代中期から晩期の集落跡と考えられる。南方1.8㎞には明金台遺跡、三角原遺跡、北方２㎞付近には久保台遺跡、久保新畑遺跡、磐若寺台遺跡、３㎞北方には藪遺跡がそれぞれ所在している。

番後台遺跡周辺で、弥生・古墳時代の集落遺跡の報告例は少なく、断片的に確認されているだけである。市原市小谷田において耕作中偶然発見された弥生時代中期須和田式土器を出土する小谷田中の台遺跡は養老川とその支流である小谷田川とにはさまれた台地上に位置するが、この遺跡は弥生中期の再葬墓の可能性が考えられる。江古田遺跡群内で発見された弥生時代後期末の住居跡（註５）及び久ヶ原式土器が発見された送り神遺跡（註６）は番後台遺跡より3.８㎞北方に位置し、小支谷をはさんだ対岸には南総中学校遺跡（註７）が、更に7.5㎞北方には近年調査された土宇遺跡（註８）が所在している。

養老川中流域は沖積地が少なく、丘陵が両岸に迫っているが、この丘陵の傾斜面には横穴・古墳群等が多く分布している。養老川左岸には、県指定の天然記念物である高滝神社の森に隣接した宮原横穴群が番後台遺跡の南方0.7㎞に位置し、２㎞程北方の外部田付近に岩横穴群（註９）、藪横穴群、外部田ヤツ横穴群（註10）が集中しており、更に５㎞北方には西国吉横穴群（註11）が所在している。養老川右岸では、東方１㎞に大和田横穴群、東方1.7㎞の永田の微高地には、永田・不入の須恵窯跡（註12）が所在している。３㎞北方に池和田横穴群（註13）、池和田古墳群が所在し、５㎞程北方には江古田古墳群、南総中横穴群が、更に北方には、米沢横穴群（註14）、米沢古墳群、奉免－妙高古墳群、牛久古墳群（註15）が所在している。

神明台遺跡は、市原市高滝字出口に位置する。本遺跡は養老川の支流である古敷谷川右岸標高59ｍの台地上に所在し、北側は標高85ｍの丘陵であり、更に北側は永田の水田へと急傾斜している。なお、本遺跡は0.3㎞南方に所在する柏野遺跡と同じ台地上であり、柏野遺跡の北側の一部と考えられる。

註１　藤原文夫他「養老川」『市原市史・別巻』市原市教育委員会　1979年

註２　参謀本部陸軍部測量局「第一軍管地方迅速測図　茂原及大多喜近傍21面組　田淵村」（大日本測量(株)資料調査部複製）

註３　宍倉昭一郎「養老川中流域発見の土偶」『南総郷土文化研究会誌』第六号　南総郷土文化研究会　1968年３月

註４　註３前掲書及び宍倉昭一郎「斉藤栄庵氏旧蔵の石剣」『市原地方史研究』第七号　市原市教育委員会　1970年２月

註5　武田宗久他「上総国女坂第1号方形墳」『南総郷土文化研究会叢書』第9巻　南総郷土文化研究会　1960年3月

註6　註5前掲書

註7　倉田芳郎他「千葉・南総中学遺跡」『先史』10　駒沢大学考古学研究室　1978年7月

註8　柿沼修平他「千葉県市原市土宇遺跡発掘調査報告」日本文化財研究所6　1979年4月

註9　野中徹他「岩横穴群発掘調査報告書」岩横穴群発掘調査団　1977年3月

註10　「高滝村外部田横穴」『史蹟名勝天然記念物調査』第六輯　千葉県　1929年3月
内藤政光「下総国外部田の横穴に就きて」『考古学雑誌』第19巻第2号　1929年2月

註11　杉山普作他「千葉県市原市西国吉横穴群」西国吉横穴群発掘調査団　1972年

註12　大川清「千葉県市原市永田・不入須恵窯跡調査報告書」千葉県教育委員会　1976年3月

註13　「鶴舞町池和田横穴」『史蹟名勝天然記念物調査』千葉県　1929年3月

註14　二宮栄学「米沢横沢群調査概報（第一次）」『市原地方史研究』第七号　市原市教育委員会　1970年2月

註15　増田精一他「牛久第Ⅲ号墳調査抄報」『千葉県埋蔵文化財抄報』3　千葉県教育委員会　1972年3月

Ⅲ　発掘調査の経過と方法

番後台遺跡の発掘調査は、昭和54年4月2日から同年12月27日までと昭和55年3月1日から同年7月31日にわたって実施した。また、神明台遺跡は、昭和55年1月5日から同年2月29日にわたり調査を実施した。

番後台遺跡は、昭和42年10月までは畑地であったが、その後農地改良され、調査当時には、東から西に下がる階段上に造成された水田として利用されていた。発掘調査の時点では調査区全域が、未買収地であった。このため発掘調査の後、調査以前の現状に復帰するという条件であり、水田の畦畔部分を残して調査を行い、やむを得ない場合のみ畦畔部分の調査を行った。なお、調査区域内には通学路としても利用されている公道と水田耕作用の水路・農道が北東から南西方向に走っており、この間は道路あるいは水路の縁までの調査を行った。また、調査区域外に一部かかるような遺構については、委託者側と土地所有者の御理解により、調査することができた。

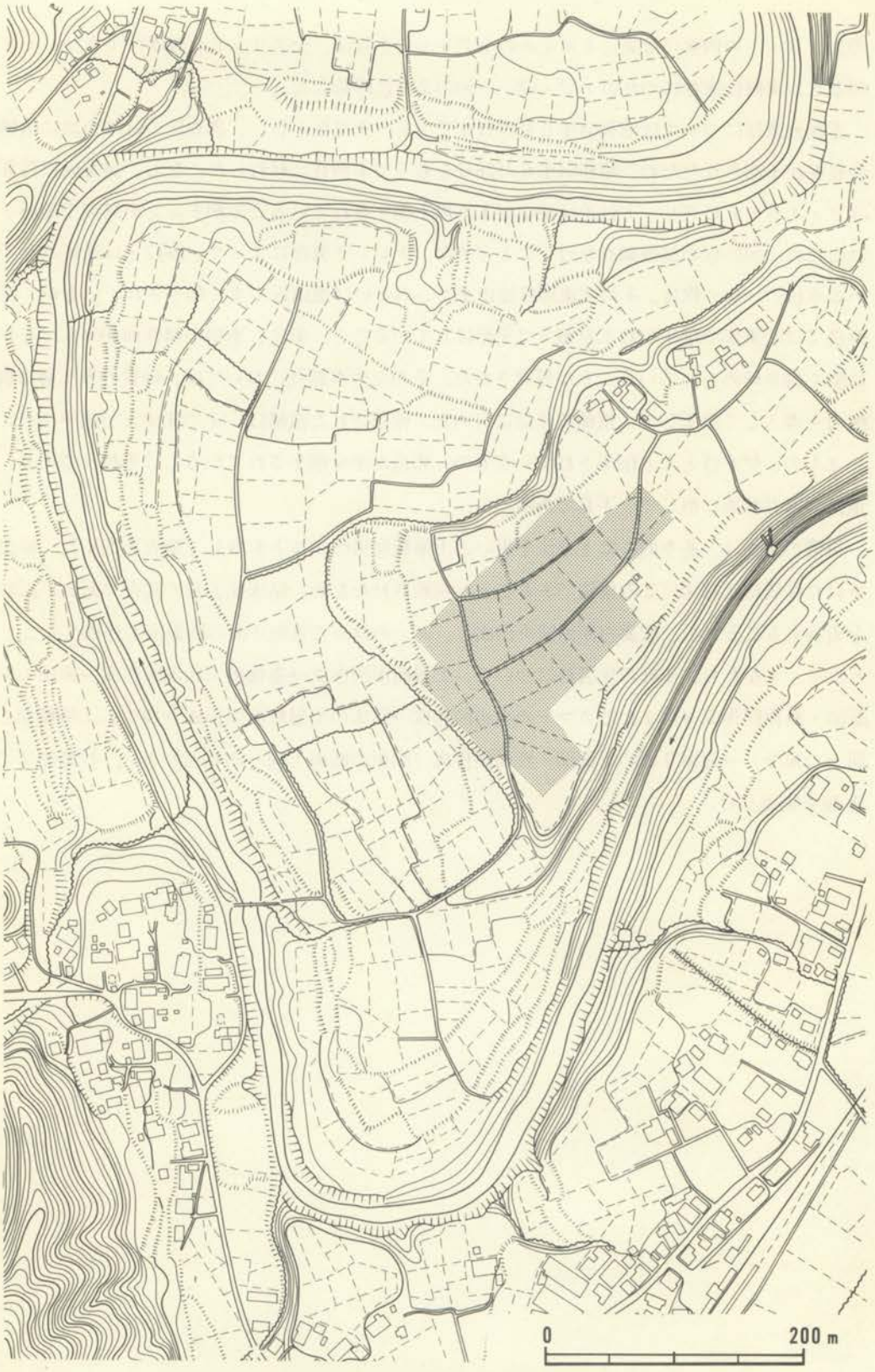
両遺跡とも公共座標に従って基準杭を40×40mの方眼に設定し、この基準杭に従ってトレンチを設け、手掘りによるトレンチ発掘で表土層から遺構の確認面までの調査を行った。

なお、40×40mの方眼は大グリッドであり、北から南に0→1→2……6の番号を、更に西から東にA→B→C……Eの番号を付け、それぞれの交点を0A・0Bのように呼称した。こ

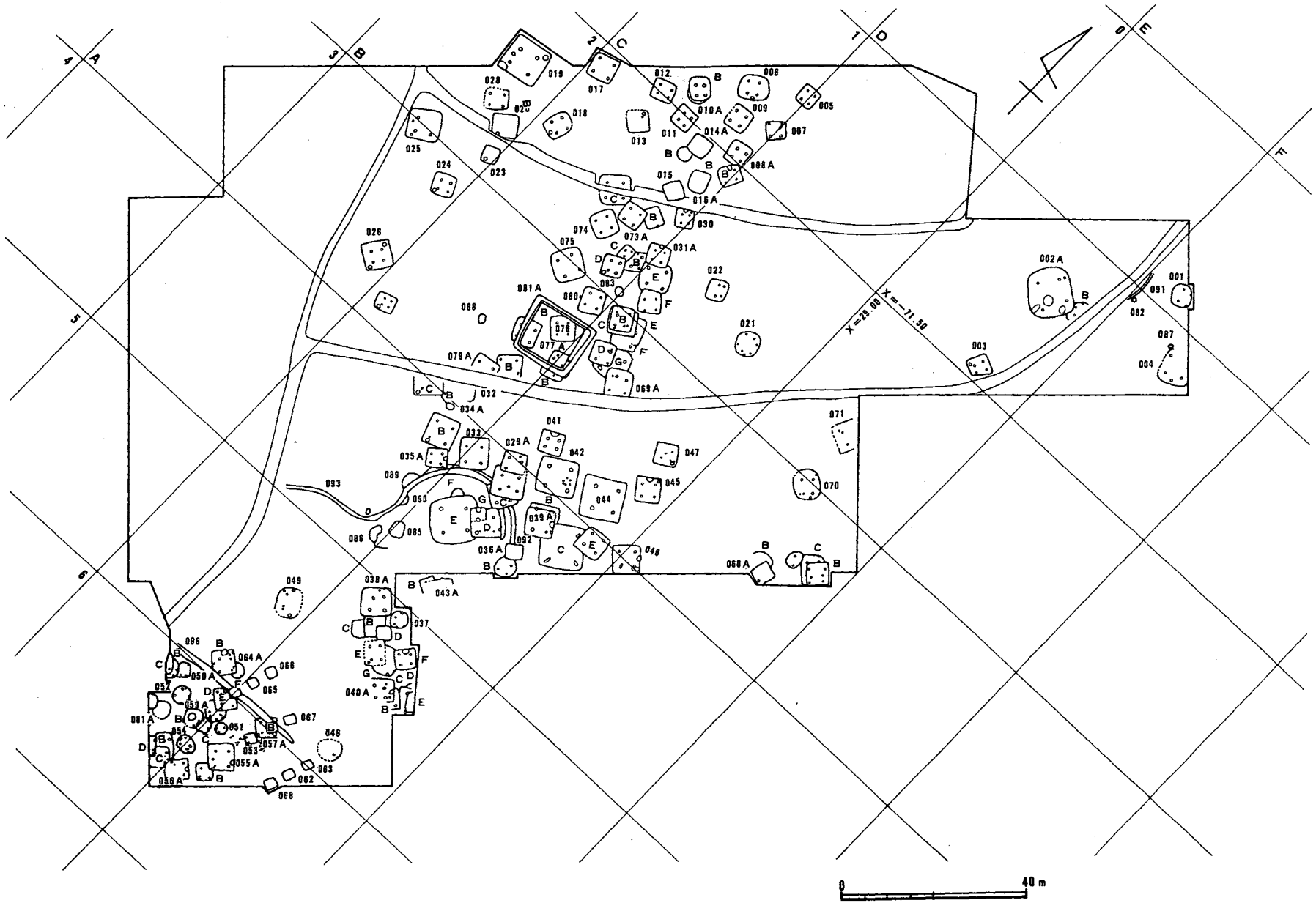
の大グリッドの内部には更に4×4mの小グリッドを設け、大グリッド北西隅の小グリッドを00とし、東側に進むにつれ01・02・03……99のように呼称した。

番後台遺跡については昭和54年6月27日までトレンチ発掘を行い、調査区のほぼ全域に遺構の存在が予測されたため、昭和54年6月28日をもって本調査に移行した。なお、調査区南西部3B・4B・5Cグリッド付近は地山が1m以上削平されていることがトレンチ発掘で確認されたため、20%程の試掘調査を行うにとどめた。トレンチ発掘によって、階段上に造成されている水田の一枚一枚は、その北東部は地山まで、あるいは地山近くまで削平されているが、南西部では北東部で削平した土を盛って平坦にしていること、更に、水田の耕作面40cm程は非常に堅く敲き締められていることが確認された。そのため本調査においては、硬質の表土層は機械力を導入して除去して、遺構の確認に努めた。確認された遺構は、その床面まで削平されているもの、壁がほとんど削平されているもの、床面が半分削平されているもの等様々であり、遺構の遺存状態は概して、不良である。

遺構の調査は、基本的には4分法を用い、土層観察用のベルトを残して調査を進めた。検出された住居跡は貼床による構造であることが判断されたため、貼床除去後の荒掘り面の平面形も実測することとし、床面の断面図を作成し、同一の地点で荒掘り面の断面図も作成することとした。すなわち、1軒の住居跡について、土層断面図作成→遺物出土状況図作成→床面の平面図・断面図作成→炉またはカマドの実測図作成→貼床の土層断面図作成（覆土の土層断面と同一の場所）→荒掘り面の平面図・断面図作成（床面の断面と同一の場所）という作業順序で実測を実施した。



第２図　番後台遺跡周辺地形図



第３図　番後台遺跡遺構配置図

Ⅳ　番後台遺跡

1．検出された遺構と遺物

(1)　住居跡

縄文時代

002B号住居跡（第4・5図）

概要

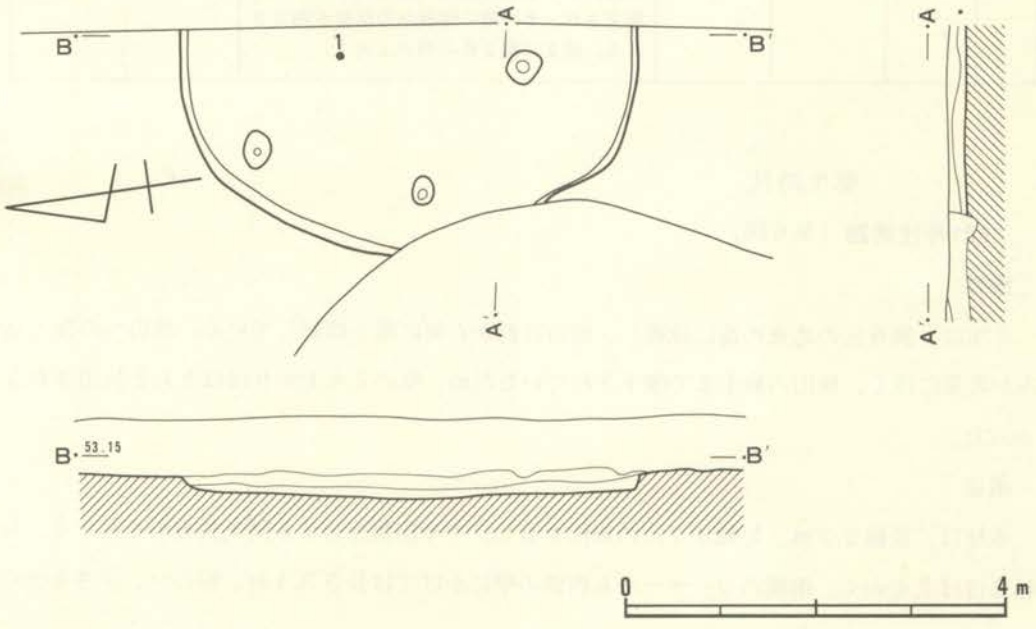
002A号跡を調査中に直立したままの縄文式土器を発見し、精査を行った結果、円形を呈す住居跡が検出された。発掘区域内最高の標高部に位置し、この地区を境に東西、特に西側へは緩い斜面となっている。西側の一部は002A号跡に切られている。また、東側半分は道路のため調査することができなかった。

構造

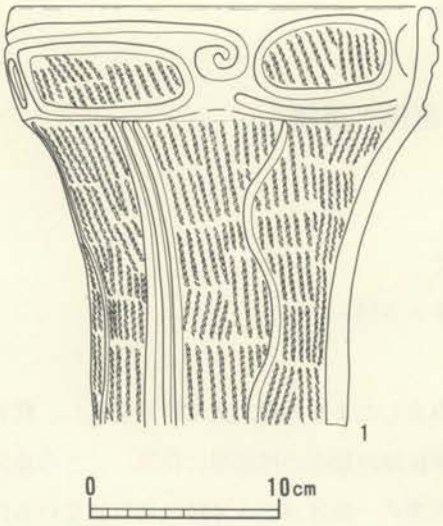
本址は、直径約4.8mの円形を呈すると考えられる。調査区内において、炉跡は確認できなかった。床は、全体に堅く、地山を床面としている。ピットは3個検出されたが、6本柱の可能性が強い。径約30cm、深さは40～50cmである。

遺物の出土状況

遺物は非常に少ない。本址のほぼ中央部から床に密着した状態で深鉢が出土した。胴下部を欠く以外、完形である。ほかには土器の細片が数片と、黒耀石製の剥片が1点出土した。



第4図　002B号住居跡



第5図　002B号住居跡出土遺物

002B号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	深鉢	底部以外完形	21.7 ——	口縁部は横S字状に延びる沈線で2分割され、区画された横長の三角形状の中にはそれぞれ丸・三角・四角の文様が4単位に施文される。なお、横S字状文は一方だけが渦巻を構成する。 胴部は3本1組の沈線が縦方向に4単位に施文され、その間に螺旋状の沈線が施文される。地文に縄文Rの撚糸文施文。	床面密着	口縁部は二次加熱を受けているため器面の剝落が激しい

弥生時代

001号住居跡（第6図）

概要

本址は、調査区の北東の端に位置し、地山は西から東に緩く傾斜している。地山への掘り込みが非常に浅く、地山の直上まで削平されていたため、壁の立ち上がりはほとんど検出されなかった。

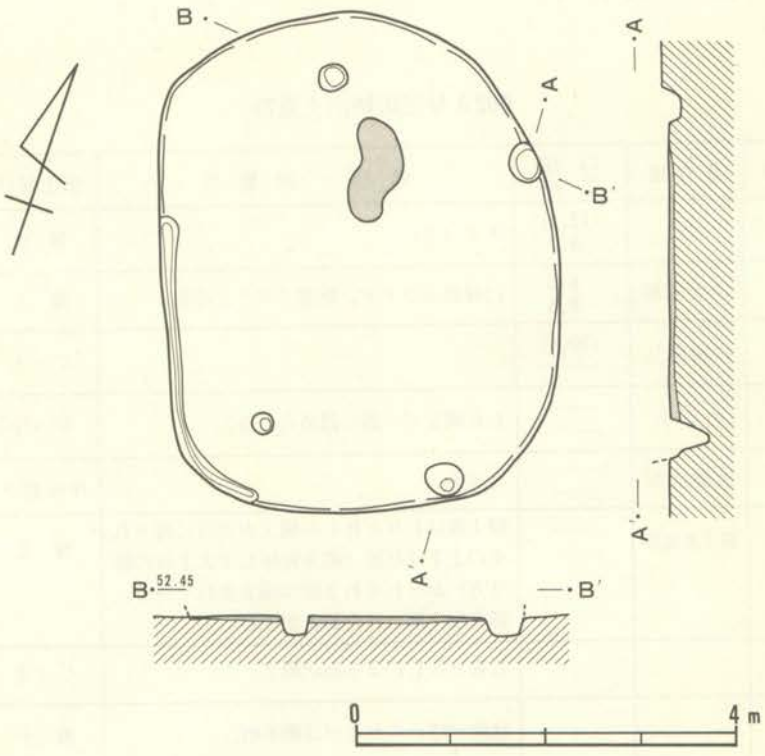
構造

本址は、長軸5.2ｍ、短軸4.2ｍの規模を有し、やや胴張りのする隅丸長方形を呈する。長軸はほぼ北を向く。南側のコーナーから西側の壁にかけては長さ3.4ｍ、幅15cm、深さ4cmの

壁溝が検出された。炉跡は、住居中央より北側に位置し、径44×102㎝、深さ10cmの不整楕円形を呈する。北寄りの35×40cmの範囲が火床と考えられ、焼土が多量に検出された。床は、黒褐色土と砂質ロームブロックの混合土による貼床であり、全体に堅い。ピットは4個検出されたが、不規則な位置であり、柱穴として使用されたか否かは不明である。

遺物の出土状況

本址は、覆土がほとんど削平されており、出土した遺物は非常に少なく、土器が10片程である。土器は水分を受けており、器面の剝落・磨耗したものが多く、器面の調整、文様等を知ることのできる破片は1片のみである。これは、LRと考えられる縄文が施文されている壺の胴部破片であるが、器表裏面がほとんど剝落しているため採拓は不可能であった。



第6図　001号住居跡

002A号住居跡（第7～9図）

概要

本址の中央北西部には、水田造成時に地山を削平した際の攪乱が床面にまで及んでいる。002B号跡の壁を一部切っている。また、地山が水分を受けて変化しているため床面を確認するのに困難を極めた。

構造

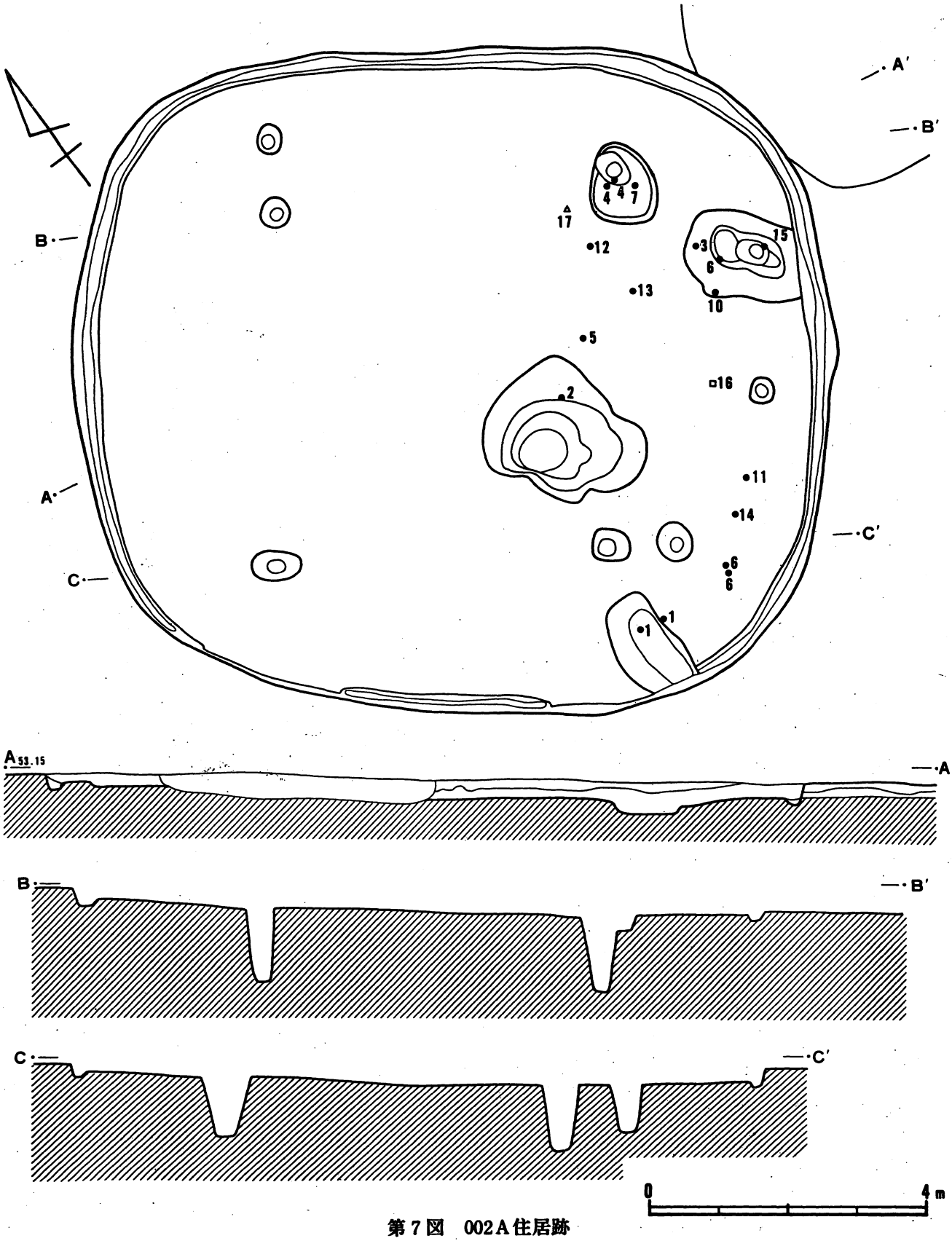
本址は、長軸10.9m、短軸9.5mの胴張りする隅丸方形で、長軸は北西を向く。南西側の壁の一部を除いて、幅約30cm、深さ5～10cmの壁溝が巡る。炉跡は検出されなかった。床は、中央部が周囲に比べ、約5cm低くなっている。ピットは9個検出されたが、柱穴と考えられるのは、南東側に3個、北西側に2個の5個で、中央より南側のピットは、1.7×2.4mの不整形を呈し、深さ70cmである。

遺物の出土状況

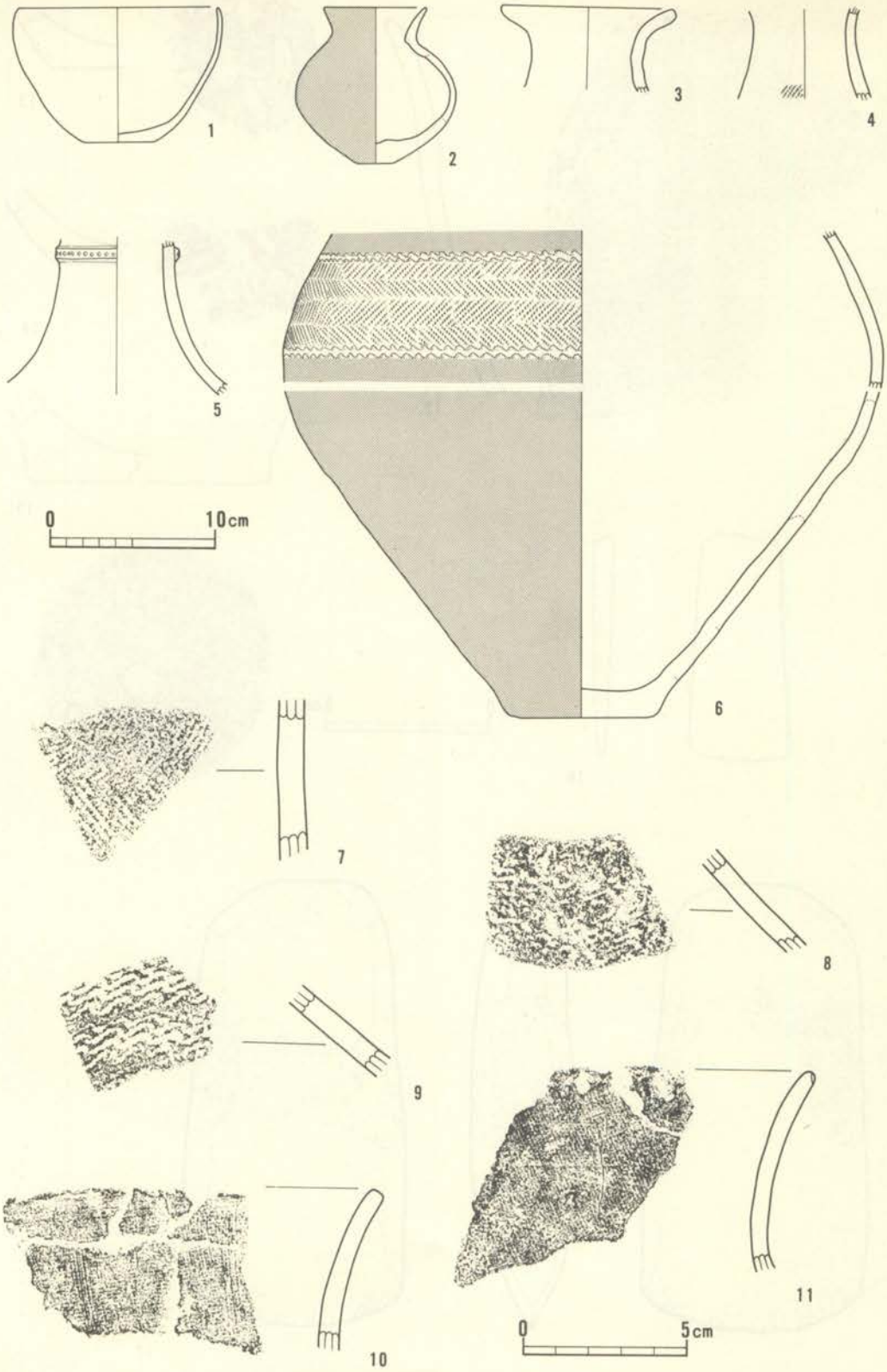
遺物は、土器がいずれも細片ではあるが、床面より浮いた状態で多く出土した。水田により水分を受けているため、脆く水洗いすることができず、表裏面の土を落とす程度にとどめた。このため、接合作業はほとんど行えなかった。従って、拓本の採れたものはわずかであり、図示したものは全体の一部である。

002A号住居跡出土遺物

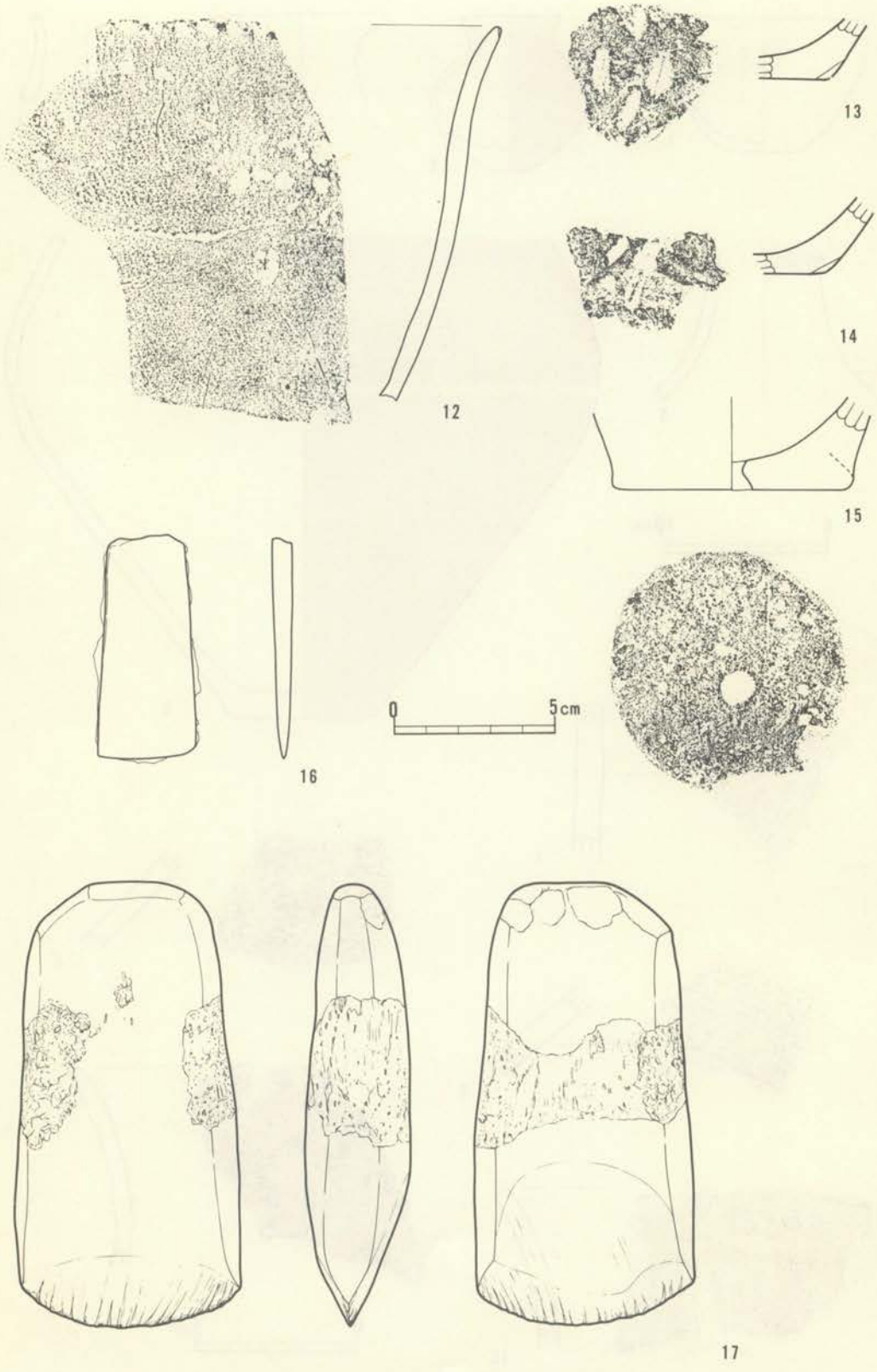
番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	埦	½	(12.2) 8.2	ナデ（?）	覆土	器面剝落
2	壺	ほぼ完形	6.3 9.5	口縁部ヨコナデ、胴部ミガキ。赤彩。	覆土	
3	壺	口縁部½	(10.4) ——		ピット	器面剝落
4	壺	頸部½	—— ——	LR縄文が一部に認められる。	ピット	器面剝落
5	壺	頸部完形	—— ——	ミガキ。	床面直上	
6	壺	胴下部完形	—— ——	胴上部はLRとRLの縄文が羽状に施され、その上下は結節（縄文原体LでZ字状の縛り方）がそれぞれ2段に施文されている。縄文施文部以外の器表面赤彩。	覆土	
7	壺			LRとRLによる羽状縄文。	ピット	
8	壺			結節が認められるが詳細不明。	覆土	器面磨耗
9	壺			結節（縄文原体LでS字状の縛り方）が4段ずつ2列に施文されている。	覆土	
10	甕			ハケメ後ナデ（?）。	ピット	器面磨耗
11	甕			口頸部刺突・口縁部ナデ。	覆土	
12	甕			口頸部刺突（?）、口縁部ナデ。	覆土	
13	甕			底部外縁にキザミ。	覆土	



第7図　002A住居跡



第8図　002A号住号住居跡出土遺物(1)



第9図　002A号住居跡出土遺物(2)

14	甕			底部外縁にキザミ。	覆　土	
15	壺			底部中央に焼成後の穿孔。	覆　土	
16	鉄製品	長さ 6.8cm、刃幅 3.0cm、厚さ 5.5cm、重量71g をはかる。錆化著しく遺存状態は不明である。基端面は凸凹があり、めくれは見られない。刃部平面形は実測図右側が丸くなって非対称であり、断面は実測表面が砥がれている片平刃を呈する。斧類。床面直上。				
17	磨製石斧	長さ13.4cm、刃幅 6.7cmの蛤刃石斧である。基部中央には着装の際の痕と考えられる磨耗した面が認められ、また刃部には使用痕が認められる。安山岩。覆土。				

004号住居跡（第10～13図）

概要

調査区北東の端に位置し、ほかの住居跡群とは異なり標高の最高部をはさみ、001号跡と同様東側の斜面に存在する。南東の壁側に木の根による攪乱があり、また、北東側半分は未調査である。

構造

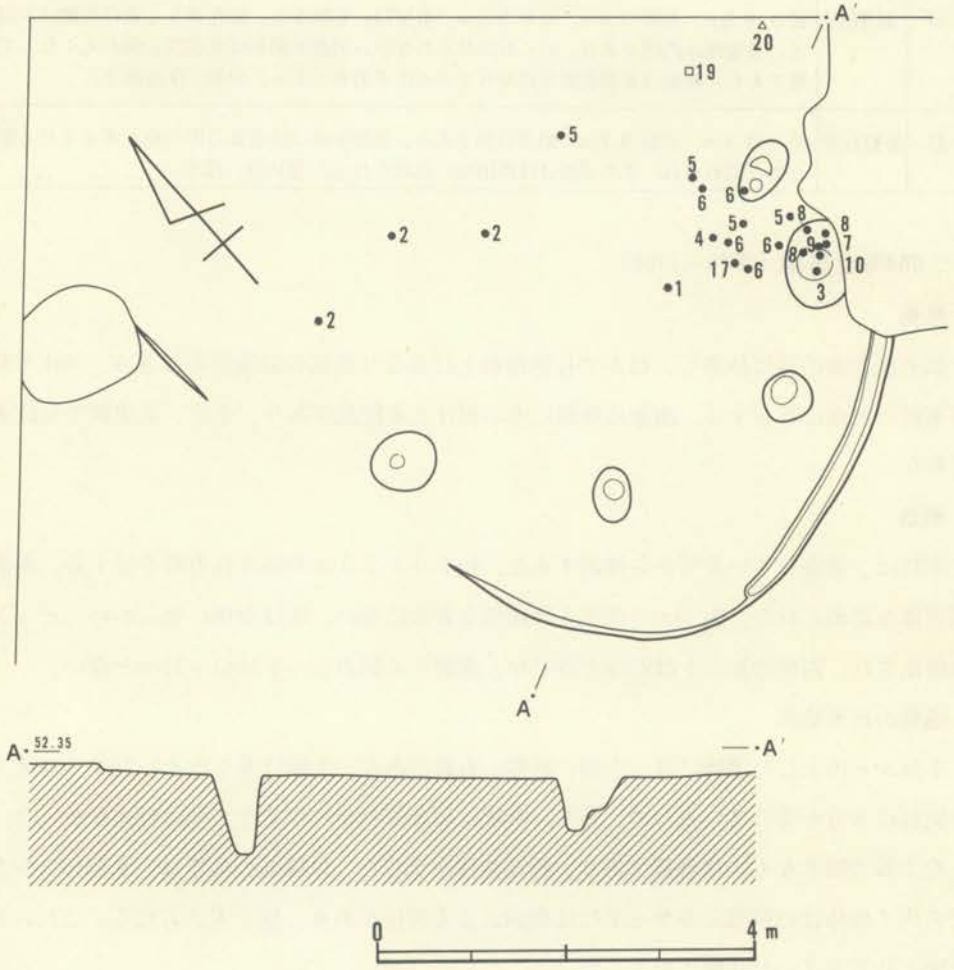
本址は、遺存している壁から推測すると、約9.0×7.0ｍの隅丸長方形を呈する。南側に一部周溝が認められた。幅20cm、深さ3cm前後と非常に浅い。床は全体に軟らかい。ピットは6個検出され、西側のピットは23cmと浅いが、南側の4個のピットは41～71cmと深い。

遺物の出土状況

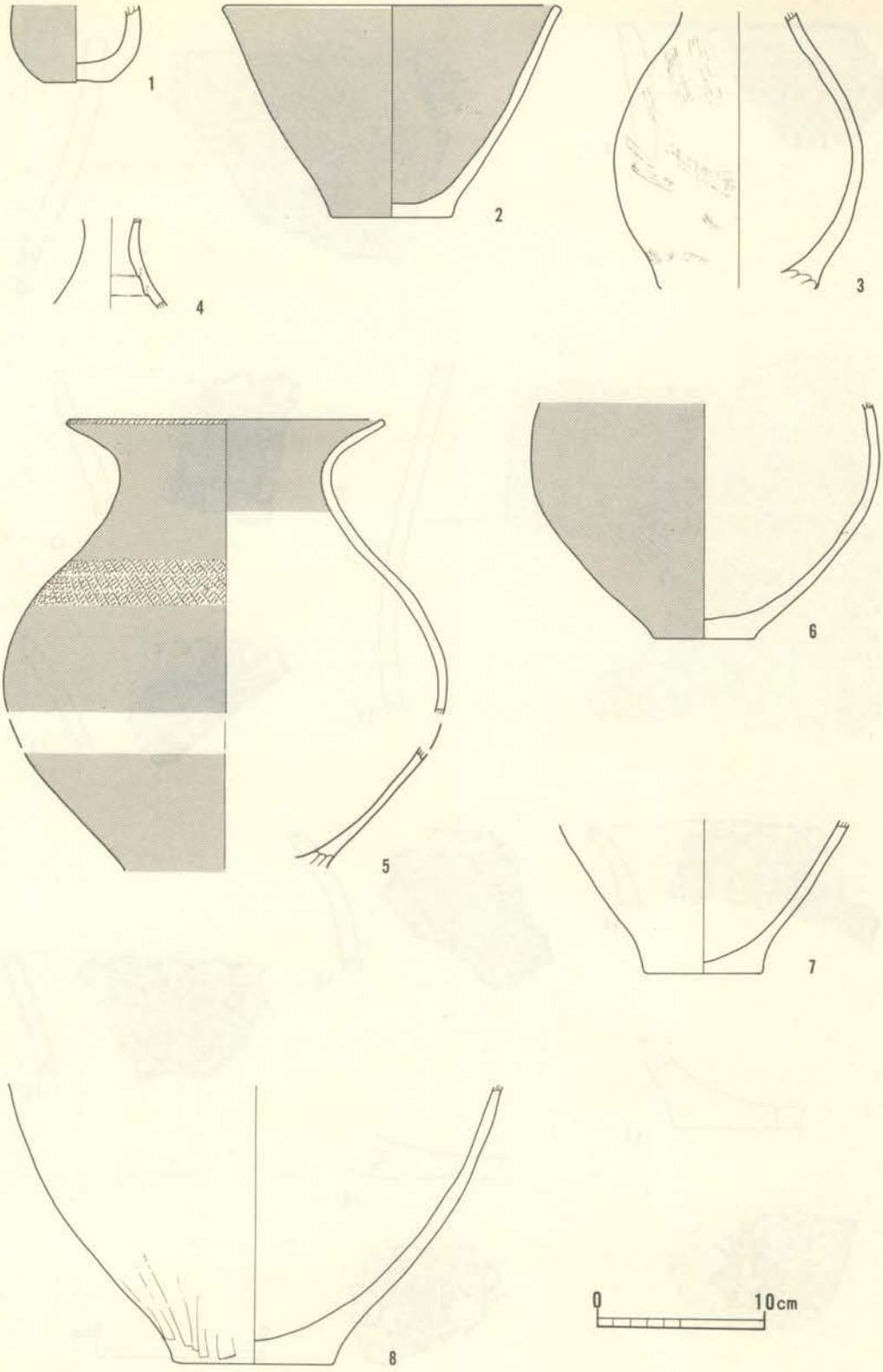
本址から出土した遺物には、土器、鉄器、石器がある。土器は多く出土したが、002Ａ号跡と同様に水分を受けているため、脆く、水洗、接合等の整理作業を完全に行えなかった。出土した土器で顕著なものは底部であり、約70個体出土した。口縁部の破片は、9個体と少なく、その内7個体は口唇部にキザミまたは指頭による押捺があり、甕と考えられる。これらの遺物は床より若干浮いた状態で出土した。

004号住居跡出土遺物

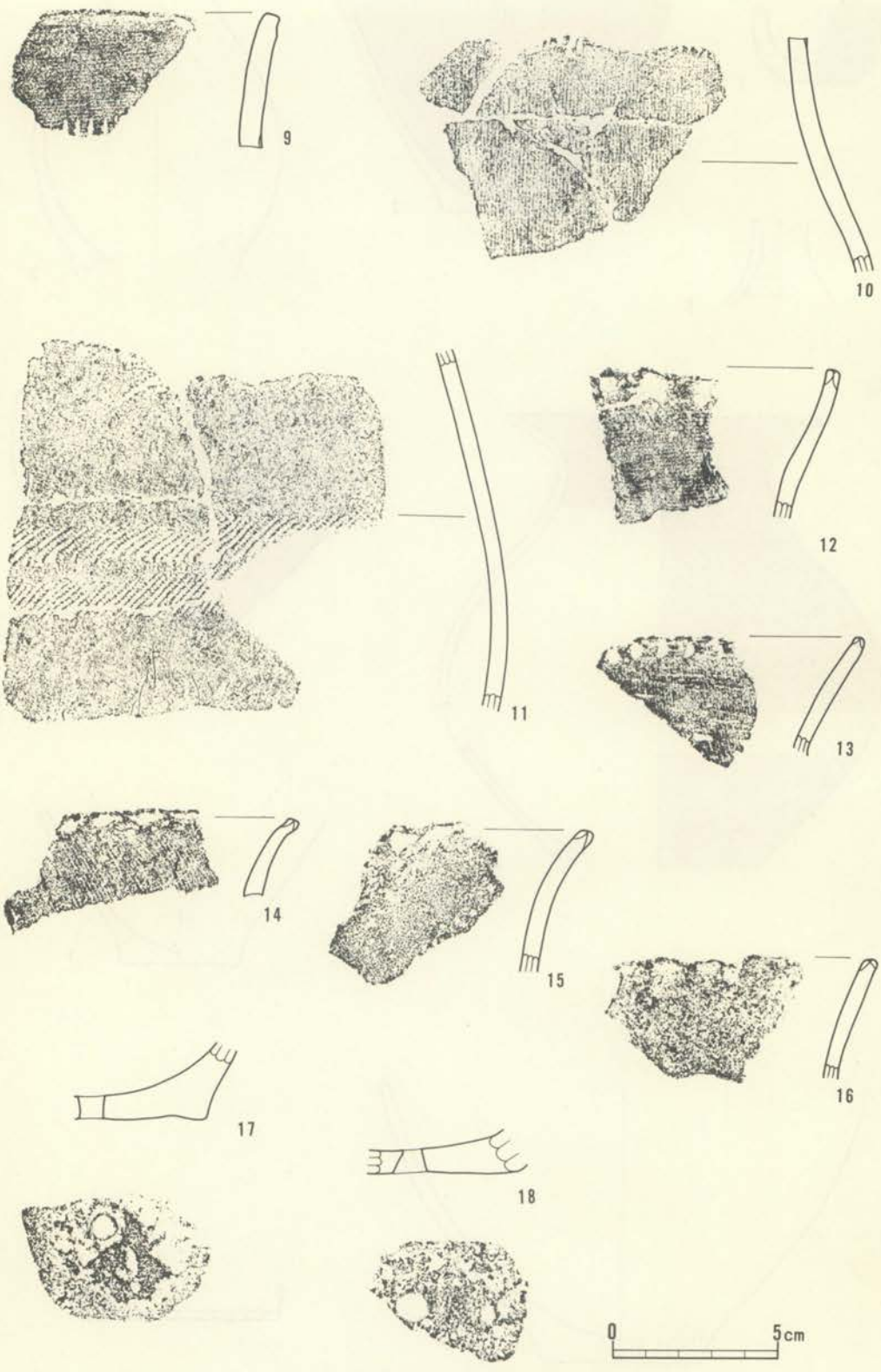
番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	壺	底部完形	—— ——	ミガキ（?）。赤彩。	床面直上	器面磨耗
2	鉢	½	(20.0) 12.8	ミガキ。赤彩。	覆　土	
3	壺	胴部½	—— ——	部分的なハケメ（?）。	ピット	器面磨耗
4	壺	頸部完形	—— ——	輪積み。	床面直上	器面剝落
5	壺	口縁部⅕ 胴上部⅙ 胴下部⅛	— (18.7)	口唇部にＬＲ縄文が施文され、胴上部は付加縄文（ＬＲ＋Ｌ）施文。赤彩。	床面直上	11と同時製作（?）



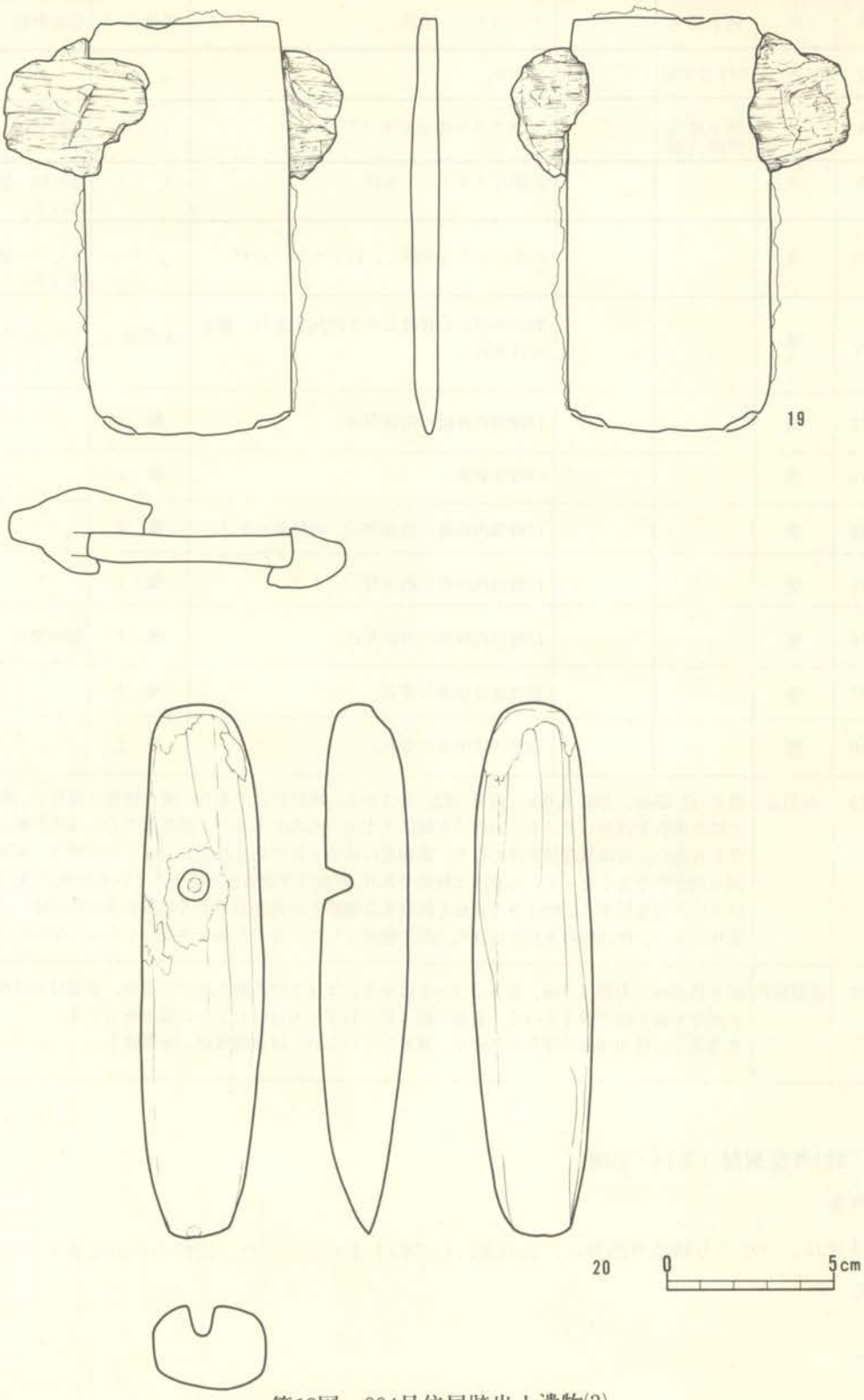
第10図　004号住居跡



第11図　004号住居跡出土遺物(1)



第12図　004号住居跡出土遺物(2)



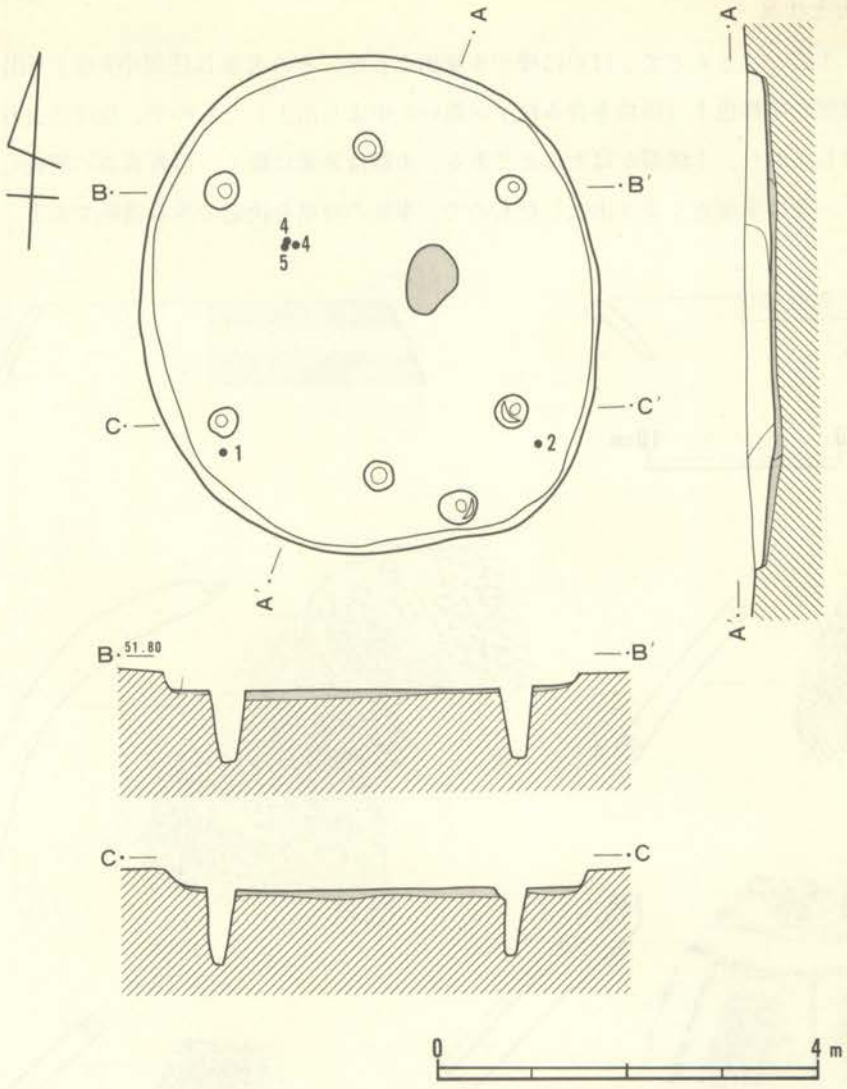
第13図　004号住居跡出土遺物(3)

6	壺	胴下部½	―	ナデ（？）。赤彩。	床面直上	器面磨耗
7	壺	胴下部完形	―	ミガキ。	ピット	
8	壺	胴下部½ 底部完形	―	ヘラケズリ後ミガキ（？）。	ピット	器面剝落
9	壺			頸部にキザミ。　赤彩。	ピット	10と同一個体（？）
10	壺			頸部にキザミを施し、以下ナデ。赤彩。	ピット	9と同一個体（？）
11	壺			胴中央部にＬＲ縄文が2段施文され、無文部は赤彩。	床面直上	5と同時製作（？）
12	甕			口縁部内外面に指頭押捺。	覆　土	
13	甕			口縁部刺突。	覆　土	
14	甕			口縁部内外面に指頭押捺。内外面ハケメ。	覆　土	
15	甕			口縁部内外面に指頭押捺。ナデ。	覆　土	
16	甕			口縁部内外面に指頭押捺。	覆　土	器面磨耗
17	甕			底部ほぼ中央に穿孔。	覆　土	
18	甕			底部ほぼ中央に穿孔。	覆　土	
19	鉄製品	長さ 12.35cm、刃幅 6.0cm、重量 272g をはかる。板状鉄斧である。遺存状態は良好で、柄と楔の木質が錆着している。刃部の欠損は出土後のものであるが、基端部のものは錆が被っており古い。身は基端部が薄くなり、基端面にはめくれが見られる。刃部の平面形は、実測図右側がやや丸くなっているがほぼ対称であり、断面は実測表面が砥がれている片平刃、あるいは片凸刃を呈する。柄は身の長軸と柄の木質繊維との角度が平面実測図右方向に約93°と直角に近い。楔は柄の木質とは直角方向の繊維として、身の左側に遺存している。床面直上。				
20	磨製石斧	長さ15.7cm、刃幅 1.7cm、厚さ 2.4cmをはかる。ほぼ全面が磨かれているが、基端付近は磨きがやや荒く稜が残っている。刃部に鏑は見られず、刃縁はわずかに偏刃を呈する。 基端近くに径 0.9cmの穿孔があるが、貫通していない。緑色凝灰岩。床面直上。				

021号住居跡（第14・15図）

概要

本址は、002 A号跡より西側に、比高差にして約1.4ｍ下がった、比較的平坦な場所に位置する。



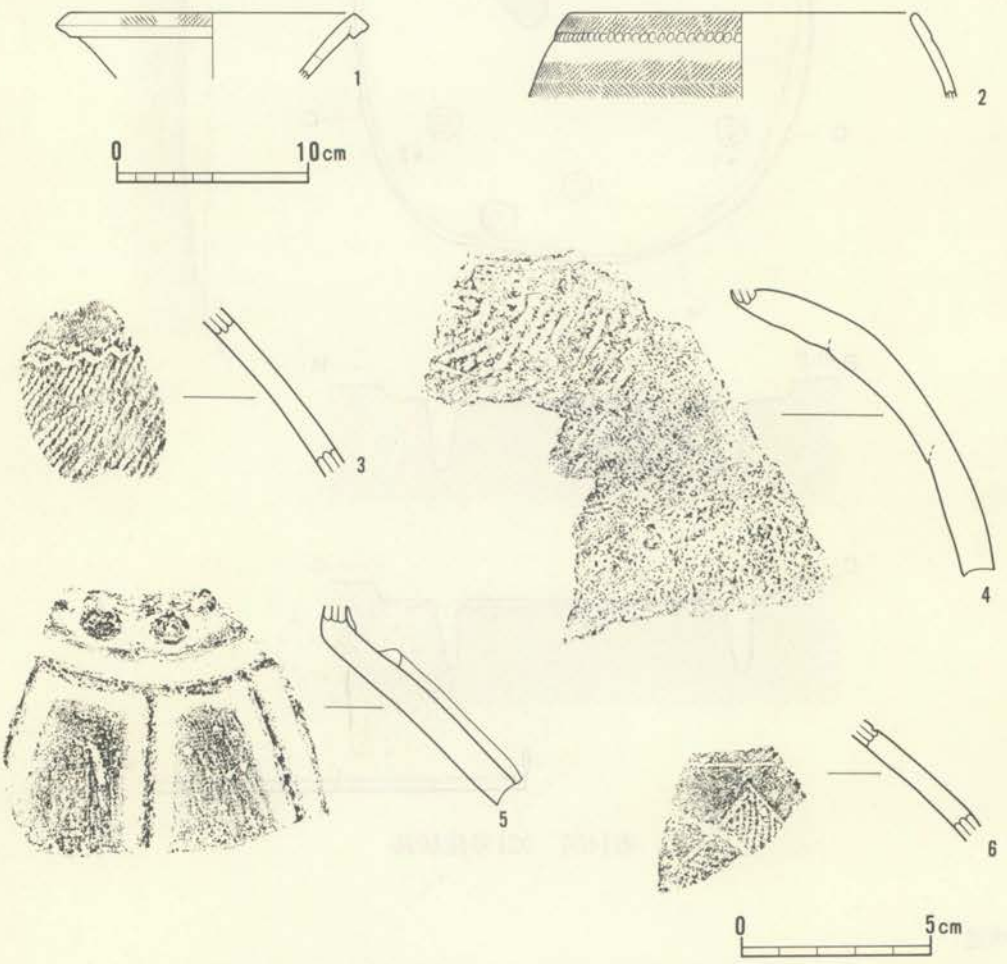
第14図　021号住居跡

構造

本址は、南北5.23m、東西4.88mの規模を有し、やや南北に長い楕円形を呈する。炉跡は、住居中央よりやや東側に位置し、南北56cm、東西40cm、深さ10cmをはかる。炉跡の中央西側が火床と思われ、硬化した焼土が充満していた。床は、全体に暗褐色土と砂質ローム の混合土による厚さ10cmの貼床で形成されている。ピットは7個検出されたが、南側の壁際のピット以外の6個は柱穴と考えられ、深さは72～84cmである。柱穴の中で、住居の長軸線上に位置する2個を除いた場合、柱穴間の距離は3.1mと2.4mで住居の短軸線上が長く、長軸線上が60cm程短い。

遺物の出土状況

遺物は、土器がほとんどで、ほかに礫が少量出土した。その大半は住居中央部より出土し、それらは中央部の暗褐色土（砂粒を含み粒子が荒い）中より出土したもので、投げ込まれたかのように集中しており、土師器がほとんどである。土器は非常に脆く、器表裏面の磨耗したものが多い。１・２は床面近くより出土したもので、本址の時期を決定できる遺物である。



第15図　021号住居跡出土遺物

021号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	壺	口縁部¼	(16.4) —	口唇部に一部ＬＲとＲＬの縄文施文。詳細は不明。	床面直上	器面磨耗
2	鉢	口縁部¼	(18.0) —	口縁部ＬＲ縄文施文。胴部との境は刺突（又は縄文原体押捺）。胴部はＬＲ－ＲＬの羽状縄文施文。	床面直上	器面磨耗
3	壺			Ｌの縄文が数段施文され、無文部との境は縄文ＲのＳ縛りによる２段の結節文。	覆　土	
4	壺			輪積み。胴上部に粗大な原体によるＬＲ縄文施文。	覆　土	
5	壺			頸部に円形の貼付文。胴部に棒状の貼付文。	覆　土	
6	壺			胴部に三角鋸歯文を施し、ＲＬ縄文を充填。無文部赤彩。	覆　土	

029Ｆ号住居跡（第16・17図）

概要

本址より床面の高さが約５cm低い029Ｅ号跡に住居跡の南東側半分近くを切られている。

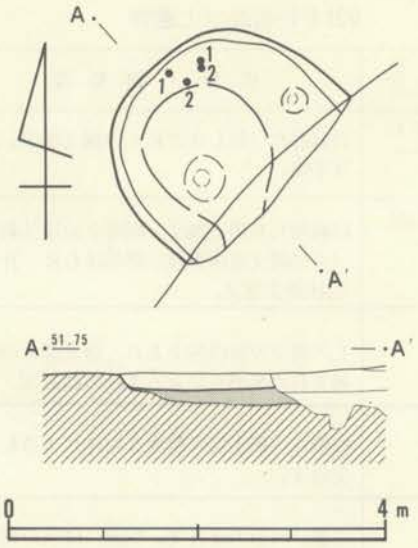
構造

本址は、全体としては、短軸2.5ｍをはかり、南北にやや長い楕円形を呈すると考えられる。炉跡は検出されなかった。床は、砂質ロームと暗褐色土が半々の割合で混在する貼床で、全体に比較的軟らかい。床面においてピットは確認されなかった。

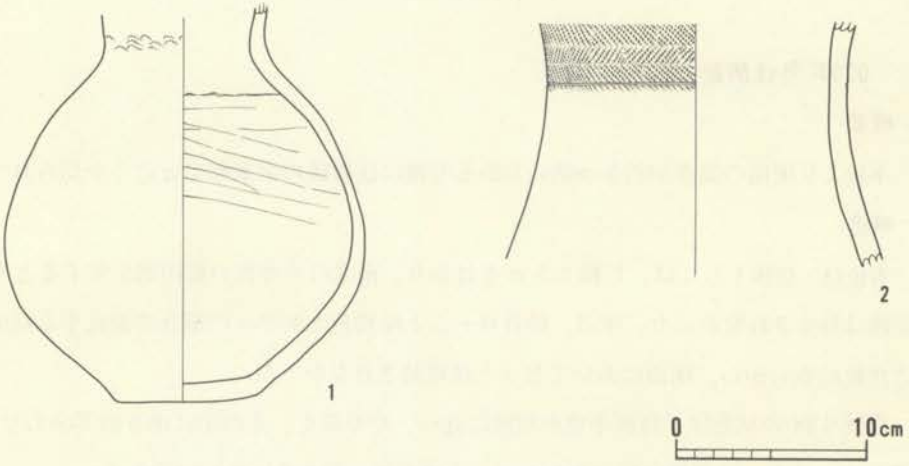
荒掘り面の状態は、住居中央が周囲に比べ、やや深く、その中に深さ約20cmのピットが検出された。また、北東側に検出されたピットは直径、深さ共に約32cmである。

遺物の出土状況

遺物は、半分程が削平されていることもあって、非常に少ない。壁側より若干出土しただけであり、中央部からは出土しなかった。１は壁に密着の状態で、２は床より浮いた状態で出土した。



第16図　029Ｆ号住居跡



第17図　029Ｆ号住居跡出土遺物

029Ｆ号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	壺	頸部1/3 胴下部ほぼ完形	—— ——	頸部の一部に数段の結節文が施されているが、施文後のミガキのため詳細不明。	床面密着	
2	甕	胴部1/8	—— ——	頸部上半にＲＬ－ＬＲの羽状縄文が施文され、１条の沈線が巡る。	床面直上	

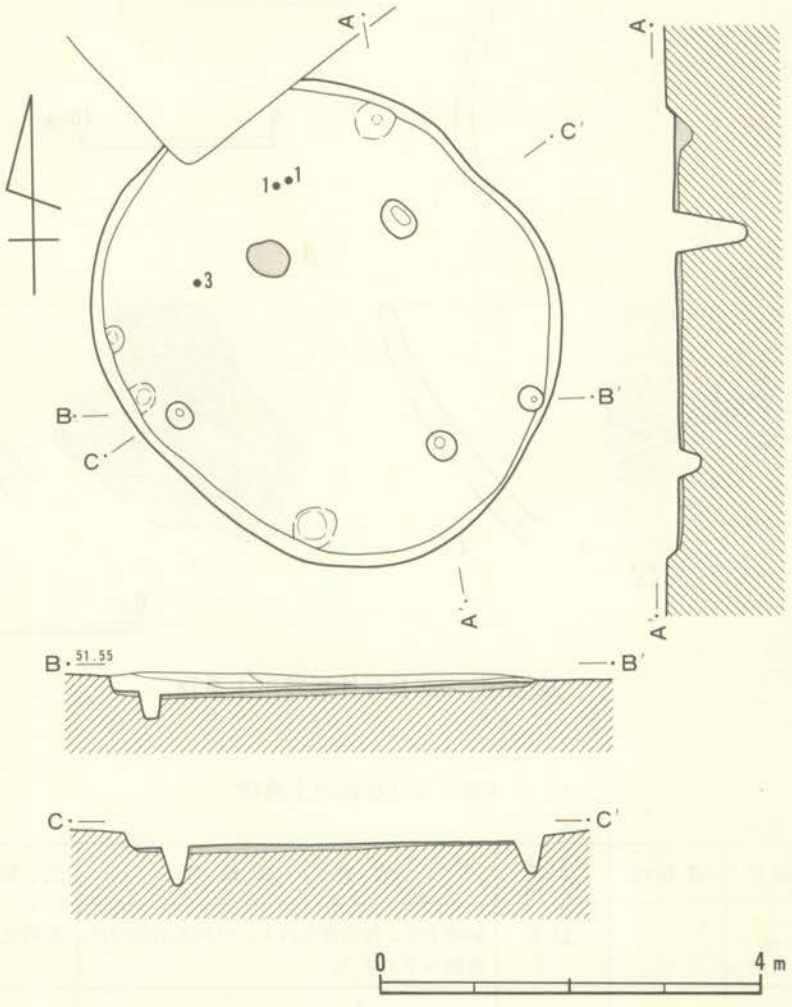
036B号住居跡（第18・19図）

概要

本址は、036 A号跡に北側の一部を切られている。地山は削平されており、表土層の下に地山という層位になっている。

構造

本址は、5.1 × 4.5 mをはかり、やや南北に長い楕円形を呈する。炉跡は、住居中央より北側に位置し、径38×46cmの不整円形を呈し、深さは10cmである。焼土粒子・焼土ブロック・炭化粒子を含む暗褐色土の下に厚さ5 cmの焼土ブロックが炉跡内ほぼ全域に存在し、炉跡としての使用が充分に行われていたことがうかがえる。床面の直上は焼土粒子・炭化材粒子を含む黒褐色土で覆われており、中央には、炭化材、炭化粒子を非常に多く含む土層が検出された。床



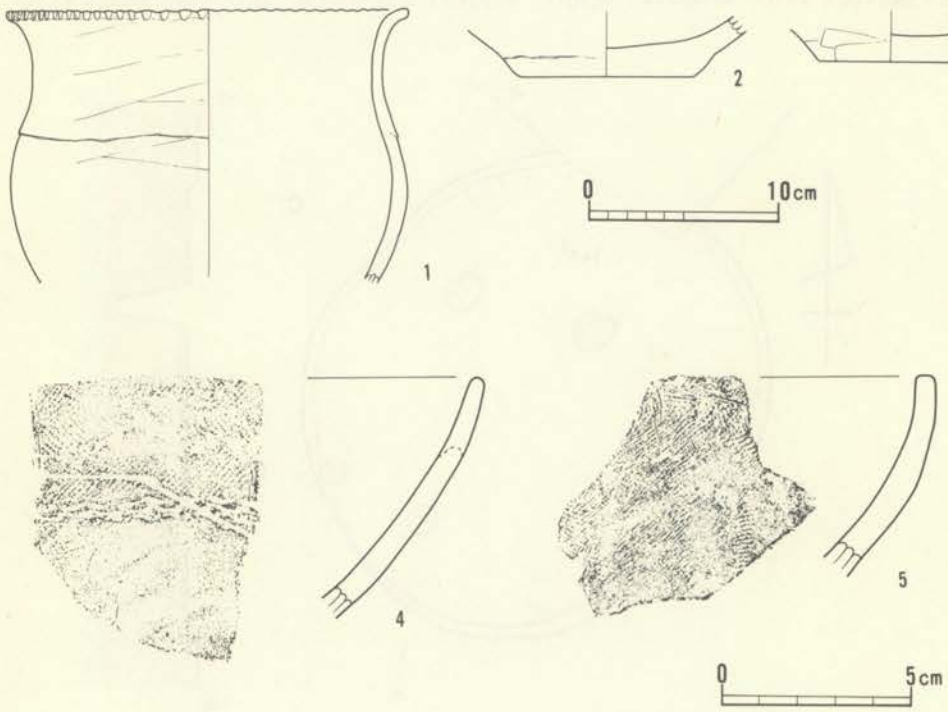
第18図　036B号住居跡

は、貼床で形成されている。ピットは4個検出された。径25～32cm、深さ24～74cmであるが、ピットの配置は不規則であり、柱穴として使用されたか否かは疑問である。

荒掘り面は、床面より5cm程低く、比較的平坦であり、4個のピットが検出された。壁に接するものばかりで、径26～42cm、深さ10～44cmである。この荒掘り面で検出されたピットと床面で検出したピットを合わせても、本址の柱穴構造は不明である。

遺物の出土状況

本址より出土した遺物は、非常に少なく、土師器、縄文式土器が混在していた。本址においても、土器の底部の出土が口縁部・胴部の破片に比べて多く、すべて、弥生式土器とは断定できないが、15個体程ある。



第19図　036B号住居跡出土遺物

036B号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	甕		(21.0) ——	胴部上半に接合面を残す。口頸部指頭押捺。外面ヘラケズリ。	床面直上	
2	甕	底部½	—— ——	ナデ。	覆土	

3	甕	底部のみ	――	ヘラケズリ。	床面直上	
4	鉢			口縁部はＬＲ－ＲＬ－ＬＲの羽状縄文が施され、縄文帯下端部に結節が施されている。	床面直上	
5	鉢			口縁部にＬＲ縄文が横回転で施文され、以下、同一の原体が縦回転で一定間隔に施文されている。	床面直上	

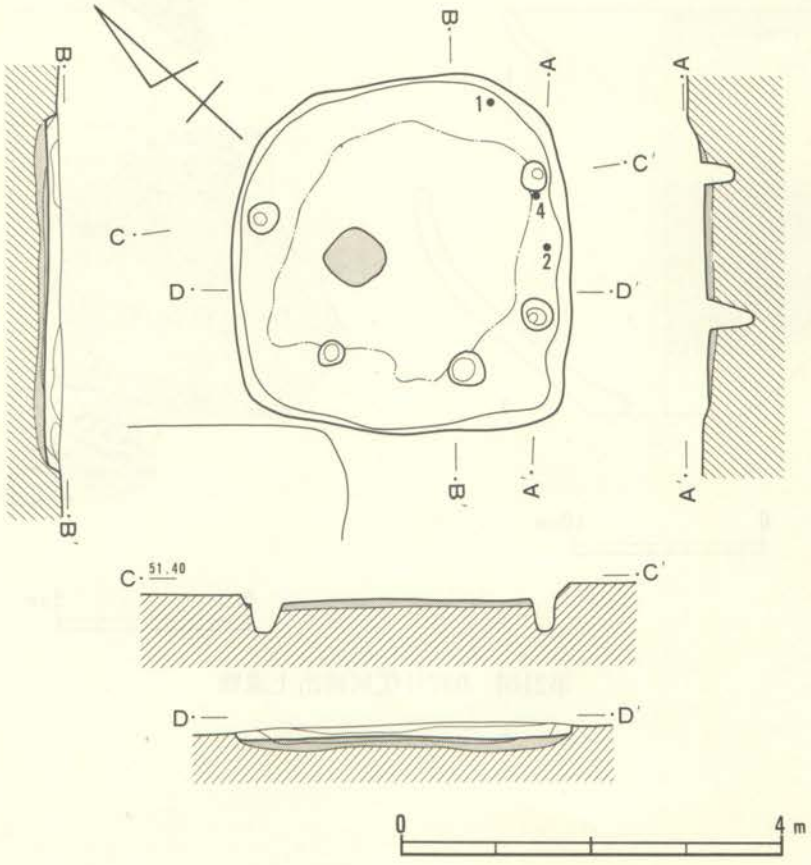
037号住居跡（第20・21図）

概要

本址は、038号住居跡群のすぐ東側に位置する。床面までは達していないが、覆土中での攪乱が多い。

構造

本址は、3.64×3.64ｍをはかる。隅丸方形を呈するが、北側のコーナーは円形を呈すのに対

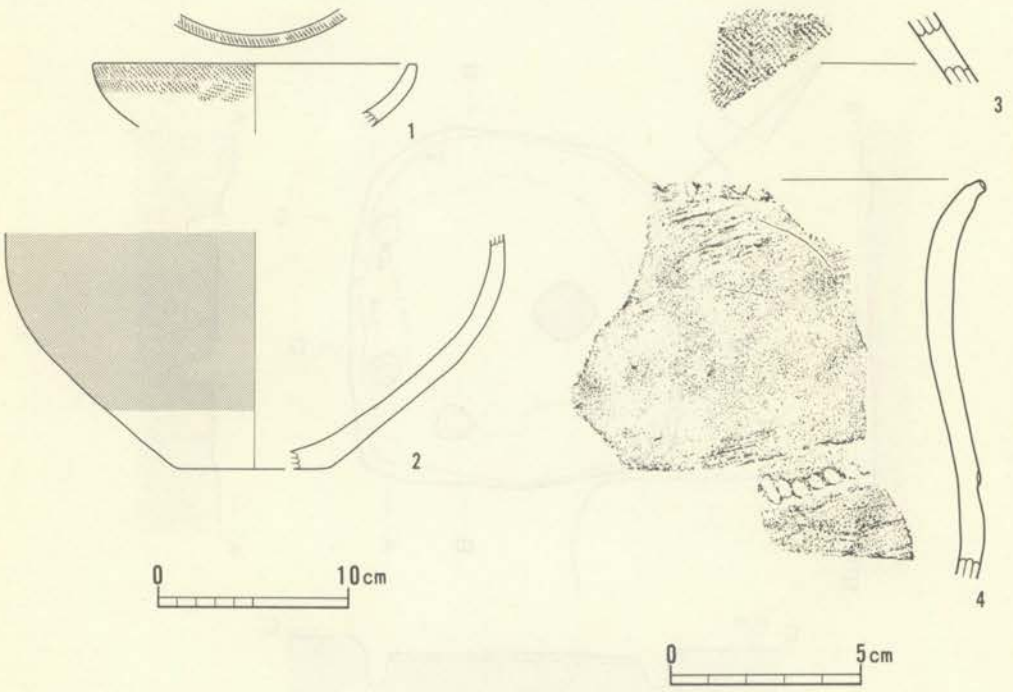


第20図　037号住居跡

し、南側のコーナーは直角に近く、形状は整然としていない。炉跡は、中央よりやや北西側に位置し、径62×68cmの隅丸方形を呈し、深さは8cmである。焼土の堆積は薄く、使用状況はあまり良好とはいえない。床は、中央を中心とし2.5×2.6mの不整形の範囲がかなり堅い。堅い床面の範囲は、貼床の上面に3～4cmの厚さで存在する暗褐色土と砂質ロームブロックの混合土の範囲とほぼ一致する。これより下層及び壁の周囲の床は、砂質ロームの混合率が少なく、暗褐色土を主体としており、比較的軟らかい。ピットは5個検出された。直径は30～40cm、深さは29～49cmである。5個の配置は規則的ではあるが、北東の壁際にはピットが検出されなかった。

遺物の出土状況

遺物は南東の壁際より若干出土したが、中央部では更に少ない。土師器が少量混入し、弥生式土器は図示したもののほかに甕の口縁が2個体、底部が2個体出土した。1～3は床面密着の状態で出土したが、ほかの遺物も床面に近いものが多い。



第21図　037号住居跡出土遺物

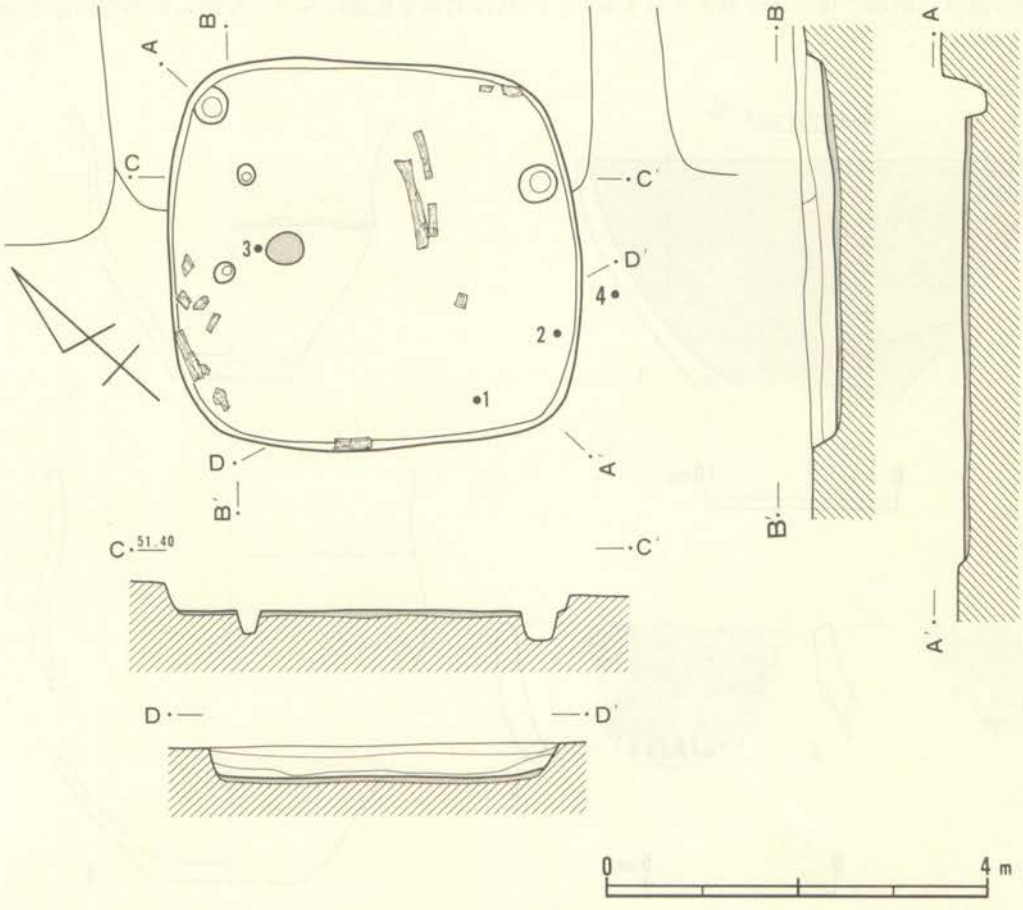
037号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	鉢	1/6	(17.0) —	口唇部と口縁部にRL縄文施文。	床面直上	
2	壺	胴下部1/4	— —	ヘラケズリ後ミガキ。赤彩。	覆土	
3	壺			LR－RL－LRの羽状縄文施文。	覆土	
4	甕			口唇部及び胴上半部に棒状工具による刺突。	床面密着	

038C号住居跡（第22・23図）

概要

038B号跡を精査中に炭化粒子を含む堅い暗褐色土（本址の覆土）を確認した。東側の一部は038B号跡と重複しているが、本址の方が地山への掘り込みが20cm程深く、038B号跡が貼



第22図　038C号住居跡

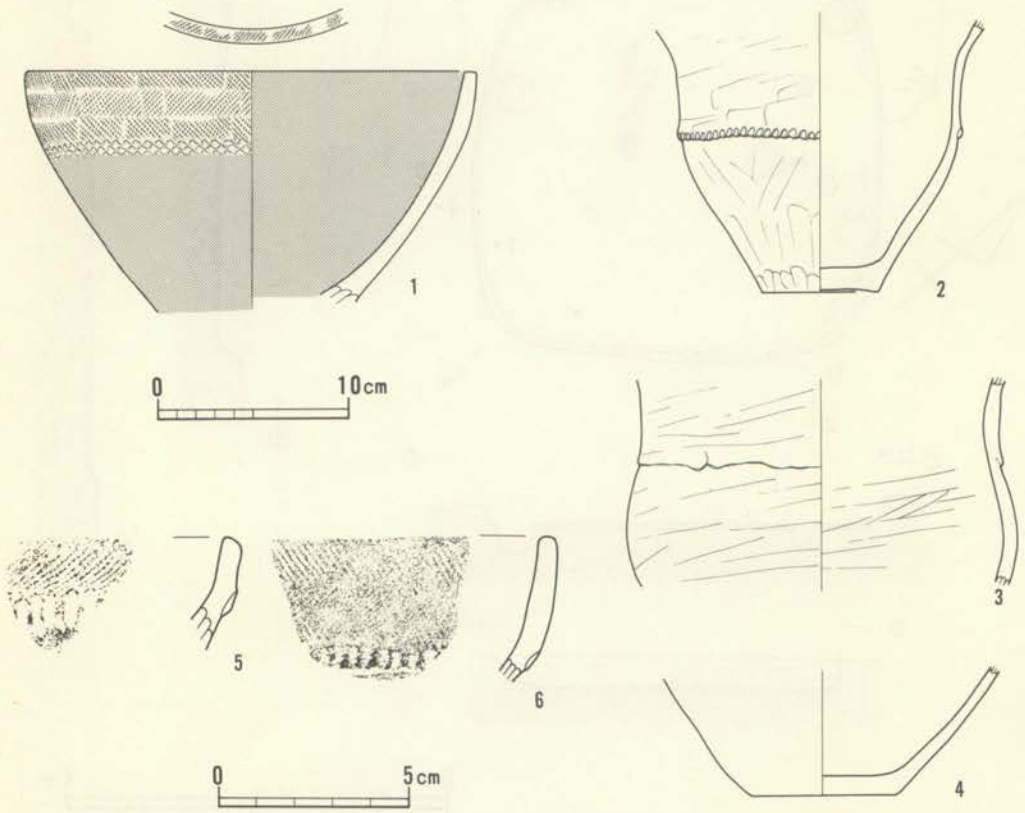
床を有する住居跡ではないため、覆土の攪乱だけであり、床面にまでは達していない。また、南側は地山が削平されている。

構造

本址は、地山の傾斜とほぼ直角方向に長軸を有し、北西方向にやや長い隅丸方向を呈する。規模は4.32×4.08mである。炉跡は、住居中央より北側に位置し、直径40cmの円形を呈する。床は全体が比較的堅い。ピットは4個検出された。径20～40cm、深さは26～35cmをはかる。これらのピットの配置は不規則であり、柱穴として使用されたか否かは不明である。

遺物の出土状況

本址より出土した遺物は、礫が1点と土器が約40片である。図示したもののほかは、甕の口縁部5個体、底部4個体で、土師器も混入しているため、すべて弥生時代の土器とは限らない。なお、南側の壁より約20cm離れた位置で2個の弥生式土器が出土した。炉跡の北側からは、口頸部と底部を除き完形の甕が出土した。南側のコーナーより出土した鉢は、底部を除き完形であるが、底部付近は二次加熱により器面の剥落が著しい。南側のコーナーより出土したもう1個の甕は、胴部の接合部に刺突を有するが、これは土器を正面にみて、左から右の方向に工具



第23図　038C号住居跡出土遺物

が当てられている。これらの３個はすべて床面に密着する状態で出土した。床面の直上には炭化材・炭化粒子・焼土を多く含む暗褐色土が５～20cm堆積しており、この土層中からは、床面あるいは床面直上で多くの炭化材が検出された。住居中央よりやや東側で検出された炭化材は長さ１ｍにも及ぶ。なお、炭化材の出土は壁際から出土が顕著である。

038Ｃ号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	鉢	底部以外ほぼ完形	23.4 12.0	口唇部ＬＲ縄文施文。口縁部ＲＬ－ＬＲ－ＲＬの羽状縄文施文。縄文末端部は縄文ＲのＳ縛りによる３段の結節文。胴部ミガキ。赤彩。	床面密着	
2	甕	½	― ―	胴部の接合面に米粒状の刺突（左→右方向）。胴部ヘラケズリ。	床面密着	
3	甕	胴上部完形	― ―	胴上半部に接合面が残る。胴部及び内面の一部ヘラケズリ。	床面密着	
4	壺	底部完形	― ―	内外面ミガキ。	住居外	
5	鉢			口縁部ＬＲ縄文施文。縄文下端部は棒状工具による刺突文。	床面直上	
6	鉢			口縁部ＲＬ－ＬＲ－ＲＬの羽状縄文。縄文下端部に縄文原体押捺。	床面直上	

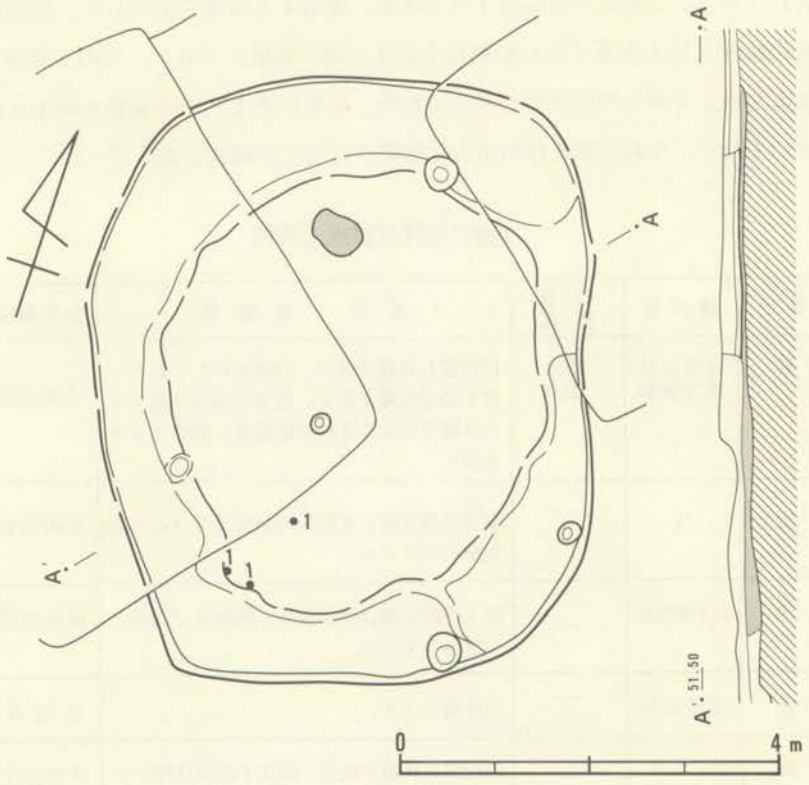
038Ｇ号住居跡（第24・25図）

概要

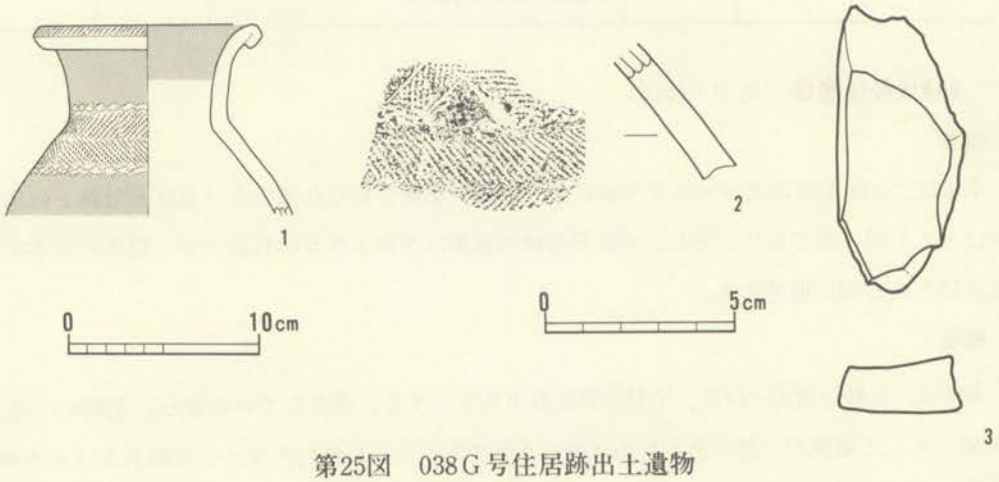
本址は、038Ｅ号跡及び038Ｆ号跡により西側、東側を切られている。038Ｅ号跡とは床面がほとんど同一面であり、また、038Ｆ号跡の床面は本址より６cm程高いが、貼床の底面が本址とほとんど同一面である。

構造

本址は、長軸が南北に向き、不整の隅丸長方形を呈する。遺存している壁が、北側の一部と南側、そして東側の一部であるため詳細は不明であるが、長軸約6.4ｍ、短軸約5.3ｍと考えられる。炉跡は検出されなかった。ピットは床面で３個、貼床を除去した後１個検出された。深さはすべて30～35cmであるが、配置が不規則であるため、柱穴として利用されたか否かは不明である。038Ｅ・Ｆ号跡と重複している部分で、図示してある線は本址の貼床を除去した段階で、わずかながら比高差を確認したものである。これが、残存している壁と一致するため、これをもって、本址の形状とした。



第24図　038G号住居跡



第25図　038G号住居跡出土遺物

荒掘り面は、壁際より45～100㎝の範囲が住居中央部より5～10cm程低くなっている。

遺物の出土状況

本址の遺物は少量であるが、床面近くから出土し、中央部よりは、壁際から出土する遺物が多い。また、甕・高坏・坩等の土師器が混入している。

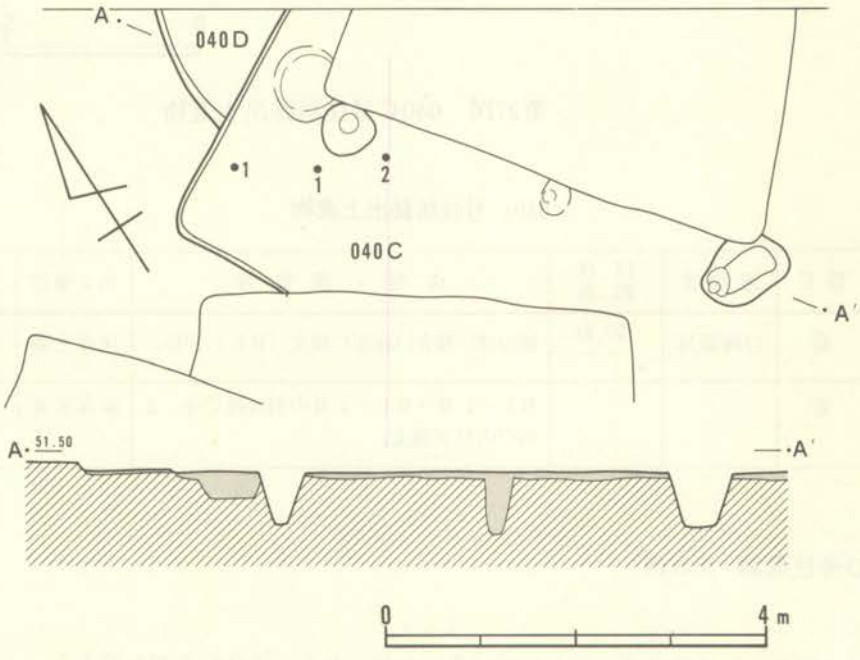
038G号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	壺	¼	(11.2) ——	口唇部LR縄文。胴上部は縄文RのS縛りによる結節文の間にLR－RLの羽状縄文施文。赤彩。	覆土	
2	壺			上半は山形文内にLR縄文充填。下半は縄文RのS縛りによる結節文が施文され、以下RL－LRの羽状縄文。無文部赤彩。	ピット	
3	砥石	全体の一部しか遺存しておらず、周囲は破損している。使用面はかなり磨り減っており、「U」字状を呈する。砂岩。覆土。				

040C号住居跡（第26・27図）

概要

本址は、040B・E号跡により大半が切られている。地山が削平されていたため、検出された壁の立ち上がりはわずかである。このため、本址の形状は本来のものと若干異なることが考えられる。



第26図　040C・D号住居跡

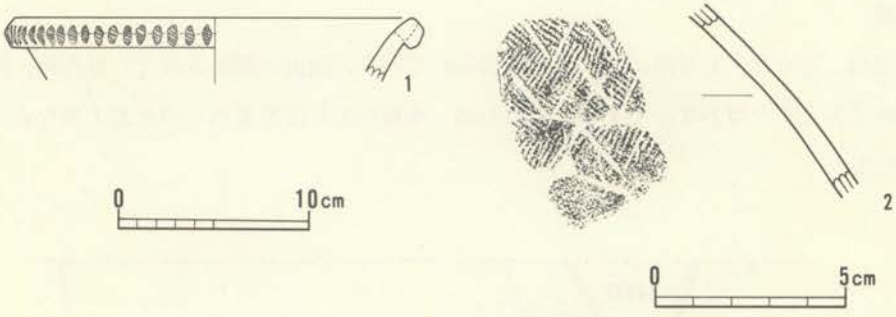
構造

本址は、壁の一部が検出されたにすぎないため規模はやや不明であるが、検出されたピットを基に推測すれば、軸長６ｍ前後の方形を呈する。炉跡は検出されなかった。床は、厚さ５cm程の貼床で、軟らかい。ピットは２個検出され、径48～62ｍ、深さ54～57cmであり、柱穴と考えられる。

荒掘り面では、２個のピットが検出された。この２個のピットは径30～75cm、深さ16～56cmであり、040 Ｄ号跡に伴う可能性が強い。

遺物の出土状況

遺物は土器がすべてであるが、総数７片と非常に少ない。図示したもののほかに壺の胴部破片及び壺の頸部破片（ＲＬの縄文が施文され、縄文施文部より下は赤彩されている）が出土している。



第27図　040Ｃ号住居跡出土遺物

040Ｃ号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	壺	口縁部1/5	(20.8) —	幅の狭い複合口縁部に縄文（ＲＬ）押捺。	床面密着	
2	壺			ＲＬ－ＬＲ－ＲＬ－ＬＲの羽状縄文後、３組の山形文施文。	床面密着	

040Ｄ号住居跡（第26図）

概要

本址は、040 Ｃ・Ｅ号跡により切られている。なお、大半の部分が未調査である。

構造

本址は、壁の一部を検出しただけであるため、全体の規模、形状は不明であるが、円形を呈

する可能性が強い。調査区内においては、炉跡、ピット等は検出されなかったが、040 C号跡の貼床を剝がして検出されたピットが、本址に伴うと考えられる。

遺物の出土状況

本址からは、磨耗した甕の胴部破片が1片出土したのみで、時期を決定するには困難であるが、本址が040 C号跡に切られていることより、弥生時代の住居跡と考えられる。

048号住居跡（第28・29図）

概要

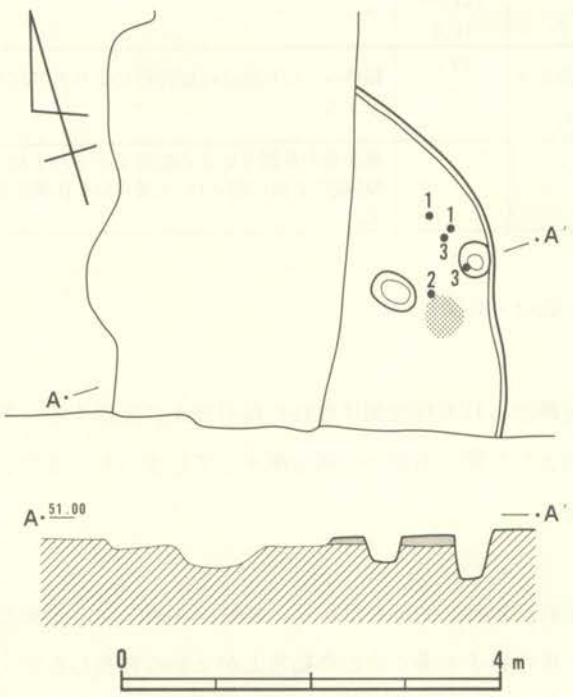
本址は、040 A号跡の10m程南に位置する。南側は削平されており、中央部は新しい溝によって切られているため、東側の一部が残存しているにすぎない。

構造

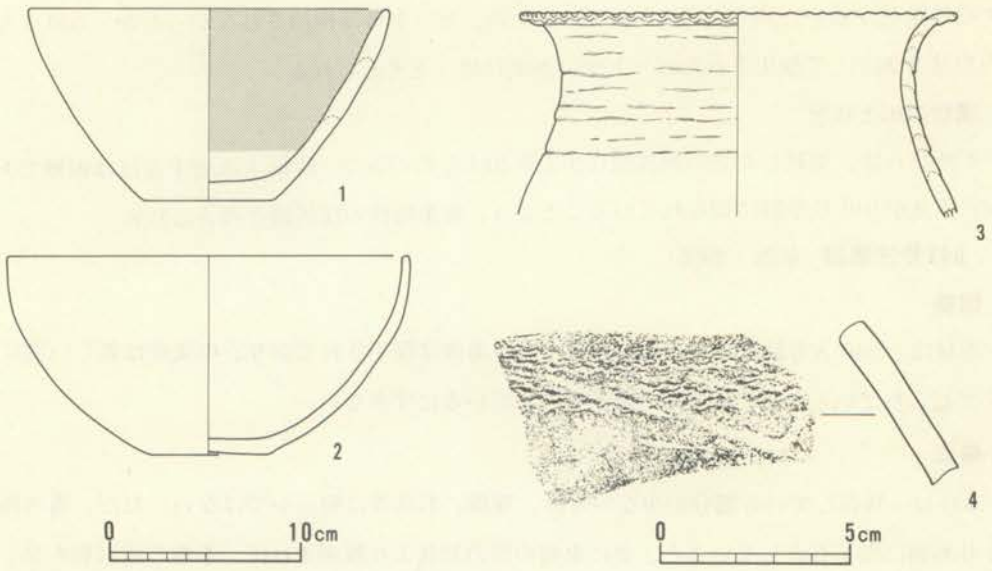
本址は、残存している部分が少ないため、規模、形状等は明らかではない。ただ、溝の西側より外側に壁が存在しないこと、更に東側の壁の形状より推測すれば、不整の楕円形を呈し、東西を向く短軸が4 m未満である。炉跡は検出されなかった。床は、黒褐色土を主体とした厚さ6～7 cmの貼床で、堅い。ピットは2個検出された。径32～36cm、深さ23～42cmである。

遺物の出土状況

遺物は少ないが、床面近くから出土した。3は壁際のピットの中程より、1及び2はいずれも鉢で、床面直上に押しつぶされた状態で出土したが、完形の土器ではない。また、覆土中からは、胴部にハケメを有する土師器も出土している。



第28図　048号住居跡



第29図　048号住居跡出土遺物

048号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	鉢	⅓	(19.0) 11.0	輪積み。ナデ後一部ミガキ。赤彩。	床面直上	
2	鉢	½	(21.0) 10.3	ナデ。	床面直上	
3	甕	口縁部ほぼ完形 胴部½	23.0 —	輪積み。口唇部は指頭押捺により小波状を呈する。	ピット	
4	壺			縄文RのS縛りによる結節文が3段1組4段1組の2列に施され、上部にはLR縄文施文。	覆土	

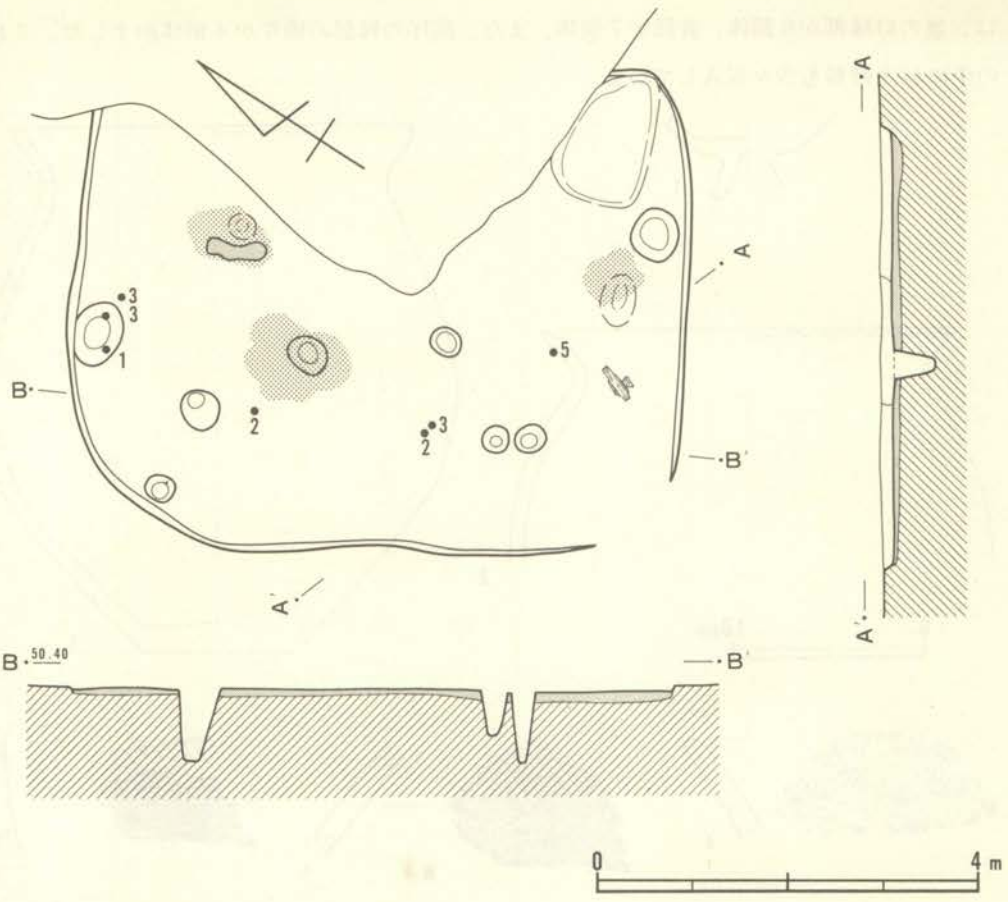
049号住居跡（第30・31図）

概要

本址は、038 C号跡から12m程西側に離れた緩斜面上に位置する。黒色土中に構築されていたため、表土層を除去した際、南側の一部を削平してしまった。また、木の根により東側の一部が攪乱されている。

構造

本址は、長軸6.50m、短軸5.00mをはかり、長軸が北西に向く。形状は隅丸長方形を呈する。床面上に焼土粒子・炭化粒子を多く含む暗褐色土が2か所存在したが、精査を続けた結果、北側の暗褐色土下に炉跡が検出された。炉跡は、住居中央より北側に位置し、64×15cmの細長い



第30図　049号住居跡

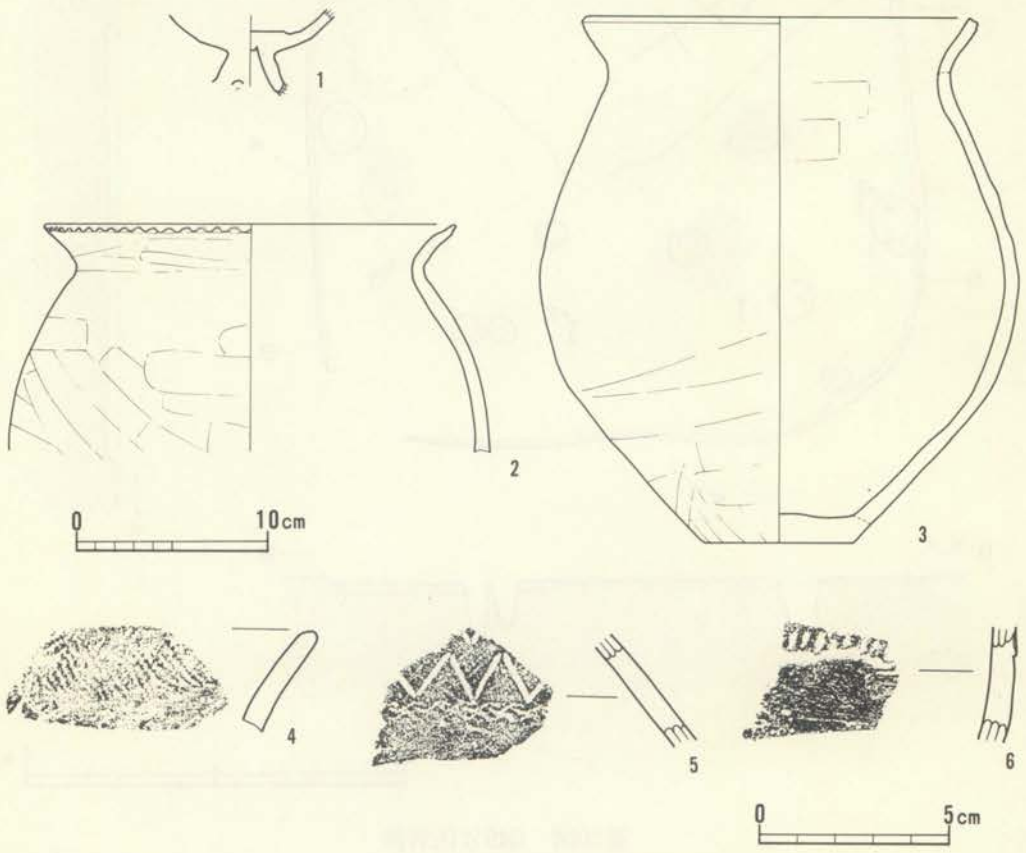
形状を呈する。掘り込みは５cmと非常に浅いが、焼土が充満していた。床は、黒褐色土を主体とし、少量の砂質ロームブロックが混入した厚さ６cmの貼床で構築されている。貼床の上部には、住居中央部で、厚さ１～1.5cm程の砂質ロームのブロックが検出されたが、床は全体に軟らかい。ピットは８個検出された。北壁に接している径60cm、深さ30cmのピットは、中から土器が出土したことから、貯蔵穴と考えられる。Ｂ－Ｂ′の断面上の３個のピットは径28～40cm深さ46～73cmで、柱穴と考えられる。このほかのピットは径28～47cm、深さ10～20cmである。

荒掘り面では、３個のピットが検出されたが、深さは10～15cmといずれも浅いもので、また、ピットの形状・規模も不規則である。荒掘り面の形状は、わずかな凹凸は認められるものの、全体には平坦である。

遺物の出土状況

本址から出土した遺物は、土器のみで、量は少ない。貯蔵穴及びその周囲（特に東側）からの出土が目立ったほか、住居中央部と壁際からも少量の土器が出土した。図示した土器以外に

は、甕の口縁部が6個体、底部が7個体、また、高坏の脚部の破片が4個体出土した。これらの中には土師器も少々混入している。



第31図　049号住居跡出土遺物

049号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	高坏	脚部 3/3	—— ——	ミガキ（?）。	ピット	器面磨耗
2	甕	口縁部 1/5 胴部 1/4	(21.5) ——	口唇部指頭押捺により小破状を呈する。 ヘラケズリ後一部ナデ。	床面直上	
3	甕	口縁部 1/6 胴部 1/2	(20.0) 27.4	口縁部から胴中部までナデ、胴下部ヘラケズリ後一部ナデ。	床面密着・ピット	
4	壺			RL縄文施文後一部ナデ。	覆土	
5	壺			山形区画文内にRL縄文充填し、以下縄文RのS縛りによる結節文。赤彩。	覆土	
6	壺			接合面にキザミを施し、以下ミガキ。赤彩。	覆土	

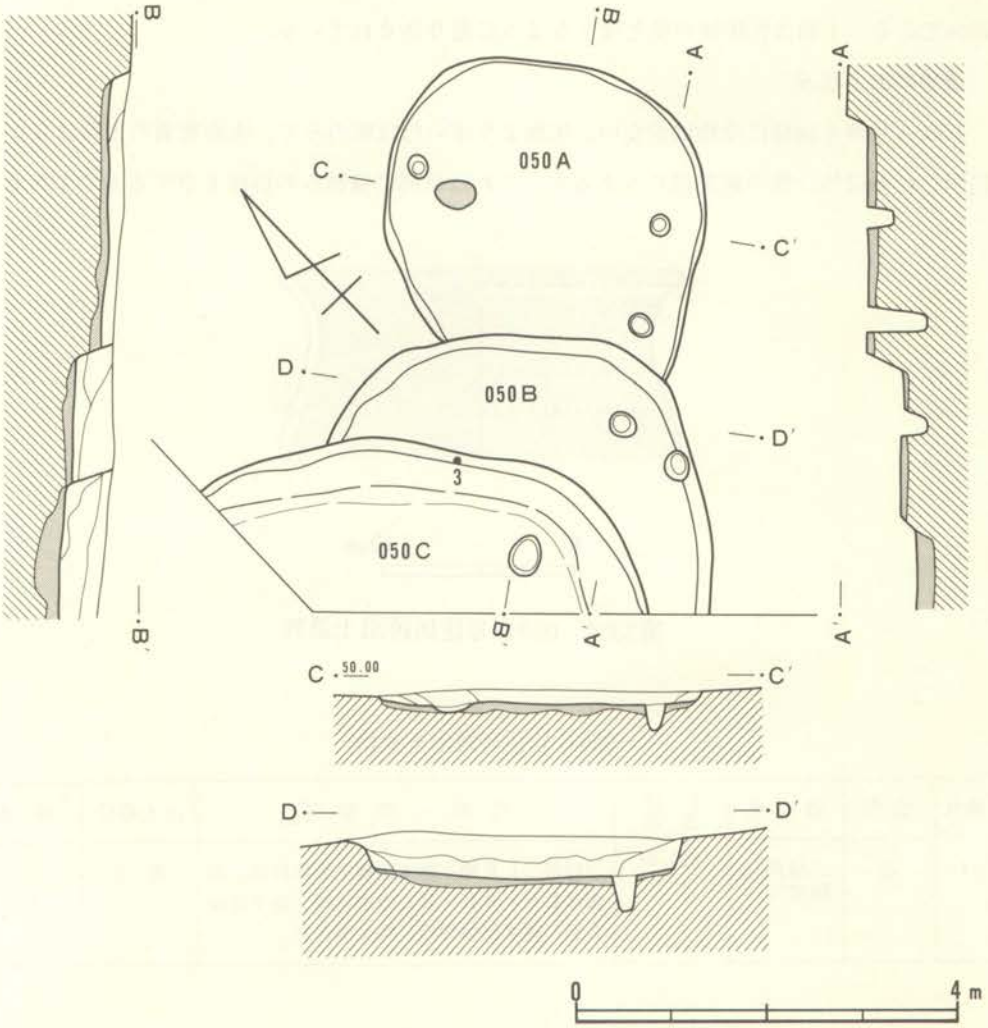
050A号住居跡（第32図）

概要

本址は、調査区内のかなり低い位置にあり、050 B号跡により一部切られている。

構造

本址は、北西の壁と南東の壁の長さは3.36ｍをはかる。コーナーの形状がそれぞれ異なる。すなわち、北西側は円形、北東側は隅丸方向、更に南東側は直角に近い形状を呈し、全体としては不整の円形を呈する。炉跡は、中央より北西側に位置し、径43×28cmの不整楕円形を呈する。炉跡の中央よりは壁に近い方が良く焼けている。床は、貼床で、全体がやや堅い。ピットは３個検出された。径20～22cm、深さ20～64cmであるが、配置が不規則であり、柱穴として使用されたか否かは不明である。



第32図　050A・B・C号住居跡

遺物の出土状況

遺物は土器の細片が30片程出土したのみで、縄文式土器、土師器も少々含んでいる。本址は050 B号跡と重複し、050 B号跡より古いこと、及び出土土器から弥生時代と判断した。

050B号住居跡（第32・33図）

概要

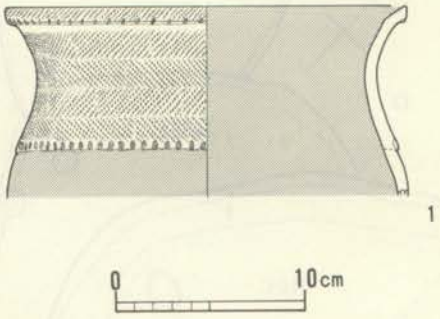
本址は、050 A号跡を一部切って、構築されているが、050 C号跡により、西側半分が切られている。また、一部未調査である。地山への掘り込みは40cmと深く、050 A号跡の床面との比高差は30cmをはかる。

構造

本址は、胴張りの隅丸方形を呈し、規模は4 m程と考えられる。炉跡は検出されず、050 C号跡により破壊された可能性が強い。ピットは2個検出された。共に径28cmで、深さは22 cm、25cmである。1個は住居跡の壁と接するように掘り込まれている。

遺物の出土状況

050 A号跡と同様に遺物は少ない。床面より浮いた状態のみで、床面密着の土器はなかった。図示した壺以外に甕の胴部破片があるが、これは頸部に輪積みの痕跡を有するものである。



第33図　050B号住居跡出土遺物

050B号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	壺	口縁部1/10 胴部1/4	(21.0) —	口縁部はLR縄文施文後縄文原体押捺。頸部はLR－RL－RLの羽状縄文施文後接合面に縄文原体押捺。無文部赤彩。	覆土	

050C号住居跡（第32・34図）

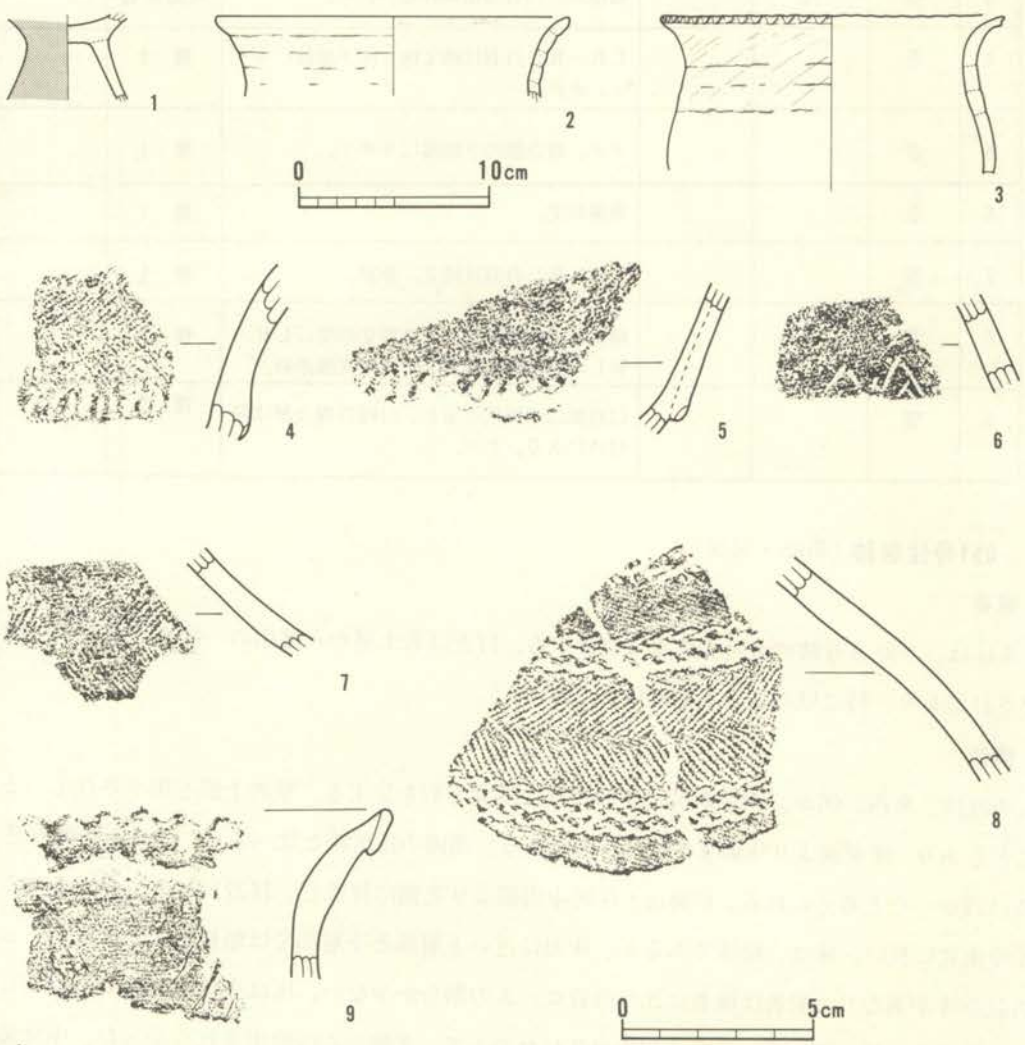
概要

本址は、050 B号跡を切って構築されている。なお、大半は未調査である。

構造

大半が未調査であるため、全体の形状、規模等詳細は不明瞭であるが、050 B号跡と同様に隅丸方形を呈すると考えられ、規模は050 B号跡よりやや大きく、約5.5 m程と考えられる。ピットは1個検出された。径45×35cmで深さは51cmであり、柱穴と考えられる。

荒掘り面は、床面より約10～20cm低い。壁側から中央に向い周囲約30cmは深さ10cmであり、中央部の深さは20cmである。



第34図　050C号住居跡出土遺物

遺物の出土状況

重複している3軒の中では、遺物の出土量は最も多い。土器は約80片出土し、また、径約5cmの軽石が2点出土した。050 B号跡と重複する壁際に密着の状態で甕が出土したが、そのほかの遺物については、北側より廃棄されたかのような状態で出土した。

050C号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	高坏	脚部⅔	— —	ミガキ（?）。赤彩。	覆土	器面磨耗
2	甕	⅙	(18.4) —	輪積み。ナデ。	覆土	
3	甕	¼	(17.6) —	輪積み。口唇部指頭押捺。ナデ。	床面密着	
4	壺			LR－RLの羽状縄文施文後下端部にキザミ。赤彩。	覆土	
5	壺			ナデ。複合部の下端部にキザミ。	覆土	
6	壺			鋸歯状文。	覆土	
7	壺			LR－RLの羽状縄文。赤彩。	覆土	
8	壺			縄文RのS縛りによる結節文の間にLR－RLの羽状縄文施文。外面無文部赤彩。	覆土	
9	甕			口唇部は小破状を呈し、口縁の複合部は貼付けによる。ナデ。	覆土	

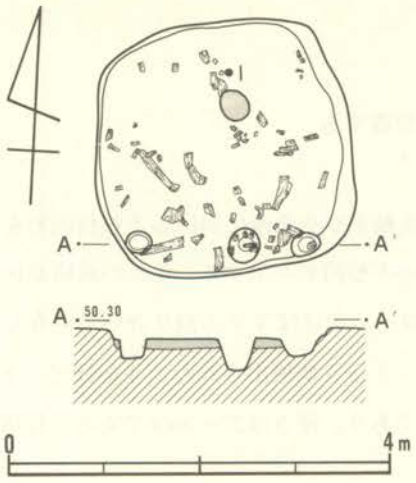
051号住居跡（第35・36図）

概要

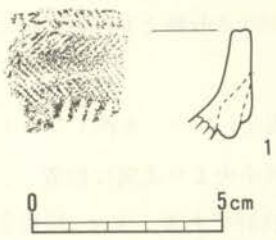
本址は、050 A号跡の2m程南東に位置する。付近は表土層から地山の一部までが水平に削平されており、特に壁の遺存状態は極めて悪い。

構造

本址は、東西2.66m、南北2.62mをはかり、隅丸方形を呈する。壁の上部を削平されていることもあり、確認面より床面までは約7cmである。周囲の住居跡と比べると、地山への掘り込みは浅かったと考えられる。炉跡は、住居中央部より北側に位置し、径27×37cm、深さ5cmで、やや南北に長い。床は、貼床であるが、床面に近い上層部と下層部では暗褐色土と砂質ロームの混合率が異なり、前者は後者に比べ砂質ロームの割合が少ない。床は全体が非常に堅い。ピットは南側の壁に接するように3個検出されたのみで、北側からは検出されなかった。中央部のものが最も深く、34cmをはかるが、ほかのピットは、共に22cmをはかる程度である。



第35図　051号住居跡



第36図　051号住居跡出土遺物

遺物の出土状況

本址は、焼失家屋と考えられ、床面密着または床面直上の状態で多くの炭化材が検出された。炭化材は水田により水分を多く吸収していたため、非常に脆く、細部に及ぶ観察は行うことができなかった。炭化材の外形は遺存状態においては、平材は検出されず、厚みがあり不整の断面を有するものである。また、炭化材の出土状態における傾きは、床面に対し水平の状態のものが大半で、大きな傾きを有するものは少ない。傾きを有する炭化材も、その傾きは不規則である。ピットの中からは炭化材のごく小さなものが出土したのみで、柱が立ったままの状態で炭化したような痕跡は認められなかった。土器は、床面密着あるいは床面直上の状態で20片程の細片が出土した。図示していないが、甕の口縁部で口唇にキザミを有する土器片が3片出土した。

051号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	壺			口唇部はＲＬ縄文、口縁部はＬＲ－ＲＬの羽状縄文施文。	床面密着	

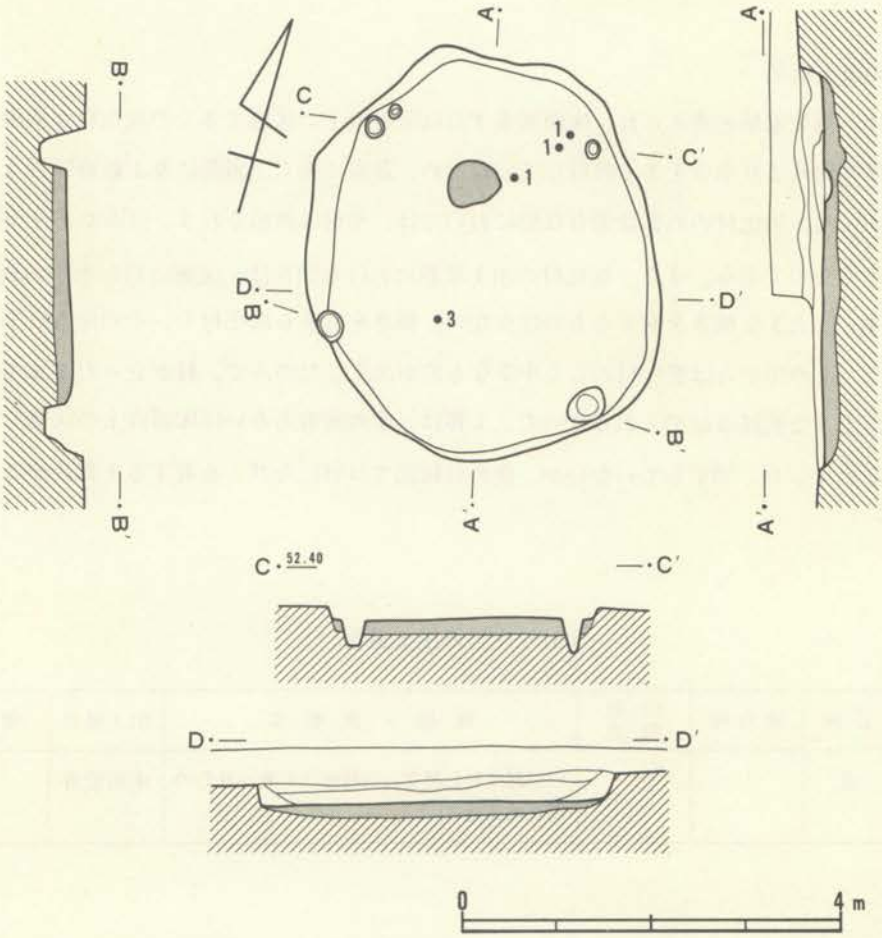
052号住居跡（第37・38図）

概要

本址は、050 A号跡と056 B号跡との中間に位置する。

構造

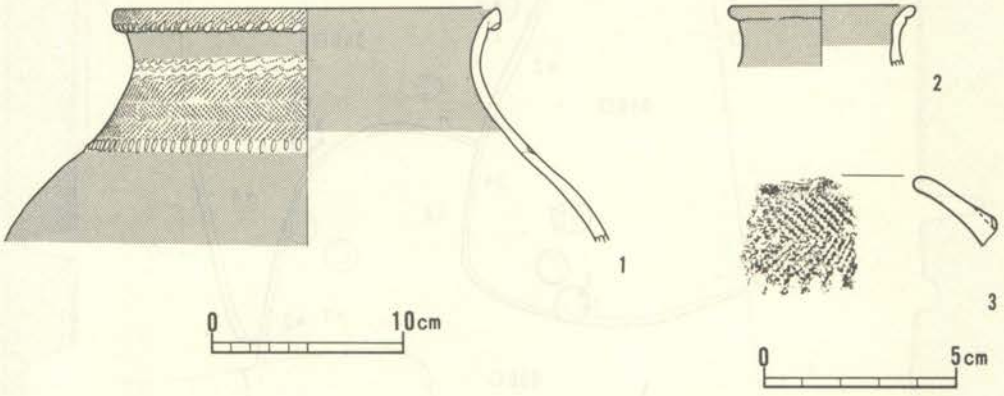
本址は、南北4.28m、東西3.73mをはかり、長軸をやや北西に向ける不整楕円形を呈する。炉跡は、住居中央より北側に位置し、56×46cmの不整円形を呈する。焼土の堆積が10cmと厚く、遺存状態は良好である。床は、暗褐色土と砂質ロームがほぼ半々の割り合いで混在した貼床で、全体が堅い。貼床の厚さは10～14cmである。ピットは5個検出された。4個はピットの一部が住居跡外にはみ出している。規模は径16～40cmであり、深さは27～36cmである。住居跡の平面形から判断すると柱穴と考えられる。



第37図　052号住居跡

遺物の出土状況

遺物は、土器が総数60片程度で、無文の胴部破片が多い。これらは床より10～15cm程浮いているものがほとんどであるが、図示した壺は床面密着の状態で出土した。図示した土器以外では口唇部にキザミのある甕の破片が数個体、また、甕と考えられる土器の底部が7個体分ある。



第38図　052号住居跡出土遺物

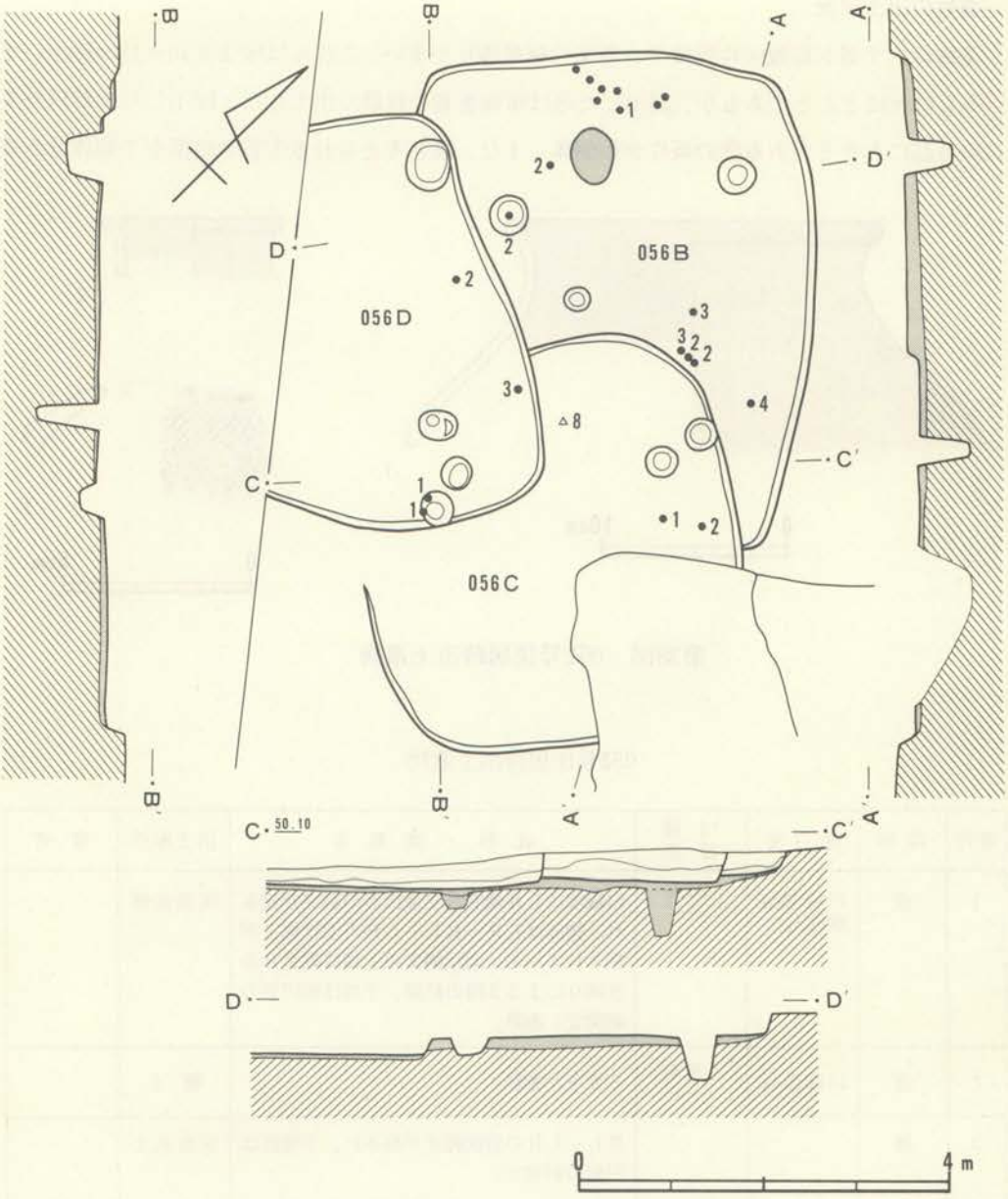
052号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	壺	口縁部¼ 胴部⅙	(20.0) ——	口縁部はＬＲ縄文施文後円形の刺突が施され、頸部はＬＲ－ＲＬ－ＬＲの羽状縄文が施されている。羽状縄文の上端は縄文ＲのＳ縛りによる3段の結節、下端は楕円形の刺突文。赤彩。	床面密着	
2	壺	口縁部⅙	(9.4) ——	ミガキ。赤彩。	覆土	
3	鉢			ＲＬ－ＬＲの羽状縄文が施され、下端部は円形の刺突文。	床面直上	

056Ｂ号住居跡（第39・40図）

概要

本址は、調査区内において最も南寄りに位置する住居跡群の中の1軒である。南西側を056Ｄ号跡に、南東側を056Ｃ号跡に切られ、北側のみが遺存している。共に本址より床面がやや低く、貼床下の荒掘りにおいても、本址の形状を確認することができなかった。北東側の壁は比較的容易に検出されたが、北西側の壁付近は木の根による小さな攪乱が多く、確認には困難を極めた。



第39図　056B・C・D号住居跡

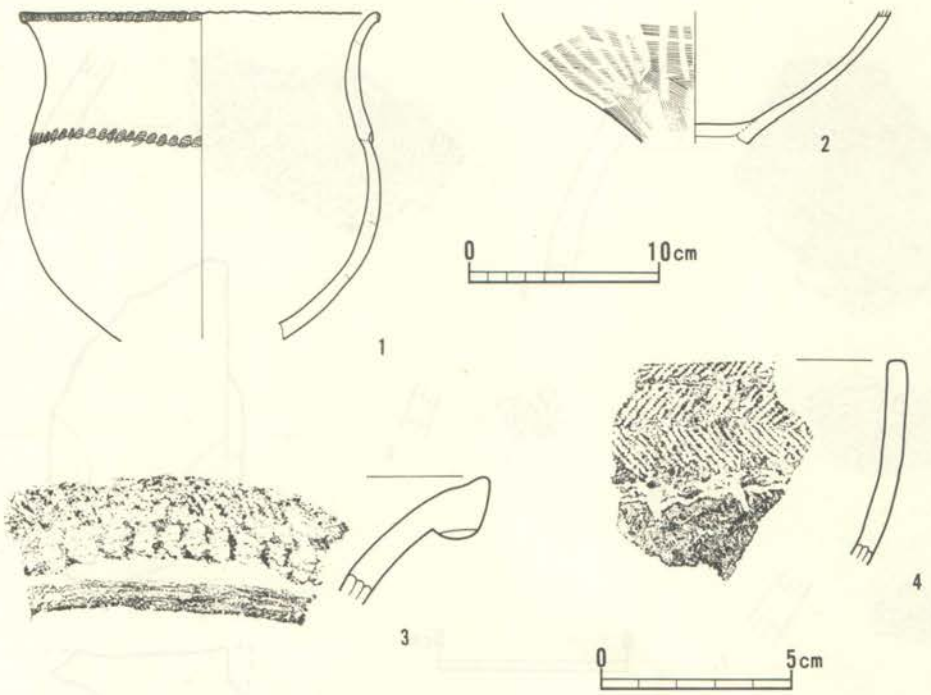
構造

本址は、検出状態が良好な北東の壁から推測すると、形状は胴張りの隅丸長方形を呈し、北西から南東を向く長軸が約5.3ｍ、短軸約4.5ｍの規模と推定される。炉跡は、住居中央から北西寄りに位置し、径48×61cmの不整楕円形を呈し、深さ７cmをはかる。焼土ブロックは部分的に存在するのみであるが、熱を受けて赤変した土層が５cm程の厚さで認められた。床は、暗褐色土を主体とし、砂質ロームブロックを混入した貼床で、全体が非常に堅い。ピットは遺存

している本址内に３個検出され、Ｃ－Ｃ′の断面にあるように056Ｃ号跡の貼床の下より検出されたピットも本址に伴うと考えられる。また、056Ｄ号跡の南東の壁近くに検出された３個のピットの中で壁に接しているのは056Ｄ号跡に伴うが、西側にある２個のピットは056Ｄ号跡には伴わず、本址あるいは056Ｃ号跡に伴うものである。住居跡の平面形から推測すると一番西側のピットが本址に伴うと推定される。この５個のピットの中で、柱穴と考えられるのは、住居跡の平面形から推測すると、中央のピットを除く４個であろうが、西側のコーナー近くのピットは径42cm、深さが18cmと浅く、ほかの３個は45～80cmと深い。柱穴の配置は、平面形からすれば、不規則である。

遺物の出土状況

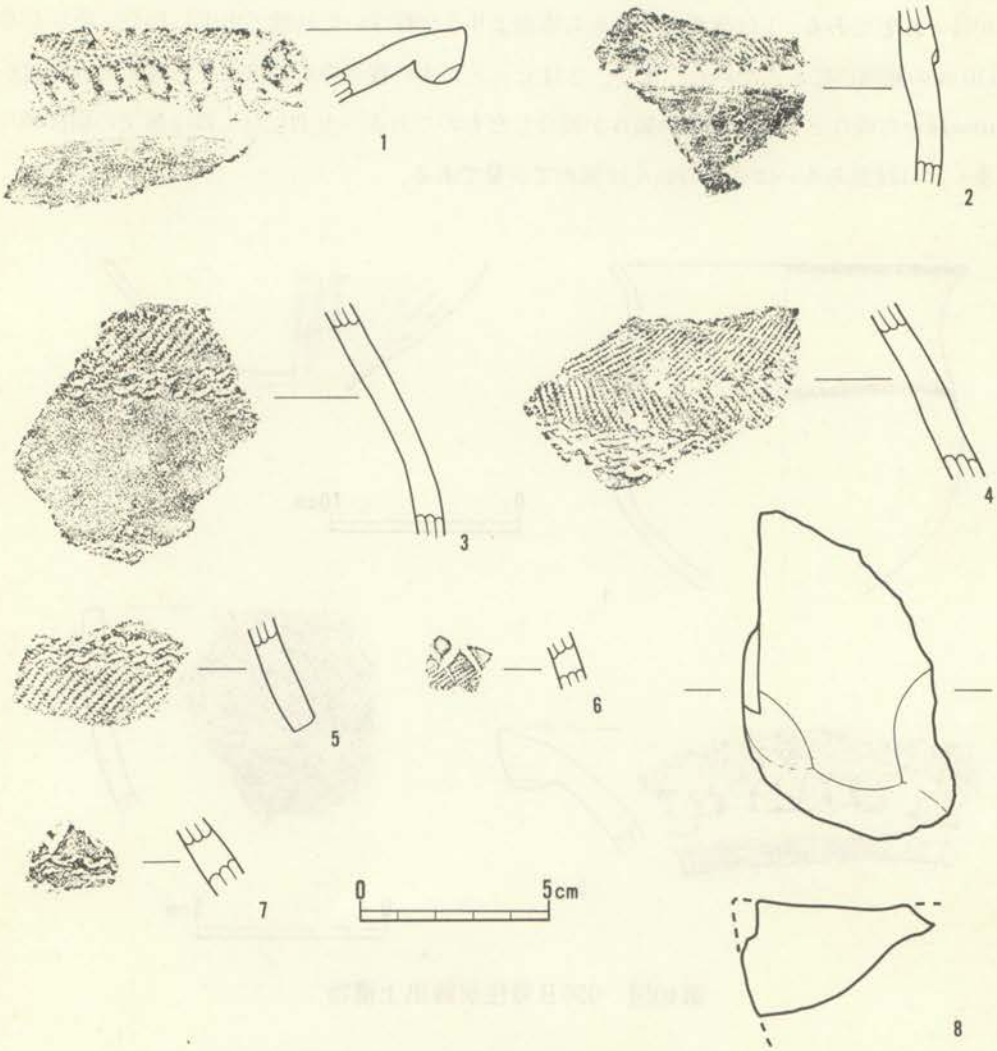
本址から出土した遺物は、土器片が70片程と礫が３点である。礫は５～10cm程の大きさでこの中の１点は焼けており、共に覆土中から出土した。土器は床面から浮いた状態で出土したものがほとんどである。１は北西の壁際から床面より５cm程浮いた状態で出土したが、破片が30×110cmの範囲に拡がっていた。また、２はピットの中の覆土中から出土した破片と、床面から10cm浮いた破片と、床面直上の破片が接合したものである。出土した土器は無文の胴部破片が多く、口縁部あるいは底部の破片は極めて少量である。



第40図　056Ｂ号住居跡出土遺物

056Ｂ号居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	甕	口縁部1/10 胴部完形	(18.5) ——	輪積み。口唇部及び胴上部にＬＲ縄文原体押捺。ナデ後一部ミガキ。	床面密着	
2	甕	胴下部完形	—— ——	ハケメ後一部ミガキ。底部付近の接合痕明瞭。	ピット・ 床面直上	
3	壺			ＲＬ縄文が施され、下端部に縄文原体押捺。無文部赤彩。	床面密着	
4	鉢			口唇部ＬＲ縄文施文。口縁部はＬＲ－ＲＬの羽状縄文と縄文ＲのＳ縛りによる結節文。	覆土	



第41図　056Ｃ号住居跡出土遺物

056C号住居跡（第39・41図）

概要

本址は、056 B号跡の床面を10cm程堀り込んで構築されているが、西側を056 C号跡により切られている。また、東側は056 A号跡により覆土の一部を切られていたと考えられるが、その部分も別な長方形を呈する新しいピットに攪乱されている。南西側は水田耕作によるものか、土層の変化が著しく、壁が確認できなかった。

構造

本址は、遺存している壁が北側と南側のコーナーのみであるが、やや胴張りの隅丸方形を呈すると考えられる。長軸4.25m、短軸4.08mをはかり、長軸は056 B号跡よりやや西に寄る。炉跡は、056 D号に破壊されたものか、検出されなかった。床は、056 B号跡より10cm程低く、056 D号跡より10cm程高い位置にあり、厚さ平均10cm程の貼床であるが、全体に軟らかい。ピットは、北西の壁に接する位置に1個検出された。径37cm、深さ55cmをはかる。なお、056 D号跡の貼床下から検出された2個の中の1個が本址に伴うとしても、本址のピットは2個であり、南側のコーナーには検出されなかった。

遺物の出土状況

本址から出土した遺物は、土器と石器である。土器は30片程で細片が多く、完形あるいは半完形となるような土器はない。比較的床面に近くから出土した土器片が多く、南側ではほとんど認められず、中央より北側においての出土が顕著である。

056C号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	壺			LR－RLの羽状縄文が施され、円形の附文が貼付けられている。複合口縁下端部は縄文原体押捺。赤彩。	床面直上	
2	無頸壺			複合部にRL縄文が施され、下端部はキザミ。赤彩。	覆土	
3	壺			縄文RのS縛りによる2段の結節文の上部にLR縄文施文。	覆土	
4	壺			縄文RのS縛りによる3段の結節文の上部にLR－RLの羽状縄文施文。赤彩。	覆土	
5	壺			縄文RのS縛りによる2段の結節文の下部にLR縄文施文。赤彩。	覆土	
6	壺			鋸歯状の沈線区画内にLR縄文充填。赤彩。	覆土	

7	壺			鋸歯状沈線の下端部に結節文施文。	覆　土	
8	砥 石	現形をとどめている部分はごく一部であり、大半が破損している。砂岩。覆土。				

056D号住居跡（第39・42図）

概要

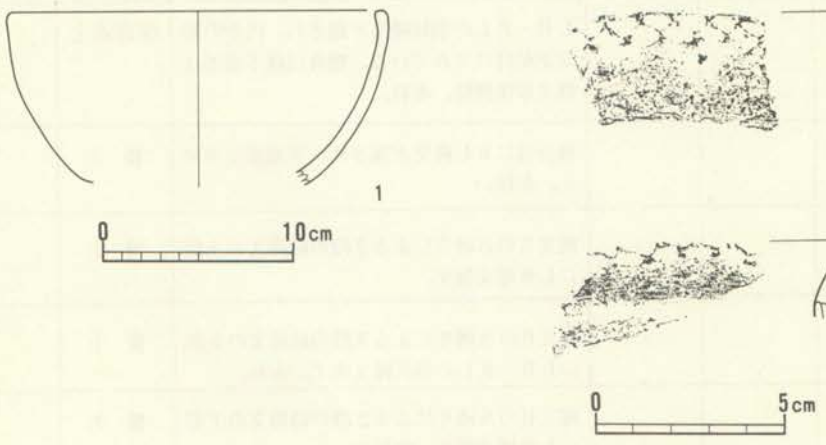
056 B・C号跡を精査するための土層断面において、本址の壁、床が検出された。土層断面においては明確に本址とほかの住居跡を分離することができたが、調査してみると木の根の小さな攪乱が多く、土層が水田耕作で変化していることもあり、壁を検出するのには困難を極めた。また、南西側は未調査である。

構造

本址は、確認が困難であったため、掘りあがりの形状は長方形を呈するものの、不整形である。本址も056 B・C号跡同様に長軸を北西から南東の方向に向け、長さは約4.5 mをはかる。調査した範囲内において、炉跡は検出されなかった。床は、貼床で、056 B号跡と同様に暗褐色土を主体とし、軟らかい。ピットは2個検出された。北壁際のピットは、径54×47cmの長方形を呈し、深さ40cmをはかる。南東の壁に接したピットは径37cm、深さ18cmである。柱穴と考えられる。

遺物の出土状況

本址からは、土器が30片程出土した。床面から5～10cm程浮いているものがほとんどで、東側のコーナー付近からの出土が目立った。



第42図　056D号住居跡出土遺物

056D号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	高坏	½	(19.6) ——	ミガキ。	床面直上	
2	甕			口唇部は内外面両側からのヘラ状工具（?）による押捺のため小波状を呈する。ナデ。	床面直上	
3	甕			口唇部は内外面両側からのヘラ状工具（?）による押捺のため小波状を呈する。ナデ。	覆土	

059B号住居跡（第43・44図）

概要

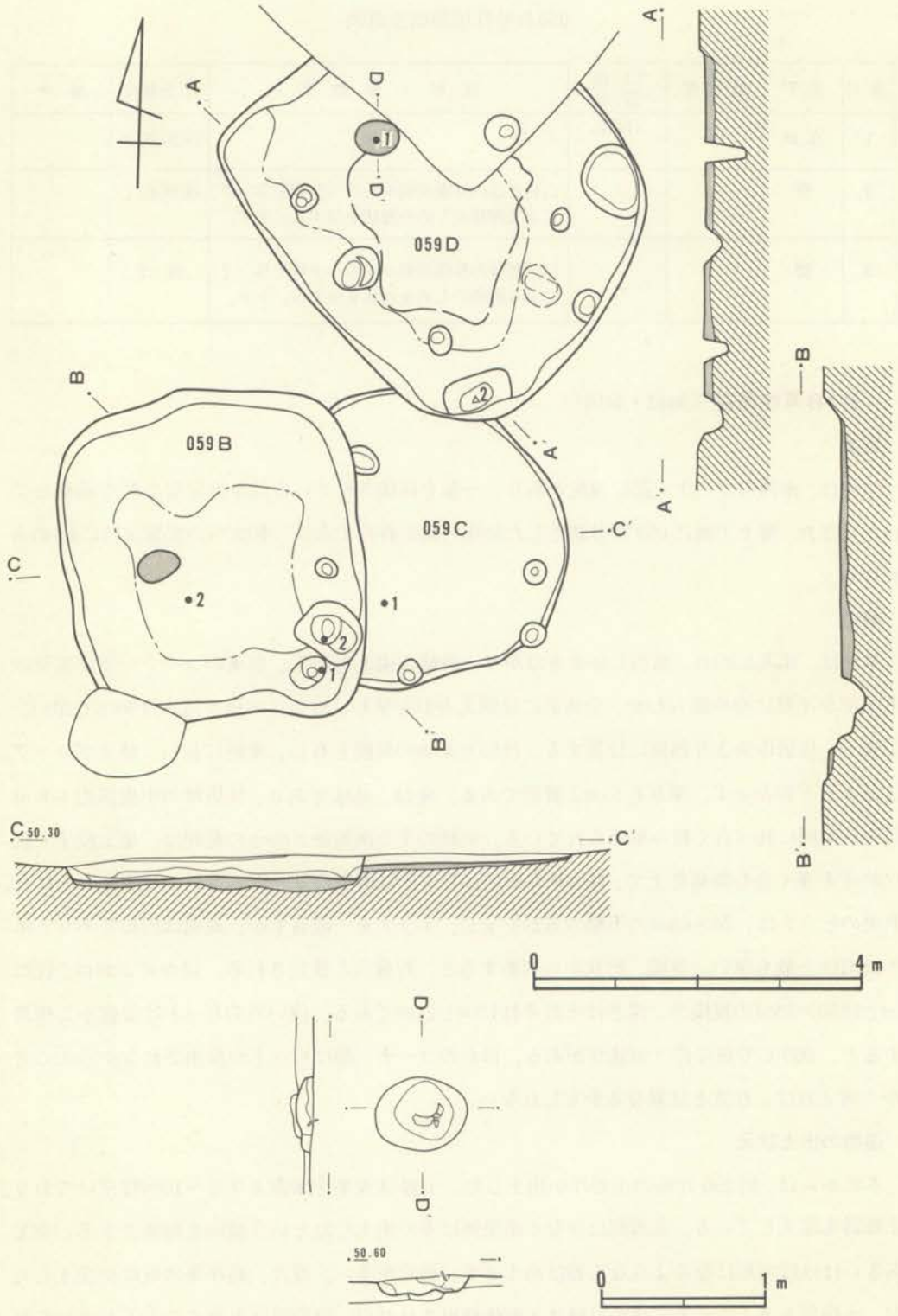
本址は、南西のコーナー部に攪乱があり、一部を破壊されているほかは完全な形で遺存していた。なお、覆土上面に059A号跡とした貼床の面が存在するが、本址への影響は特に認められない。

構造

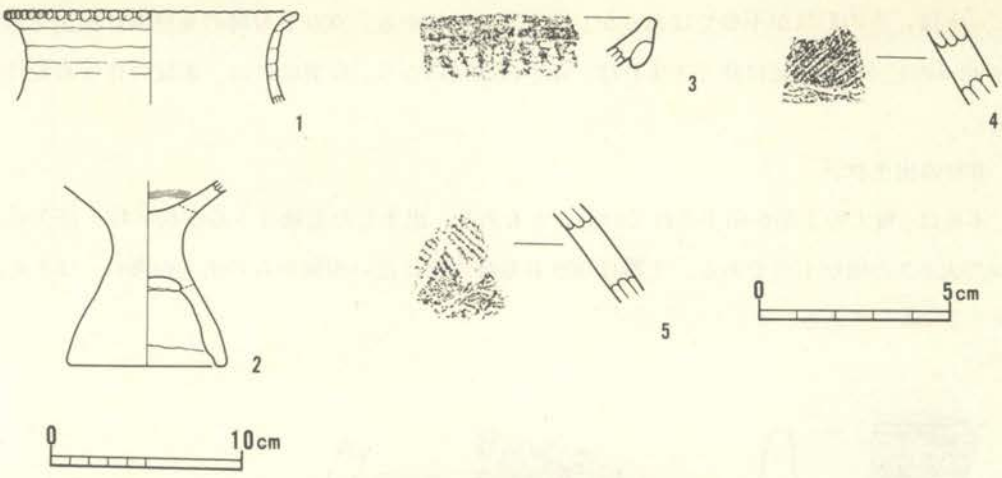
本址は、南北3.83m、東西3.60mをはかり、長軸は南北を向く。南東のコーナー及び北壁の中央部が不整にやや膨らむが、全体的には隅丸方形を呈し、地山への掘り込みは30cmと深い。炉跡は、住居中央より西側に位置する。径55×36cmの規模を有し、東西に長い。焼土ブロックはほとんど存在せず、深さも5cmと貧弱である。床は、貼床であり、住居跡の中央部約1.8m四方が周囲に比べ良く踏み堅められている。炉跡のすぐ南側98×60cmの範囲は、焼土粒子・炭化粒子を多く含む暗褐色土で、特に軟らかい。ピットは南東のコーナー際から3個検出された。中央のピットは、76×63cmの不整の方形を呈し、テラスを一段有すが、底面は円形であり、深さは31cmと最も深い。規模、形状から判断すると、貯蔵穴と推定される。ほかの2個は、径22cmと径50×33cmの規模で、深さはそれぞれ13cmと24cmである。浅い方のピットは位置から推測すると、059C号跡に伴う可能性がある。ほかのコーナー部にピットが検出されなかったことから考えれば、柱穴とは異なるかもしれない。

遺物の出土状況

本址からは、約250片程の土器片が出土した。土器は大半が床面より5～10cm程浮いており、土師器も混入している。北西側に少なく南東側に多く出土したという傾向を指摘できる。完形あるいはほぼ完形になるような土器は出土せず、細片が多い。器台、高坏等の破片が出土したが、土師器と考えられる。甕の口縁は8個体検出されたが、口唇部にキザミのあるものが5個体である。



第43図　059B・C・D号住居跡



第44図　059Ｂ号住居跡出土遺物

059Ｂ号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	甕	口縁部¼	(15.0) —	輪積み。口唇部円形の刺突文。	床面直上	
2	台付甕	底部½	— —	輪積み。内面の一部はハケメであるが、他はナデ。	床面直上・ピット	
3	壺			複合部の下端部は縄文原体押捺。	覆土	
4	壺			ＬＲ縄文の下端部に結節文。	覆土	
5	壺			ＲＬ縄文施文後鋸歯状沈線施文。下端部は縄文ＲのＳ縛りによる結節文。	覆土	

059Ｃ号住居跡（第43・45図）

概要

本址は、西側を059Ｂ号跡により深さ20cm程切られ、更に北側の壁の一部を059Ｄ号跡により切られている。また、本址付近より、西側を除いた三方は地山が削平されているため、覆土はわずか7～10cm程が遺存しているにすぎない。

構造

本址は、遺存している壁から考えると、3.5ｍ程の不整円形を呈する。炉跡は検出されなかった。床は、暗褐色土を主体にした貼床で、全体に軟らかい。ピットは南側に3個、北側に1個の計4か所検出された。南側の3個は径28～32cm、深さ20～36cmである。最も南側のピットは、住居跡の壁と接しており、南側中央のピットは半分が住居跡外にはみ出している。北側の

ピットは、その形状が不整ではあるが、深さ27cmをはかる。059 B号跡の東壁側に検出された径22cmのピットが本址に伴うとすれば、深さは30cmになり、位置的には、本址に伴う可能性が強い。

遺物の出土状況

本址は、覆土の上部が削平されていたこともあり、出土した遺物は土器が約40片、径7～8cmの大きさの礫が1点である。土器は059 B号跡の壁に近い西側からの出土が多く、ほとんどが小さな破片である。

第45図　059C号住居跡出土遺物

059C号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	壺			口頸部LR縄文、口縁部RL縄文。口縁下端に結節文。	覆土	
2	壺			2列の鋸歯状文とLR縄文施文。	床面密着	

059D号住居跡（第43・46図）

概要

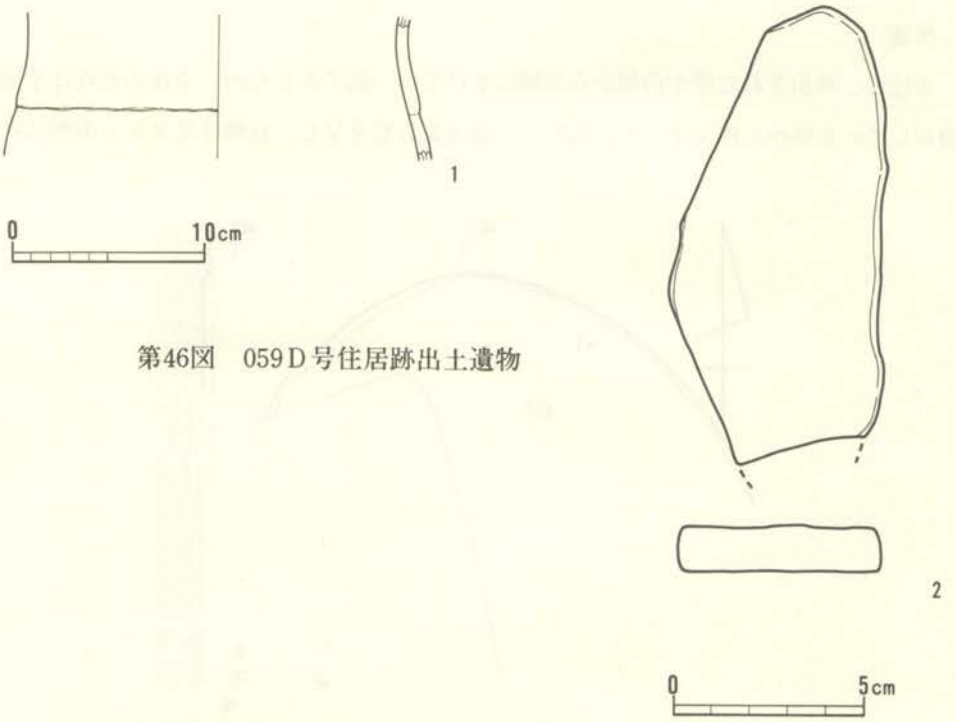
本址は、059 E号跡により北側の約$\frac{1}{4}$を切られている。059 C号跡と同様に確認面と床面との比高差はほとんどなく、覆土は大半が削平されている。

構造

本址は、遺存している壁及びコーナーがそれぞれ異なった形状を呈する。西側のコーナーは直角に近く、南側のコーナーはやや丸みが強いが、この間の壁はほぼ直線である。東側のコーナーは円形を呈する。北側のコーナーは059 E号跡により削平されているが、両方の住居跡の床を剝がすと、図示したような南側のコーナーと同様にやや丸みを有するわずかな立ち上がりが検出された。本址の全体の形状は、台形に近く、北東の辺2.7 m、南西の辺4.2 m、この間の距離4.24 mをはかるが、最大の長さは4.96 mである。炉跡は、北西の壁寄りに、059 E号跡の壁と接して検出され、かろうじて削平をまぬがれていた。規模は56×45cm、深さは10cmであ

る。炉跡の中央部から南側にかけてが火床と考えられ、非常に堅い焼土ブロックが厚さ5cmにわたり認められた。炉跡には甕の胴部が使用されている。土器は、胴上部のみの破片で全周はせず、床面から3cm程が上部に突き出ており、4cm程が炉の中に埋まっている状態である。床は、中央から北西側の壁までと南西側にかけての範囲が堅い。床面の堅い部分は、砂質ロームのブロックを主体とし、暗褐色土を少々含む土層であり、この土層は貼床の最上面に2～3cmの厚さで検出された。この層より下部及び堅い部分以外の貼床は、暗褐色土と砂質ロームブロックの割り合いがほぼ半々の土層で軟らかい。ピットは床面上で7個検出されたが、この中で北側のピットは059 E号跡の荒掘り面より検出されたものである。南及び東側のコーナーで検出されたピットは、それぞれ34×74cm、68×95cmの大きさで、深さ24cm、17cmをはかる。そのほかのピットは、深さが30～64cmで、最も深い北側のコーナー寄りのピットは059 E号跡の貼床の下より検出されたものである。この北側のピットと南西の壁に接して並ぶ3個のピット及び北東のコーナー近くのピットが深さから推測すると、柱穴と考えられるが、配置がやや不規則である。

荒堀り面は、中央部が高く、壁際が低い。床面からの高さは中央部が6cm、周辺部が12cm程である。なお、貼床の下から深さ14cmのピットが1個検出された。



第46図　059D号住居跡出土遺物

遺物の出土状況

本址は、覆土の大半が削平されていたため遺物は非常に少ないが、ほとんどが床面近くから出土した。土器は胴部破片のみであり、出土する位置も、ある部分に集中するというような傾向は認められない。図示した甕は、炉跡の中央部より出土した胴部破片であり、床面より上に出ていた部分は熱を受けた痕が認められる。

059D号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	甕	胴部⅓	—— ——	胴上部に接合面を残す。ナデ。	炉跡	
2	砥石	一部を欠損するが、表裏面共に使用されている。砂岩。ピット。				

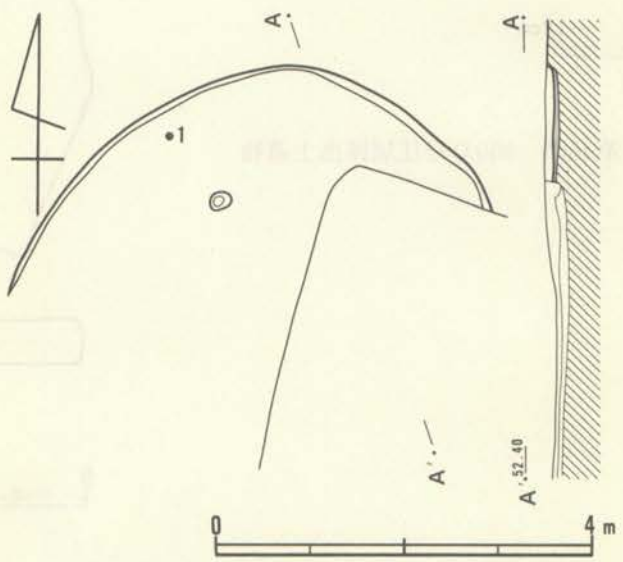
060B号住居跡（第47・48図）

概要

本址は、東側を060A号跡に切られている。地山が東から西に傾斜する緩斜面上に位置し、地山への掘り込みも浅いことから、西側の一部及び南側の壁は検出されなかった。

構造

本址は、検出された壁が西側から北側にかけての一部であるため、全体の形状は不明瞭で、遺存している壁から推測すると、胴張りの隅丸長方形を呈し、長軸は北東から南西に向く。遺

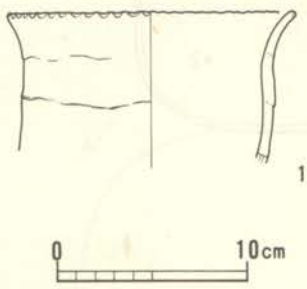


第47図　060B号住居跡

存している床面において、炉跡は検出されなかった。ピットは1個検出され、径20cm、深さ40cmである。

遺物の出土状況

遺物は北西の壁際から少量の土器が出土したのみである。



第48図　060B号住居跡出土遺物

060B号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	甕	胴下部以外完形	15.0 ——	輪積み。口唇部は指頭押捺のため小波状を呈する。ナデ。	床面密着	

061B号住居跡（第49・50図）

概要

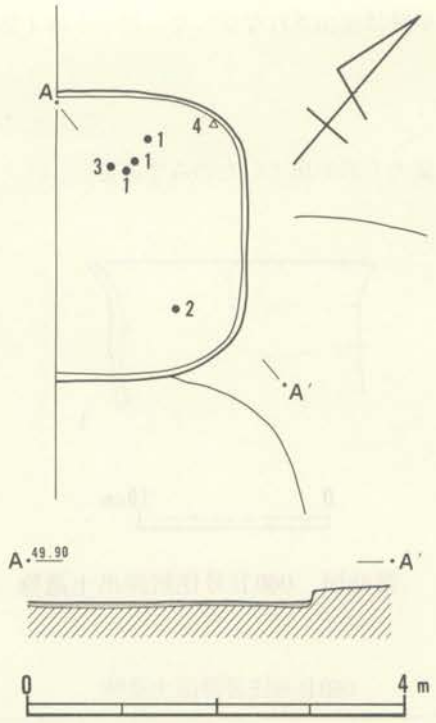
本址は、061A号跡の床面を精査中に落ち込みが確認されたものである。本址から西へ5m程離れると比高差6m程の崖になり、一段低い台地になるが、本址は遺跡の所在する台地の南側の縁に位置し、地山は東から西に緩い傾斜をしている。なお、本址付近は木の根等による撹乱が著しく、検出された壁高は約10cmをはかる程度である。061A号跡と重複していたと考えられるが、土層断面においては確認されなかった。また、西側の一部は未調査である。

構造

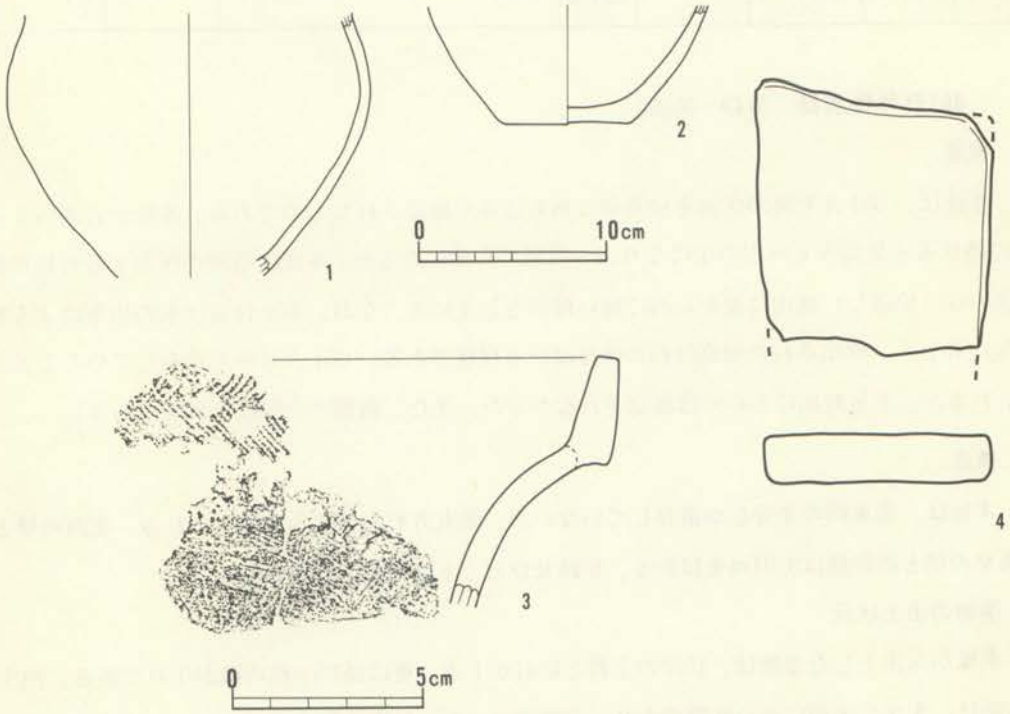
本址は、北東側の半分しか遺存していないが、隅丸方形を呈すると考えられる。北西の壁と南東の壁との距離は3.04mをはかる。炉跡及びピットは検出されなかった。

遺物の出土状況

本址から出土した遺物は、15片の土器と砥石が1点、更に径10cm程の礫が1点である。出土遺物は、すべて床面に近い状態であり、北側のコーナー付近に集中していた。



第49図　061Ｂ号住居跡



第50図　061Ｂ号住居跡出土遺物

061Ｂ号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	壺	胴部¼	― ―	ミガキ。	床面密着	
2	甕	胴下部⅓ 底部完形	― ―	ミガキ（？）。	床面直上	器面磨耗
3	壺			口縁部はＬＲ－ＲＬの羽状縄文施文。赤彩。	床面密着	器面剝落
4	砥石	一部を欠損するが、長方形を呈し、表裏面共に使用されている。砂岩。床面密着。				

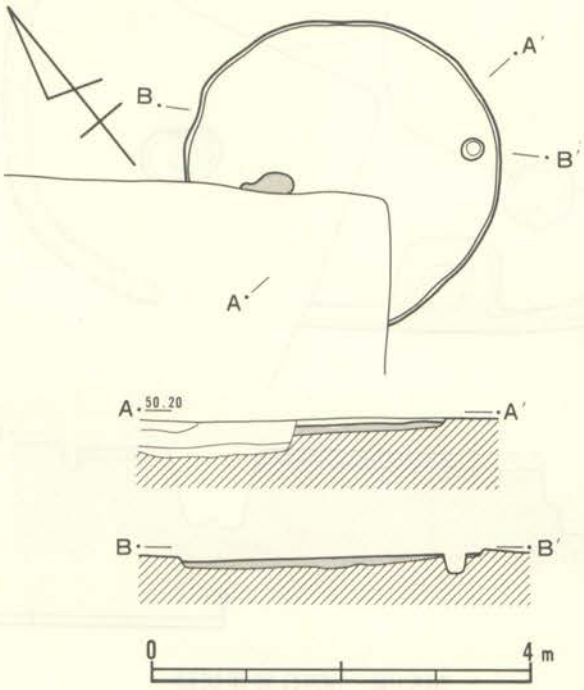
064Ａ号住居跡（第51図）

概要

本址は、064 Ｂ号跡により西側が切られるいる。地山への掘り込みが浅く、覆土の大半が削平されている。

構造

本址は、径3.2ｍ程の不整円形を呈する。炉跡は、住居の西側に位置するが、064 Ｂ号跡により削平されており、半分程が遺存しているにすぎない。炉跡内からは焼土粒子が多量に検出



第51図　064Ａ号住居跡

された。床は、暗褐色土を主体にした厚さ８cm程の貼床で、全体に軟らかい。ピットは東側の壁近くに１個検出され、径22cm、深さ20cmである。

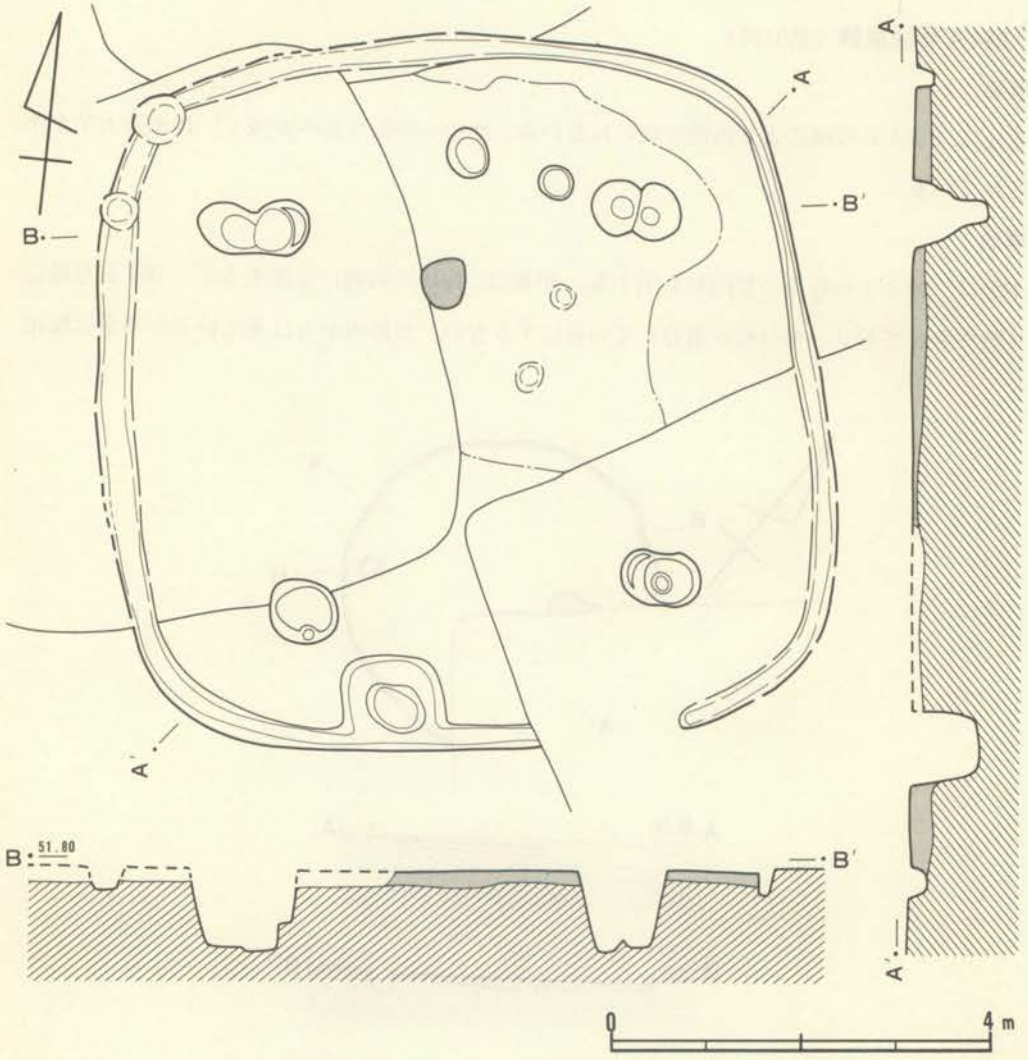
遺物の出土状況

本址からは、土器が覆土中から10片程出土した。縄文式土器が２片含まれている。

069 G号住居跡（第52・53図）

概要

本址は、069号跡群の中で最も古い時期の住居跡であり、069 A・D・E号跡に床面が切られ、遺存しているのは北東及び南西のコーナー部分である。



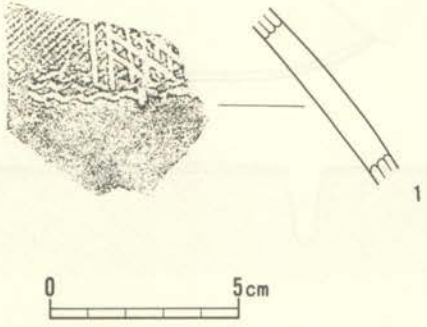
第52図　069G号住居跡

構造

本址は、床面を半分以上削平されているが、壁溝の下部は残存していた。壁溝から形状を推定すると、長軸7.55m、短軸7.29mの隅丸方形で、長軸がほぼ東西を向く。壁溝は幅16～30cm、深さ15～19cmをはかり、南側の一部は069 A号跡が構築されているため、検出されなかったが、ほぼ全周していたものと考えられる。炉跡は、中央よりやや北側に位置し、径50cmの円形を呈しており、焼土が多量に検出された。床は、砂質ロームを主体にした貼床で、中央より北側が堅い。ピットは9個検出された。南側の壁溝に接するピットは、上面においては一辺1m程の方形を呈するが、深さ約42cmで、底面は円形を呈する。柱穴と考えられる4個は径50～62cmであるが、それぞれ2個が重なって瓢形を呈する。深さは、深い方が84～100 cm、浅い方では47～84cmである。柱穴間の距離は、一辺がほぼ4m前後であり、各柱穴間を結ぶ形状はやや不整方形を呈する。このほかのピットは径38～40cm、深さ15～36cmで、壁溝部に検出されたピットは外側に張り出しており、径25cm、深さ14～17cmをはかる。

遺物の出土状況

本址から出土した遺物は、土器であるが、数は少ない。明らかに土師器とわかる破片も少量混入している。胴部破片が多く、甕の口縁部破片は、口唇部に指頭による押捺が施されたものがある。本址は地山への掘り込みが浅かったため、出土した土器はすべて床面近くからの出土である。



第53図　069G号住居跡出土遺物

069G号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	壺			縄文RのS縛りによる結節文より上部はLR縄文と格子目状の沈線。	床面直上	

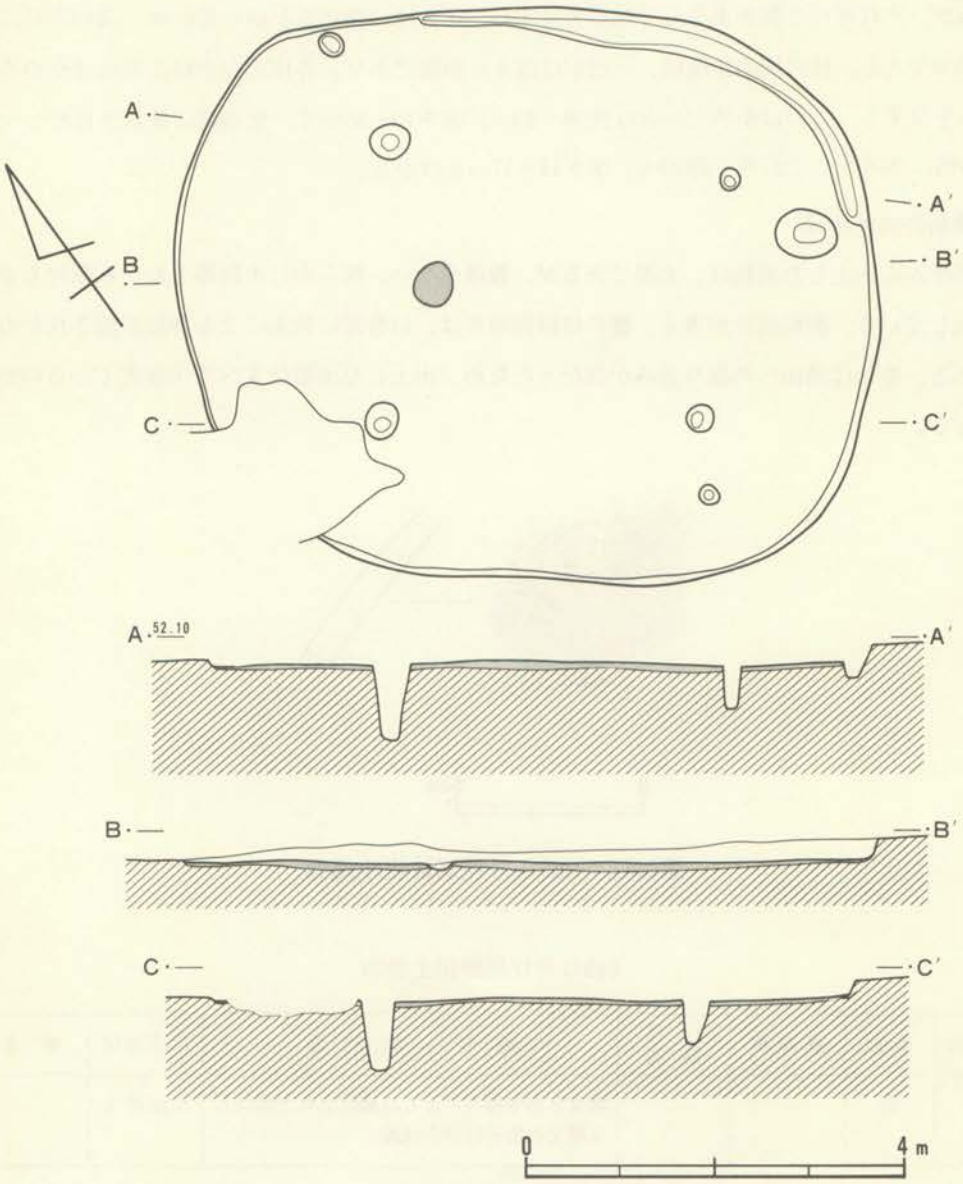
070号住居跡（第54・55図）

概要

本址は、071号跡の７ｍ程南側に位置する。西側のコーナーを木の根により破壊されている。東から西に傾斜する緩斜面上に位置するため、東側のコーナー付近の壁高は20cmをはかるが、西側の壁高はわずか５cmにすぎない。

構造

本址は、長軸7.54ｍ、短軸5.92ｍをはかり、長軸は北西を向く。長辺の壁は、強い胴張りが

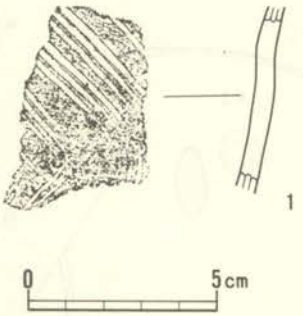


第54図　070号住居跡

認められ、全体的な形状としては楕円形を呈する。壁溝は、幅15～35cm、深さ10～16cmで、北東の壁から北東のコーナーを経て、南東の壁の途中で止まっている。この壁溝部分は、斜面上に位置する壁の立ち上がりの高い部分、すなわち、斜面の上側に当たる。炉跡は、住居跡の中央よりやや北西側に位置し、径42cmのほぼ円形を呈する。炉跡は西側の方が良く焼けており、火床と考えられるが、焼土の堆積はほとんど検出されなかった。床は、砂質ロームが少量混じる黒褐色土による貼床で、軟らかい。ピットは7個検出された。北側の壁際のピットは深さ8cmと浅く、木の根による可能性が強い。北及び西側に位置するピットは、共に径が38cmで、深さがそれぞれ78cm、74cmと深く、柱穴と考えられる。東側のコーナー付近のピットも、深さが44cmであり、柱穴であろうと考えられる。南側には、2個のピットが検出されたが、深さは、コーナーに近い方が35cm、中央寄りのピットが44cmであり、ほかの柱穴の位置から考えれば中央寄りのピットが柱穴である可能性が強い。南東の壁に近いピットは径50×65cm、深さ21cmである。

遺物の出土状況

本址からは、土器が約60片出土したが、床面近くからの出土は皆無で、すべて覆土中である。磨耗した胴部の細片が大半であり、器面調整等を知ることのできる土器片は少ない。出土土器の中には、土師器も混入している。



第55図　070号住居跡出土遺物

070号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	甕			3本で1単位をなすヘラ描沈線施文。	覆土	

072A号住居跡（第56・57図）

概要

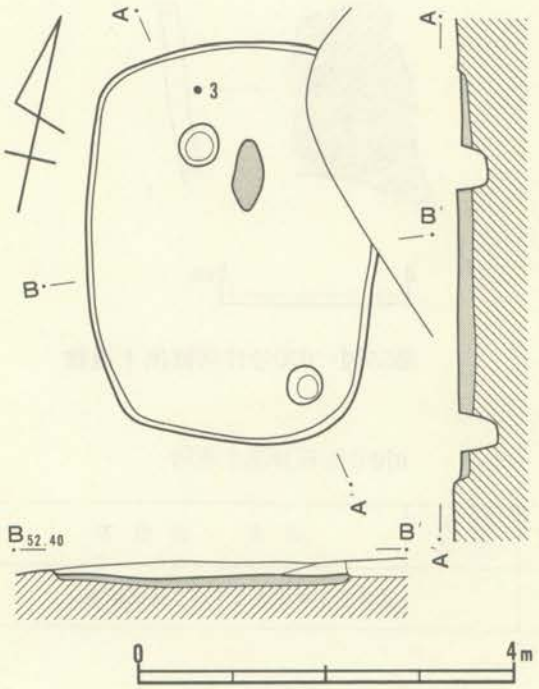
本址は、072C号跡に北東コーナーの一部が切られている。東から西に地山が傾斜する肩の部分に位置する。地山が削平されており、地山の上層には水田の床があったこと及び、この付近の地山は粘性が強いため地山の乾燥が激しくヒビ割れを起こし、覆土が堅かったことなどから、散水しながら調査を実施した。

構造

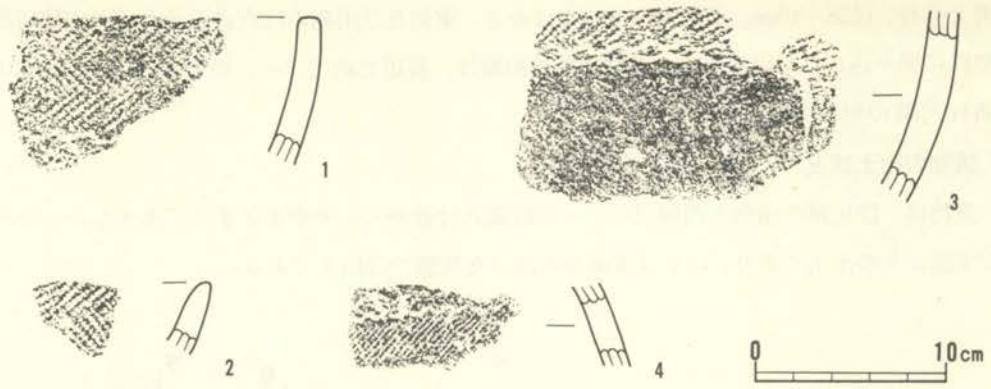
本址は、南北4.26m、東西約3.0～2.5mをはかり、長軸はほぼ北を向く。形状は不整の隅丸長方形を呈する。炉跡は、住居の中央よりやや北側に位置し、32×73cmと南北に細長い形状である。火床は東側の壁際を除いた全域で、良く焼けている。ピットは2個検出され、北西のピットは径42cm、深さ25cm、南東側のピットは径38cm、深さ32cmである。北東側及び南西側は精査したもののピットは検出されなかった。

遺物の出土状況

本址は、覆土の上部が削平されているため、すべて床面に近い状態で出土した遺物であるが、25片の土器が出土したにすぎない。水分を受けて、磨耗あるいは器表裏面の剥落したものが多い。



第56図　072A号住居跡



第57図　072A号住居跡出土遺物

072A号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	鉢			LR－RL－LRの羽状縄文。	覆土	
2	壺			LR－RLの羽状縄文。	覆土	
3	壺			縄文RのS縛りによる2段の結節文の上部にLR縄文。	床面直上	
4	壺			縄文RのS縛りによる2段の結節文の下部にLR縄文。	覆土	

古墳時代

003号住居跡（第58・59図）

概要

本址は、002A号跡の13m程北に位置する。調査区内において、標高の最も高い場所に位置し、また、古墳時代の住居跡としては最も東寄りに位置する。南側のコーナーは水路用のタンクが建設されているため、破壊されており、地山の一部が削平されている。

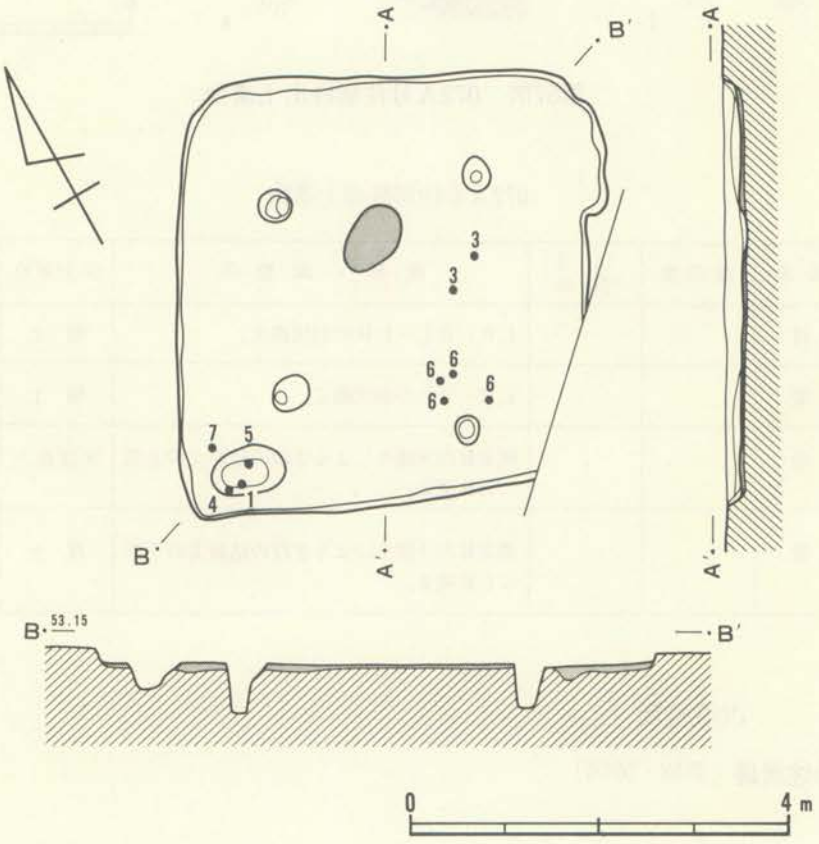
構造

本址は、4.43×4.36mのやや歪んだ方形を呈し、コーナーはやや丸みを有する。長軸は南西から北東方向に向く。炉跡は、住居中央よりやや北東寄りに位置し、径50×74cmの楕円形を呈する。焼土は厚さ7～8cm程で、非常に良く焼けている。床は、砂質ロームと黒褐色土の混合土による厚さ5～7cmの貼床で、全面が堅い。ピットは5個検出された。西側のコーナー寄りに位置するピットは径50×78cm、深さ27cmであり、貯蔵穴と考えられる。ほかの4個は柱穴と

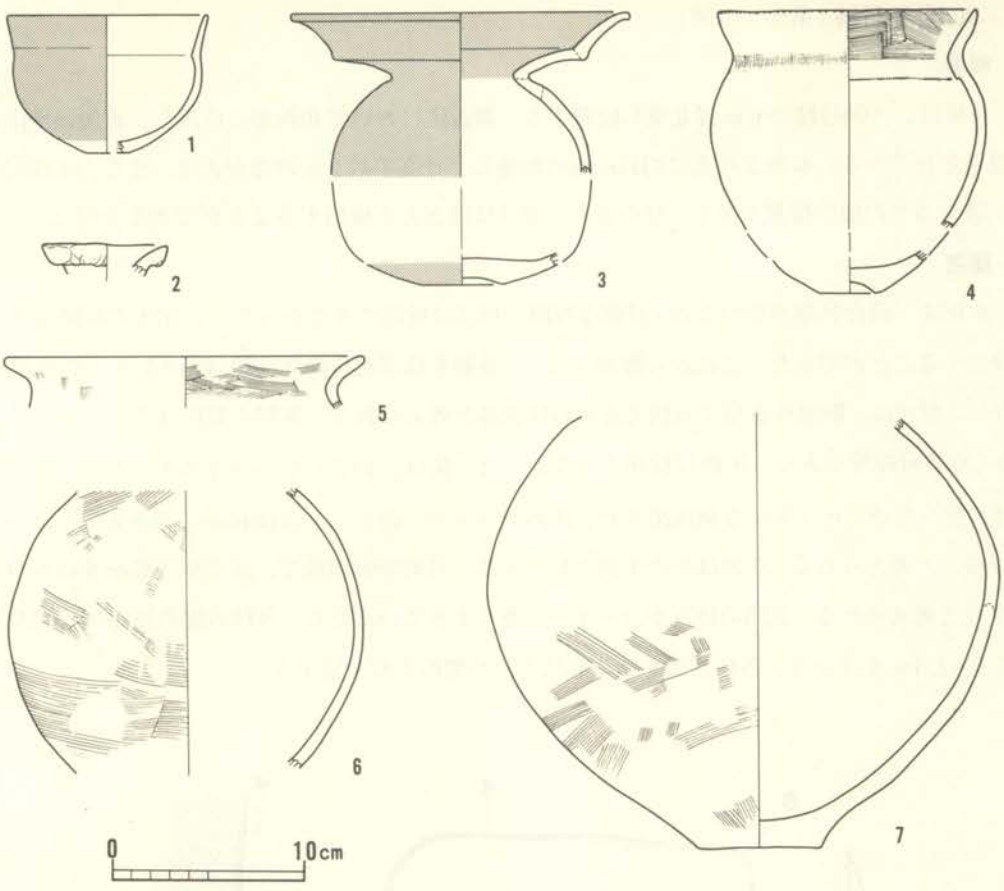
考えられ、径28～40cm、深さ34～52cmをはかる。東側及び南側の柱穴は、それぞれが住居跡の壁際に掘り込まれているため、各柱穴間の距離は、長辺で約 2.7m 、短辺で約 2.0m をはかり、各柱穴間 の形状は台形を呈する。

遺物の出土状況

遺物は、住居跡の南側と西側コーナーの貯蔵穴付近から、ややまとまって出土した。7だけが床面からの出土であり、ほかは床面から浮いた状態での出土である。



第58図　003号住居跡



第59図　003号住居跡出土遺物

003号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	埦	1/3	(10.6) 7.3	口縁部内外面ヨコナデ、体部ナデ(?)。	ピット 覆土	器面磨耗
2	ミニチュア	1/4	(3.4) —	手捏ね。	覆土	
3	壺	胴下半以外ほぼ完形	17.8 15.0(?)	口縁部・胴部ミガキ。内面ナデ。赤彩。	床面直上	
4	甕	1/2	(13.4) 14.8(?)	口唇部キザミ、頸部ハケメ、胴部ナデ(?)。 口縁部内面ハケメ。	覆土	器面磨耗
5	甕	1/6	(18.6) —	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ。	覆土	
6	甕	胴部1/5	— —	ハケメ後一部ナデ。内面ナデ。	床面直上	器面磨耗
7	甕	胴部完形	— —	胴部ハケメ後ナデ。内面ナデ。	床面密着	

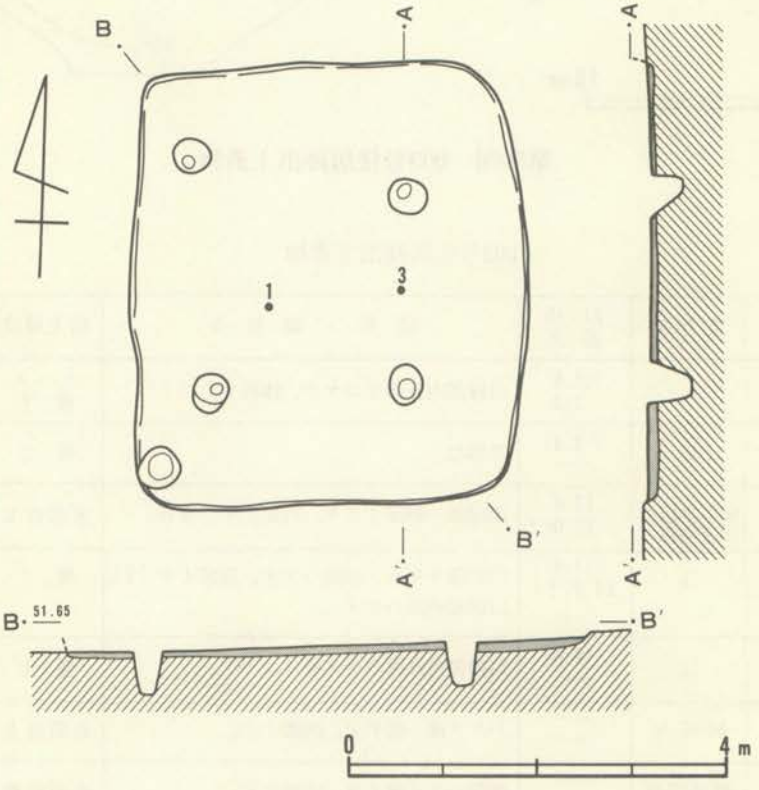
005号住居跡（第60・61図）

概要

本址は、006号跡の6m程北東に位置する。調査区において北西端に位置し、東側は地山が削平されている。本址より北に約15m程の距離に、比高差約9mの崖がある。また、床面にまで達する木の根の撹乱が多く、壁の立ち上がりはほとんど検出することができなかった。

構造

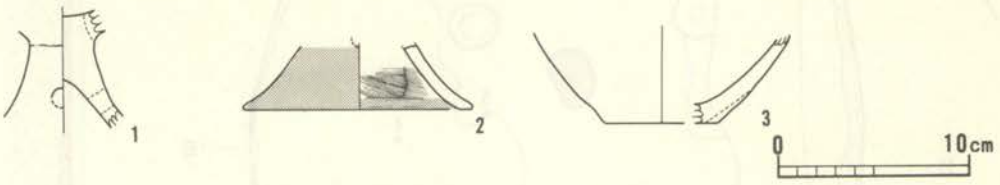
本址は、遺存状態が悪いため、詳細な規模や形状は確認できなかったが、貼床の範囲はほぼ検出することができた。これから推測すると、長軸をほぼ北に向け、約 4.5×4.2 mの規模を有し、形状は、胴張りを呈する隅丸方形の住居跡と考えられる。実際の規模はこれより若干大きくなる可能性がある。炉跡は検出されなかった。床は、砂質ロームを主体とした貼床で、全体に軟らかい。ピットは5個検出され、南西のコーナーのピットは径46cm、深さ8cmをはかり、貯蔵穴と考えられる。そのほかの4個のピットは、径約40cm前後で、深さ34～45cmをはかり、柱穴と考えられる。北側の柱穴がコーナーに寄りすぎているため、各柱穴間の距離は一定せず、2.0～2.4mをはかり、各柱穴間を結ぶ形状も、不整の方形を呈する。



第60図　005号住居跡

遺物の出土状況

本址は、覆土がほとんど撹乱を受けていたため、遺物の量は少なく、床面からの出土が大半である。撹乱部から出土した土器片も含めて、約60片が出土した。



第61図　005号住居跡出土遺物

005号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	高坏	脚部¼	― ―	脚部ミガキ（?）。内面ナデ(?)。4孔(?)。	床面直上	器面磨耗
2	高坏	脚部⅓	― ―	脚部ミガキ。内面ハケメ後ナデ。4孔。赤彩。	覆土	
3	甕	胴下部⅙	― ―	内外面ナデ。	覆土	

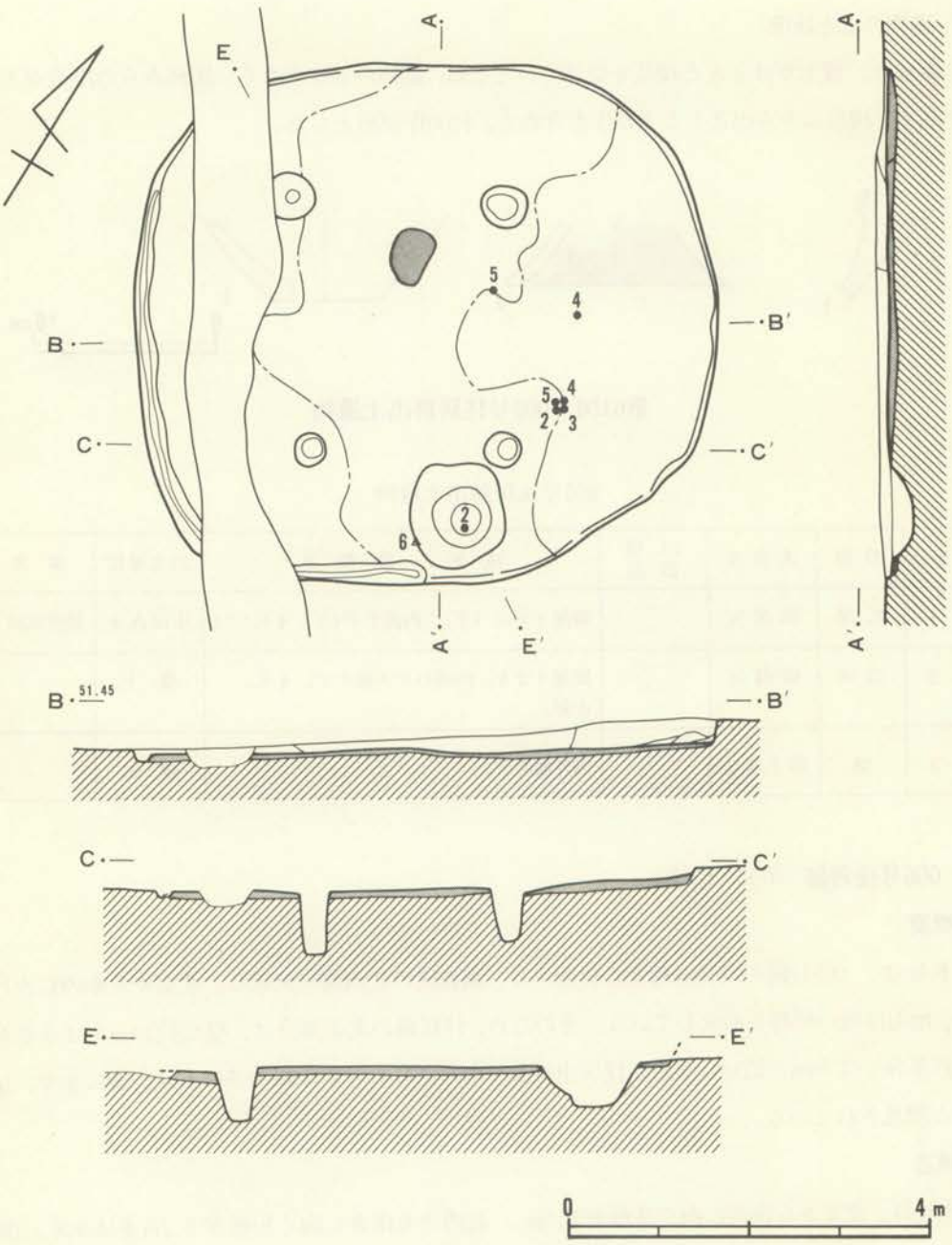
006号住居跡（第62・63図）

概要

本址は、009号跡の1.5m程北に位置する。調査区の北西端に位置し、北東から南西にかけて、地山は緩い傾斜を形成している。そのため、住居跡の北東部分は、壁高約20cmをはかるが、南西部分では5cmと低い。また、住居中央より南西側においては幅0.5～1mの溝により、床面が撹乱されている。

構造

本址は、北東から南西に向く長軸が6.5m、北西から南東に向く短軸が5.7mをはかる。南西の壁、コーナーでは隅丸方形を呈するが、北東の壁、コーナーは丸みが強く楕円形を呈する。東側コーナーは、明確に検出できなかったが、全体の形状としては、隅丸長方形を呈するものと考えられる。なお、南東の壁面の中央より、南のコーナー、更に西のコーナーの一部までは、幅15～26cm、深さ約8cmの壁溝が構築されている。この部分は地山の傾斜の低い位置にあたる。炉跡は、住居中央より北西側に位置し、径45×60cmの不整形を呈し、深さは約10cmをはかる。焼土は、部分的に確認されただけである。床は、黒褐色土と砂質ロームの混合土による厚さ約



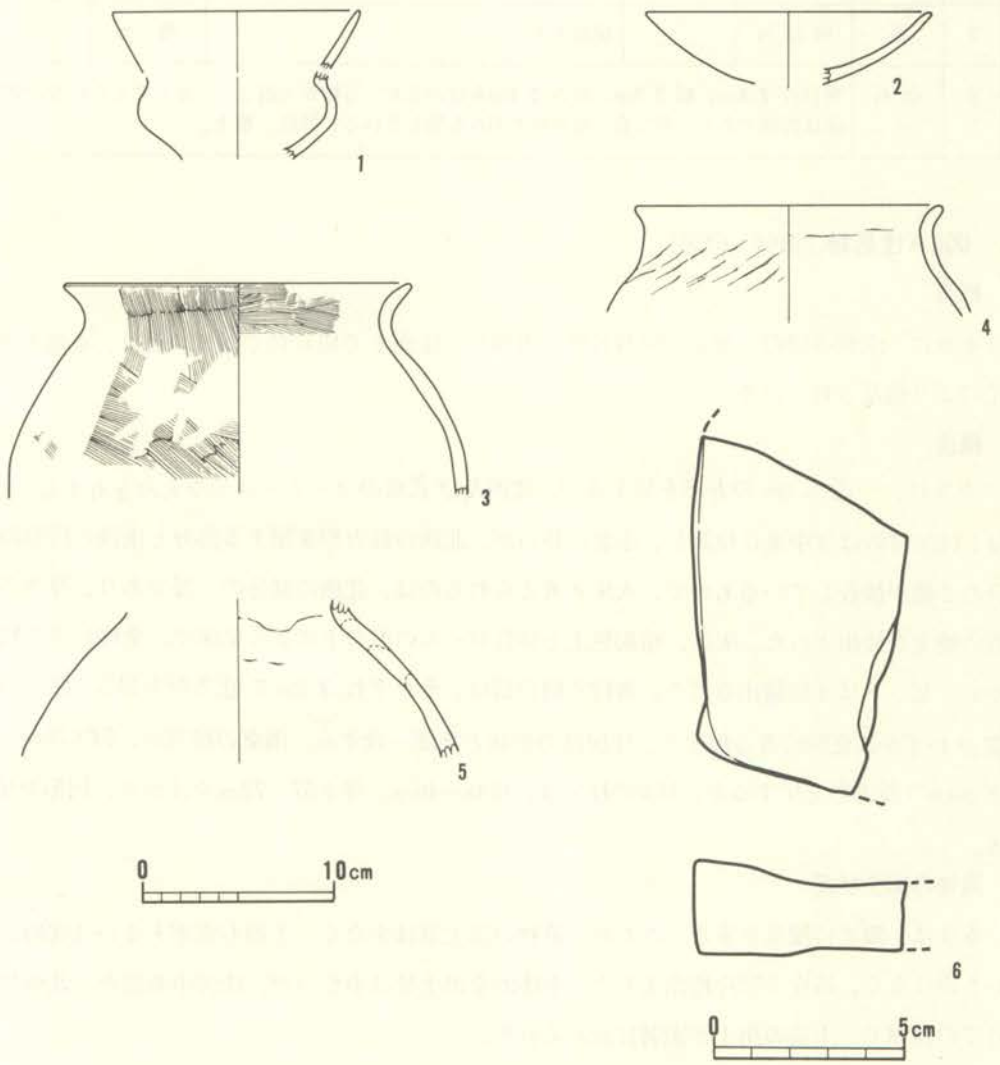
第62図　006号住居跡

6 ～8 cmの貼床である。住居跡のほぼ中央から北西側にかけての範囲は、特に堅く踏み固められており、貼床も周囲の砂質ロームブロックに比べ、ブロックが大きい。ピットは5個検出された。南東の壁際のピットは、径約 1.1m の不整形を呈し、深さは47cmをはかり、貯蔵穴と考えられる。ほかのピットは、径34～50cmで、深さは56～68cmをはかり、柱穴と考えられる。各

柱穴の距離・形状は 2.2×2.7 m の長方形を呈するが、住居跡と柱穴間の長辺は直交する。

遺物の出土状況

土器が約200片程出土したが、ほとんどが覆土中からの出土で、床面及び床面直上から検出されたものは少ない。炉跡付近より出土したハケメを有する甕の破片は、ほぼ床面に密着して検出されたが、復元するには至らなかった。また、貯蔵穴の覆土からは約15片の甕の破片が出土したが、器面はナデによる調整痕が認められた。土器は、南西の壁側は攪乱されていたこともあるが、住居中央より北東部にかけての範囲から多く出土した。



第63図　006号住居跡出土遺物

006号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坩(?)	¼	(12.8) ——	内外面ミガキ。	覆土	
2	高坏	坏部¼	(15.0) ——	口縁部ヨコナデ後ミガキ。内面ミガキ。	ピット 覆土	
3	甕	⅛	(18.0) ——	口縁部内外面ハケメ、胴部ハケメ後一部ナデ。	覆土	
4	甕	½	(16.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	覆土	
5	壺	胴部¼	—— ——	胴部ナデ。	覆土	
6	砥石	現存長 7.8cm、幅 5.7cm、厚さ 2.4cmをはかるが、½程が欠損していると考えられる。使用面は両面であり、共に良く使われて凹みを呈している。砂岩。覆土。				

008A住居跡（第64・65図）

概要

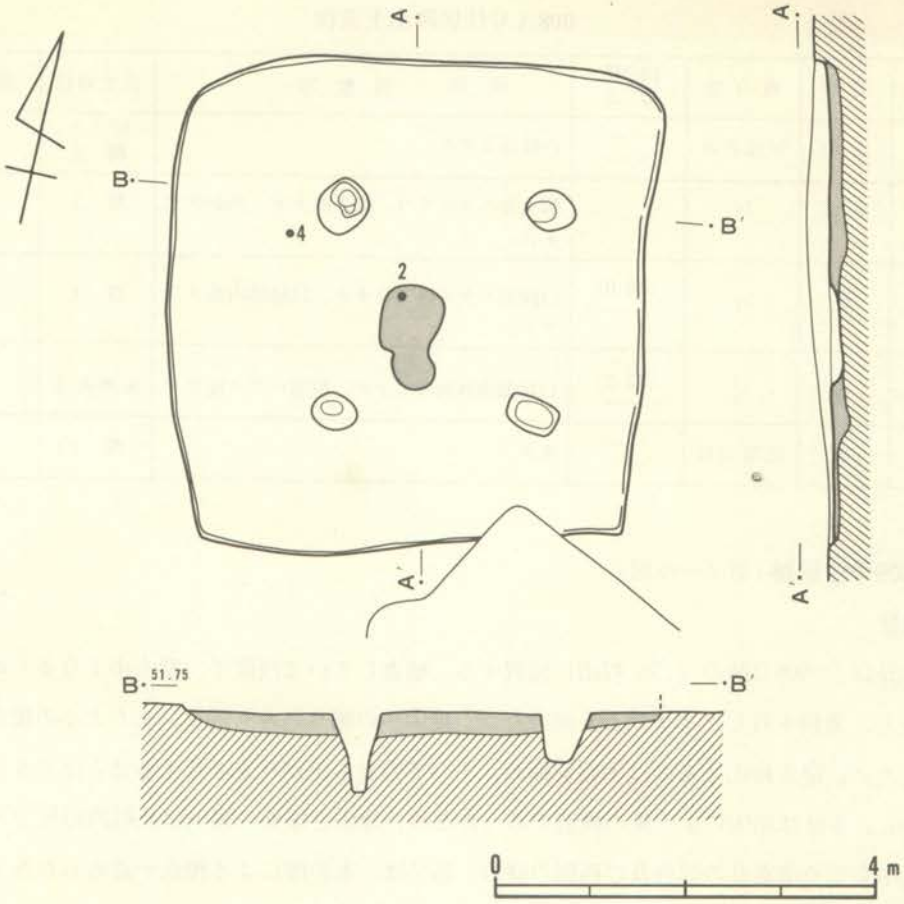
本址は、南側の壁の一部が 008B 号跡と重複し、床面まで切られている。更に、東側も木の根により攪乱されている。

構造

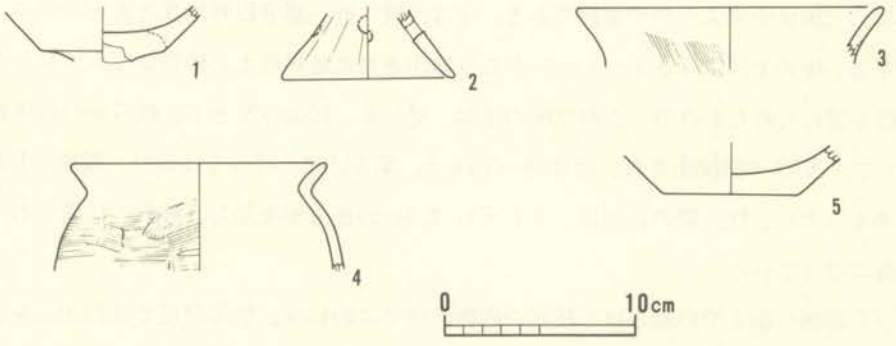
本址は、一辺 5.0m の方形を呈するが、北西及び北東のコーナーはやや丸みを有する。炉跡は、住居跡のほぼ中央に位置し、南北に長いが、北側の長方形を呈する部分と南側の円形の部分の2個が接合しているもので、火床と考えられるのは、北側の部分の一部であり、厚さ7cm程の焼土が検出された。床は、暗褐色土と砂質ロームの混合土による貼床で、全体にやや軟らかい。ピットは4個検出された。各柱穴間の辺は、それぞれ 2.2m で正方形を呈し、柱穴の位置がわずかに東側に寄る程度で、住居跡の形状とほぼ一致する。南東の柱穴は、54×35cm、深さ50cmの長方形を呈するが、ほかの柱穴は、径38～46cm、深さ57～72cmをはかり、円形を呈する。

遺物の出土状況

本址は、覆土に攪乱が多かったため、遺物の出土量は少なく、土器も完形あるいは完形に近いものはなく、破片で70片程出土した。全体的な出土量は少ないが、住居中央部から北側にかけての範囲で、土器の出土が顕著に認められた。



第64図　008A号住居跡



第65図　008A号住居跡出土遺物

008A号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	高坏	坏部のみ	— —	内外面ミガキ。	ピット 覆土	
2	高坏	⅓	— —	脚上部ヘラケズリ、脚下部ナデ。内面ナデ。4孔。	覆土	
3	甕	½	(16.0) —	口縁部ハケメ後ヨコナデ。口縁部内面ヨコナデ。	覆土	
4	甕	¼	(13.2) —	口縁部内外面ヨコナデ。胴部ハケメ後ナデ。	床面直上	
5	甕	底部完形	— —	ナデ。	覆土	

009号住居跡（第66～68図）

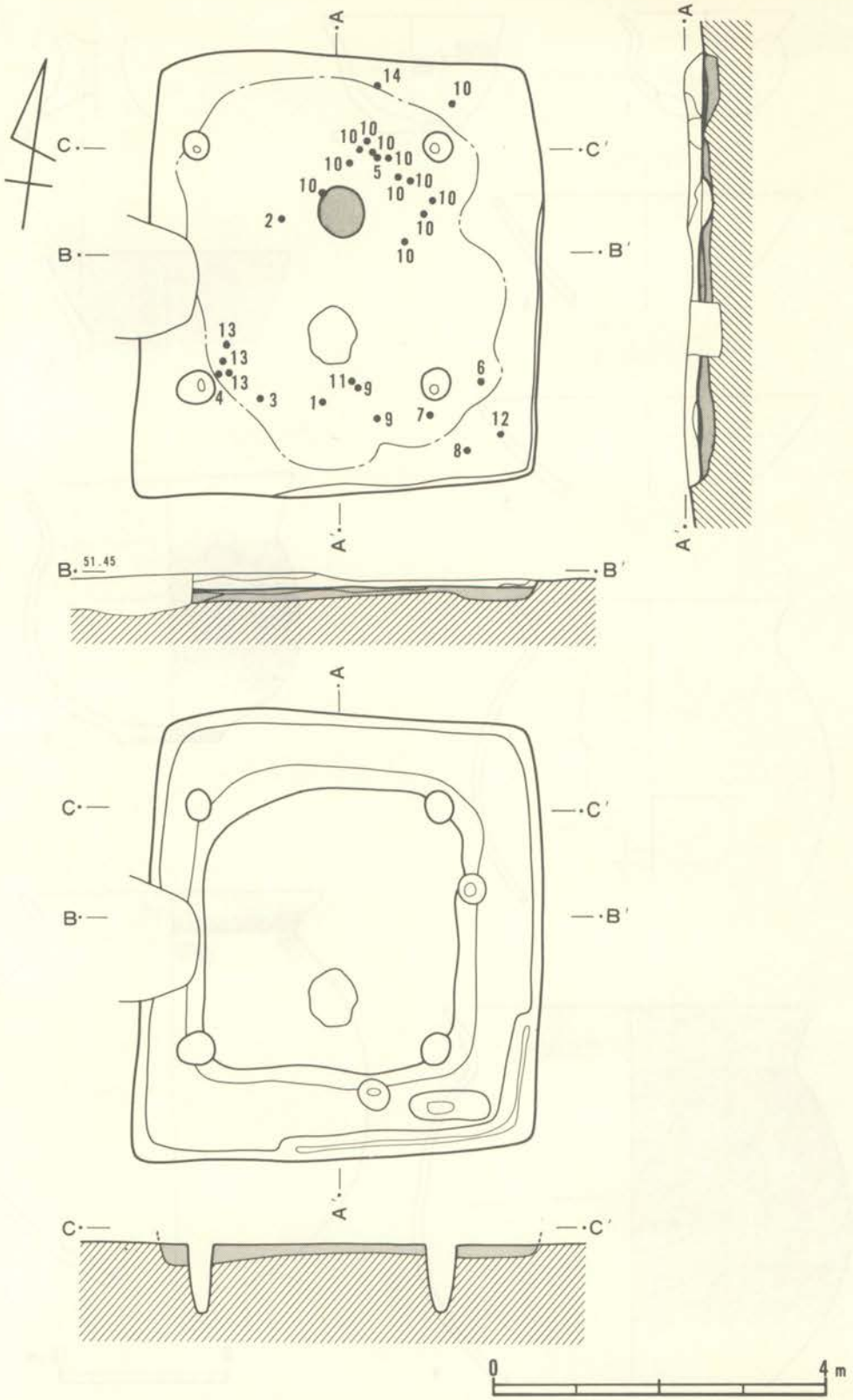
概要

本址は、006号跡の1.5m程南に位置する。精査している段階で、覆土中より多くの土器が出土し、遺物を残したまま精査を続けたが、地山への掘り込みも浅く、また大小の攪乱も多かったため、壁を検出するのは困難を極め、すべての立ち上がりをとらえることはできなかった。しかし、本址は貼床による床の構造であったため、地山と床面の識別は比較的容易であった。住居中央やや南寄りの部分及び西側の壁の一部には、木の根による攪乱が認められた。

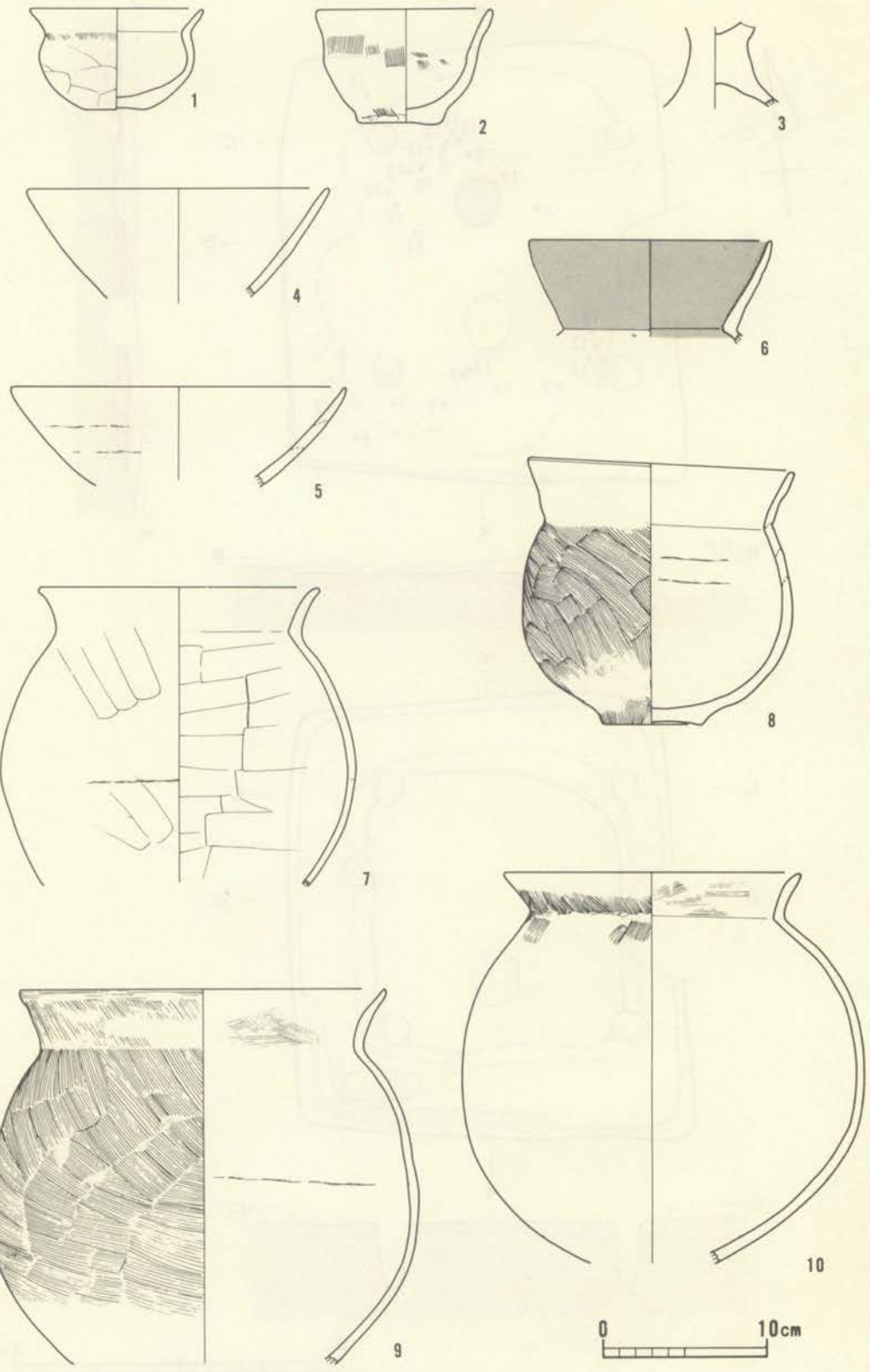
構造

本址は、南北方向の長軸5.21m、東西方向の短軸4.78mをはかり、形状は方形を呈し、長軸はほぼ北を向く。炉跡は、住居中央よりやや北に位置し、64×58cmの楕円形を呈する。深さは約10cmで、火床は中央よりやや東側である。床は、壁に近い部分以外はほとんどが堅い。この堅い範囲は、床の上部に厚さ1～5cmにわたり検出された暗褐色土と砂質ロームブロックの混合土が踏み固められたもので、この貼床の下は、更に5～10cmの厚さで、軟らかい貼床が確認された。ピットは4個検出され、径は38～32cmで、深さは82～74cmをはかり、規模、形状とも柱穴と考えられる。柱穴間の各辺は、それぞれ2.8mの正方形を呈し、柱穴の位置が若干中央より西側に寄っている。

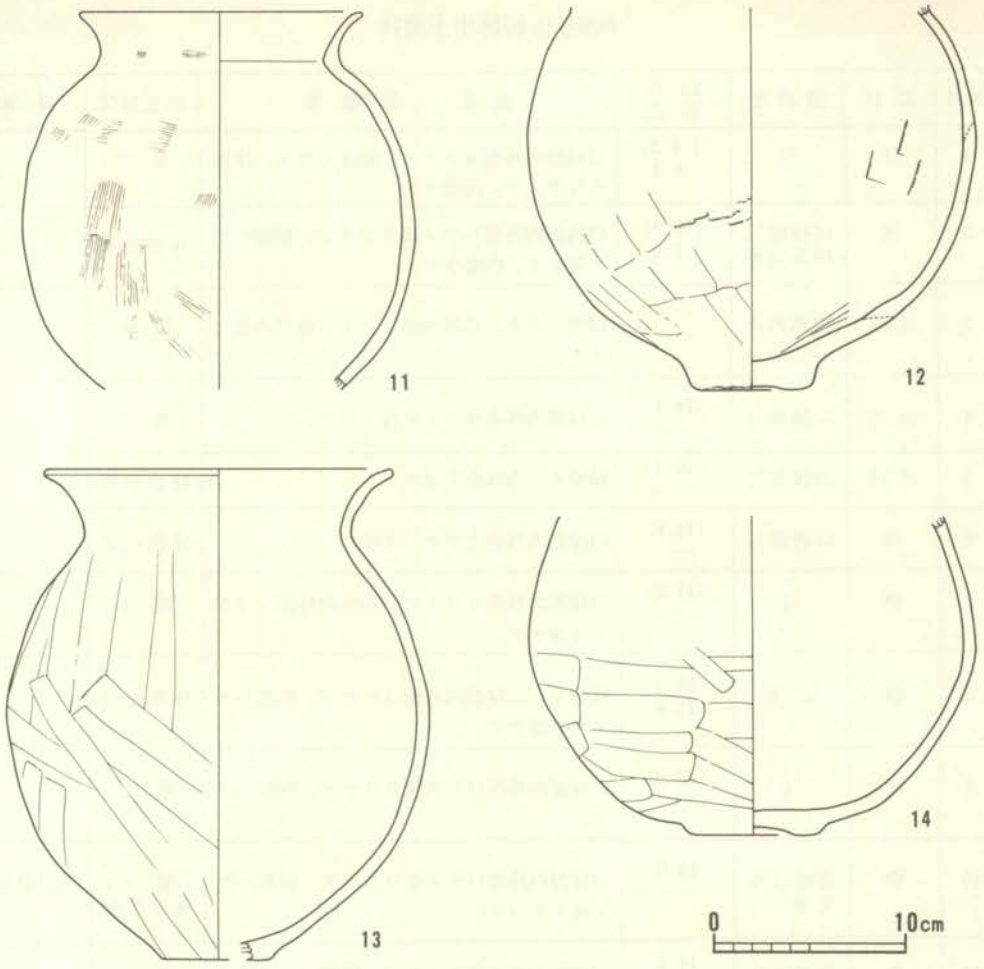
床面から荒掘り面までの深さは、柱穴の内側部分では約10cm、壁際付近では約20cmをはかり、中央部が約10cm高く構築されている。この荒掘り面において検出された3個のピットは、深さが5～10cmである。また、南東コーナー付近で、幅約30cm、深さ2～3cm程の浅い溝が検出された。壁際の床面は軟らかく、土層断面からも明確に把握することはできなかったが、壁溝の可能性もある。



第66図　009号住居跡



第67図　009号住居跡出土遺物(1)



第68図　009号住居跡出土遺物(2)

遺物の出土状況

本址から出土した遺物は、礫が数点のほか、約 300片程の土器片である。土器は覆土からのものが多いが、床面からも出土した。全体の傾向としては、北壁から炉跡にかけての一群、南西の柱穴付近より出土した一群、更に、南東の柱穴付近より出土した一群というように大きく3群に分けることができる。10は北壁付近の土器群で、約 1.2×2.0 m の範囲から出土したものが復元されたものであるが、破片は、床面より7cm程浮いているもの、床面に密着しているものと、それぞれが異なる。南西の柱穴の東側の土器は、床面から10cm程浮いている。また、南東のコーナー近くから出土した8・12は床面上で出土した土器で、8は完形のまま床に横倒しの状態で出土した。南東の柱穴の周囲から出土した土器は床面より、約5～10cm浮いた状態で出土した。

009号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坏	2/3	(4.3) 6.2	口縁部内外面ヨコナデ、頸部ハケメ、体部ヘラケズリ。内面ナデ。	覆土	
2	椀	口縁部1/6 胴部完形	(10.8) 7.0	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。内面ナデ。	床面密着	
3	高坏	脚部のみ	— —	脚部ミガキ。坏部内面ミガキ、脚部内面ナデ。	覆土	
4	高坏	口縁部1/3	(18.4) —	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ。	覆土	
5	高坏	口縁部2/3	(20.4) —	輪積み。内外面ミガキ。	床面密着	
6	坩	口縁部1/4	(14.8) —	口縁部内外面ミガキ。赤彩。	床面直上	
7	甕	1/3	(17.2) —	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ヘラケズリ後ナデ。	覆土	
8	甕	完形	16.3 15.6	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後一部ナデ。	床面密着	
9	甕	1/4	(22.0) —	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ。	覆土	
10	甕	底部以外完形	18.0 —	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ（?）。	覆土・ 床面密着	器面磨耗
11	甕	底部以外完形	14.8 —	口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	覆土	
12	甕	胴部1/4	— —	胴部ヘラケズリ後ナデ。	床面密着	
13	甕	1/3	(18.0) 25.3	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。	覆土	
14	甕	1/4	— —	胴上部ナデ、胴下部ヘラケズリ。	床面密着	

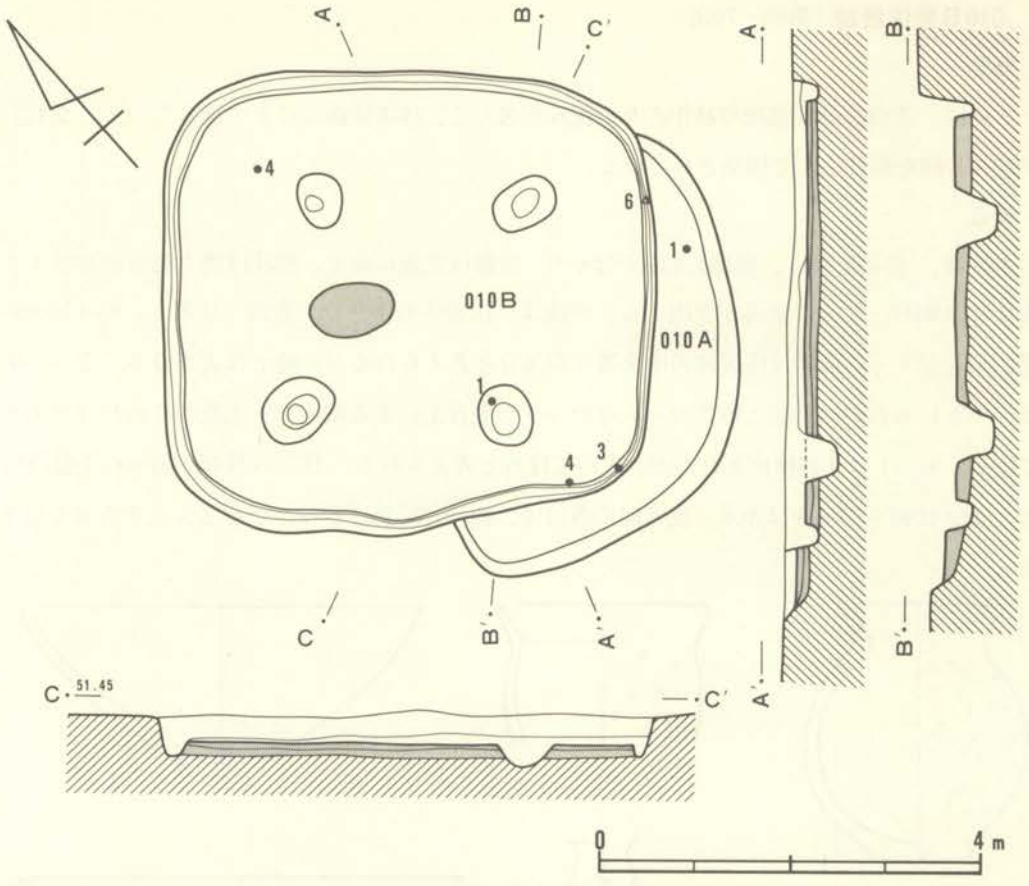
010A号住居跡（第69・70図）

概要

本址は、大半が010B号跡により切られている。

構造

本址は、東側及び南側の遺存している部分から推測すると、約3.5×4.5m程の規模の隅丸方形を呈し、長軸はほぼ北を向く。炉跡及びピットは検出されなかった。本址を切って構築さ



第69図　010A・B号住居跡

れている010B号跡の荒掘り面が本址より10cm程低いため、本址にピットが存在していたとしても、その深さは、22cmを越えないものと考えられる。遺存していた床面は、上部が堅く、下部はやや軟らかい。

遺物の出土状況

本址は、010B号跡にその大半が削平されており、遺存部が狭いため、出土した遺物は非常に少なく、10片程の土器と礫が1点である。すべての遺物は床面より5～10cm程浮いた状態で出土した。

010A号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	壺	完形	8.5 13.3	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後ミガキ。底部木葉痕。	覆土	

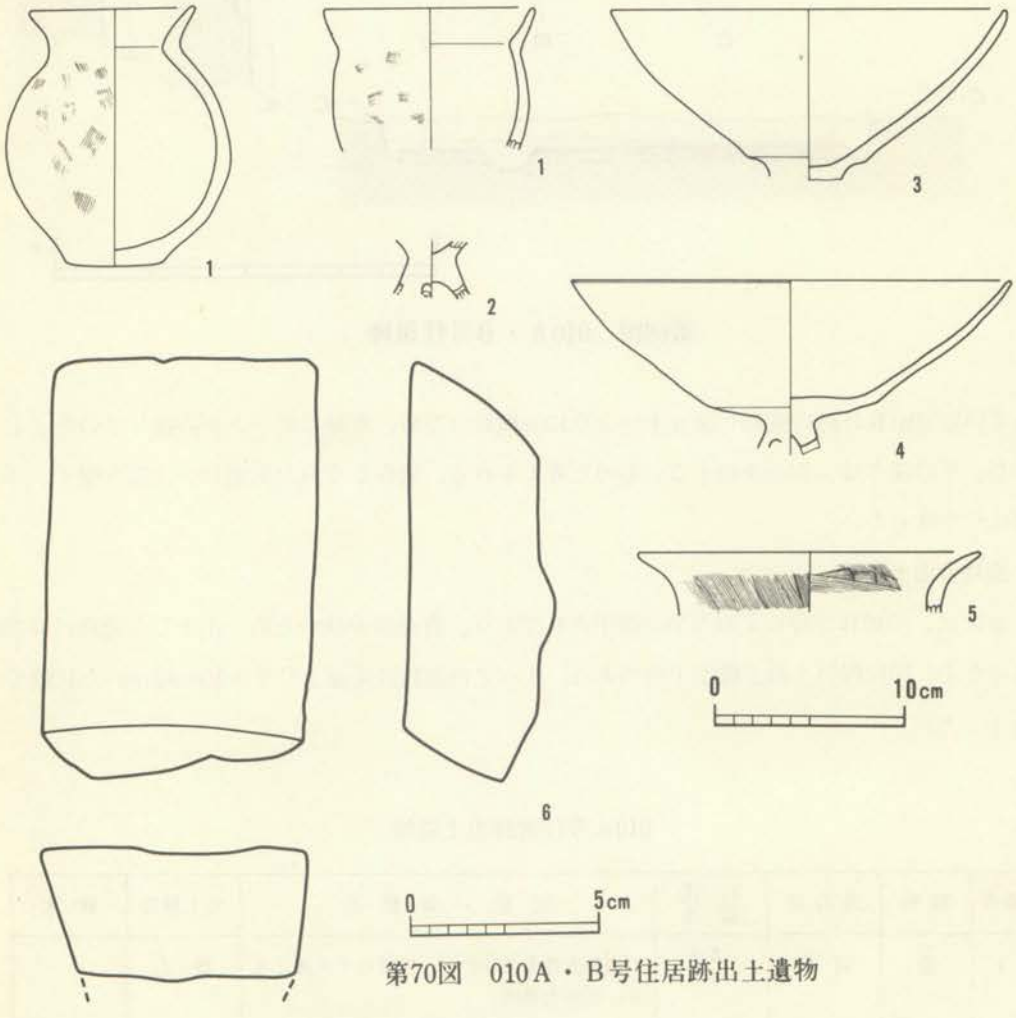
010B号住居跡（第69・70図）

概要

本址は、北側部分は畑地の耕作のため攪乱が著しく、ほぼ床面近くまで達している。なお、010A号跡を掘り込んで構築されている。

構造

本址は、長軸5.20m、短軸4.83mをはかり、長軸は北西に向く。形状は隅丸長方形を呈する。本址には幅14～25cmの壁溝が全周する。炉跡は、住居中央よりやや北西に位置し、95×58cmの楕円形を呈する。火床は住居跡の中央寄りの部分と考えられるが、焼土はあまり多くない。床は、厚さ10cm程の暗褐色と砂質ロームブロックの混合土による貼床で、上面約5cm程はきわめて堅い。ピットは4個検出されたが、すべて柱穴と考えられる。柱穴は径46～62cmの不整円形で、深さは40～50cmをはかる。柱穴間の各辺は、約2.2mをはかり、やや歪んだ正方形を呈する。



第70図　010A・B号住居跡出土遺物

遺物の出土状況

耕作による攪乱のため、覆土の大半が失なわれており、遺物は、約50片の土器と5点の礫が出土したにすぎない。床面の土器は、北側の柱穴付近及び南側の柱穴付近から10片程出土し、4は4.7m程離れた土器片が接合したものである。また、1は南側の柱穴の壁に密着の状態で出土した。これ以外の遺物は、床面より浮いた状態で出土した。

010B号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	甕	¼	(11.0) —	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後ミガキ。	ピット壁際	
2	高坏	脚部⅔	— —	脚部ミガキ。4孔。	覆土	
3	高坏	坏部完形	20.8 —	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ミガキ。 内面ナデ。	床面直上	
4	高坏	坏部⅓	(23.0) —	坏部内外面ミガキ。脚部ミガキ。3孔。	床面密着	
5	甕	口縁部⅛	(18.0) —	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ。	覆土	
6	砥石	長さ9.3cm、幅6.9cmをはかり、長方形を呈する。表面と両側面が使用面で、断面は台形を呈する。砂岩。覆土。				

011号住居跡（第71・72図）

概要

本址は、010A号跡の1.5m程南に位置する。付近は攪乱が多く、覆土の大半が破壊されており、地山への掘り込みも浅いため、形状の確認はほとんど床面のみで行った。

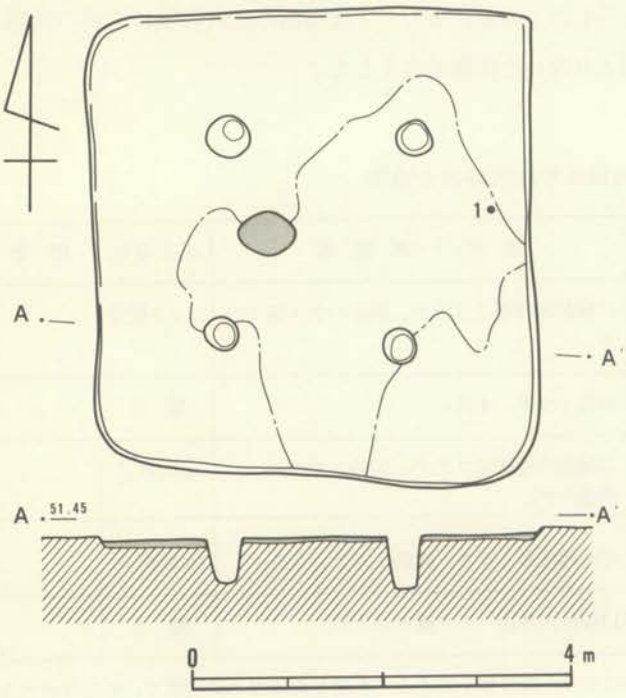
構造

本址は、長軸4.94m、短軸4.63mをはかり、長軸はほぼ南北を向く。南西及び南東のコーナーは隅丸を呈し、北西及び北東のコーナーは直角に近い形状を呈する。炉跡は、住居中央の西寄りに位置し、47×62cmの楕円形を呈するが、焼土ブロック等は検出されず、焼土粒子が認められたのみである。床は、貼床で中央より南側及び東側部分が堅い。ピットは4個検出され、すべて柱穴と考えられる。径35～43cm、深さは44～54cmをはかる。柱穴間の距離は、長辺が2.15m、短辺が1.90mをはかり各辺を結ぶと、長方形を呈する。

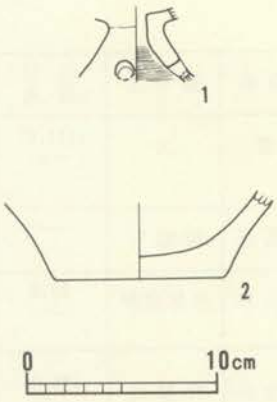
遺物の出土状況

本址から出土した遺物は、礫が数点と土器が約40片で、土器片は細片が多く、復元あるいは

実測可能なものは非常に少ない。1は床面から出土した土器で、器形を推測できる唯一のものである。



第71図　011号住居跡



第72図　011号住居跡出土遺物

011号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	器台	裾部以外 脚部完形	—— ——	脚部ミガキ。受部内面ミガキ、脚部内面ハケメ。3孔。	床面密着	
2	甕	底部完形	—— ——	ヘラケズリ後ナデ。	覆土	

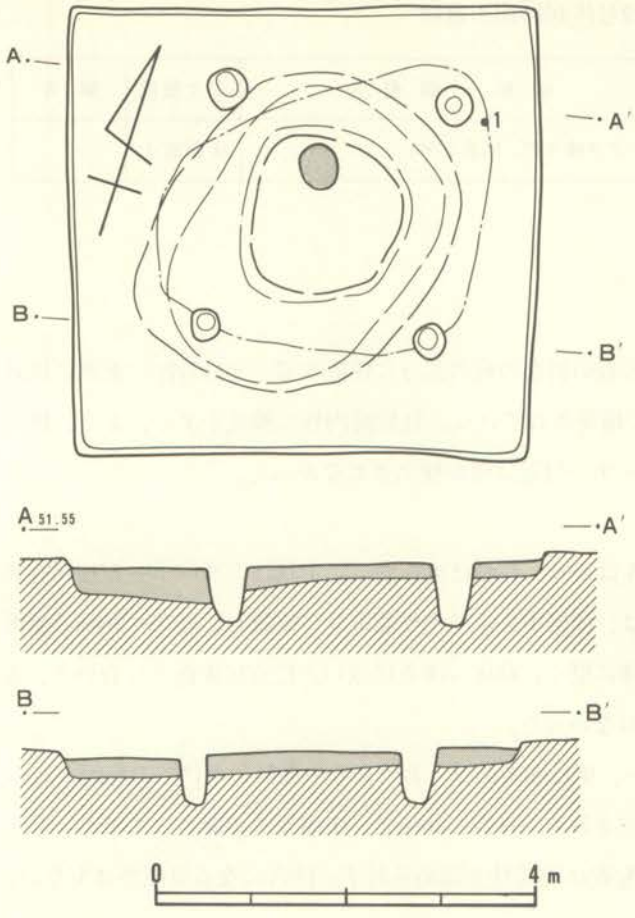
012号住居跡（第73・74図）

概要

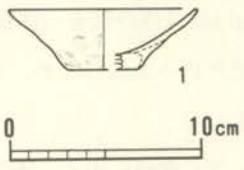
本址は、011号跡の2m程西に位置する。付近は攪乱が多く、覆土の大半が破壊されていた。

構造

本址は、長軸4.90m、短軸4.70mをはかり、長軸はほぼ東西を向く。各コーナーはほぼ直角である。炉跡は、住居中央よりやや北側に寄った所に位置し、径が48cmで、深さは9cmをはか



第73図　012号住居跡



第74図　012号住居跡出土遺物

る。形状はほぼ円形を呈する。焼土粒子が検出されたのみで、焼土ブロックは認められなかった。床は、柱穴の内側部分が特に堅い。ピットは4個で、すべて柱穴と考えられる。柱穴間の各辺は、ほぼ 2.5m 前後であり、各辺を結ぶと正方形に近い形状を呈するが、住居跡内における柱穴の位置はかなり北側に片寄る。

荒掘り面の形状は、住居中央の径約 1.6m の範囲が最も高く、床面より8cm、その周囲の楕円形の範囲が最も低く、床面より20cmをはかる。

遺物の出土状況

覆土の大半が失なわれており、出土した遺物は、土器が約20片だけである。実測可能の土器は1のみであるが、床面から5cm程浮いた状態で出土した。このほかには、甕、坩、器台の細片が出土している。

012号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	鉢	1/6	(9.9) 3.1	ハケメ後ナデ。内面ナデ。	床面直上	

014A号住居跡（第75・76図）

概要

本址は、地山が東から西に傾斜する緩い斜面の肩の部分に位置する。011号跡の東側に位置し、014B号跡の壁を一部掘り込んで構築されている。住居跡内外に攪乱が多く、また、地山への掘り込みも浅いため、北西のコーナー付近は壁が検出されなかった。

構造

本址は、東西4.30m、南北4.22mをはかり、長軸は東を向く。形状は、コーナーがほぼ直角を呈する方形の住居跡である。炉跡は、住居中央よりやや北寄りに位置し、径70×96cmの東西に長い楕円形を呈する。床面は、全体に堅く、貼床の深さは浅い。柱穴は床面上において、入念に精査したにもかかわらず検出されなかった。

荒掘り面は、北東と北西のコーナー、更に南西のコーナーから中央部にかけての範囲が高い。この貼床の下からはピットが5個検出された。径22～40cmで、床面からの深さにすると、21～55cmをはかる。これらのピットは、配置に規則性が認められず、柱穴になる可能性は少ない。

遺物の出土状況

本址から出土した遺物は、約70片程であり、完形あるいはほぼ完形の土器が多い。これらの土器はほとんどが床面から出土したものであり、特に南西部のコーナー部分と炉の西側から出土したものが多い。4は完形のまま炉の上面より出土した。なお、炉跡の北西寄りの床面直上より石鏃が出土した。

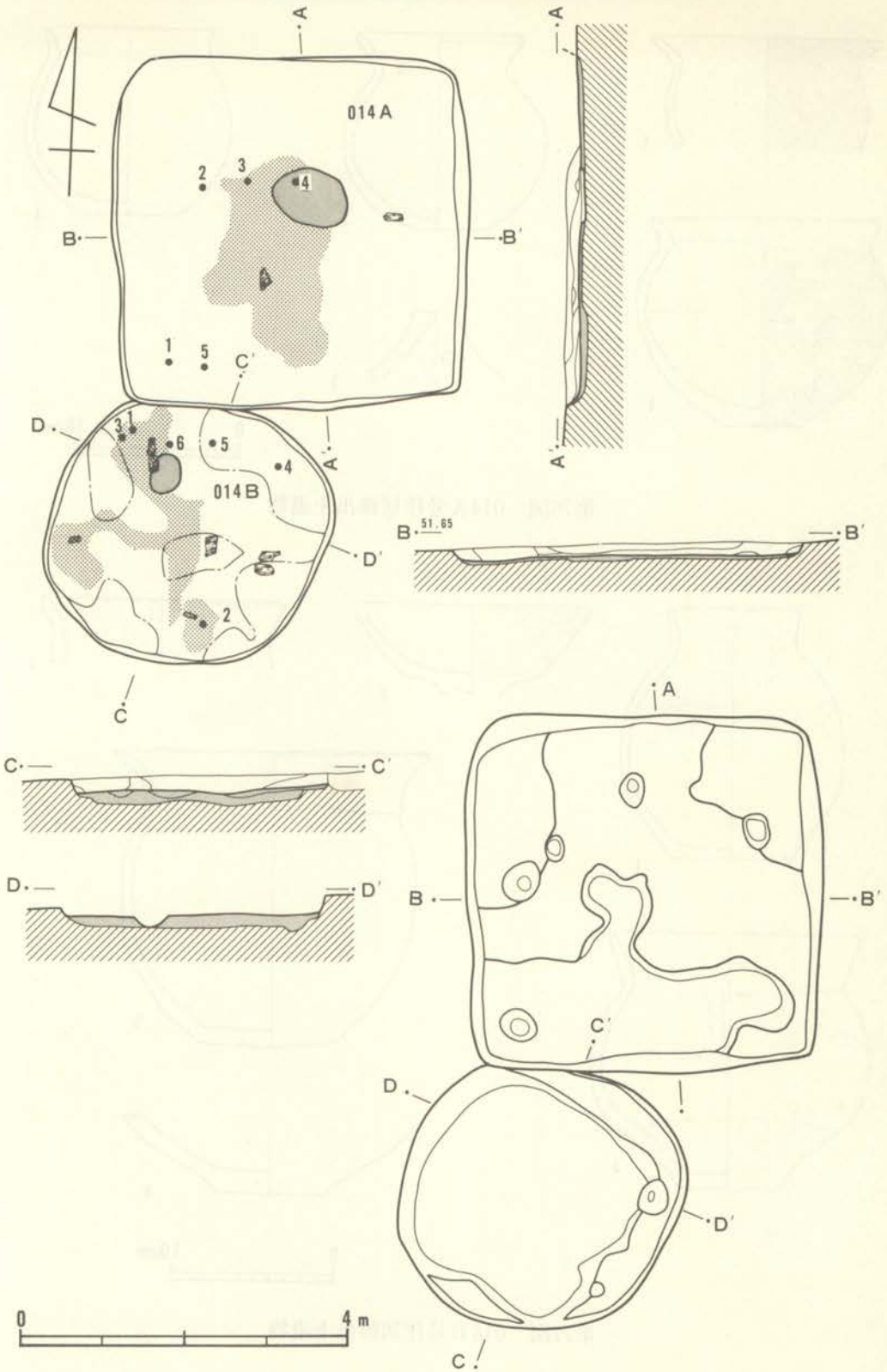
014B号住居跡（第75・77図）

概要

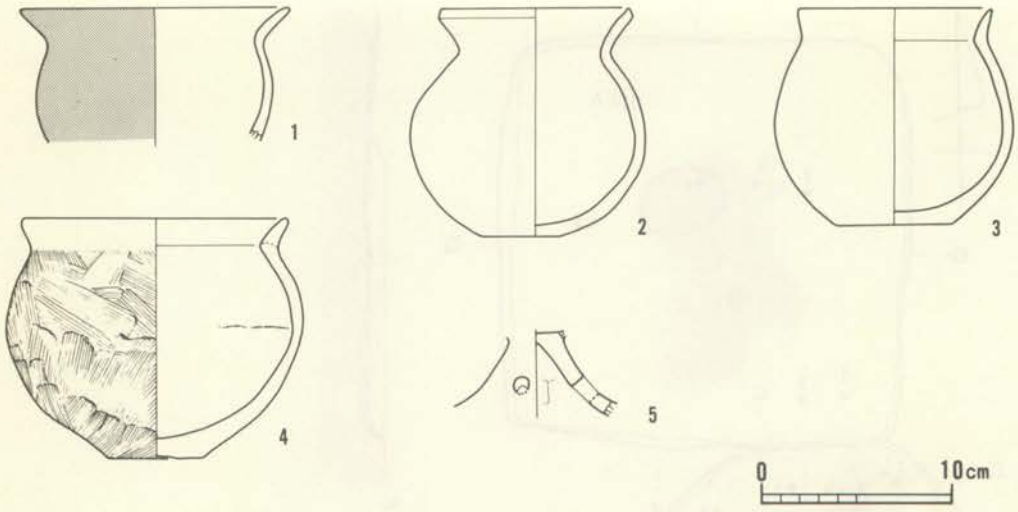
本址は、014A号跡の南側に位置し、北側の壁の一部を切られている。覆土中に攪乱が顕著に認められる。しかし、攪乱等が著しい割には覆土中に焼土粒子及び炭化粒子が多量に存在していたため、住居跡の検出は容易であった。

構造

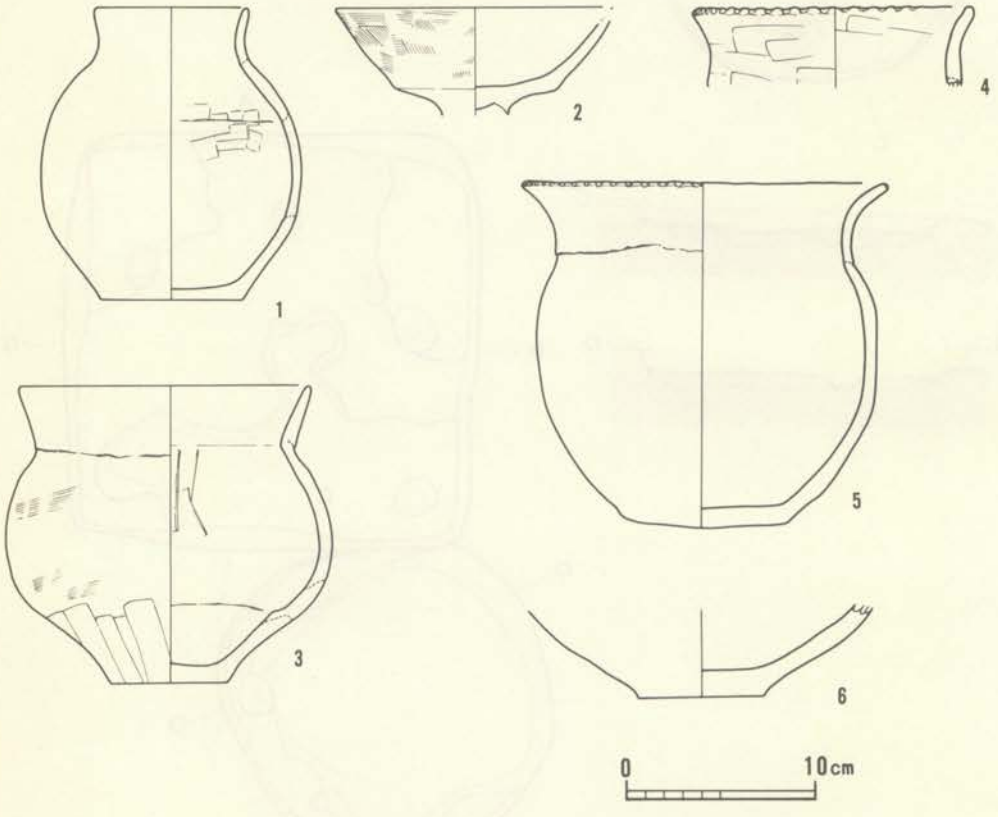
本址は、長軸3.27m、短軸3.21mをはかり、胴張りの隅丸方形を呈する。長軸はほぼ南北を向く。炉跡は、42×48cmの楕円形を呈し、住居中央より北西寄りに位置する。掘り込みは7cm



第75図　014A・B号住居跡



第76図　014A号住居跡出土遺物



第77図　014B号住居跡出土遺物

程である。焼土粒子が検出されただけであり、火床の範囲もさだかではない。本址は焼失家屋と考えられ、床面までの覆土中には、焼土粒子、炭化粒子が多量に認められた。床面上でも、特に住居西側において、顕著に認められた。床面は、黒褐色土の上に砂質ローム粒子を多量に含む黒褐色土を踏み固めた貼床により構築されている。堅い貼床の範囲は、炉跡の東側と西側、及び中央部、更に南東及び南西の壁際の部分で、特に壁際の貼床は顕著であった。床面において、ピットは検出されなかった。

荒掘り面は、西側以外の壁際にテラス状の高い部分があり、中央が低い。東側のテラス部分には径35cm、深さ7cmのピットが検出された。

遺物の出土状況

本址からは、約60片の土器が出土した。このうち、覆土中のものが約40片であり、残りは床面からの出土である。床面から出土した土器は壁際で顕著に認められた。特に北側の壁と炉跡の間からは、1・3・5・6が出土した。1・3は共に完形ではないが、床面から出土した。5は検出時はかなり細かい破片であったが、ほぼ完形に近い状態に復元できた。6は、検出時では口縁部が欠損するだけの大きな破片であったが、二次加熱により器面の遺存が悪く、接合することができなかった。西側の壁付近の床面道上より出土した石器は、敲いた面と磨った面の両方を有する。

014A号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	鉢	口縁部1/6	(14.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ、体部ミガキ。内面ナデ。赤彩。	床面直上	
2	壺	2/3	(10.0) 12.0	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ナデ後一部ミガキ。内面ナデ。	床面密着	
3	甕	1/2	(10.2) 11.4	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ミガキ。	床面密着	
4	甕	完形	13.9 12.5	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後一部ナデ。	床面密着	
5	高坏	脚部1/2	—— ——	ミガキ。内面ヘラケズリ。3孔。	床面密着	

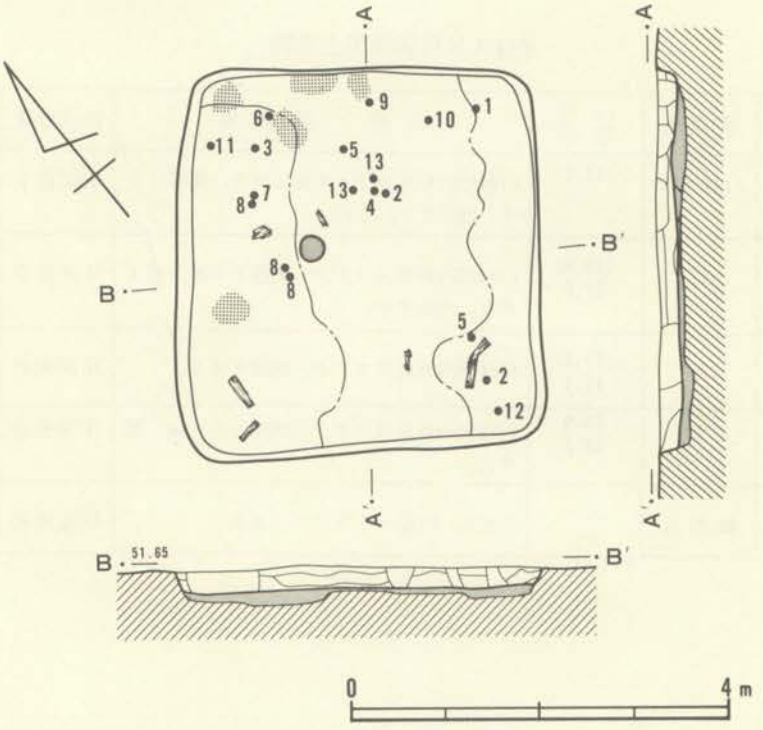
014B号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	壺	口縁部1/6 胴部3/3	(8.2) —	輪積み。口縁部内外面ナデ、胴部ナデ。胴上部内面ヘラケズリ。	床面密着	
2	高坏	坏部完成	14.6 —	ハケメ後ミガキ。内面ナデ。	床面密着	
3	甕	口縁部1/6 胴部1/2	(15.8) 15.3	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後ミガキ。胴下部ヘラケズリ。	床面密着	
4	甕	口縁部完形	15.0 —	口唇部指頭押捺。口縁部内外面ヘラケズリ後ナデ。	床面密着	
5	甕	完形	18.9 17.8	口唇部指頭押捺。頸部以下ナデ。	床面密着	
6	甕	底部完形	— —	ナデ。	床面密着	

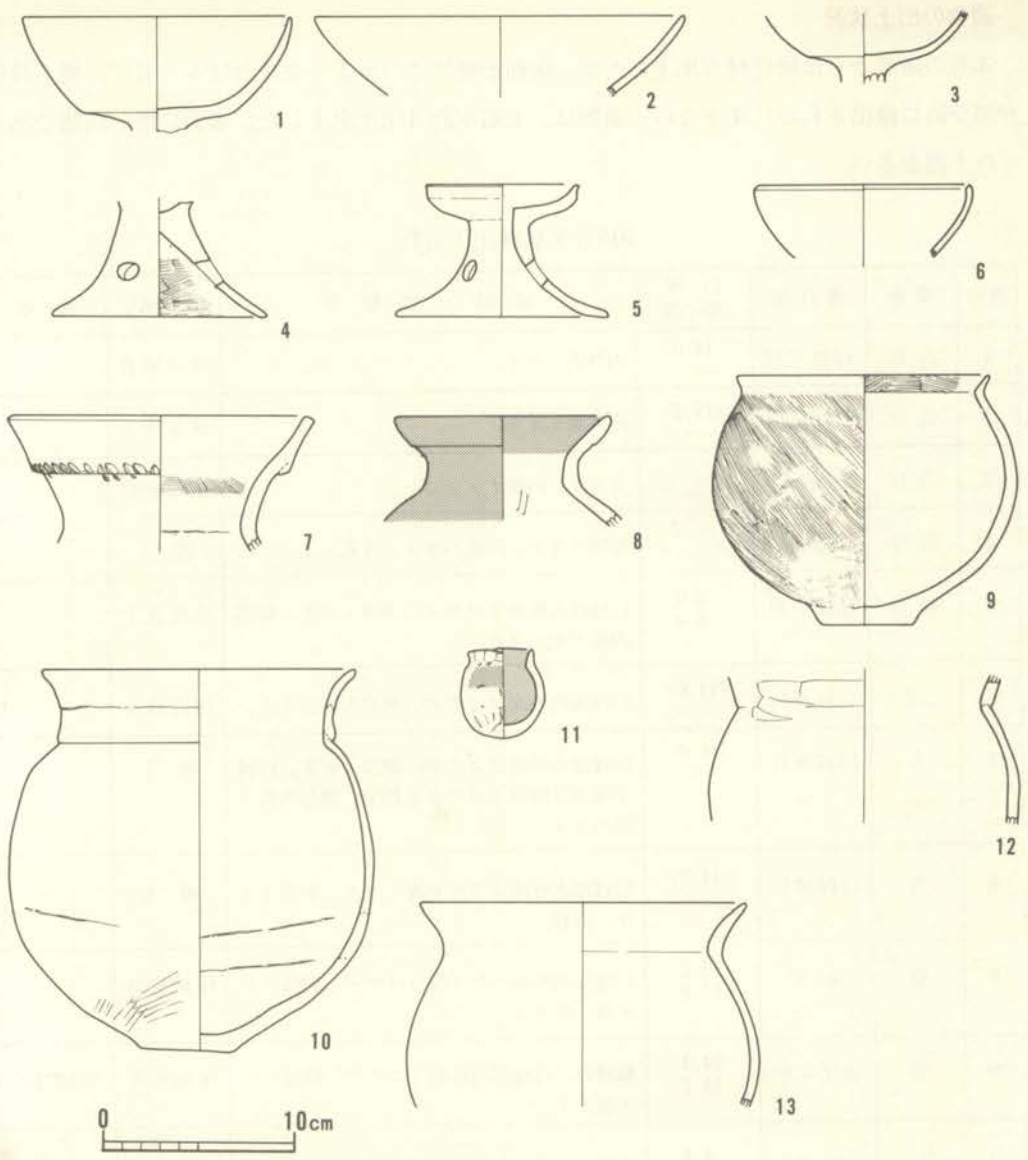
015号住居跡（第78・79図）

概要

本址は、016A号跡の2cm程南に位置する。地山への掘り込みは20cm程であるが、攪乱が著しく、覆土の半分程が失なわれていた。



第78図　015号住居跡



第79図　015号住居跡出土遺物

構造

本址は、長軸3.94m、短軸3.83mの規模を有し、方形を呈する。長軸は北東から南西に向く。炉跡は、住居中央よりやや北西寄りに位置し、径35cmの円形を呈する。焼土はあまり検出されず、・焼土粒子が検出されただけである。床は、暗褐色土に砂質ロームを混入した貼床により構築され、約3.9×2.8mの住居跡長軸方向に長い長方形の範囲が比較的堅い。ピットは精査したにもかかわらず検出されなかった。

荒掘り面は、住居中央部が高く、壁際が低い。床面からの深さは、住居中央部で3～4cm、壁際で10～16cmをはかる。

遺物の出土状況

本址の床面からは炭化材が出土したが、床面が焼けているような状況はみられず、焼土粒子が部分的に検出されたにすぎない。遺物は、土器が約 150片出土した。床面に近い状態で出土した土器が多い。

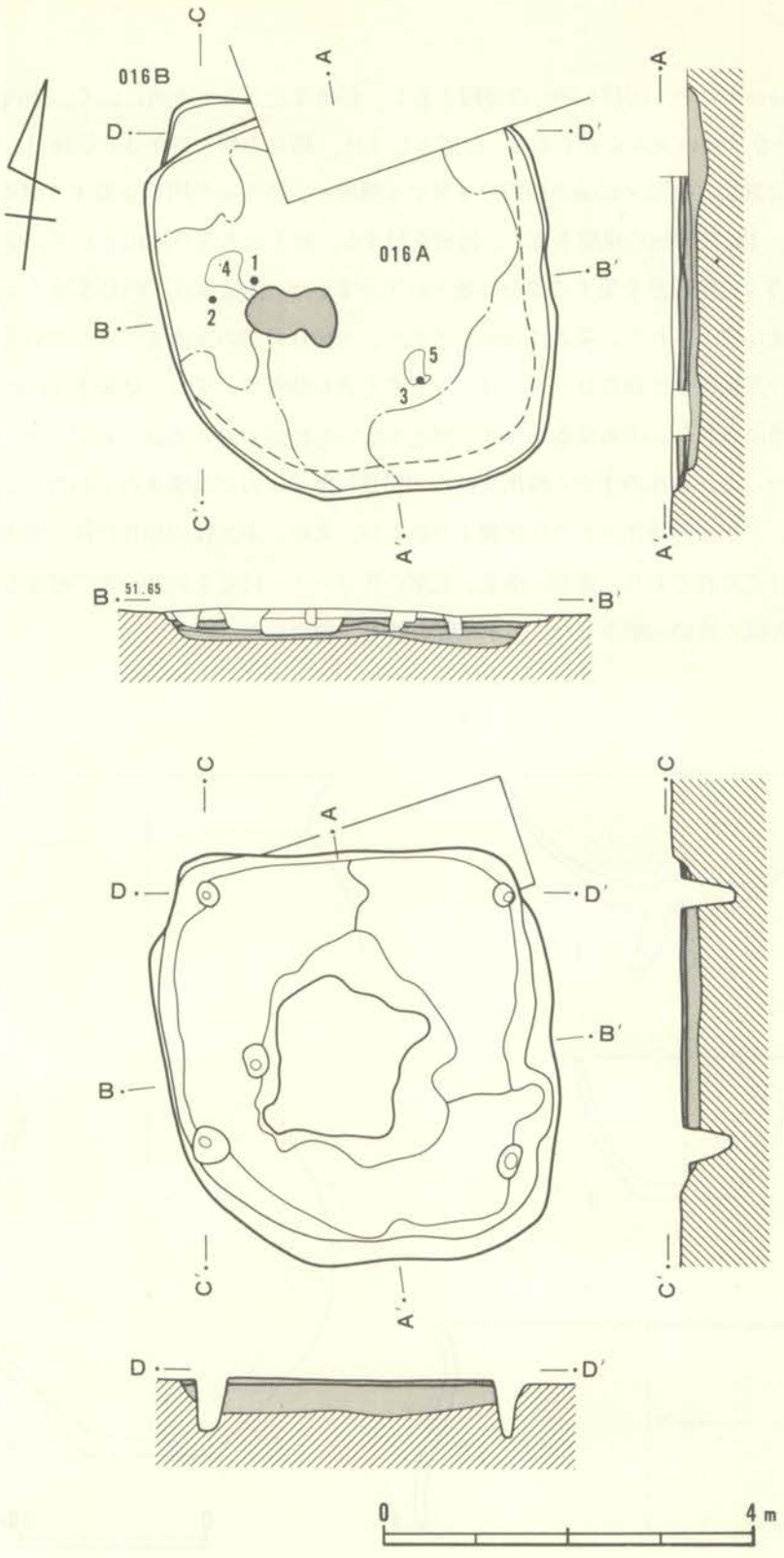
015号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	高坏	坏部完形	14.0 ——	内外面ミガキ。	床面密着	
2	高坏	口縁部¼	(19.2) ——	内外面ミガキ。	床面直上	
3	高坏	坏部½	—— ——	ミガキ。内面ナデ。	床面密着	
4	高坏	脚部完形	—— ——	脚部ミガキ。内面ハケメ。3孔。	覆土	
5	器台	ほぼ完形	8.0 6.9	口縁部内外面ヨコナデ。、坏部ミガキ、脚部内面ナデ。3孔。	床面直上	
6	埦	口縁部½	(11.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	床面直上	
7	壺	口縁部¼	(16.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、頸部ミガキ。口縁下端部は棒状工具による刺突。頸部内面一部ハケメ。	覆土	
8	壺	口縁部⅓	(11.2) ——	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ、胴部ミガキ。赤彩。	覆土	
9	甕	完形	13.2 12.8	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後一部ナデ。	床面密着	
10	甕	ほぼ完形	24.4 19.7	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	床面密着	器面磨耗
11	ミニチュア	完形	3.4 4.7	手捏ね。内外面ナデ。赤彩。	床面密着	
12	甕	⅛	—— ——	頸部ヘラケズリ、胴部ナデ。	床面直上	
13	甕	¼	(17.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ナデ。	覆土	

016A号住居跡（第80・81図）

概要

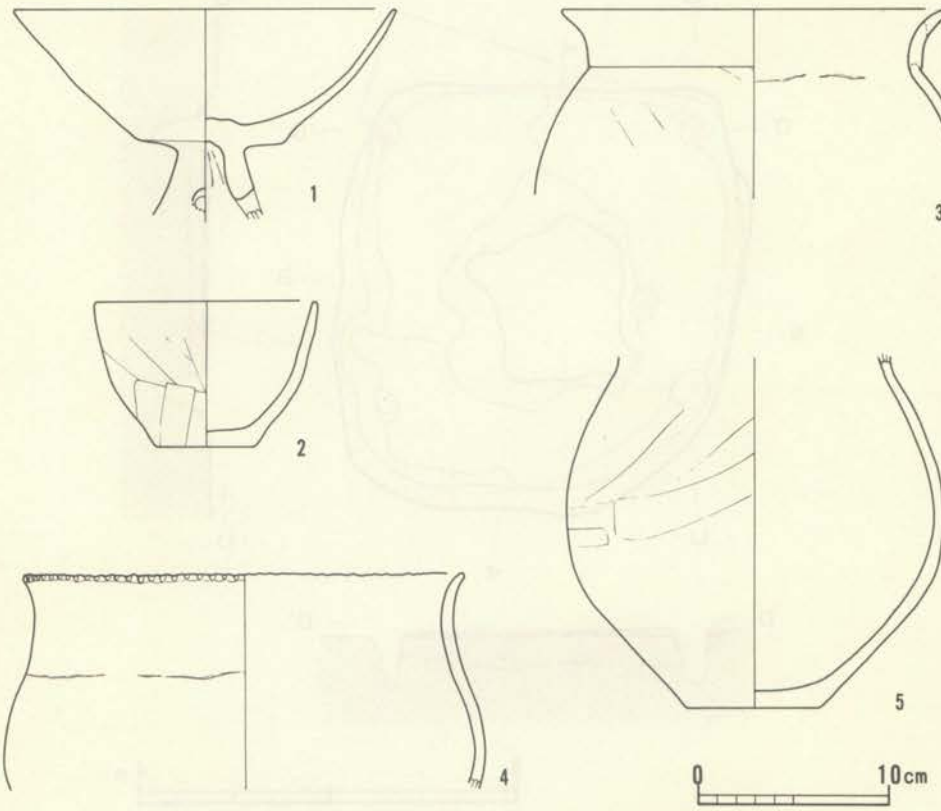
本址は、015号跡の2m程北側に位置し、ほぼ真下に 016B号跡が存在する。本址は 016B号跡の建て替えである可能性が強い。北側は試掘の際に壁の一部を削平してしまった。なお、覆土から床面にかけて、攪乱が著しい。



第80図　016A・B号住居跡

構造

本址は、長軸4.40m、短軸4.26mの規模を有し、長軸は北よりやや西に向く。南西のコーナーだけが、かなり強い丸みを有するが、全体としては、隅丸方形を呈する。炉跡は、住居中央より西側に位置し、径63×40cmの楕円形を呈する個所と、径60cmの円形を呈する個所があり、全体的には、102×63cmの規模を有し、瓢形を呈する。焼土はあまり検出されず、焼土粒子が多い。中央寄りの楕円形を呈する部分は焼土粒子が多いが、西壁寄りの円形を呈する部分からは、灰が多量に検出された。深さは16cmをはかり、016B号跡の床面まで達している。床は、厚さ7cm程の茶褐色土と砂質ロームブロックを多く含む貼床で、更に、貼床下7cmの位置に別の貼床面が検出された。床面は各コーナー付近を除いた範囲が踏み固められている。ピットは検出されなかった。本址の下から検出された016B号跡の床面が破壊されていないことから、本址の方が、下層より検出された住居跡より新しい。更に、本址は016B号跡の壁の一部を拡張して建て替えられており、西側、南東、北東の各コーナー付近を約30cm幅で拡張している。北側では最大幅で約40cm縮少したことが精査の結果、判明した。



第81図　016A号住居跡出土遺物

遺物の出土状況

本址の遺物は、土器が約 150片程で、床面の近くから出土したものがほとんどである。出土する場所は、大別して2群に分けることができる。1群は炉跡の西側、もう1群は炉跡の東側からの出土である。1・2・4は前者から出土し、3・5は後者からの出土である。1は坏部を下にして床面から出土したが、脚部を欠損している。4は床面の破片あるいは床面から3～5cm程浮いた状態の破片が、約60×50cmの範囲から出土し、接合された甕である。5は40×25cmの範囲内から重なりあうようにして出土した破片が接合したが、最も下の破片は、床面に接しており、最も高い位置の破片は床面より4cm程浮いた状態である。3はこの中に混在して出土した。

016A号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	高坏	坏部完形 脚部⅓	20.0 ——	坏部内外面ミガキ、脚部ミガキ。脚部内面ナデ。3孔。	床面密着	
2	埦	½	(11.4) 7.5	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面密着	
3	甕	口縁部⅓	(20.2) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。	床面密着	
4	甕	½	(23.0) ——	口唇部ヘラ状工具による押捺。口縁部内外面ヨコナデ、胴部ナデ後一部ミガキ。	床面直上	
5	甕	⅓	—— ——	胴部ヘラケズリ後一部ミガキ。	床面密着	

016B号住居跡（第80図）

概要

本址は、016A号跡より若干北側の真下に検出され、016A号跡の床面を剝がした時点で、確認された住居跡である。

構造

本址の規模は、床面から考えて、長軸4.08m、短軸3.86mをはかり、やや南北に長い不整の隅丸方形を呈する。炉跡及びピットは検出されなかった。床は、貼床であり、厚さは約11cmをはかる。貼床の上部5～6cmは茶褐色土と砂質ローム粒子の混合土層で、下部5～6cmは茶褐色土と砂質ローム粒子・ブロックの混合土層である。貼床の上部は比較的堅く、下部は軟らかい。また、016A号跡の貼床は砂質ローム粒子、ブロックを多く含むため、本址の貼床との区別は比較的明瞭であった。

荒掘り面の形状は中央の1.4×1.7ｍの不整方形の範囲が高く、その周囲が５～８cm程低くなり、北東のコーナー付近は最も低い。なお、この荒掘り面において、５個のピットが検出された。中央部のピットは、径24cmで、床面からの深さにすると、29cmをはかる。各コーナー部に検出された４個のピットは、径20～38cmで、床面からの深さにすると44～53cmをはかり、全体的な位置や規模から考えて、本址及び 016A 号跡の柱穴と推測される。

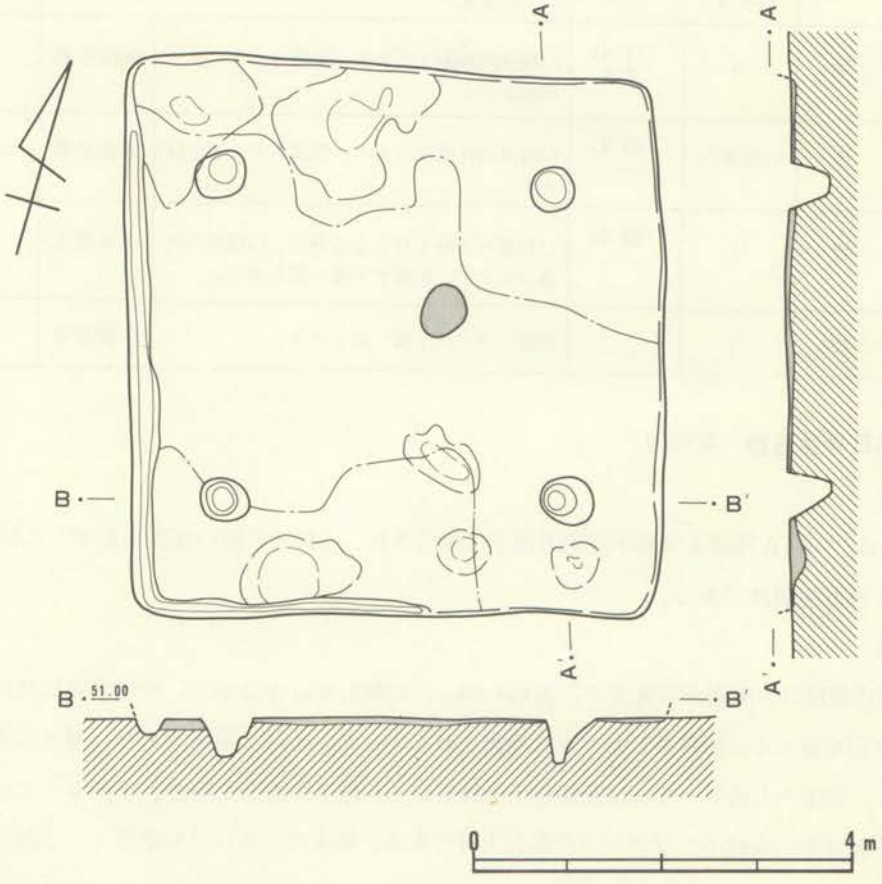
遺物の出土状況

床面からの出土は皆無で、貼床から土器片が数点出土したのみである。

017号住居跡（第82図）

概要

本址は、 013号跡より西に７ｍ程離れているが、この途中で水田造成による地山の削平のため、地山に20cmの段差が出来ており、覆土は削平されていた。このため、検出した面がほぼ床面で、部分的には床面も削平されていた。



第82図　017号住居跡

構造

本址は、東西5.60m、南北5.40～5.70mの規模を有する。北西のコーナー部分がやや内側に入り込んでいるため、やや歪んだ方形を呈する。北西のコーナーから南側の壁の一部に壁溝が検出された。幅20cm、深さは約16cmをはかる。炉跡は、住居中央のやや北寄りに位置し、47×57cmの楕円形を呈する。床は、浅い貼床で、北西のコーナーから南東のコーナーを結ぶ対角線上に堅い床面が検出された。ピットは床面において4個検出された。径は42～50cmで、深さは、北西側のピットが15cmと浅いほかは、37～42cmをはかり、柱穴として使用されたものと考えられる。なお、柱穴の位置も、本址の形状と同様に、北東の柱穴が内側に入り込んでいる。

荒掘り面はほぼ平坦で、ピットは5個検出された。ピットの形状から判断すると、床面に伴うピットとは考えられない。

遺物の出土状況

本址は　覆土及び床面の一部が削平されていたため、遺物は土器が20片と少なく、図示できるものはなかった。ハケにより器面調整されている甕の胴部破片が床面から出土した。

018号住居跡（第83・84図）

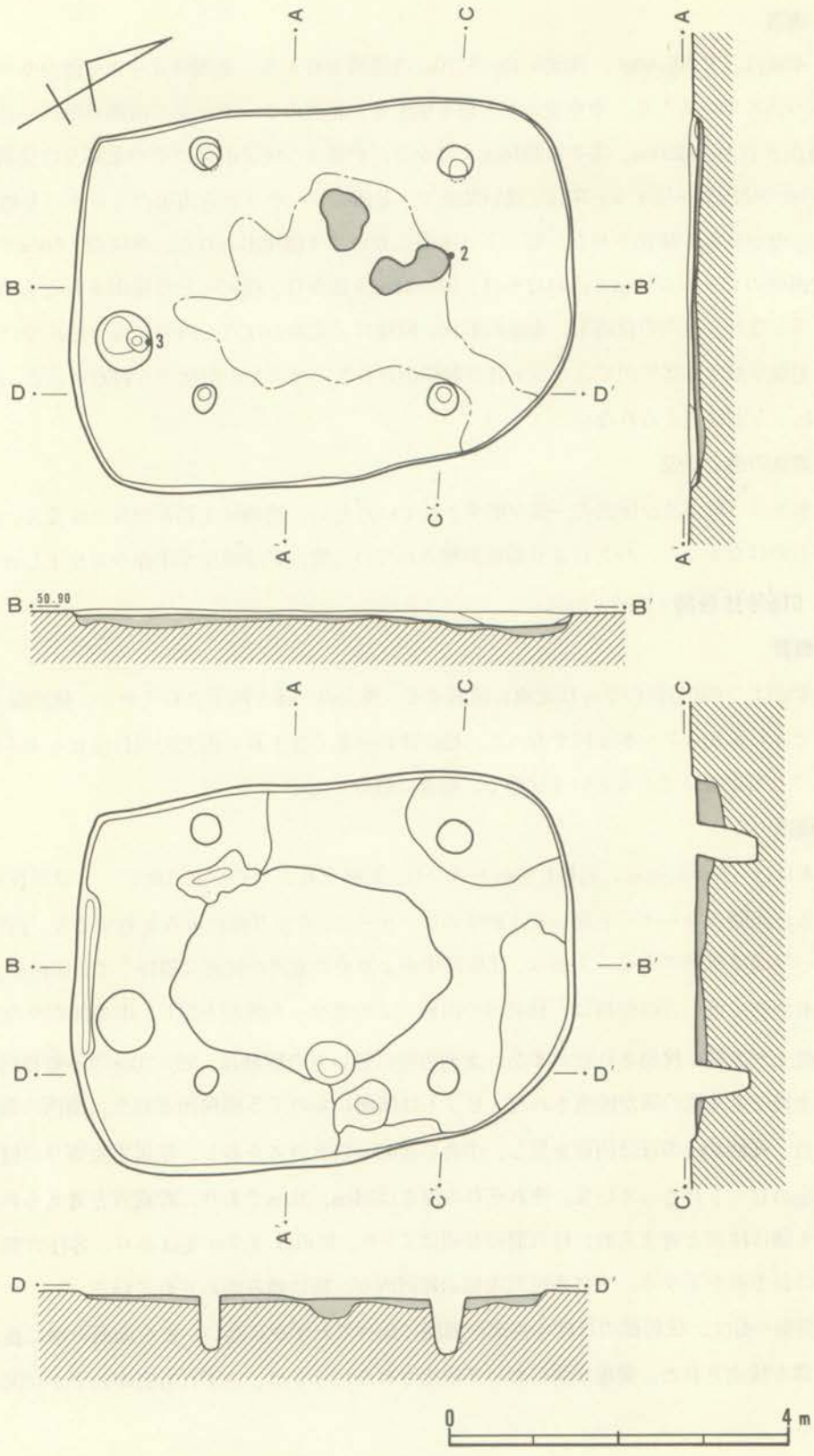
概要

本址は、020号跡の5m程北東に位置する。覆土の一部が削平されており、検出面から床面まではわずか7～8cm程であった。地山は砂が多く含まれ、雨天の翌日はピットを調査していても水が湧いてくるという状態で、調査は難行した。

構造

本址は、長軸5.92m、短軸4.37mをはかり、長軸が北よりやや東に向く。形状は長方形を呈する。西側のコーナーを除いた3か所のコーナーは、かなり強い丸みを有するが、西側のコーナーはほぼ直角である。炉跡は、住居跡中央よりやや北側の位置に隣接して2個検出された。北東の壁に近い方の炉跡は、径45cmの円形が2つ重なった瓢形を呈し、中央部寄りの部分からは焼土が多量に検出された。また、北西の壁に近い方の炉跡は、50×70cmの不整楕円形を呈し、焼土粒子と多量の灰が検出された。ピットは床面において5個検出された。南西の壁側のピットは、径約40cmのほぼ円形を呈し、中央に径40cmのテラスを有し、住居中央寄りの壁際が、径25cmのピットになっている。それぞれの深さは24cm、35cmであり、貯蔵穴と考えられる。ほかの4個は柱穴と考えられ、柱穴間の長辺は2.9m、短辺は2.7mをはかり、各柱穴間を結ぶ形状は長方形を呈する。床は各柱穴を結ぶ範囲内が、特に踏み固められている。

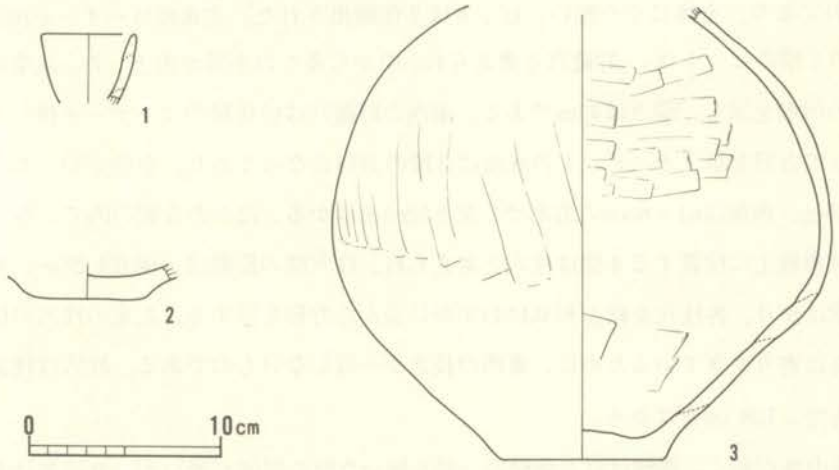
荒掘り面は、住居跡のほぼ中央部が周囲に比べてわずかに高い。また南西の壁に長さ2cm程の溝が検出された。荒掘り面において検出されたピットは、いずれも底がわずかに凹む程度である。



第83図　018号住居跡

遺物の出土状況

本址から出土した遺物は土器のみで、約50片である。覆土中からの出土が多い。床面からのものとしては、壺の頸部から胴部にかけての破片が甕形を呈する炉跡の北側より出土した。壺の頸部はハケメ調整ののちミガキが施され、胴部にはミガキが施されている。



第84図　018号住居跡出土遺物

018号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	ミニチュア	1/3	(5.0) —	内外面ミガキ。	覆土	
2	甕	底部完形	— —	内外面ナデ。	床面直上	
3	壺	胴上部1/3 胴下部完形	— —	胴部ヘラケズリ後ミガキ、胴上部内面ヘラケズリ。	床面直上	

019号住居跡（第85～88図）

概要

本址は、028号跡の3m程北に位置する。東側の壁より5m程は攪乱もほとんどなく、覆土も良好であるが、西側の壁より3m程は地山が削平されており、表土を剝がした面がほぼ床面で、部分的には床面も削平されていた。また、西側の壁の中央部に木の根による攪乱があり、壁が検出されなかった。

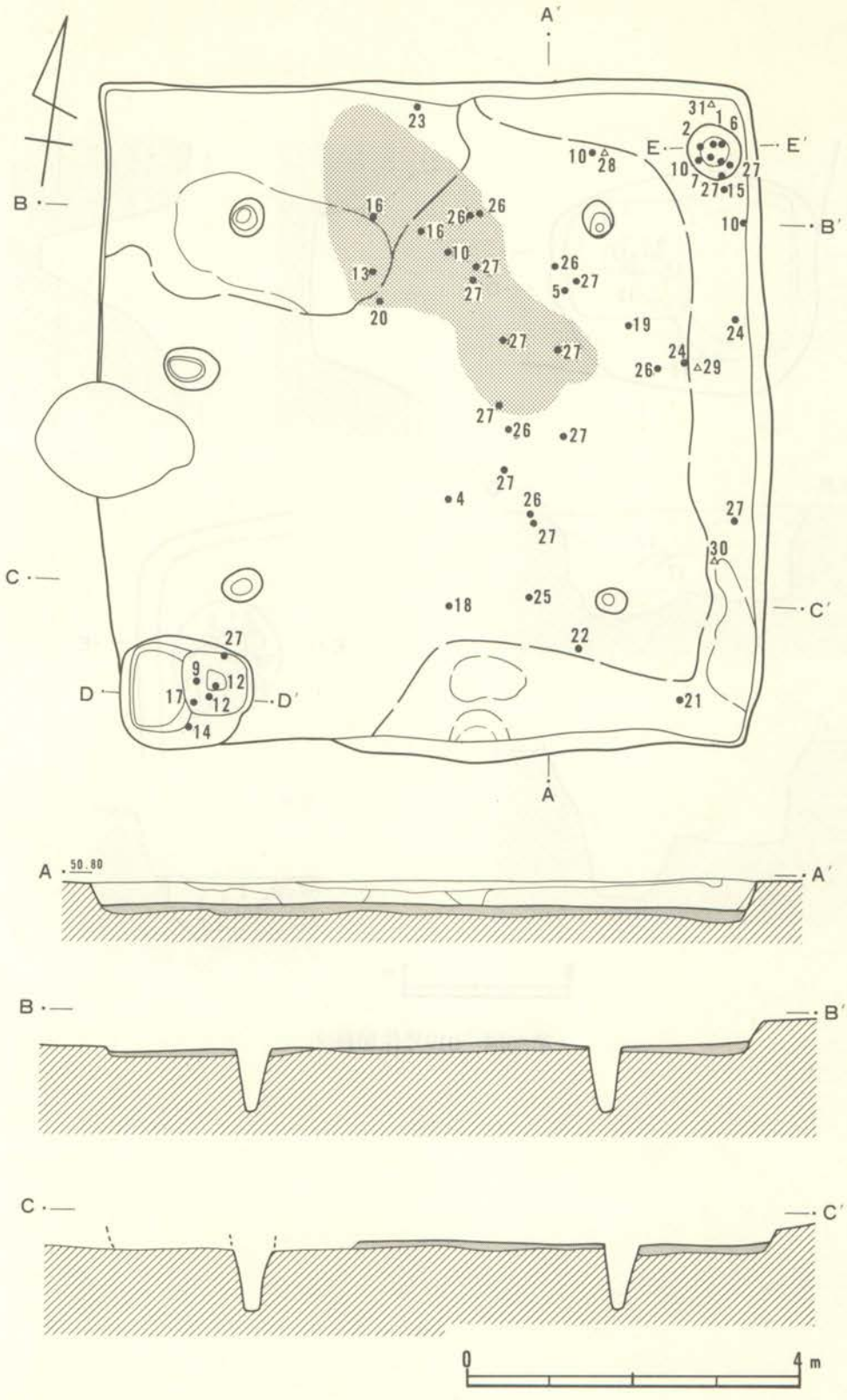
構造

本址は、ほぼ南北を向く軸が8.03m、ほぼ東西を向く軸が7.98mをはかり、各コーナーも直角に近く、方形を呈する大形の住居跡である。炉跡は検出されなかったが、床面において、住居中央より北側の位置に焼土粒子、炭化粒子が約 2.0×4.2 m の細長い範囲に検出され、床面が焼けて赤色を呈する部分も検出された。床は、砂質ロームブロックに暗褐色土が混入した貼床で構築されており、全体にやや堅い。ピットは7個検出された。北東のコーナーと南西のコーナー付近の2個のピットは、貯蔵穴と考えられ、中から多くの土器が出土した。北東の貯蔵穴は径65cmの円形を呈し、深さは40cmである。南西の貯蔵穴は住居跡のコーナーと接しており 1.3× 1.6 m の方形を呈する。ピットの底面は2段の方形になっており、東側が23×35cmの長方形で深さ65cm、西側は61×85cmの方形で、深さ52cmをはかる。ほかの5個の内で、各コーナーを結んだ対角線上に位置する4個は柱穴と考えられ、柱穴間の距離は、南北4.35m、東西4.40～4.25mをはかり、各柱穴を結ぶ形状はわずかに歪んだ方形を呈する。北東の柱穴の位置がやや住居中央に寄りすぎているために、東西の長さが一致しないものである。柱穴は径30～40cmで、深さは72～108 cmをはかる。

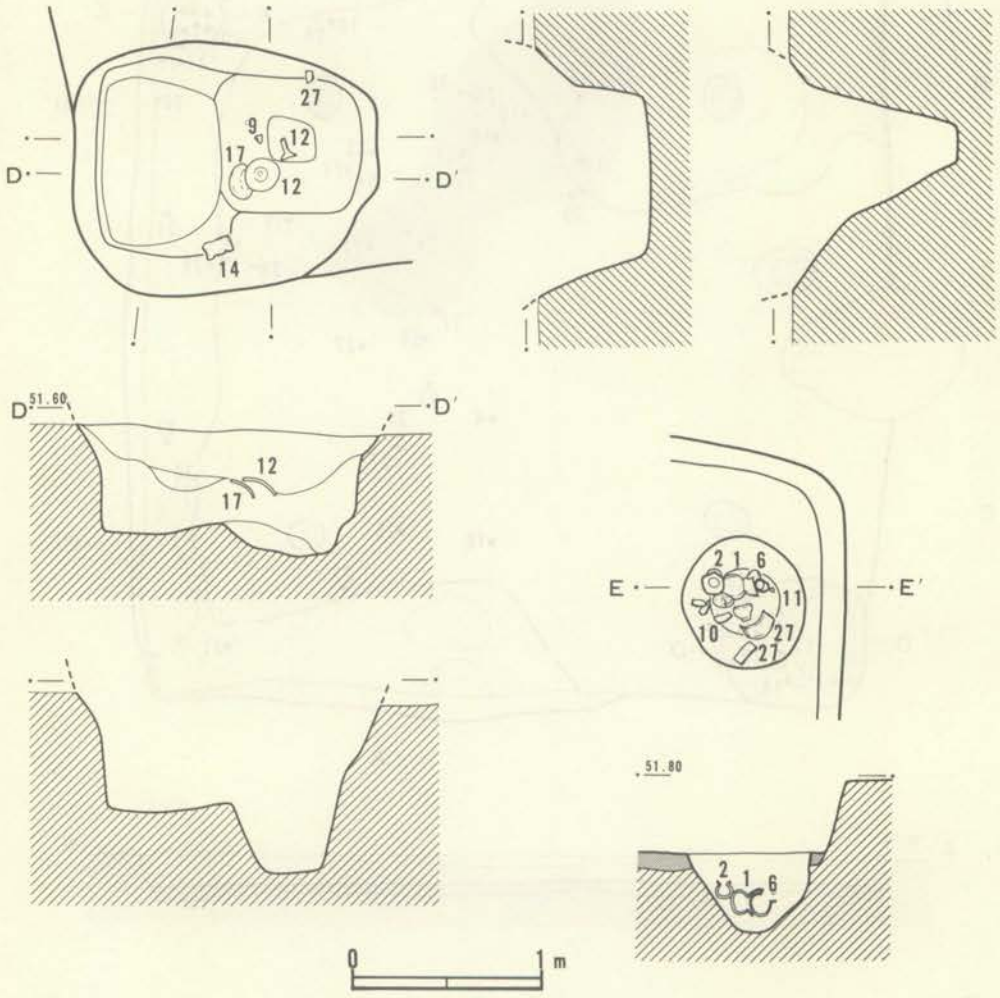
荒掘り面は中央が高く、西壁付近と南壁の一部を除いた壁の周囲が低いが、比高差はわずかである。低い面は北西寄りの柱穴付近ではかなり中央に近くまで入り込んでおり、中央部との比高差は7～10cmである。北壁の中央から東壁、更に西壁の中央付近までは、90～140cm の幅で、深さ3～4cmの比高差がある。

遺物の出土状況

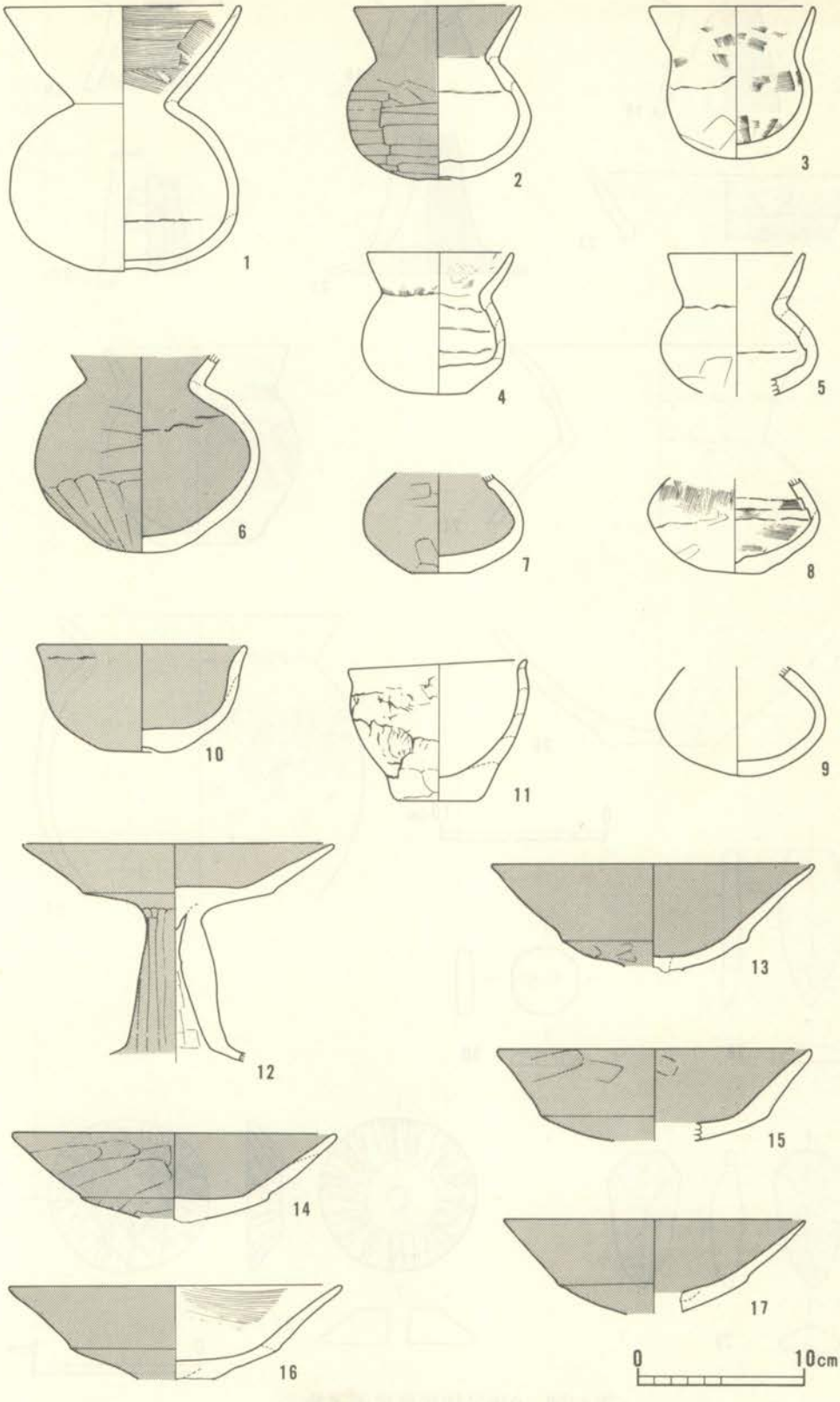
本址からは、約 600片に及ぶ土器と数点の石製品が出土した。西側半分の削平がなければ、かなりの遺物の出土があったものと考えられる。遺物は、ほとんどが床面近くからの出土で、床面から7～10cm内に含まれ、覆土の遺存部においては住居跡のほぼ全域にわたり認められた砂質ローム粒子を含む茶褐色土層から出土したものである。出土状況における全体の傾向としては、北東及び南西コーナー付近の貯蔵穴の中と、住居中央から北壁にかけて焼土粒子、炭化粒子が認められた範囲からの出土が、特に顕著に認められた。南西の貯蔵穴の中から出土した土器は、浮いた状態のものが多く、北東の貯蔵穴の中から出土した土器は、底面近くからの出土であり、完形あるいはほぼ完形が多い。中央部から出土した土器は、ほとんどが床面からの出土であるが、破片で出土したものが多い。また、北東の貯蔵穴の覆土から出土した破片と、床面から出土した破片の接合もあり、上記3か所から出土した破片が接合したものもある。出土した土器は坩、高坏が非常に多く、特に高坏が多いが、坏部と脚部はほとんど接合しない。実測できなかった破片は、坩の口縁部が約10個体分、高坏の口縁部、脚部が約40個体分、甕の口縁部破片が約20個体分程になり、高坏等の小形の土器に比べて、甕等の大形の土器が少ない。この傾向は 025・ 026号跡と同様である。



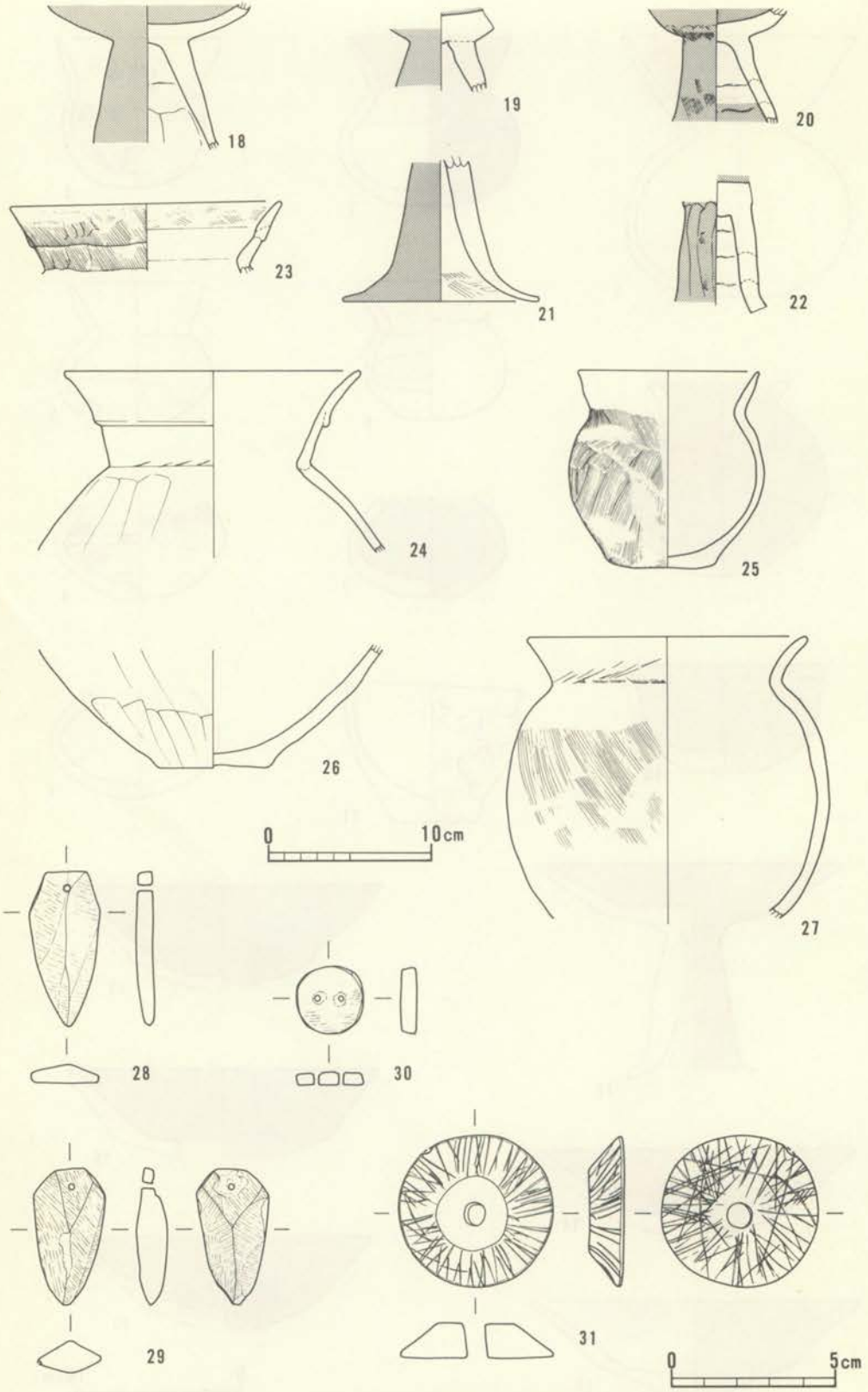
第85図　019号住居跡(1)



第86図　019号住居跡(2)



第87図　019号住居跡出土遺物(1)



第88図　019号住居跡出土遺物(2)

019号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坩	口縁部2/3 胴部完形	(14.2) 16.0	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。口縁部内面ヨコナデ後ハケメ。	ピット覆土	
2	坩	口縁部1/2 胴部完形	(10.0) 10.5	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。赤彩。	ピット覆土	
3	坩	口縁部1/2 胴部完形	(9.8) 9.0	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。内面ハケメ後ナデ。	覆土	
4	坩	完形	9.0 8.5	輪積み。口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ナデ。	床面密着	
5	坩	完形	8.0 —	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。	床面密着	
6	坩	胴部完形	— —	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。赤彩。	ピット覆土	
7	坩	胴部完形	— —	胴部ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。赤彩。	ピット覆土	
8	坩	胴部完形	— —	輪積み。胴部内外面ハケメ後ナデ。	覆土	
9	坩	胴部完形	— —	胴部内外面ナデ。	ピット覆土	
10	埦	1/3	(12.4) 6.3	ナデ。内面ミガキ。赤彩。	ピット覆土 床面密着	
11	埦	完形	10.8 8.5	輪積み。内外面ナデ。	ピット覆土	
12	高坏	裾部以外完形	18.4 —	坏部ナデ、脚部内外面ヘラケズリ。坏部内面ミガキ。赤彩。	ピット覆土	
13	高坏	坏部ほぼ完形	9.8 —	口縁部内外面ヨコナデ、胴上部ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。赤彩。	床面密着	
14	高坏	坏部1/4	(19.4) —	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。赤彩。	ピット覆土	
15	高坏	坏部1/3	(18.8) —	坏部ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。赤彩。	覆土	
16	高坏	坏部1/2	(20.0) —	坏部ナデ。内面ハケメ後ナデ。赤彩。	床面密着	
17	高坏	坏部2/3	9.4 —	坏部内外面ナデ。赤彩。	ピット覆土	
18	高坏	脚部1/3	— —	坏部内外面ナデ、脚部ナデ。脚部内面ヘラケズリ。赤彩。	床面直上	
19	高坏	脚部1/2	— —	脚部ナデ。内面ヘラケズリ。赤彩。	床面直上	

20	高 坏	脚 部 ¼	——	輪積み。坏部内外面ナデ、脚部ハケメ後ナデ。赤彩。	床面密着	
21	高 坏	脚 部 ⅔	——	脚部ナデ。内面ハケメ後ナデ。赤彩。	床面直上	
22	高 坏	裾部以外 脚部完形	——	輪積み。脚部ヘラケズリ後ナデ。赤彩。	覆 土	
23	壺	口縁部⅓	(16.4)	輪積み。口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、頸部ハケメ。	床面密着	
24	壺	口縁部ほぼ完形 胴部⅓	9.0	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。	床面直上	
25	甕	口縁部⅙ 胴部½	(11.0) 11.8	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後一部ナデ。	床面直上	
26	甕	胴下部完形	——	胴部ヘラケズリ後ナデ。	床面密着	
27	甕	⅓	(17.4)	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	床面密着	
28	剣 形 模造品	長さ 4.6cm、幅 2.1cm、厚さ 0.5cmをはかる。基部に径2mmの小孔が認められる。片面のみ中央に鎬を有し、断面は三角形を呈する。滑石。床面密着。				
29	剣 形 模造品	長さ 5.1cm、幅 2.2cm、厚さ0.9cmをはかる。基部に径 2 mmの小孔が認められる。両面共中央に鎬を有し、断面は菱形を呈する。滑石。床面直上。				
30	有孔円板	径 2.0cm、厚さ0.4cmをはかる。径 1.5mmの小孔が2ヵ所に認められる。滑石。床面密着。				
31	紡錘車	径 4.7cm、厚さ1.1cmをはかる。中央に径 7.5mmの穿孔が認められる。断面は台形を呈し、上面を除いた面に不規則な放射線状の線刻が施されている。滑石。覆土。				

020号住居跡（第89～91図）

概要

本址は、023号跡の１ｍ程北側に位置し、028号跡とは約70cmの距離をはかる。南側半分程は農道の下であったため遺存は良好であったが、北側は水田耕作によりほぼ床面近くまで削平されていた。

構造

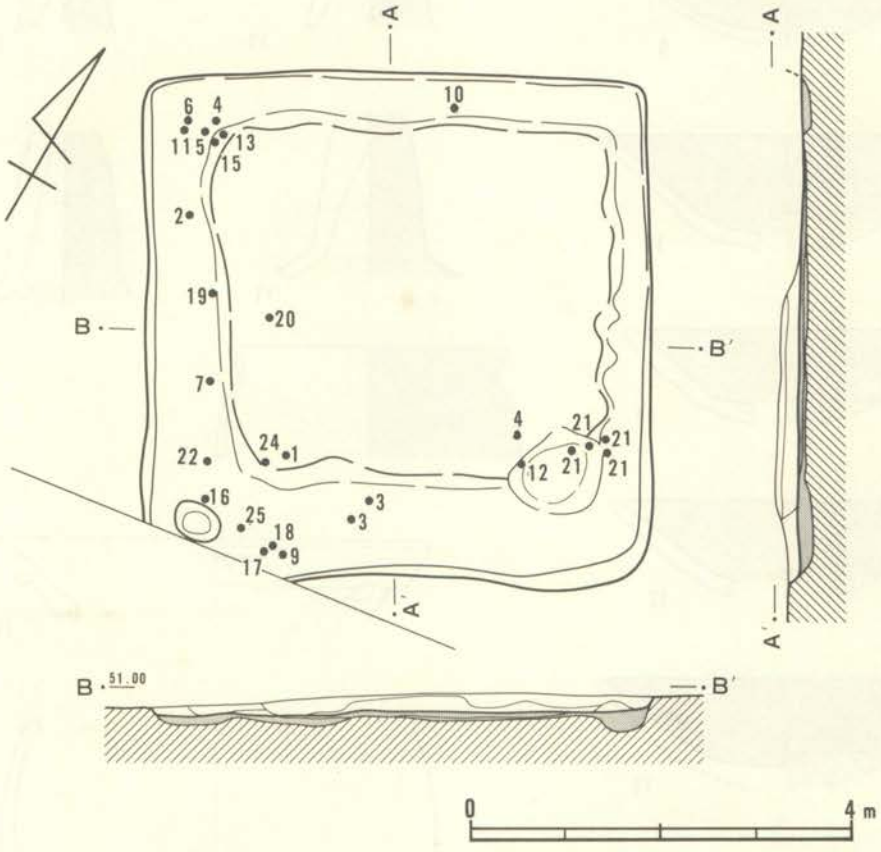
本址は、長軸5.40m、短軸5.18m をはかり、方形を呈する。短軸は南東から北西を向く。炉跡は検出されなかった。床は、暗褐色土と砂質ローム粒子の混合による貼床で、全体に堅い。ピットは南側のコーナー部分に１個検出された。規模は、径35×50cm、深さ50cmをはかり、楕円形を呈する。このピットは住居跡のコーナーに寄りすぎていることから、貯蔵穴と考えられる。柱穴と考えられるピットは、検出されなかった。

荒掘り面は中央が高く、壁際が低い形状である。北西の低い部分は幅50～55cm、深さ10～14cm、

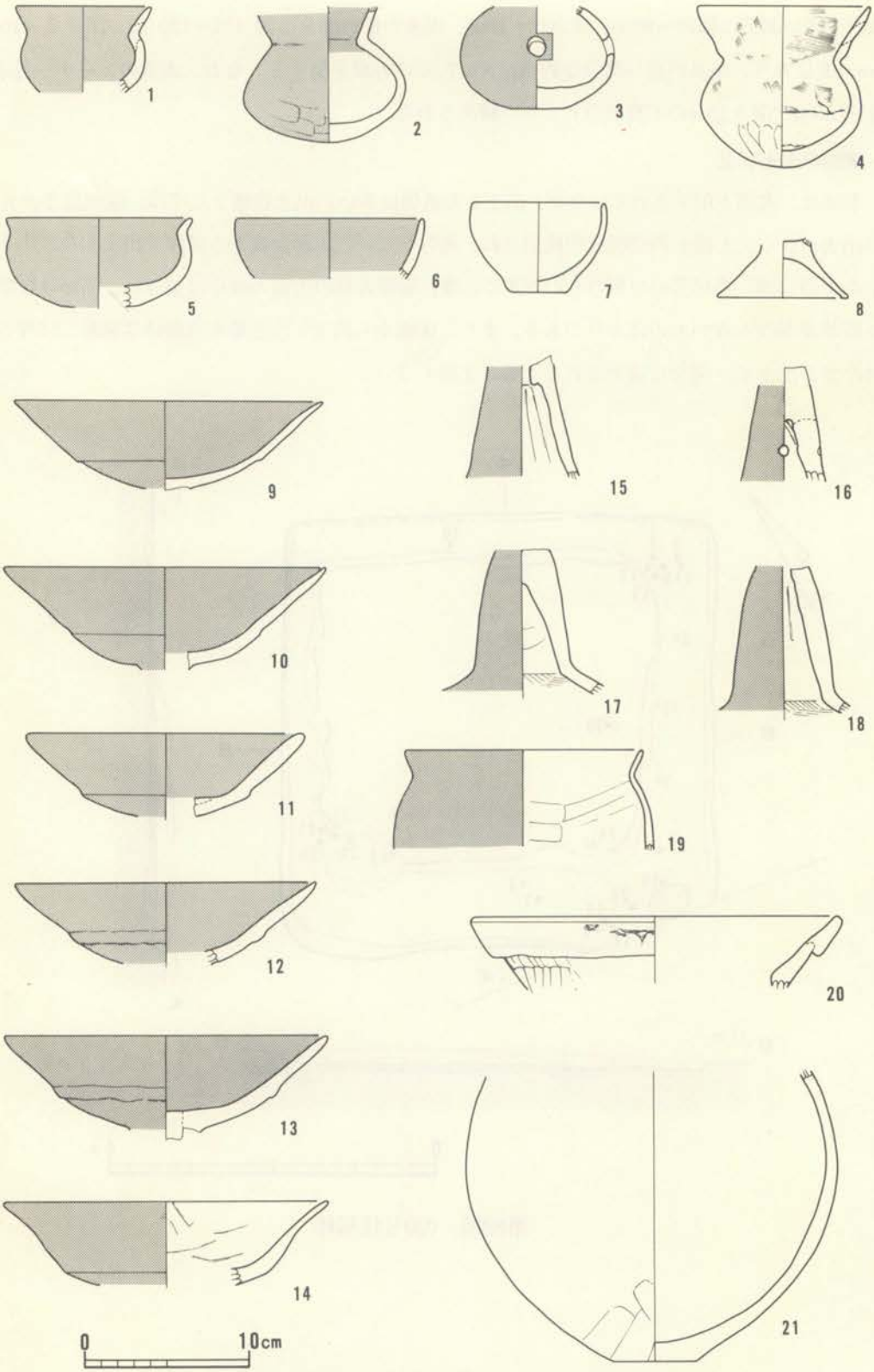
南西の低い部分は幅70～90cm、深さ12～18cm、南東の低い部分は幅 102～120 cm、深さ 8 ～10 cm、をはかり、中央の高い部分は約 3.3×3.7 m の方形を呈する。なお、南東のコーナー付近に径85cm、深さ22cmの不整形のピットが検出された。

遺物の出土状況

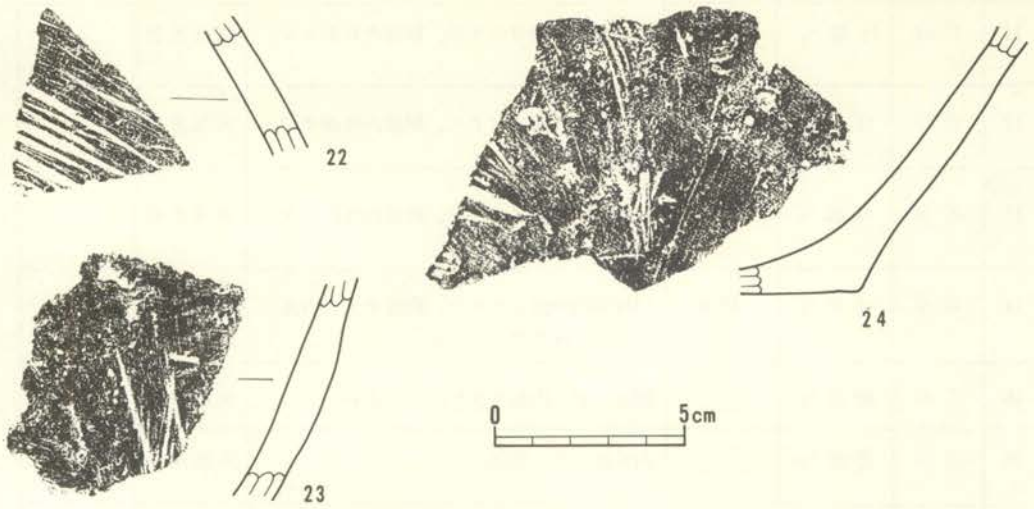
本址は、北側を削平されていたが、出土した遺物は多い。出土状態としては、床面近くからの出土が多く、土器が約 500片程検出され、遺存していた床面全域から破片で出土した。出土した土器は坩、高坏等の小形のものが多く、甕、壺等大形の土器の破片は少ない。高坏は坏部と脚部が接合しないものばかりである。また、床面から出土した土器も完形ほぼ完形ではなく、破片での出土で、完全に復元された土器は１個もない。



第89図　020号住居跡



第90図　020号住居跡出土遺物(1)



第91図　020号住居跡出土遺物(2)

020号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坩	½	(7.6) —	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ナデ。内面ナデ。赤彩。	床面直上	
2	坩	口唇部以外完形	— —	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。赤彩。	床面密着	
3	甕（?）	胴部½	— —	内外面ナデ。赤彩。	床面密着	胴部に焼成後の穿孔あり(1)。
4	坩	口縁部⅔ 胴部完形	(10.4) 9.9	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴上部ハケメ後ナデ、胴下部ヘラケズリ。内面ハケメ後ナデ。	床面直上	
5	坏	¼	(11.2) —	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。赤彩。	床面密着	
6	坏（?）	⅓	(11.4) —	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。赤彩。	床面密着	
7	埦	⅓	(8.2) —	内外面ナデ。	床面直上	
8	高坏	脚部完形	— —	内外面ナデ。	覆土	
9	高坏	坏部¼	(18.8) —	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。赤彩。	床面密着	器面磨耗
10	高坏	坏部⅙	(19.6) —	内外面ミガキ。赤彩。	床面密着	

11	高 坏	坏 部 1/3	(19.4) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。赤彩。	床面密着	
12	高 坏	坏 部 1/6	(18.2) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。赤彩。	床面密着	
13	高 坏	坏 部 1/3	(19.6) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。赤彩。	床面密着	
14	高 坏	坏 部 1/6	(19.6) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ナデ。内面ヘラケズリ後ナデ。	床面直上	
15	高 坏	脚 部 1/2	—— ——	脚部ナデ。内面ヘラケズリ。赤彩。	床面密着	
16	高 坏	脚 部 2/3	—— ——	内外面ナデ。赤彩。	床面密着	脚部に未貫の穿孔あり。
17	高 坏	脚部ほぼ完形	—— ——	脚部ナデ。裾部内面ハケメ。赤彩。	床面密着	
18	高 坏	脚 部 3/4	—— ——	脚部ナデ。裾部内面ハケメ。赤彩。	床面密着	
19	埦	口縁部 1/4	(14.6) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ナデ。胴部内面ヘラケズリ後ナデ。赤彩。	床面直上	
20	壺	口縁部 1/8	(22.4) ——	口縁部内外面ヨコナデ、頸部ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。	床面直上	
21	甕	胴部 1/2	—— ——	胴上部ナデ、胴下部ヘラケズリ。	床面直上	
22	坩			内外面ナデ。	床面直上	胴部に断面三角形を呈する使用痕が7条認められる。
23	甕			内外面ナデ。	床面直上	胴部に断面三角形を呈する使用痕が3条認められる。24と同一個体（？）
24	甕			内外面ナデ。	床面直上	胴部に断面三角形を呈する使用痕が1条認められる。23と同一個体（？）

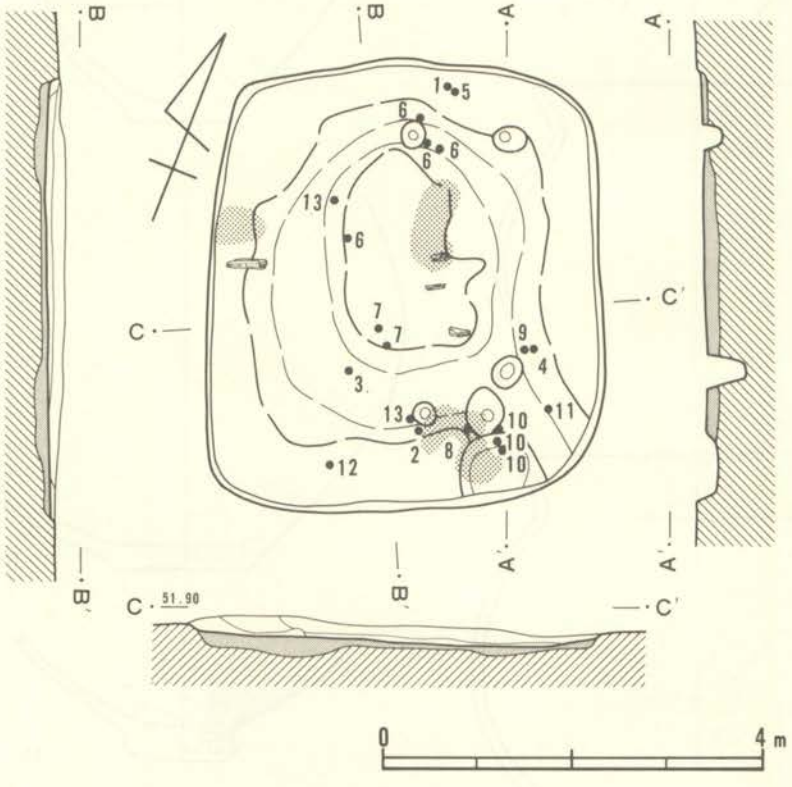
022号住居跡（第92・93図）

概要

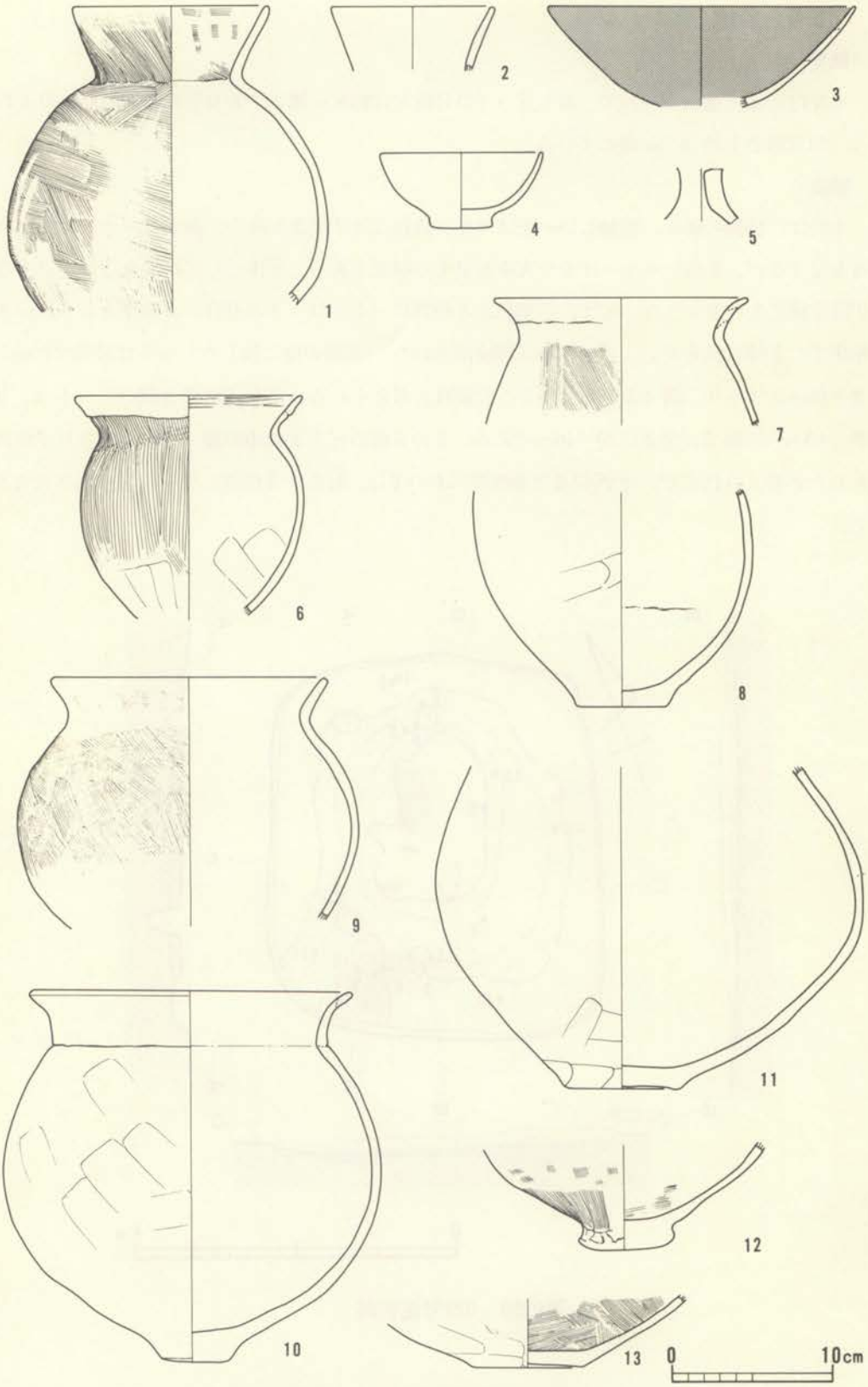
本址付近は、地山が平坦で、最も近い 021号跡とは約８ｍ離れており、ほぼ同時期と考えれる 031号跡とも約 8.5m 離れている。

構造

本址は、長軸4.68m 、短軸4.15m をはかり、長軸はほぼ南北を向く。南東コーナーは強い丸みを呈するが、北西コーナーはやや丸みを呈する程度であり、全体としては隅丸方形を呈する。炉跡は検出されなかった。床は、黒褐色土と砂質ロームブロックの混合による厚さ６～12cmの貼床で、全体に軟らかい。ピットは６個検出された。南側の壁に接したピットは径70×80cm、深さ16cmをはかり、隅丸方形を呈する。貯蔵穴と考えられる。このほかの５個のピットは、径25～40cmの規模で、深さは20～46cmである。この５個のピットの中の幾つかが柱穴として使用されたと考えられるが、北西側及び南西側においては、対応する位置にピットは検出されなかた。



第92図　022号住居跡



第93図　022号住居跡出土遺物

荒掘り面は、住居中央部と南東のコーナー部分を除いた壁の周辺が高く、中間は低い。中央の高い範囲は、径約 1.1×2.1 m の不整楕円形を呈し、壁の周辺の低い部分は幅約 0.5×1.1 m 程で、比差は 8 ～10cmである。

遺物の出土状況

本址から出土した遺物は、すべて土器で約 300片程である。土器の多くは覆土中から出土したが、床面あるいは床面近くから出土したものもある。これらの土器は南側の貯蔵穴付近から住居中央にかけての範囲から出土が多く、また、北壁付近からも出土した。

022号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	壺	口縁部完形 胴部 1/3	12.2 ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後一部ナデ。	覆土	
2	坩	口縁部1/3	(10.2) ——	内外面ミガキ。	覆土	
3	高坏	1/4	(19.0) ——	内外面ミガキ。赤彩。	覆土	
4	埦	ほぼ完形	10.0 4.8	内外面ミガキ。	床面密着	
5	器台	脚部ほぼ完形	—— ——	ナデ。内面ヘラケズリ後ナデ。	覆土	
6	甕	1/3	(13.6) ——	口縁部ヨコナデ、胴上部ハケメ、胴下部ヘラケズリ後ナデ。口縁部内面ハケメ後ヨコナデ。	床面直上	
7	甕	1/3	(15.6) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	覆土	
8	甕	胴部 3/4	—— ——	ヘラケズリ後ナデ。	床面直上	
9	甕	口縁部3/4 胴部3/4	(17.0) ——	口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴上部ハケメ後ナデ、胴下部ナデ。	床面密着	
10	甕	口縁部1/2 胴部完形	(19.7) 22.5	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。	ピット	
11	甕	胴部 1/3	—— ——	ヘラケズリ後ナデ。	床面密着	
12	甕	胴部 1/2	—— ——	ハケメ後一部ナデ。胴下部内面ハケメ後ナデ。	覆土	
13	甕	1/6	—— ——	ヘラケズリ後ナデ。胴下部内面ハケメ後一部ミガキ。	覆土	

023号住居跡（第94・95図）

概要

本址は、 020号跡の１ｍ程北に位置する。地山が東から西に緩く傾斜する斜面上に位置すると考えられるが、地山は削平されている。地山への掘り込みが浅いため、覆土の大半が削平されている。

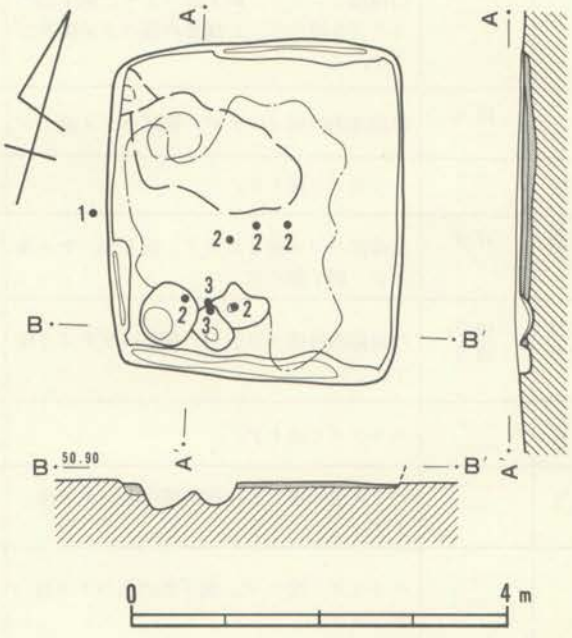
構造

本址は、長軸3.43m、短軸3.10m をはかり、長軸はほぼ北を向く。形状は方形を呈する。北側及び西側の壁の一部と南側の壁において、幅20cm、深さ10cm程の壁溝が検出された。炉跡は検出されなかった。床は貼床であり、厚さは約10cmをはかる。貼床の上部は暗褐色土と砂質ローム粒子の混合土層で、下部は暗褐色土と砂質ロームブロックの混合土層である。住居跡のほぼ中央部が特に堅く、貼床の下部は軟らかい。ピットは南西のコーナー付近で３個検出され、これらのピットは互いに接しており、径32～54cm、深さ27～34cmをはかるが、その形状は不整である。

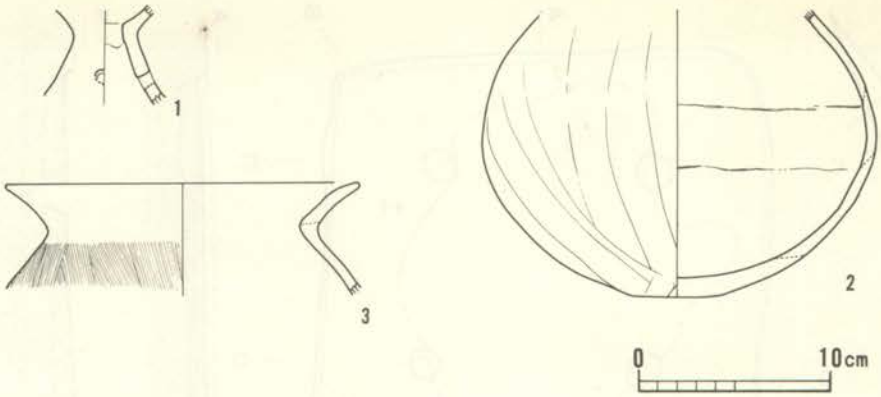
荒掘り面は、北西のコーナー付近に深さ15cmの不整形のピットが検出された。

遺物の出土状況

本址から出土した遺物は、すべてが土器であり、遺存していた覆土も薄く、数も少ない。土器は住居中央部とピットの北側から出土したが、すべて床面近くからの出土である。



第94図　023号住居跡



第95図　023号住居跡出土遺物

023号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	器台	脚部ほぼ完形	—— ——	ミガキ。内面ナデ。4孔（?）。	覆土	
2	壺	胴部1/3	—— ——	輪積み。胴部ヘラケズリ後ミガキ。	床面直上	
3	甕	口縁部1/3	(18.4) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ。	床面直上	

024号住居跡（第96・97図）

概要

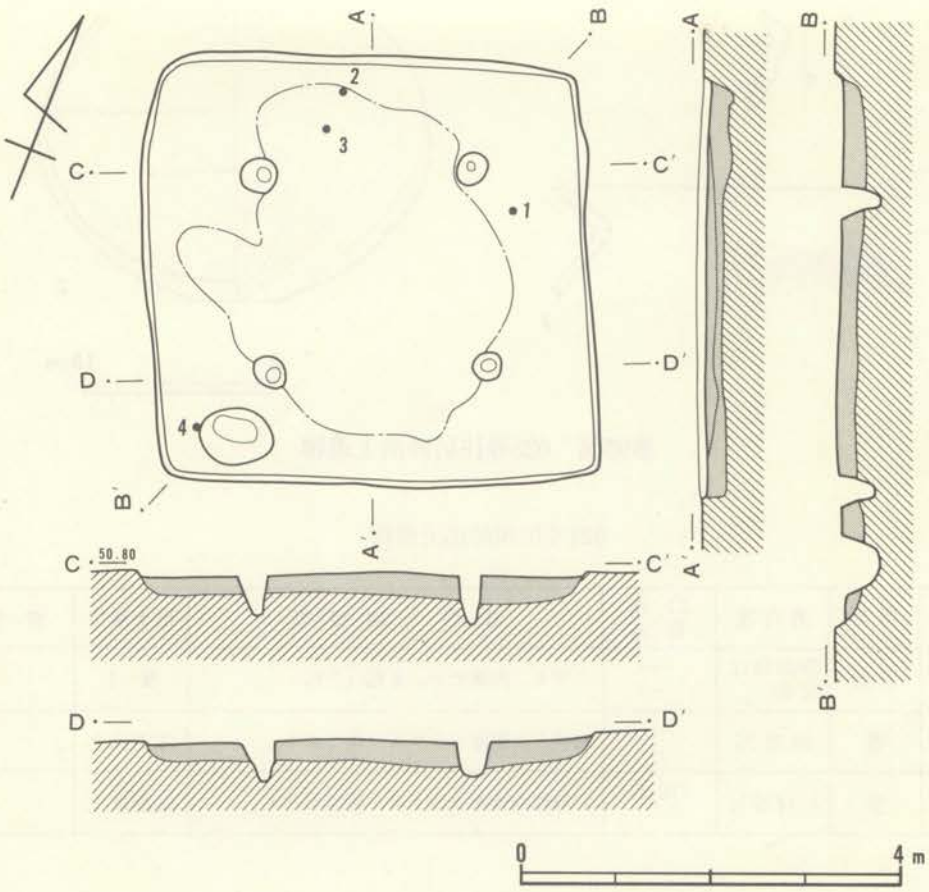
本址は、023号跡の約 6.6m 程南側に位置する。付近は地山が削平されているが、東から西に傾斜する緩やかな斜面と考えられる。覆土の大半が削平されていた。

構造

本址は、長軸4.68m、短軸4.44m をはかり、やや南北に長い方形を呈する。炉跡は検出されなかった。床は、暗褐色土と砂質ロームの混合による厚さ約16cm程の貼床で、住居中央部が堅い。堅い床面の厚さは約10cmである。ピットは5個検出された。南側のコーナー付近のピットは径54×76cm、深さ21cmの楕円形を呈し、貯蔵穴と考えられる。このほかの4個のピットは、径30～35cm、深さ34～42cmで、柱穴と考えられる。柱穴間の距離は、長辺で2.2m、短辺で2.1mをはかり、各柱穴を結ぶと、ほぼ正方形を呈する。

遺物の出土状況

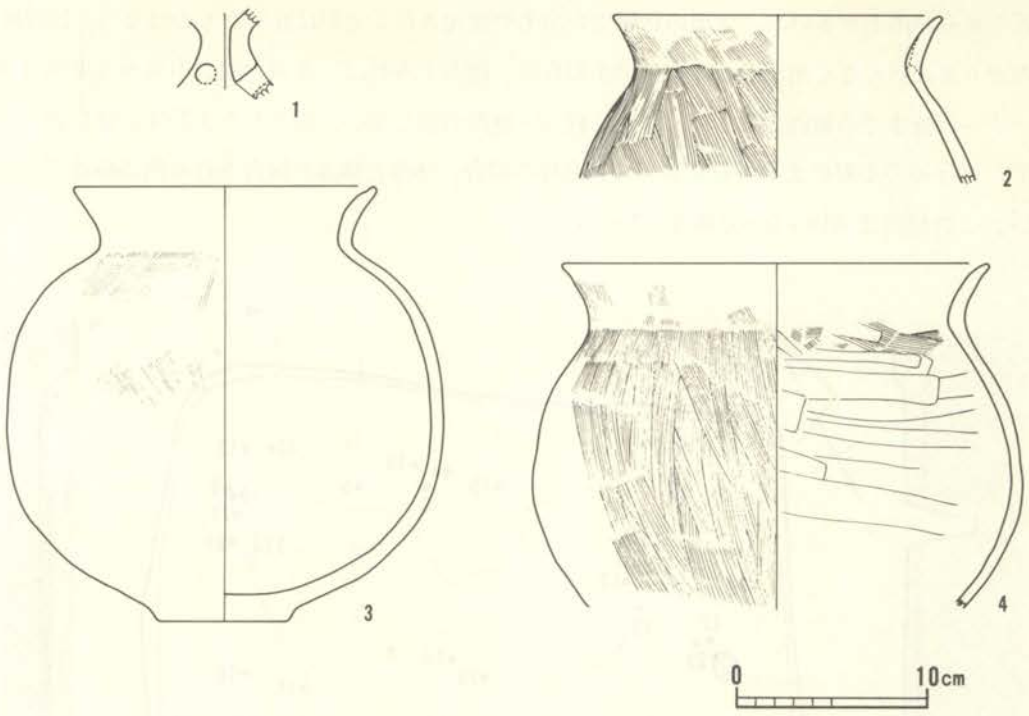
本址は、覆土がほとんど失なわれていたため、遺物は少ないが、ほとんどが床面近くからの出土である。1は床面直上の焼土粒子を多く含む暗褐色土の上面から出土したが、この暗褐色土と床面の間には、厚さ4cm程の焼土粒子を全く含まない暗褐色土が検出された。



第96図　024号住居跡

024号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	器台	脚部ほぼ完形	—— ——	ミガキ。内面ナデ。3孔。	覆土	
2	甕	口縁部1/5	(19.2) ——	口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ。	覆土	
3	甕	ほぼ完形	15.7 22.6	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	床面直上	
4	甕	1/4	(22.2) ——	口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。胴上部内面ハケメ後ヘラケズリ。	床面密着	



第97図　024号住居跡出土遺物

025号住居跡（第98～100・312図）

概要

本址は、024号跡の約 6.6m 程北側に位置する。地山は東から西に緩い斜面を形成している。北西の壁付近には木の根による攪乱が著しい。

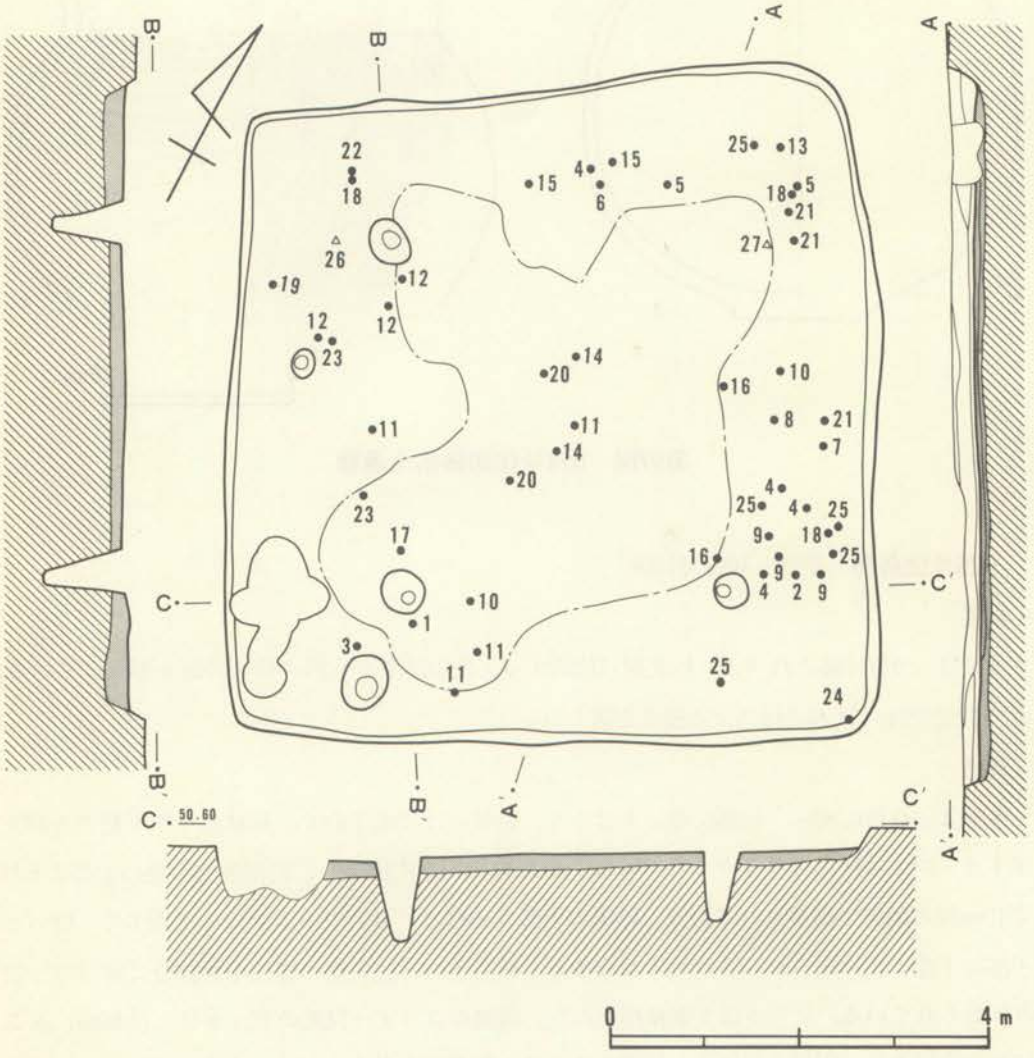
構造

本址は、長軸6.86m 、短軸6.62m をはかり、長軸はほぼ北を向く。形状はやや不整の方形を呈する。炉址は検出されなかった。床は、砂質ロームを主体とし、暗褐色との混合土による厚さ10cm程の貼床で構築されており、貼床の上部５cm程は、砂質ロームブロックが多く、堅いが、下部は上部に比べ砂質ロームブロックが少なく軟らかい。住居跡のほぼ中央部分は特に堅く踏み固められている。ピットは５個検出された。南側のコーナー付近のピットは、径48cm、深さは40cmをはかり、円形を呈する。位置からみて、貯蔵穴と考えられる。南西の壁近くのピットは、径23cm、深さ77cmである。このほかの３個のピットは柱穴と考えられ、径36～44cm、深さ70～82cmをはかる。北側の部分は柱穴が検出されなかったが、本来的には柱穴が存在していたと思われる。

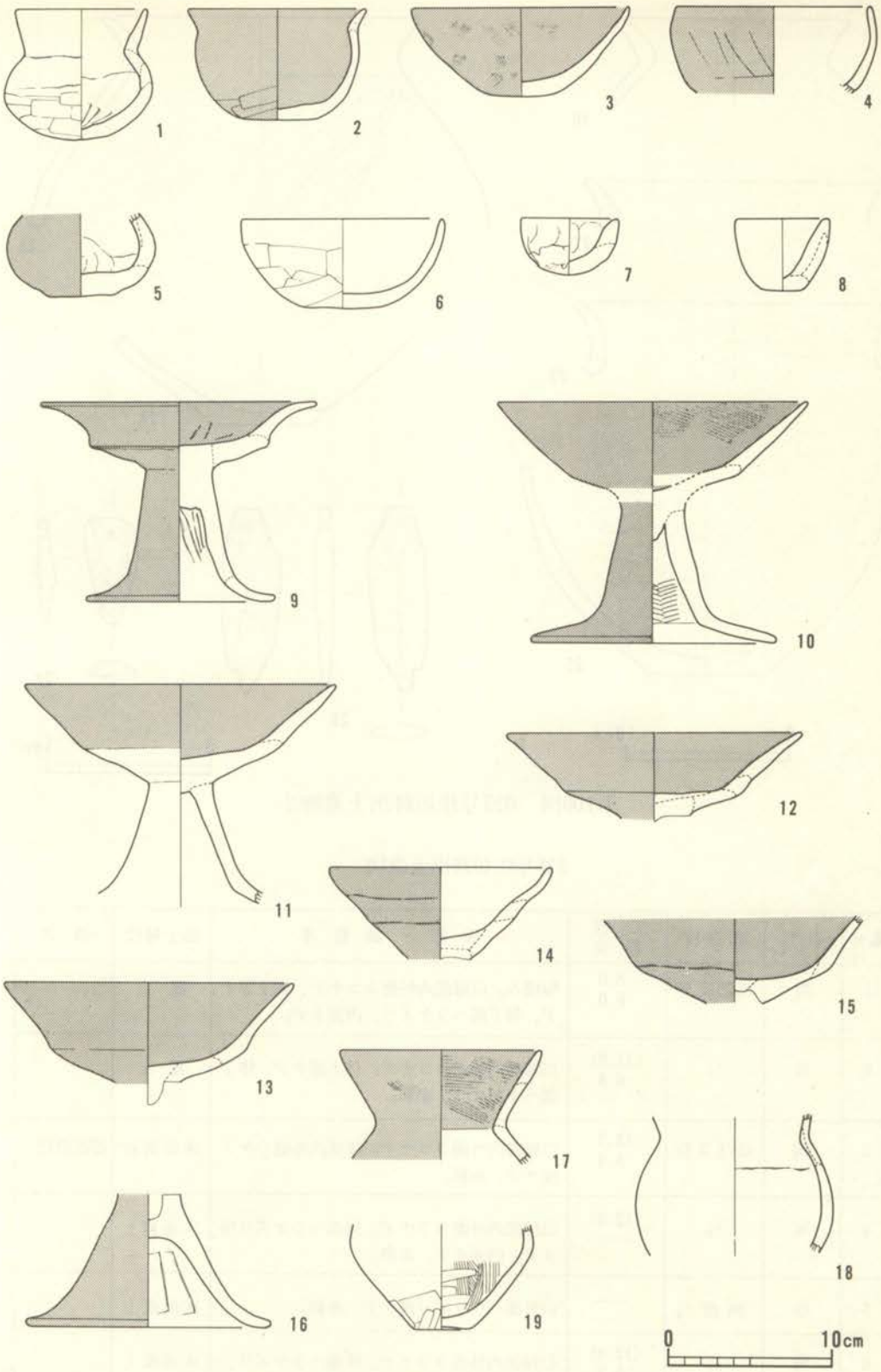
遺物の出土状況

本址から出土した遺物は、土器、石製品等であるが、土器は 500片をこえる。土器は、床面

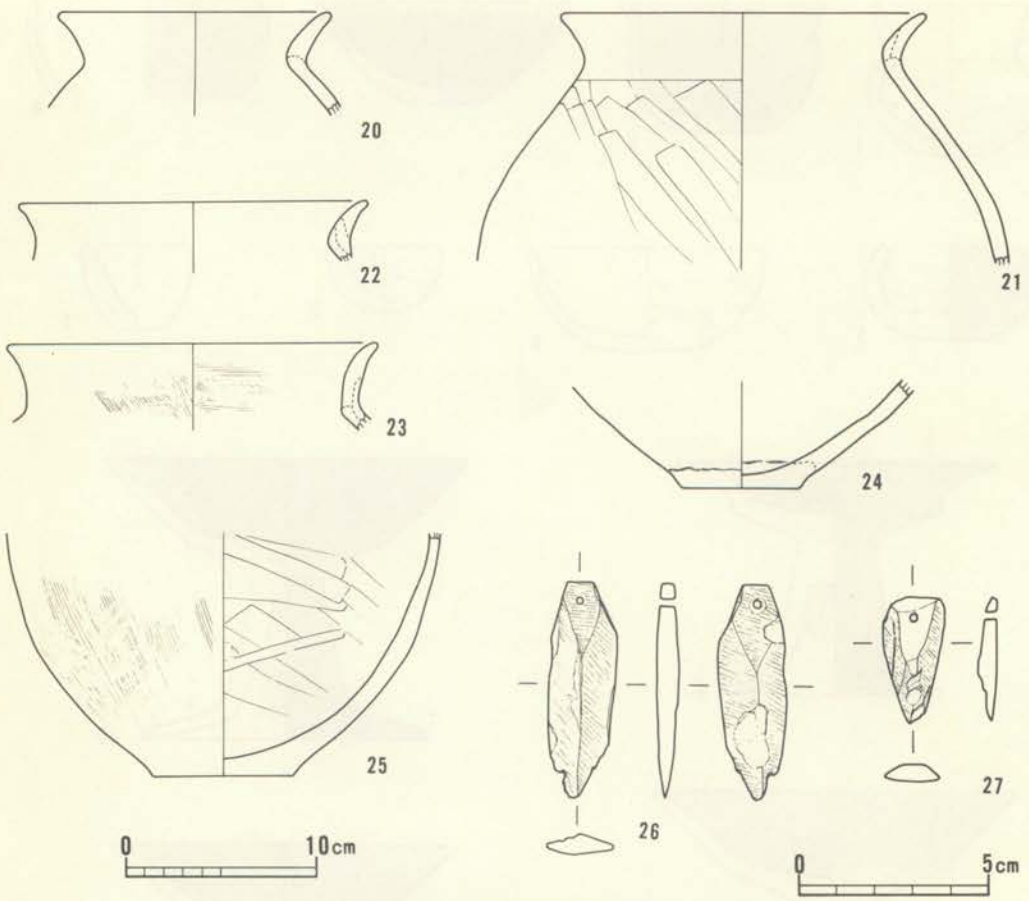
近くからの出土が多いが、完形の状態での出土や復元されて完形になったものはない。住居跡内からまんべんなく出土したこれらの土器片は、細かくみれば、北東の壁の中央から東側のコーナー付近までの範囲内に多く、また、柱穴と壁際の間に多い。出土した土器は、甕に比べ、坩、高坏等の小形の土器が非常に多く、高坏の場合、坏部と脚部が接合される例は極めて少ない。この傾向は 019・026号跡等と類似する。



第98図　025号住居跡



第99図　025号住居跡出土遺物(1)



第100図　025号住居跡出土遺物(2)

025号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坩	ほぼ完形	8.0 8.0	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴上部ナデ、胴下部ヘラケズリ。内面ナデ。	覆土	
2	埦	¼	(11.0) 6.8	口縁部内外面ヨコナデ、体上部ナデ、体下部ヘラケズリ。赤彩。	覆土	
3	埦	ほぼ完形	13.2 5.4	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ハケメ後ナデ。赤彩。	床面密着	器面磨耗
4	埦	⅓	(12.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。赤彩。	床面直上	
5	坩	胴部⅓	—— ——	内外面ヘラケズリ後ナデ。赤彩。	床面直上	
6	埦	½	(12.4) 5.5	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面直上	

7	ミニチュア	ほぼ完形	(6.0) 3.5	手捏ね。内外面ナデ。	覆　土	
8	ミニチュア	1/3	(5.8) 4.4	手捏煌。内外面ナデ。	覆　土	
9	高　坏	坏部 1/3 脚部 2/3	(16.8) 12.0	坏部内外面・裾部内外面ヨコナデ、脚部ナデ。脚部内外面ナデ。赤彩。	床面直上	
10	高　坏	坏部1/4 脚部完形	(19.0) ——	坏部内外面ヨコナデ、脚部ナデ。脚部内面一部ハケメ。赤彩。	床面直上	坏部と脚部接合しない
11	高　坏	坏部 1/3	(19.0) ——	ナデ（?）。赤彩。	床面密着	器面磨耗
12	高　坏	坏部 1/3	(18.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。赤彩。	床面密着	
13	高　坏	坏部 1/3	(17.6) ——	内外面ナデ。赤彩。	覆　土	
14	高　坏	坏部 2/3	13.6 ——	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ。赤彩。	床面直上	器面磨耗
15	高　坏	坏部 1/3	—— ——	内外面ナデ。赤彩。	床面密着	器面磨耗
16	高　坏	脚部ほぼ完形	—— ——	脚部ナデ、裾部内外面ヨコナデ。内面ヘラケズリ。赤彩。	床面直上	
17	坩	口縁部1/2	(12.4) ——	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。口縁部内面ハケメ後ヨコナデ。赤彩。	覆　土	器面磨耗
18	坩	胴部 1/3	—— ——	内外面ナデ。	覆　土	器面磨耗
19	坩	胴部 1/3	—— ——	胴上部ナデ、胴下部ヘラケズリ。胴下部内面ハケメ後ヘラケズリ。	床面密着	
20	甕	口縁部1/2	(14.2) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ナデ。	床面直上	
21	甕	1/4	(19.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。	覆　土	
22	甕	口縁部1/4	(18.2) ——	口縁部内外面ヨコナデ。	覆　土	
23	甕	口縁部1/4	(19.0) ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ。	床面密着	
24	甕	底部完形	—— ——	ナデ。	床面直上	
25	甕	胴下部1/3	—— ——	胴中部ナデ、胴下部ハケメ後ナデ。胴部内面ヘラケズリ。	覆　土	
26	剣形模造品	長さ 5.5cm、幅 1.8cm、厚さ 0.5cmをはかる。基部に径2mmの小孔が認められる。両面共中央に鎬を有し、断面は菱形を呈する。滑石。床面密着。				
27	剣形模造品	長さ 3.3cm、幅 1.6cm、厚さ 0.5cmをはかる。基部に径2mmの小孔が認められる。片面のみ中央に鎬を有する。滑石。覆土。				

026号住居跡（第101～104図）

概要

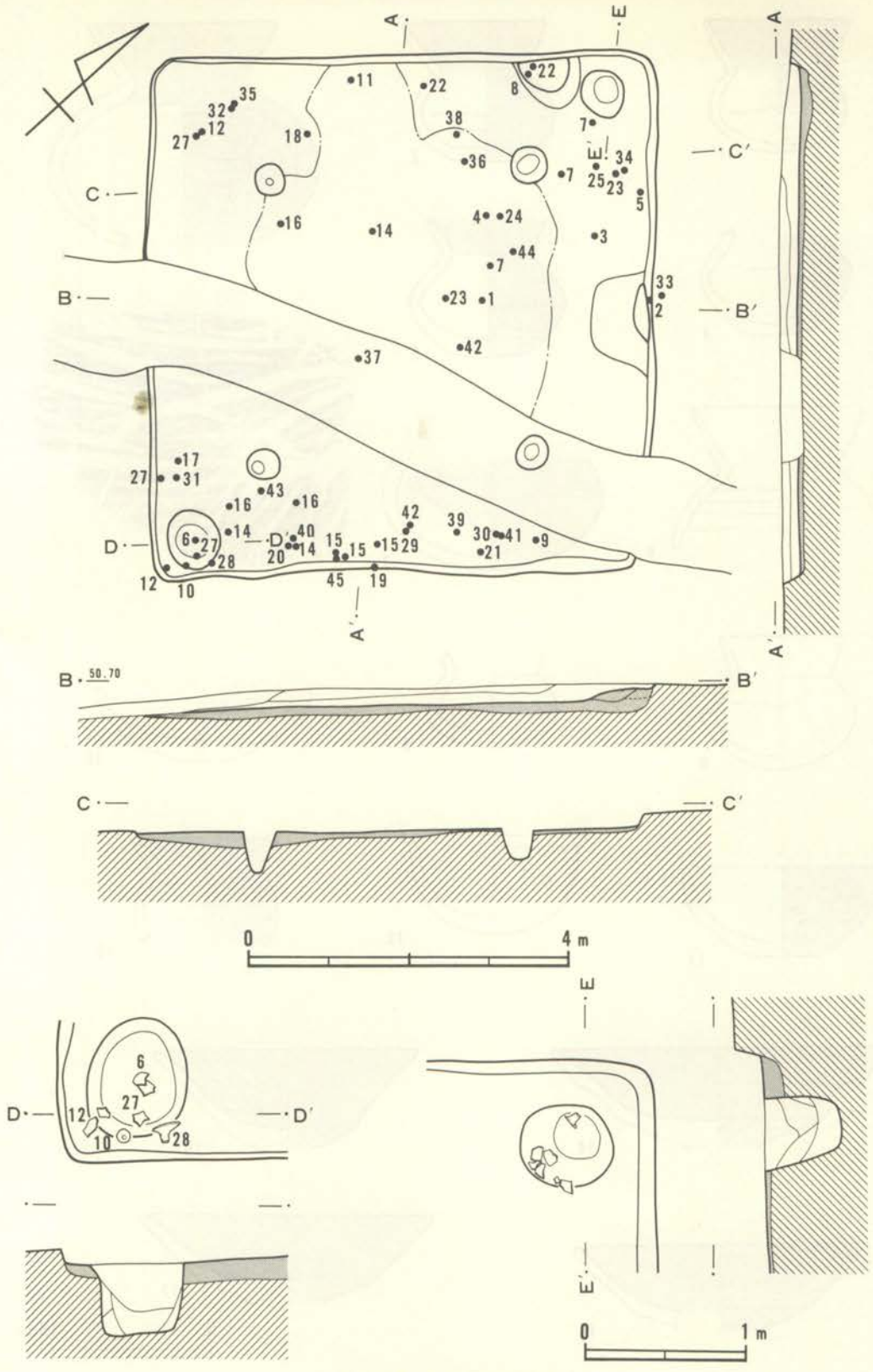
本址は、027号跡の5m程北西に位置する。地山が東から西に緩く傾斜する斜面に位置し、地山への掘り込みが浅いため、南西の壁の立ち上がりはわずかである。本址の中央を東から西に走る溝により、1.2mの幅でほぼ床面まで破壊されている。

構造

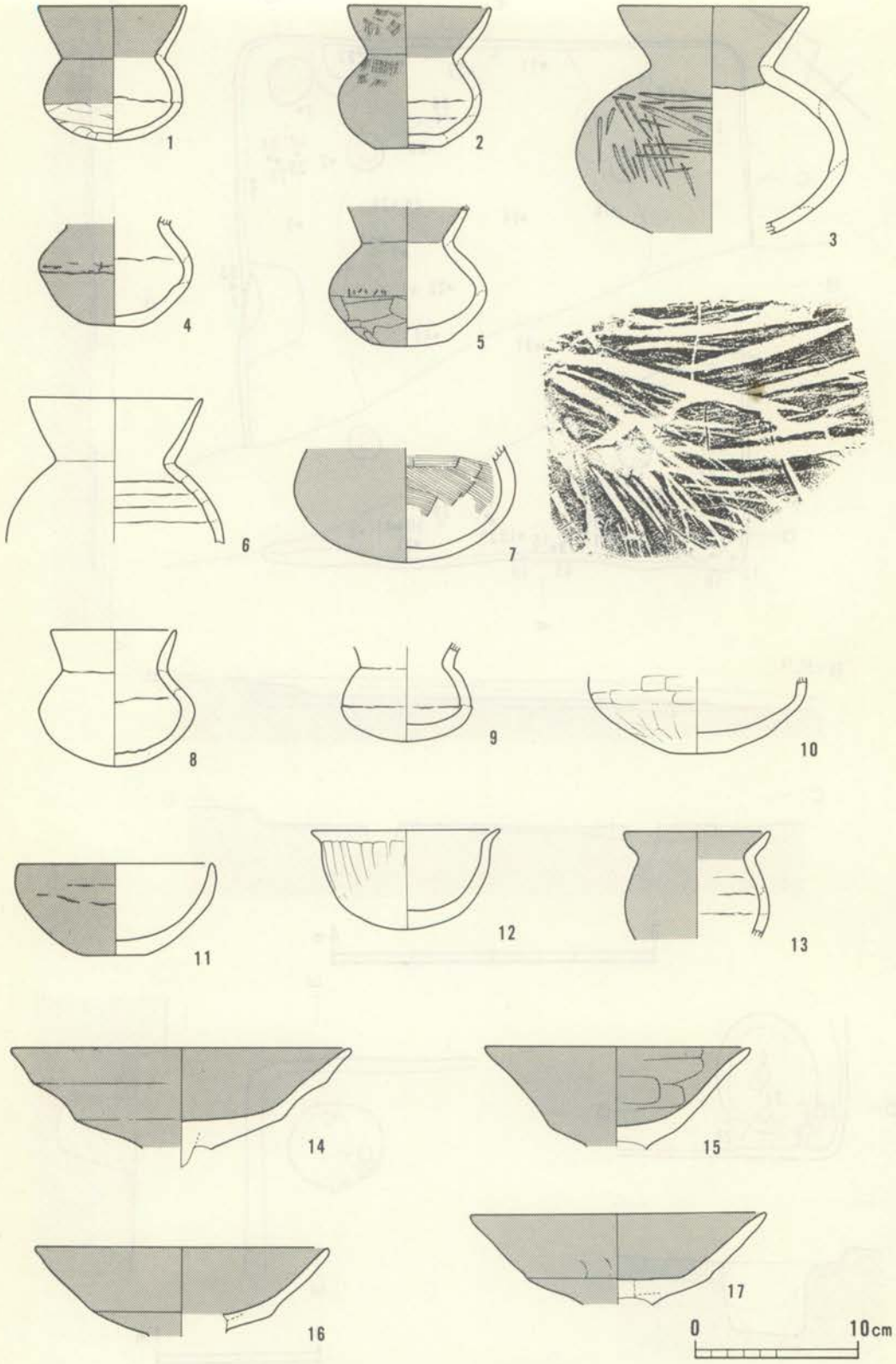
本址は、長軸6.39m、短軸6.28mをはかり、長軸は北西を向く。形状は整った方形を呈する。炉跡は検出されなかった。床は、暗褐色土と砂質ロームによる厚さ10cm程の貼床であり、貼床は上部に比べて下部の方が砂質ロームブロックが多い。北西の壁から住居中央部にかけての範囲が堅い。北西の壁の北側と北東の壁の中央部には床面に砂質ロームブロックが検出された。規模・形状は、それぞれ径60×82cmの楕円形と80×110 cmの方形である。この砂質ロームブロックは床面とほぼ接しており、この下は貼床である。住居跡の出入口に関する施設と考えられるが、2か所検出されたため、疑問点も残る。ピットは6個検出された。南及び北のコーナー際のピットは、径58cm、75cmをはかり、深さはそれぞれ42cmと50cmであり、貯蔵穴と考えられる。ほかの4個は径36～48cm、深さ40～52cmをはかり、柱穴と考えられる。柱穴間の距離は、各辺とも一定せず、約3.2～3.6 mをはかり、各柱穴間を結ぶ形状も歪んだ方形を呈するが、西側の柱穴が住居中央に寄りすぎているためである。

遺物の出土状況

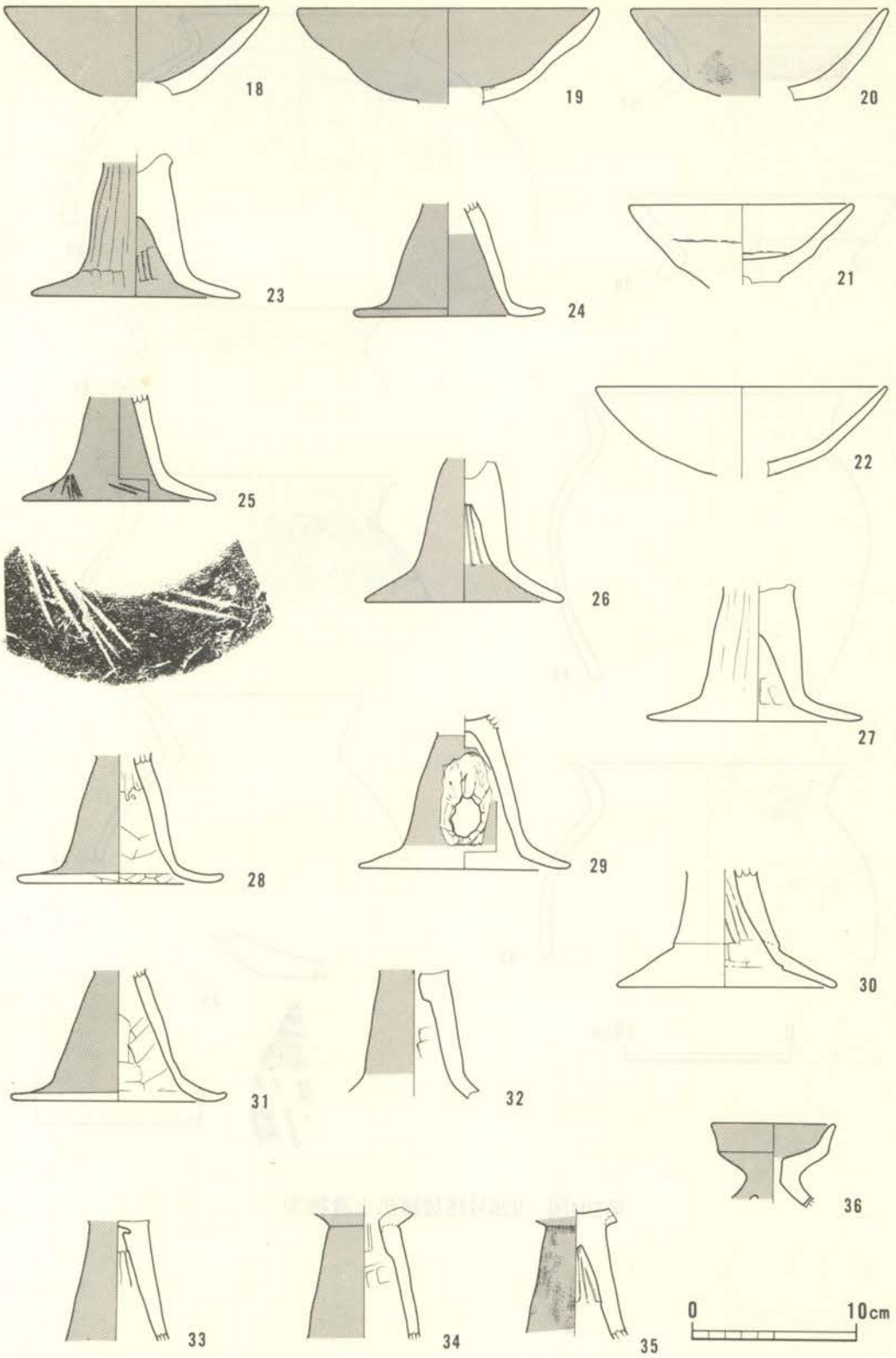
本址から出土した遺物は土器であり、400片をこえる。これらの土器は、壁側に多く、特に南東の壁際からの出土が著しく、覆土中からの出土よりは床面あるいは床面直上からの出土が多い。貯蔵穴の中からも出土した。出土した土器は、ほとんどが破片である。土器の中で多いのは、坩、高坏等の小形の土器で、高坏が特に多いが、坏部と脚部が接合したものはない。図示できなかった土器でも、高坏の脚部が約20個体程あり、坩、高坏等の小形の土器の口縁部片も約90個体程出土しているのに比べ、甕の口縁部片は約20個体程しか検出されなかった。この数字に多少疑問が残るにしても、高坏等の小形の土器が甕等の大形の土器より多く出土したということには変わりはなく、その出土状況は019・025号跡等と同様である。



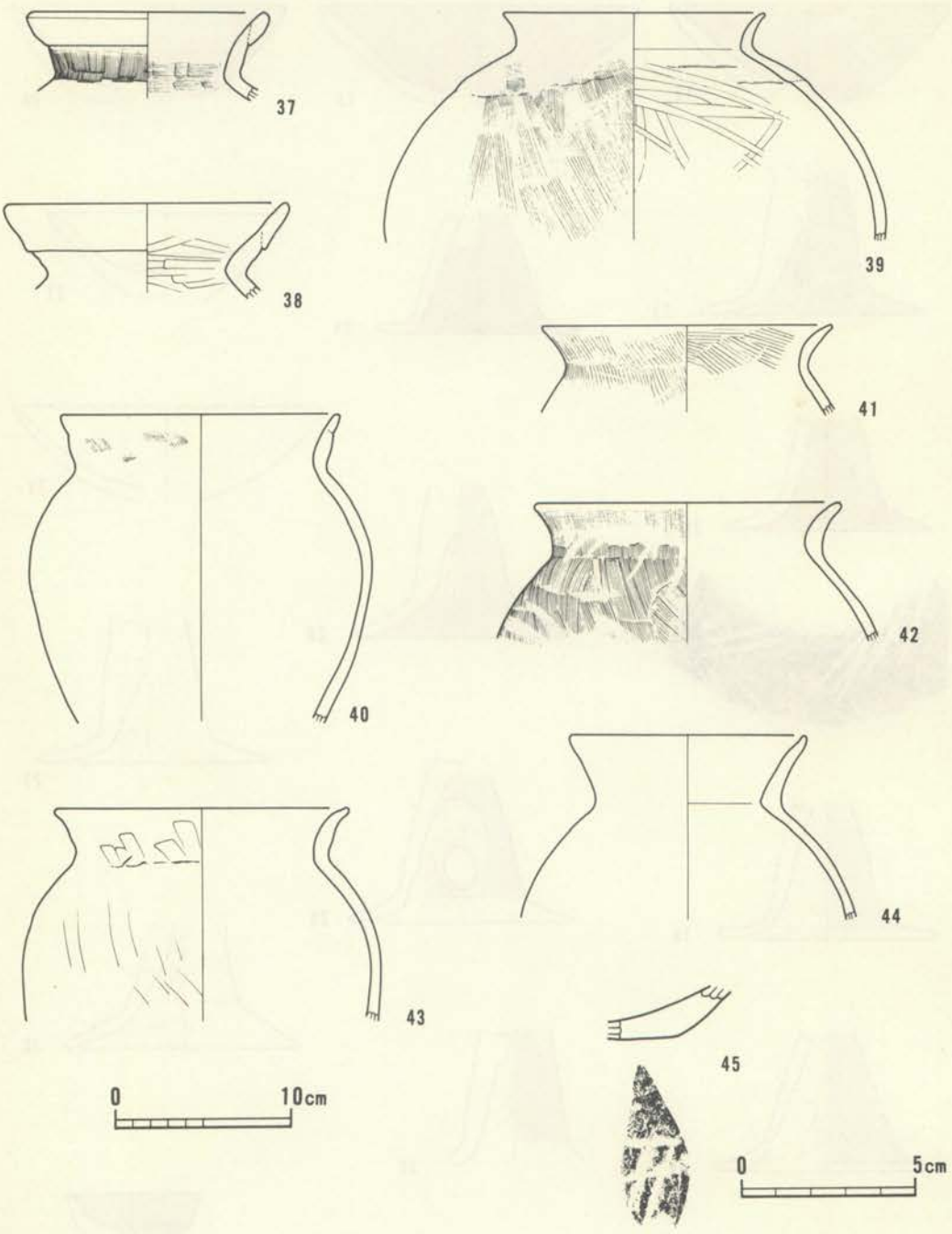
第101図　026号住居跡



第102図　026号住居跡出土遺物(1)



第103図　026号住居跡出土遺物(2)



第104図　026号住居跡出土遺物(3)

026号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坩	ほぼ完形	9.0 8.3	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴上部ナデ、胴下部ヘラケズリ。内面ナデ。赤彩。	床面直上	
2	坩	完形	9.0 8.8	輪積み。口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴上部ハケメ後ナデ、胴下部ナデ。内面ナデ。赤彩。	床面直上	
3	坩	口縁部完形 胴部½	11.6 ——	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴部ナデ。内面ナデ。赤彩。	覆土	胴部に断面三角形を呈する使用痕が多数認められる。
4	坩	胴部完形	—— ——	輪積み。内外面ナデ。赤彩。	覆土	
5	坩	胴部完形	—— ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴上部ナデ、胴下部ヘラケズリ。内面ナデ。赤彩。	床面直上	
6	坩	口縁部完形 胴部½	10.5 ——	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴部ナデ。	ピット	
7	坩	胴部⅔	—— ——	胴部ナデ。内面ハケメ。赤彩。	覆土	
8	坩	完形	7.6 8.2	輪積み。口縁部ヨコナデ、胴部ナデ（？）。	覆土	器面磨耗
9	坩	胴部⅔	—— 5.6	輪積み。内外面ナデ。	覆土	器面磨耗
10	坩	胴部ほぼ完形	—— ——	胴部ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。	ピット	
11	埦	ほぼ完形	11.8 5.5	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ。赤彩。	床面密着	
12	埦	⅓	(11.6) 6.0	口縁部内外面ヨコナデ、体上部ヘラケズリ、体下部ナデ。内面ナデ。	床面密着	
13	壺	⅔	(8.8) ——	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。赤彩。	覆土	器面磨耗
14	高坏	坏部⅔	20.8 ——	内外面ナデ。赤彩。	床面密着	器面磨耗
15	高坏	坏部½	(16.4) ——	内外面ヘラケズリ後ナデ。赤彩。	床面密着	器面磨耗
16	高坏	坏部⅘	18.0 ——	内外面ナデ。赤彩。	床面密着	
17	高坏	坏部¼	(18.2) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。赤彩。	床面密着	
18	高坏	坏部¼	(16.0) ——	内外面ナデ、赤彩。	床面密着	
19	高坏	坏部¼	(18.4) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。赤彩。	覆土	

20	高 坏	坏部完形	15.4	一部ハケメ後ナデ。内面ナデ。赤彩。	床面直上	
21	高 坏	坏 部 2/3	13.6	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	覆 土	
22	高 坏	坏部完形	17.6	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	床面直上	
23	高 坏	脚 部 2/3	——	脚部内外面ヘラケズリ後ナデ。赤彩。	床面直上	
24	高 坏	脚部ほぼ完形	——	脚部内外面ナデ、裾部内外面ヨコナデ。赤彩。	床面直上	
25	高 坏	脚部ほぼ完形	——	脚部内外面ナデ、裾部内外面ヨコナデ。赤彩。	覆 土	断面三角形を呈する使用痕が7条認められる
26	高 坏	脚部ほぼ完形	——	脚部ナデ、裾部内外面ヨコナデ。脚部内面ヘラケズリ。赤彩。	ピット	
27	高 坏	脚部ほぼ完形	——	脚部ヘラケズリ後ナデ、裾部ヨコナデ。脚部内面ヘラケズリ。	床面密着・ピット	
28	高 坏	脚 部 2/3	——	脚部ナデ、裾部ヘラケズリ。脚部内面ヘラケズリ。赤彩。	ピット	
29	高 坏	脚部ほぼ完形	——	脚部内外面ナデ、裾部内外面ヨコナデ。赤彩。	床面直上	脚部に穿孔あり
30	高 坏	脚部ほぼ完形	——	ナデ。内面ヘラケズリ。	床面直上	
31	高 坏	脚部ほぼ完形	——	ナデ。内面ヘラケズリ。赤彩。	床面密着	
32	高 坏	裾部以外脚部完形	——	ナデ（?）。内面ヘラケズリ。赤彩。	床面密着	器面磨耗
33	高 坏	脚 部 3/4	——	ミガキ。内面ヘラケズリ。赤彩。	住居跡外	
34	高 坏	脚 部 1/2	——	ナデ。内面ヘラケズリ。赤彩。	覆 土	
35	高 坏	裾部以外脚部完形	——	ハケメ後ナデ。内面ヘラケズリ。赤彩。	床面密着	
36	器 台	受 部 1/3	(6.4)	内外面ミガキ。3孔。赤彩。	床面直上	
37	壺	口縁部1/4	(13.2)	口縁部内外面ヨコナデ、頸部ハケメ、胴部ナデ。頸部内面ハケメ後ナデ。	床面直上	
38	壺	口縁部1/4	(15.6)	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ナデ。頸部内面ヘラケズリ。	覆 土	
39	甕	口縁部1/4 胴部1/2	(15.0)	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。胴上部内面ヘラケズリ。	床面直上	
40	甕	口縁部2/3 胴部1/4	15.7	口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴部ナデ。	床面直上	

41	甕	口縁部½	(16.4) —	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ。胴部ハケメ後ナデ。	床面直上	
42	甕	口縁部¼ 胴部½	(17.2) —	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後一部ナデ。	床面直上	
43	甕	口縁部¼	(16.6) —	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。	床面密着	
44	甕	口縁部½ 胴部¼	(13.2) —	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。	覆　土	
45	坩		— —	ナデ。内面赤彩。	床面密着	底部に断面三角形の線刻上の使用痕あり。

027号住居跡（第105・106図）

概要

本址は、 026号跡の南東5mの緩斜面上に位置する。地山への掘り込みも浅く、覆土の大半が削平されていた。

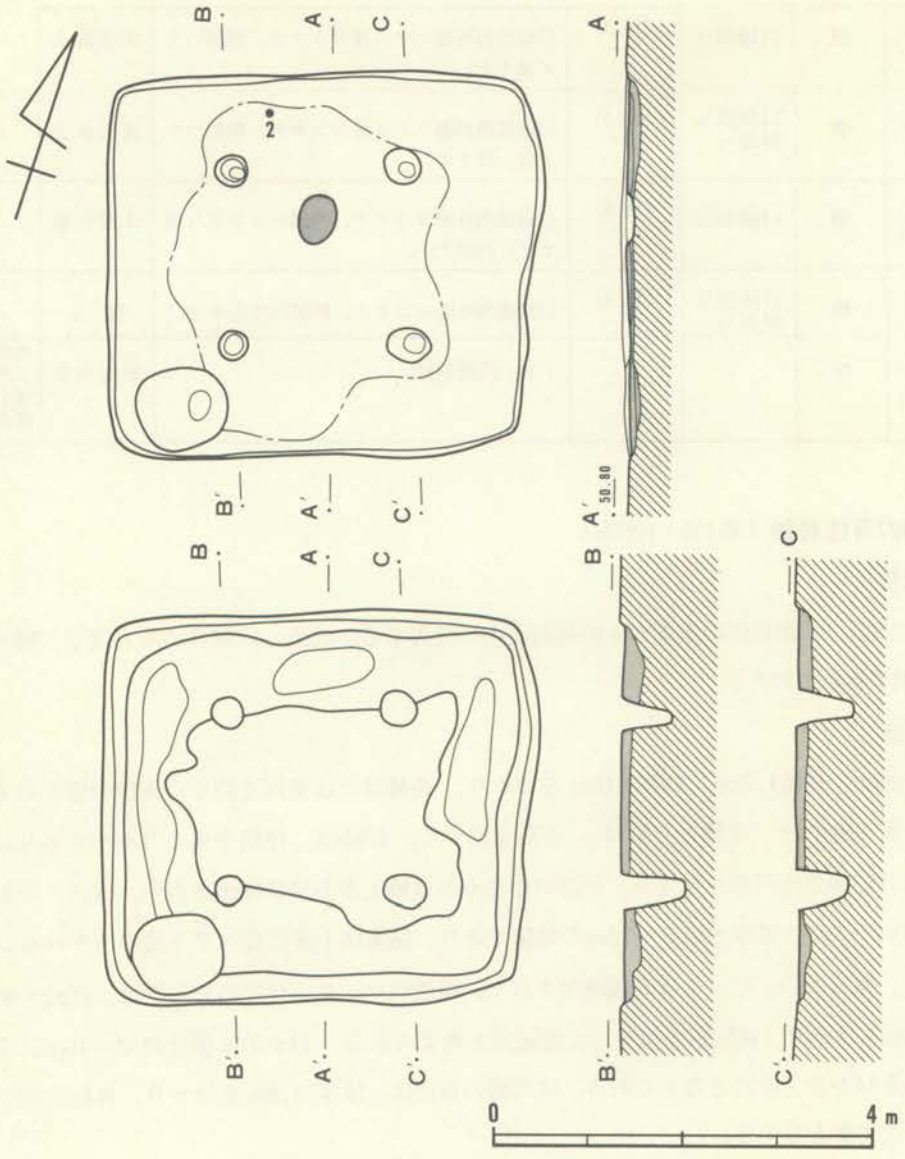
構造

本址は、長軸4.52m、短軸4.00mをはかり、 長軸はほぼ東西を向く。東側の壁がわずかに外側に張り出すが、 全体としては、 方形を呈する。 炉跡は、住居中央よりやや北寄りに位置し、径30×53cmの楕円形を呈する。炉跡の中央からは焼土が多量に検出された。床は、黒褐色土と砂質ロームによる厚さ約5～20cmの貼床であり、貼床は上部に比べて下部の方が砂質ロームが多く、軟らかい。ピットは5個検出された。南西のコーナー付近のピットは、径82×95cm、深さ33cmをはかり、楕円形を呈する。貯蔵穴と考えられる。 ほかの4個は径32～40cm、深さ54～68cmをはかり、柱穴と考えられる。柱穴間の各辺は、ほぼ 1.8mをはかり、各柱穴間を結ぶ形状は正方形を呈する。

荒掘り面は、住居中央部の約 2.0×2.4 mの不整方形を呈する部分が高く、その周囲は低い。周囲の低い部分は、壁から10～20cm程内側から低くなっており、中央部との比高差は7～10cm程である。

遺物の出土状況

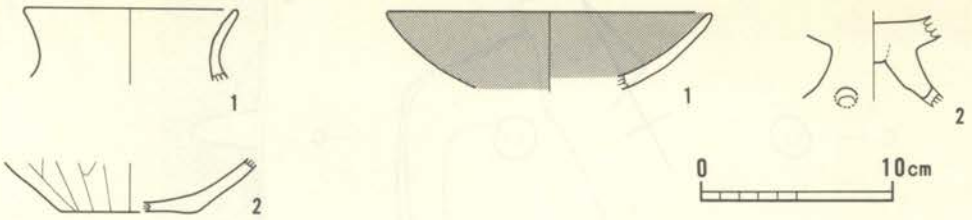
本址は、覆土の大半が失なわれていたため、出土した遺物は少なく、床面直上から約20片程の土器が出土したのみである。



第105図　027号住居跡

027号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	壺	口縁部1/6	(11.0) —	口縁部内外面ヨコナデ。	床面直上	
2	甕	底部1/4	— —	ヘラケズリ。内面ナデ。	床面直上	



第106図　027・028号住居跡出土遺物

028号住居跡（第106・107図）

概要

本址は、019号跡と 020号跡との間に位置し、 020号跡とはわずか70cmの程離をはかる程度である。本址付近は水田の畦が南北に走っており、この畦を境に東側と西側の地山は30cm程の段差が認められた。このため、西側半分は床面から30cm程低く形成された施設以外は、完全に削平されており、西側においてはかろうじて柱穴の一部が検出されたにすぎない。

構造

本址は、検出された柱穴から推測すると、一辺が約 5.4m 程の規模を有し、隅丸方形を呈すると考えられる。遺存していた床面内において、炉跡は検出されなかった。床は、黒色土に砂質ロームを含む貼床である。ピットは4個検出され、径34～38cm、深さ74～80cmをはかり、柱穴と考えられる。柱穴間の距離は、長辺 3.0m 、短軸 2.7m をはかり、各柱穴間を結ぶ形状は長方形を呈する。

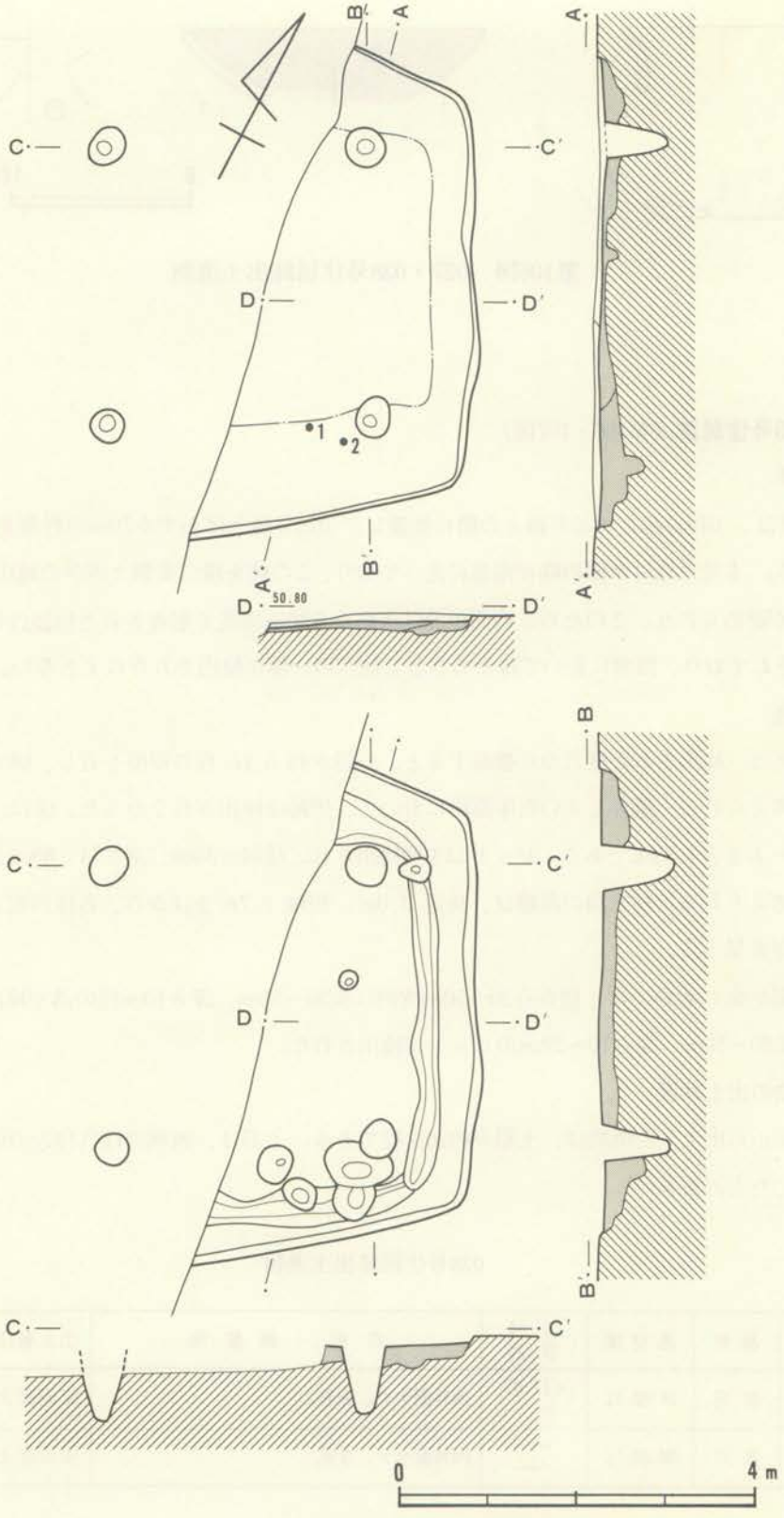
荒掘り面においては、壁から20～50cm内側に幅30～50cm、深さ10cm程の溝が検出された。また、径20～50cm、深さ10～20cmのピットが検出された。

遺物の出土状況

本址から出土した遺物は、土器が約20片程である。土器は、西側の柱穴付近の床面近くから出土したものが多い。

028号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	高坏	坏部¼	(17.0) —	内外面ナデ。赤彩。	床面直上	
2	高坏	脚部½	— —	内外面ナデ。3孔。	床面直上	



第107図　028号住居跡

029A号住居跡（第108～110図）

概要

本址は、029B号の北西の壁を一部切っている。地山への掘り込みが浅いため、確認面が床面に近く、壁の立ち上がりはわずかである。また、東側のコーナーに木の根による攪乱がある。

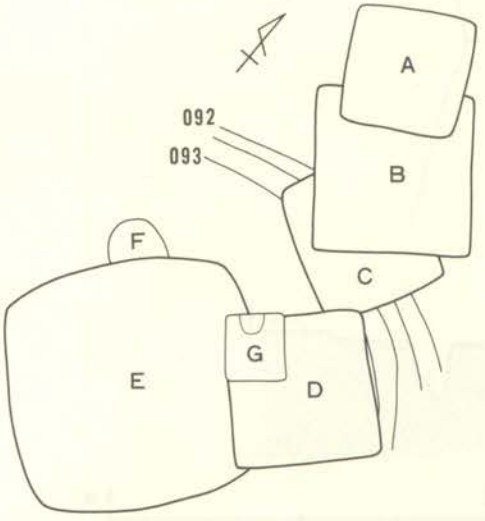
構造

本址は、長軸5.12m、短軸5.08mをはかり、方形を呈する。炉跡は、住居中央よりやや北西に位置し、径42×82cm、深さ5cmの楕円形を呈する。炉跡中からは焼土が多量に検出された。床は、砂質ロームを主体とした厚さ10cm程の貼床で、全体に堅い。ピットは小形のものが4個と大形のものが1個検出された。南側のコーナー部分には、住居跡の壁に接して、約1.2×2.5m、深さ10cmの長方形のピットが検出された。この底面には、更に径33cm、深さ33cmのピットが検出された。ほかの3個は径30～38cm、深さ39～92cmをはかるが、位置から推測すると柱穴とは考えられない。

荒掘り面は、西側のピットの周辺で12cm、西側の壁際が5cm低く、そのほかはほぼ平坦である。029B号跡と重複している南側の荒掘り面は、029B号跡のそのほかの部分の形状と一致し、本址はこの重複部分については荒掘りはされていない。

遺物の出土状況

本址は、覆土が浅いため、確認できた遺物はほとんどが、床面に近いものばかりであるが、完形の状態で出土した土器はない。土器は炉跡の周辺と南側のコーナーの浅いピット内に多く検出された。7はほぼ完形に復元された土器であり、破片は炉跡の上面約20×50cmの範囲に検出された。また、炉跡の北側で床面から出土した土器は図示できなかったが、胴部にハケメ調整の施された甕である。

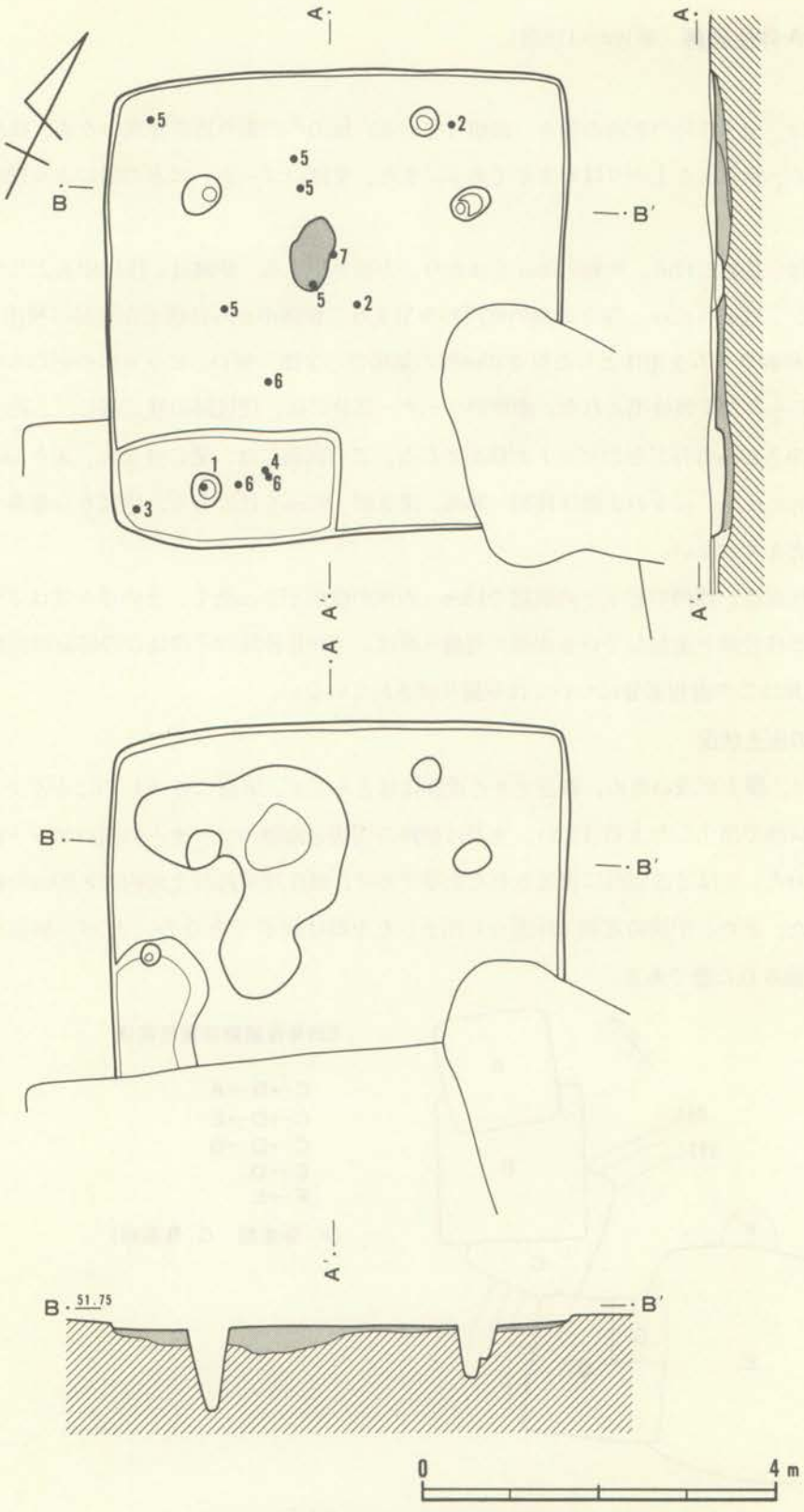


029号住居跡群重複関係

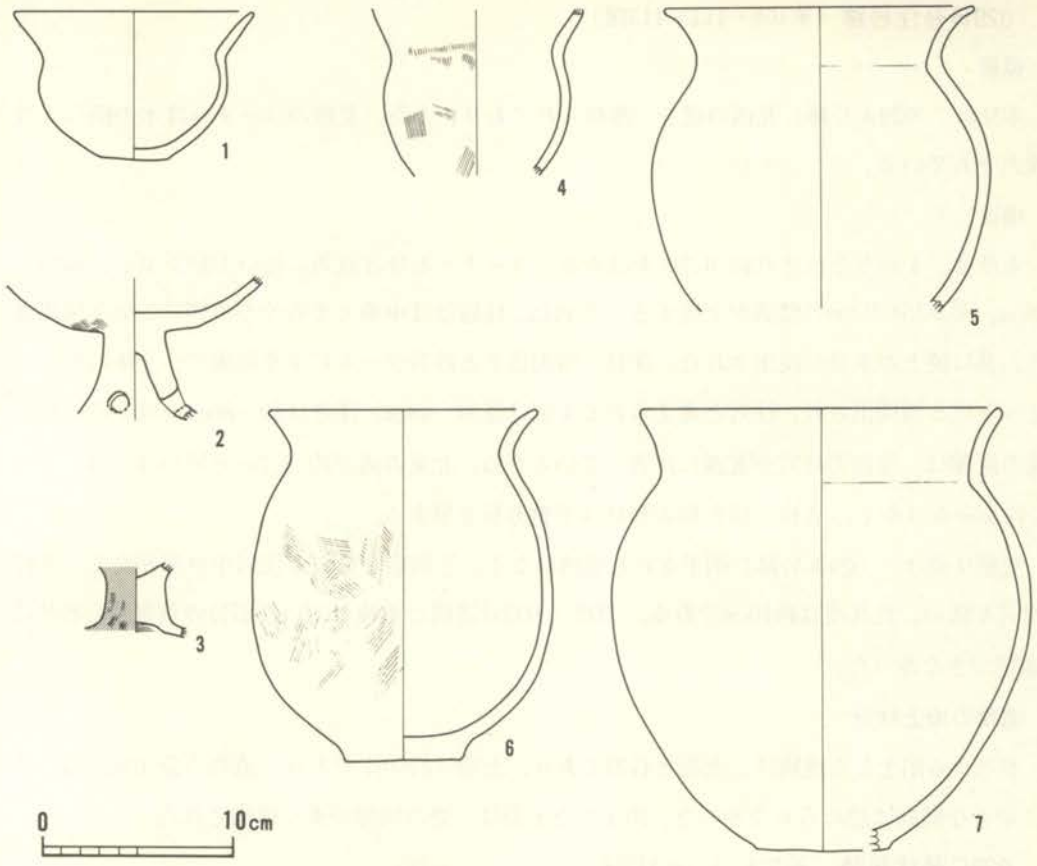
C→B→A
C→D→E
C→D→G
E→D
F→E

（F 弥生期　G 鬼高期）

第108図　029号住居跡群重複関係



第109図　029A号住居跡



第110図　029A号住居跡出土遺物

029A号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坩	口縁部1/3 胴部1/2	(13.0) 7.8	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ミガキ。	ピット	
2	高坏	脚部1/3	—— ——	坏部ハケメ後ナデ、脚部内外面ナデ。坏部内面ミガキ。3孔。	床面直上	
3	高坏	脚部2/3	—— ——	ハケメ後ナデ。内面ハケメ。赤彩。	覆土	
4	甕	1/4	—— ——	ハケメ後ナデ。内面ナデ。	ピット	
5	甕	口縁部1/4 胴部2/3	(16.1) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	床面密着	
6	甕	口縁部完形 胴部1/2	13.8 18.1	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	ピット・ 床面直上	
7	甕	口縁部1/4 胴部ほぼ完形	(18.2) 22.7	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	床面直上	

029B号住居跡（第108・111～113図）

概要

本址は、029A号跡に北西の壁を一部切られており、また、北側のコーナーは木の根により攪乱されている。

構造

本址は、4辺がそれぞれ約 6.7m をはかる。コーナーもほぼ直角に近い方形を呈し、幅26～30cm、深さ15～20cmの壁溝が全周する。炉跡は、住居ほぼ中央とそのやや東側に2か所検出され、共に焼土が多量に検出された。床は、暗褐色土と砂質ロームによる貼床で、全体に堅い。ピットは6個検出され、柱穴と考えられる4個は径30～48cm、深さは60～80cmをはかる。柱穴間の距離は、東側の柱穴が北西に片寄っているため、北東の辺が約 3.7m と短いほかは、すべて約4 m をはかる。各柱穴間を結ぶ形状は不整方形を呈する。

荒掘り面は、029A号跡に削平された痕跡はなく、三角形を呈する住居中央部が高く、その周辺が低い。比高差は約10cmである。092・093号遺構と重複している部分の荒掘りの形状は確認できなかった。

遺物の出土状況

本址から出土した遺物は、土器と石器であり、土器は約60片である。遺物の分布状況は、特に顕著な傾向は認められなかった。出土した土器は、甕の底部が多く検出された。

029C号住居跡（第108・111～113図）

概要

本址は、029B号跡により床面の約半分が、また、南側のコーナーの一部を029D号跡に切られている。029B号跡と重複している範囲は、荒掘り面においても破壊されている。

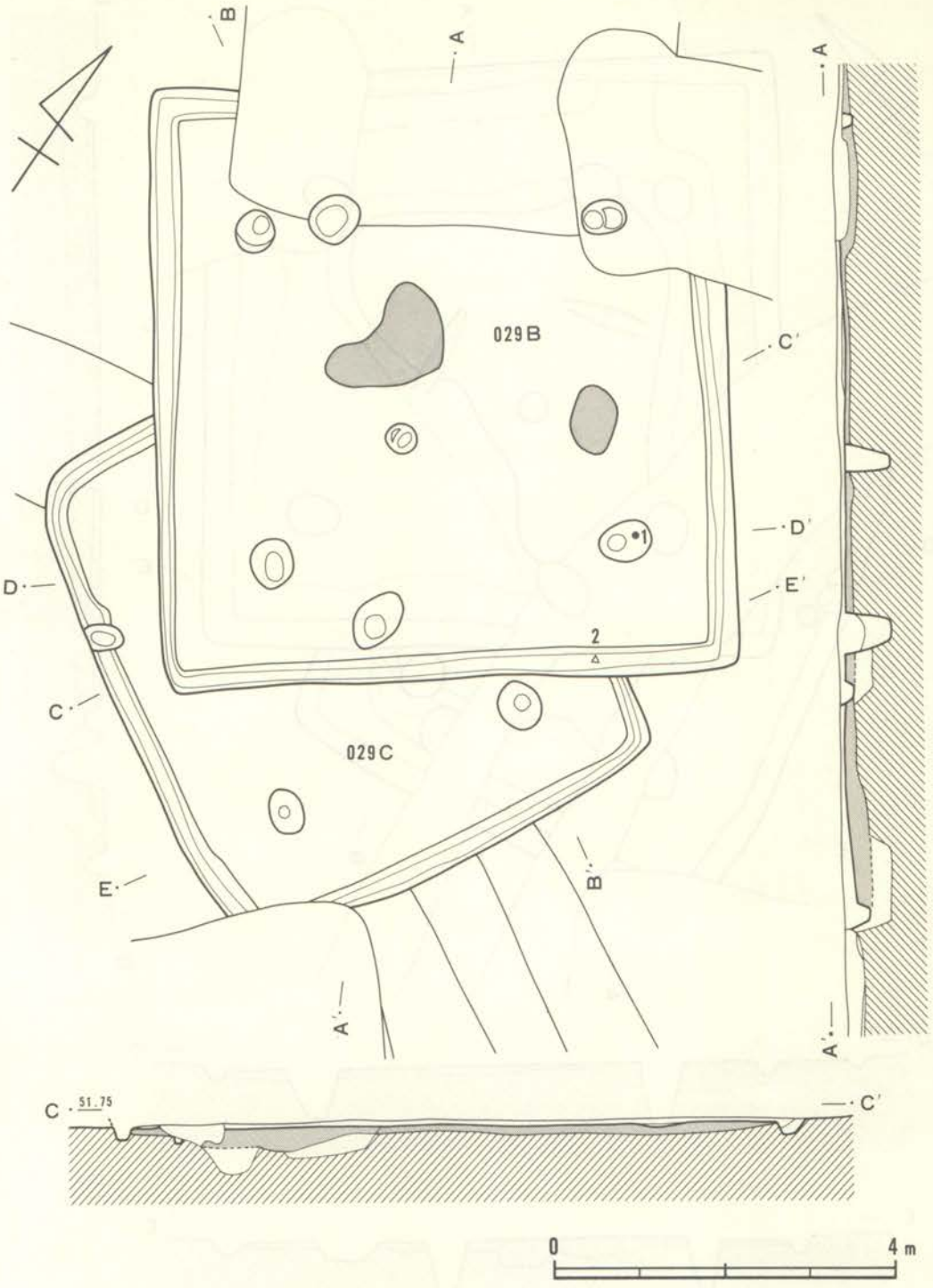
構造

本址は、長軸5.96m、短軸5.55m をはかり、長軸は北西を向く。形状は方形を呈し、幅20～27cm、深さ10～15cmの壁溝が検出された。029B号跡の荒掘り面に本址の壁溝の一部が検出された。炉跡は、029B号跡に破壊された可能性もあるが、検出されなかった。床は、黒褐色土を主体にした貼床で、全体が軟らかい。ピットは4個検出された。南西の壁溝内のピットは径40cm、深さ38cmをはかる。ほかのピットは柱穴で、径35～46cm、深さ54～76cmをはかる。西側の柱穴は、住居西側の下には 093号遺構が走っており、床面も軟らかであるため検出されなかったが、おそらくこの付近に穿たれていたものと考えられる。

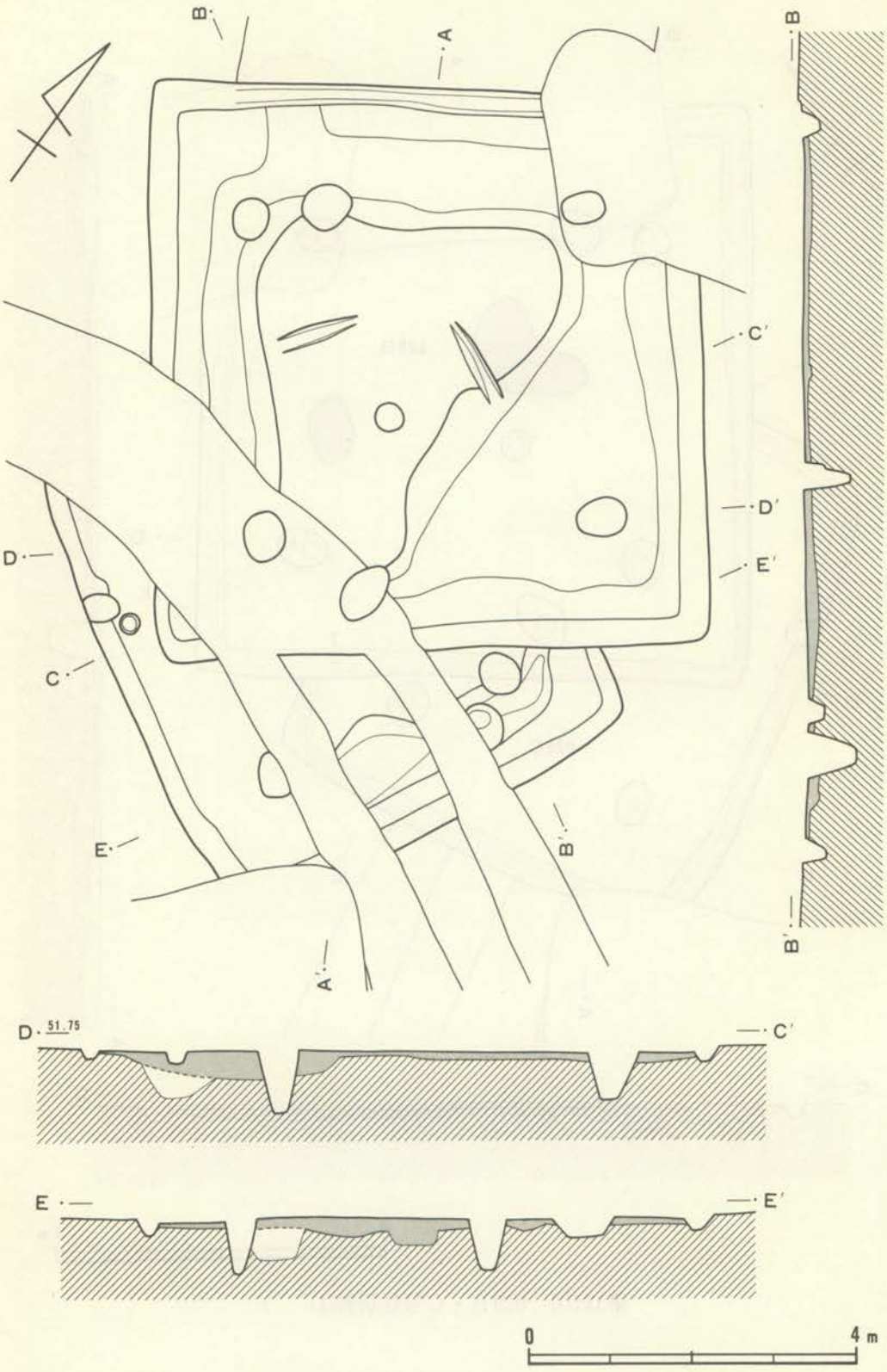
荒掘り面は、溝と重複している付近は検出することができなかったが、南東の壁側に幅40～98cm、深さ10～20cmの溝状の凹みが検出された。

遺物の出土状況

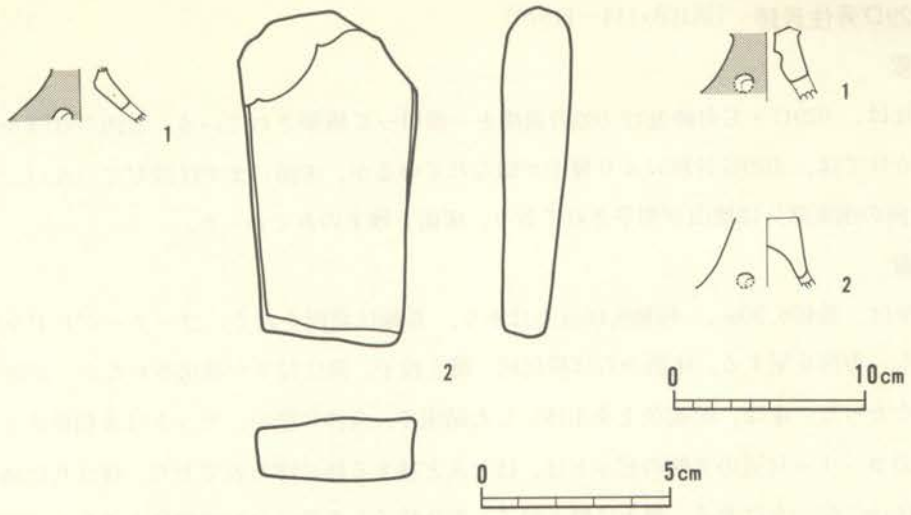
本址は、覆土が削平されており、わずかしか遺存していないため、出土した遺物は少ない。



第111図　029B・C号住居跡(1)



第112図　029B・C号住居跡(2)



第113図　029B・C号住居跡出土遺物

ほとんどが床面近くより出土した。図示した土器以外では、甕の口縁部が8個体検出され、この内の3個体は口唇部に断面三角形状のキザミが施されている。

029B号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	器台	脚部1/3	― ―	ミガキ。内面ナデ。3孔。赤彩。	ピット	
2	砥石	一部を欠損しているが、長さ 8.6cm、幅 4.6cm、厚さ 1.8cmで両面共に使用されている。泥岩。壁溝内出土。				

029C号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	器台	脚部2/3	― ―	ミガキ。内面ナデ。3孔。赤彩。	床面直上	
2	高坏	脚部2/3	― ―	ミガキ。内面ナデ。3孔。	床面直上	

029D号住居跡 (第108・114～116図)

概要

本址は、029C・E号跡及び093号遺構を一部切って構築されている。北西の壁際から中央部にかけては、029G号跡により覆土が切られているが、床面にまでは達していない。また、住居跡の南東部分は地山が削平されており、床面を残すのみであった。

構造

本址は、長軸6.30m、短軸6.05mをはかり、長軸は北西を向く。コーナーがわずかに丸みを有し、方形を呈する。床面からは炭化材、焼土粒子、炭化粒子が検出されたが、炉跡は検出されなかった。床は、暗褐色土を主体にした貼床で、全体に堅い。ピットは8個検出された。南側のコーナー付近の2個のピットは、ほとんど接する様に穿たれており、径は共に56cm、深さは46cm、64cmをはかる。覆土は焼土粒子、炭化粒子を多量に含む暗褐色土であり、貯蔵穴と考えられる。各コーナーの対角線上に位置する4個のピットは、住居跡との相対的な位置から、柱穴であろう。西側の柱穴は、径70cm、ほかの柱穴は径18～21cmとかなりの差異が認められる。深さは40～63cmをはかる。柱穴間の距離は、長辺で3.0m、短辺で2.8mをはかり、各柱穴間を結ぶ形状は長方形を呈する。このほかの2個のピットは径33～46cm、深さ46～64cmをはかる。

荒掘り面は、床面より10cm程低く、比較的平坦であるが、北西の壁際に幅20cm、深さ5cmの溝が検出された。

遺物の出土状況

本址の床面からは、炭化材が検出されたが、量が少なく、北側に集中していた傾向がある。出土した遺物は、土器であるが、約100片程であり、床面近くからの出土である。南側のコーナー付近の2個のピットの底面からは、土器片が15片程出土したが、いずれも破片である。本址は、焼失家屋の可能性が強いわりには遺物は質、量共に貧弱である。

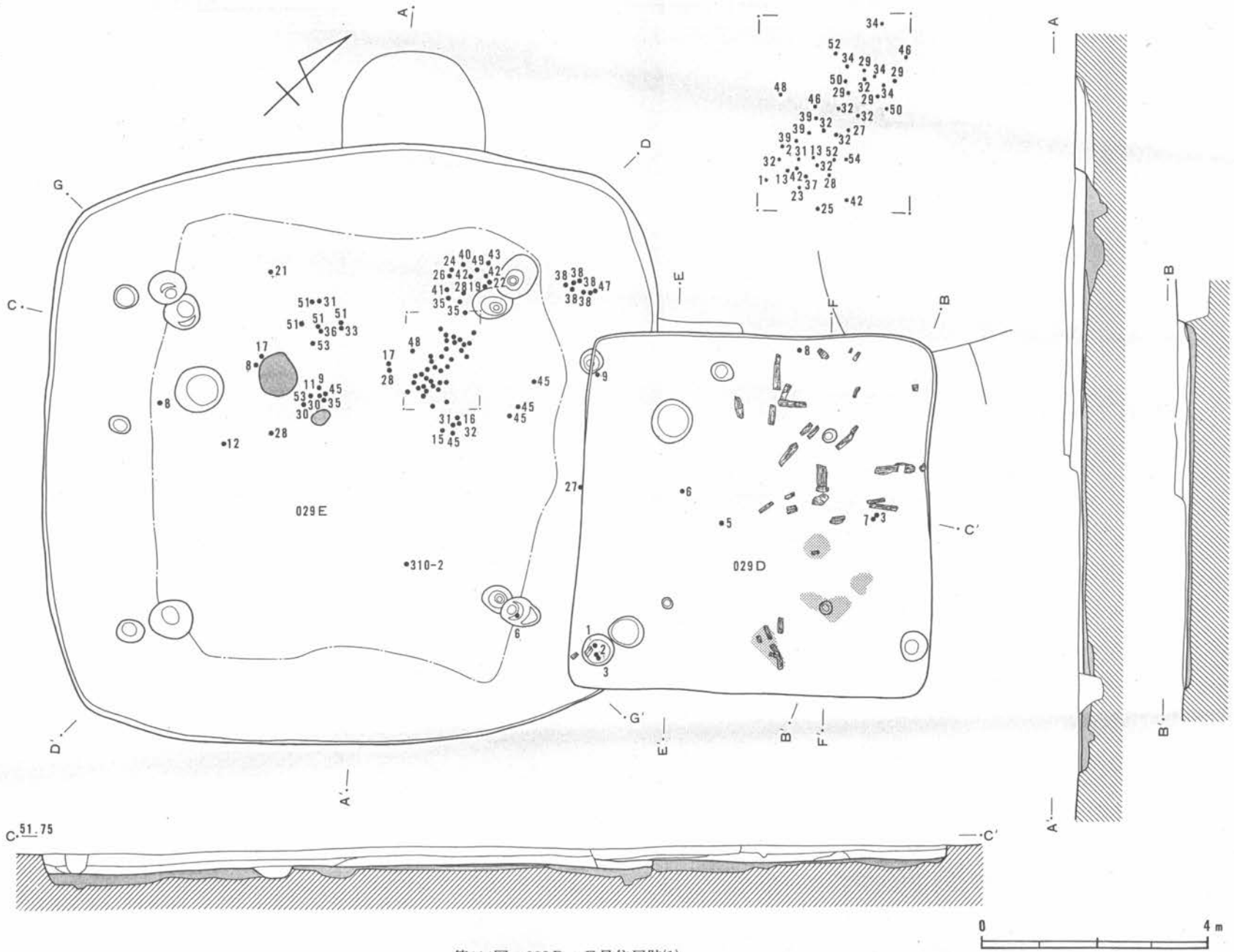
029E号住居跡 (第108・114・115・117～120・310・313図)

概要

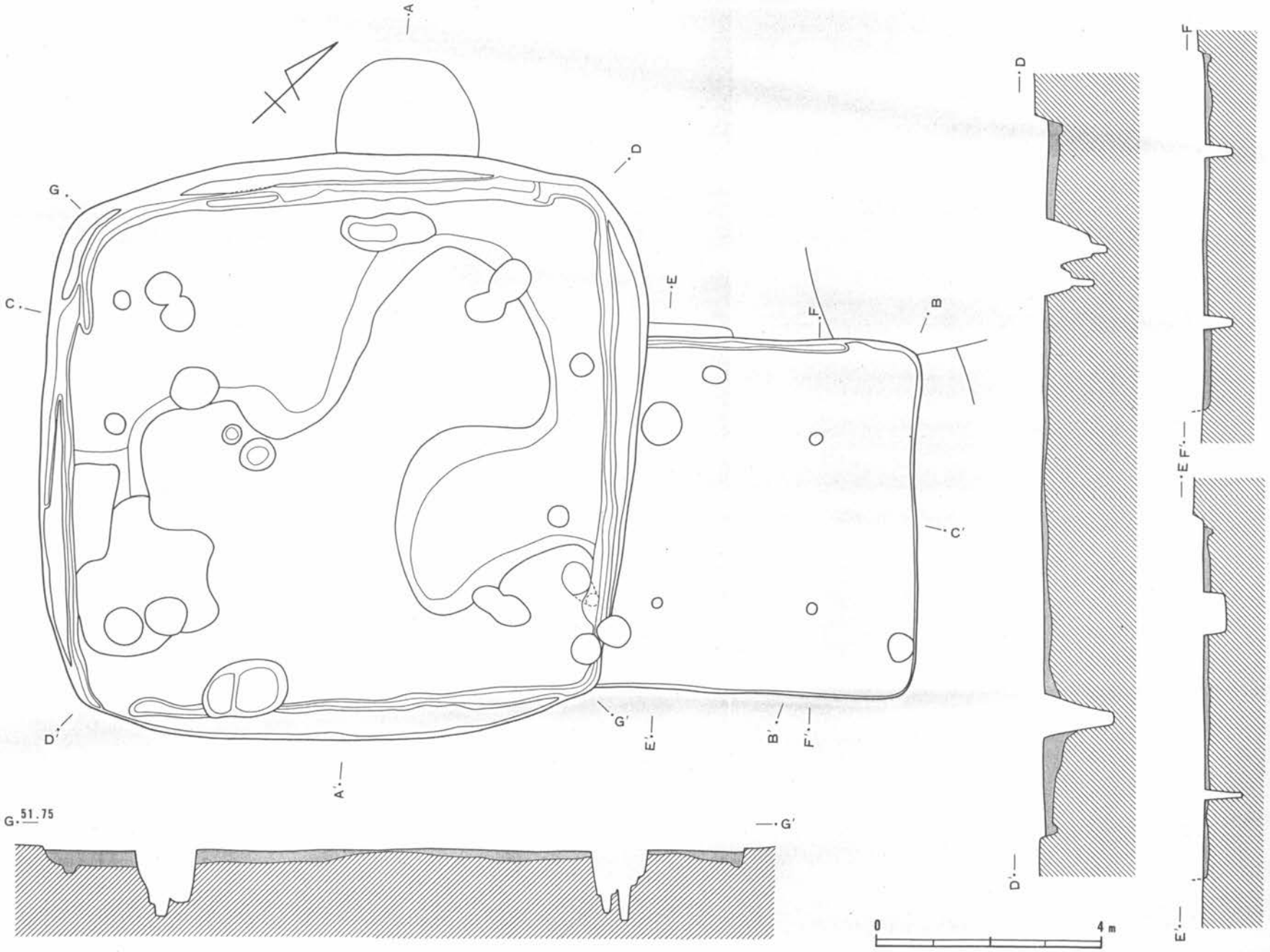
本址は、029D号跡により北東の壁が切られているが、地山への掘り込みが深いため、床面は遺存している。なお、南側半分は地山が削平されており、壁の立ち上がりはわずかである。

構造

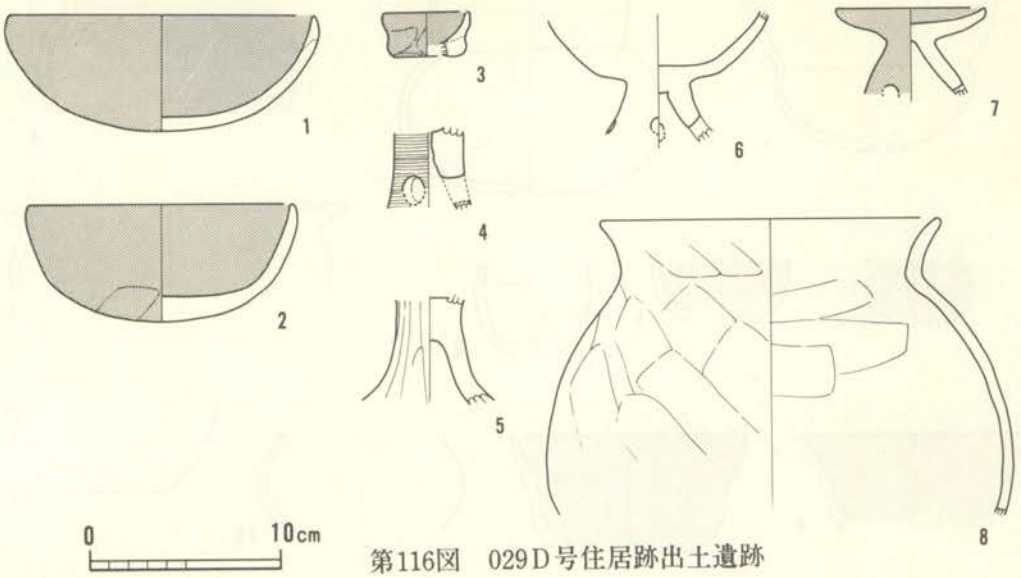
本址は、各辺共10.45mをはかり、隅丸方形を呈する。北西及び南東の壁はわずかに胴が張る。炉跡は、住居中央よりやや西側に2か所検出された。中央寄りの炉跡は径26×34cm、外側の炉跡は径70cmで、深さは共に11cmをはかる。炉跡内からは焼土粒子、炭化粒子が検出されたが焼土の堆積は薄い。床は、砂質ロームと暗褐色土による貼床で、砂質ロームが主体となる住居中央部は堅く、暗褐色土が主体となる壁側は軟らかい。ピットは8個検出された。各コーナーの対角線上に位置する7個は、径42～68cm、深さ95～126cmで、南側を除き2個のピットが



第114図　029D・E号住居跡(1)



第115図　029D・E号住居跡(2)



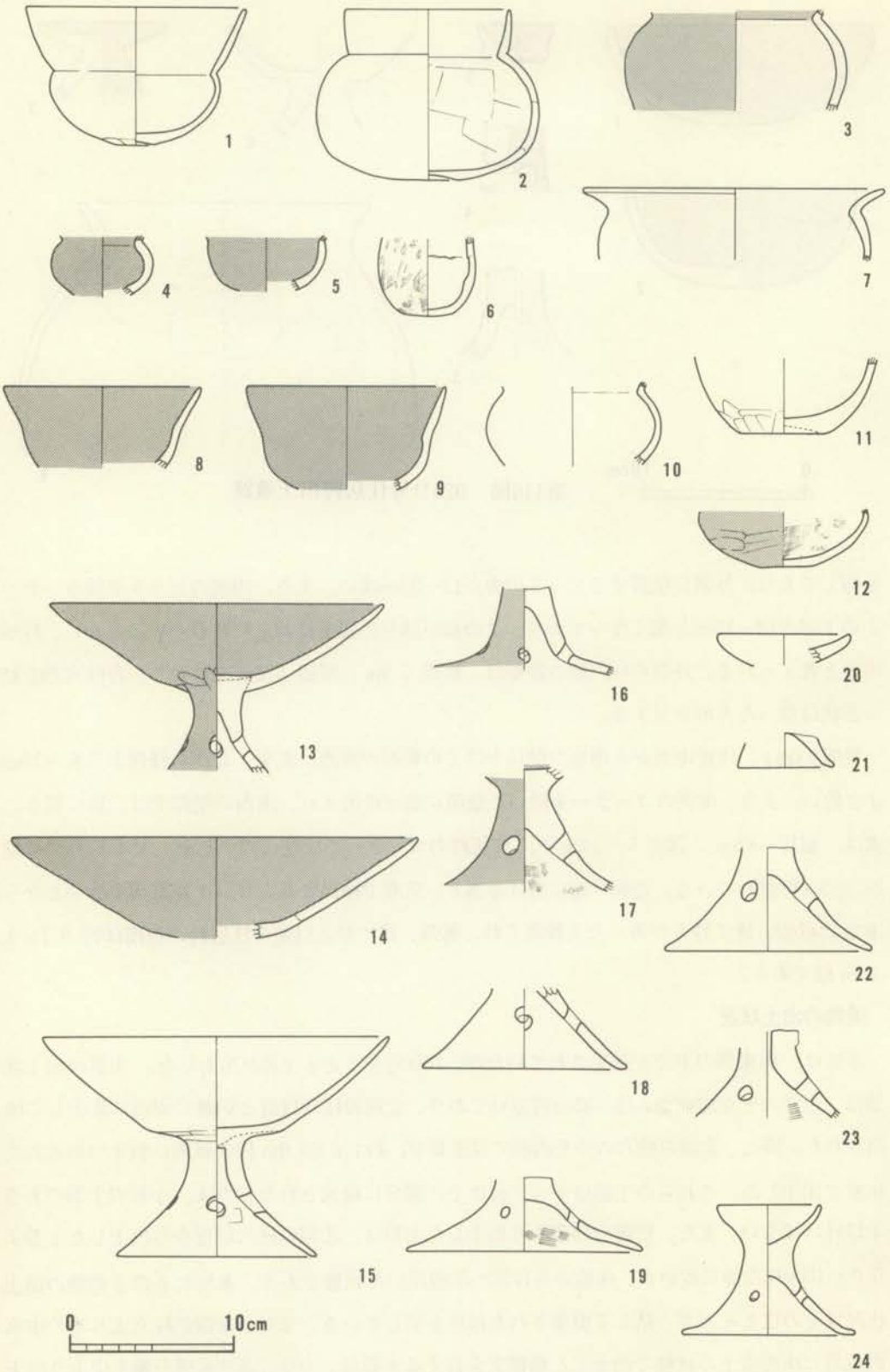
第116図　029D号住居跡出土遺跡

重複しており、外側に位置するピットの方が12～22cm深い。また、南側のピットを除き、ピットの下部が12～17cmと細くなっており、この細い部分の覆土は非常に軟らかいことから、柱痕跡かと考えられる。外側の柱穴間の距離は、長辺 5.9m 、短辺 5.8m をはかり、各柱穴間を結ぶ形状は整った方形を呈する。

荒掘り面は、住居中央から南東の壁にかけての範囲が南西、北東、北西の壁側より６～10cmほど低い。また、南側のコーナーを除いた壁側に溝が検出され、南西の壁際では二重に巡る。溝は、幅17～42cm、深さ５～14cmで、住居跡のコーナーでは壁に接するが、それ以外では壁から50cm程離れている。荒掘り面における溝と、床面で検出されたピットが重複することから、本址は拡張、建て替えがあったと推測され、拡張、建て替え以前の住居跡の規模は約 9.7×9.4 m 程である。

遺物の出土状況

本址は、南東側の半分が削平されていたが、1000片をこえる土器が出土した。土器の出土状態は、ほとんどが床面から15～35cm程浮いており、北側の柱穴付近と炉跡の周辺に集中して検出された。特に、北側の柱穴のやや内側では土器が、約1.0×3.0m 程の範囲に敷きつめられた状態で出土した。これらの土器はすべて破片で、完全に復元されたものは、小形の土器である１以外にはない。また、炉跡の周辺から出土した土器は、北側の柱穴付近から出土した土器より０～10cm程床面に近いが、床面からは20～30程浮いた状態である。本址における遺物の出土状況はそのほとんどが一括して廃棄された様相を呈している。なお、東側の柱穴よりやや中央の位置に床面直上の状態で出土した櫛描文を有する土器は、093号溝状遺構の覆土中より出土した土器と接合した。



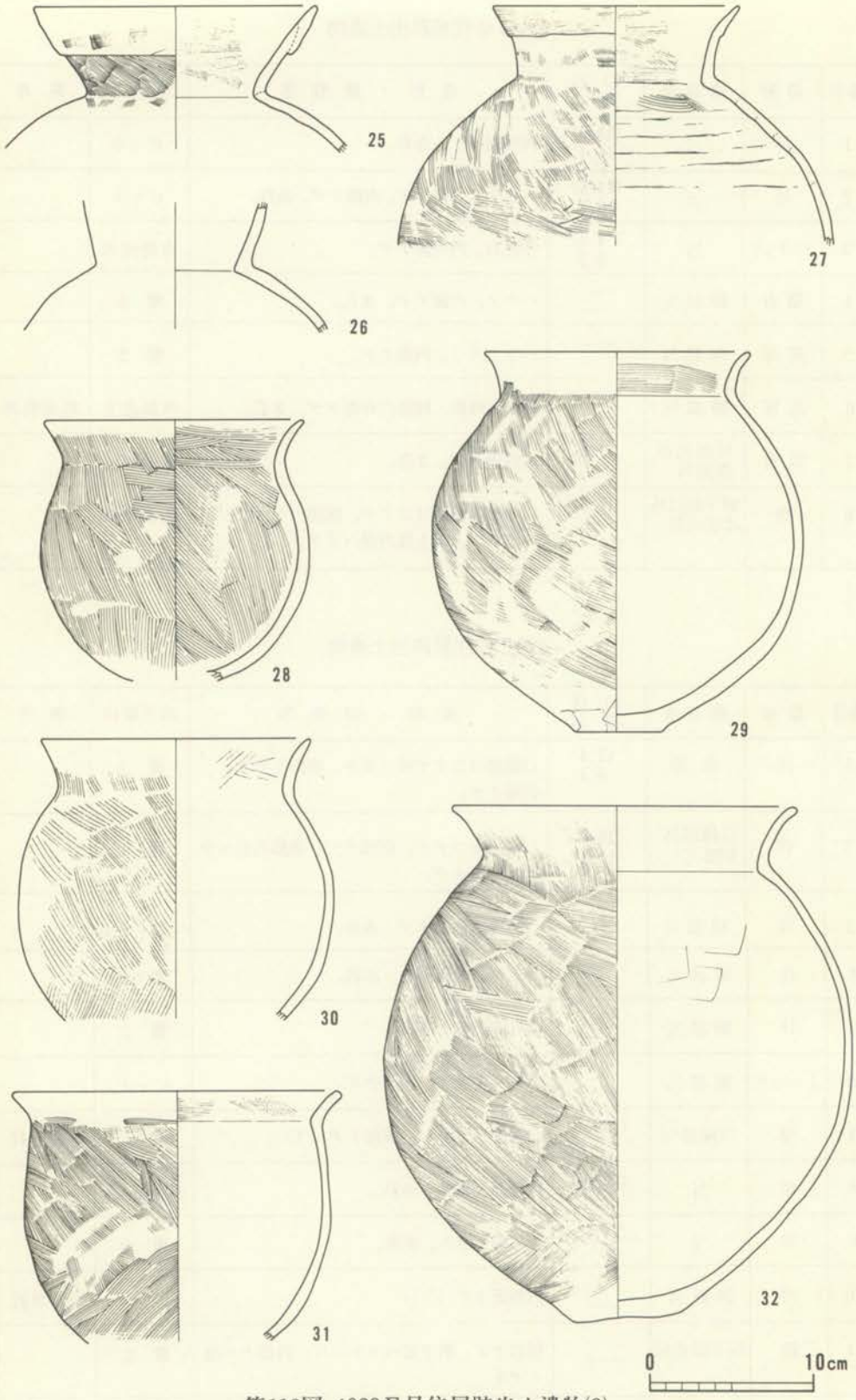
第117図　029E号住居跡出土遺物(1)

029D号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坏	1/3	(16.0) 6.1	内外面ナデ。赤彩。	ピット	
2	坏	1/2	(14.5) 6.1	ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。赤彩。	ピット	
3	ミニチュア	1/3	(4.4) 2.3	手捏ね。内外面ナデ。	床面密着	
4	器台	脚部1/2	—— ——	ハケメ。内面ナデ。3孔。	覆土	
5	高坏	脚部3/4	—— ——	ヘラケズリ。内面ナデ。	覆土	
6	高坏	脚部3/3	—— ——	坏部内外面・脚部内外面ナデ。3孔。	床面直上	器面磨耗
7	器台	坏部完形 脚部3/4	7.8 ——	内外面ナデ。3孔。	床面密着	
8	甕	胴下部以外 ほぼ完形	17.6 ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後一部ナデ。胴上部内面ヘラケズリ。	床面密着	

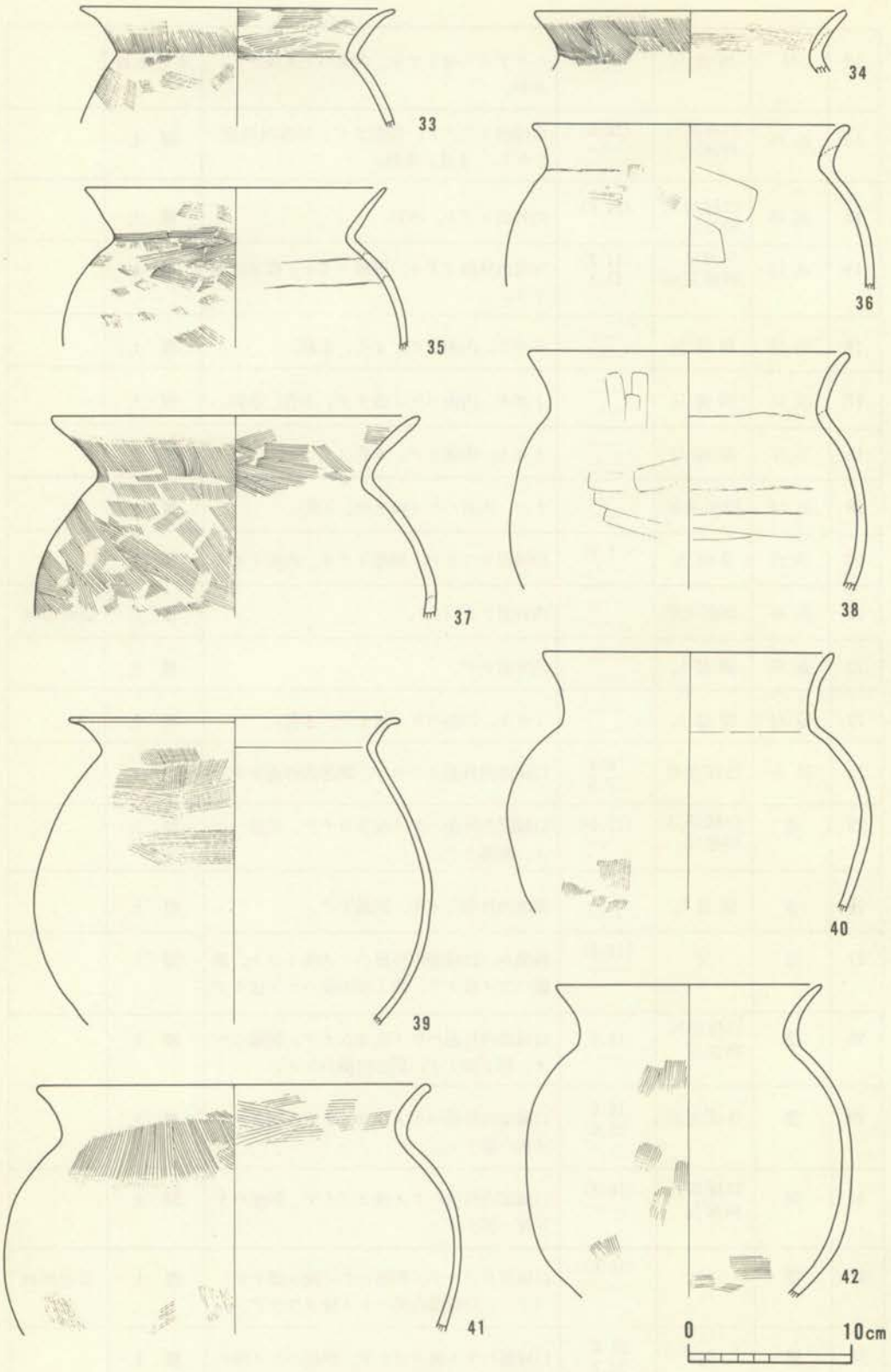
029E号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坩	完形	13.4 8.4	口縁部ヨコナデ後ミガキ、胴部ミガキ。内面ナデ。	覆土	
2	坩	口縁部1/3 胴部1/2	(10.0) 10.4	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。胴部内面ヘラケズリ後ナデ。	覆土	
3	坩	胴部1/5	—— ——	ミガキ。内面ナデ。赤彩。	覆土	
4	坩	胴部1/3	—— ——	ミガキ。内面ナデ。赤彩。	覆土	
5	坏	胴部1/5	—— ——	内外面ナデ。赤彩。	覆土	
6	ミニチュア	胴部1/3	—— ——	ハケメ後ナデ。内面ナデ。	ピット	
7	甕	口縁部1/3	(18.6) ——	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ（?）。	覆土	器面磨耗
8	坩	1/4	(12.0) ——	内外面ミガキ。赤彩。	床面直上	
9	坩	1/5	(11.5) ——	内外面ミガキ。赤彩。	覆土	
10	坩	胴部1/4	—— ——	内外面ナデ（?）。	ピット	器面磨耗
11	鉢	胴下部完形	—— ——	胴部ナデ、胴下部ヘラケズリ。内面ナデ後ミガキ。	覆土	

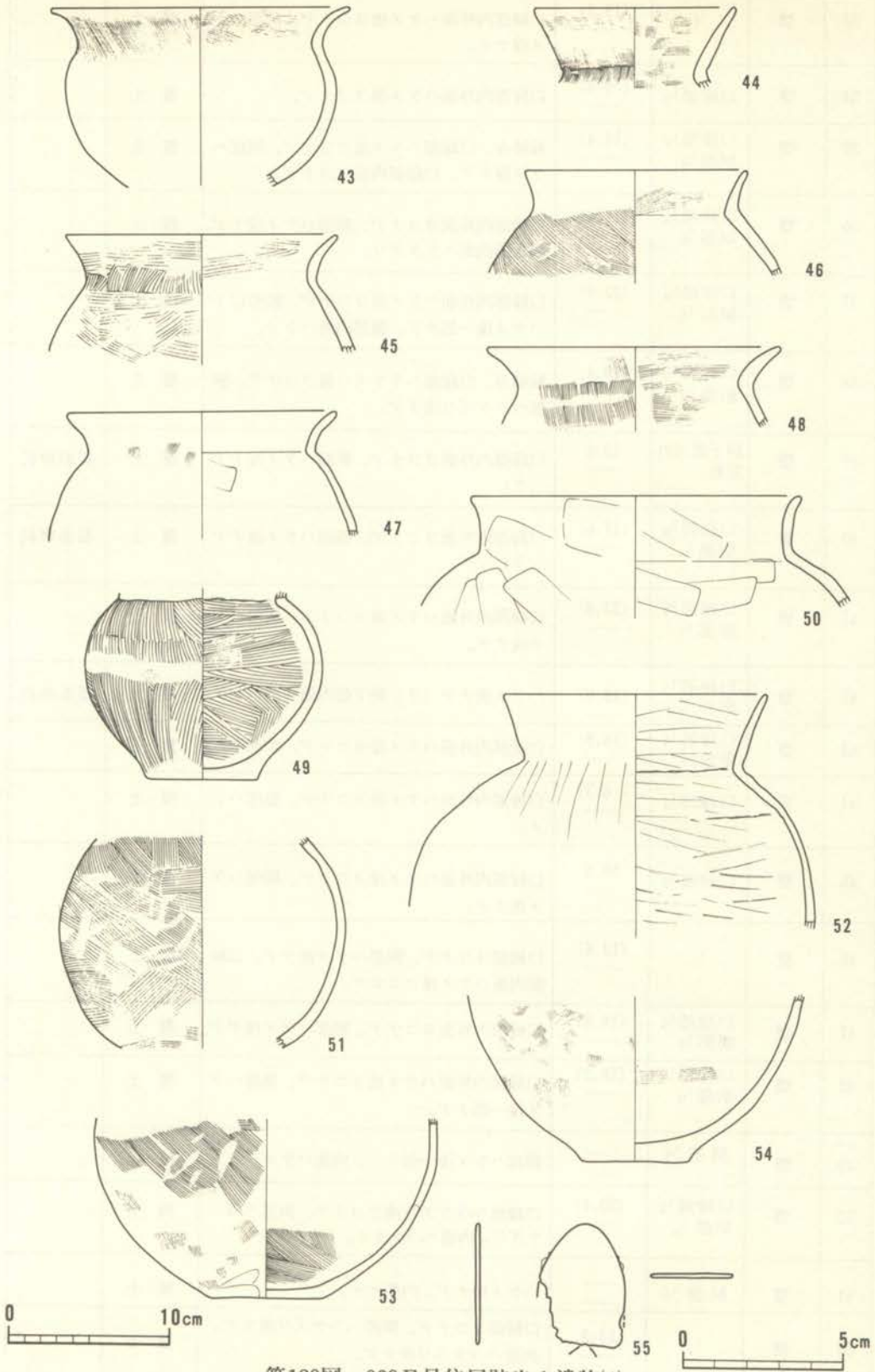


第118図　'029E号住居跡出土遺物(2)

12	坏	胴部 1/2	——	ヘラケズリ後ミガキ。内面ハケメ後ナデ。赤彩。	床面密着	
13	高坏	口縁部1/4 脚部1/2	(20.5) ——	口縁部ヨコナデ、脚部ナデ、坏部内外面ミガキ。 4孔。赤彩。	覆土	
14	高坏	口縁部1/10 胴部1/5	(24.6) ——	内外面ミガキ。赤彩。	覆土	
15	高坏	坏部1/6 脚部完形	(21.2) 13.1	坏部内外面ミガキ、脚部ミガキ。脚部内面ナデ。	覆土	
16	高坏	脚部 1/3	—— ——	ミガキ。内面ナデ。4孔。赤彩。	覆土	
17	高坏	脚部 1/5	—— ——	ミガキ。内面ハケメ後ナデ。3孔。赤彩。	覆土	
18	高坏	脚部 1/4	—— ——	ミガキ。内面ナデ。4孔。	覆土	
19	高坏	脚部完形	—— ——	ナデ。内面ハケメ後ナデ。3孔。	覆土	
20	器台	受部 1/2	(8.0) ——	口縁部ヨコナデ、胴部ミガキ。内面ミガキ。	覆土	
21	高坏	脚部完形	—— ——	内外面ナデ（?）。	覆土	器面磨耗
22	高坏	脚部 1/4	—— ——	内外面ナデ。	覆土	
23	器台	脚部 1/5	—— ——	ミガキ。内面ハケメ後ナデ。3孔。	覆土	
24	器台	ほぼ完形	6.4 7.6	口縁部内外面ヨコナデ、脚部内外面ナデ。	覆土	
25	壺	口縁部1/2 胴部1/4	(17.0) ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、頸部ハケメ、胴部ナデ。	覆土	
26	壺	胴部 1/5	—— ——	頸部内外面ミガキ、胴部ナデ。	覆土	
27	壺	1/2	(14.8) ——	輪積み。口縁部内外面ハケメ後ミガキ、胴部ハケメ後ナデ。胴上部内面ハケメ後ナデ。	覆土	
28	甕	口縁部2/3 胴部1/3	15.6 ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ、胴下部ナデ。胴部内面ハケメ。	覆土	
29	甕	ほぼ完形	16.2 22.6	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後一部ナデ。	覆土	
30	甕	口縁部1/8 胴部1/5	(16.8) ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後一部ナデ。	覆土	
31	甕	1/2	(19.6) ——	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ後一部ナデ（?）。口縁部内面ハケメ後ヨコナデ。	覆土	器面磨耗
32	甕	2/3	21.0 30.7	口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後一部ナデ。口縁部内面ヨコナデ。	覆土	



第119図　029E号住居跡出土遺物(3)



第120図．029E号住居跡出土遺物(4)

33	甕	1/6	(19.2) —	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	覆土	
34	甕	口縁部1/3	(9.5) —	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ。	覆土	
35	甕	口縁部1/4 胴部1/8	(18.4) —	輪積み。口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。口縁部内面ヨコナデ。	覆土	
36	甕	口縁部1/4 胴部1/6	(19.4) —	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。胴上部内面ヘラケズリ。	覆土	
37	甕	口縁部1/8 胴部1/5	(22.6) —	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、頸部以下ハケメ後一部ナデ。頸部内面ハケメ。	覆土	
38	甕	口縁部1/3 胴部1/4	(19.4) —	輪積み。口縁部ヘラケズリ後ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。	覆土	
39	甕	胴下部以外完形	19.8 —	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ(?)。	覆土	器面磨耗
40	甕	口縁部1/3 胴部1/4	(17.6) —	口縁部内外面ヨコナデ。胴部ハケメ後ナデ(?)。	覆土	器面磨耗
41	甕	口縁部1/5 胴部1/4	(23.8) —	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	覆土	
42	甕	口縁部1/3 胴部1/4	(16.0) —	ハケメ後ナデ(?)。胴下部内面一部ハケメ。	覆土	器面磨耗
43	甕	口縁部1/4 胴部1/2	(18.6) —	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ナデ。	覆土	
44	壺	口縁部1/4	(6.3) —	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ。頸部ハケメ。	覆土	
45	甕	口縁部3/3	16.8 —	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	覆土	
46	甕	1/6	(13.6) —	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。口縁部内面ハケメ後ヨコナデ。	覆土	
47	甕	口縁部1/3 胴部1/8	(16.6) —	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	覆土	
48	甕	口縁部1/3 胴部1/10	(18.2) —	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後一部ナデ。	覆土	
49	甕	胴部1/3	— —	胴部ハケメ後一部ナデ。内面ハケメ。	覆土	
50	甕	口縁部1/6 胴部1/10	(20.4) —	口縁部ヘラケズリ後ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ヘラケズリ。	覆土	
51	甕	胴部1/3	— —	ハケメ後ナデ。内面ナデ。	覆土	
52	甕	3/4	13.2 —	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。内面ヘラケズリ後ナデ。	覆土	

53	甕	胴部 1/4	―	ハケメ後ナデ。胴下部内面ハケメ。	覆土	
54	甕	胴部 1/3	―	ハケメ後ナデ。胴部内面一部ナデ。	覆土	
55	鉄製品	長さ 3.6cm、幅 2.7cm、厚さ 0.1cmをはかる。厚さが一様な板状製品であるが、欠損が著しく全体の形状は不明瞭である。無茎の広根鏃と考えられる。覆土。				

031B号住居跡（第121・122・314図）

概要

本址は、031A・C・D・E号跡に切られており、更に、木の根等により攪乱されているため、遺存している部分は少ない。

構造

本址は、南北を向く軸長が4.38m をはかり、平面形は方形と考えられる。炉跡は、中央より北西側に位置し、径44cm、深さ 8 cmの円形で、焼土が多量に検出された。床は厚さ 4 cm程の暗褐色土を主体にした貼床で、比較的堅い。ピットは 5 個検出された。北西の壁際のピットは、径26cm、深さ10cmをはかる。031C号跡の壁面に検出されたピットを含め、ほかの 4 個は柱穴と考えられる。径22～40cm、深さ23～27cmで、柱穴間の距離は、各辺が 2.1、2.4、2.7、3.2 mをはかり、各柱穴間を結ぶ形状は不整方形を呈する。

遺物の出土状況

本址から出土した遺物は土器のみで、ほとんど床面直上からの出土である。土器は、炉跡の西側及び 031A・E号跡の壁際から出土したものが多い。炉跡の西側から出土した甕の破片は、口縁と胴部の一部を除き、ほぼ完形に復元された。なお、タタキメが施された破片が出土した。

031C号住居跡（第121図）

概要

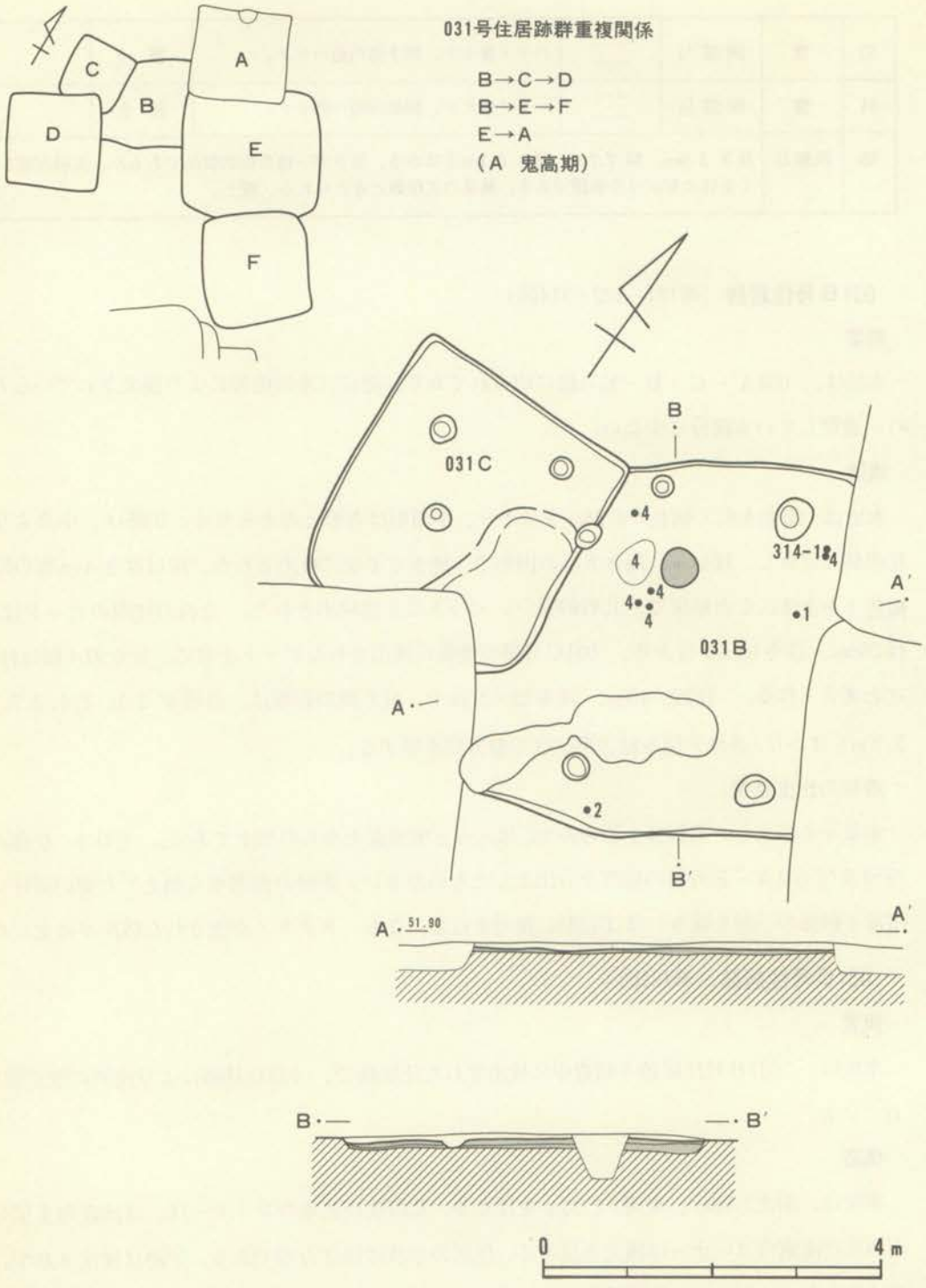
本址は、031B号住居跡を精査中に検出された住居跡で、031D号跡により南側の壁が切られている。

構造

本址は、南北3.23m、東西 2.90m をはかる。北西及び北東のコーナーは、ほぼ直角を呈し、南西及び南東のコーナーは隅丸を呈する。住居の形状はほぼ方形である。炉跡は検出されず、床は軟らかい。ピットは 3 個検出され、径24～32cm、深さ26～57cmであるが、不規則な配置である。

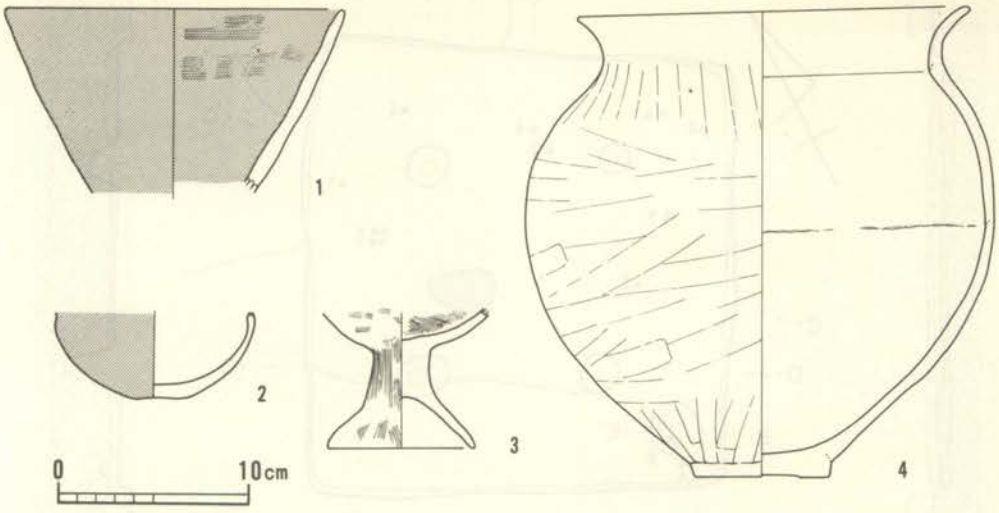
荒掘り面は、東側の壁付近が周辺と比べて 5 cm程低い。

遺物の出土状況



第121図　031号住居跡群重複関係及び031B・C号住居跡

本址の東側の壁際から土器が10片程出土したのみで、細片であるため図示することができなかった。



第122図　031Ｂ号住居跡出土遺物

031Ｂ号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坩	口縁部ほぼ完形	17.6 ——	口縁部ヨコナデ後ミガキ。口縁部内面ハケメ後ミガキ。赤彩。	床面密着	
2	坏	胴部完形	—— ——	内外面ミガキ。赤彩。	床面直上	
3	高坏	脚部完形		坏部内外面ハケメ後ナデ、脚部ハケメ後ナデ。	床面直上	
4	甕	口縁部½以外ほぼ完形	(20.1) 24.4～23.9	輪積み。口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。	床面密着	

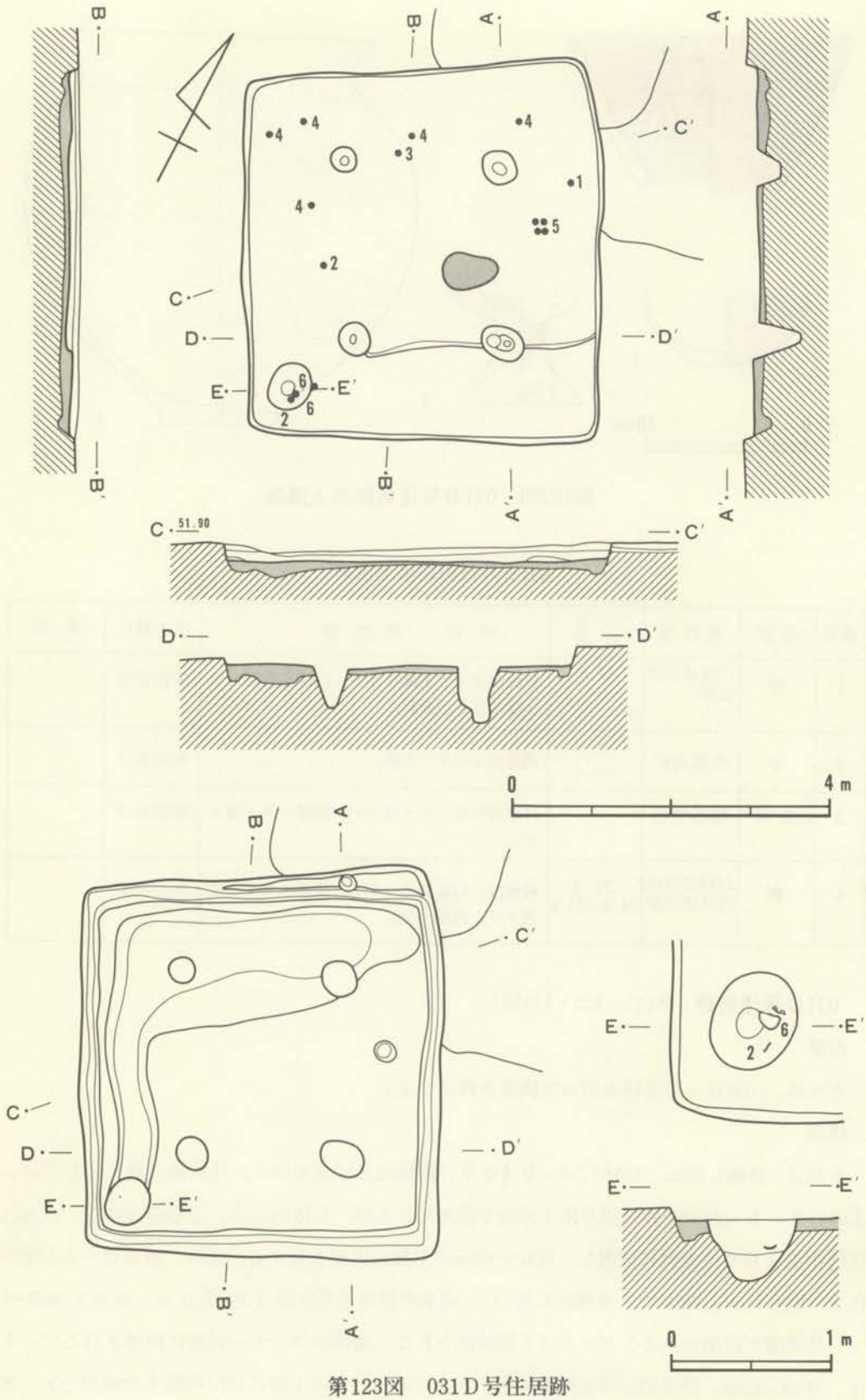
031Ｄ号住居跡（第121・123・124図）

概要

本址は、031Ｂ・Ｃ号跡を切って構築されている。

構造

本址は、長軸4.60cm、短軸4.52m をはかり、長軸はほぼ北を向く。住居跡の形状としては、北側のコーナーがやや外に張り出す傾向が認められるが、全体的には、方形を呈する。炉跡は、住居中央よりやや東側に位置し、径40×68cmの不整楕円形を呈する。床は、砂質ロームと暗褐色土の混合による貼床で、全体的に堅い。南東の壁側からは幅 1.0×3.0 m、高さ５cmのベッド状遺構が検出された。ピットは５個検出された。南側のコーナー付近に検出されたピットは、径50×60cm、深さ37cmの楕円形を呈する。このピットの下部には白色粘土が検出され、貯



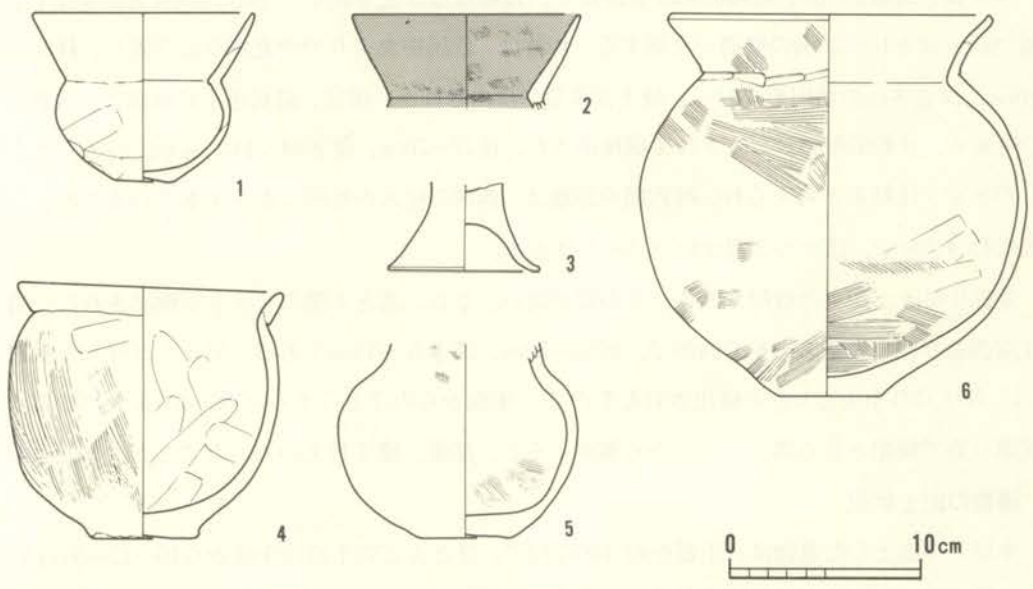
第123図　031D号住居跡

蔵穴と考えられる。そのほかの4個は、径30～46cm、深さ32～65cmをはかり、柱穴と考えられる。柱穴間の距離は、長辺で2.2m、短辺で1.9mをはかり、各柱穴間を結ぶ形状は整った長方形を呈する。

荒掘り面は、住居中央から東側の範囲が高く、南側のコーナーから西側及び北側のコーナーにかけての幅約50～140cmの鍵の手状の範囲が中央より10cm程低い。また、壁に沿って、幅18～26cm、深さ5～10cmの溝が検出されたが、北側のコーナーから西寄りの一部は壁から最大26cm程内側を溝が巡る。本址の規模は、この溝を基にしてはかると、軸長4.52mの正方形に近い形状になる。このことから、本は北西の壁際を一部拡張した可能性がある。

遺物の出土状況

本址から出土した遺物はすべて土器で、約100片程である。床面からの出土は少なく、多くは覆土中からの出土である。2・6は床面から出土した破片と貯蔵穴の中から出土した破片が接合したものであるが、6は大部分の破片が貯蔵穴のすぐ東側から出土し、完形に復元された。



第124図　031D号住居跡出土遺物

031D号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坩	½	(11.4) 8.7	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ミガキ。内面ナデ。	覆土	
2	坩	口縁部½	(12.0)	内外面ハケメ後ミガキ。赤彩。	床面密着・ピット	

3	高 坏	脚部完形	――	脚部ミガキ。内面ナデ。	覆 土	
4	甕	口縁部⅔以外ほぼ完形	(13.8) 8.2	口縁部内外面ヨコナデ。胴部ハケメ後ナデ。胴部内面ヘラケズリ。	床面直上	
5	壺	胴 部 ½	――	胴部内外面ハケメ後ナデ。	床面密着	
6	甕	完 形	17.0 19.6	口縁部ハケメ後ヨコナデ。胴部ハケメ後一部ナデ。口縁部内面ヨコナデ、胴下部内面ハケメ後一部ナデ。	床面密着 ピット	

031E号住居跡（第121・125・126図）

概要

本址は、031A号跡に北西の壁を、更に南東の壁を 031F号跡に切られている。更に、北東の壁も木の根により攪乱されている。

構造

本址は、長軸6.74m、短軸6.30m をはかり、長軸はほぼ北を向く。形状は隅丸方形を呈し、幅25cm、深さ15～20cmの壁溝が全周する。炉跡は、住居中央よりやや北寄りに位置し、径50×80cm、深さ８cmの楕円形を呈し、焼土が多量に検出された。床は、暗褐色土に砂質ロームを含む貼床で、比較的堅い。ピットは４個検出され、径37～70cm、深さ84～110 cmをはかる。これらのピットは柱穴と考えられ、柱穴間の距離は、西側の柱穴が外側に寄りすぎているため、一辺が約 4.0m で、ほかの３辺は約 3.5m をはかる。

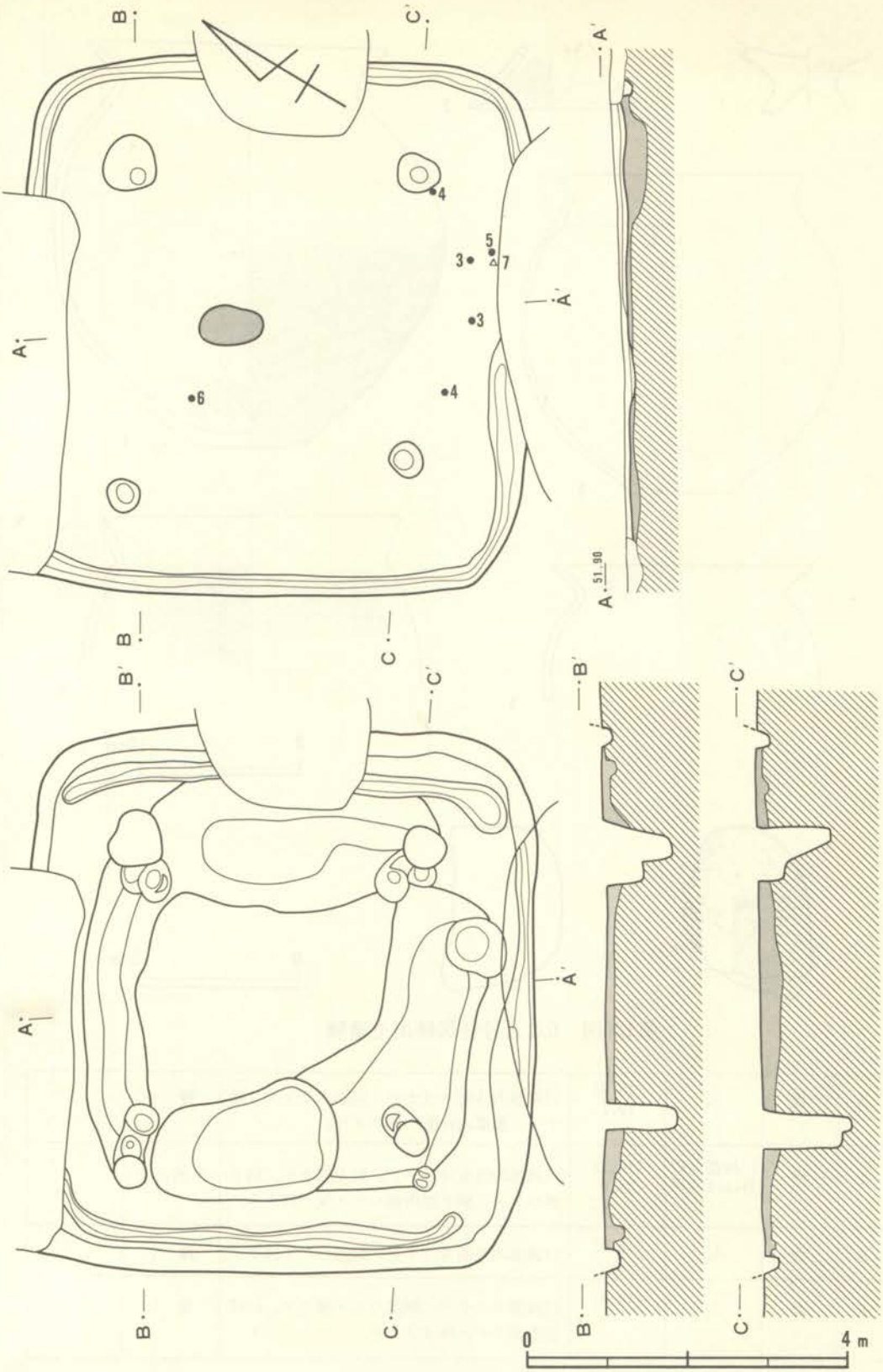
荒掘り面は、中央と壁際が高く、その間が低い。なお、溝と４個のピットが検出された。溝は南西及び北東の壁溝のやや内側で、幅20～30cm、深さ５～13cmである。ピットは柱穴と重複し、各柱穴の中央寄りから検出されたもので、床面からの深さにすると 56～81cm をはかる。荒掘り面で検出された溝、ピットから推測すると、拡張、建て替えのあったことがうかがえる。

遺物の出土状況

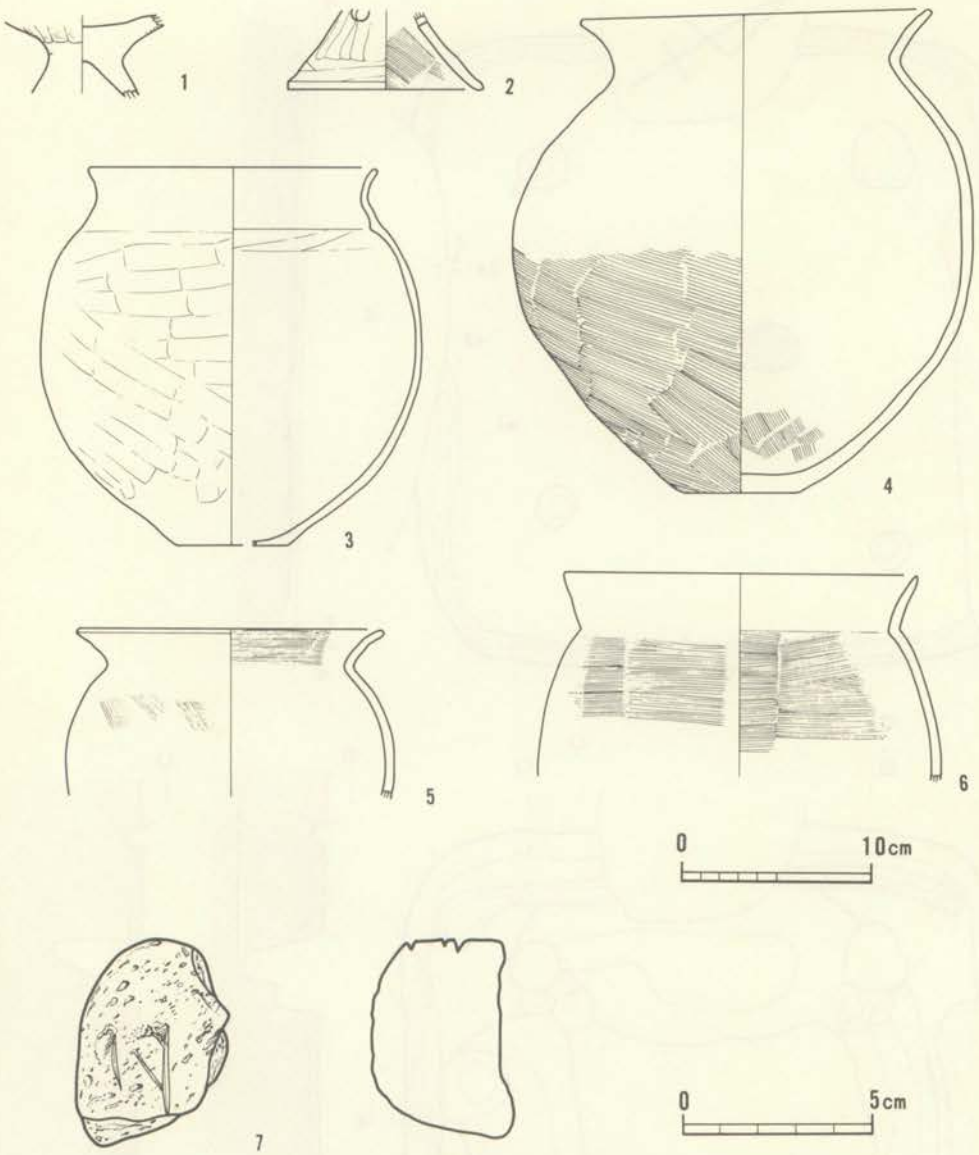
本址から出土した遺物は、土器が約 100片程で、ほとんどの土器は床面から10～15cm程浮いた状態である。４は東側の柱穴のすぐ南側から、押し潰されたような状態で出土したものであるが、2.5m 程離れた破片とも接合した。土器の大半は南東の壁付近からの出土である。

031E号住居跡出土遺物

番号	器 形	遺存度	口径 器高	成 形 ・ 調 整 等	出土層位	備 考
1	高 坏	脚部ほぼ完形	―― ――	坏部・脚部ハケメ後ミガキ。坏部内面ミガキ。	覆 土	
2	高 坏	脚 部 ¼	―― ――	脚部ヘラケズリ。脚部内外面ハケメ。３孔。	覆 土	



第125図　031E号住居跡



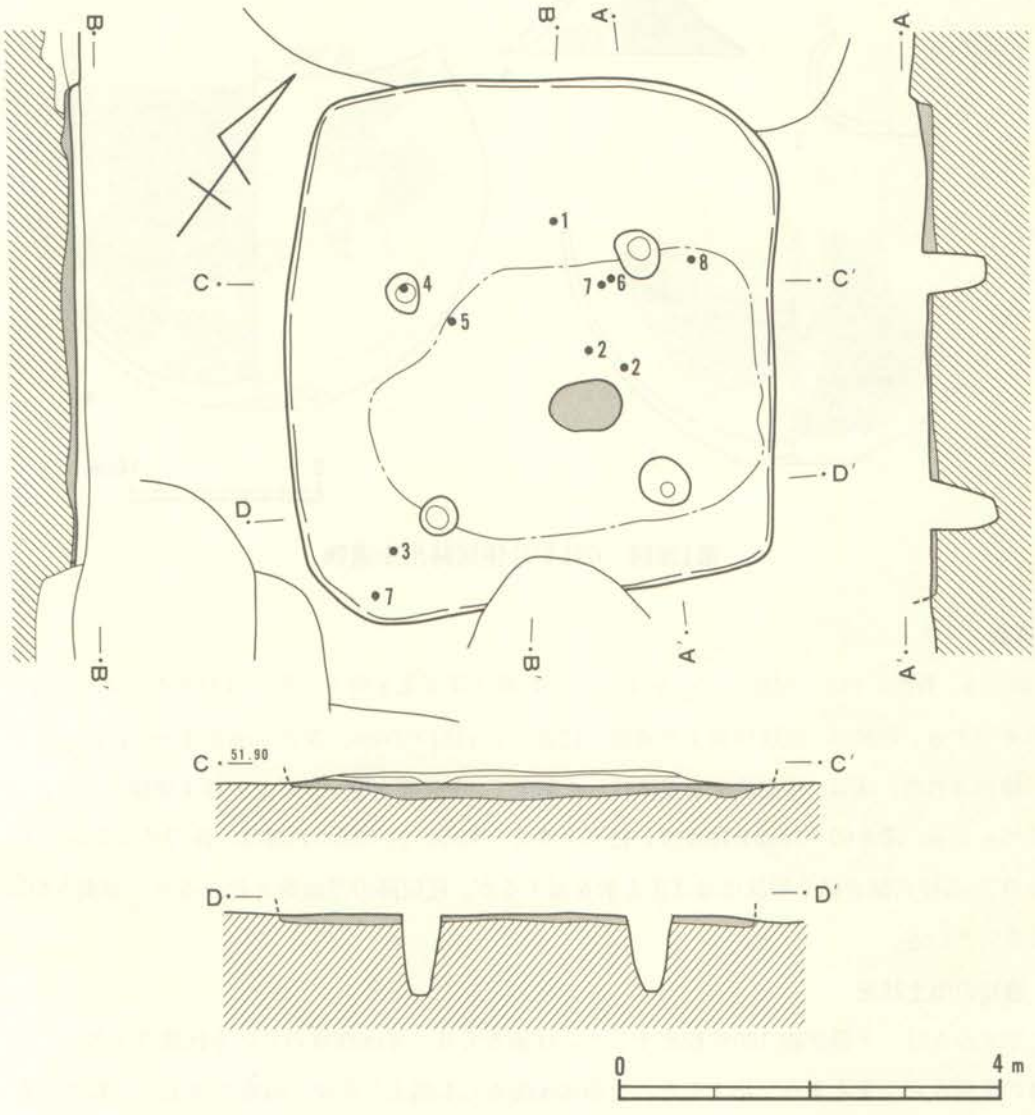
第126図　031E号住居跡出土遺物

3	甕	¼	(15.0) 19.7	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。頸部内外面ヘラケズリ。	覆　土	
4	甕	口縁部¾以外ほぼ完形	(18.1) 25.0	口縁部内外面ヨコナデ、胴上部ナデ、胴下部ハケメ。胴下部内面ハケメ後一部ナデ。	床面直上	
5	甕	¼	(15.8) —	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	覆　土	
6	甕	¼	(18.6) —	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ、口縁部内面ハケメ後ヨコナデ。	覆　土	
7	石製品	一部欠損するが、断面三角形の線刻状の使用痕が3条認められる。軽石。壁溝。				

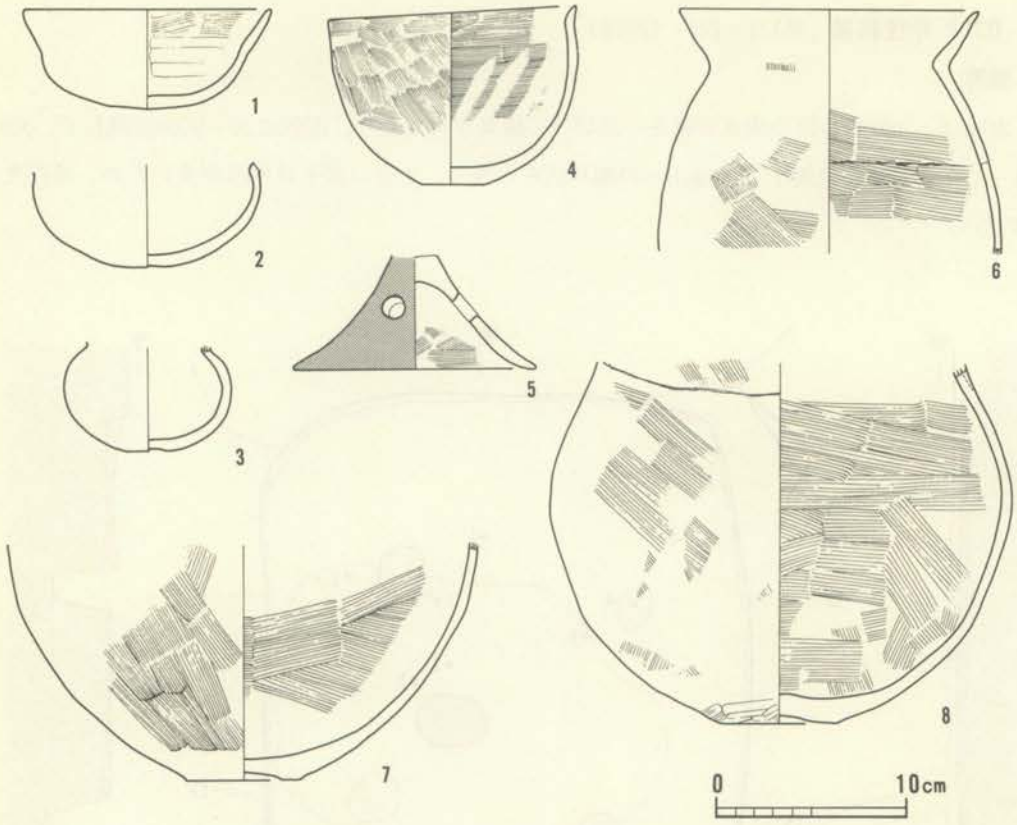
031Ｆ号住居跡（第121・127・128図）

概要

本址は、031Ｅ号跡の南東の壁を一部切って構築されており、南側に20～90cm程離れて、069Ｂ・Ｃ・Ｆ号跡が位置する。地山への掘り込みが浅く、また、覆土は攪乱が多いため、遺存度は悪い。



第127図　031Ｆ号住居跡



第128図　031Ｆ号住居跡出土遺物

構造

本址は、長軸5.41m、短軸5.12m をはかり、長軸はほぼ北を向く。形状はわずかに歪んだ方形を呈する。炉跡は、住居中央より東側に位置し、径51×76cm、深さ５cmをはかり、焼土粒子が検出された。床は、暗褐色土を主体にした貼床で、中央部が堅い。ピットは４個検出された。径35～48cm、深さ60～78cmをはかり、柱穴と考えられる。柱穴間の距離は、各辺共に2.5mをはかり、各柱穴間を結ぶ形状はほぼ正方形を呈するが、住居跡の平面形と比べると、南東方向に片寄っている。

遺物の出土状況

本址からは、土器が約 100片程出土した。床面から６～８cm程浮いている状態の土器が、炉跡の東側から、まとまって出土した。土器は床面からも出土したが、破片で出土したものであり、完形に復元されたものはない。４ は柱穴の底面近くから出土したほぼ完形の埦である。６・７は北側の柱穴近くの床面から出土した大部分の破片と柱穴の中から出土した破片とが接合したものであるが、胴部の約半分しか遺存していない。

031Ｆ号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坏	ほぼ完形	7.0 5.3	口縁部ヨコナデ、体部ナデ。口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。	覆土	
2	坩	⅔	—— ——	胴部内外面ミガキ。	覆土	
3	坩	口縁部以外完形	—— ——	胴部ミガキ。内面ナデ。	床面密着	
4	埦	ほぼ完形	13.0 9.0	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、体部内外面ハケメ後ナデ。	ピット	
5	高坏	脚部½	—— ——	脚部ナデ。内外面ハケメ後ナデ。3孔。赤彩。	覆土	
6	甕	⅓	(15.8) ——	口縁部ヨコナデ、胴部内外面ハケメ後ナデ。	床面密着	
7	甕	胴部⅓	—— ——	胴部内外面ハケメ。	床面密着	
8	甕	胴部⅓	—— ——	胴部ハケメ後ナデ。内面ハケメ後一部ナデ。	覆土	

032号住居跡（第129～131・310・312・313図）

概要

本址は、黒色土を精査中に、完形あるいは大形の破片の土器がまとまって検出されたもので、この土器の出土する面を更に精査したことにより検出された。034Ｂ号跡と重複すると考えられるが、土器の出土する床面以外は本址の平面形を捉えることができず、また、攪乱も多いことから034Ｂ号跡との新旧関係は確認することができなかった。なお、住居跡の北側は道路のため未調査である。

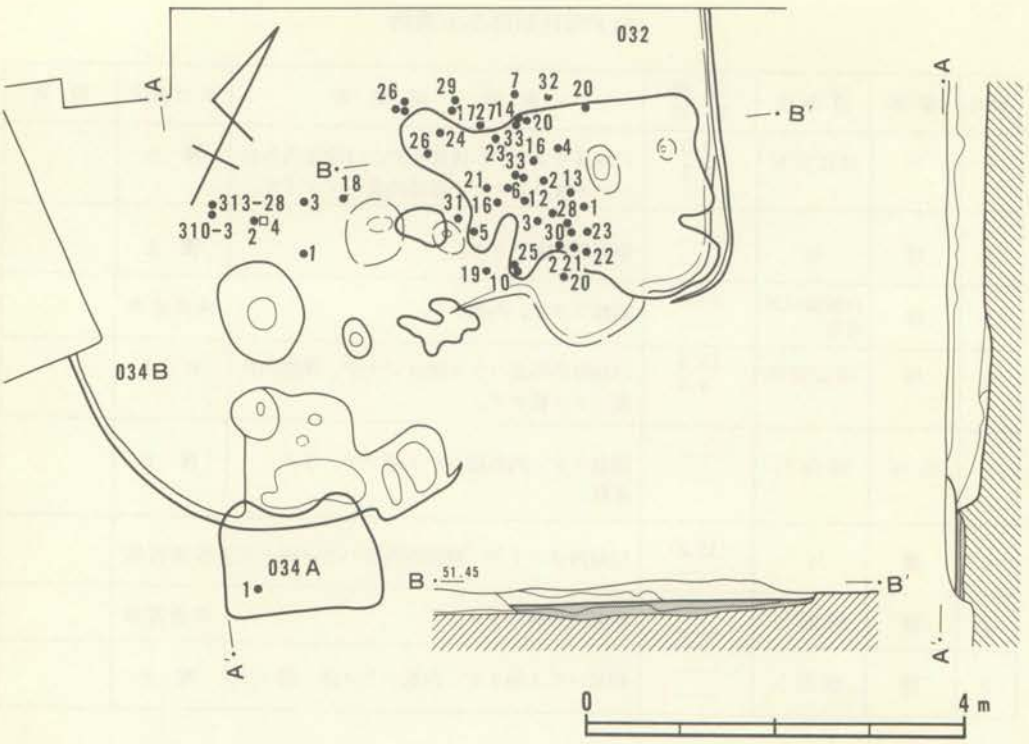
構造

本址は、土器の分布とほぼ一致する堅い暗褐色土の範囲が床面と考えられるが、堅い暗褐色土の範囲が部分的であるため、全体の規模、形状は不明瞭である。東側にかろうじて検出された壁、コーナーから、形状は方形を呈すると考えられるが、黒色土を剝がした面での形状を加味して考えると、一層複雑になる。土器が出土する暗褐色土は炭化粒子を含むもので、約2.0×3.6ｍの不整形である。この面においては炉跡、ピット等は検出されなかった。

荒掘り面は、比較的平坦であるが、北東の壁より内側に壁のような立ち上がりが検出され、南東に延びている。このわずかな立ち上がりは南東部で「コ」の字形に張り出しを有している。

遺物の出土状況

本址からは、土器が300片程出土したが、床面の南西側に敷きつめられたかのように集中し

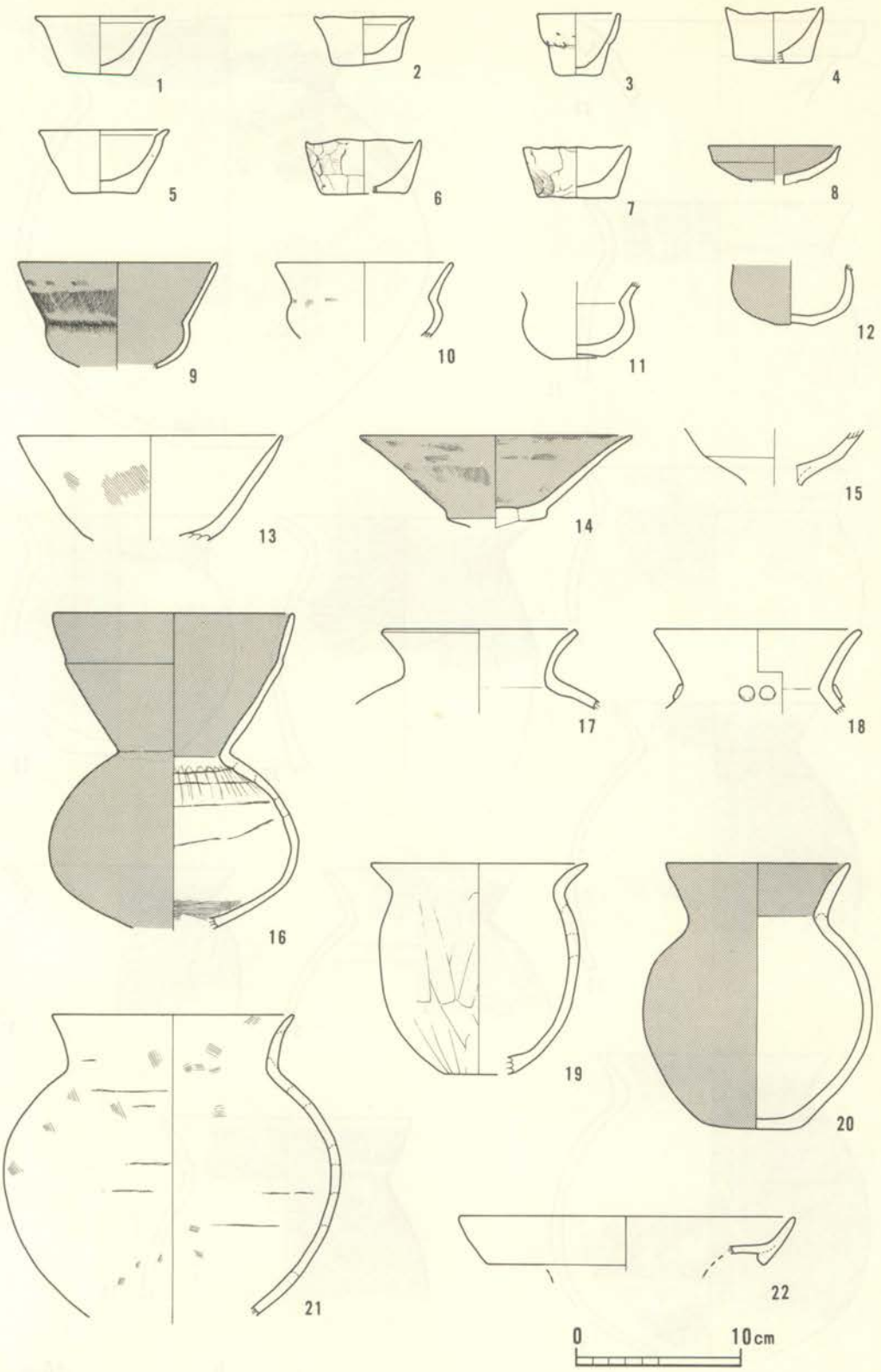


第129図　032, 034A・B号住居跡

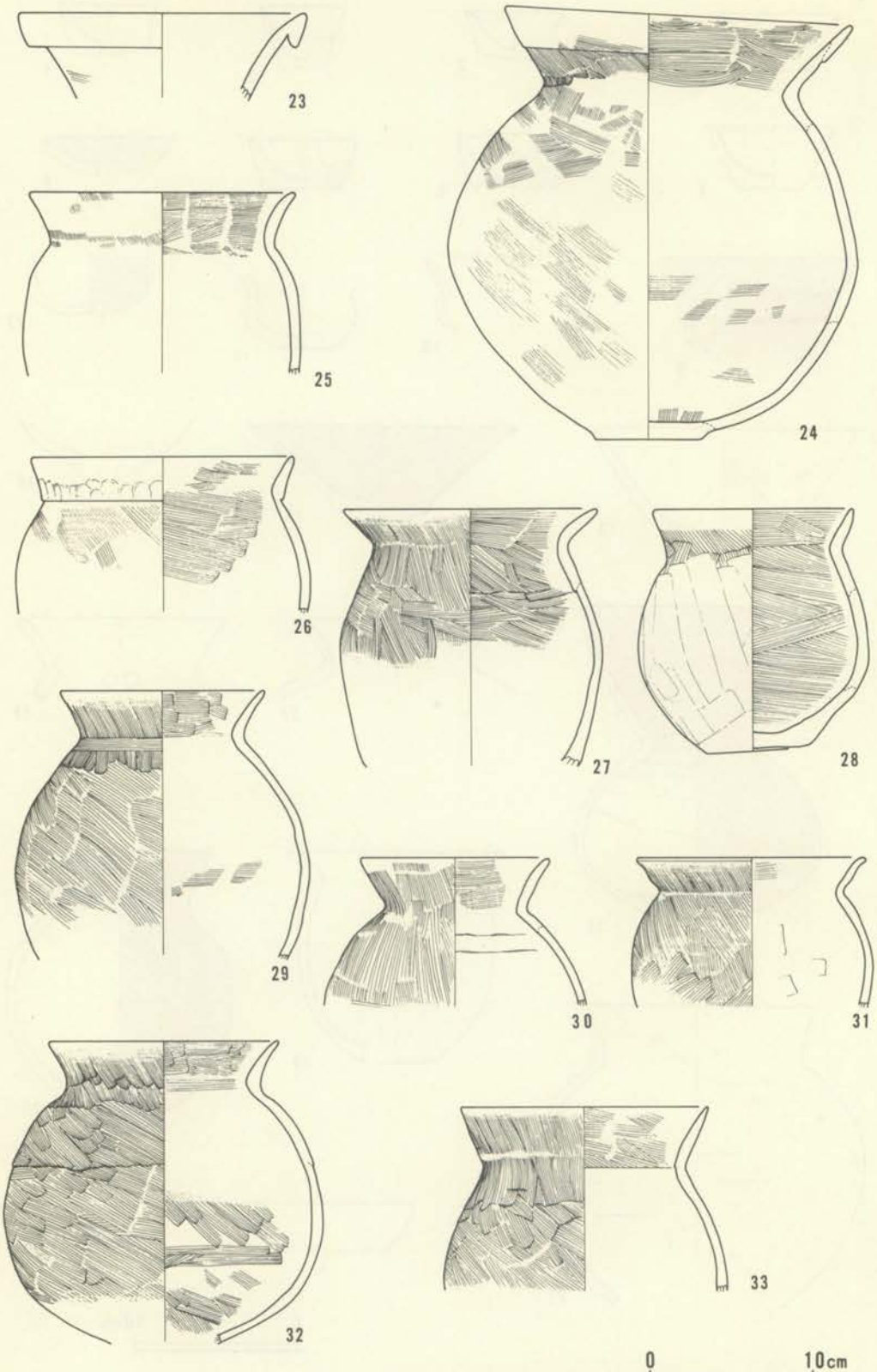
ていたものである。完形の状態で出土したものは2・7・27・28だけで、ほかは大形の破片で出土したが、完全に復元された土器はない。図示しなかった土器の中では甕が最も多く、壺、高坏、坩等は非常に少ない。これらの土器は一括して廃棄されたものと考えられる。なお、櫛描文が施された破片も出土している。

032号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	鉢	3/3	(7.8) 4.1	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ。	床面直上	
2	鉢	完形	6.1 2.9	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ。	床面直上	
3	鉢	3/3	(5.0) 3.8	内外面ナデ。	床面密着	
4	鉢	1/2	(5.9) 3.4	内外面ナデ。	覆土	
5	鉢	1/2	(7.8) 3.8	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ。	床面密着	
6	鉢	1/2	(7.0) 3.2	手捏ね。ハケメ後ナデ。内面ナデ。	床面密着	



第130図　032号住居跡出土遺物(1)



第131図　032号住居跡出土遺物(2)

7	鉢	完 形	6.5 3.1	手捏ね。ハケメ後ナデ。内面ナデ。	床面直上	
8	器台	受部 1/2	(8.0) —	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ。赤彩。	床面直上	
9	坩	1/2	(12.0) —	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ、胴部ハケメ後ミガキ。内面ミガキ。赤彩。	床面直上	
10	坩	口縁部1/2 胴部1/4	(11.8) —	ハケメ後ナデ（?）。	床面直上	器面磨耗
11	坩	胴部完形	— —	ミガキ（?）。	床面密着	器面磨耗
12	坩	胴部完形	— —	胴部内外面ミガキ。赤彩。	床面密着	
13	高坏	坏部 1/2	(16.0) —	坏部ハケメ後ミガキ。内面ミガキ。	床面直上	
14	高坏	坏部完形	16.6 —	坏部内外面ハケメ後ミガキ。赤彩。	床面密着	
15	高坏	坏部 1/2	— —	坏部内外面ミガキ。	床面直上	
16	坩	口縁部1/4 胴部完形	(14.6) —	輪積み。ミガキ。頸部内面指頭押捺、胴下部内面ハケメ。赤彩。	床面直上	
17	壺	口縁部1/3	(12.0) —	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ナデ。	床面密着	
18	壺	口縁部1/4	(12.6) —	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ナデ、頸部に2個1対の円形浮文を貼付。	床面密着	
19	甕	口縁部1/10 胴部1/5	(13.0) 12.6	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。	床面密着	
20	壺	完 形	10.2 15.8	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ。胴部ミガキ。赤彩。	床面密着	
21	甕	1/2	(18.6) —	輪積み。口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部内外面ハケメ後ナデ。	床面密着	
22	壺	口縁部1/8	(20.4) —	口縁部ヨコナデ（?）。	床面直上	器面磨耗
23	壺	口縁部1/5	(17.6) —	口縁部内外面ヨコナデ、頸部ハケメ後ナデ。	床面密着	
24	壺	口縁部1/3 胴部ほぼ完形	(21.4) 26.4	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、頸部ハケメ、胴部ハケメ後一部ナデ。胴下部内面ハケメ後ナデ。	床面密着	
25	甕	1/3	(16.4) —	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ナデ。	床面直上	
26	甕	1/2	(15.8) —	口縁部指頭押捺後ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。胴上部内面ハケメ。	床面密着	
27	甕	口縁部1/6 胴部完形	(15.4) —	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ。胴上部ハケメ、胴下部ナデ。	床面密着	
28	甕	完 形	12.2 14.7	口縁部ハケメ後ヨコナデ、頸部ハケメ、胴部ヘラケズリ後ナデ。内面ハケメ。	床面密着	

29	甕	口縁部・胴部完形	12.5	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ。胴部内面一部ハケメ。	床面密着	
30	壺	口縁部ほぼ完形 胴部¼	11.6	輪積み。口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ。	床面密着	
31	甕	⅓	(13.8)	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ。	床面密着	
32	甕	口縁部⅕ 胴部½	(13.8)	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ。胴下部内面ハケメ後一部ナデ。	床面直上	
33	甕	口縁部⅙ 胴部⅓	(15.0)	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ。	床面直上	

033号住居跡（第132～134・310・313図）

概要

本址は、029B号跡から西に1.8m程離れ、035B号跡の1m程東側に位置する。南側のコーナー部分には、幅32～80cmの溝が東西方向に延びており、床面まで攪乱を受けている。

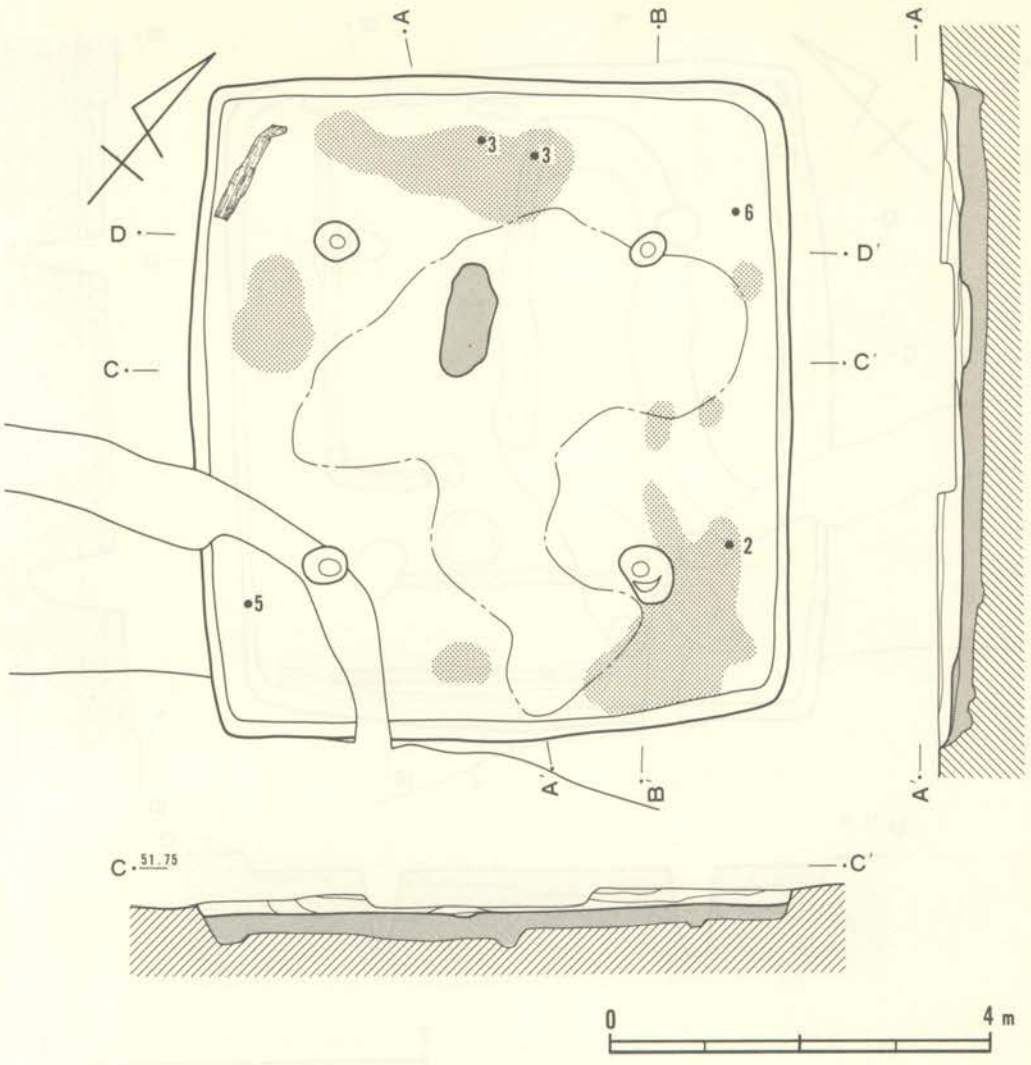
構造

本址は、長軸6.92m、短軸6.27mをはかり、長軸が北西を向く。形状は長方形を呈する。炉跡は、住居中央のやや西寄りに位置し、径55×122 cm、深さ6cmをはかる。長軸方向に長い楕円形を呈し、焼土が多量に検出された。なお、中央より東側からは、灰が多量に検出された。床は、暗褐色土を主体にした厚さ15～28cmの貼床である。図示していないが、東側のコーナー部分から中央にかけて、焼土粒子、焼土ブロックを多く含む暗褐色土が堆積しており、住居外から住居中央に向かって流れ込んだ様相を呈していた。ピットは4個検出された。これらのピットは、径30～46cm、深さ70～94cmをはかり、柱穴と考えられる。西側の柱穴の覆土中に白色粘土が検出された。柱穴間の距離は、長辺が3.4m、短辺が3.3mをはかり、各柱穴間を結ぶ形状は整った方形を呈する。

荒掘り面からは、7条の溝と4個のピットが検出された。壁際に検出された溝は部分的で全周せず、南東の壁際は二重になっている。溝は幅14～48cm、深さ6～12cmをはかる。ピットは径34～70cm、深さ17～54cmをはかる。

遺物の出土状況

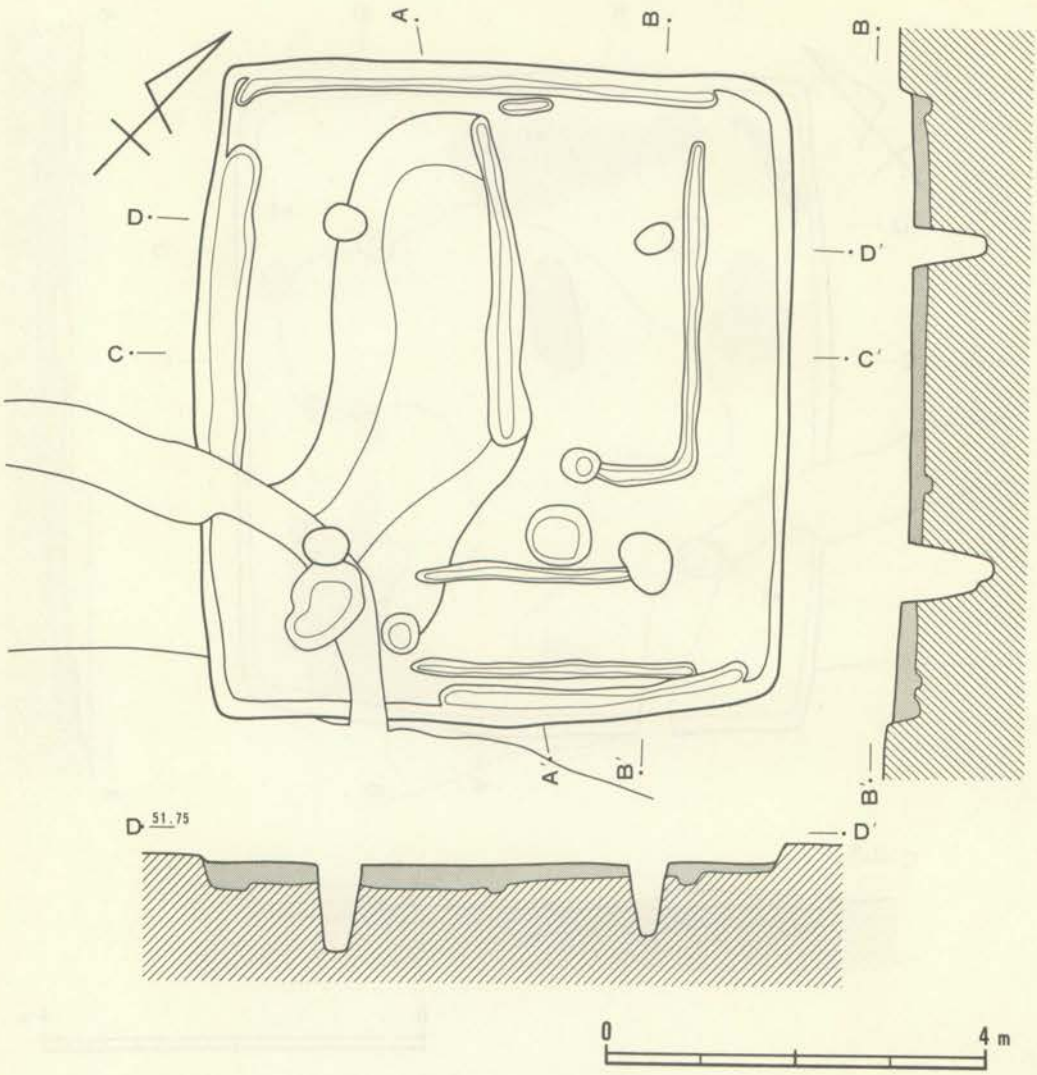
本址からは、土器が200片程出土した。覆土からの出土が多く、北西の壁際の出土が著しい。床面の遺物は、傾向として把握できない。5は口頸部のみ欠損するが、それ以外は完全な状態で出土したものである。また、6は土圧により壊れていたが、ほぼ完形のまま出土した。なお、覆土から櫛描文が施された破片が出土した。



第132図　033号住居跡(1)

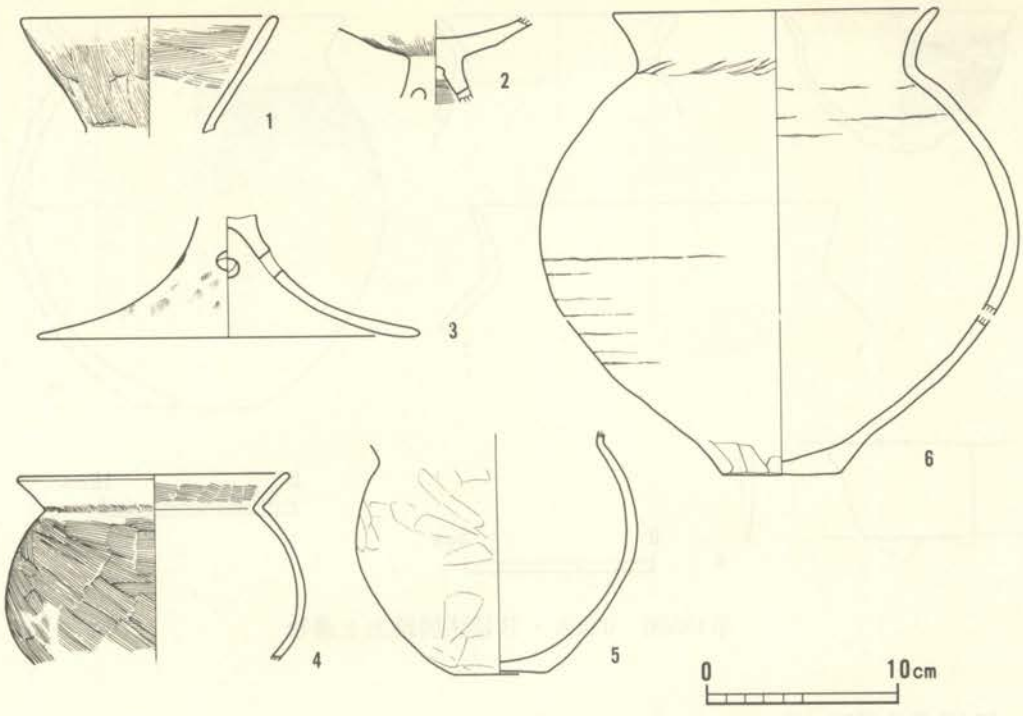
033号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	壺	口縁部⅓	(13.4) ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ。	覆土	
2	高坏	脚部½	—— ——	坏部ハケメ後ミガキ、脚部ミガキ。坏部内面ミガキ、脚部内面ハケメ。3孔。	覆土	
3	高坏	脚部½	—— ——	脚部ハケメ後ミガキ。内面ナデ。4孔。	覆土	
4	甕	¼	(14.3) ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ。	覆土	



第133図　033号住居跡(2)

5	甕	胴部完形	——	胴部ヘラケズリ後ナデ。	床面密着	
6	甕	ほぼ完形	17.0 24.2	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴部ミガキ、胴下部ヘラケズリ。	床面密着	



第134図　033号住居跡出土遺物

034A号住居跡（第129・135図）

概要

本址は、034B号跡の直上に位置し、035B号跡を精査中に黒色土の中から検出されたものである。西側は削平されており、また、南側は発見が遅れたため一部削平してしまい、全体の形状はとどめていない。

構造

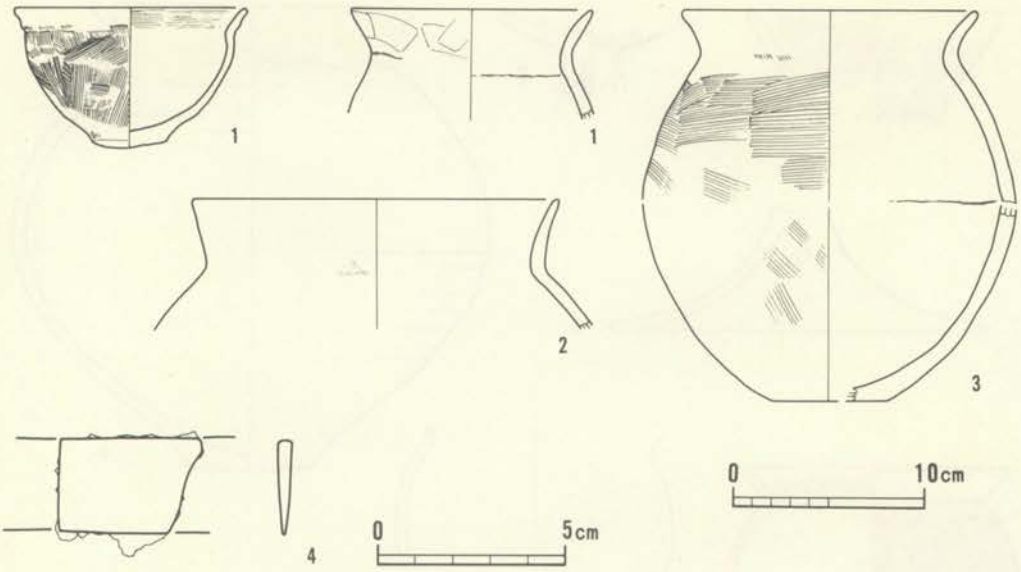
検出された貼床は、炭化粒子を含む堅い黒色土で、厚さ5cm程である。遺存部が少ないため全体の形状は不明で、住居跡と呼ぶには、ふさわしくないかもしれない。

遺物の出土状況

黒色土の貼床の上面から坏がほぼ完全な形で出土し、このほかにはやはり同じ面から長さ5cm程の炭化材が出土したのみである。

034A号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	鉢	口縁部½ 体部完形	(12.2) 7.3	口縁部ハケメ後ヨコナデ。体部ハケメ、内面ナデ。	床面密着	



第135図　034A・B号住居跡出土遺物

034B号住居跡（第129・135・310・313図）

概要

本址は、034A号跡の貼床の下に検出された住居跡で、032号跡と重複すると考えられるが、新旧関係は確認できなかった。なお、034C号跡に一部切られている。

構造

本址は、遺存している南側の壁から推測すると、隅丸方形を呈すると考えられる。炉跡は検出されなかった。床は全体に軟らかい。ピットは南側の壁に接して検出されたが径約1×2m、深さ30cmをはかり、不整形である。

034B号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	甕	¼	(12.8) —	口縁部内外面ヘラケズリ後ヨコナデ、胴部ナデ。	覆土	
2	甕	¼	(19.4) —	口縁部内外面ヨコナデ、頸部ハケメ後ナデ、胴部ナデ。	覆土	
3	甕	½	(15.6) 20.5	口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴上部ハケメ、胴下部ハケメ後ナデ。内面ナデ。	覆土	
4	鉄製品	長さ3.75cm、幅2.45cm、厚さ3.2cmをはかる。全体的に錆化が著しく、特に刃部付近は不明瞭である。両端共に欠損は古い。直刀の刃部破片と考えられる。覆土。				

遺物の出土状況

本址から出土した遺物は、土器が約40片と石製品１点、鉄器１点であり、すべて床面から浮いた状態で出土した。土器は、南側のコーナーから２～３m程中央に寄った部分からまとまって出土した。なお、覆土から櫛描文が施された破片が出土した。

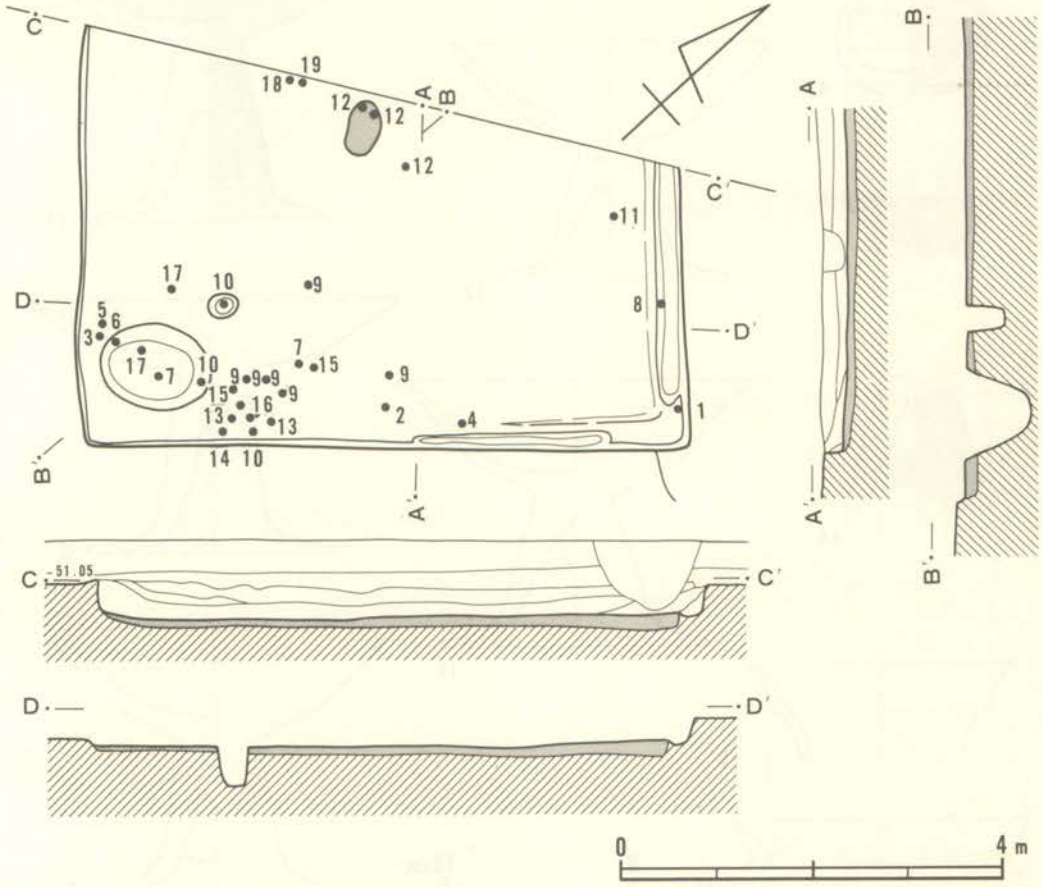
034C号住居跡（第136・137図）

概要

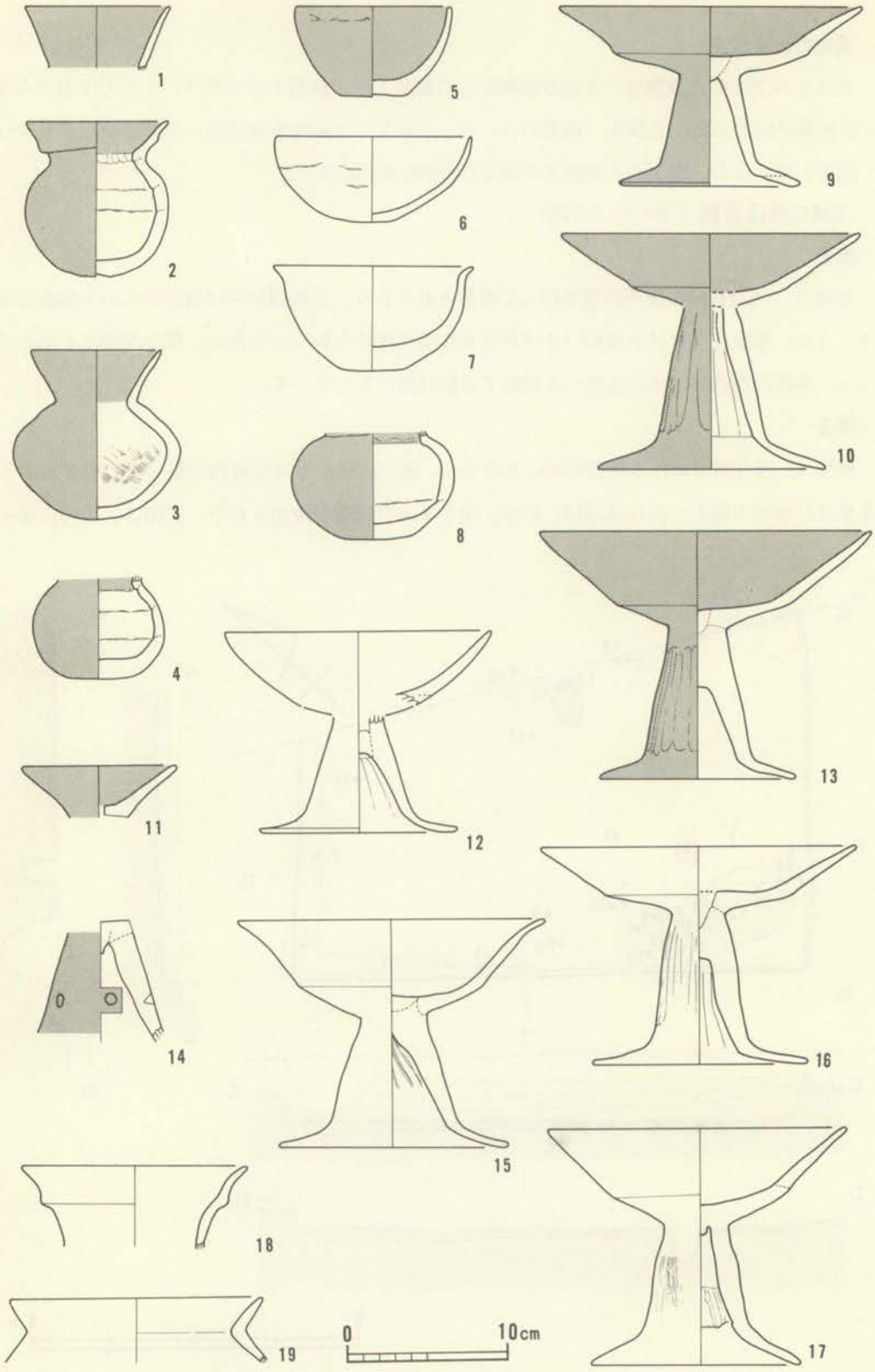
本址は、034号跡の南西の壁を切って構築されており、北西側半分は道路のため未調査である。なお、床面直上には水路用パイプが北から南に埋められているため、覆土が攪乱を受けている。本址の西側は、東から西へと傾斜する緩斜面になっている。

構造

本址は、遺存部における軸長6.26mをはかり、各コーナーもほぼ直角で整った方形を呈する。北東及び南東の壁の一部には幅14～36cm、深さ５cmの壁溝が検出された。炉跡は、住居ほぼ中



第136図　034C号住居跡



第137図　034C号住居跡出土遺跡

034C号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坩	口縁部完形	8.9 ——	内外面ナデ。赤彩。	床面直上	
2	壺	完形	8.7 9.6	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴部ナデ、頸部内面指頭押捺。赤彩。	床面密着	
3	坩	口縁部½ 胴部完形	(8.0) 10.2	ミガキ。胴下部内面ハケメ後ナデ。赤彩。	床面密着	
4	坩	胴部完形	—— ——	輪積み。内外面ナデ。赤彩。	床面直上	
5	埦	完形	9.7 5.5	輪積み。内外面ミガキ。赤彩。	床面密着	
6	埦	ほぼ完形	12.2 5.3	輪積み。内外面ミガキ。	床面密着	
7	埦	完形	12.3 6.4	内外面ミガキ（?）。	ピット	器面磨耗
8	坩	胴部完形	—— ——	輪積み。ミガキ（?）。内面ナデ（?）。赤彩。	床面密着	器面磨耗
9	高坏	完形	18.6 11.0	坏部内外面ミガキ、脚部ミガキ。脚部内面ナデ。赤彩。	床面直上	
10	高坏	ほぼ完形	18.4 14.3	坏部内外面ミガキ、脚部ヘラケズリ、裾部ミガキ。脚部内面ナデ。赤彩。	ピット	坏部と脚部は接合せず
11	器台	受部完形	9.5 ——	内外面ミガキ。赤彩。	覆土	
12	高坏	⅓	(16.4) 12.1	坏部内外面ミガキ、脚部ミガキ。脚部内面ヘラケズリ後ナデ。	床面直上	
13	高坏	ほぼ完形	20.4 14.9	坏部内外面ミガキ、脚部ヘラケズリ、裾部内外面ミガキ。赤彩。	坏部覆土・脚部床面密着	
14	高坏	脚部½	—— ——	脚部ミガキ。脚中部に貫通しない小孔が2ヵ所に認められる。赤彩。	床面直上	
15	高坏	坏部完形 脚部⅓	19.0 13.7	坏部内外面ミガキ。脚部内面しぼり痕。	覆土	
16	高坏	⅓	(18.4) 13.1	坏部ミガキ、脚部ヘラケズリ、裾部ミガキ。脚部内面ヘラケズリ。	覆土	器面磨耗
17	高坏	完形	18.4 14.3	坏部内外面ミガキ、脚部ハケメ後ミガキ、裾部ミガキ。	ピット	
18	壺	口縁部完形	13.8 ——	口縁部ミガキ（?）。	覆土	器面磨耗
19	甕	口縁部¼	(15.4) ——	口縁部ヨコナデ（?）。	床面直上	器面磨耗

央に位置し、径30×54cm、深さ6cmの楕円形を呈するが、焼土はあまり多くなく、焼土粒子が含まれている程度である。床は、砂質ロームによる貼床で、堅い。ピットは2個検出された。南側のピットは、径87×106 cm、深さ65cmの楕円形を呈しており、貯蔵穴と考えられる。この貯蔵穴よりやや中央寄りに検出されたピットは、径24cm、深さ40cmで、柱穴と考えられるが、西側においてピットは検出されなかった。

荒掘り面は北東及び南東の一部を除き、平坦である。北東及び南西では壁溝が浅いため、この壁溝部分が逆にテラス状に高くなっている。

遺物の出土状況

本址からは、土器が約 150片程出土した。床面に近い状態で出土した土器が多く、南東の壁の中央より南側からの出土が顕著である。出土した土器は、坩、高坏等小形の土器が、甕等に比べ多いのが特徴である。高坏は、坏部と脚部とが別々に出土し、接合するものは少ない。

035B号住居跡（第138～142・312図）

概要

本址は、 033号跡の1m程西側に位置する。 035A号跡により南東のコーナー部分が切られているが、本址の方が地山への掘り込みが深いため、床面には達していない。なお、本址の西側半分は地山が削平されているため、確認面がほぼ床面であった。

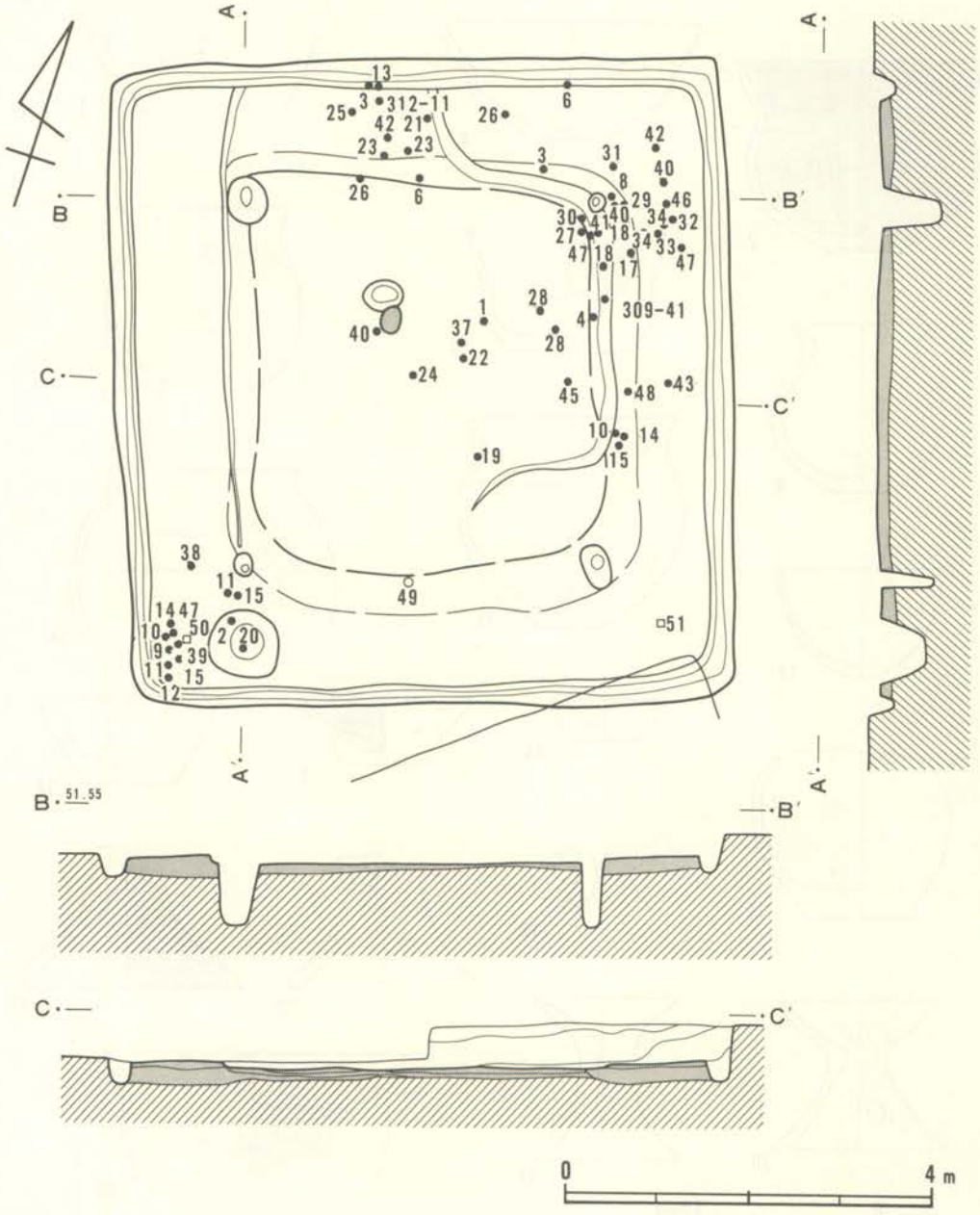
構造

本址は、長軸6.90m、短軸6.80mをはかり、長軸はほぼ北を向く。各コーナーもほぼ直角で整った方形を呈しており、幅20～30cm、深さ15～20cmの壁溝が全周する。炉跡は、住居中央よりやや北西に位置し、径23cm、深さ4cmと小規模であるが、焼土は多量に検出された。なお、炉跡の西側のピットは径35cm、深さ11cmで、覆土下部は焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土、覆土上部は灰白色土（灰層と考えられるが、粘性が非常に強く、部分的には黄白色を呈し、白色粘土の可能性もある）が認められた。西壁側及び東壁側にはベッド状遺構が検出された。西壁側は、幅 1.2m 、長さ 5.0m 、比高差8cmをはかり、壁に平行しているが、住居東側は、「コ」の字形を呈し、幅 1.3～3.0m、長さ 4.8m 、比高差6cmをはかる。床は貼床である。中央部分の上部は暗褐色土を主体にした貼床で、砂質ロームをほとんど含まず、非常に堅い。また、ベッド状遺構の上部及び中央の下部は砂質ロームを主体にした貼床で暗褐色土はほとんど含まず、非常に堅い。ベッド状遺構の下部は、暗褐色土と砂質ロームの混合土であり、軟らかい。ピットは5個検出された。南側のコーナー付近のピットは径70cm、深さ48cmをはかり、貯蔵穴と考えられる。ほかのピットは径18～42cm、深さ58～68cmであり、柱穴と考えられる。柱穴間の距離は、各辺共に 3.9m をはかり、各柱穴間を結ぶ形状もほぼ正方形を呈する。

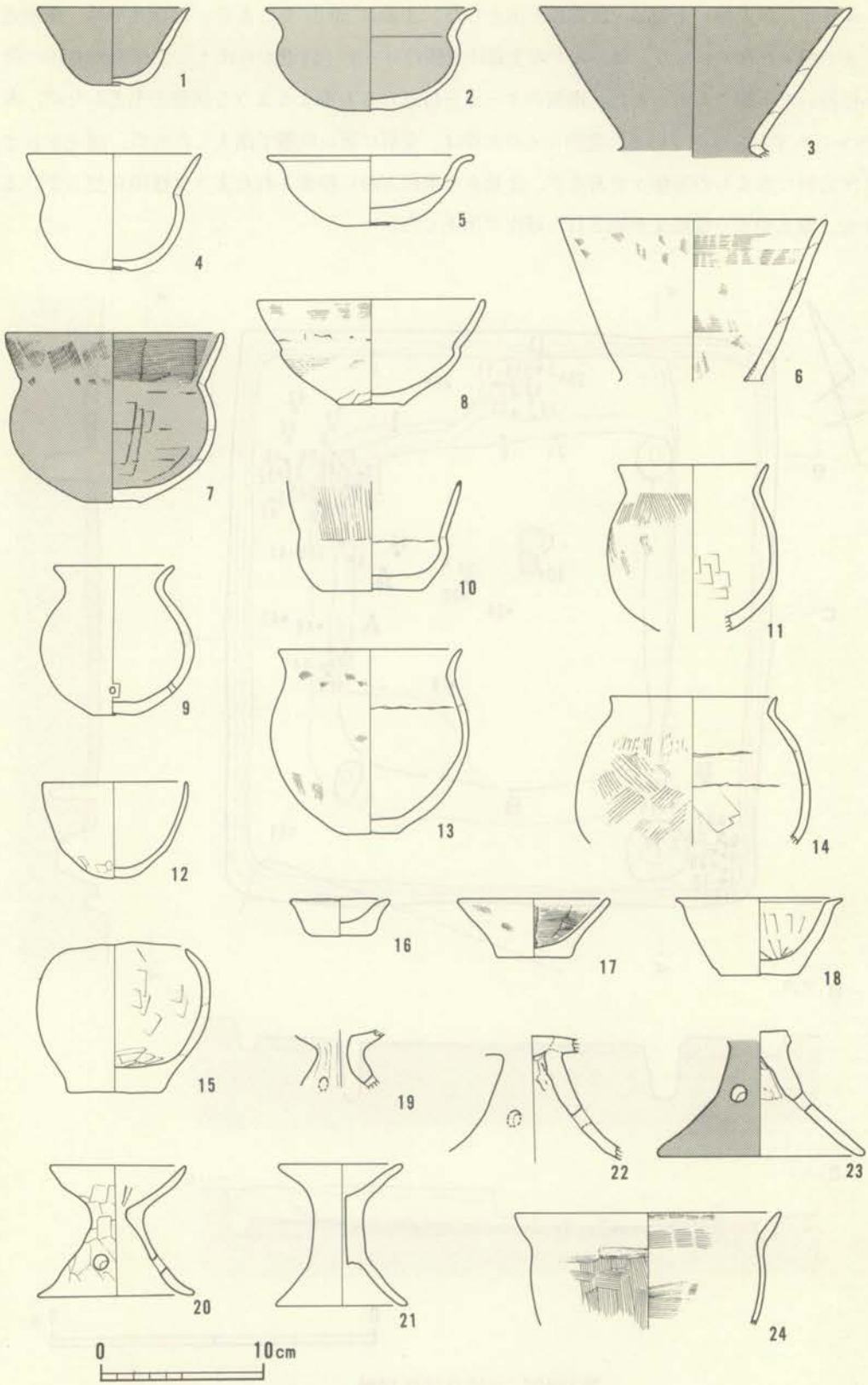
荒掘り面は、各柱穴間を結ぶ範囲と同様の中央部分が周囲に比べ10cm程高い。

遺物の出土状況

本址からは土器・土製品・鉄器等が出土した。土器は500片をこえる。西側半分は、床面近くまで削平されていたが、ほとんどの土器は北側のコーナー付近から出土し、床面から10～28cm程浮いた状態である。また、南側のコーナー付近からも重なるような状態で出土したが、床面からわずかに浮いている。北側からの土器は、完形に近い状態で出土したもの、復元されてほぼ完形になるもの等様々であるが、北東から南西方向に投棄されたような様相を呈している。なお、覆土中から櫛描文が施された破片が出土した。



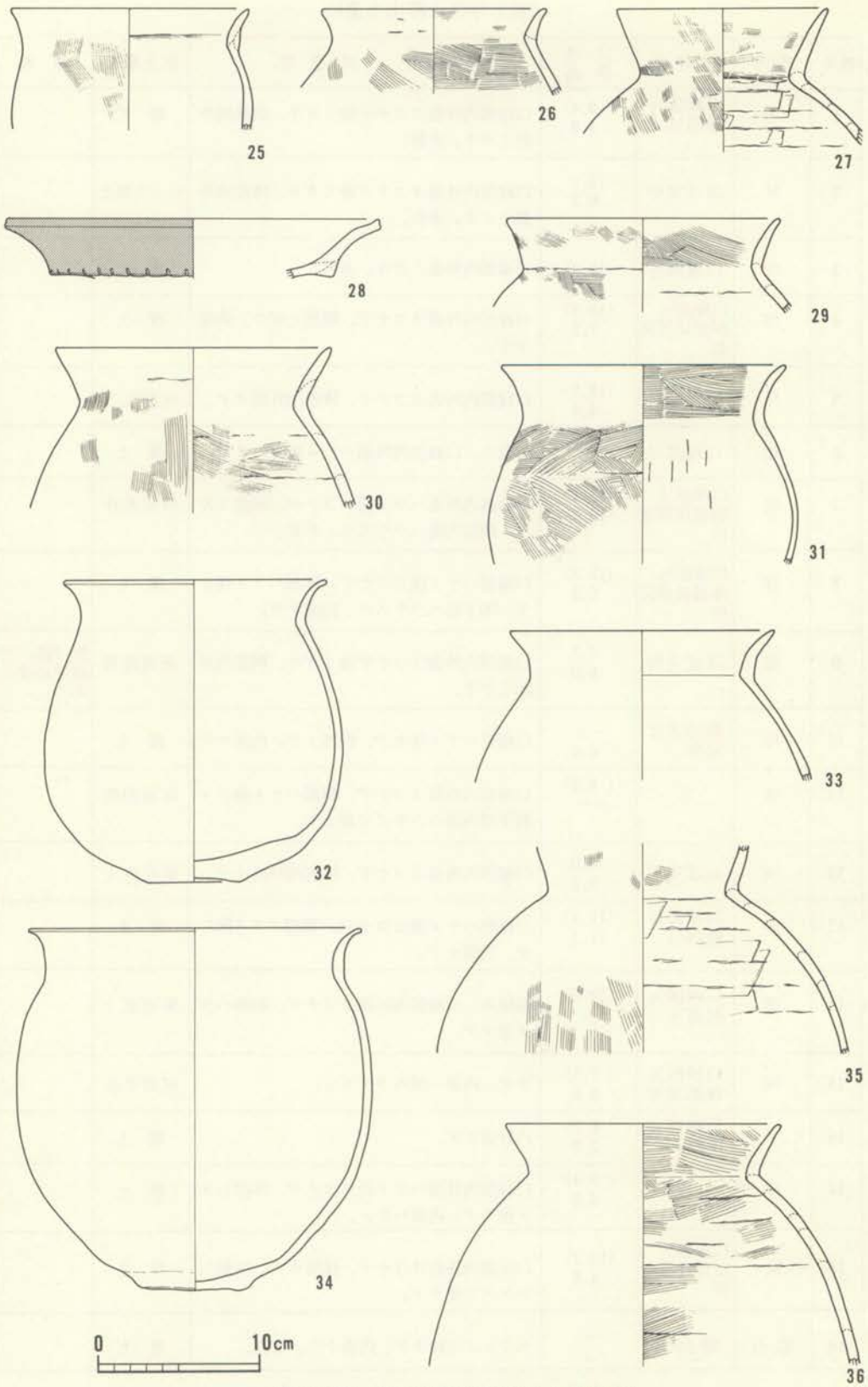
第138図　035B号住居跡



第139図　035Ｂ号住居跡出土遺物(1)

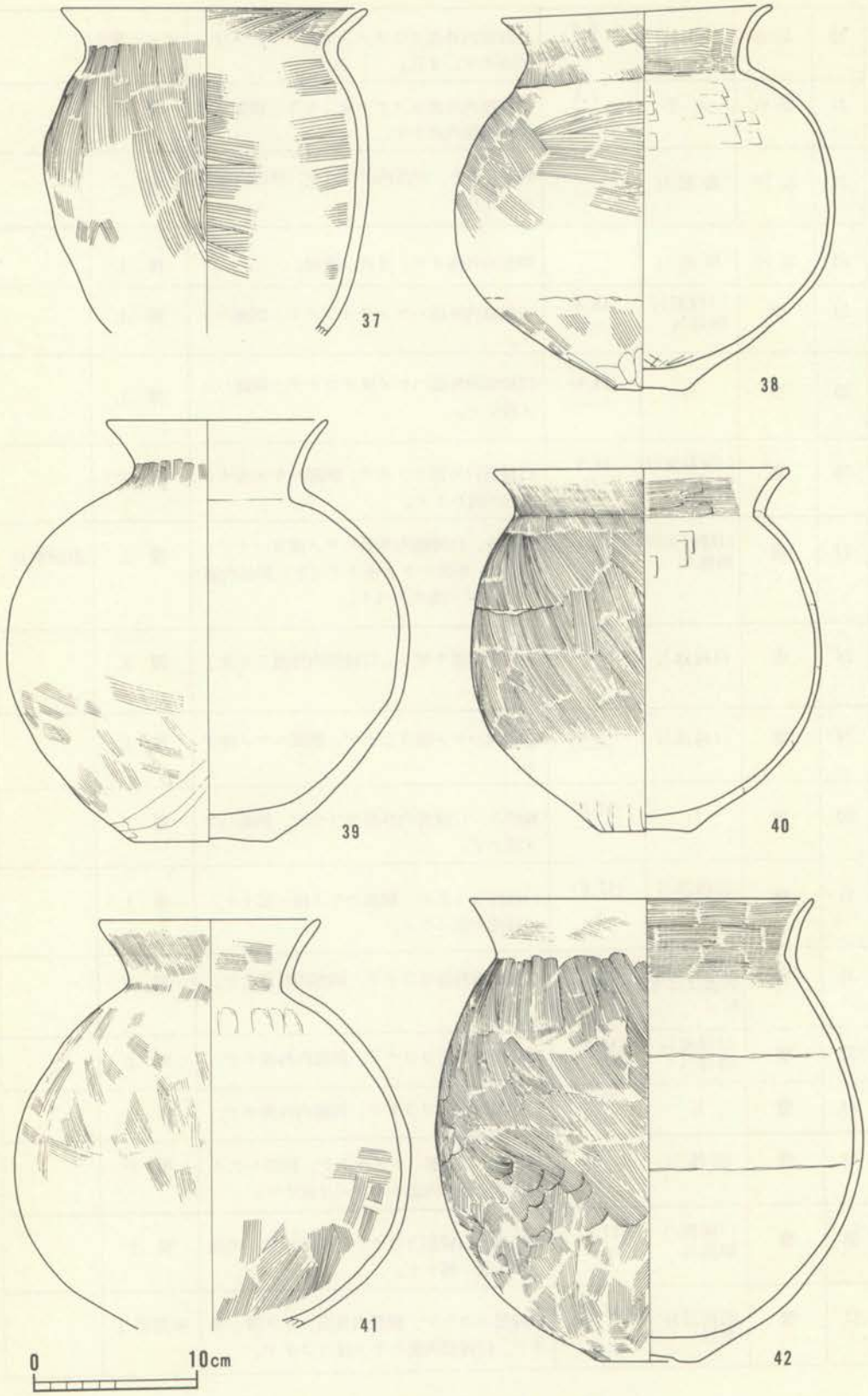
035B号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坩	口縁部1/5 胴部1/2	(9.4) 4.8	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ、胴部内外面ミガキ。赤彩。	覆土	
2	坏	ほぼ完形	13.0 6.3	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ、体部内外面ミガキ。赤彩。	ピット覆土	
3	坩	口縁部1/2	(19.3) ——	口縁部内外面ミガキ。赤彩。	覆土	
4	坩	口縁部1/2 胴部ほぼ完形	(10.8) 7.2	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ミガキ。内面ナデ。	覆土	
5	坏	口縁部1/3 体部完形	(12.8) 4.4	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ。	床面直上	
6	坩	口縁部2/3	16.5 ——	輪積み。口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ。	覆土	
7	坩	口縁部1/2 胴部ほぼ完形	(13.4) 10.2	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ミガキ。胴部内面ヘラケズリ。赤彩。	床面密着	
8	坏	口縁部1/2 体部ほぼ完形	(15.2) 6.3	口縁部ハケメ後ヨコナデ、体部ハケメ後ナデ、体下部ヘラケズリ。内面ナデ。	覆土	
9	壺	ほぼ完形	7.3 9.0	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ、胴部内外面ミガキ。	床面密着	胴下部に焼成前の穿孔あり。
10	坩	胴部ほぼ完形	—— 6.6	口縁部ハケメ後ナデ、胴部ナデ。内面ナデ。	覆土	
11	甕	1/2	(9.2) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ、胴下部内面ヘラケズリ後ナデ。	床面密着	
12	埦	ほぼ完形	9.0 5.7	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ。	床面直上	
13	甕	口縁部1/4 胴部1/2	(11.4) 11.1	口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。内面ナデ。	覆土	
14	甕	口縁部1/8 胴部1/2	(10.2) ——	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	床面直上	
15	埦	口縁部1/2 体部完形	(7.5) 9.0	ナデ。内面一部ヘラケズリ。	床面密着	
16	ミニチュア	口縁部1/4 体部1/2	(6.2) 2.2	内外面ナデ。	覆土	
17	鉢	1/4	(9.4) 3.5	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、体部ハケメ後ナデ。内面ハケメ。	覆土	
18	鉢	口縁部1/3 体部ほぼ完形	(10.2) 4.6	口縁部内外面ヨコナデ、体部ナデ。内面ヘラケズリ後ナデ。	覆土	
19	器台	脚部2/3	—— ——	ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。3孔。	覆土	

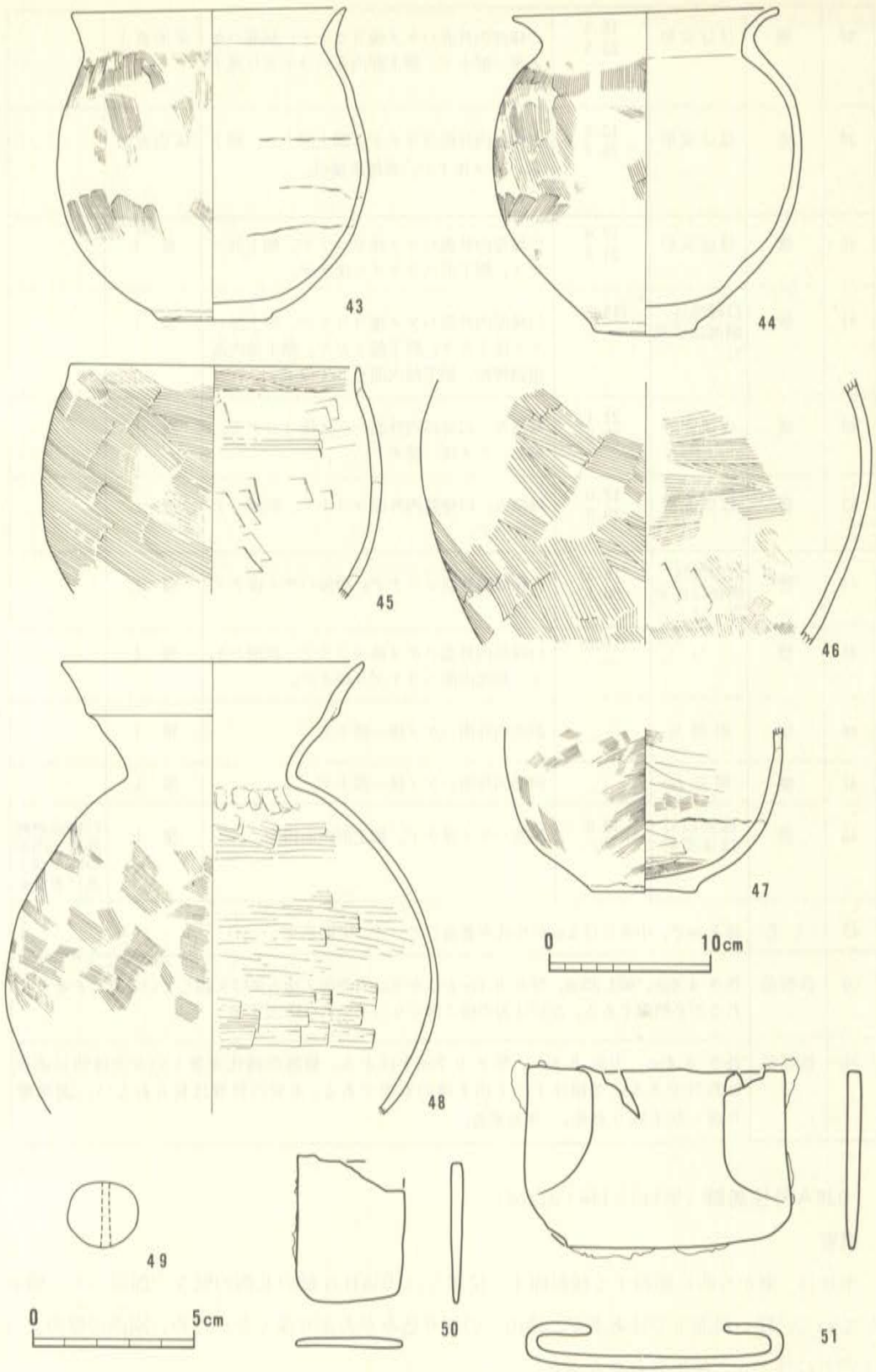


第140図　035Ｂ号住居跡出土遺物(2)

20	器台	完形	8.4 8.0	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。3孔。	ピット覆土	
21	器台	完形	7.6 8.5	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ、脚部ミガキ。脚部内面ナデ。	覆土	
22	高坏	脚部⅔	—— ——	脚部ミガキ。坏部内面ミガキ、脚部内面ナデ。3孔。	覆土	
23	高坏	脚部½	—— ——	脚部内外面ナデ。3孔。赤彩。	覆土	
24	甕	口縁部¼ 胴部⅕	(16.4) ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ。	覆土	
25	甕	½	(14.6) ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	覆土	
26	甕	口縁部完形 胴部⅓	14.0 ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。胴部内面ハケメ。	覆土	
27	壺	口縁部完形 胴部¼	13.1 ——	輪積み。口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ（?）、胴部ハケメ後ナデ（?）。胴部内面ヘラケズリ後ナデ（?）。	覆土	器面磨耗
28	壺	口縁部¼	(23.2) ——	口縁下端部キザミ。口縁部内外面ミガキ。赤彩。	覆土	
29	甕	口縁部¼	(17.0) ——	口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	覆土	
30	甕	¼	(17.0) ——	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	覆土	
31	甕	口縁部¼ 胴部½	(17.6) ——	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ後一部ナデ。口縁部内面ハケメ。	覆土	
32	甕	口縁部⅓ 胴部ほぼ完形	(16.3) 18.2	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	覆土	
33	甕	口縁部⅛ 胴部¼	(16.4) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	覆土	
34	甕	½	(20.6) 21.8	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	覆土	
35	壺	胴部¼	—— ——	輪積み。口縁部ハケメ後ナデ、胴部ハケメ後ナデ。胴部内面ヘラケズリ後ナデ。	覆土	
36	甕	口縁部⅕ 胴部⅓	(17.2) ——	輪積み。口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。内面ハケメ後一部ナデ。	覆土	
37	甕	底部以外完形	18.7 ——	口縁部ヨコナデ、胴部内外面ハケメ後一部ナデ。口縁部内面ハケメ後ヨコナデ。	床面直上	



第141図　035 B 号住居跡出土遺物(3)



第142図　035Ｂ号住居跡出土遺物(4)

38	甕	ほぼ完形	16.6 23.5	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後一部ナデ。胴上部内面ヘラケズリ後ナデ。	床面直上	
39	壺	ほぼ完形	13.6 25.2	口縁部内外面ヨコナデ、胴上部ナデ、胴下部ハケメ後ナデ。底部木葉痕。	床面密着	
40	甕	ほぼ完形	17.9 21.8	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴上部ハケメ、胴下部ヘラケズリ後ナデ。	覆　土	
41	壺	口縁部¼ 胴部ほぼ完形	(13.2) ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴上部ハケメ後ミガキ、胴下部ミガキ。胴上部内面指頭押捺、胴下部内面ハケメ後ナデ。	覆　土	
42	甕	ほぼ完形	21.1 27.8	輪積み。口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後一部ナデ。	覆　土	
43	甕	ほぼ完形	17.0 19.3	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	覆　土	
44	甕	口縁部½ 胴部ほぼ完形	(16.5) 20.1	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	覆　土	
45	甕	½	(18.0) ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ。胴部内面ヘラケズリ後ナデ。	覆　土	
46	甕	胴部½	—— ——	胴部内外面ハケメ後一部ナデ。	覆　土	
47	甕	胴部½	—— ——	胴部内外面ハケメ後一部ナデ。	覆　土	
48	壺	底部以外ほぼ完形	19.8 ——	胴部ハケメ後ナデ。胴上部内面指頭。	覆　土	口縁部磨耗外面と内面のハケ状工具は異なる。
49	土玉	径2cmで、中央に径3mmの小孔が貫通している。床面密着				
50	鉄製品	長さ 4.4cm、幅3.35cm、厚さ 0.1cmをはかる。実測図上端右側は欠損しているものと考えられるが不明瞭である。左辺は刃の様に薄くなっている。床面密着				
51	鉄製品	長さ 5.4cm、刃幅 8.2cm、厚さ 0.2cmをはかる。袋部の銹化が著しいが全体的に遺存は良好である。欠損はすべて出土後のものである。木質の銹着は見られない。両端折り返し状土堀り具先。 床面密着。				

038A号住居跡（第143～146・312図）

概要

本址は、東から西に傾斜する緩斜面上に位置し、038B号跡の北西の壁を一部切って、構築している。緩い斜面上ではあるが、地山への掘り込みがあまり深くないため、南西の壁の立ち上がりはほとんど検出されなかった。

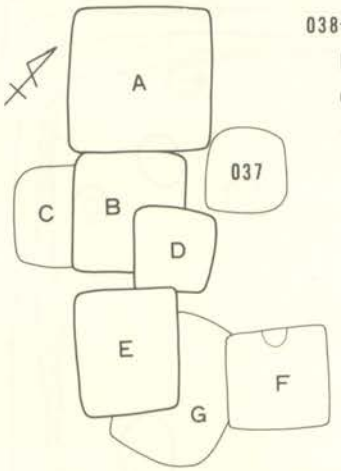
構造

本址は、各辺共6.20m をはかり、各コーナーもほぼ直角に近く、整った方形を呈する。壁溝は、南西の壁の一部を除き全周する。床面上には焼土粒子・炭化粒子が多量に検出されたが、炉跡は検出されなかった。床は中央部分が堅い。ピットは6個検出された。中央部の4個は、柱穴と考えられ、西側の柱穴が中央に寄りすぎているため、各柱穴間を結ぶ形状は不整方形を呈する。

荒掘り面においては、壁溝の20～40cm内側に全周する溝が検出された。この溝は、東及び南側のコーナーは丸みを有するが、西及び北側ではほぼ直角である。溝のほかに6個のピットが検出された。

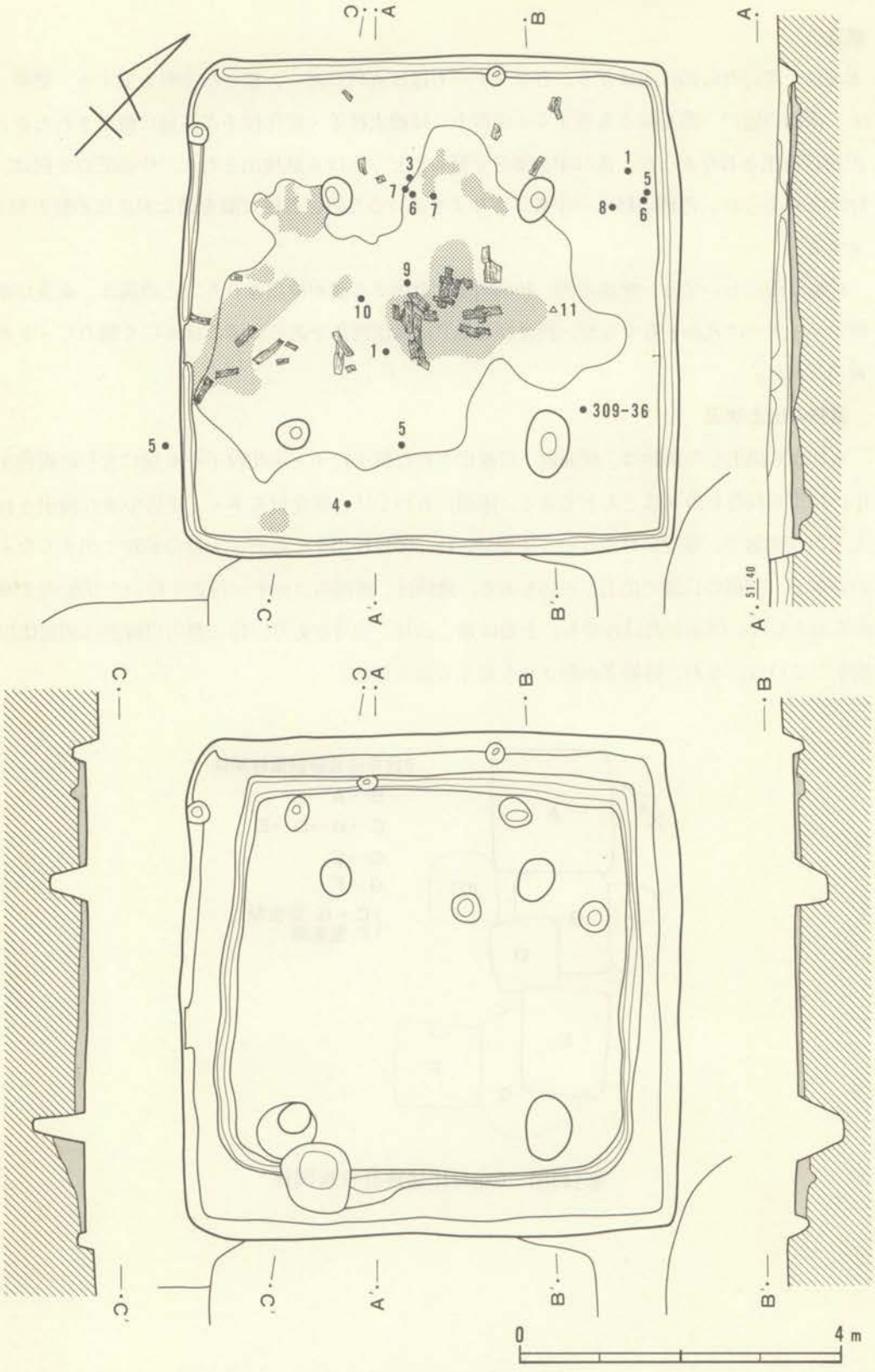
遺物の出土状況

本址から出土した遺物は、床面直上に検出された焼土粒子・炭化粒子を多量に含む暗褐色土中に検出されたものがほとんどである。床面においては、炭化材も多く、住居中央に検出されたものが顕著で、壁際には少ない。土器は、約 300片程出土したが、大形の破片で出土したものが多く、完形の状態で出土した10もある。遺物は、西側のコーナー付近を除いた住居内全域から出土した。図示した以外でも、土器は坩、高坏、甕等があり、特に甕の口縁部は30個体程出土している。なお、櫛描文が施された破片も出土した。

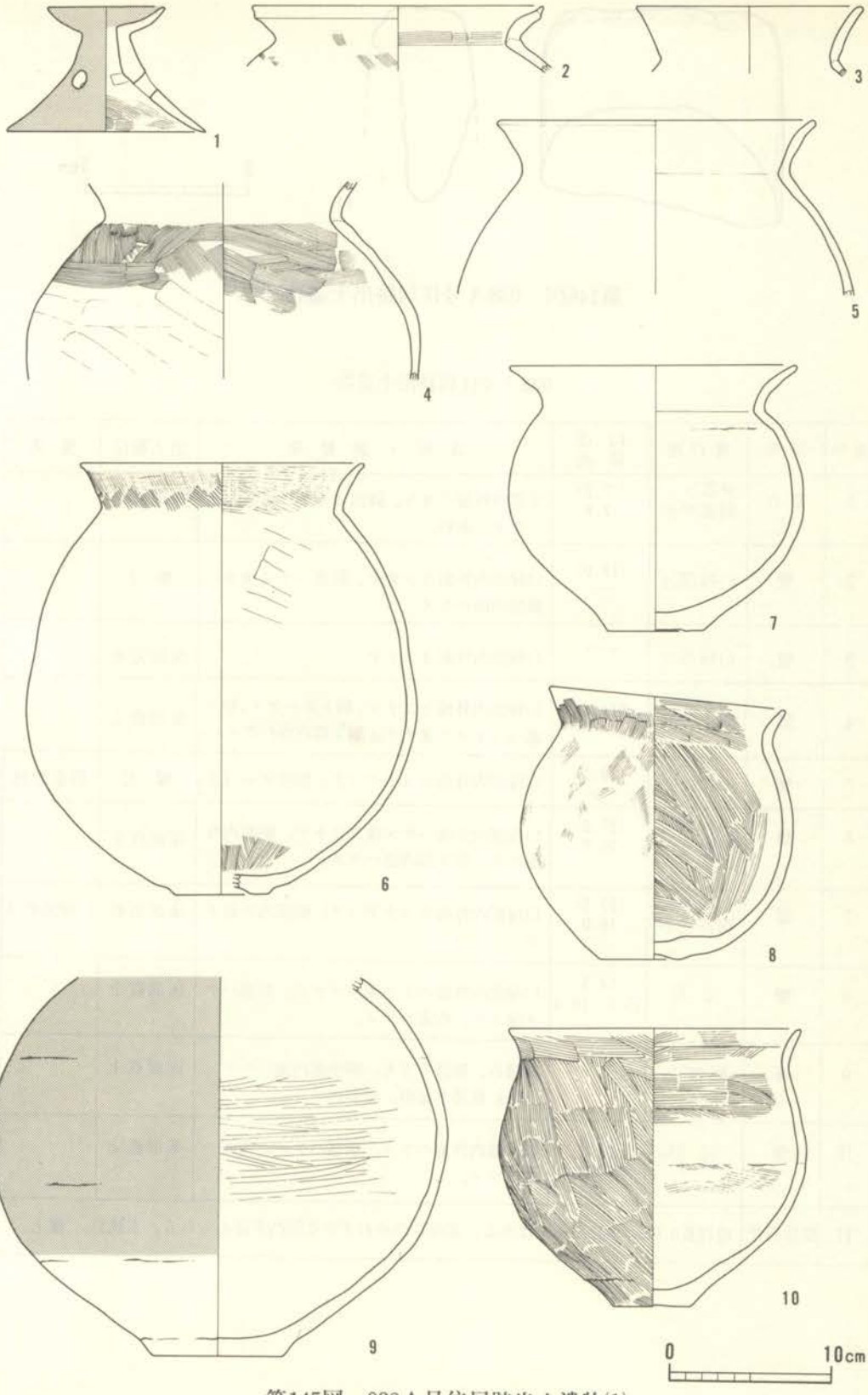


038号住居跡群重複関係
B→A
C→B→D→E
G→E
G→F
(C・G 弥生期
F 鬼高期)

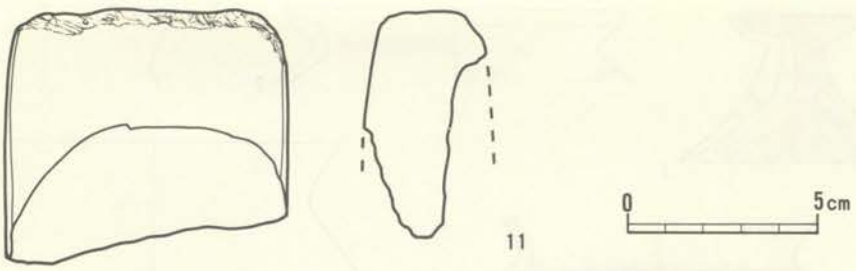
第143図　038号住居跡群重複関係



第144図　038A号住居跡



第145図　038A号住居跡出土遺物(1)



第146図　038A号住居跡出土遺物(2)

038A号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	器台	受部½ 脚部完形	(7.2) 7.8	受部内外面ミガキ、脚部ミガキ。脚部内面ハケメ。赤彩。	床面直上	
2	甕	口縁部⅓	(18.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。頸部内面ハケメ。	覆土	
3	甕	口縁部¼	—— ——	口縁部内外面ヨコナデ。	床面密着	
4	甕	胴上部⅓	(14.4) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴上部ハケメ、胴下部ヘラケズリ後ナデ。胴上部内面ハケメ。	床面直上	
5	甕	½	(19.3) ——	口縁部内外面ヨコナデ（?）、胴部ナデ（?）。	覆土	器面磨耗
6	甕	口縁部¼ 胴部½	(17.2) 26.0	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部内外面ナデ。胴下部内面ハケメ。	床面直上	
7	甕	口縁部¾ 胴部完形	(17.5) 16.0	口縁部内外面ヨコナデ（?）、胴部内外面ナデ。	床面密着	口縁部磨耗
8	甕	完形	14.3 15.0～16.4	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。内面ハケメ。	床面直上	
9	壺	胴部½	—— ——	輪積み。胴部ミガキ。胴中部内面ハケメ（?）。底部木葉痕。赤彩。	床面直上	
10	甕	完形	17.8 16.8	口縁部内外面ハケメ、胴部ハケメ。内面一部ハケメ。	床面直上	
11	磨製石斧	現存長6.6cm、幅7.5cmをはかる。基部にのみわずかな凹凸が認められる。玄武岩。覆土。				

038B号住居跡（第143・147・148図）

概要

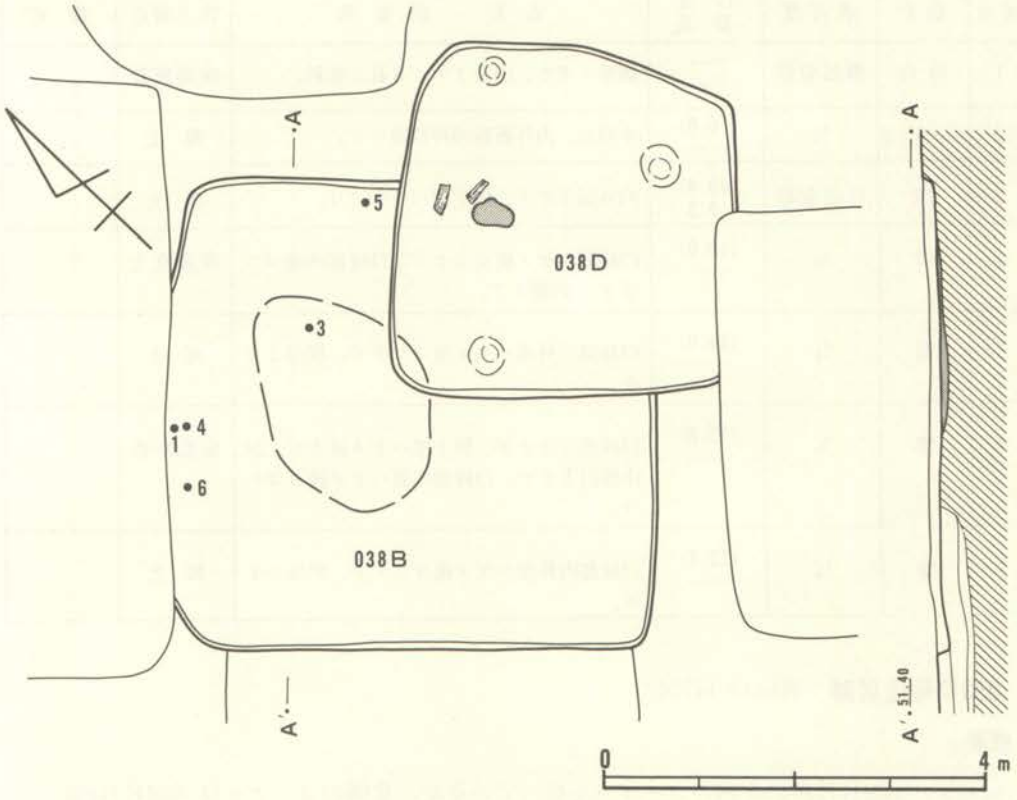
本址は、038A号跡に北西の壁を、更に東側のコーナーは、038D号跡に切られている。本址付近は地山が削平されており、覆土の大半は失なわれていた。なお、南東部分の床面は038C号跡の覆土中である。

構造

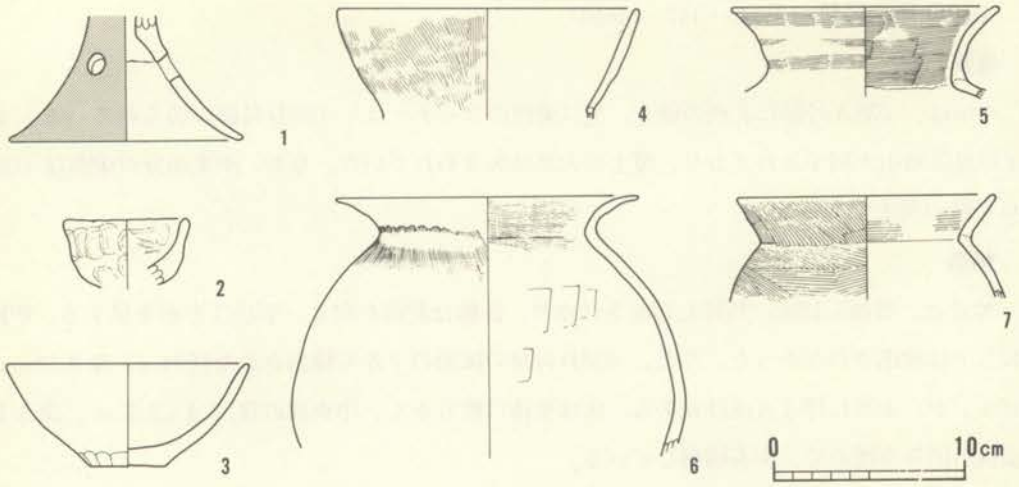
本址は、長軸5.12m、短軸4.72mをはかり、長軸は北西を向く。形状は方形を呈する。炉跡、ピットは検出されなかった。ただ、038D号跡の床面の下から検出された径34cm、深さ20cmのピットが、本址に伴う可能性がある。床は全体に軟らかく、中央部の径1.4×2.7m、深さ15cm程の凹みを埋めて、床を構築している。

遺物の出土状況

本址から出土した遺物は土器のみである。出土した土器は、床面に近いものが多く、特に住居中央から北側半分においての出土であり、南側からはなかった。



第147図　038B・D号住居跡



第148図　038Ｂ号住居跡出土遺物

038Ｂ号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	器台	脚部完形	—— ——	脚部ミガキ。内面ナデ。3孔。赤彩。	床面密着	
2	ミニチュア	¼	(6.6) ——	手捏ね。内外面指頭押捺後ナデ。	覆土	
3	埦	ほぼ完形	(13.8) 5.3	内外面ミガキ。体下部ヘラケズリ。	覆土	
4	坩	¼	(16.0) ——	口縁部ハケメ後ヨコナデ。口縁部内面ヨコナデ、内面ナデ。	床面直上	
5	壺	⅙	(14.0) ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ミガキ。	覆土	
6	甕	¼	(15.8) ——	口縁部ヨコナデ、胴上部ハケメ後ナデ、胴中部以下ナデ。口縁部内面ハケメ後ヨコナデ。	床面密着	
7	甕	¼	(13.7) ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ。	覆土	

038Ｄ号住居跡（第143・147図）

概要

本址は、038Ｂ号跡の東側のコーナーを切っているが、北側のコーナーは038Ｅ号跡に切られている。本址付近は、地山が削平されており、壁の立ち上がりはわずかである。

構造

本址は、軸長3.60mの規模であるが、北東の壁が内側に曲がっているため、不整の方形を呈

する。炉跡は、北西の壁近くに位置し、 径25×40cmの楕円形を呈する。床は全体に軟らかい。ピットは検出されなかった。

荒掘り面は、床面より5cm程低く、全体に平坦である。この荒掘り面において、3個のピットが検出された。ピットは径24～40cm、深さ12～26cmであるが、西側のコーナー近くのピットは、038B号跡に伴う可能性もある。

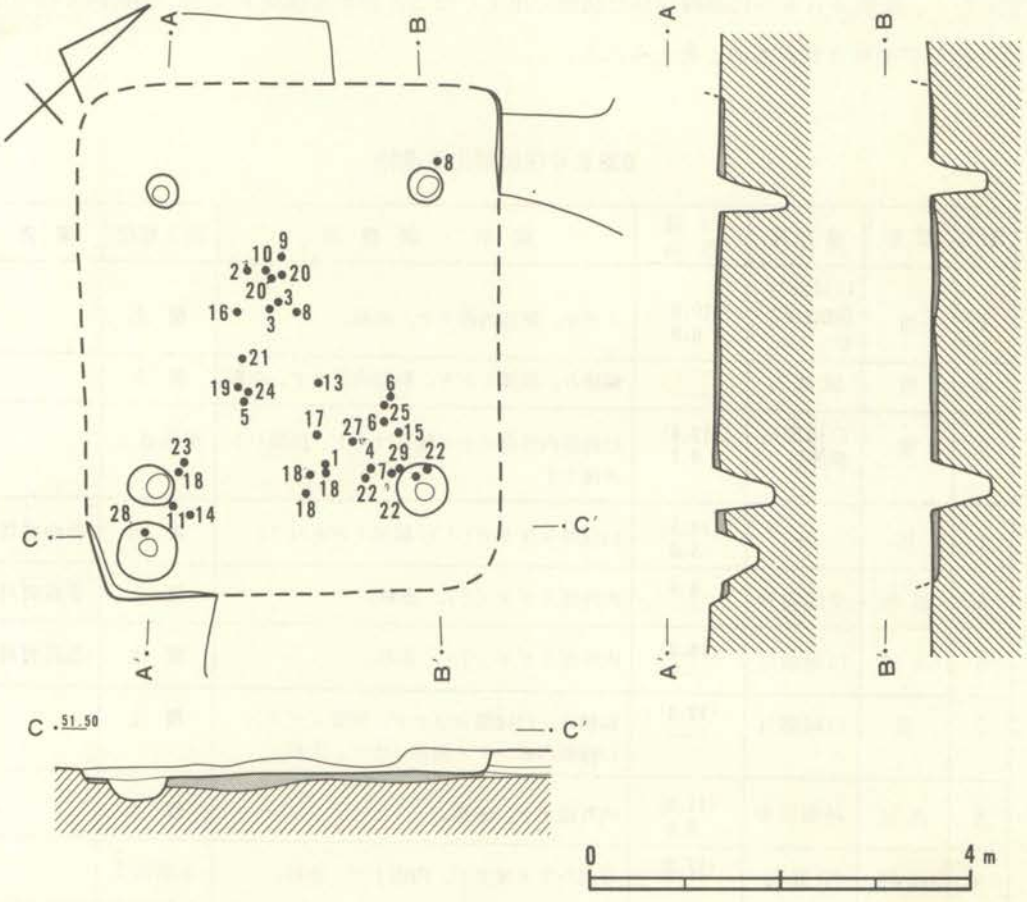
遺物の出土状況

本址からは、土器が約10片出土したにすぎず、細片ばかりであるために図示することができなかった。ほとんどは、ハケメ調整が施された甕の胴部破片である。

038E号住居跡（第143・149～152図）

概要

本址は、038G号跡を精査中に土器が集中して出土し、精査を続けたが、地山が削平されていたこともあり、確認できた壁は北及び南側のコーナー付近の一部のみである



第149図　038E号住居跡

構造

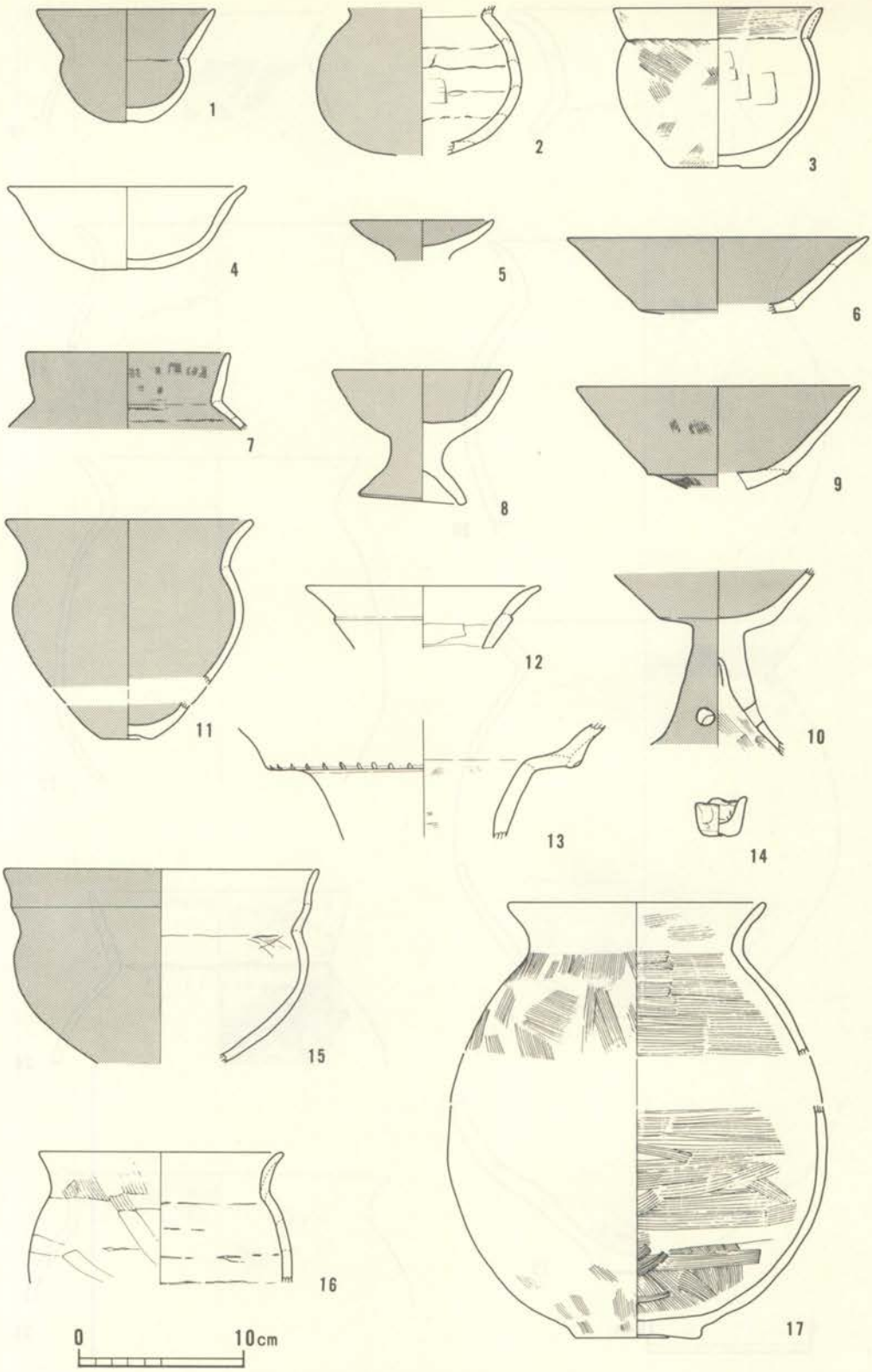
本址は、検出された壁が南と北のコーナーのみであったため、全体の形状が不明瞭で、コーナーがほぼ直角であることから、方形を呈すると考えられる。また、検出された柱穴の位置から、規模は約 5.2×4.5 m程であろう。炉跡は検出されなかった。床は厚さ８～18cm程の貼床で構築されているが、 038G号跡と重複している東側の荒掘り面は 038G号跡の荒掘りの形状と考えられ、重複部分は覆土を床にしていると考えられる。ピットは５個検出された。南側のコーナー近くのピットは、径60cm、深さ30cmをはかり、貯蔵穴と考えられる。ほかのピットは径30～52cm、深さ62～72cmで、柱穴と考えられる。柱穴間の距離は、長辺で 3.1m 、短辺で2.8 mをはかり、各柱穴間を結ぶ形状は長方形を呈する。

遺物の出土状況

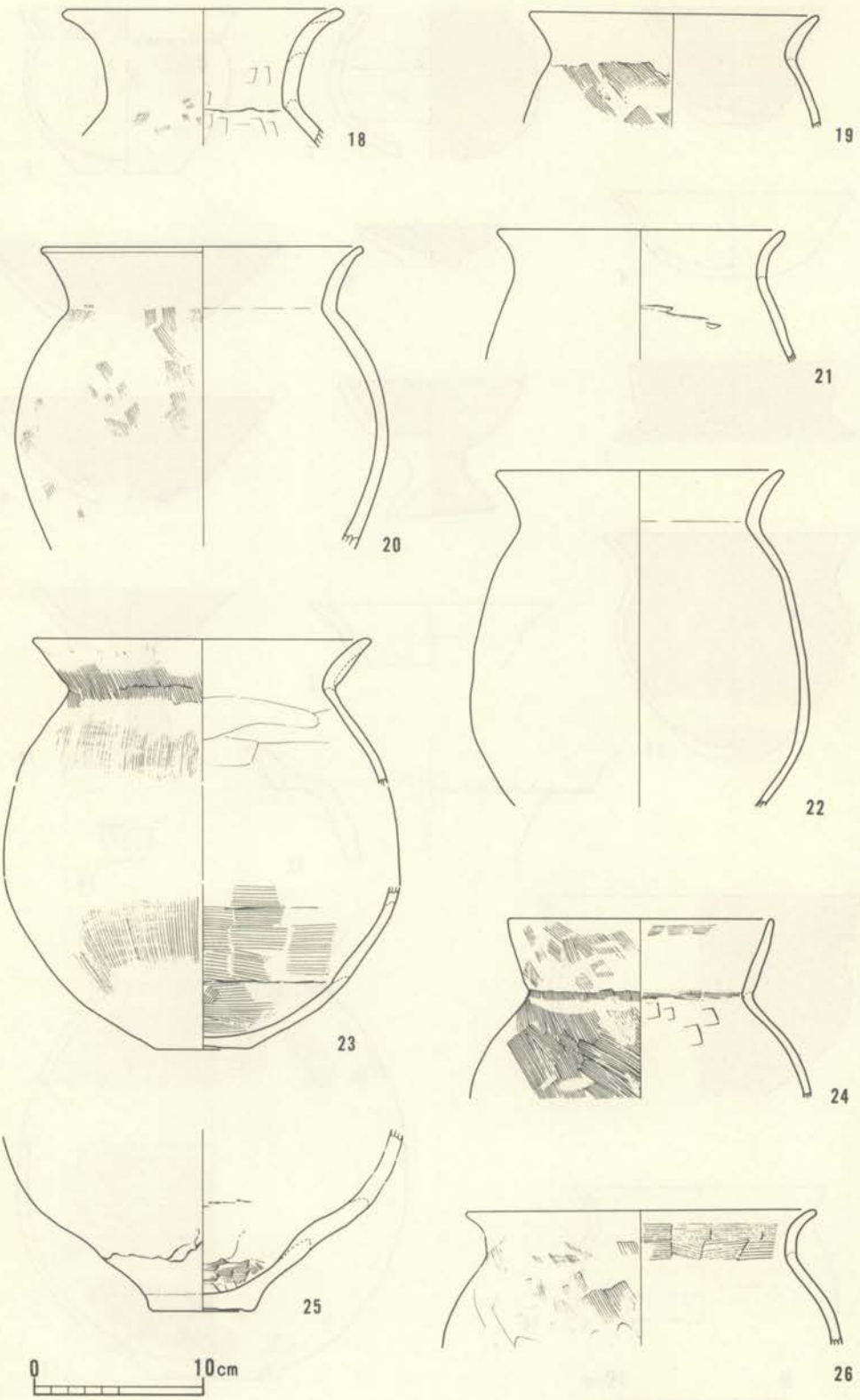
本址から出土した遺物は、住居跡の南東の壁付近から中央にかけてであり、この約３×４m程の三角形を呈する範囲から、約 400片程の土器が出土した。これらの土器は、破片の状態で出土したもので、完全な形で出土したものは14のみである。また、完全に復元された土器は１個もなく、床面から８～15cm程浮いた状態で出土したこと等から推測すると、住居跡が埋没中に一括して廃棄されたものと考えられる。

038E号住居跡出土遺物

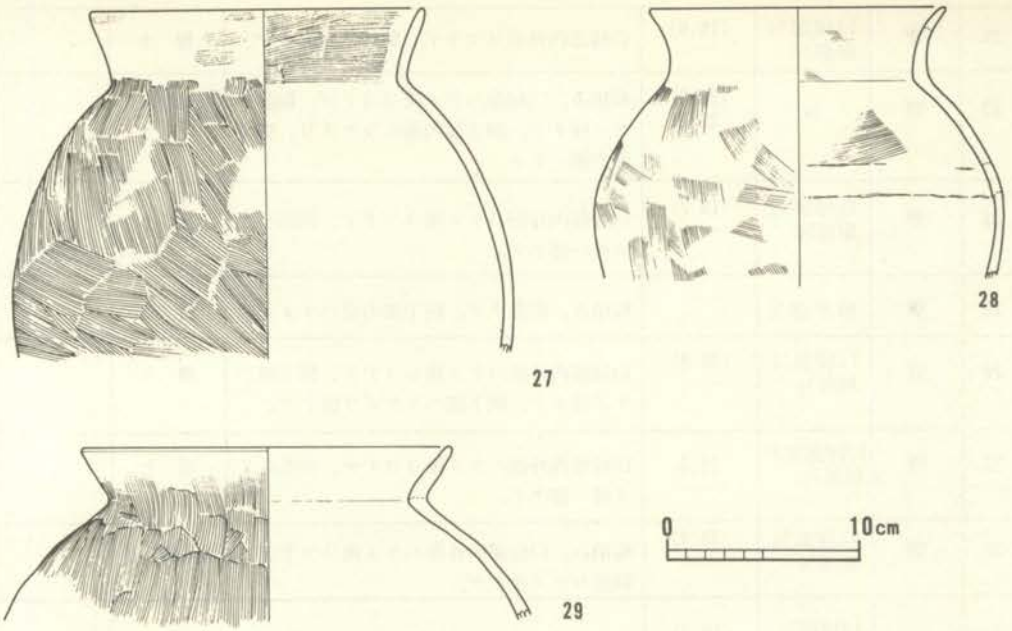
番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坩	口縁部⅓ 胴部ほぼ完形	(10.8) 6.9	ミガキ。胴部内面ナデ。赤彩。	覆土	
2	坩	胴部¾	—— ——	輪積み。胴部ミガキ。胴部内面ナデ。赤彩。	覆土	
3	甕	口縁部⅓ 胴部½	(12.8) 9.7	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	床面直上	
4	坏	½	(14.5) 5.0	口縁部ヨコナデ(？)。胴部ミガキ（？)。	覆土	器面磨耗
5	器台	受部完形	8.8 ——	内外面ミガキ（？)。赤彩。	覆土	器面磨耗
6	高坏	口縁部⅓	(18.2) ——	内外面ミガキ（？)。赤彩。	覆土	器面磨耗
7	壺	口縁部¼	(12.4) ——	輪積み。口縁部ヨコナデ、胴部ミガキ。口縁部内面ハケメ後ヨコナデ。赤彩。	覆土	
8	高坏	坏部完形	(11.0) 8.0	内外面ナデ。赤彩。	覆土	
9	高坏	坏部⅛	(17.2) ——	坏部ハケメ後ナデ。内面ナデ。赤彩。	床面直上	
10	高坏	脚部¾	—— ——	ナデ。脚部内面ハケメ。３孔。赤彩。	床面直上	



第150図　038E号住居跡出土遺物(1)



第151図　038E号住居跡出土遺物(2)



第152図　038Ｅ号住居跡出土遺物(3)

11	壺	口縁部½ 胴部⅓	(15.0) (13.1)	内外面ミガキ。赤彩。	覆　土	
12	壺	口縁部¼	(14.4) ——	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面ヘラケズリ。	覆　土	
13	壺	口縁部¼	—— ——	口縁下端部キザミ。ナデ（？）。頸部内面ハケメ後ナデ。	覆　土	器面磨耗
14	ミニチュア	完　形	3.2 2.4	手捏ね。内外面指頭押捺。	床面直上	
15	坏	口縁部⅒ 体部¼	(19.0) ——	内外面ミガキ（？）。赤彩。	覆　土	器面剝落
16	甕	口縁部¼ 胴部⅔	(14.8) ——	輪積み。口縁部ハケメ後ヨコナデ。胴部ヘラケズリ後ナデ。	覆　土	
17	甕	½	(15.4) (26.0)	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。胴部内面ハケメ。	覆　土	
18	壺	口縁部½	(16.6) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	覆　土	
19	甕	口縁部¼	(17.1) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後一部ナデ。	覆　土	
20	甕	⅓	(18.6) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	床面直上	
21	甕	口縁部⅓	(17.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	覆　土	

22	甕	口縁部1/4 胴部1/2	(16.6) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	覆　土	
23	甕	1/6	(20.0) 23.8	輪積み。口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。胴上部内面ヘラケズリ、胴下部内面ハケメ。	床面直上	
24	甕	口縁部1/8 胴部1/4	(15.7) ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後一部ナデ。	覆　土	
25	甕	胴下部1/2	—— ——	輪積み。胴部ナデ。胴下部内面ハケメ。	覆　土	
26	甕	口縁部1/4 胴部1/6	(20.8) ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴上部ハケメ後ナデ、胴下部ヘラケズリ後ナデ。	覆　土	
27	甕	口縁部完形 胴部2/3	16.3 ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後一部ナデ。	覆　土	
28	甕	口縁部2/3 胴部1/2	(15.4) ——	輪積み。口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	床面直上	
29	甕	口縁部1/4 胴部1/8	(19.2) ——	口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ。	覆　土	

039B号跡（第153図）

概要

本址は、039A号跡に南西及び南東の壁の大部分を、更に、039C号跡に北東の壁を切られており、また、地山への掘り込みが浅く、わずかしか遺存していない。本址付近の地山はほぼ平坦である。

構造

本址は、遺存している北及び西側のコーナー部分から推測すると、南西から北東方向の軸長が6.42mをはかり、ほぼ方形を呈すると考えられる。遺存している部分からは、炉跡は検出されなかった。床は軟らかい。ピットは1個検出された。039A号跡から検出されたピットが一部本址に伴う可能性がある。039A号跡の荒掘り面で検出されたピットを含めても、本址のピットは4本柱の整った柱穴にはなり得ないと考えられる。

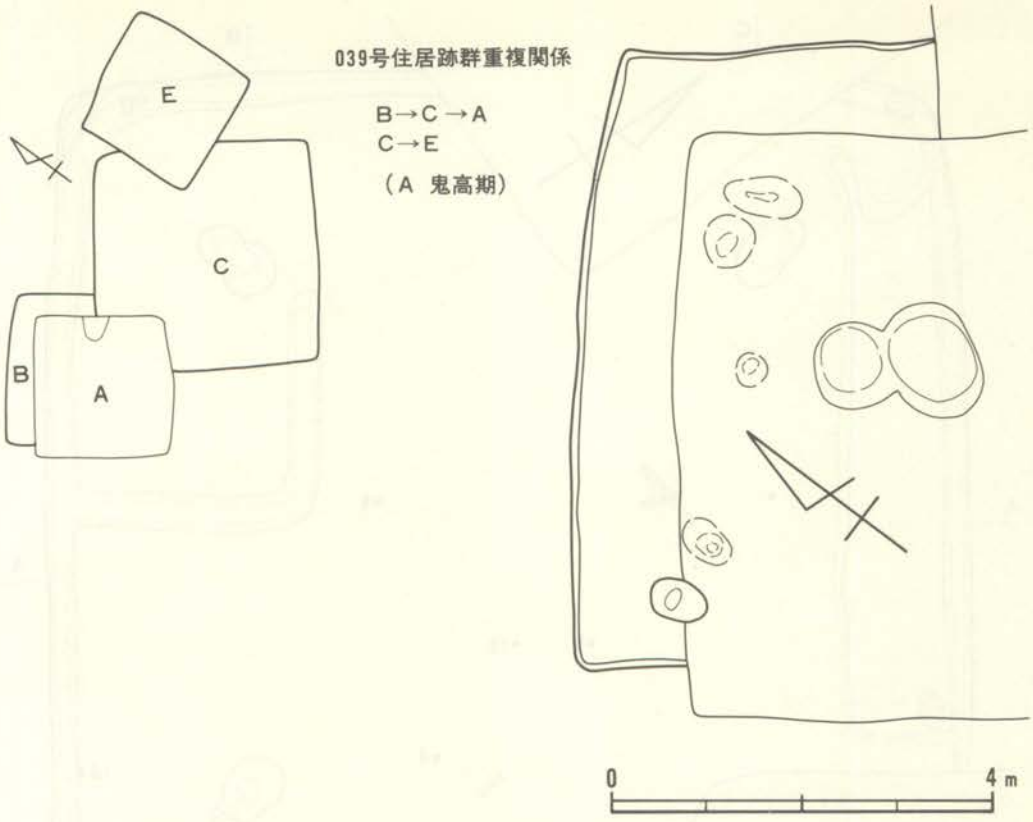
遺物の出土状況

本址から出土した遺物は土器で、総数8片を数えるにすぎない。器形が判明できるような大形の破片はなく、ハケメによる調整を残す甕の胴部破片である。

039C号住居跡（第153～157図）

概要

本址は、039A号跡及び039E号跡により、西及び北側のコーナー付近を切られている。しかし、削平している両者の方が地山への掘り込みが浅いため、本址の荒掘り面は残存している。

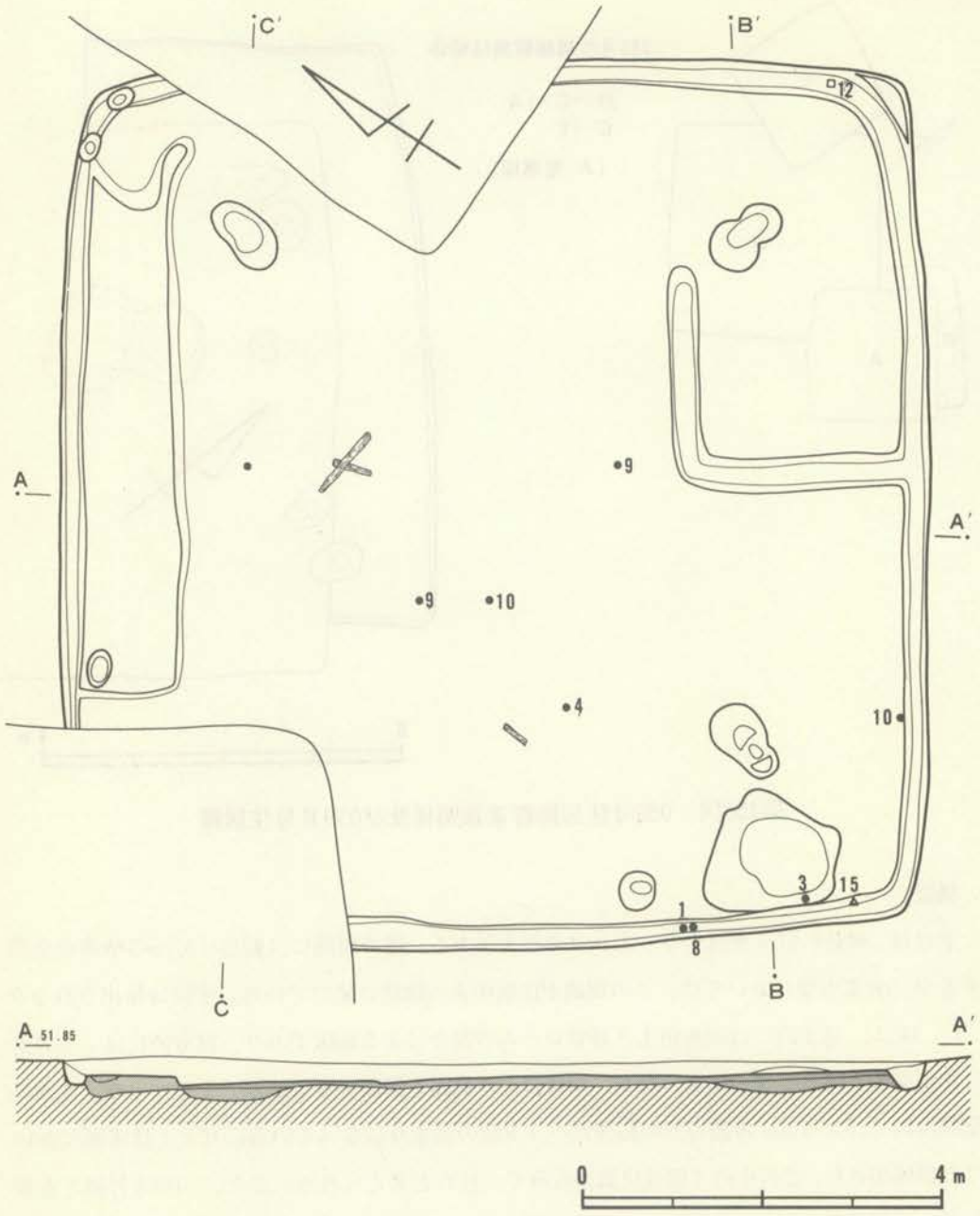


第153図　039号住居跡群重複関係及び039Ｂ号住居跡

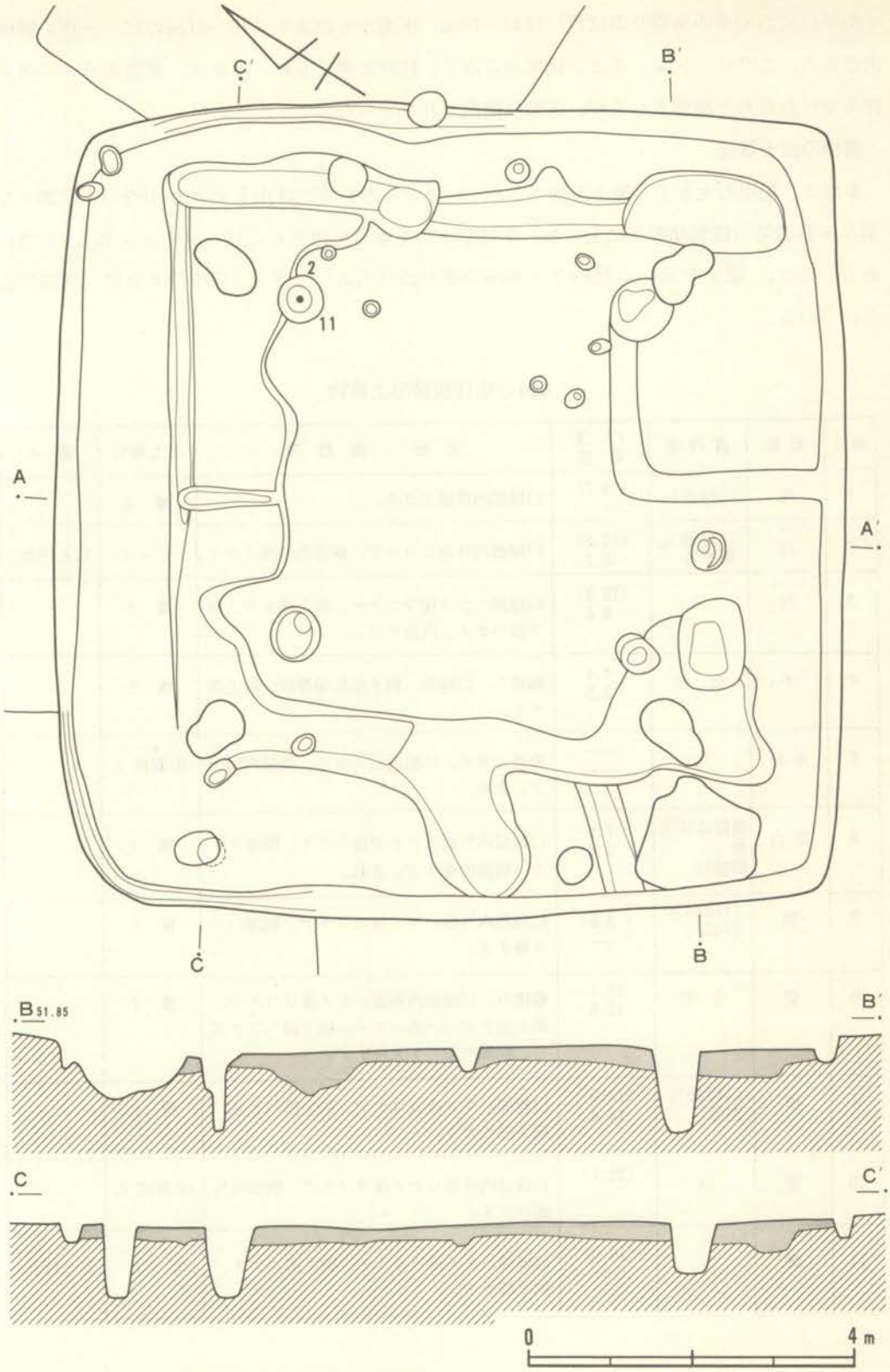
構造

本址は、軸長9.67m をはかり、形状は方形を呈する。壁の周囲には幅25～37cmの壁溝が全周するが、南東の壁においては、この周溝が住居中央へ鍵状に延びている。炉跡は検出されなかった。床は、基本的には黒褐色土と砂質ロームの混合による貼床であり、部分的には、その混合比率が若干異なるようであったが、明確にその範囲を把握することができなかった。北西の壁際は約 1.0× 5.3m の長方形の範囲がベッド状の高まりになっている。ピットは床面において８個検出され、この中の３個は位置からみて、柱穴と考えられる。また、 039Ａ号跡と重複している部分から、この３個と対応する位置にピットが検出された。柱穴間の距離は、各辺が 5.5m をはかり、各柱穴間を結ぶ形状は方形を呈する。 南側のコーナー近くの径 1.1×1.4 m の不整形のピットは貯蔵穴と考えられ、中よりわずかではあるが白色粘土が検出された。

荒掘り面からは、溝及びピットが検出された。北西の壁から 1.3m 程内側に検出された溝は、幅28cm程で、深さは13cm程である。また、この溝と北東及び南西の壁から内側の部分は幅50～150 cm、深さ10～30cm程の幅の広い溝が「コ」の字形に巡る。 床面からの深さにすると、住居中央部と壁際は５cm程であり、「コ」の字形の幅の広い溝は15～35cm程の深さとなる。なお、



第154図　039C号住居跡(1)



第155図　039C号住居跡(2)

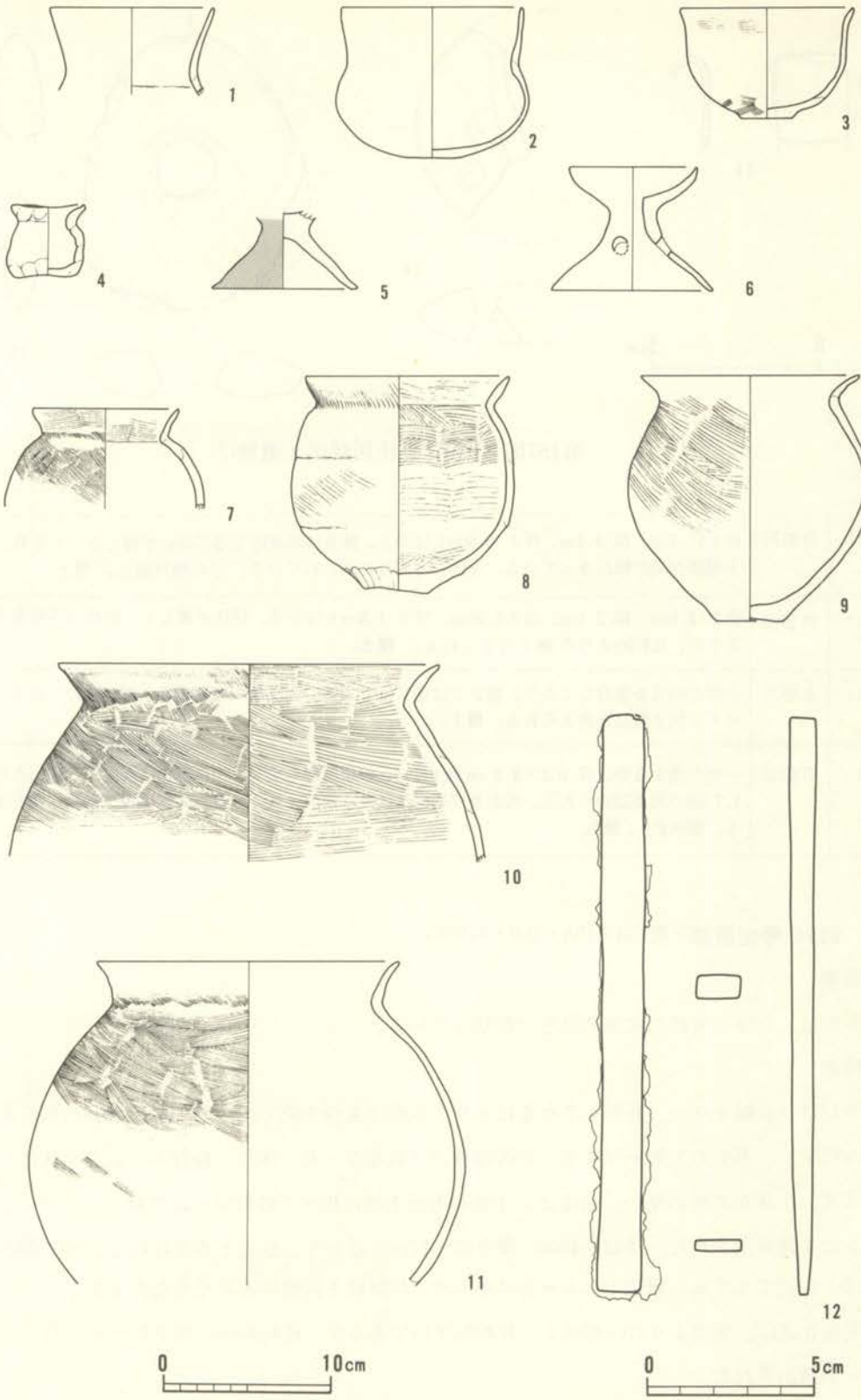
4個の柱穴のやや中央寄りの位置に径42～70cm、床面からの深さは40～51cmのピットが4個検出された。このピットは、深さ、位置からみて、柱穴と考えられ、本址は、拡張あるいは建て替えが行われたと推察されるが、床面は検出されなかった。

遺物の出土状況

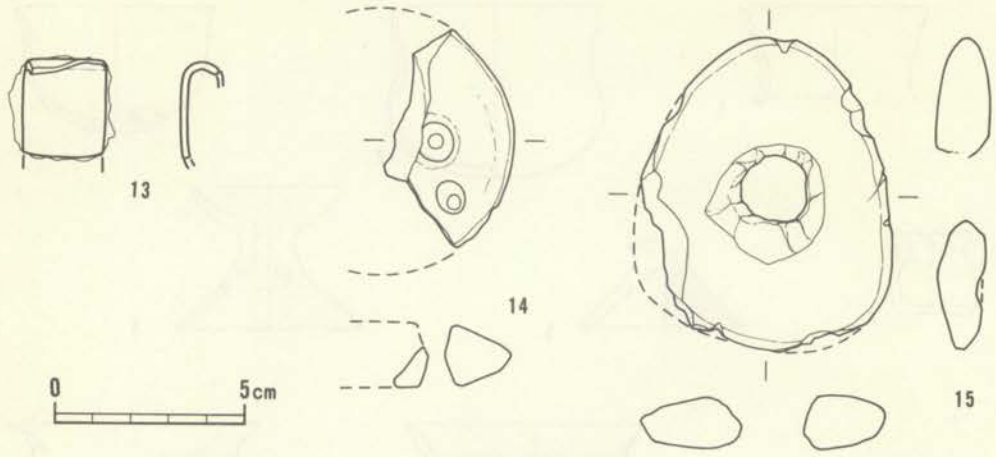
本址は、規模も大きく、覆土も削平されていなかったわりには出土遺物が少ない。土器・土製品・石製品・鉄製品等が出土した。9は貼床の下から検出されたピット中から出土した甕である。また、覆土中から、径約7～8cmの礫が25点出土したが、この中の8点は二次加熱を受けている。

039C号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坩	口縁部1/3	(9.7) ——	口縁部内外面ミガキ。	覆土	
2	坩	口縁部1/10 胴部1/2	(10.8) 5.7	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ミガキ。	ピット	11と伴出
3	埦	1/6	(10.3) 6.6	口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴上部ナデ、胴下部ハケメ。内面ナデ。	覆土	
4	ミニチュア	完形	4.4 3.5	輪積み。口縁部・胴下部指頭押捺、胴上部ナデ。	覆土	
5	高坏	1/4	—— ——	脚部ミガキ。坏部内面ミガキ、脚部内面ナデ。赤彩。	床面直上	
6	器台	受部ほぼ完形 脚部1/6	7.6 7.4	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ、脚部ミガキ。脚部内面ナデ。3孔。	覆土	
7	甕	口縁部1/5 胴部1/4	(8.6) ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	覆土	
8	甕	完形	13.2 12.6	輪積み。口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴上部ナデ（一部ハケメ）、胴下部ヘラケズリ。胴部内面ハケメ後ナデ。	覆土	
9	甕	口縁部1/4 胴部1/3	(13.0) 14.4	口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴上部ハケメ、胴下部ミガキ。	覆土	
10	甕	1/6	(22.7) ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部内外面ハケメ。	床面直上	
11	甕	1/3	(18.0) ——	口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴上部ハケメ、胴下部ナデ。	ピット	2と伴出



第156図　039C号住居跡出土遺物(1)



第157図　039C号住居跡出土遺物(2)

12	鉄製品	長さ17.1cm、幅 1.4cm、厚さ 0.6cmをはかる。厚さは実測図下端に向いて薄くなっており、下端部が刃の様になっている。全体に左回りにねじれている。不明棒状製品。覆土。
13	鉄製品	長さ 2.6cm、幅 2.1cm、高さ0.95cm、厚さ 1.5cmをはかる。銹化が著しく、形状は不明瞭であるが、比較的大形の 鎹と考えられる。 覆土。
14	土製品	全体の約¼を遺存しており、推定では径７cmである。焼成前の穿孔が２ヶ所に認められる。スノコ状土製品と考えられる。覆土。
15	石製品	一部欠損するが、径 6.7×8.2 cm 厚さ 1.4cmの楕円形を呈し、中央部には両側から穿った径 1.7 cmの穴が認められる。両面及び周縁部は荒く研磨されている。形状は環状石斧に類似する。凝灰岩。 覆土。

039E号住居跡（第153・158・159・310図）

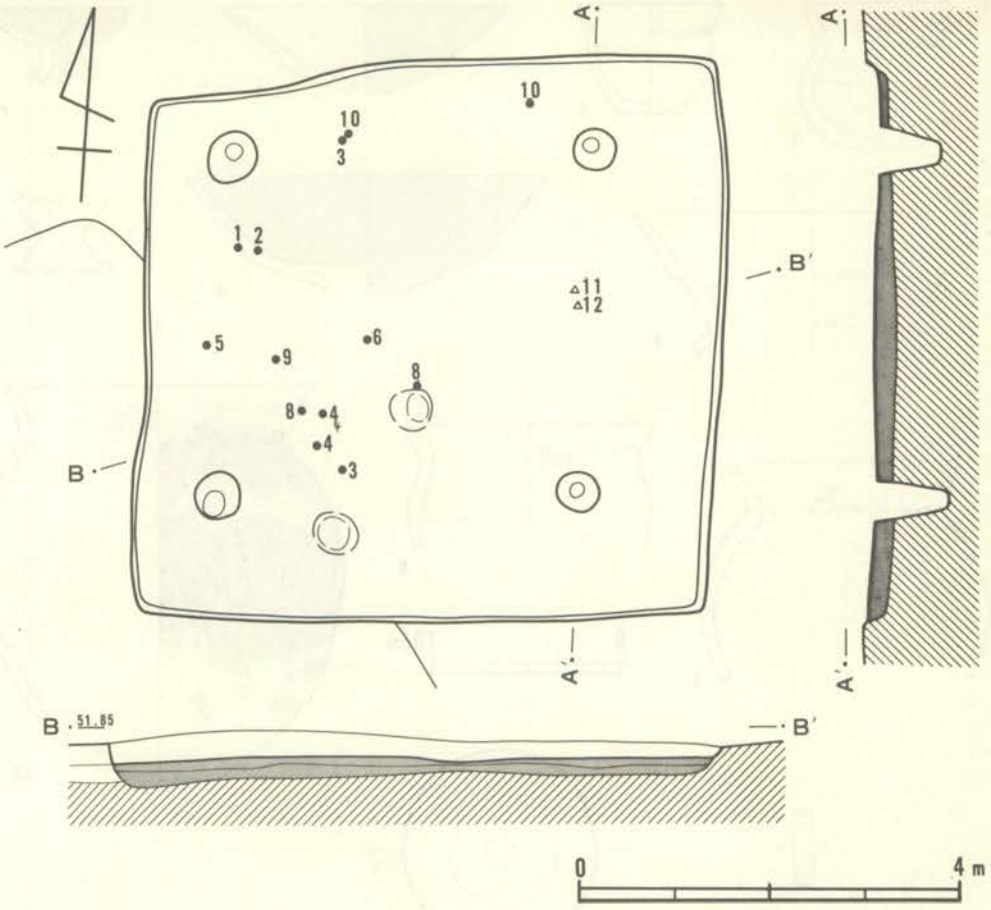
概要

本址は、039 C号跡の北東の壁を一部切っている。

構造

本址は、長軸 6.0 m、短軸 5.7 mをはかり、長軸は東西を向く。西側の壁が東側の壁に比べ40cm程短く、不整の方形を呈する。炉跡は検出されなかった。床は、砂質ロームを主体にした貼床で、全体が比較的堅い。貼床は、下部の方が上部に比べて砂質ロームブロックが多い。ピットは４個検出された。径42～48cm、深さ67～77cmをはかり、柱穴と考えられる。柱穴間の距離は、長辺で3.7 m、短辺で3.5 mをはかるが、住居跡と同様に否んだ方形を呈する。

荒掘り面は、床面より17cm程低く、比較的平坦であるが、径約40cm、深さ17～30cmのピットが２個検出された。



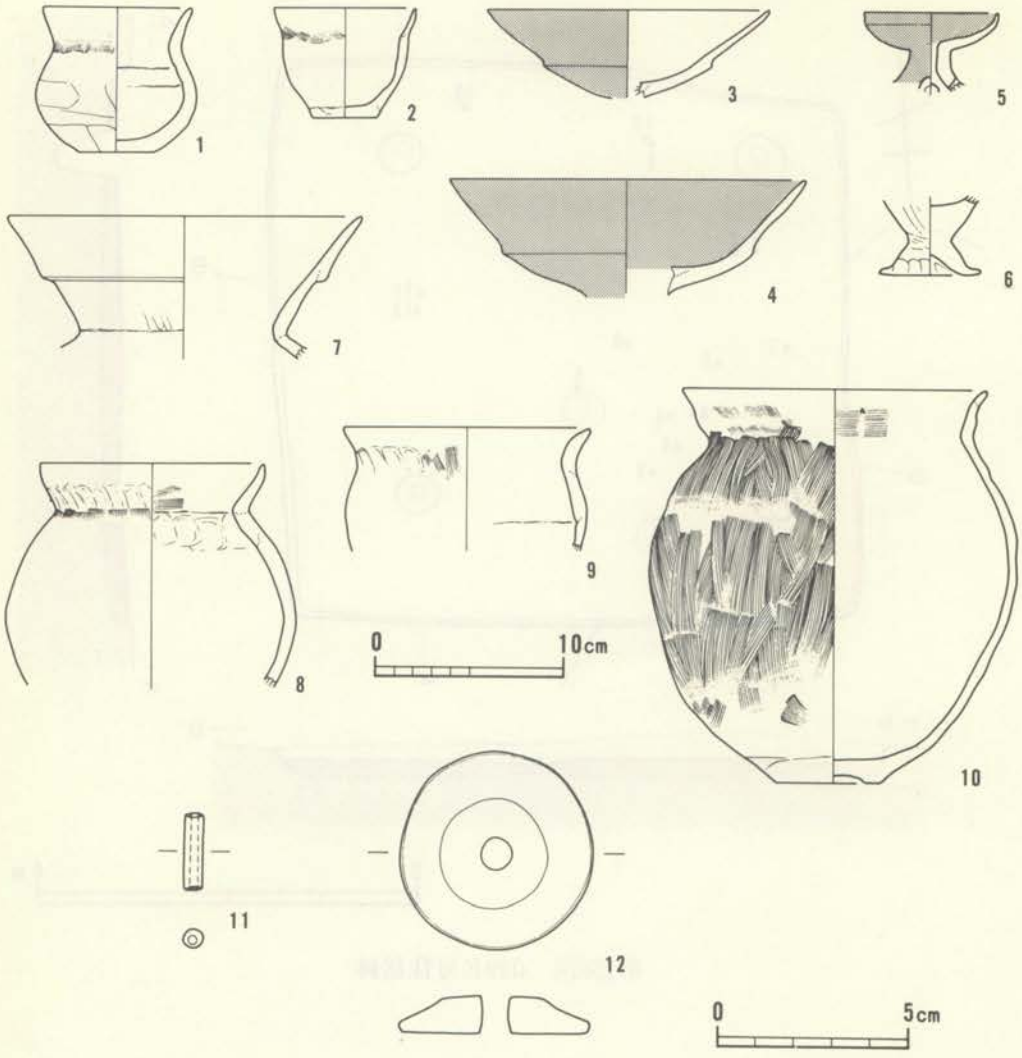
第158図　039E号住居跡

遺物の出土状況

本址からは、比較的多くの遺物が出土したが完全に復元されたものは10のみである。10は2m程離れた位置から出土した破片が接合した。出土した遺物は、すべて床面から5～20cm程浮いている。これらの遺物は北西及び南東のコーナー部分を除いた範囲から出土したものである。

039E号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坩	口縁部¼ 胴部完形	(7.7) 7.7	輪積み。口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。	覆土	
2	鉢	口縁部½ 体部ほぼ完形	(7.4) 5.8	口縁部内外面ヨコナデ、頸部ハケメ、体部ナデ。	床面直上	



第159図　039E号住居跡出土遺物

3	高 坏	口縁部½	(15.0)	内外面ミガキ（？）。赤彩。	床面直上	器面磨耗
4	高 坏	口縁部½	(18.8)	内外面ミガキ。赤彩。	覆 土	
5	器 台	½	(7.0)	受部内外面ミガキ、脚部ミガキ。赤彩。	覆 土	
6	高 坏	脚部⅔	—	ヘラケズリ後ナデ。	覆 土	
7	壺	口縁部⅕	(18.6)	口縁部内外面ナデ後ミガキ。頸部ヘラケズリ後ナデ。	覆 土	
8	甕	口縁部½ 胴部¼	(11.8)	輪積み。口縁部ヨコナデ、頸部指頭押捺後ハケメ、胴部ナデ。胴上部内面指頭押捺。	覆 土	

9	甕	口縁部1/3	(13.0)	輪積み。口縁部ヨコナデ、頸部指頭押捺後ハケメ、胴部ナデ。	覆　土	
10	甕	完　形	16.0 20.3	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後一部ナデ。	床面直上	
11	管　玉	長さ 2.0cm、径 0.5cmをはかり、径3㎜程の穿孔を有する。滑石。床面密着。				
12	紡錘車	径 5.1cm、厚さ 1.0cmをはかり、中央に径 2.8㎜の穿孔を有する。滑石。覆土。				

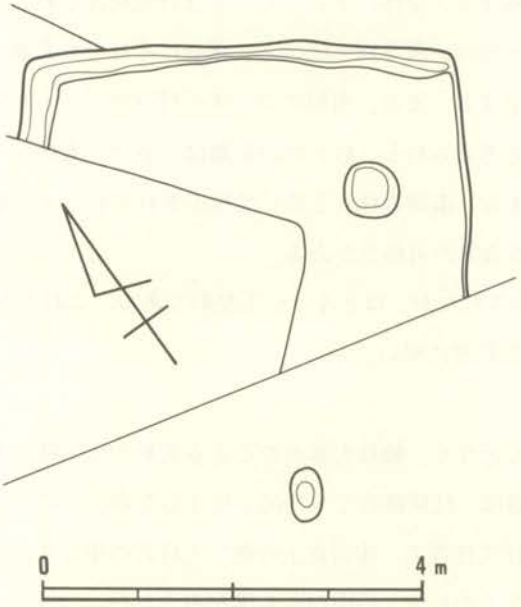
040B号住居跡（第160・161図）

概要

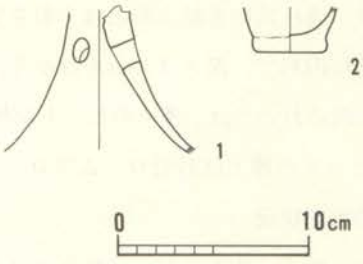
本址は、南側半分が地山まで削平されて、形状を残しておらず、西側も040 A号跡に切られているために遺存している範囲は少ない。また、覆土の上部も削平されている。

構造

本址は、遺存している側の軸長は4.66ｍをはかり、方形を呈する。北西及び北東の壁には幅15～30cm、深さ10～15cmの壁溝が巡るが、南東の壁には検出されなかった。炉跡は検出されなかった。ピットは東側のコーナー付近に１個検出された。径55cm、深さ39cmをはかる。また、南側の削平された部分にピットのような落ち込みが検出されたが、本址に伴うものかどうか不明である。



第160図　040Ｂ号住居跡



第161図　040Ｂ号住居跡出土遺物

遺物の出土状況

本址から出土した遺物は、土器のみであり、少ない。遺物は南側のピットの周辺から出土しこの中には、口縁部にハケメ調整が施された後にヨコナデが施された甕等がある。

040B号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	高坏	脚部½	—— ——	脚部ミガキ。内面ナデ。3孔。	覆土	
2	ミニチュア	胴部¼	—— ——	手捏ね。ナデ。	覆土	

042号住居跡（第162～164図）

概要

本址は、029 A・B号跡の2m程東側に位置する。本址付近の地山は比較的平坦である。

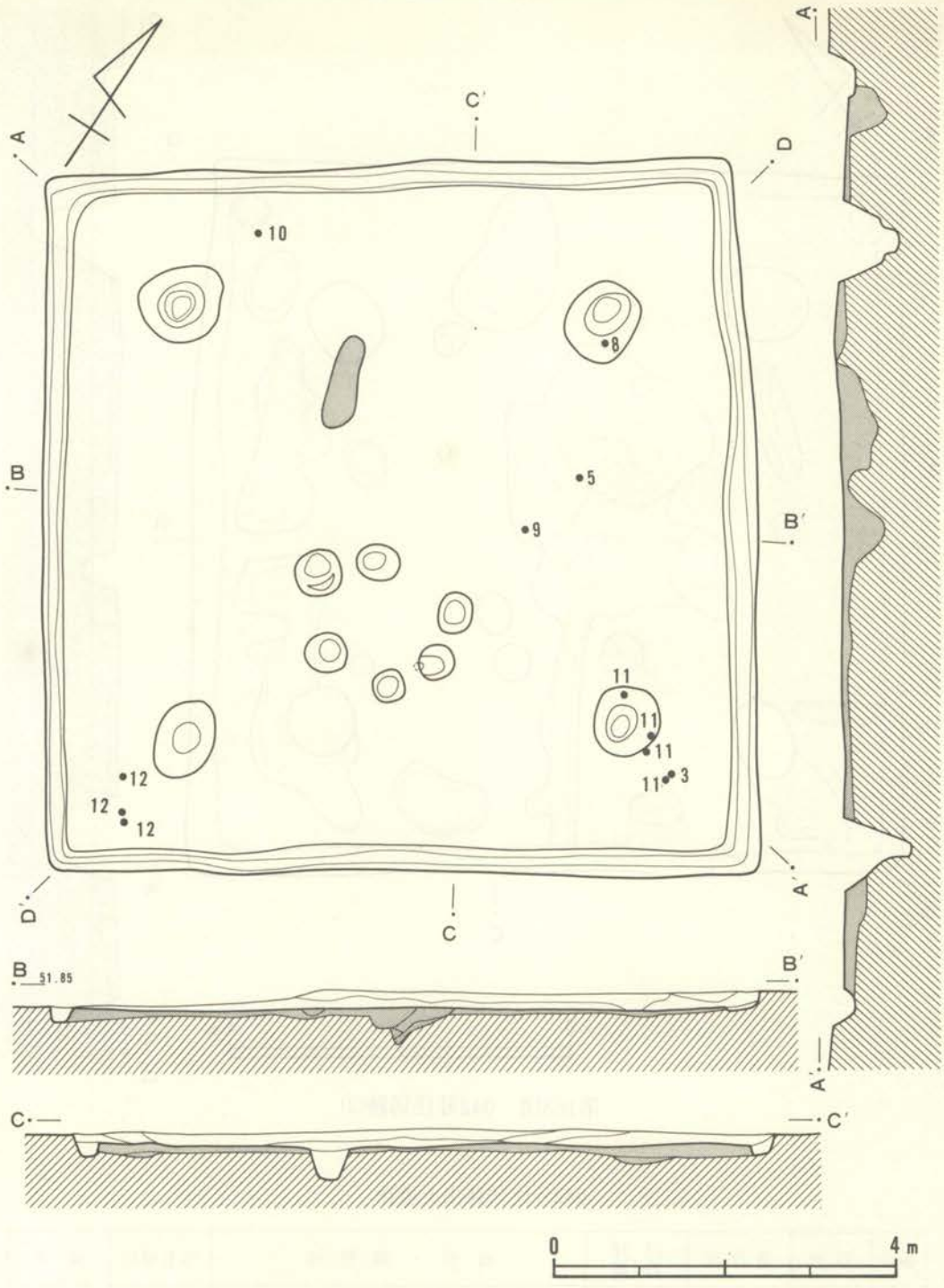
構造

本址は、長軸8.26m、短軸8.12mをはかり、長軸は北西を向く。各コーナーともほぼ直角で、整った方形を呈する。幅16～22cm、深さ3～19cmの壁溝が全周する。壁溝の深さは、北東の壁側では比較的浅く、そのほかの部分はほぼ一定の深さである。炉跡は、住居中央よりやや西側に位置し、30×108cmの楕円形を呈するが、焼土粒子が多く、焼土ブロックはあまり検出されなかった。床は、砂質ロームを主体にした貼床で、全体に堅い。ピットは11個検出された。住居中央よりやや南側の6個のピットは径35～50cm、深さ22～66cmと、深さはそれぞれ差異があるが、6個の配置は全体で2m程の円形を呈する。また、南側のコーナー付近のピットを除いた4個は径68～85cm、深さ59～94cmで柱穴と考えられる。柱穴間の距離は、各辺とも約5.0mをはかり、各柱穴間を結ぶ形状は方形を呈する。南側の柱穴と接して検出されたピットの形状は、不整楕円形で、深さは40cmをはかる。貯蔵穴の可能性がある。

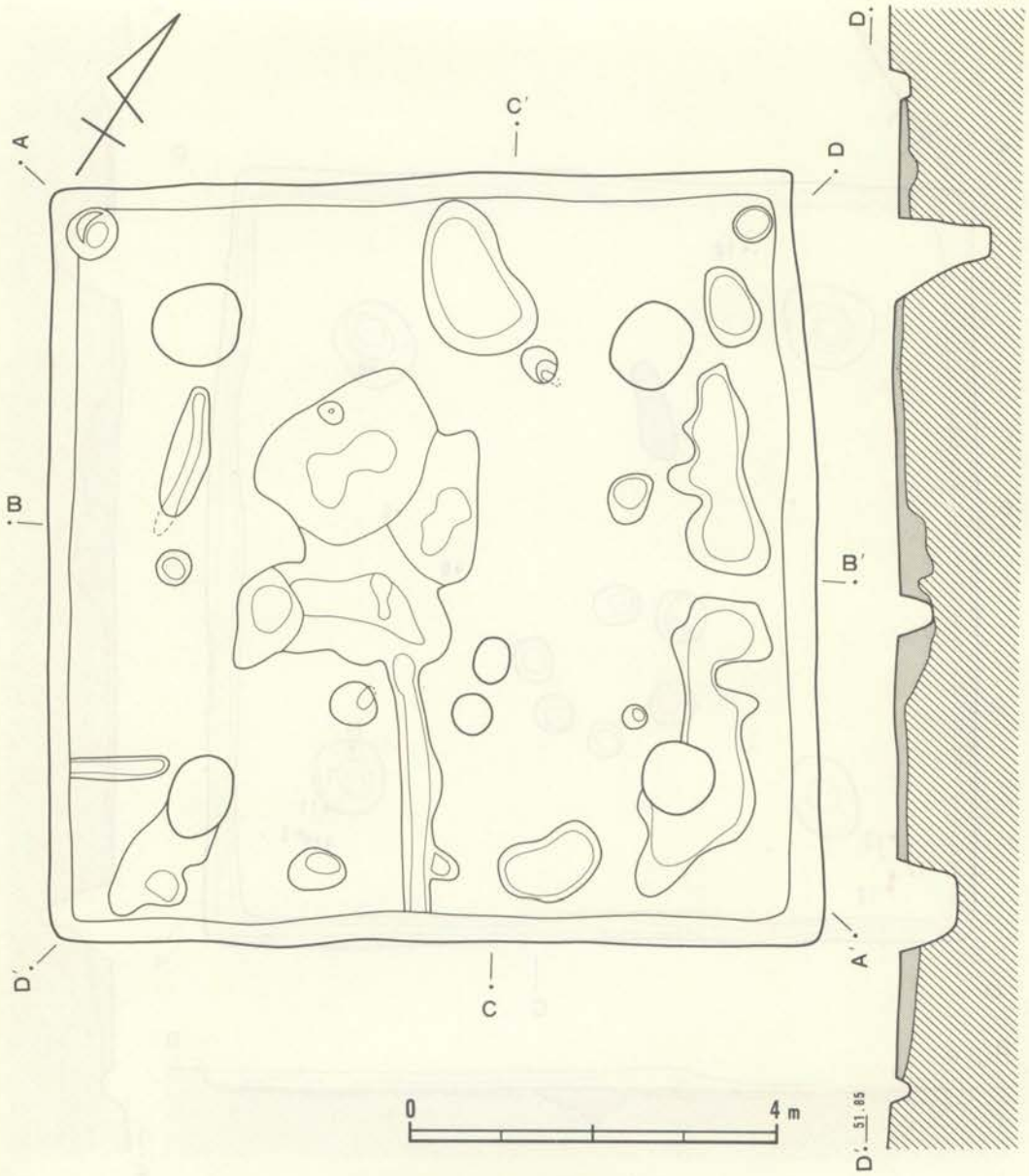
荒掘り面においては、多くのピットが検出されたが、ほとんどが不整形である。これらの不整形のピットの覆土は砂質ロームブロックで非常に堅い。

遺物の出土状況

本址は、覆土・床面において攪乱はほとんどなく、軸長も8mをこえる大形の住居跡であるが、遺物は土器が約100片程と少ない。土器は、住居跡内で平均的に出土したが、その中でもややまとまった傾向を見せたのは、東側の柱穴付近で、床面直上の破片と柱穴の中から出土した破片が接合した。また、南側のコーナー近くのピットの中からも甕が出土した。



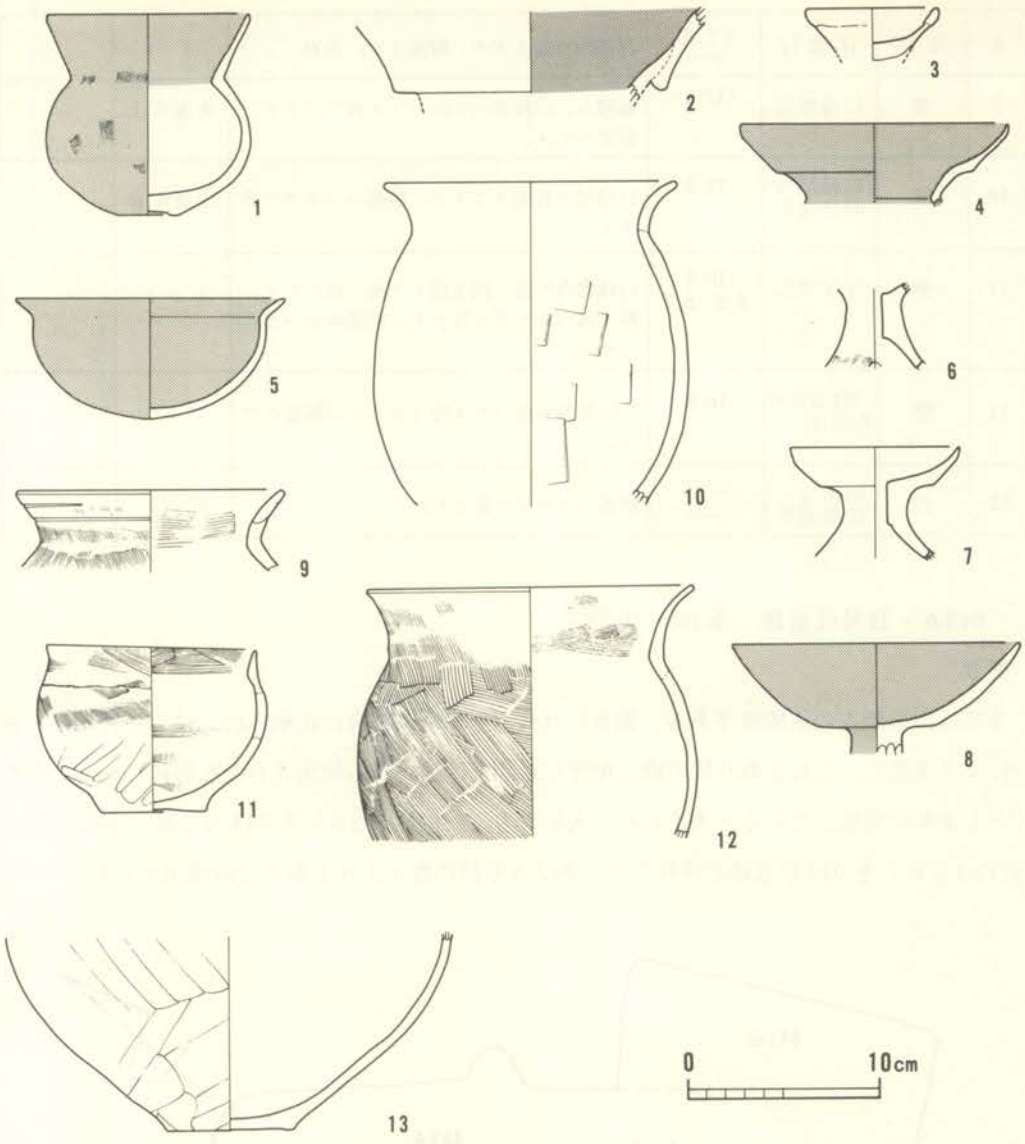
第162図　042号住居跡(1)



第163図　042号住居跡(2)

042号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坩	口縁部1/3 胴部1/4	(10.4) 10.6	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ、胴部ハケメ後ナデ。内面ナデ。赤彩。	覆土	
2	壺	口縁部1/4	― ―	口縁部内外面ミガキ後ヨコナデ。赤彩。	覆土	



第164図　042号住居跡出土遺物

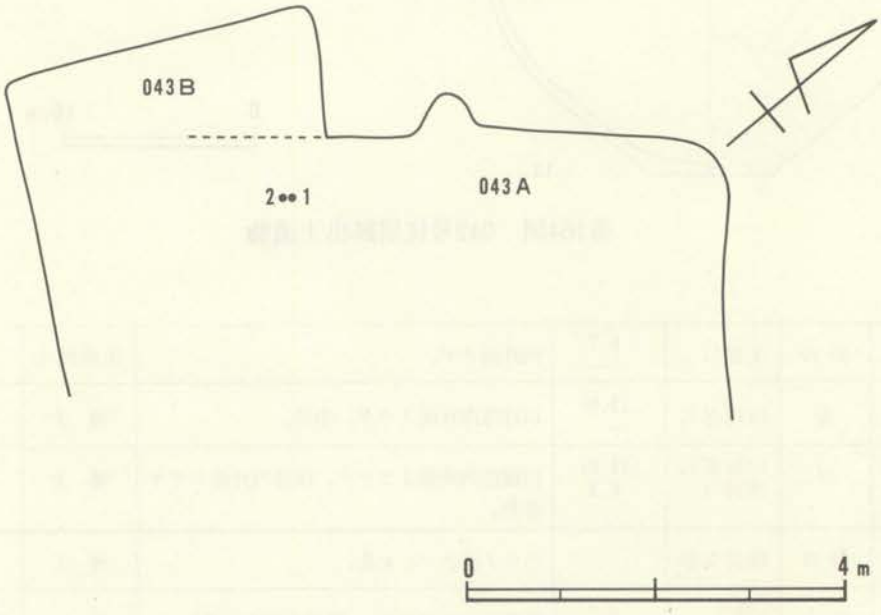
3	器台	受部¼	(6.7)	内外面ナデ。	床面直上	
4	壺	口縁部¼	(13.9)	口縁部内外面ミガキ。赤彩。	覆土	
5	坏	口縁部¼ 体部½	(14.0) 6.3	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ミガキ。赤彩。	覆土	
6	器台	脚部完形		ハケメ後ナデ。4孔。	覆土	
7	器台	受部⅓ 脚部ほぼ完形	(4.7)	受部ヨコナデ（?）、脚部ミガキ（?）。 3孔（?）。	覆土	器面磨耗

8	高坏	坏部¼	(7.9)	坏部内外面ミガキ、脚部ナデ。赤彩。	ピット	
9	甕	口縁部⅓	(13.6)	輪積み。口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ。	床面直上	
10	甕	口縁部¾ 胴部完形	15.2	口縁部内外面ヨコナデ、胴部へラケズリ後ナデ。	床面密着	
11	甕	ほぼ完形	10.8 8.3~8.7	口縁部内外面・胴上部ナデ後一部ハケメ、胴下部へラケズリ後ナデ。胴部内面一部ハケメ。	ピット	
12	甕	口縁部完形 胴部½	16.8	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ。	ピット	
13	甕	胴部¼ 底部完形	——	胴部へラケズリ後ナデ。	ピット	

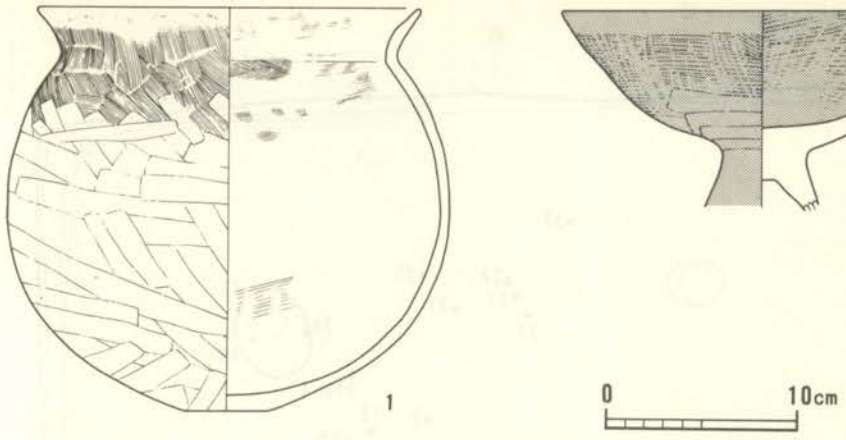
043A・B号住居跡 (第165・166図)

概要

本址は、未調査の住居跡である。調査した残土を本址の部分に山積みにしておいたのが、風雨により流出し、これを取り除く際に削平した調査区域外から検出された住居跡である。少なくとも2軒が重複していると考えられ、大形の方(一辺約7.2m)を043A号跡、小形の方(一辺約3.5m)を043B号跡と呼称した。043A号跡の覆土より土器が2個体出土した。



第165図　043A・B号住居跡



第166図　043A号住居跡出土遺物

043A号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	甕	口縁部1/10 胴部1/2	(20.0) 21.0	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴上部ハケメ後一部ヘラケズリ、胴中部以下ヘラケズリ、胴部内面一部ハケメ。	覆土	
2	高坏	坏部完形	21.0 —	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴上部ハケメ後ミガキ、胴下部ヘラケズリ後ミガキ、脚部内外面ナデ。	覆土	

044号住居跡（第167～172・310・312図）

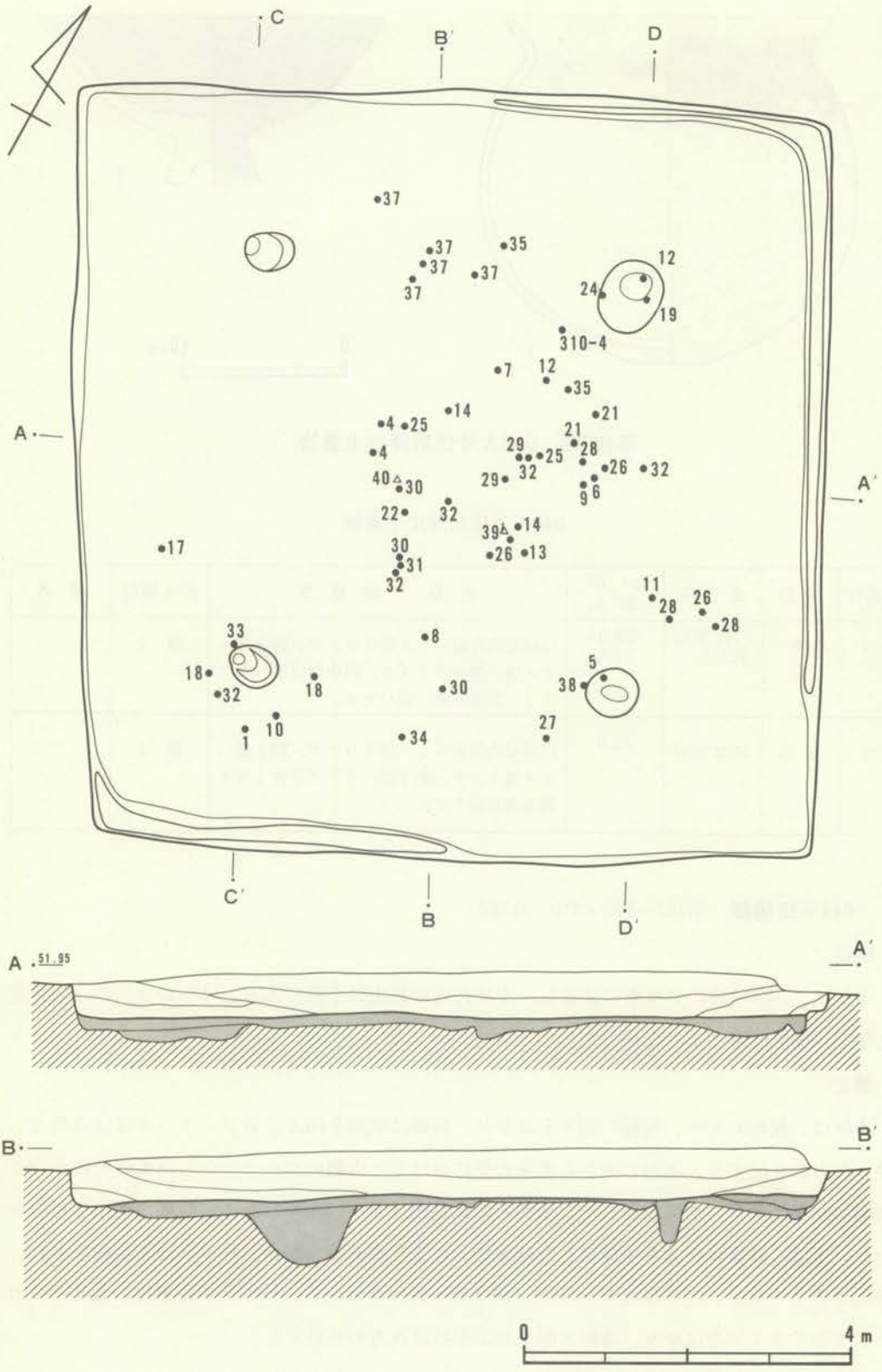
概要

本址は、042号跡の2m南に位置し、本址付近の地山は平坦である。ほかの住居跡との重複もなく、攪乱もほとんどなかった。

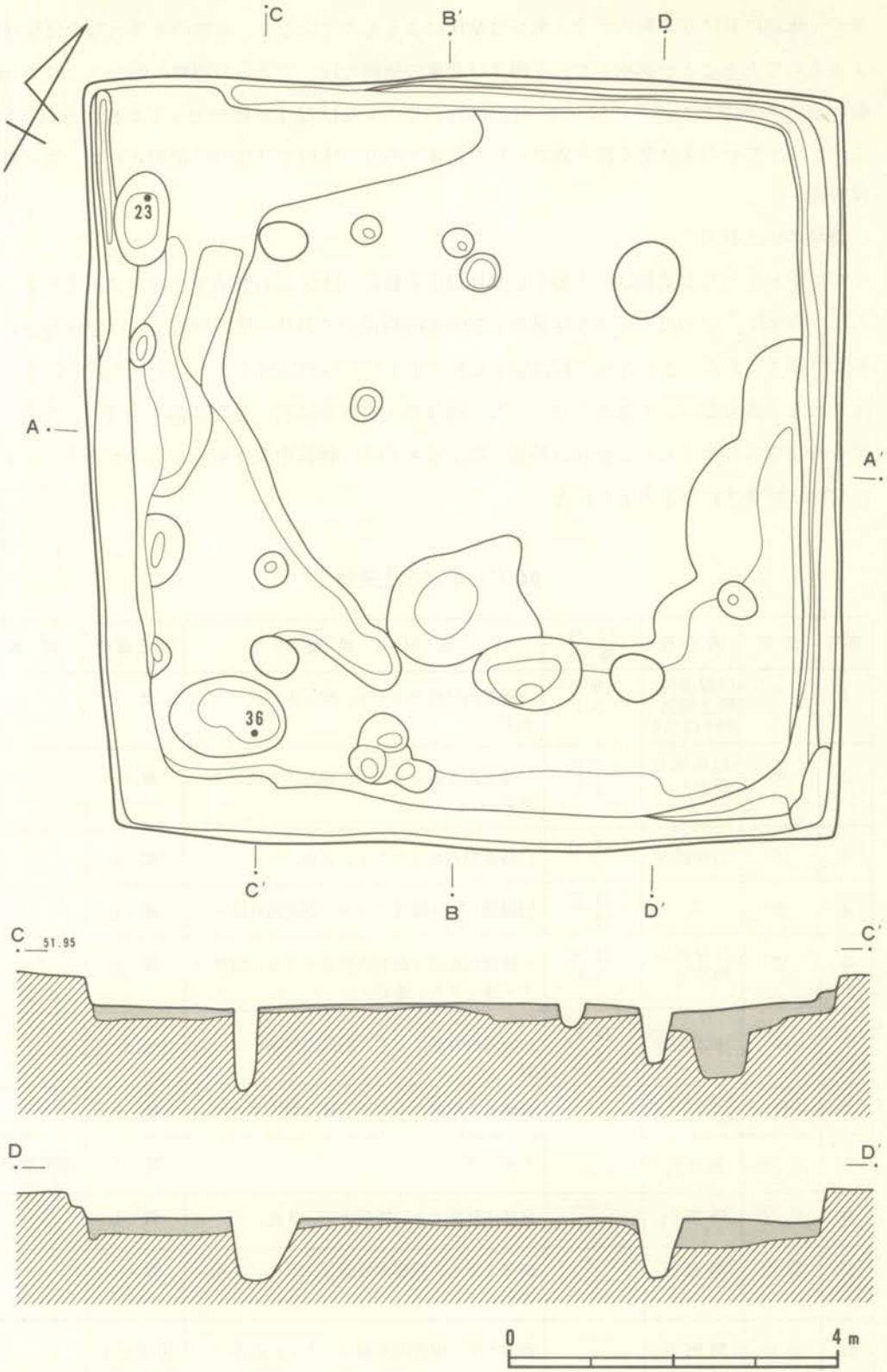
構造

本址は、長軸9.30m、短軸9.20mをはかり、長軸は北西を向く。各コーナーがほぼ直角で、整った方形を呈する。北西の壁から北東の壁にかけてと南側のコーナーから南東の壁にかけては幅20cm程のテラスが検出された。床面との比高差は5～10cmをはかる。炉跡は検出されなかった。床は、砂質ロームを主体にした貼床で、しまりがあり、堅い。ピットは4個検出され、柱穴と考えられる。柱穴は径45～70cm、深さ65～94cmをはかる。柱穴間の距離は、長辺で5.0m、短辺で4.7mをはかり、各柱穴間を結ぶ形状は長方形を呈する。

荒掘り面は、住居中央から北側のコーナーにかけての範囲が周辺より一段高くなっている。



第167図　044号住居跡(1)



第168図　044号住居跡(2)

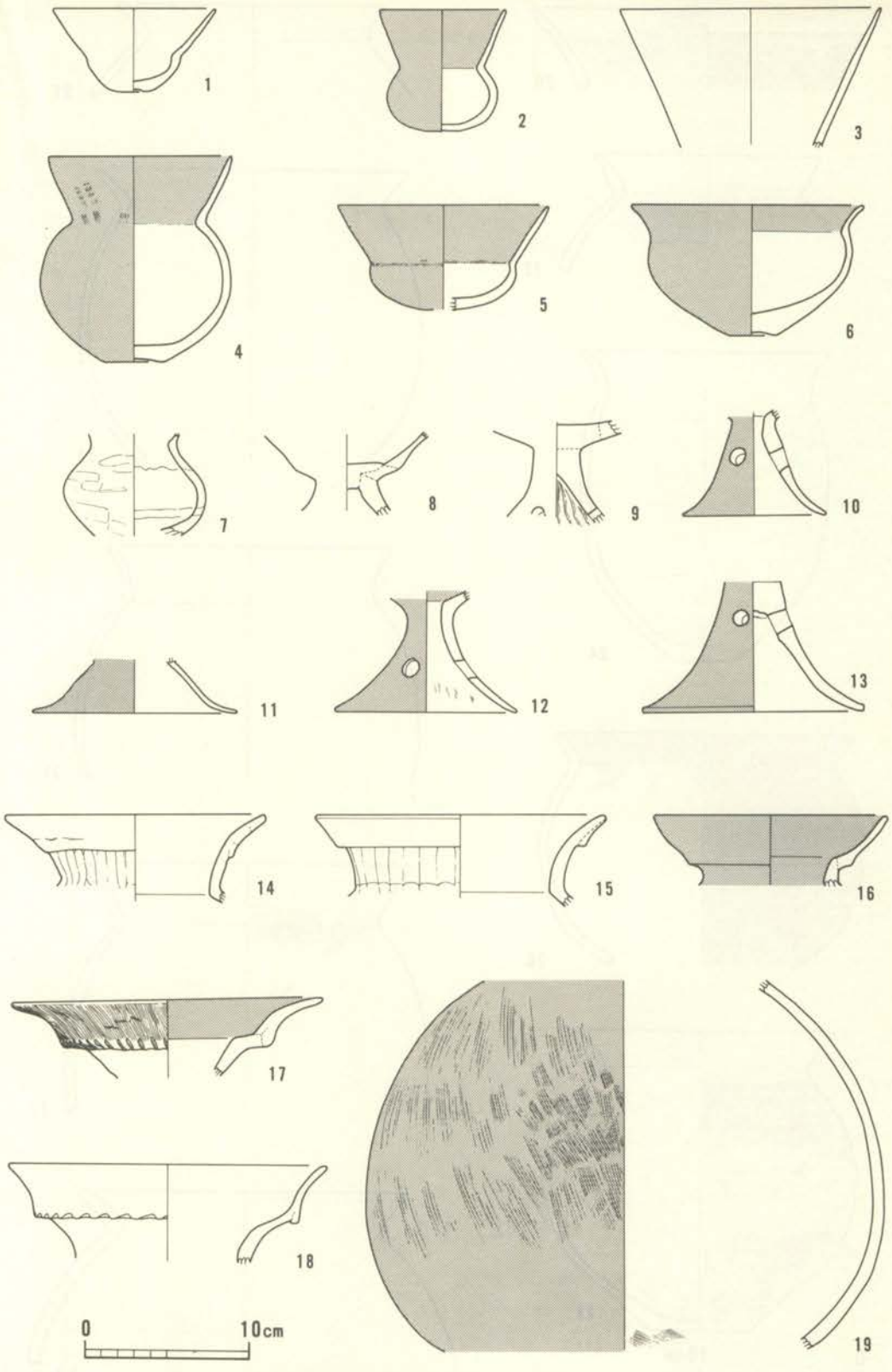
また、床面における北側のテラス部分は貼床によるものではなく、南側のテラス部分は貼床によるものであることが判明した。北西及び北東の壁側では、テラスの内側に幅25cm、深さ10cm程の溝が検出された。そのほかは、径25cm程のピット及び径1m程のピットが検出されたが、このピット部分の床は堅く踏み固められた貼床であり、床面で日常的に使用されていた可能性は少ない。

遺物の出土状況

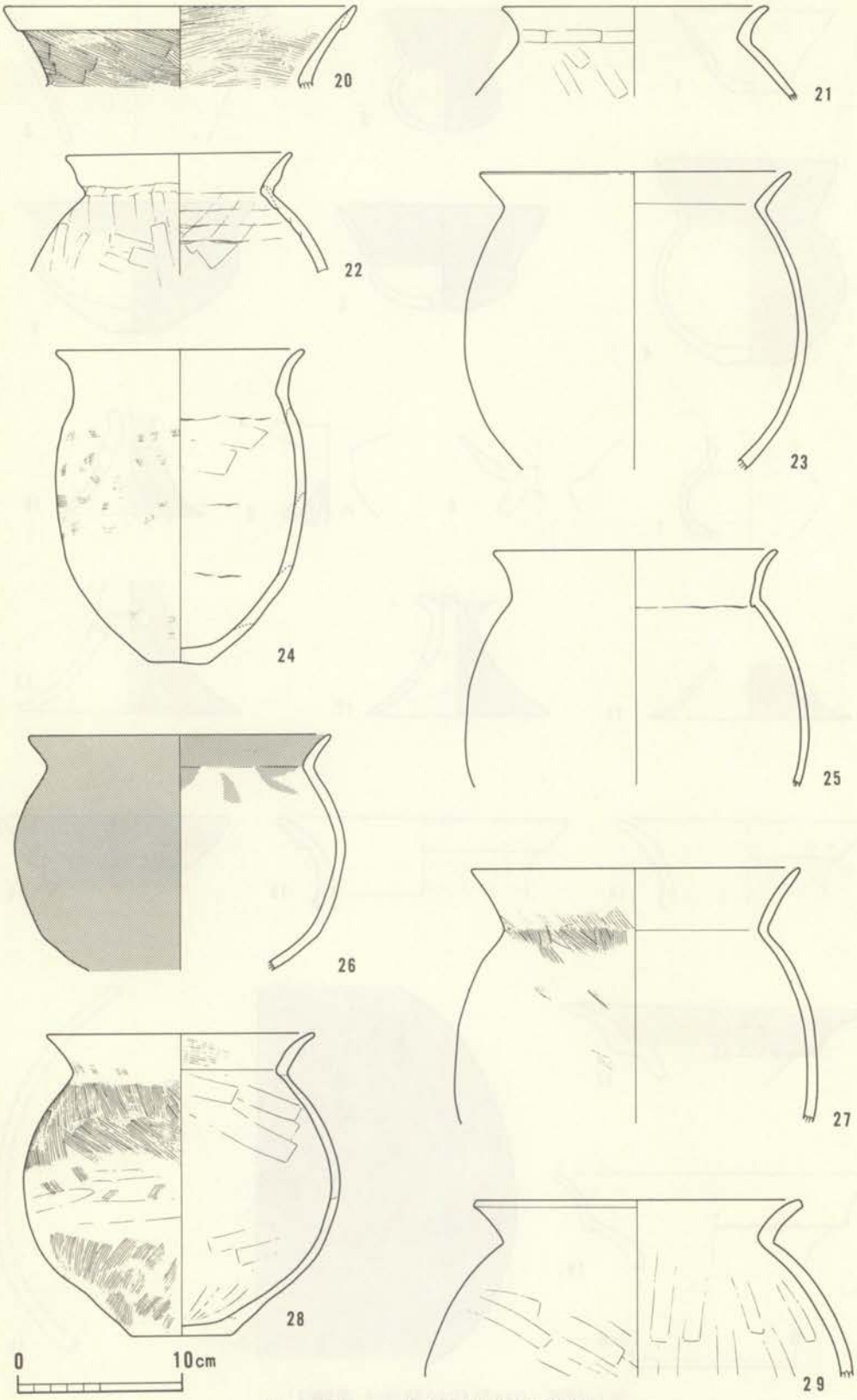
本址から出土した遺物は、土器が1000片以上を数え、ほかに石製品及び礫が15点である。出土した遺物は、そのほとんどが床面から20～30cm程浮いており、壁の周辺よりは中央部からの出土が顕著である。これらの土器は完全な形で出土したものはなく、また、完形近くにまで復元された土器もない。本址から出土した土器は坩・高坏等に比べ、甕の出土が多く、底部だけでも約100片検出された。高坏は脚部が広がるものや、脚部中央が張らむものがある。これらの遺物は投棄されたと考えられる。

044号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坩	口縁部1/4 胴上部1/3 胴下部完形	(9.9) 5.1	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。赤彩。	覆土	
2	坩	口縁部1/3 胴部2/3	(7.7) 7.5	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。赤彩。	覆土	
3	坩	口縁部1/4	(15.8) ——	口縁部内外面ヨコナデ。赤彩。	覆土	
4	坩	1/2	(11.2) 12.5	口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	覆土	
5	坩	口縁部1/4 胴部1/3	(12.9) 6.4	口縁部内外面・胴部内外面ミガキ、頸部ハケメ後ミガキ。赤彩。	覆土	
6	坏	ほぼ完形	14.1 8.0	口縁部内外面ミガキ、胴部内外面ナデ。赤彩。	床面直上	
7	坩	胴部ほぼ完形	—— ——	輪積み。胴部ヘラケズリ後一部ナデ。	覆土	
8	高坏	脚部2/3	—— ——	ナデ（?）。	覆土	器面磨耗
9	高坏	脚部1/2	—— ——	坏部内外面ナデ、脚部ナデ。3孔。	覆土	
10	器台	脚部2/3	—— ——	脚部ミガキ、裾部内外面ヨコナデ。3孔。赤彩。	覆土	
11	高坏	脚部2/3	—— ——	脚部ナデ、裾部内外面ヨコナデ。赤彩。	床面直上	

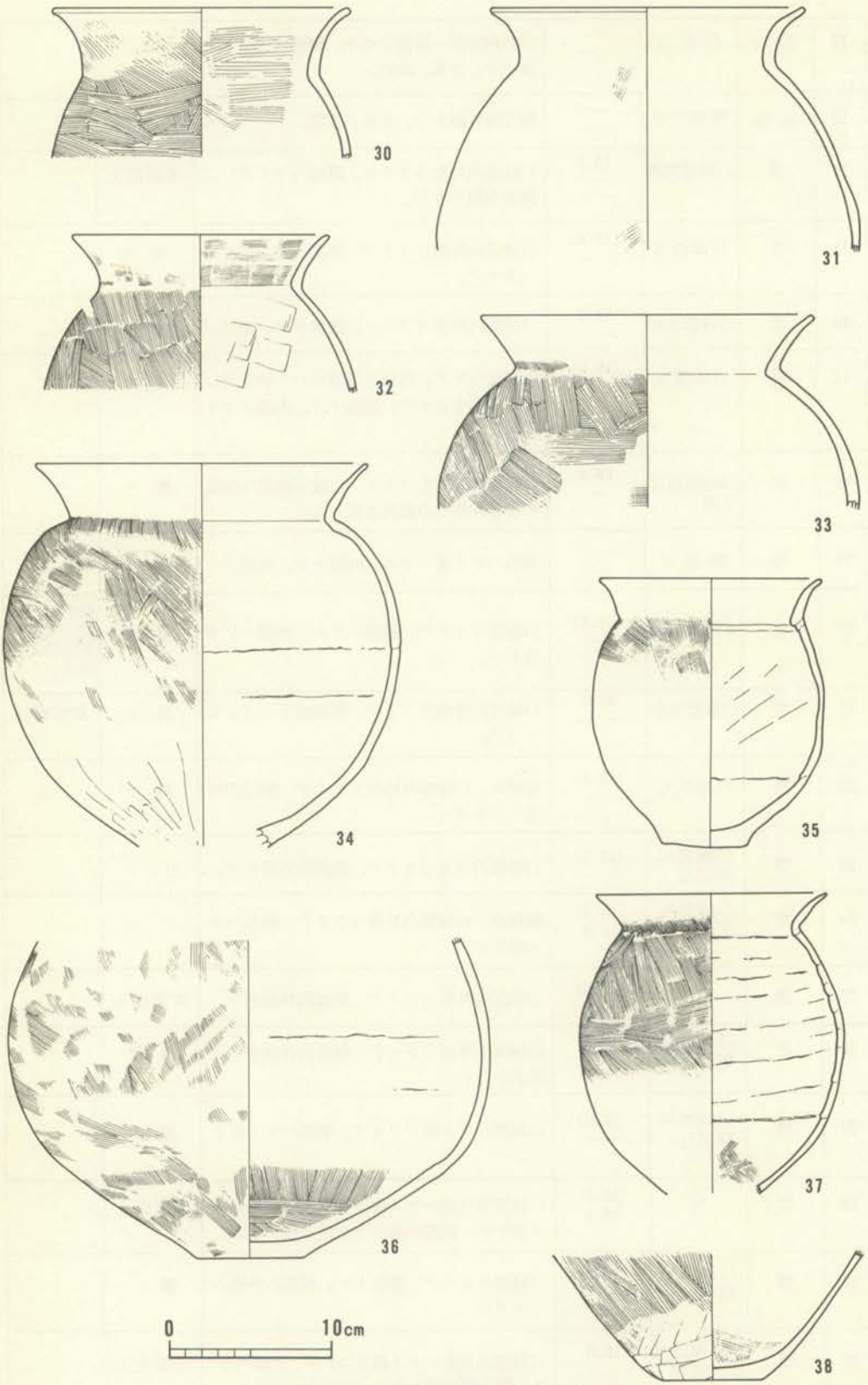


第169図　044号住居跡出土遺物(1)

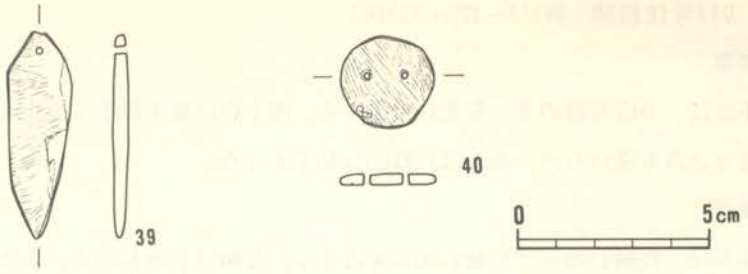


第170図　044号住居跡出土遺物(2)

12	器台	脚部 1/2	——	受部内外面・脚部ミガキ。脚部内面ハケメ後ナデ。3孔。赤彩。	ピット	
13	高坏	脚部完形	——	脚部内外面ナデ。3孔。赤彩。	床面密着	
14	壺	口縁部完形	15.5	口縁部内外面ヨコナデ、頸部ヘラケズリ。頸部内面ミガキ。	床面直上	
15	壺	口縁部1/4	(17.8)	口縁部内外面ヨコナデ、頸部ヘラケズリ後一部ナデ。	覆土	
16	壺	口縁部完形	14.1	口縁部内外面ヨコナデ、頸部ナデ。赤彩。	覆土	
17	壺	口縁部1/5	(19.0)	口縁部ハケメ。口縁下端部にハケ状工具による刺突を有する。頸部ナデ。内面ミガキ。赤彩。	覆土	
18	壺	口縁部ほぼ完形	19.4	口縁部内外面ヨコナデ。口縁下端部は指頭による押捺で小破状を呈する。	覆土	
19	壺	胴部 1/3	——	胴部ハケメ後ミガキ。内面ナデ。赤彩。	ピット	
20	壺	口縁部1/5	(21.4)	口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ。内面ハケメ後ナデ。	覆土	039C・E号跡から同一個体の小片出土。
21	甕	口縁部完形	16.0	口縁部内外面ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリ（？）。	覆土	器面磨耗
22	甕	口縁部3/4	(13.5)	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ヘラケズリ。	覆土	
23	甕	口縁部1/10 胴部1/4	(19.0)	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	ピット	
24	甕	口縁部1/2 胴部完形	(15.0) 18.8	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	ピット	
25	甕	1/4	(17.0)	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	床面直上	
26	壺	口縁部1/4 胴部1/3	(18.2)	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。赤彩。	覆土	
27	甕	口縁部1/10 胴部1/4	(20.0)	口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	覆土	
28	甕	1/2	(16.2) 18.1	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。胴部内面ヘラケズリ後ナデ。	床面直上	
29	甕	口縁部1/10 胴部1/4	(19.6)	口縁部ヨコナデ、頸部ナデ、胴部内外面ヘラケズリ。	覆土	
30	甕	胴下部以外ほぼ完形	18.0	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ。胴上部内面ハケメ。	床面直上	



第171図　044号住居跡出土遺物(3)



第172図　044号住居跡出土遺物(4)

31	甕	口縁部1/4 胴部1/3	(19.2) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	覆　土	
32	甕	口縁部1/4 胴部1/2	(15.6) ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ。	床面直上	
33	甕	口縁部1/5 胴部1/3	(20.4) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後一部ナデ。	覆　土	
34	甕	口縁部3/4 胴部ほぼ完形	(20.4) ——	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴上部ハケメ後ナデ、胴下部ヘラケズリ後ナデ。	覆　土	
35	甕	口縁部1/2 胴部2/3	(13.7) ——	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴上部ハケメ後ナデ、胴中部以下ナデ。胴部内面ヘラケズリ後ナデ。	覆　土	
36	壺	胴上部1/4 胴下部完形	—— ——	輪積み。胴部ハケメ後一部ナデ。胴下部内面ハケメ。底部木葉痕。	ピット	
37	甕	口縁部1/3 胴部完形	(14.3) ——	輪積み。口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴上部ハケメ、胴下部ナデ。胴下部内面一部ハケメ。	覆　土	
38	甕	胴下部1/5 底部完形	—— ——	胴下部ヘラケズリ後ハケメ。胴下部内面ハケメ後ナデ。	覆　土	
39	剣形模造品	基部の一部を欠損するが、現存長 5.4cm、幅 1.7cm、厚さ 4 mmをはかる。基部に径 1.8mmの小孔が認められる。両面共平坦である。滑石。覆土。				
40	有孔円板	径 2.4cm、厚さ 3 mmをはかる。基部に径 1.5mmの小孔が2ヶ所認められる。滑石。覆土。				

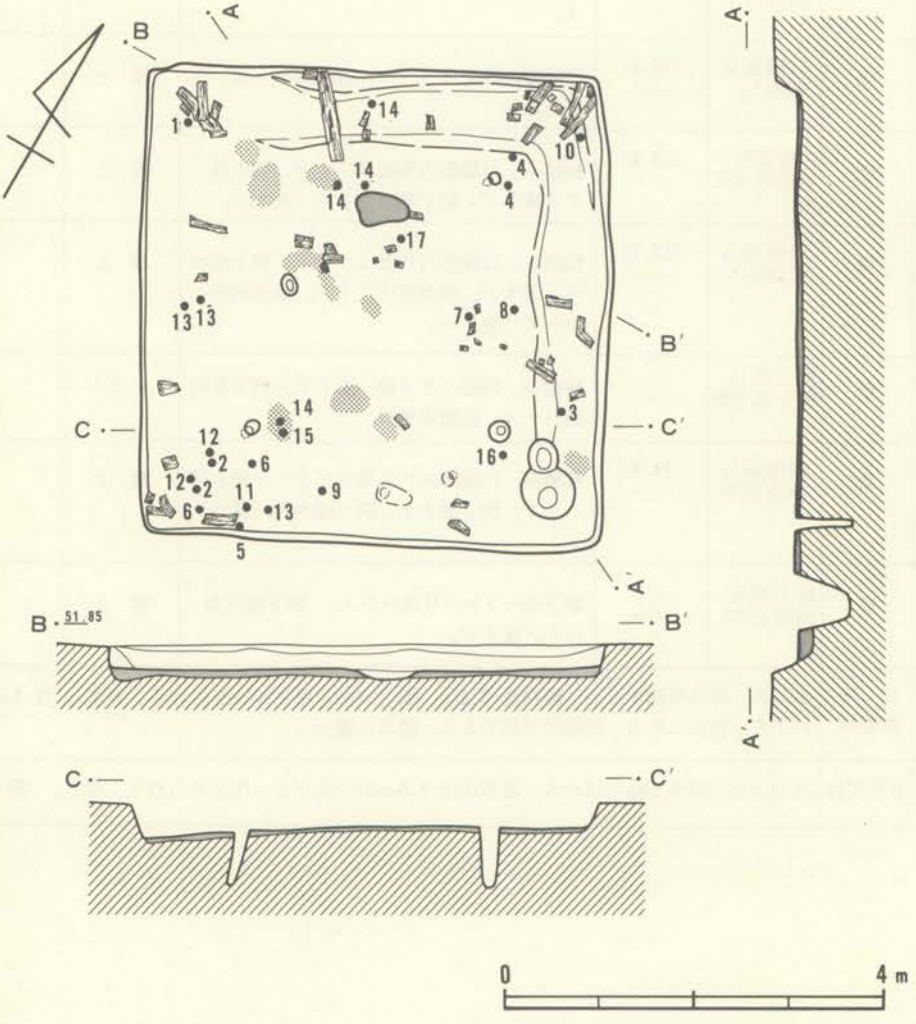
047号住居跡（第173～175・312図）

概要

本址は、045号跡の3ｍ程北に位置する。覆土中に焼土粒子・炭化粒子が検出され、地山への掘り込みも深いため、調査は比較的容易であった。

構造

本址は、長軸4.93ｍ、短軸4.80ｍをはかり、長軸は北西を向く。各コーナーがほぼ直角で、方形を呈する。炉跡は住居中央のやや北西寄りに位置し、住居跡の長軸方向に長く、径28×65㎝の不整楕円形を呈する。焼土ブロックは少なく、主体となるのは焼土粒子である。床は、厚さ7㎝程の貼床で、全体に堅い。本址は、焼失家屋と考えられ、床面あるいは床面直上から炭化材が出土し、覆土中にも焼土粒子・炭化粒子が多く認められる。ピットは6個検出された。



第173図　047号住居跡

東側のコーナーで検出された2個のピットは、径30cmと60cmで、深さはそれぞれ60cmと55cmである。貯蔵穴であろうか。中央よりやや西側に検出されたピットは、径15cm、深さ17cmをはかる。このほかの3個は、径12～18cmで、深さは46～58cmをはかる。北側及び南側のピットは曲がって穿たれている。西側の床面及び荒掘り面を入念な精査したにもかかわらず、ピットは検出されなかったが、この3個は柱穴と考えられる。

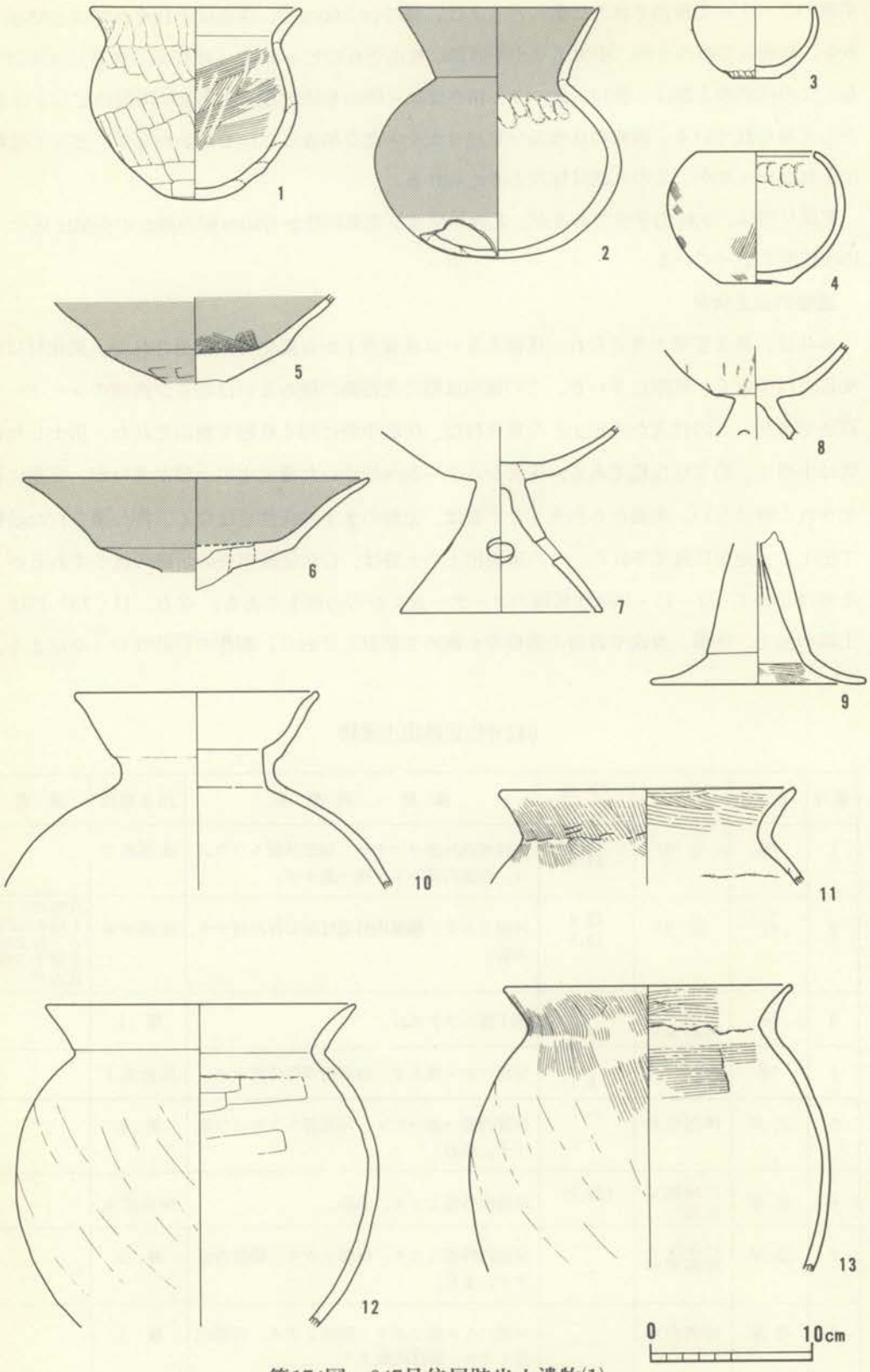
荒掘り面は、比較的平坦であるが、北西の壁及び北東の壁から80cm程内側が中央部に比べ、15cm程低くなっている。

遺物の出土状況

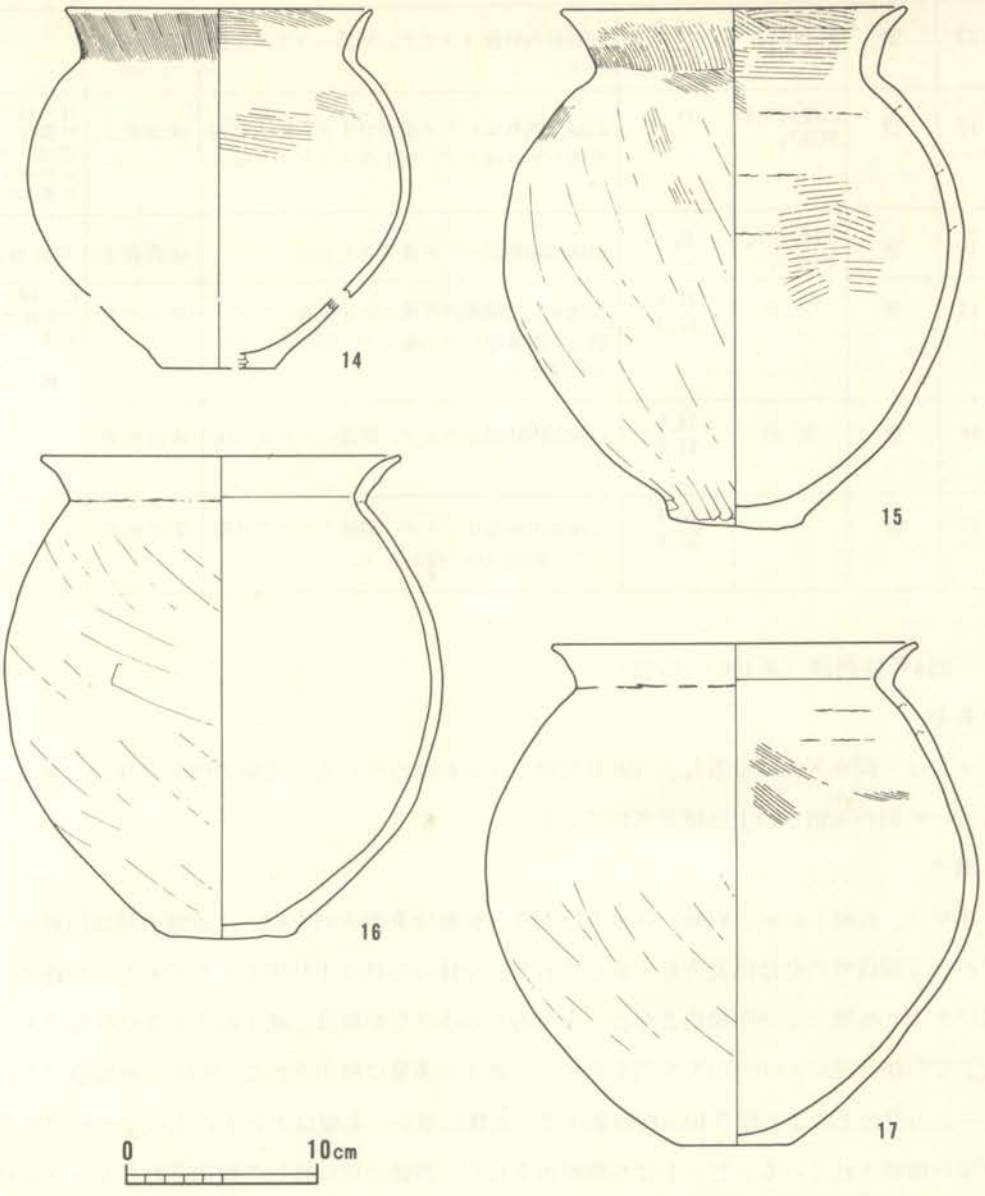
本址は、焼失家屋と考えられ、床面あるいは床面直上から炭化材が検出された。炭化材は中央部には少なく、壁際に多いが、この傾向は特に北西側の壁あるいは北及び西側のコーナーで顕著であり、この付近から出土した炭化材は、住居中央に向く状態で検出された。出土した遺物は土器で、約200片程である。床面から7～20cm程浮いた覆土中の土器が多いが、完全に復元された例はない。床面から出土した土器は、完形のままの状態ではなく、押し潰された状態で出土し、完全に復元された。この床面出土の土器は、17が住居中央の炉跡の近くであるが、そのほかの1・2・15・16は住居跡のコーナー近くからの出土である。なお、11・13・15は、土器の胎土、色調、焼成や器面の調整等が極めて類似しており、製作の同時性がうかがえる。

047号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	甕	完形	13.0 11.9	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ。胴部内面ハケメ後一部ナデ。	床面密着	
2	坩	完形	12.4 15.5	外面ミガキ。頸部内外面は指頭押捺後ナデ。赤彩。	床面密着	底部近くに1辺4cm程の三角形状を呈する穿孔あり。
3	椀	口縁部1/4 体部完形	(7.2) 4.4	胴下部ヘラケズリ。	覆土	
4	椀	口縁部完形 体部1/2	7.3 8.1	外面ハケメ後ナデ。内面指頭押捺後ナデ。	床面直上	
5	高坏	体部完形	—— ——	坏部内面一部ハケメ、坏底部ヘラケズリ後ナデ。赤彩。	覆土	
6	高坏	口縁部1/10 体部1/2	(21.2) ——	坏部内外面ミガキ。赤彩。	床面直上	
7	高坏	坏部1/4 脚部完形	—— ——	坏部内外面ミガキ、脚部ミガキ。脚部内面ナデ。4孔。	覆土	
8	高坏	脚部完形	—— ——	坏部ハケメ後ミガキ、脚部ミガキ。坏部内面ミガキ、脚部内面ナデ。	覆土	



第174図　047号住居跡出土遺物(1)



第175図　047号住居跡出土遺物(2)

9	高 坏	脚部完形	— —	脚部ナデ。脚部内面しぼり痕、裾部内面ハケメ。	覆 土	器面磨耗
10	壺	口縁部¼ 胴部½	(14.4) —		覆 土	器面磨耗
11	甕	口縁部¼	(18.1) —	輪積み。口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	覆 土	13・15と同時製作か？(胎土・焼成・ハケメ等が類似)

12	甕	胴下部以外ほぼ完形	19.0 ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。	床面密着	
13	甕	口縁部完形 胴部⅙	17.7 ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴上部内外面ハケメ後ナデ、胴下部ヘラケズリ後ナデ。	床面直上	11・15と同時製作か？(胎土・焼成・ハケメ等が類似)
14	甕	口縁部¼ 胴部⅓	(15.8) ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ。	床面直上	器面磨耗
15	甕	完　形	17.8 27.1	輪積み。口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴上部内外面ハケメ後ナデ、胴下部ヘラケズリ後ナデ。	床面密着	11・13と同時製作か？(胎土・焼成・ハケメ等が類似)
16	甕	完　形	18.5 24.8	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。	床面密着	
17	甕	½	18.9 25.8	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。胴部内面一部ハケメ。	床面密着	

054号住居跡（第166・177図）

概要

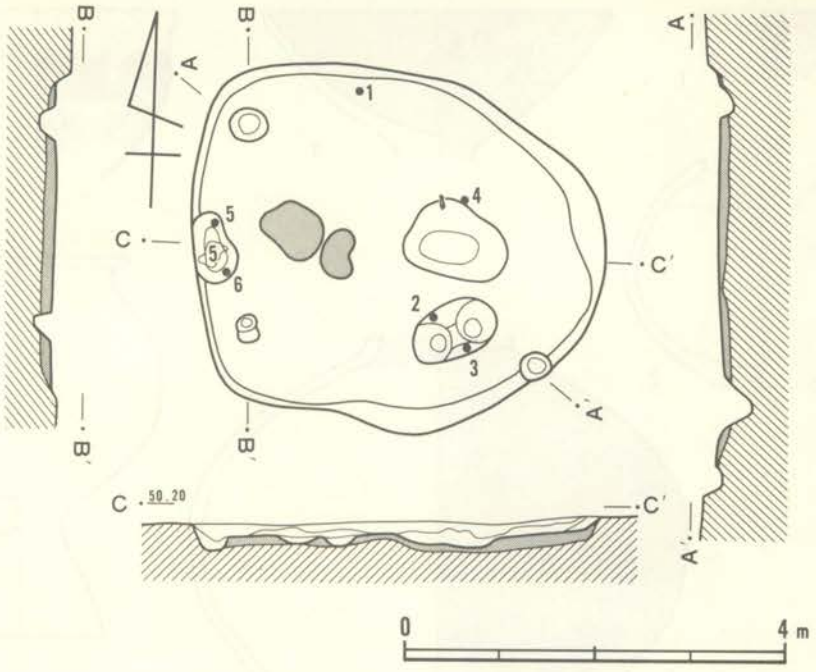
本址は、調査区南に位置し、056 B号跡と１ｍ程離れている。北側の壁及び床は、本址よりも古い時期の風倒木の上に構築されている。

構造

本址は、長軸4.40ｍ、短軸3.70ｍをはかり、長軸は東西方向を向く。東側の壁は円形状を呈すが、東側以外の壁は隅丸方形を呈しており、全体の形状は不整隅丸方形である。炉跡は、住居中央より西側に２か所検出された。中央寄りの小さな炉跡は、焼土粒子を含む程度であるが、大きな炉跡は径50×60cmの不整円形を呈し、焼土が多量に検出された。床は、暗褐色土と砂質ロームの混合土による厚さ10cm程の貼床で、全体に堅い。北側は黒色土の上に５cm程の厚さで貼床が構築されている。ピットは６個検出された。西側の壁に接して検出されたピットは径40×72cmの楕円形で、深さ16cmをはかるが、この中より土器が出土したことから、貯蔵穴と考えられる。中央より東側のピットは径75×104cmの楕円形で、深さ10cmをはかる。南東の壁に検出されたピットは径39cm、深さ20cmで、このピットよりやや住居中央寄りのピットは径52×98cmの楕円形を呈するが、底面の深さ31cmと33cmの２か所に分かれている。また、西側の壁側に検出された２個のピットは、径20～40cm、深さ16～21cmで柱穴と考えられるが、北東側において、ピットは検出されなかった。

遺物の出土状況

本址からは、100片程の土器が出土した。土器はほとんどが床面近くからの出土で、北東の壁付近と南側のピットの覆土上面からやや集中して出土した。また、西側の貯蔵穴の中からは

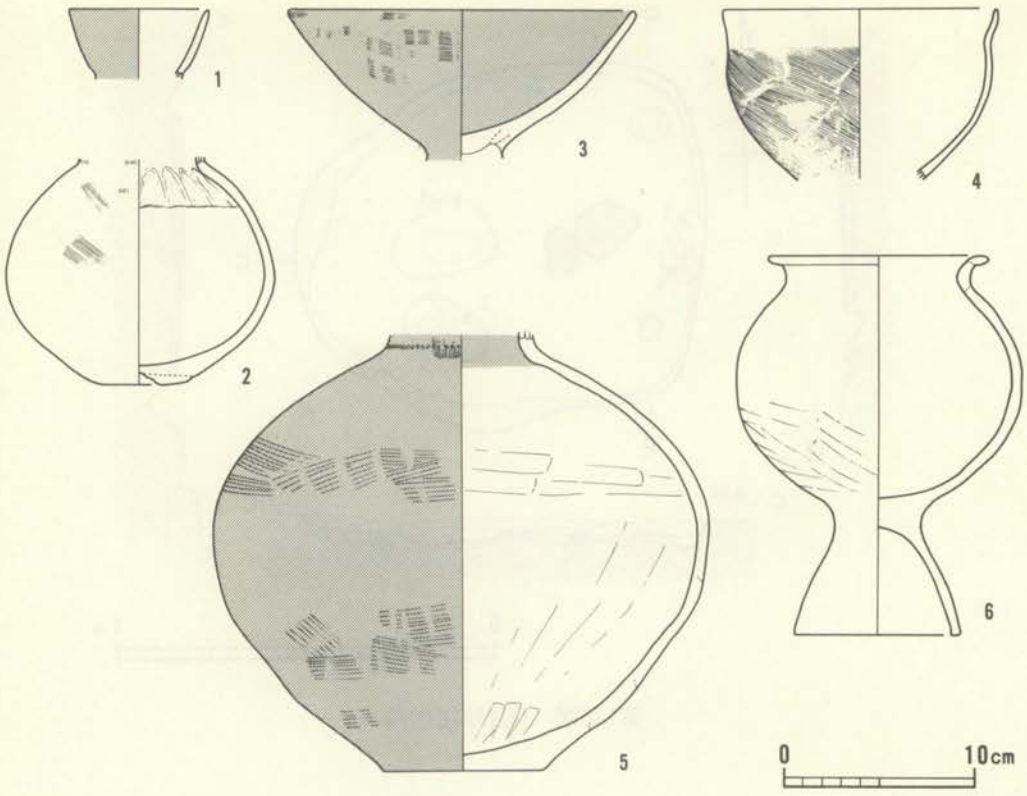


第176図　054号住居跡

底面に密着する状態で5・6が出土した。5は大小の破片で出土し、口縁部を除き完全に復元された壺で、6は全体の½程遺存していた台付甕である。

054号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坩	口縁部完形	7.3 ——	内外ミガキ。赤彩。	床面密着	
2	坩	胴部完形	—— ——	胴部ハケメ後ナデ。胴上部内面指頭押捺後ナデ。	ピット	
3	高坏	坏部ほぼ完形	18.1 ——	ハケメ後ミガキ。赤彩。	ピット	
4	埦	⅓	(14.3) ——	口縁部ハケメ後ナデ。内面ナデ。赤彩。	床面密着	
5	壺	胴部完形	—— ——	頸部に円形の刺突文。胴部ハケメ後ミガキ。胴部内面ヘラケズリ後ナデ。赤彩。	ピット	6と伴出
6	台付甕	口縁部⅙ 胴部½	(11.6) 19.5	口縁部内外面ヨコナデ、胴上部ヘラケズリ後ナデ、胴下部ヘラケズリ、脚部ナデ。	ピット	5と伴出



第177図　054号住居跡出土遺物

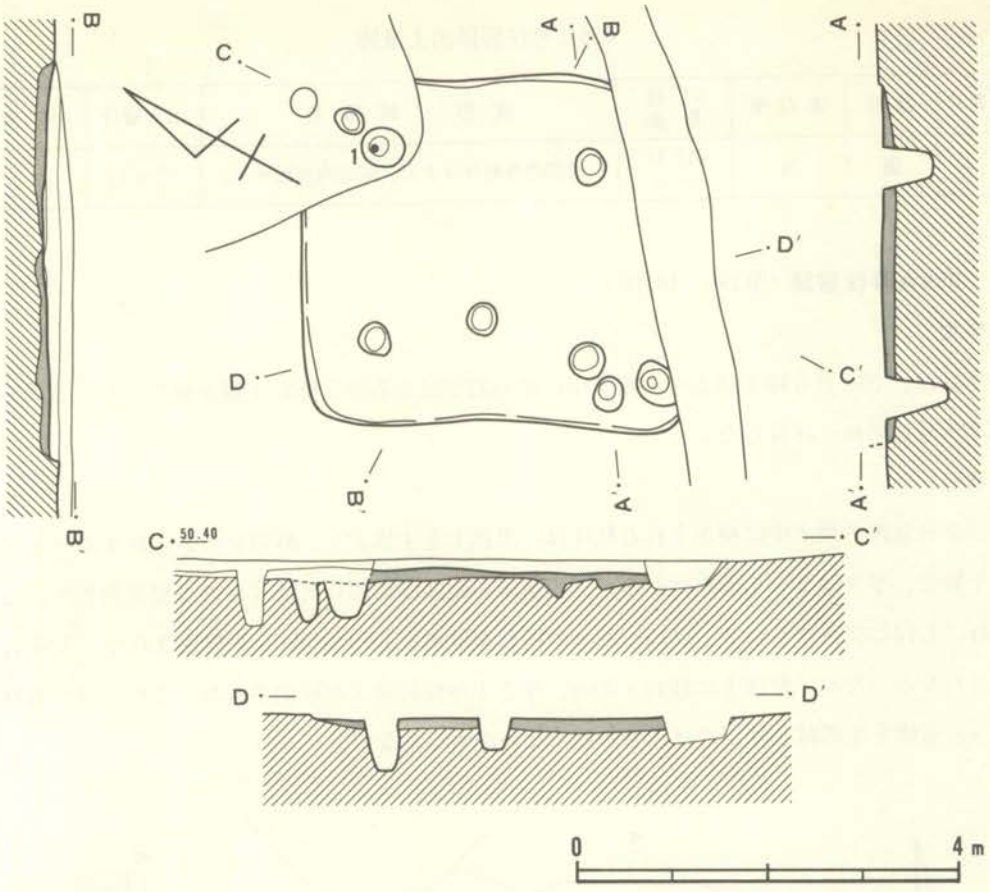
055B号住居跡（第178・179図）

概要

本址は、055 A号跡に北側のコーナーを切られており、また、南東の壁は新しい時期の溝により完全に破壊されていた。本址付近は、地山が削平されており、確認面がほぼ床面であった。また、地山の乾燥が激しく、調査は困難を極めた。

構造

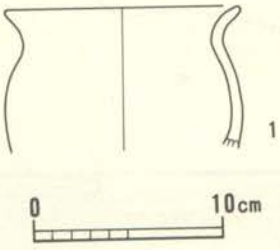
本址は、ほぼ床面まで削平されており、壁際の地山の状態も悪かったため、検出した形状と本来の形状は若干異なるかもしれないが、約3.6×4.0m程の方形を呈すると考えられる。炉跡は、検出されなかった。床は、全体が堅いが、周囲の乾燥が激しかったことを考えると断言はできない。ピットは、床面において6個と055 A号跡の床面の下に2個検出された。これらのピットは径30～40cm、深さ27～65cmをはかる。柱穴と考えられる4個は深さ48～65cmと深く、柱穴間の距離は、長辺で2.2m、短辺で2.1mをはかり、各柱穴間を結ぶ形状はやや歪んだ方形を呈する。



第178図　055Ｂ号住居跡

遺物の出土状況

本址は、覆土がほとんどなかったため、出土した遺物は土器が15片程である。図示した甕は、055 Ａ号跡の床面の下から検出された柱穴の中より出土したものである。



第179図　055Ｂ号住居跡出土遺物

055Ｂ号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	甕	⅛	(12.1) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	ピット	

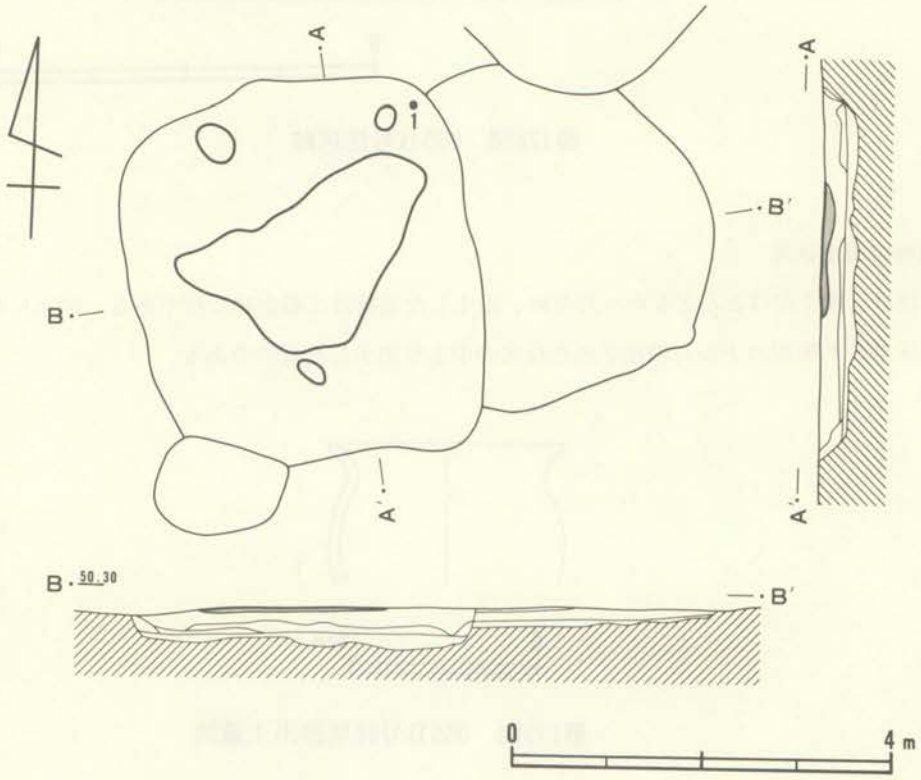
059Ａ号住居跡（第180・181図）

概要

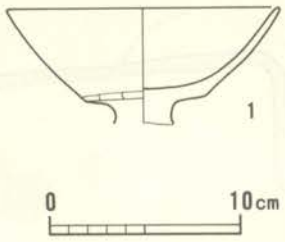
本址は、059Ｂ号跡を精査中、覆土中に部分的ではあるが、堅い土層が検出され、この面を059Ａ号住居跡と呼称した。

構造

059Ｂ号跡の覆土中に検出された貼床は、黒色土を主体とし、砂質ロームの粒子が少量混じる土層で、厚さは２～７cmをはかる。この貼床の範囲は約2.0×2.3ｍの不整三角形で、これ以外にも同じ高さにおいて、径15～32cmの円形を呈する３か所の貼床が検出された。炉跡は検出されなかったが、貼床上に径10×20cm、厚さ１cm程の焼土が検出された。これだけの資料からこの遺構を住居跡と呼ぶのはふさわしくないかもしれない。



第180図　059Ａ号住居跡



第181図　059A号住居跡出土遺物

遺物の出土状況

本址に伴うと考えられる遺物は、貼床と同じ高さのものを含めた。土器が約12片で東側の末端部に集中して出土した。図示した高坏は堅い貼床の範囲から20cm程離れているが、同じ高さであることから本址に含めた。

059A号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	高坏	坏部2/3	14.2 —	口縁部内外面ヨコナデ、胴下部ヘラケズリ。	床面密着(?)	

060A号住居跡（第182図）

概要

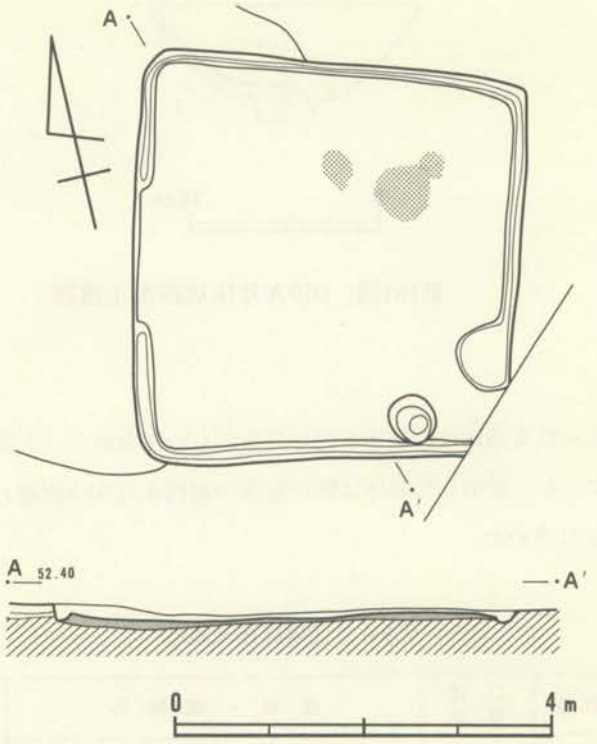
本址は、060B号跡の東壁を切っている。地山が東から西に傾斜する緩斜面上に位置する。

構造

本址は、一辺4.12mの整った方形を呈し、西側の一部を除き幅12～20cm、深さ7cm程の壁溝が巡る。床面で焼土粒子・炭化粒子の分布が検出されたが、炉跡は検出されなかった。ピットは2個検出され、東側の壁溝と接したピットは径35cm、深さ12cmをはかり、南側の壁付近のピットは径50cm、深さ32cmをはかる。

遺物の出土状況

本址から出土した遺物は、土器が約50片である。土器は、水分を受けたために器面の剝落したものが多い。また、実測できるような大形の破片はなかったが、口縁部の内外面共に、ハケメ調整が行なわれた後ヨコナデが施された甕の破片や、高坏の脚部でハケメ調整後、ミガキが施され、内外面共に赤彩されている破片等が出土している。



第182図　060A号住居跡

061A号住居跡（第183・184図）

概要

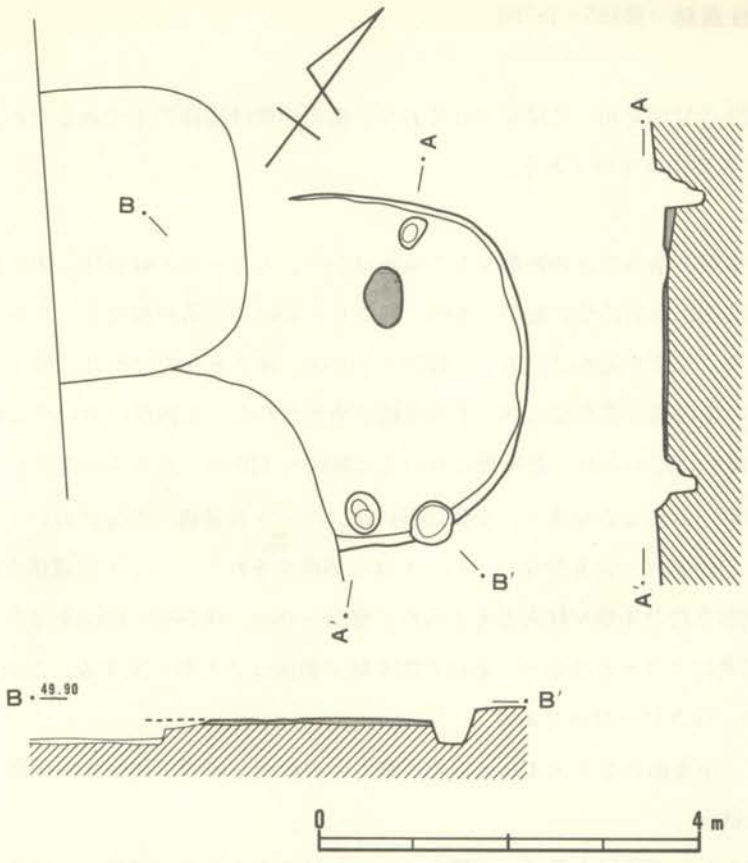
本址は、061B号跡と重複すると考えられるが、攪乱が多く確認されなかった。地山が東から西に傾斜する緩斜面上に位置し、西に7m程離れると一段低い台地になる。本址は、南側が攪乱を受けており、検出されたのは北東側のみである。

構造

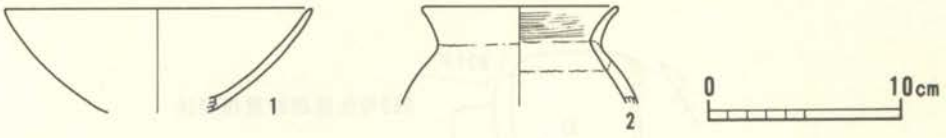
本址は、北東側半分程しか遺存していないが、軸長3.65m程の隅丸方形を呈すると考えられる。炉跡は、住居中央より北側に位置し、径42×58cmの楕円形を呈する。炉跡内からは焼土粒子が多く検出された。床は、厚さ5cm程の貼床で、全体に軟らかい。ピットは3個検出され、径26～44cm、深さ24～37cmをはかる。東側の壁際のピットは、住居跡外に張り出している。

遺物の出土状況

本址から出土した遺物は、土器が20片程であり、床面からわずかに浮いているものが大半である。



第183図　061A号住居跡



第184図　061A号住居跡出土遺物

061A号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	高坏	¼	(16.0) ——	内外面ミガキ（?）。	覆土	器面磨耗
2	甕	口縁部⅕ 胴部⅙	(10.0) ——	輪積み。口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。口縁部内面ハケメ後ヨコナデ。	覆土	

069A号住居跡（第185～187図）

概要

本址は、069 G号跡を切って構築されており、南東の壁は道路の下であるため、未調査である。本址付近の地山は平坦である。

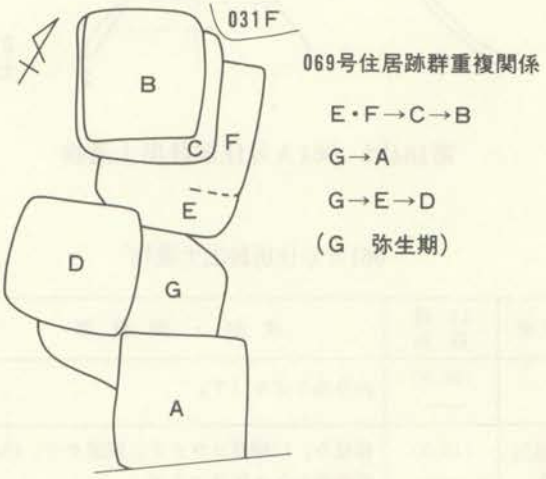
構造

本址は、北東壁と南西壁との距離が5.7 mをはかり、もう一方の軸長は、更に長いと考えられる。南西、北西、北東の壁に幅13～30cm、深さ6～10cmの壁溝が検出されたが全周しない。炉跡は住居中央よりやや北西に位置し、径70×110 cm、深さ8 cmをはかり、焼土が多量に検出された。床面の南西部と北東部にベッド状遺構が検出された。南西部においては幅80～90cm、高さ5 cmで、鍵状に認められ、北東部においては幅60～110 cm、高さ5 cmをはかる　床は、暗褐色土と砂質ロームによる貼床で、全体に堅いが、ベット状遺構の部分においては、貼床の下部は軟らかく、砂質ロームも少ない。ピットは9個検出された。ベッド状遺構と低い床とが接する位置に検出された4個が柱穴と考えられ、径34～48cm、深さ60～80cmをはかる。柱穴間の距離は、各辺共に3.3 mをはかり、各柱穴間を結ぶ範囲は正方形を呈する。このほかのピットは径20～75cm、深さ10～41cmである。

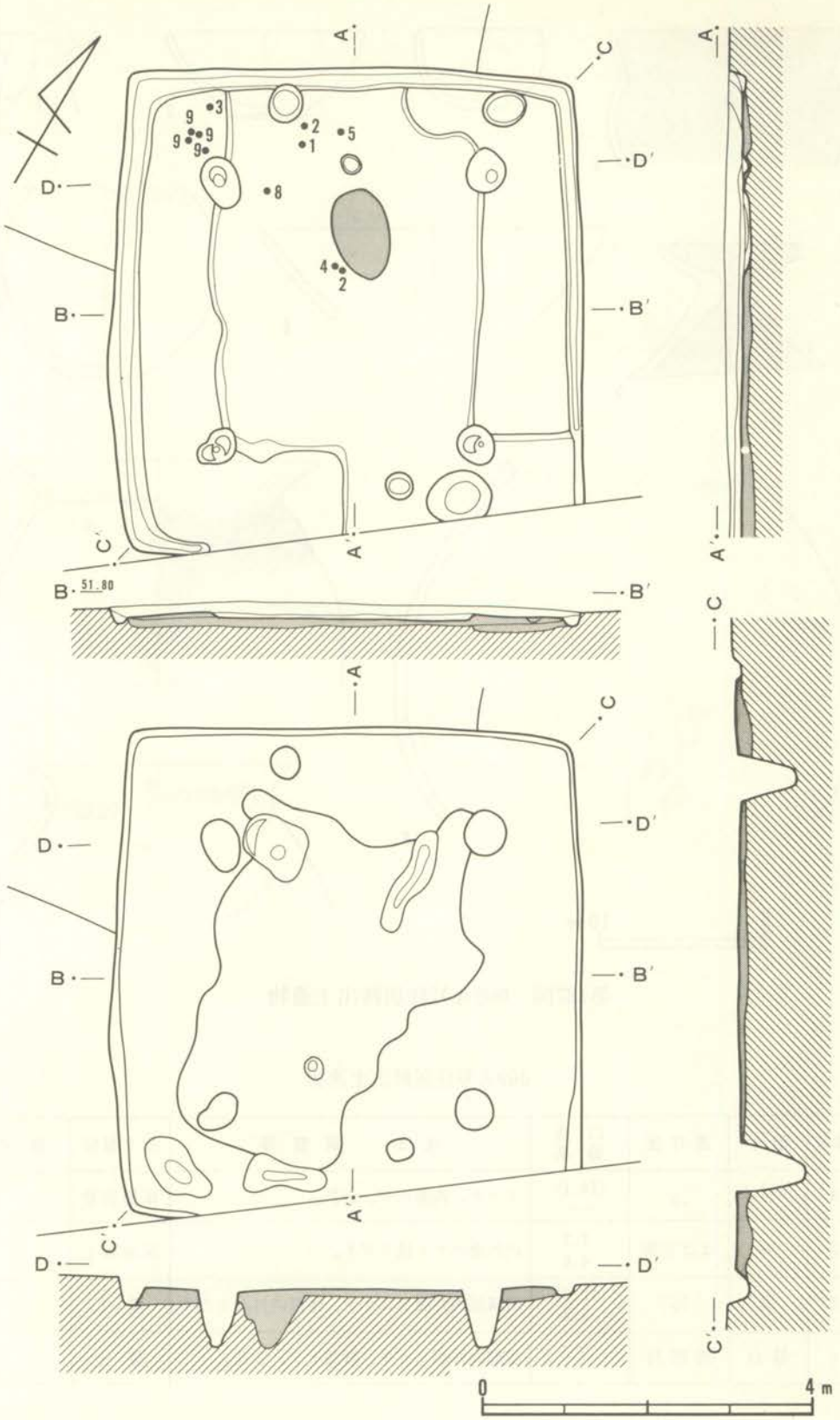
荒掘り面は、中央部の2.5×4.0 m程の不整方形の範囲が周囲に比べ8 cm程高い形状である。

遺物の出土状況

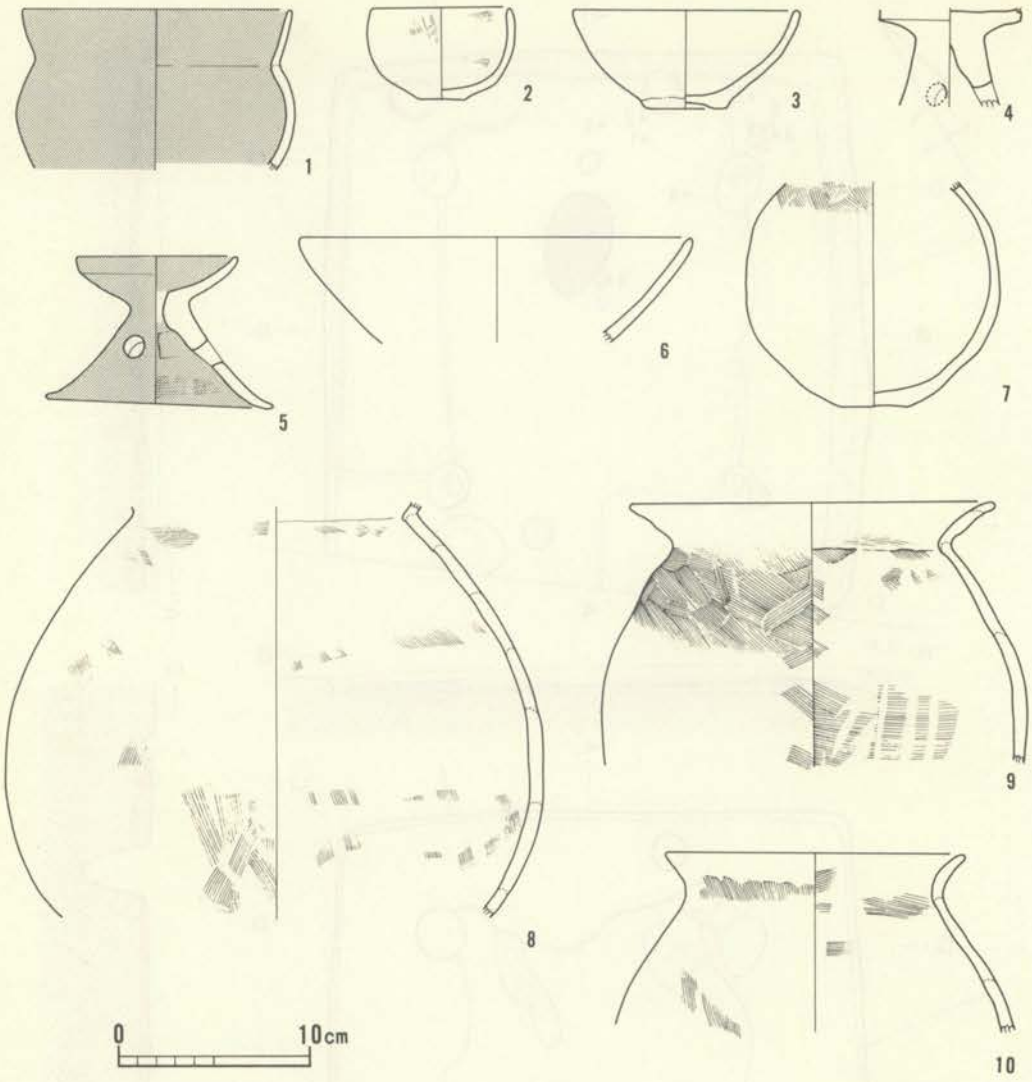
本跡から出土した遺物は土器で、西側のコーナー付近から北西の壁にかけての限られた範囲内からの出土である。これらの土器は床面近くから出土したが、5だけが完形でそのほかは破片である。



第185図　069号住居跡群重複関係



第186図　069A号住居跡



第187図　069A号住居跡出土遺物

069A号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坏	1/3	(14.1) ——	ミガキ。内面ナデ。赤彩。	床面密着	
2	椀	ほぼ完形	7.3 4.8	内外面ハケメ後ミガキ。	床面直上	
3	椀	1/2	(12.0) 5.2	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ミガキ。	覆土	
4	器台	脚部1/2	—— ——	受部内外面ミガキ、脚部ナデ。3孔。	覆土	

5	器台	完形	8.6 8.8	受部・脚部ミガキ。裾部内面ハケメ後ナデ。3孔。赤彩。	床面密着	
6	高坏	口縁部1/2 胴部1/10	(20.8) ——	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ、胴部内外面ミガキ。	覆土	
7	甕	胴部1/2	—— ——	胴上部ハケメ後ナデ、胴下部ナデ。	覆土	
8	甕	胴部1/3	—— ——	輪積み。胴部内外面ハケメ後ナデ。	ピット	
9	甕	口縁部1/3 胴部1/2	(19.2) ——	輪積み。口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴上部ハケメ、胴下部ナデ。胴部内面ハケメ後一部ナデ。	覆土	
10	甕	1/4	(15.4) ——	輪積み。口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	覆土	

069B号住居跡（第185・188・189図）

概要

本址は、069C号跡のほぼ真上に構築されている。

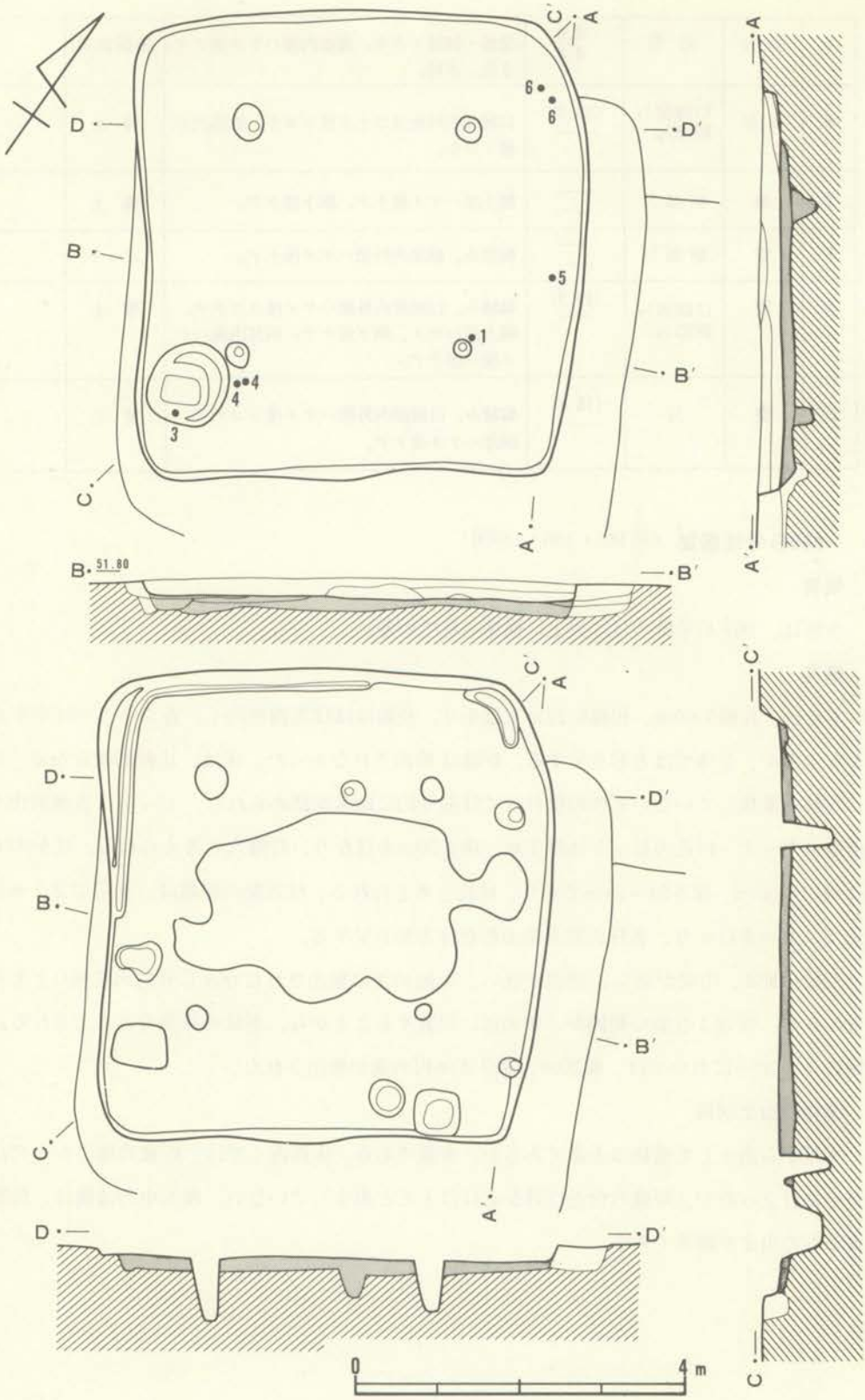
構造

本址は、長軸5.60m、短軸5.22mをはかり、長軸はほぼ北西を向く。各コーナーはやや丸みを有するが、全体では方形を呈する。炉跡は検出されなかった。床は、比較的軟らかく、069C号跡と重複していない北西の壁付近では部分的に貼床が認められた。ピットは5個検出され、南側のコーナー付近のピットは径1m、深さ50cmをはかり、貯蔵穴と考えられる。ほかの4個は径21～36cm、深さ54～59cmであり、柱穴と考えられる。柱穴間の距離は、長辺で2.7m、短辺で2.6mをはかり、各柱穴間を結ぶ形状は方形を呈する。

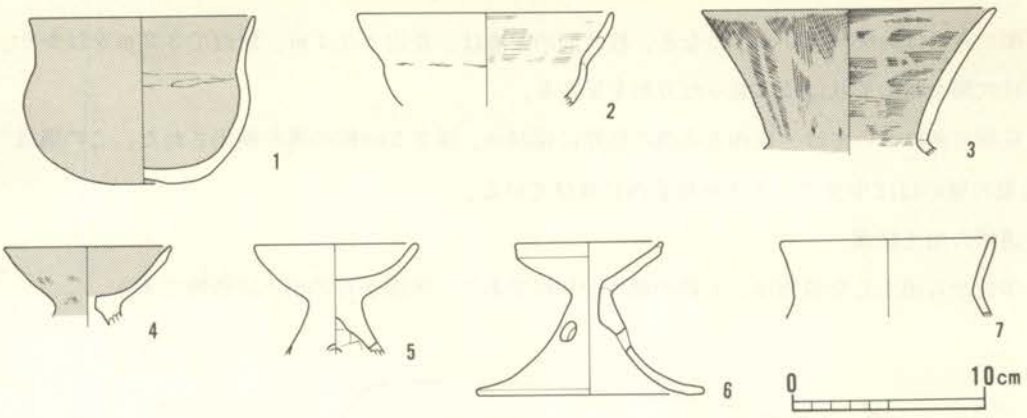
荒掘り面は、中央が高く、周辺が低い。本址の下に検出された069C号跡の荒掘りとも考えられるが、周辺より高い範囲が、中央部に位置することから、本址の荒掘りと考えられる。西側のコーナーにおいては、幅20cm、深さ4cm程の溝が検出された。

遺物の出土状跡

本址から出土した遺物は土器であるが、少量である。床面近くでは、貯蔵穴周辺からの出土がやや目立ったが、貯蔵穴付近以外からはほとんど出土していない。覆土中の遺物は、住居中央からの出土が顕著である。



第188図　069Ｂ号住居跡



第189図　069Ｂ号住居跡出土遺物

069Ｂ号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坩	½	(11.8) 8.6	ミガキ。頸部内面ヘラケズリ。赤彩。	床面直上	
2	坏	口縁部⅕ 体部⅒	(13.4) ——	輪積み。口縁部ヨコナデ、体部ミガキ。 口縁部内面ハケメ後ヨコナデ。	覆土	
3	坩	口縁部完形	15.3 ——	口縁部内外面ハケメ後ミガキ。赤彩。	ピット	
4	器台	受部½	(8.8) ——	受部ハケメ後ナデ。内面ナデ。赤彩。	床面直上	
5	器台	受部¼ 脚部½	(8.5) ——	受部内外面・脚部ミガキ。脚部内面ヘラケズリ。4孔。	覆土	
6	器台	ほぼ完形	7.8 8.5	受部内外面・脚部内外面ミガキ。3孔。	床面直上	
7	坩	口縁部⅓	(11.1) ——	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ。	覆土	

069Ｃ号住居跡（第185・190図）

概要

本址は、069Ｆ号跡を切って構築されているが、069Ｂ号跡に大半が破壊され、遺存しているのは東側の壁際だけである。

構造

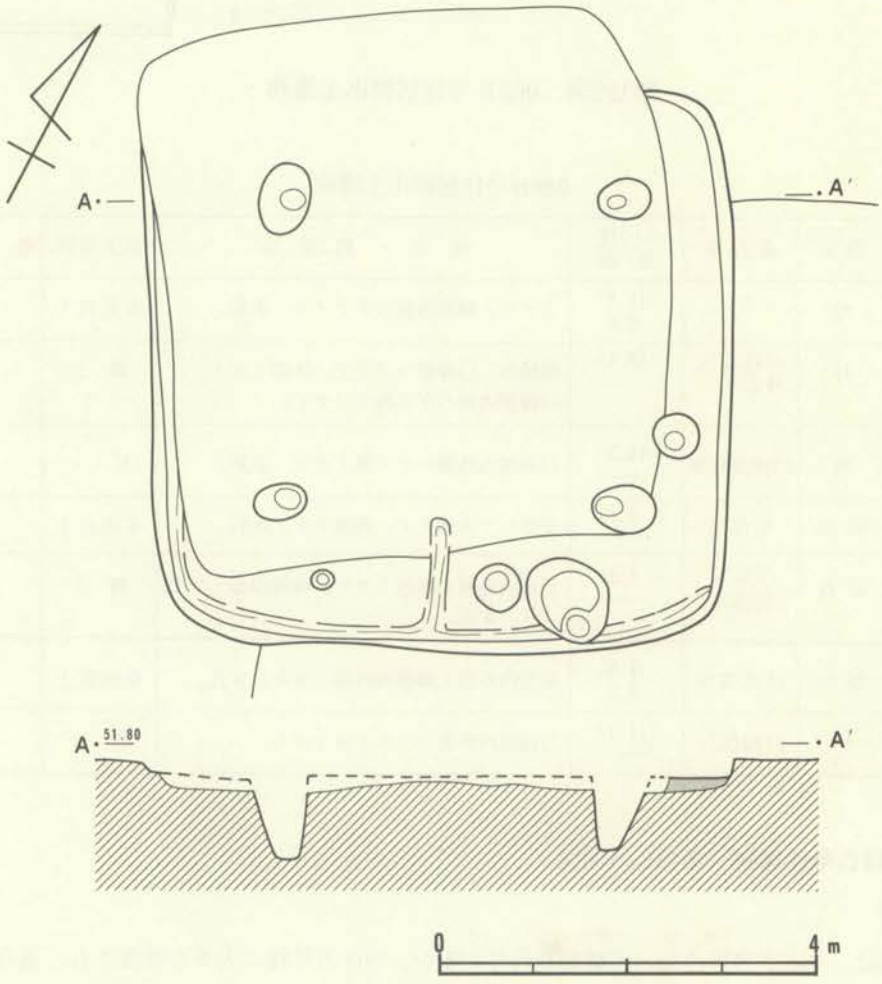
本址は、長軸6.20ｍ、短軸5.94ｍをはかり、長軸は北東を向く。全体の形状は方形を呈する。炉跡は検出されなかった。床は、暗褐色土を主体にした貼床であるが、壁際しか遺存していなかったこともあり、軟らかい。ピットは、床面で4個検出され、また、069Ｂ号跡の荒掘り面において検出された5個の中の4個のピットが柱穴と考えられる。径32～52cm、深さは本址の

床面からでは約66～100㎝程になる。柱穴間の距離は、長辺で3.4ｍ、短辺で3.2ｍをはかり、各柱穴間を結ぶ形状はほぼ整った方形を呈する。

荒掘り面においては、南西と北西の壁際に幅24㎝、深さ5㎝程の溝が検出された。この溝は南東の壁のほぼ中央で、1.1ｍ程北西に延びている。

遺物の出土状況

本址から出土した遺物は、土器の細片が10程であり、床面からの出土は皆無である。

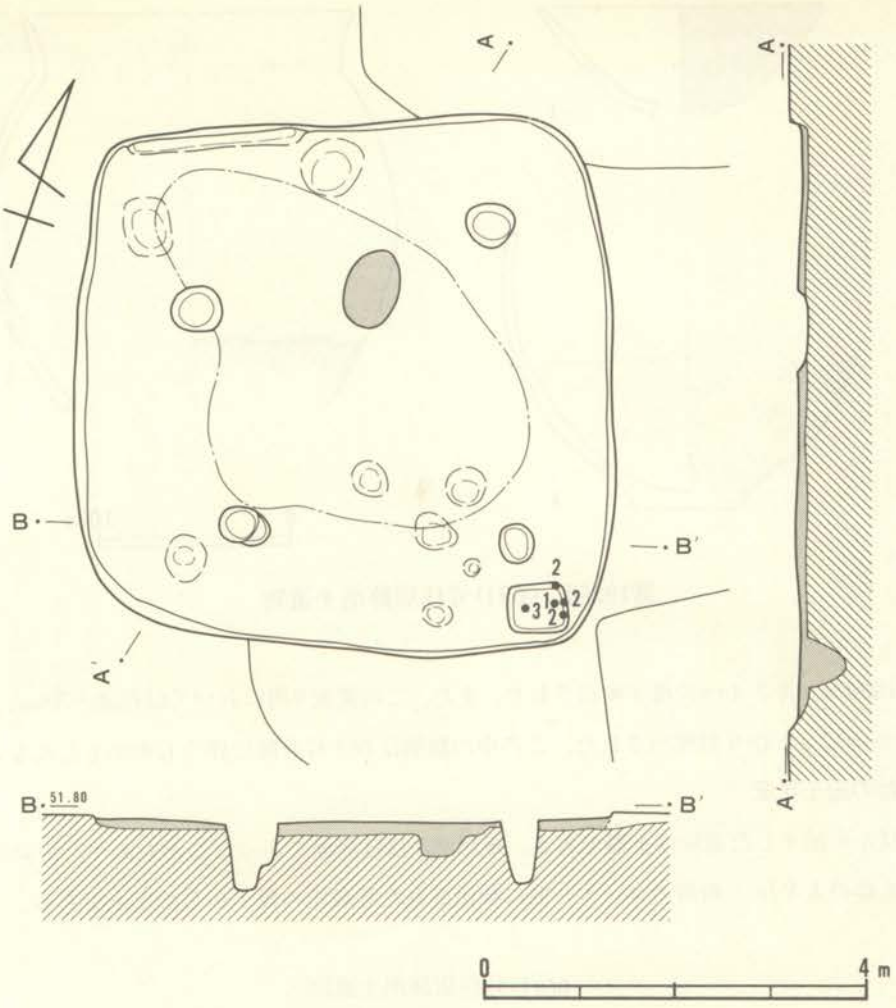


第190図　069Ｃ号住居跡

069Ｄ号住居跡（第185・191・192図）

概要

本址は、069 Ｅ・Ｇ号跡を切っている。地山の掘り込みが浅いため、確認面がほぼ床面であった。

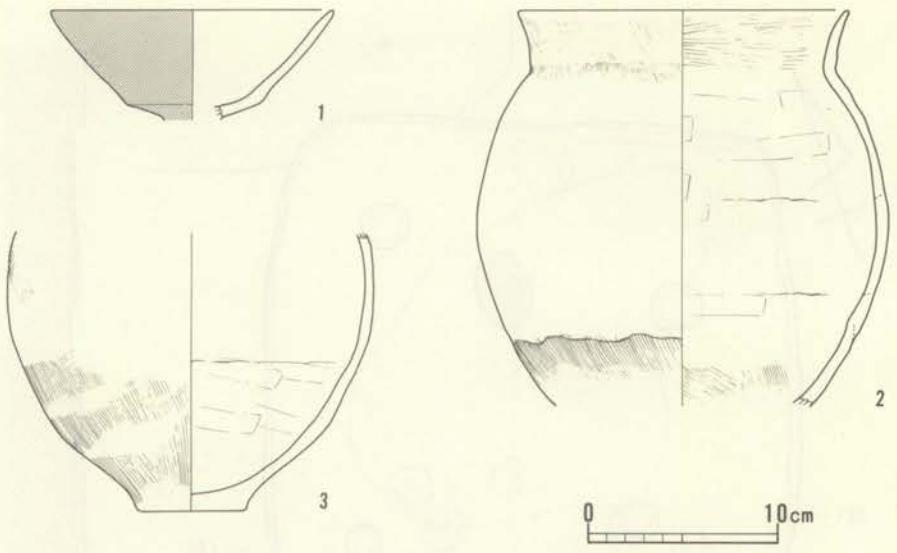


第191図　069D号住居跡

構造

本址は、軸長5.50mをはかり、南側のコーナーは丸みが強いが、全体としては方形を呈する。炉跡は、住居中央よりやや北側に位置し、径55×88cmの楕円形を呈し、焼土が多量に検出された。床は、炉跡の周辺を含め、中央から北西側にかけての範囲が堅い。ピットは5個検出された。南側のコーナー付近のピットは50×60cmの方形を呈し、深さは17cmをはかり、貯蔵穴と考えられる。この貯蔵穴の覆土中から径10cm程の白色粘土のブロックが検出された。ほかの4個は径35～50cm、深さ66～59cmをはかり、柱穴と考えられる。柱穴間の距離は、各辺が2.4m、3.0m、3.2m、3.3mをはかり、一定しない。このため、各柱穴間を結ぶ形状は不整方形を呈する。

荒掘り面は、全体に比較的平坦で、床面との比高差は10cm程である。北側の壁で、長さ1.8



第192図　069Ｄ号住居跡出土遺物

m、幅20cm、深さ４cmの溝が検出された。また、この荒掘り面においては径20～58cm、深さ16～52cmのピットが９個検出された。この中の数個は069Ｇ号跡に伴うものかもしれない。

遺物の出土状況

本址から出土した遺物は土器である。確認面がほぼ床面であったこともあり、約30片程である。土器の大半は、南側のコーナー側に検出された貯蔵穴の覆土からの出土である。

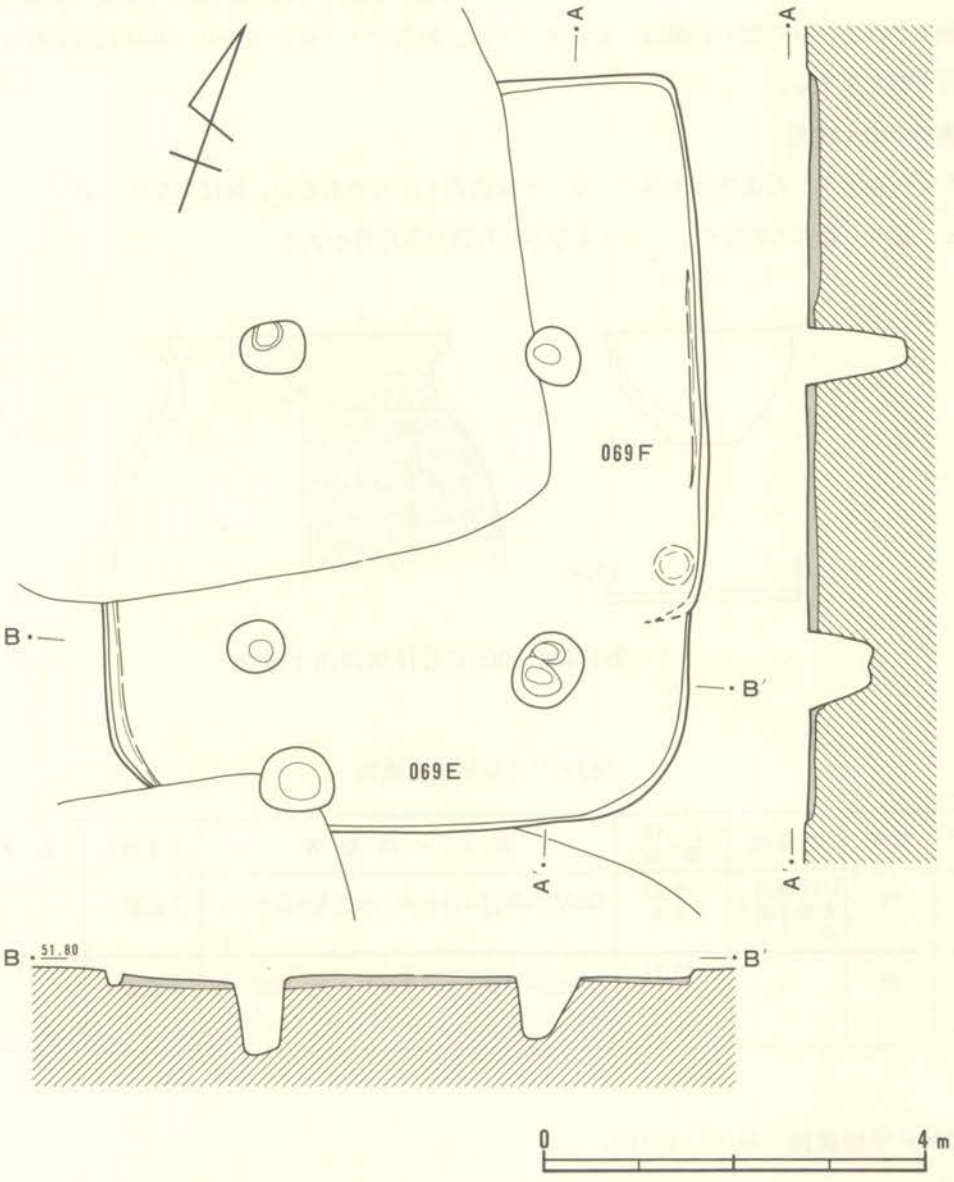
069Ｄ号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	高坏	坏部⅙	(14.7) ——	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ。赤彩。	ピット	
2	甕	底部以外¼	(17.2) ——	輪積み。口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴上部ナデ、胴下部ハケメ後ナデ。胴上部内面ヘラケズリ後ナデ、胴下部内面ハケメ後ナデ。	床面直上	
3	甕	胴部½	—— ——	胴下部ハケメ後ナデ。胴下部内面ヘラケズリ後ナデ。	覆土	

069E号住居跡 （第185・193・194図）

概要

本址は、069 C・D号跡に切られている。また、本址は当初069 F号跡と合わせて1軒の住居跡と考えられたが、柱穴の位置から、2軒の重複であることが判明した。地山への掘り込みも浅く、この新旧関係は確認でなかった。



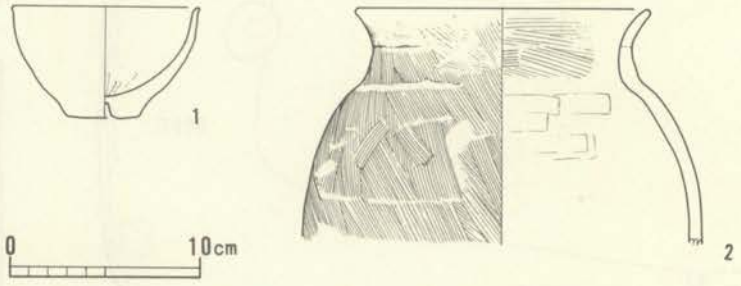
第193図　069E・F号住居跡

構造

本址は、東西の軸長6.18ｍをはかる。柱穴の位置から推測すると、南北の軸長は約6.80ｍ程で、長方形を呈する。炉跡は検出されなかった。床は、暗褐色土を主体にした貼床で、遺存部においては全体に軟らかい。ピットは床面で4個検出された。南側のピットは、069 D号跡に一部破壊されているが、径68×76cm、深さ36cmをはかる。ほかの3個は径54～68cm、深さ69～96cmをはかり、柱穴と考えられる。この柱穴に対応する西側の柱穴は069 C号跡の床面の下から検出された。柱穴間の距離は、長辺で3.3ｍ、短辺で3.0ｍをはかり、各柱穴間を結ぶ形状は長方形を呈する。

遺物の出土状況

本址から出土した遺物は土器で、すべて床面近くからであるが、量は少なく、細片ばかりである。高坏・器台の破片や、ハケメ調整された甕の破片等がある。



第194図　069E号住居跡出土遺物

069E号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	埦	口縁部⅛ 体部ほぼ完形	(9.6) 5.8	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ。	床面直上	
2	甕	¼	(13.1)	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ。	床面直上	

069F号住居跡（第185・193図）

概要

本址は、069 E号跡と合わせ、長方形を呈する1軒の住居跡と考えられたが、その後の調査により、2軒に分離されたものである。069 E号跡との新旧関係は確認できなかったが、069 C号跡に半分程切られている。

構造

本址は、北東のコーナーと東側の壁が検出されたのみであり、東側の壁は069 E号跡の東側の壁よりわずかに外側に検出された。交差する部分が、本址の南東のコーナーと考えられ、これを基にすると、本址の南北の軸長は約5.7 m程である。床面においては、炉、ピット等は検出されず、床面も軟らかい。

荒掘り面からは、径40cm、深さ33cmのピットが1個と東側の壁に長さ2.2 m、幅16cm、深さ4 cmの溝が検出されたほかは、比較的平坦である。

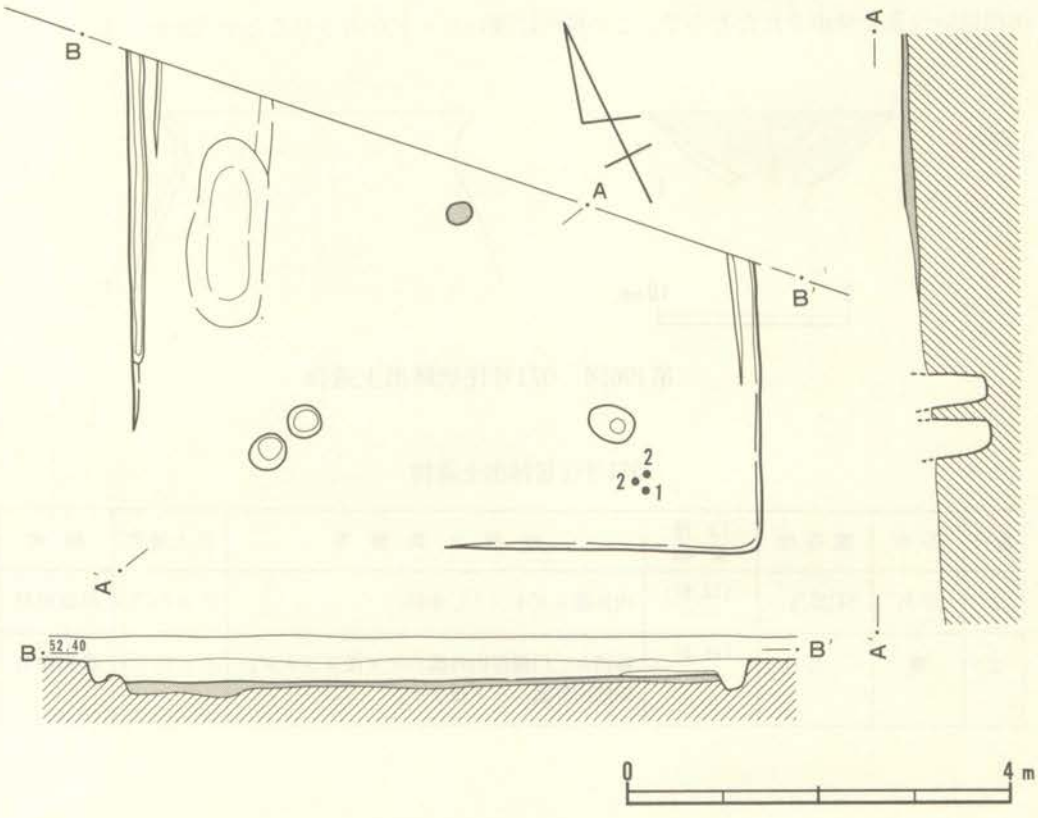
遺物の出土状況

本址から出土した遺物は、土器が少量であり、図示できるものはなかった。ハケメ調整された甕の胴部破片が出土している。

071号住居跡（第195・196図）

概要

本址は、070号跡の7 m程北側に位置する。地山が東から西に傾斜する斜面上であるため、西側のコーナーは検出されなかった。また、北東部分は未調査である。



第195図　071号住居跡

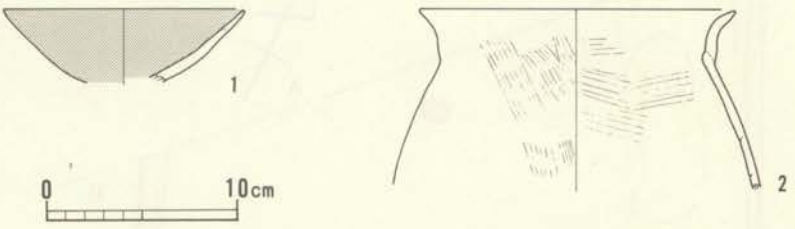
構造

本址は、南東から北西に向く軸長が、6.43mをはかり南側のコーナーから推測すると、本址は整った方形を呈する。壁溝は、北西及び南東の部分に検出され、幅18～22cm、深さは8～16cmをはかる。北西の壁溝の内側には幅10cm、高さ8cmのテラスが検出された。炉跡は、住居跡のほぼ中央に位置し、径28cm、深さ4cmの円形を呈する。焼土粒子が多く検出された。床は、厚さ5cm程の貼床である。ピットは西側のコーナー側に2個、南側のコーナー付近に1個検出され、径32～34cm、深さ72～75cmをはかる。西側の2個のピットは、中央寄りのピットが柱穴と考えられ、南側の柱穴との距離は3.2mをはかる。

荒掘り面は、北西の壁から内側へ1.4m程の範囲がほかの面より6cm程低く、この低い部分の中央には、更に8cm程低い径75×200cmの楕円形状のピットが検出された。また、南西の壁はこの荒掘りで検出されたものである。

遺物の出土状況

本址から出土した遺物は土器で、約80片程である。土器は磨耗した細片が多い。図示できなかったが、炉跡の南側の床面から出土した土器は、ハケメ調整された胴部の破片で、小形の甕と考えられるものである。また、南側のコーナー付近から出土した土器は、床面の高さより5cm程低い位置で検出されたもので、この場所に浅いピットがあったことがうかがえる。



第196図　071号住居跡出土遺物

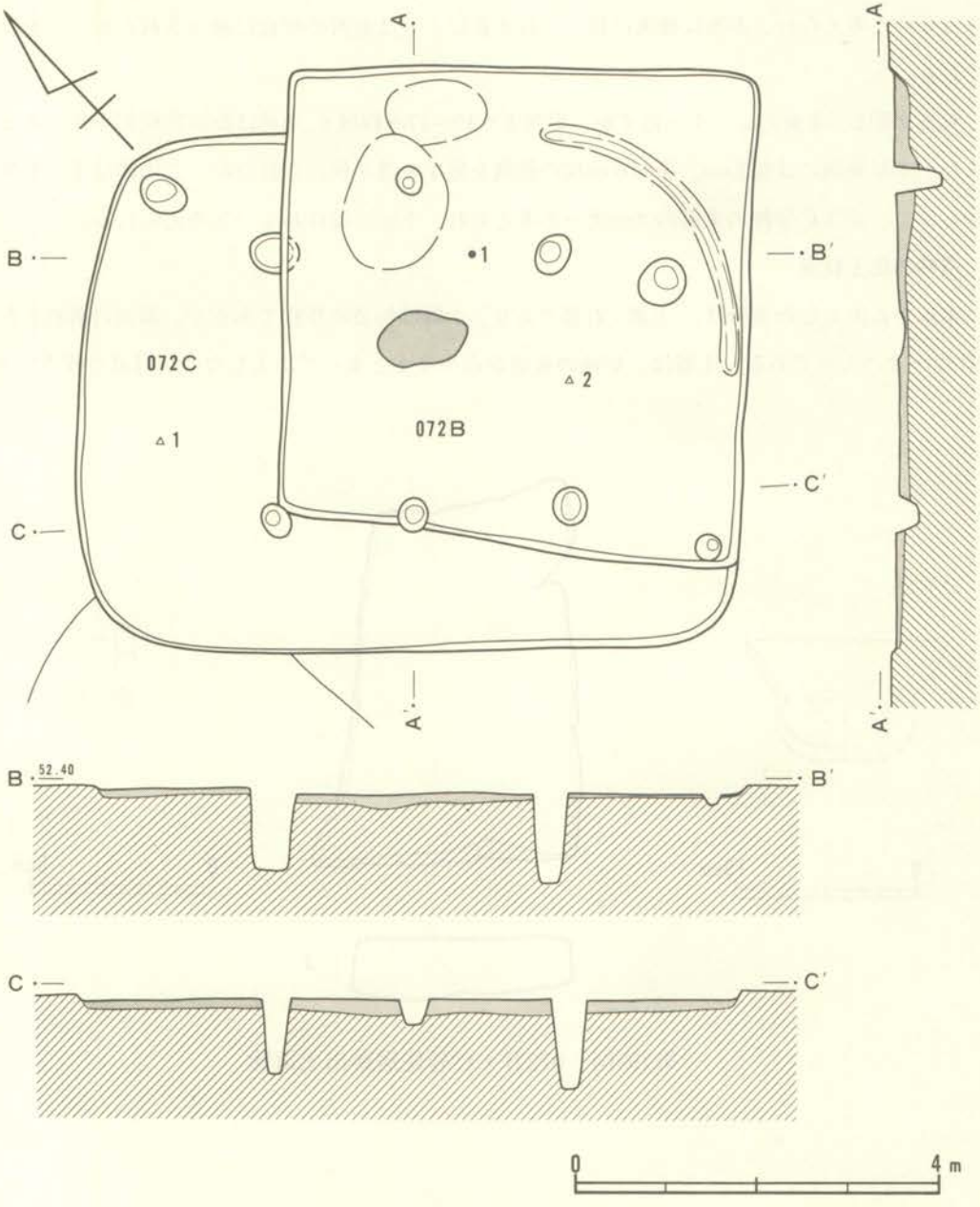
071号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	高坏	坏部¼	(12.6) —	内外面ミガキ（?）。赤彩。	ピット(?)	器面磨耗
2	甕	¼	(16.6) —	輪積み。口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部内外面ハケメ後ナデ。	ピット(?)	器面磨耗

072B号住居跡（第197・198図）

概要

本址は、調査区中央の東側に位置し、本址から東側へ12m程離れると比高差29m程の崖になる。本址付近は、地山が東から西に傾斜する緩斜面になっており、また、地山の直上まで削平されていたため、確認面から床面までの比高差はわずかである。



第197図　072B・C号住居跡

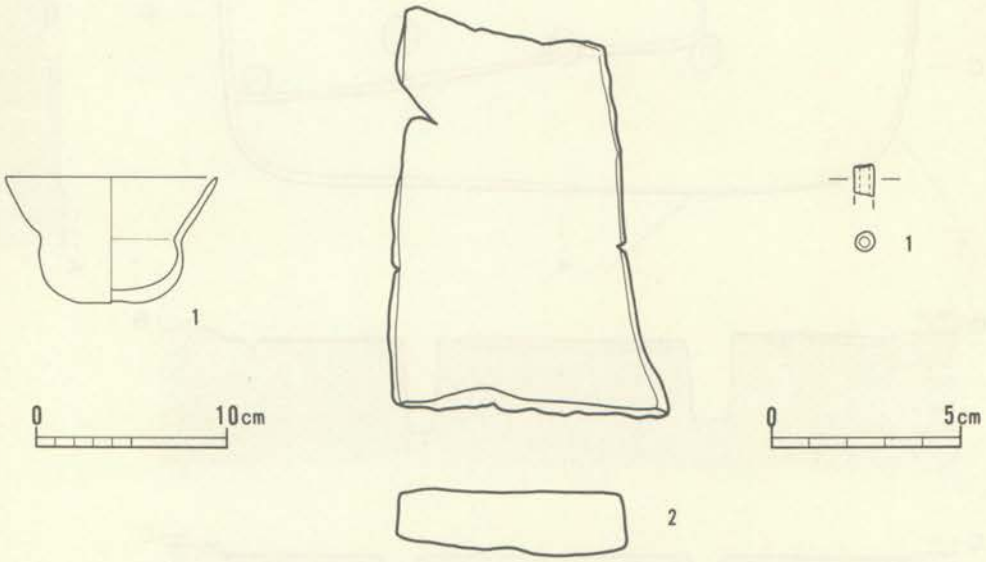
構造

本址は、南東から北西に向く軸長が5.20ｍをはかり、南西から北東に向く軸長が4.90～5.40ｍをはかり、やや不整の方形を呈する。炉跡は、住居中央よりやや西側に位置し、径42×104㎝、深さ4㎝の楕円形を呈し、焼土が多量に検出された。床は、黒褐色土を主にした貼床であるが、全体に軟らかい。ピットは6個検出されたが、本址と重複している072Ｃ号跡のピットも含んでいると考えられる。やや不整ではあるが方形を呈する本址は、整った形の4本柱にはならないと考えられ、本址に確実に伴うと言えるピットは南西の壁面に検出されたピットだけである。

荒掘り面は、北側のコーナー近くが、周囲より12～17㎝程低く、そのほかは比較的平坦である。また、本址東側には幅20㎝、深さ6㎝程の弧状を呈する溝が検出されたが、この溝はその形状からみて、072Ｃ号跡の東側のコーナーと考えられ、本址には伴わないと考えられる。

遺物の出土状況

本址から出土した遺物は、土器・石器であり、土器は約200片程であるが、器面の磨耗した細片がほとんどである。土器は、炉跡の東側から少々まとまって出土したのが目立つ程度である。



第198図　072Ｂ・Ｃ号住居跡出土遺物

072B号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坩	½	(11.0) 6.5	ミガキ（?）。	床面密着	器面剝落
2	砥石	一部欠損するが、長さ10.2cm、最大幅7.4cm、厚さ1.6cmをはかる。両面が使用面である。砂岩。床面直上。				

072C号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	管玉	一部欠損するが、現存長 0.8cm、径 0.5cmをはかる。滑石。床面密着。				

072C号住居跡（第197・198図）

概要

本址は、072 B号跡に半分以上切られており、床面が遺存していたのは北西及び南西の壁側だけである。また、072 B号跡の荒掘り面からは本址の東側のコーナーが検出された。

構造

本址は、長軸7.20m、短軸5.70mをはかり、長軸は北西を向く。全体の形状は隅丸長方形を呈する。炉跡は検出されなかった。床は、黒褐色土を主体にした貼床で、軟らかい。ピットは3個検出されたが、072 B号跡内から検出されたピットの中の数個が本址に伴うと考えられる。柱穴と考えられるのは、072 B号跡の壁の下に検出されたピットと072 B号跡の西側のコーナー付近に検出されたピットで、これらは径28～42cm、深さ84～88cmをはかる。この柱穴間の距離は、2.9 mであり、この柱穴に対応する柱穴は072 B号跡内の径30～34cm、深さ93～96cmのピットで、この4個の柱穴を結ぶ形状は2.9 × 3.2 mの整った方形を呈する。

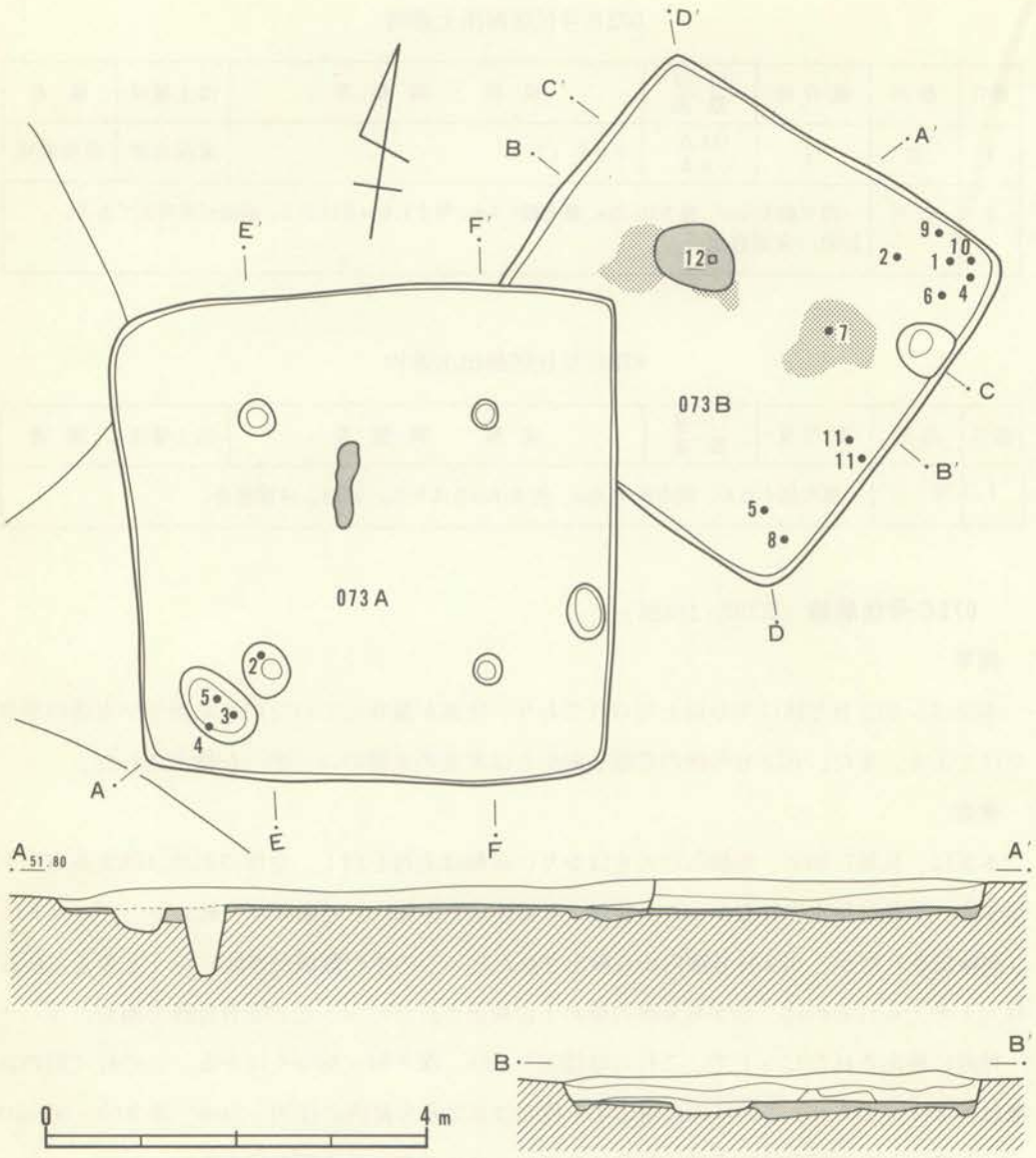
遺物の出土状況

本址から出土した遺物は、土器と管玉である。土器は約40片と少ないが、そのほとんどは北側のコーナー付近から床面に近い状態で出土したものである。甕1個体分と考えられ、口縁部から底部までの破片であるが、細片が多く、また、器面が磨耗していたこともあり復元することができなかった。この甕は口縁部と胴部にハケメ調整が施されている。

073A号住居跡（第199～201図）

概要

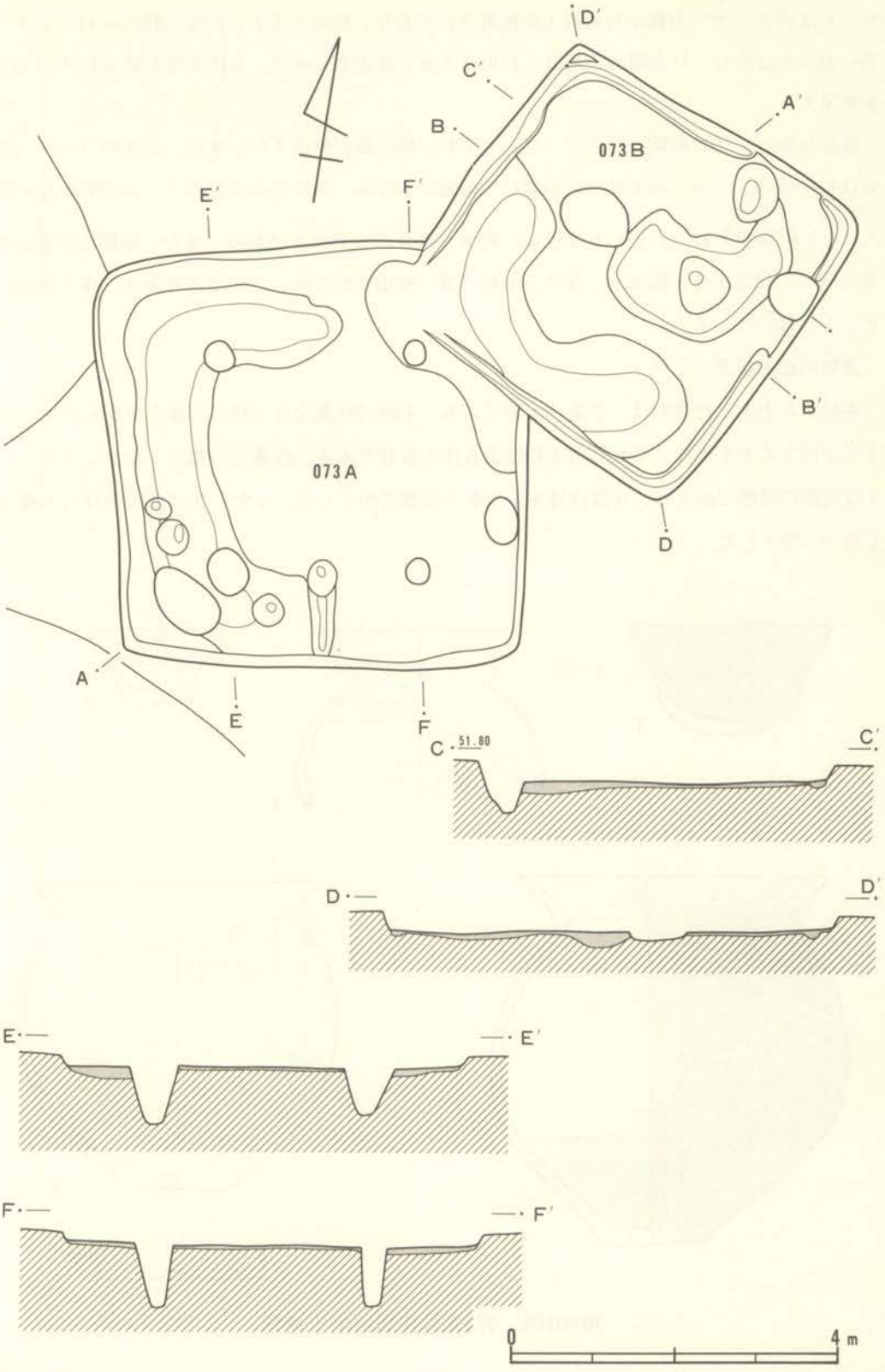
本址は、073 B・C号跡のコーナーを一部切って構築されており、074号跡とはわずか15cmの距離で接している。本址付近の地山は東から西に緩く傾斜している。



第199図　073A・B号住居跡(1)

構造

本址は、東西及び南北を向く軸長が約5.0ｍをはかり、比較的整った方形を呈する。炉跡は、中央よりやや北側に位置し、20×82cmの規模で南北に細長い形状を呈する。炉跡内には焼土が多量に検出された。床は、暗褐色土と砂質ロームの混合土による貼床であり、床面全体が堅い。ピットは6個検出され、西側の壁近くに検出されたピットは径38～46cmの楕円形であり、深さは12cmをはかる。南西のコーナー付近のピットは径54×94cm、深さ25cmの楕円形を呈し、北側の壁際から径10cm程の白色粘土が検出された。このピットは貯蔵穴と考えられる。このほかの



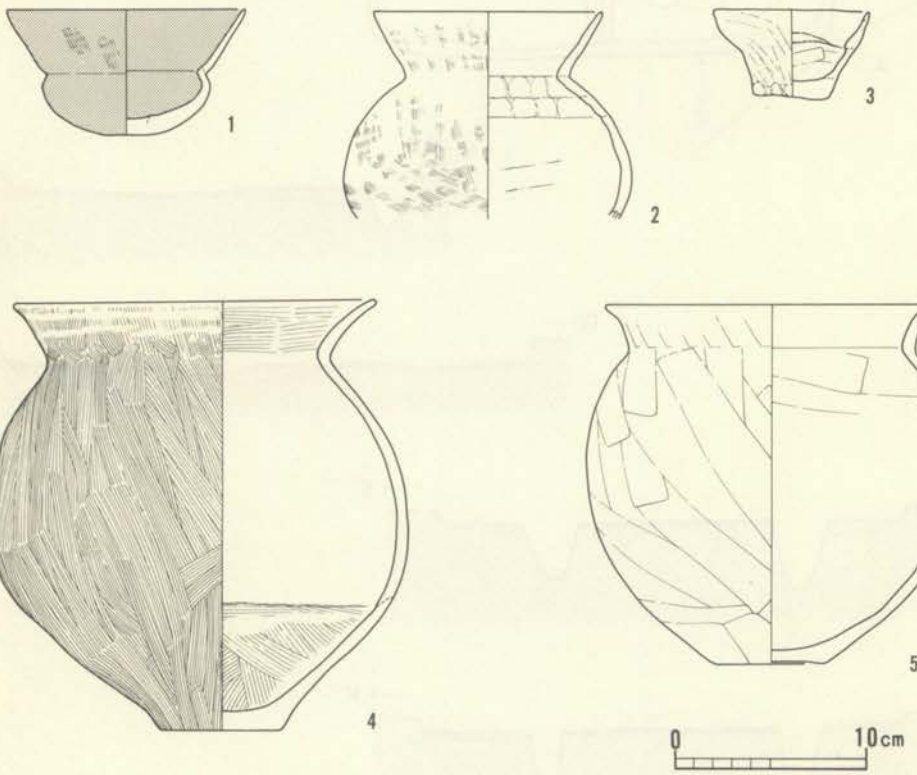
第200図　073A・B号住居跡(2)

ピットは各コーナーを結ぶ対角線上に配置されており、柱穴と考えられる。径26～44cm、深さ、55～81cmをはかり、柱穴間の距離は、長辺2.7m、短辺2.3mで、各柱穴間を結ぶ形状は長方形を呈する。

荒掘り面は、住居西側において「コ」の字状に低い面が検出され、また、北東のコーナー部分はやや低い。「コ」の字状の低い面は、幅90～100cm、深さ7cmをはかり、この中から3個のピットが検出された。ピットは径24～42cm　深さ20～45cmをはかる。また、南側の壁から中央に向って長さ1m、幅30cm、深さ3cm程の溝が検出されたが、この溝は径38cm、深さ23cmのピットに続いている。

遺物の出土状況

本址から出土した遺物は、少量の土器である。北西の貯蔵穴及び柱穴の覆土中から出土した土器がほとんどであり、これらの土器は遺存度も良好である。貯蔵穴の覆土上面から出土した3は完形の状態で出土し、4はほぼ完全な形の状態で出土した。また、2は北側の柱穴の覆土上面から出土した。



第201図　073A号住居跡出土遺物

073A号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坩	口縁部½ 胴部完形	(12.4) 6.5	口縁部ハケメ後ミガキ、胴部ミガキ。内面ナデ。赤彩。	覆土	
2	坩	口縁部¼ 胴部完形	(12.1) ——	輪積み。口縁部・胴部ハケメ後ミガキ。口縁部内面ナデ、胴上部内面指頭押捺。	ピット	
3	鉢	完形	8.2 4.7	口縁部ナデ、体部内外面ヘラケズリ。	ピット	
4	甕	ほぼ完形	18.8 21.9	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ。胴下部内面ハケメ。	ピット	
5	甕	口縁部⅓ 胴部½	(17.4) 18.4	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。	ピット	

073B号住居跡 (第199・200・202・203図)

概要

本址は、073A号跡の重複し、西側のコーナー部の床面が切られている。地山への掘り込みが深く、覆土の状態も良好である。

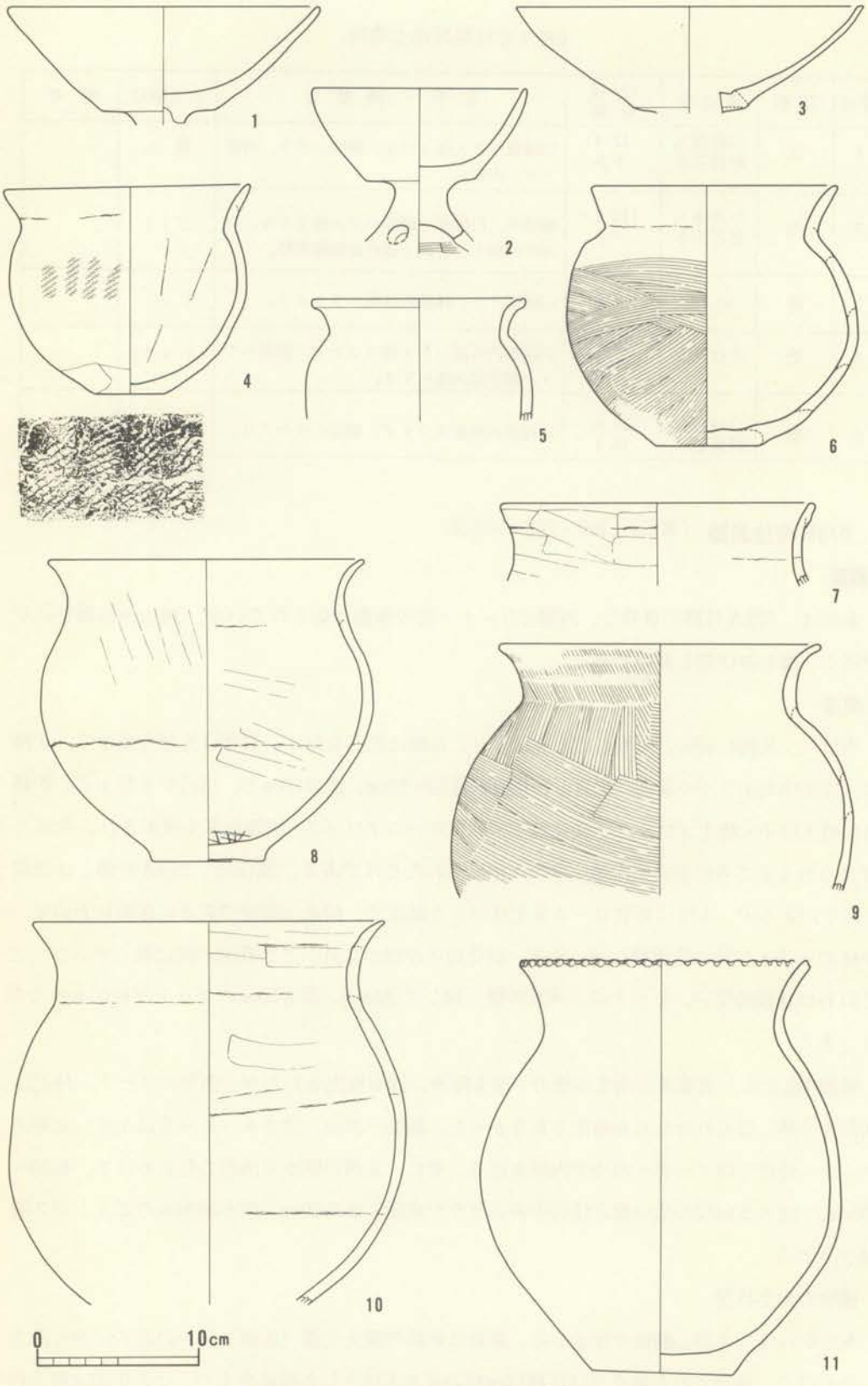
構造

本址は、長軸4.40m、短軸4.22mをはかり、長軸は北西を向く。形状は方形を呈する。炉跡は、住居中央よりやや北西に位置し、規模は径70×90cm、深さ10cmで、楕円形を呈する。炉跡内に焼土粒子・焼土ブロック・炭化粒子・砂質ロームブロック・灰等が多く検出され、火床と考えられるところにおいても焼土は少々検出されただけである。床面は、073A号跡とほぼ同じ高さにあるが、本址は砂質ロームを主体にした貼床で、相違は明瞭である。床面において、炉跡の周辺と炉跡の南東側に焼土粒子・炭化粒子が認められ、この範囲の床は軟らかいが、ここ以外は比較的堅い。ピットは、南東の壁に接して径58cm、深さ35cmのピットが検出されただけである。

荒掘り面では、北東及び南東の壁の一部を除き、溝が検出されたが、西側のコーナー付近は、073A号跡に切られたためか検出されなかった。幅25～30cm、深さ6～8cmをはかり、北側のコーナー付近ではコーナーのやや内側を巡る。更に、北西の壁から南西の壁にかけて、幅80～150cm、深さ5cm程の低い面と住居中央よりやや東側に径約60cm、深さ約30cmのピットが2個検出された。

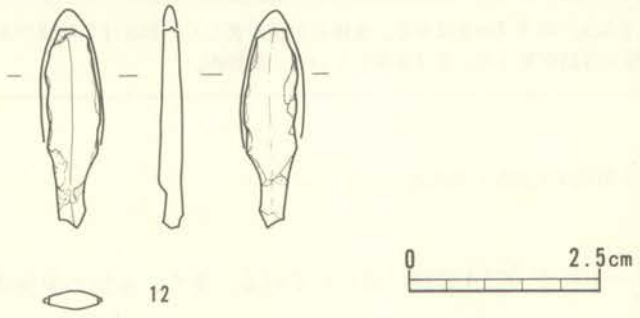
遺物の出土状況

本址からは、土器と銅鏃が出土した。銅鏃は炉跡の覆土上面（床面と同一の高さ）から出土したもので、検出された地点だけは径12cm程の灰を主体とした暗褐色土で、この周辺は焼土粒



第202図　073Ｂ号住居跡出土遺物(1)

子・炭化粒子・灰の混土層である。本址から出土した土器は、ほとんどが西側の壁近くであり、中央より東側からは土器片が数片出土したのみである。土器は完形あるいはほぼ完形の状態で出土し、特に、西側のコーナーでは6個出土したが、この中で1・4・9・10は固まって出土した。これらの土器は床面に密着の状態で出土したものはなく、直上あるいは床面から10cm程浮いている。



第203図　073B号住居跡出土遺物(2)

073B号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	高坏	坏部完形	19.0 ——	内外面ミガキ。	覆土	4・6・9・10と伴出
2	高坏	坏部完形	13.2 ——	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ、胴部内外面ミガキ、脚部ミガキ。脚部内外面ハケメ。3孔。	床面直上	
3	高坏	坏部½	(21.5) ——	口縁部ヨコナデ後ミガキ、胴部ミガキ。内面ナデ。	床面直上	
4	甕	完形	15.2 12.8	口縁部内外面ヨコナデ、胴上部ナデ（一部に無節Rの縄文を縦回転施文）、胴下部ヘラケズリ。	床面直上	1・6・9・10と伴出
5	甕	口縁部½ 胴部½	(13.2) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ナデ。	覆土	
6	甕	完形	15.0 16.0	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴上部ナデ、胴中部以下ハケメ。	床面直上	1・4・9・10と伴出
7	甕	口縁部½	(19.0) ——	輪積み。ヘラケズリ後ナデ（?）。	覆土	
8	甕	ほぼ完形	(19.2) 18.3	輪積み。口縁部内外面ナデ、胴上部ヘラケズリ後ナデ、胴中部以下ミガキ。胴部内面ヘラケズリ後ナデ。	床面直上	

9	甕	胴下部以外完形	20.0 ——	輪積み。口縁部ハケメ後ヨコナデ。胴部ハケメ。	床面直上	1・4・6・10と伴出
10	甕	底部以外完形	21.6 ——	輪積み。口縁部・胴部ナデ。内面ヘラケズリ後ナデ。	床面直上	1・4・6・9と伴出
11	甕	ほぼ完形	17.5 25.2	口唇部は指頭押捺により小波状を呈する。口縁・胴中部ナデ、胴下部ミガキ。	床面直上	
12	銅鏃	長さ 2.5cm、幅 0.7cmをはかる。全体に欠損が著しく、形状は不明瞭であるが、両丸式である。根には鏑が見られ、茎は完存している。炉跡内。				

073C号住居跡（第204・205・310図）

概要

本址は、東側のコーナーが 073A 号跡に切られている。また、本址の中央は用水路が北東から南西に走っており、未調査である。

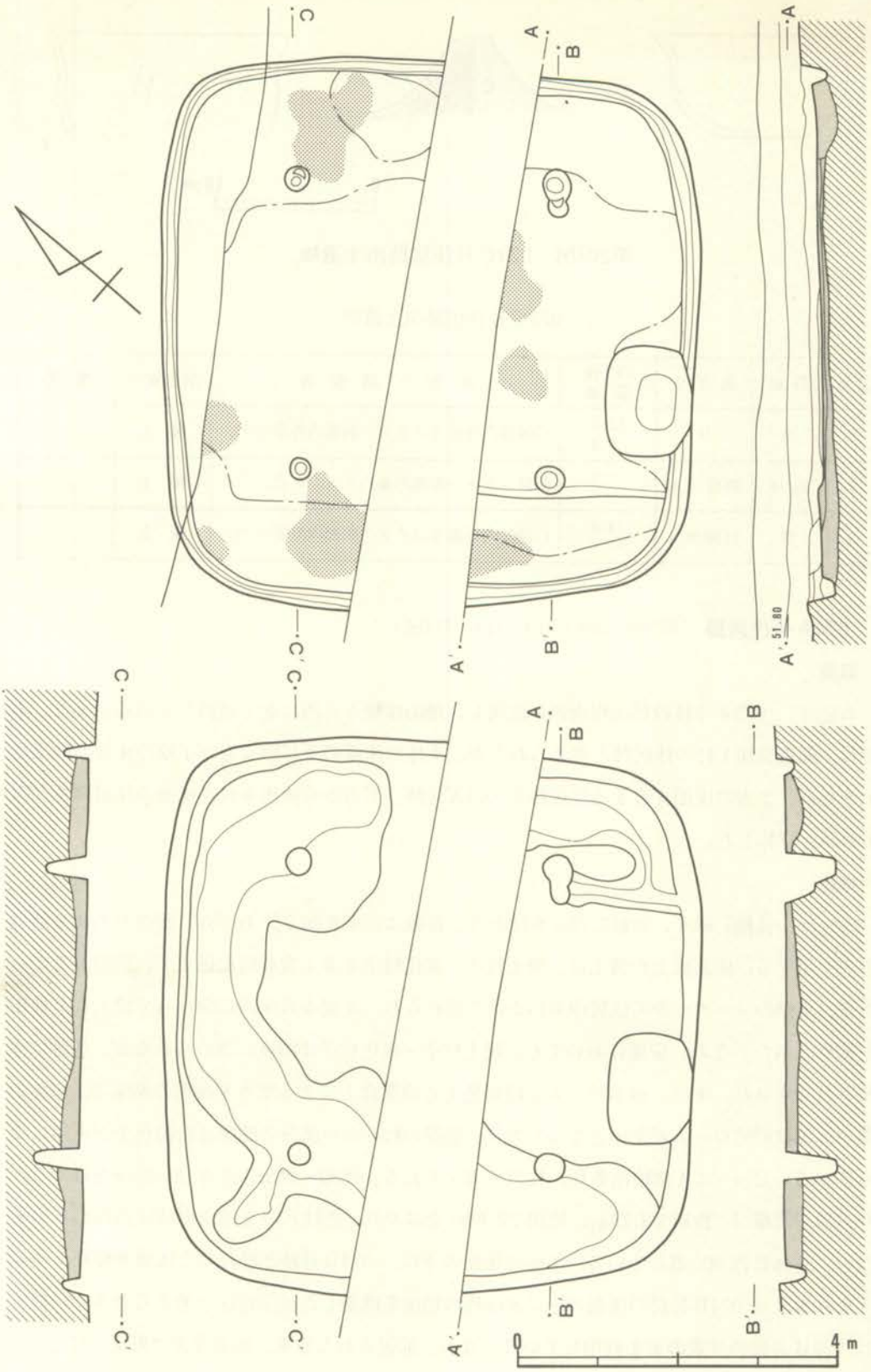
構造

本址は、長軸6.90m 、短軸6.70m をはかり、長軸は北東を向く。形状は隅丸方形を呈し、幅16～25cm、深さ12cm程の壁溝が全周する。床面には焼土が数か所検出されたが、炉跡は検出されなかった。床は、暗褐色土と砂質ロームの混合土による貼床で、混合の程度により３枚に分層できる。床面の中央部は砂質ロームが主体で堅く、この堅い床面の下は暗褐色土と砂質ロームがほぼ同量で軟らかく、壁側は暗褐色土を主体とし軟らかい。本址の床面には、南西の壁側に比高差６cmのベッド状遺構が検出された。このベッド状遺構の一部を含めた住居中央部分の床面が堅い。ピットは５個検出された。南西の壁に接しているピットは一辺85cm、深さ35cmの方形を呈しており、覆土には焼土粒子が認められ、貯蔵穴と考えられる。ほかの４個は径30～34cm、深さ51～62cmをはかり、柱穴と考えられる。柱穴間の距離は、各辺共 3.7m をはかり、各柱穴間を結ぶ形状は正方形を呈する。

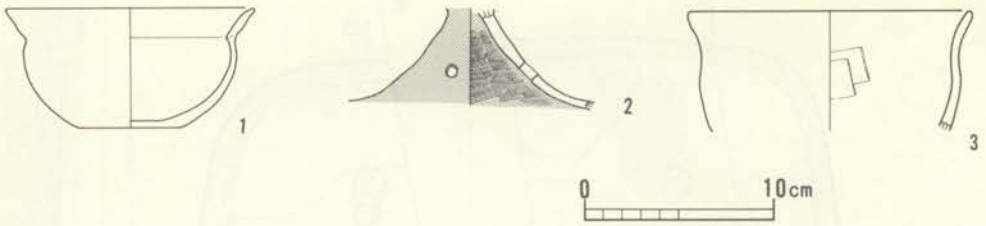
荒掘り面は住居中央が高く、南東及び北東の壁の一部を除いた周辺が低い。中央より西側の低い部分は深さ９～16cmで、東側のコーナー部分の低い面は深さ７cmをはかる。西側においては、低い部分と壁との間に中央部と同じ高さの面が残っている。

遺物の出土状況

本址からは、約 100片程の土器が出土した。土器は住居跡内全域から出土したが、細片ばかりで、ほとんど接合しなかった。



第204図　073C号住居跡



第205図　073C号住居跡出土遺物

073C号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坩	½	(13.0) 6.3	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	覆土	
2	高坏	脚部完形	—— ——	脚部ミガキ、脚部内面ハケメ。3孔。	覆土	
3	甕	口縁部⅕	(14.8) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	覆土	

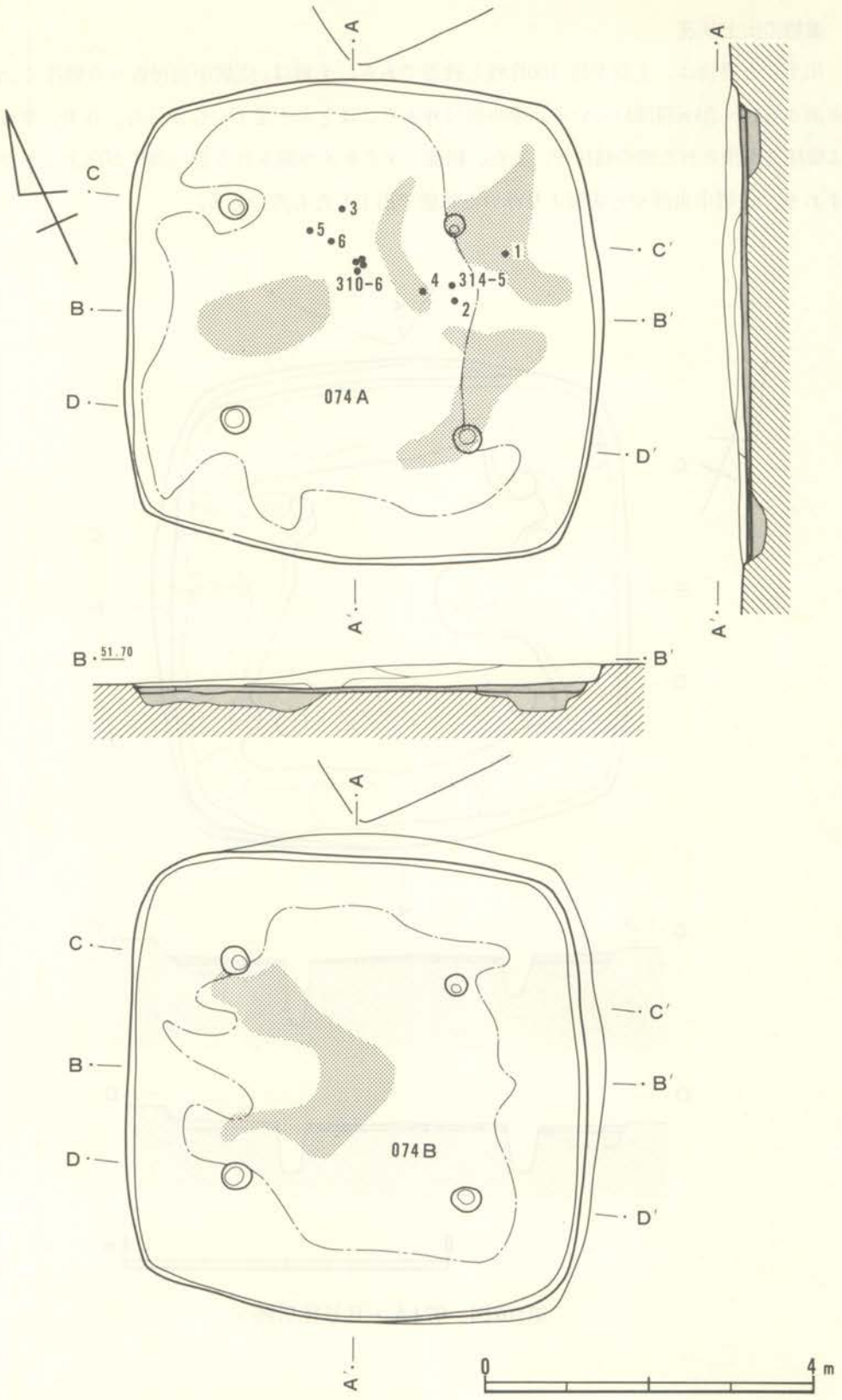
074A号住居跡（第206～208・310・313・314図）

概要

本址は、073A号跡の15cm程南側に位置し、地山は東から西に緩く傾斜している。また、本址は、調査当初1軒の住居跡と考えられたが、本址の床面の下に別なもう1枚の床面が検出されたため、上方の床面を有する住居跡を074A号跡、下方から検出された床面の住居跡を074B号跡と呼称した。

構造

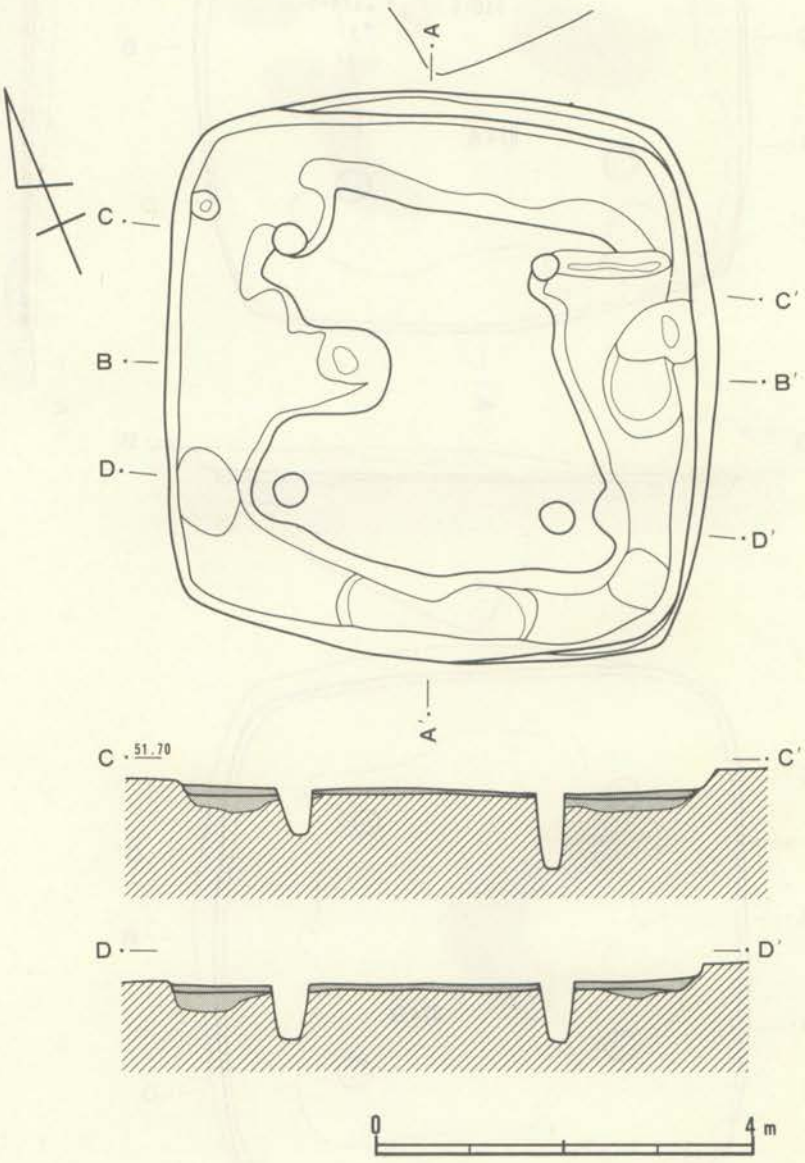
本址は、長軸5.88m、短軸5.75mをはかり、長軸は北東を向く。わずかに胴張りのする隅丸方形を呈する。床面直上の覆土は、焼土粒子・炭化粒子を多く含む暗褐色土で、図示しなかったが、東側のコーナーから住居中央にかけて認められ、北東から南西に向かって流入した様相が観察された。なお、床面においても、焼土粒子・炭化粒子は顕著に認められたが、炉跡は検出されなかった。床は、砂質ロームと暗褐色土との混合土による厚さ8cm程の貼床で、床面の堅い部分は砂質ロームが主体となっており、壁際の軟らかい部分の貼床は暗褐色土が主体になっている。ピットは4個検出され、柱穴と考えられる。径30～34cm、深さ48～80cmをはかる。柱穴間の距離は、長辺で2.75m、短辺で2.60mをはかり、各柱穴間を結ぶ形状は否んだ方形を呈し、全体に西側に寄っている。本址の床面の下に、074B号跡と呼称した床面が存在することから本址は074B号跡の床面の上に8cm程の貼床を構築した拡張住居と考えられるが、柱穴は074B号跡の位置のまま利用している。なお、拡張された北東、南東部分は貼床ではなく、地山を床面にしている。



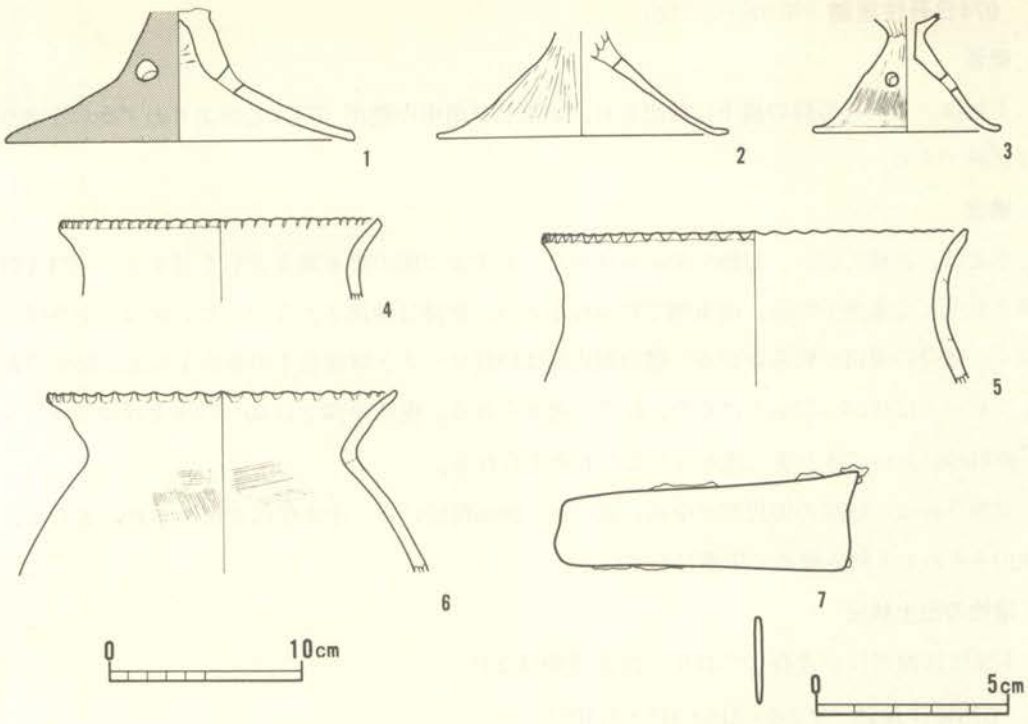
第206図　074A・B号住居跡(1)

遺物の出土状況

出土した遺物は、土器が約 100片程と鉄器である。土器は、住居中央付近から破片で出土し、床面から10～20cm程浮いている。中央部以外からはほとんど出土しなかった。なお、本址からは櫛描文が施された壺の破片が、また、胴部にタタキメが施された甕の破片が出土したが、いずれも、住居中央部から床面より浮いた状態で出土したものである。



第207図　074A・B号住居跡(2)



第208図　074A号住居跡出土遺物

074A号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	高坏	脚部½	—— ——	脚部ミガキ。内面ナデ。3孔。赤彩。	覆土	
2	高坏	脚部¼	—— ——	脚部ハケメ後ミガキ。内面ナデ。	覆土	
3	器台	脚部½	—— ——	脚部ハケメ後ミガキ。裾部内外面ヨコナデ。	覆土	
4	甕	口縁部⅕	(16.4) ——	口唇部はキザミにより小波状を呈する。口縁部内外面ナデ。	覆土	
5	甕	口縁部⅕	(20.9) ——	口唇部は指頭押捺により小波状を呈する。口縁部内外面ナデ。	覆土	
6	甕	¼	(18.0) ——	口唇部は指頭押捺により小波状を呈する。口縁部内外面ナデ。胴部ハケメ後ナデ。	覆土	
7	鉄製品	長さ 7.8cm、幅 2.4cm、厚さ 0.1cmをはかる。峰は直線的であり、直刃鎌と考えられる。基端部は直線的であるが、折り返しが見られないことから欠損している可能性が強い。刃部は薄く、内湾する。柄の木質は錆着していない。覆土。				

074B号住居跡（第206・207図）

概要

本址は、074A号跡の真下に検出され、北東及び南東の壁が074A号跡よりわずかに小さな住居跡である。

構造

本址は、長軸5.63m、短軸5.60mをはかり、わずかに胴の張る隅丸方形を呈する。074A号跡と比べて北東側で25cm、南東側で15cm程小さい。炉跡は検出されなかった。床は、中央部が堅く、壁際の周辺が軟らかいが、壁の周辺部は砂質ロームと暗褐色土の混合土による貼床である。ピットは径28～32cmをはかり、柱穴と考えられる。現状の深さは40～72cmをはかるが、本址使用時においては、更に浅かったことも考えられる。

荒掘り面は、壁際の周辺部が中央に比べ10～20cm程低いが、中央部は荒掘りされておらず、地山をそのまま踏み堅めて床面にしている。

遺物の出土状況

本址は床面だけが遺存しており、出土遺物はない。

075号住居跡（第209・210・310・314図）

概要

本址は、地山が東から西に傾斜する斜面上に位置する。本址の覆土は攪乱が多く、また、地山への掘り込みが浅いため、床面は一部しか検出できなかった。

構造

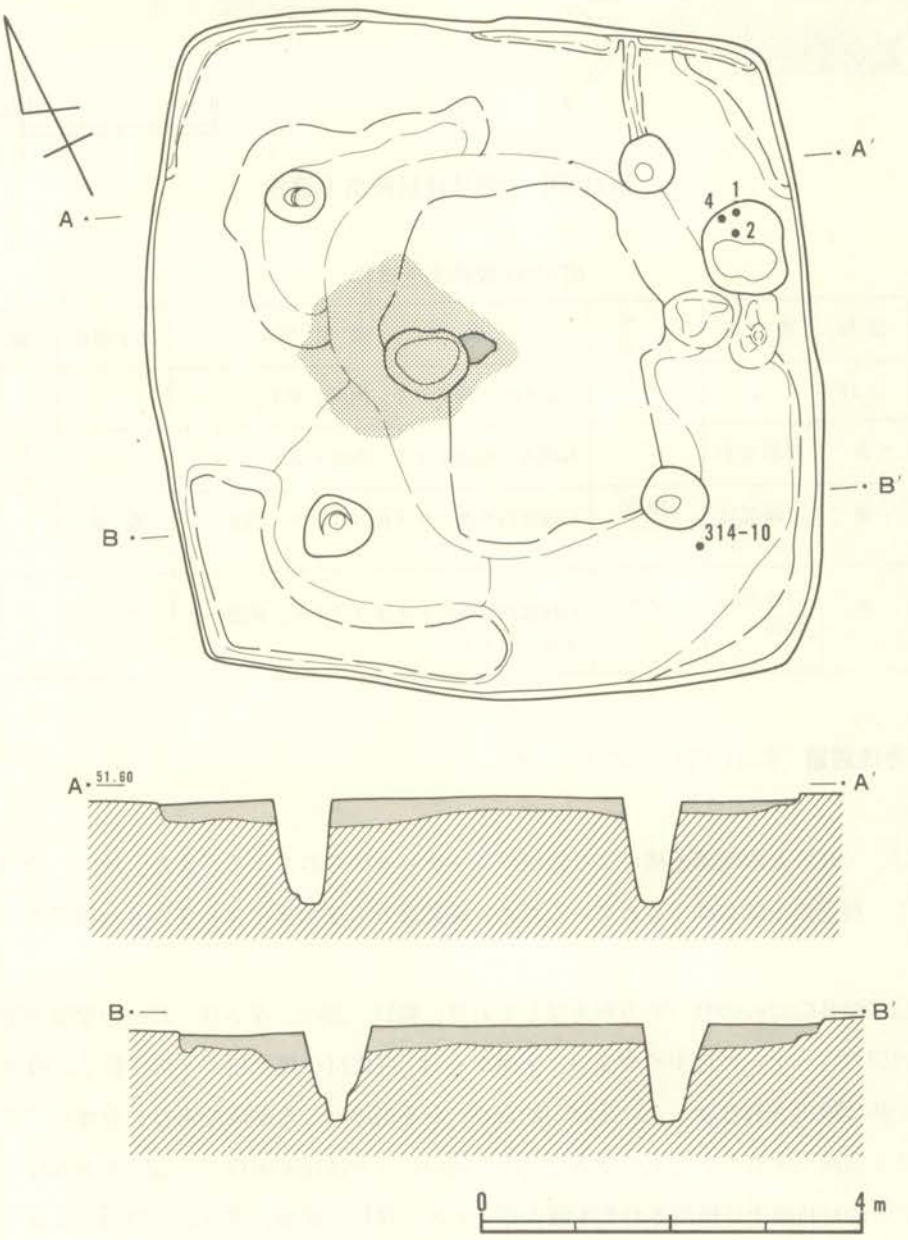
本址は、長軸7.08m、短軸7mをはかり、長軸は北東に向く。やや不整の方形を呈する。炉跡は、住居中央に位置し、径32×40cm、深さ8cmの楕円形を呈する。炉跡内には、多量の焼土が検出されたが、炉跡の北西寄りの径70cm、深さ20cmのピットにも焼土粒子・灰が多量に検出された。また、この炉跡とピットの周囲2m程の範囲は炭化粒子が多く検出された。床は、暗褐色土と砂質ロームによる貼床であるが、全体に軟らかい。ピットは5個検出され、南東の壁近くに検出されたピットは径90cm、深さ40cmの不整円形を呈し、貯蔵穴と考えられる。ほかの4個は60～65cm、深さ98～107cmをはかり、柱穴と考えられる。各柱穴間を結ぶ形状は一辺3.5mの整った方形を呈する。

荒掘り面は、住居中央と西側のコーナー付近が高く、ほかが低く、比高差は4～12cmをはかる。また、この荒掘り面において、幅20cm、深さ3～12cmの溝が北東の壁の一部と北側及び西側のコーナーに検出され、更に東側の柱穴に続く溝も検出された。

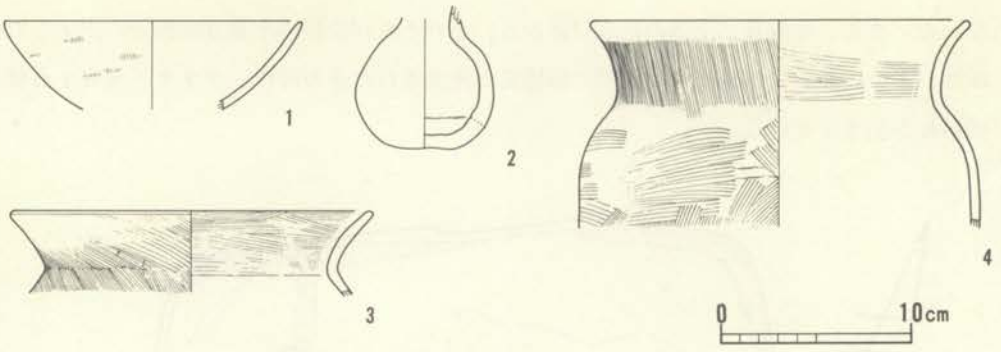
遺物の出土状況

本址は、覆土に攪乱が多かったこともあり、出土した遺物は少ない。貯蔵穴と考えられるピットの北側の壁から、数片の土器が出土したが、このピットの周囲からは、ほとんど出土しな

かった。また、北側及び南側の柱穴付近から、それぞれ10片程の土器が床面から出土したが、細片が多い。なお、本址からは胴部に櫛描文が施文された壺の破片、タタキメを有する甕の胴部破片も出土している。



第209図　075号住居跡



第210図　075号住居跡出土遺物

075号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	高坏	¼	(15.4) ——	坏部ハケメ後ミガキ。内面ミガキ。	ピット	
2	壺	胴部完形	—— ——	輪積み。胴部ミガキ。内面ナデ。	ピット	
3	甕	口縁部⅙	(18.5) ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ。胴部ハケメ。	覆土	
4	甕	口縁部⅒ 胴部⅓	(19.6) ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ。胴部ハケメ後一部ナデ。	ピット	

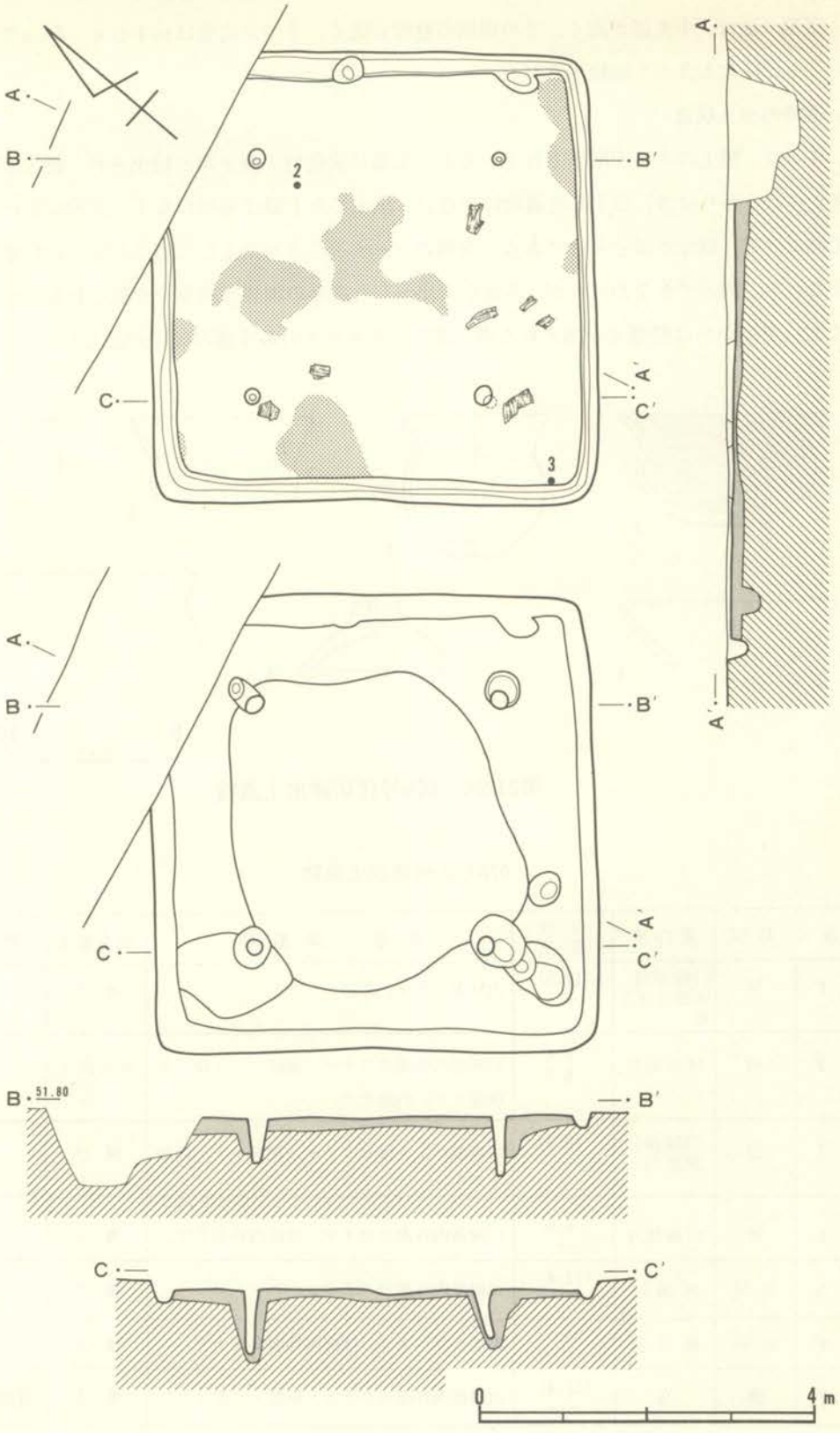
076号住居跡（第211・212・312・314図）

概要

本址は、081号方形周溝遺構により北側のコーナーを切られている。また、地山への掘り込みが浅く、覆土の上部が削平されていたため、確認面から床面まではわずか8cm程であった。

構造

本址は、軸長5.22mの整った方形を呈しており、幅17～26cm、深さ16～25cmの壁溝が巡る。壁溝は西側のコーナー付近がやや深い。床面からは、炭化材や焼土粒子・炭化粒子が検出されたが、炉跡は検出されなかった。床は、砂質ロームを主体にした貼床であり、全体にやや堅い。ピットは6個検出された。北東の壁溝付近の2個のピットは径30cm程で、深さも30cm程である。各コーナーの対角線上に検出された4個のピットは、径17～20cm、深さ51～74cmをはかり、柱穴と考えられる。この径20cm程の柱穴の覆土は周囲に比べ、非常に軟らかであったが、床面を剝がした荒掘り面においては、4個共径40cm前後のピットであった。これは、住居建築当初に径40cm程のピットを掘り、径20cm程の柱を埋め込んだ後に周囲を埋め戻したことがうかがえ、径20cm程の柱穴は柱の太さであると考えられる。

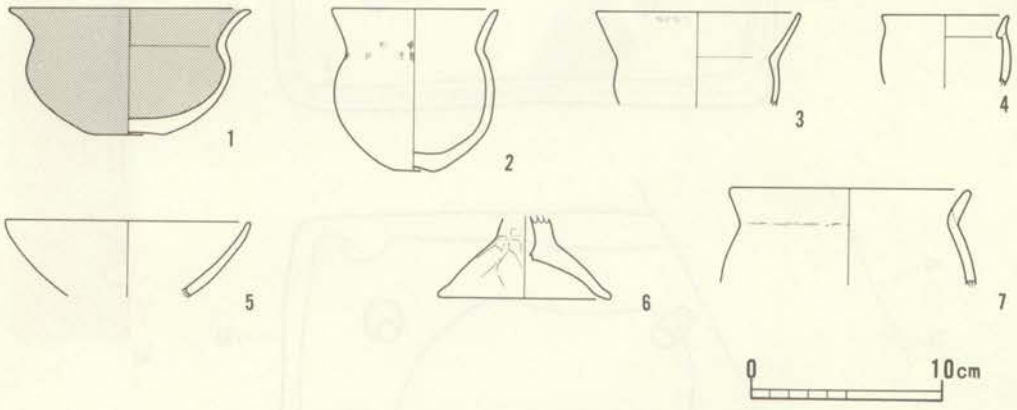


第211図　076号住居跡

荒掘り面は、中央部が高く、その周囲の壁際が低く、その比高差はわずか4～10cmである。ピットは柱穴も含め5個検出された。

遺物の出土状況

本址は、覆土の大半が削平されているが、床面に炭化材・焼土等が検出され、焼失家屋とも考えられるわりには、出土した遺物は少ない。出土した土器は完形はなく、完形に近いものも1個だけで、破片がほとんどである。南側のコーナーの3が出土した隣からは、白色粘土が検出された。図示できなかったが、本址から出土した高坏の脚部は胴がやや張らむものが多い。なお、本址からは櫛描文が施された壺の破片とタタキメのある甕の破片が出土した。



第212図　076号住居跡出土遺物

076号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坏	口縁部1/6 体部ほぼ完形	(12.5) 6.4	内外面ミガキ。赤彩。	覆土	
2	坩	ほぼ完形	8.6 8.2	口縁部内外面ヨコナデ、頸部ハケメ後ナデ、胴部ナデ。内面ナデ。	床面直上	
3	坩	口縁部1/3 胴部1/8	(10.7) ——	口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴部ナデ。内面ミガキ。	覆土	
4	埦	口縁部1/4	(6.6) ——	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ。	覆土	
5	高坏	坏部1/4	(12.6) ——	口縁部内外面ヨコナデ。	覆土	
6	高坏	脚部1/4	—— ——	脚部ヘラケズリ、裾部内外面ヨコナデ。	覆土	
7	甕	1/8	(12.4) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ミガキ（？）。	覆土	器面磨耗

077A号住居跡（第213～216・310・312～314図）

概要

本址は、 081方形周溝遺構に北東のコーナーから南西のコーナー部分を 1.7m 程の幅で切られているが、南東のコーナーはわずかに残存している。

構造

本址は、長軸5.50m 、短軸5.40m をはかり、長軸はほぼ北を向く。東側のコーナーが丸みが強く、隅丸方形を呈する。炉跡は検出されなかった。床は、砂質ロームを主体にした貼床で、全体に比較的堅い。ピットは4個検出された。北壁に近いピットは柱穴と考えられるが、中央寄りの2個は位置からみて 077B号跡に伴う可能性が強い。本址の2個の柱穴は、径35～38cm、深さ59～63cmで、これらの距離は 2.5m をはかる。

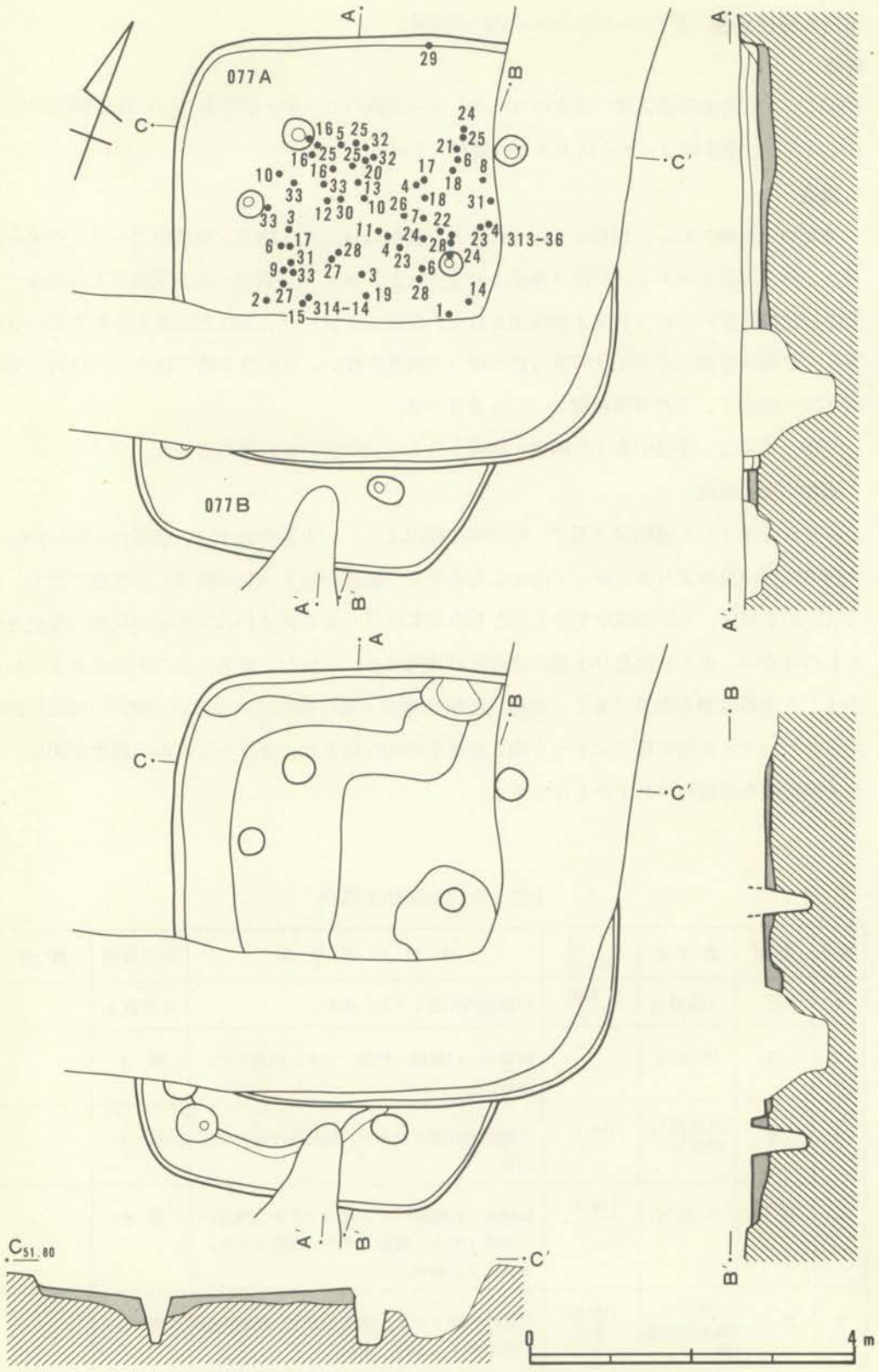
荒掘り面では、住居中央より西側に周囲より8～13cm低い面が検出された。

遺物の出土状況

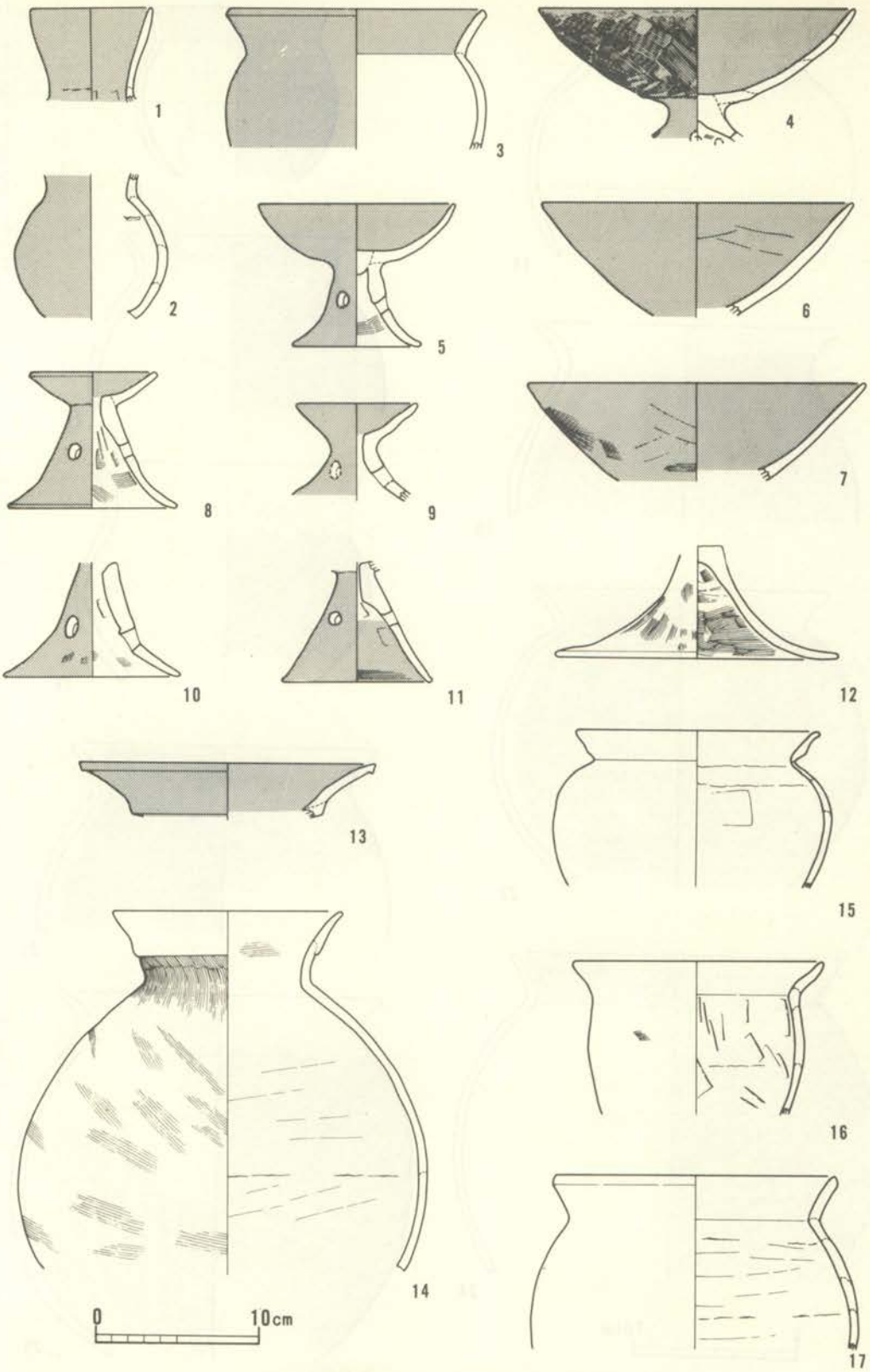
本址から出土した遺物は土器で、約 500片程出土した。土器の大半は、壁際から50～100 cm内側の住居中央部よりまとまって出土したもので、床面から5～10cm程浮いた状態で出土した。これらの土器は、大形の破片で出土したものが多いが、完形あるいは完形近い状態に復元されたものはない。出土状況及び土器の遺存度の状況より、一括して廃棄された土器と考えられる。出土した土器は甕が非常に多く、高坏、坩等小形の土器は甕に比べ少ない。甕の口縁部を観察すると、ハケメ調整の後ヨコナデを施した破片が60片程あり、ヨコナデのみの破片が30片、ハケメ調整のみの破片はわずか1片である。

077A号住居跡出土遺物

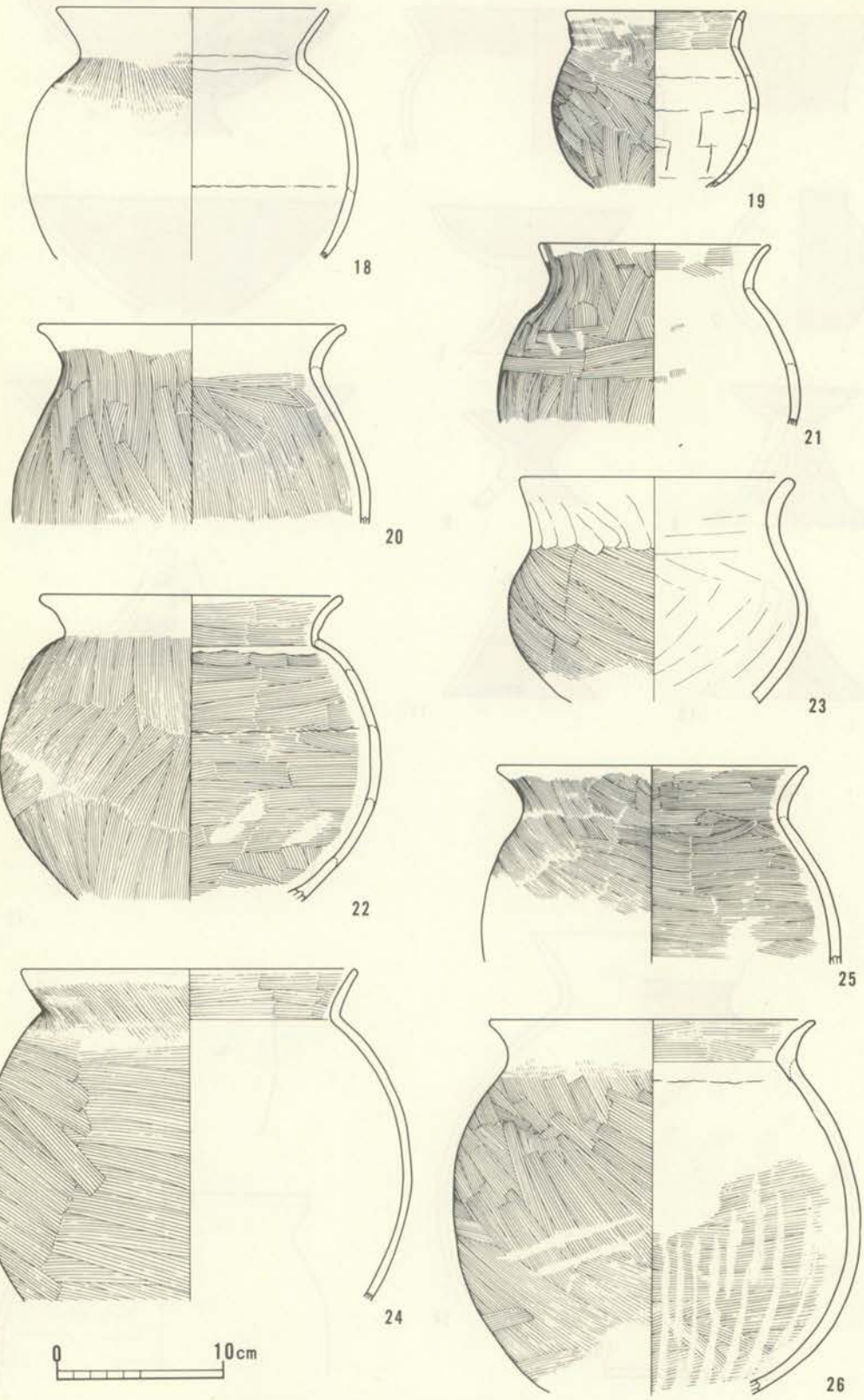
番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坩	口縁部1/5	(7.6) ——	口縁部内外面ミガキ。赤彩。	床面直上	
2	坩	胴部1/2	—— ——	輪積み。口縁部・胴部ミガキ。内面ナデ。赤彩。	覆土	
3	壺	口縁部1/4 胴部1/2	(16.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。赤彩。	覆土	
4	高坏	坏部1/4	(19.4) ——	輪積み。口縁部ハケメ後ヨコナデ、体部ハケメ後ミガキ、脚部ミガキ。内面ミガキ。5孔（?）。赤彩。	覆土	
5	高坏	坏部1/3 脚部ほぼ完形	(12.2) 8.7	坏部内外面ミガキ、脚部ミガキ。脚部内面一部ハケメ。3孔。赤彩。	覆土	



第213図　077A・B号住居跡

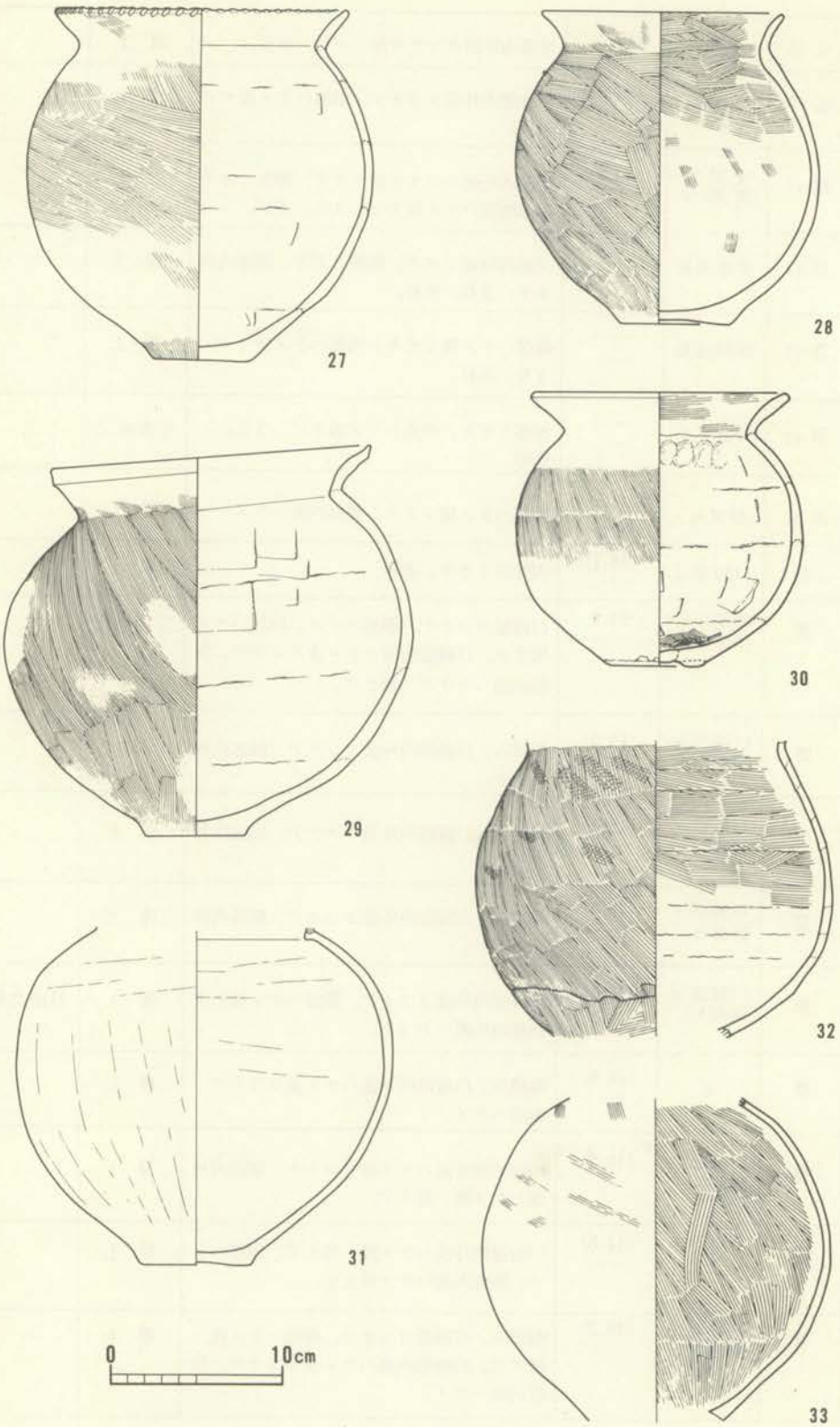


第214図　077A号住居跡出土遺物(1)



第215図　077A号住居跡出土遺物(2)

6	高 坏	坏 部 1/2	(19.2)	坏部内外面ヨコナデ後ミガキ。赤彩。	覆 土	
7	高 坏	坏 部 1/2	(20.8)	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。赤彩。	覆 土	
8	器 台	受 部 1/2 脚 部 3/4	(8.0) 8.2	受部内外面ヨコナデ後ミガキ、脚部ミガキ。脚部内面ハケメ後ナデ。3孔。赤彩。	覆 土	
9	器 台	受部完形	7.7	受部内外面ミガキ、脚部ミガキ。脚部内面ナデ。3孔。赤彩。	覆 土	
10	器 台	脚部完形		脚部ハケメ後ミガキ。内面ハケメ後ナデ。3孔。赤彩。	覆 土	
11	器 台	脚部完形		脚部ミガキ。内面ハケメ後ナデ。3孔。赤彩。	床面直上	
12	高 坏	脚部3/3		脚部ハケメ後ミガキ。脚部内面ハケメ。	覆 土	
13	壺	口縁部1/8	(18.2)	内外面ミガキ。赤彩。	覆 土	
14	壺	底部以外 ほぼ完形	13.8	口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ、胴部ハケメ後ナデ。口縁部内面ハケメ後ヨコナデ、胴部内面ヘラケズリ後ナデ。	床面直上	
15	甕	口縁部1/2 胴部完形	(15.0)	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	床面直上	
16	甕	口縁部1/3 胴部1/2	(15.4)	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	覆 土	
17	甕	口縁部1/3 胴部1/2	(17.2)	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	覆 土	
18	壺	口縁部1/3 胴部3/4	(16.2)	口縁部内外面ヨコナデ、頸部ハケメ後ナデ。胴部内外面ナデ（?）。	覆 土	器面磨耗
19	甕	1/2	(10.8)	輪積み。口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ。	覆 土	
20	甕	口縁部1/5 胴部1/4	(19.2)	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部内外面ハケメ後一部ナデ。	覆 土	
21	甕	1/2	(14.0)	口縁部内外面ハケメ後一部ナデ、胴部ハケメ。胴部内面ハケメ後ナデ。	覆 土	
22	甕	口縁部1/10 胴部1/2	(18.2)	輪積み、口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ後一部ナデ。口縁部内面ハケメ後ヨコナデ、胴部内面ハケメ。	覆 土	



第216図　077A号住居跡出土遺物(3)

23	甕	口縁部ほぼ完形 胴部3/4	16.1 ——	口縁部内外面ヨコナデ、頸部ハケメ後ヘラケズリ、胴中部ハケメ、胴下部ハケメ後ナデ。胴部内面ヘラケズリ後ナデ。	覆土	
24	甕	口縁部ほぼ完形 胴部3/4	19.8 ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ。	覆土	
25	甕	口縁部1/2 胴部1/3	(18.8) ——	口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴上部ハケメ、胴下部ハケメ後ナデ。内面ハケメ。	覆土	
26	甕	底部以外完形	19.6 ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後一部ナデ。胴下部内面ハケメ後一部ナデ。	床面直上	
27	甕	1/2	(17.0) 20.3	輪積み。口唇部に米粒状の刺突文。胴部ハケメ後一部ナデ。	覆土	
28	甕	2/3	13.9 18.2	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ。内面ハケメ後ナデ。	覆土	
29	甕	口縁部1/2 胴部ほぼ完形	(18.6) 22.3	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後一部ナデ。	覆土	
30	甕	1/2	(15.2) 15.6	輪積み。口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。口縁部内面ハケメ後ヨコナデ、胴下部内面ハケメ。	床面直上	
31	甕	胴部3/4	—— ——	胴部ヘラケズリ後ナデ。	覆土	
32	甕	胴部ほぼ完形	—— ——	輪積み。胴部ハケメ。内面ハケメ後ナデ。	覆土	
33	甕	胴部1/2	—— ——	胴部ハケメ後ナデ。内面ハケメ。	覆土	

077B号住居跡（第213図）

概要

本址は、077A号跡及び081号方形周溝遺構により大半が切られており、遺存していたのは南側の壁だけであるが、この遺存部分には攪乱が著しい。

構造

本址は、南東・南西部のコーナーが遺存しているだけであるため、規模・形状は不明瞭である。077A号跡の床面下から検出されたピットが本址に伴う柱穴と考えると、本址は約4.6×4.9m程の隅丸方形を呈し、長軸はほぼ北を向く。炉跡は検出されなかった。床は、暗褐色土を主体にした貼床で、軟らかい。本址から検出されたピットは2個であり、南西側のピットは半分しか遺存していない。径30～40cm、深さ63～65cmをはかり、柱穴と考えられる。077A号跡から検出されたピットを含めると、柱穴間の距離は、長辺で3.0 m、短辺で2.5 mをはかり、

各柱穴間を結ぶ形状は歪んだ方形を呈し、更に住居跡の形状と比べても、全体に西側に寄りすぎている。

荒掘り面は南側において、柱穴と壁際の間が中央に比べわずかではあるが低い。また、南西の柱穴の南側から径46cm、深さ66cmのピットが検出された。

遺物の出土状況

本址からは、土器が約30片程出土したのみである。細片が多く、実測できる土器はなかった。甕の胴部破片がほとんどで、ハケメ調整が施されている。

078号住居跡（第217・218図）

概要

本址は、081号方形周溝遺構に中央を切られ、東側と西側とに分断されている。地山は東から西に緩く傾斜している。

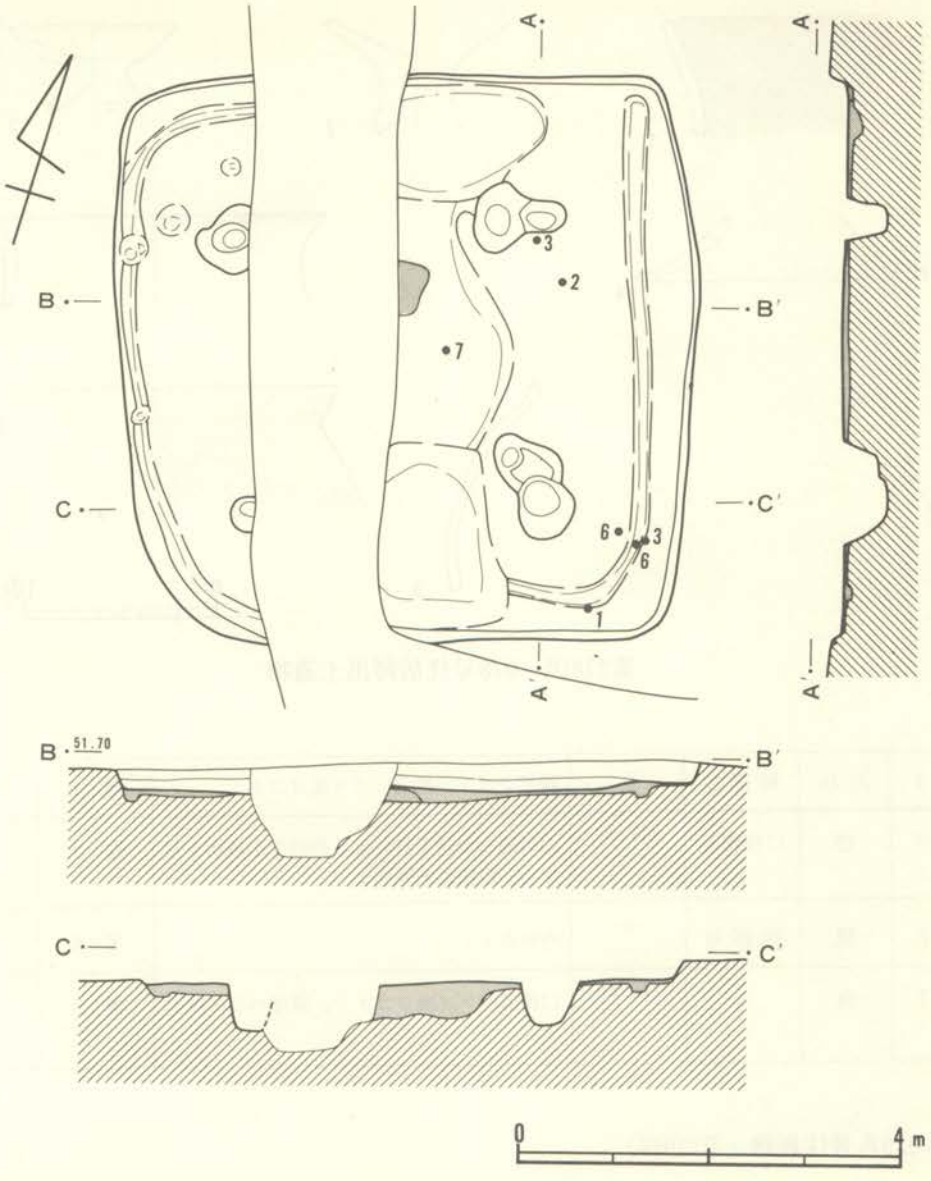
構造

本址は、長軸5.93m、短軸5.81mをはかり、短軸が北西を向く。北西のコーナーだけがやや丸みが強いが、全体としては方形を呈する。炉跡は、住居中央よりやや北西寄りに位置し、081号方形周溝遺構に西側を切られている。径55cm程で、焼土が多量に検出された。床は、暗褐色土を主体にした貼床で、全体に軟らかい。ピットは4個検出され、柱穴と考えられる。北東及び南東の柱穴は2個のピットが重なった瓢形をしているが、北西及び南西の柱穴は半分だけが遺存しているにすぎない。径36～60cm、深さ41～74cmをはかる。北東及び南東の柱穴はそれぞれ外側のピットと考えられる。柱穴間の距離は、長辺で3.2m、短辺で2.8mをはかり、各柱穴間を結ぶ形状は長方形を呈する。

荒掘り面においては溝とピットが検出された。住居跡の東側及び南側の溝は壁から34～64cm程内側を巡り、幅20cm、深さ6～8cmをはかる。南西のコーナーから北西のコーナー付近の溝は壁に接しているが、北側では壁から25cm程離れた内側を巡る。西側の溝の中に検出されたピットは径18～28cm、深さ25～61cmをはかり、このほかの2個のピットは径20～30cm、深さ10～22cmをはかる。なお、本址の中央部の大形のピットは深さ20～40cmをはかり、本址は住居中央部が周囲と比べ低い。

遺物の出土状況

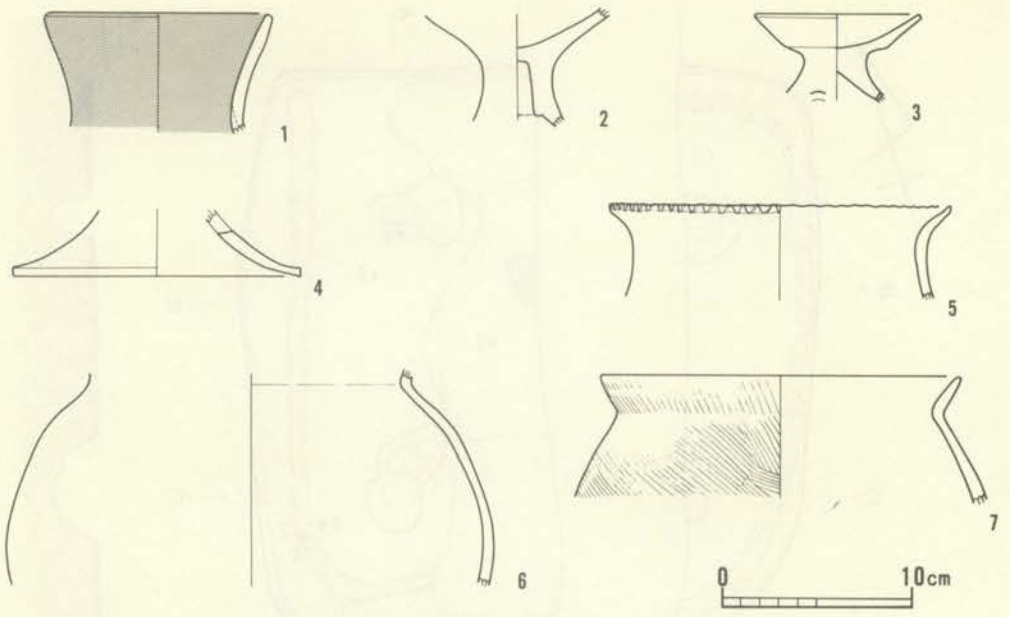
本址から出土した遺物は、土器が約100片程である。床面近くから出土した土器は少なく、大半が覆土中からの出土である。完形あるいは完形に近い土器は少なく、細片が多い。また、土器は、081号遺構の西側からはほとんど出土せず、東側からの出土がほとんどである。甕の口縁部破片をみると、口唇部に指頭、あるいはキザミのある土器が8片程、平縁の破片は30片程検出された。



第217図　078号住居跡

078号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坩	口縁部1/4	(11.4) ——	内外面ミガキ。	覆土	
2	高坏	脚部ほぼ完形	—— ——	内外面ミガキ。	覆土	
3	高坏	坏部2/3 脚部ほぼ完形	8.6 4.1	受部内外面・脚部内外面ナデ。3孔。	覆土	



第218図　078号住居跡出土遺物

4	高 坏	脚 部 1/6	——	脚部ミガキ、裾部ミガキ後ヨコナデ。	覆　土	
5	甕	口縁部1/6	(17.8)	口唇部ヘラ状工具による押捺で小波状を呈する。口縁部内外面ナデ。	覆　土	
6	甕	胴 部 2/3	——	内外面ナデ。	覆　土	
7	甕	1/6	(18.8)	口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	覆　土	

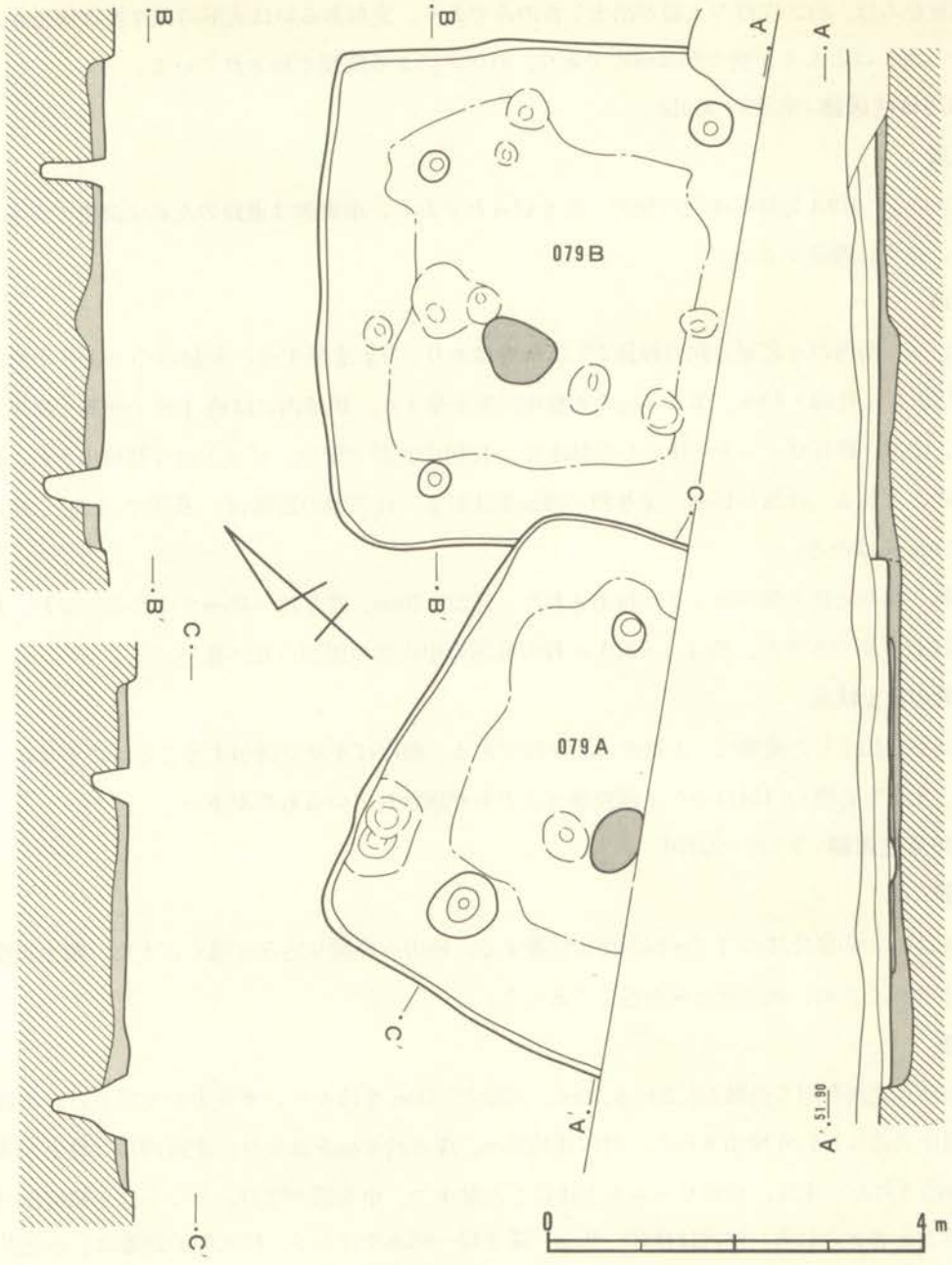
079A号住居跡（第219図）

概要

本址は、079B号跡の壁の一部を切っている。地山は東から西に緩く傾斜している。本址は覆土に攪乱が多く、また、地山への掘り込みが浅いため、確認面がほぼ床面であった。なお、南側は道路のため未調査である。

構造

本址は北側の半分程しか調査できなかったため、詳細な規模は不明であるが、東西の軸長は約 4.5m をはかり、やや胴張りのする方形を呈すると考えられる。炉跡は完全には調査できなかったが、中央よりやや西側に位置すると考えられ、径47×72cm、深さ7cmの楕円形を呈する。床は、厚さ14cm程の貼床であるが、住居中央部においては貼床の上部は砂質ロームを主体にした堅い床面であり、壁際及び中央の下部は暗褐色土を主体にしており、軟らかい。ピットは、



第219図　079A・B号住居跡

柱穴と考えられる2個が検出され、径32～61cm、深さ40～75cmで、この間の距離は 3.3m をはかる。

荒掘り面からは2個のピットが検出された。炉跡の北側のピットは径45cm、深さ32cm、北壁に接して検出されたピットは径65×105 cm、深さ33cmの楕円形を呈する。

遺物の出土状況

本址からは、約20片程の土器が出土したのみであり、完形あるいは大形の破片等は検出されなかった。ほとんどが甕の胴部破片であり、ハケメによる調整が施されている。

079B住居跡（第219・310図）

概要

本址は、 079A号跡に南西の壁の一部を切られており、南東側は道路のため未調査である。なお、覆土は攪乱が多い。

構造

本址は、南西から北東方向の軸長が5.37m をはかり、方形を呈する。炉跡は中央よりやや西側に位置し、径62×80cm、深さ8cmの不整楕円形を呈する。炉跡内には焼土粒子が多く検出された。床は、砂質ロームを主体にした貼床で、住居中央部が堅い。ピットは3個検出され、柱穴と考えられる。径28～45cm、深さ39～69cmをはかる。柱穴間の距離は、長辺で 3.3m 、短辺で 3.0m をはかる。

荒掘り面からは7個のピットが検出された。径22～70cm、深さ12～48cmをはかる。なお、比高差はわずかであるが、約 1.1×2.0 m程の範囲の中央部が周囲に比べ低い。

遺物の出土状況

本址から出土した遺物は、土器が 130片程である。細片ばかりで図示することはできなかったが、出土した甕の口縁はハケメ調整後ヨコナデが施されているものが多い。

080号住居跡（第220・221図）

概要

本址は、 069B号跡の 1.7m 程西側に位置する。地山への掘り込みが浅く、また、覆土に攪乱が多かったため、確認面は床面近くであった。

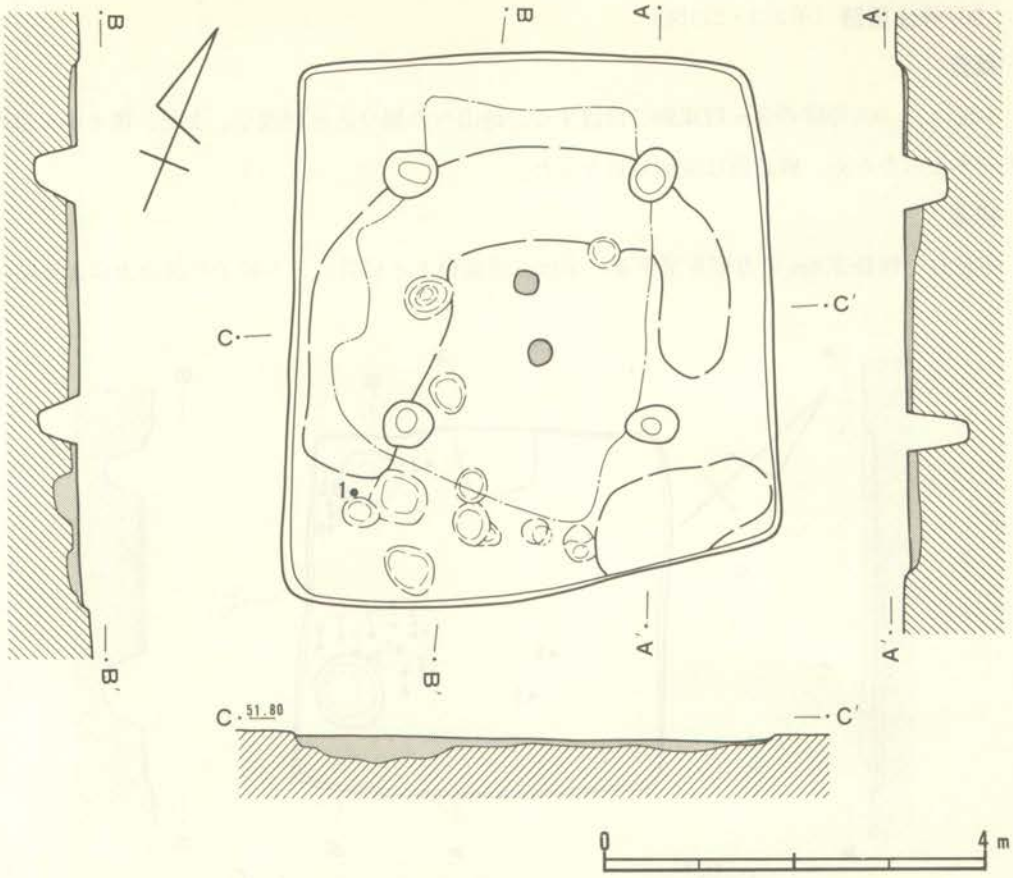
構造

本址は、北西を向く長軸が5.20～5.70m 、短軸が5.00m をはかり、不整方形を呈する。炉跡は住居中央部に2か所検出された。共に径約25cm、深さ約8cmをはかり、炉跡内には焼土が多量に検出された。床は、砂質ロームを主体にした貼床で、中央部が堅い。ピットは4個検出され、柱穴と考えられる。柱穴は径40～46cm、深さ42～66cmをはかる。柱穴間の距離は、各辺共に約2.6m をはかり、各柱穴間を結ぶ形状は正方形を呈する。

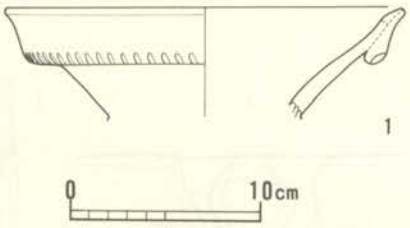
荒掘り面は、南東のコーナー付近と住居中央よりやや北側の位置の「コ」の字形を呈する範囲が10～17cm低い。また、この荒掘面り面からは、ピットが10個検出された。径25～55cm、深さ7～46cmをはかり、南東の壁際に集中している。

遺物の出土状況

本址は、覆土の大半が失なわれていたため、出土した土器は床面に近いものであるが、量は少なく、また、細片ばかりである。



第220図　080号住居跡



第221図　080号住居跡出土遺物

080号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	壺	口縁部1/6	(20.6) ——	口縁部ヨコナデ、口縁下端部はヘラ状工具による刺突。頸部ナデ。内面ミガキ。	床面直上	

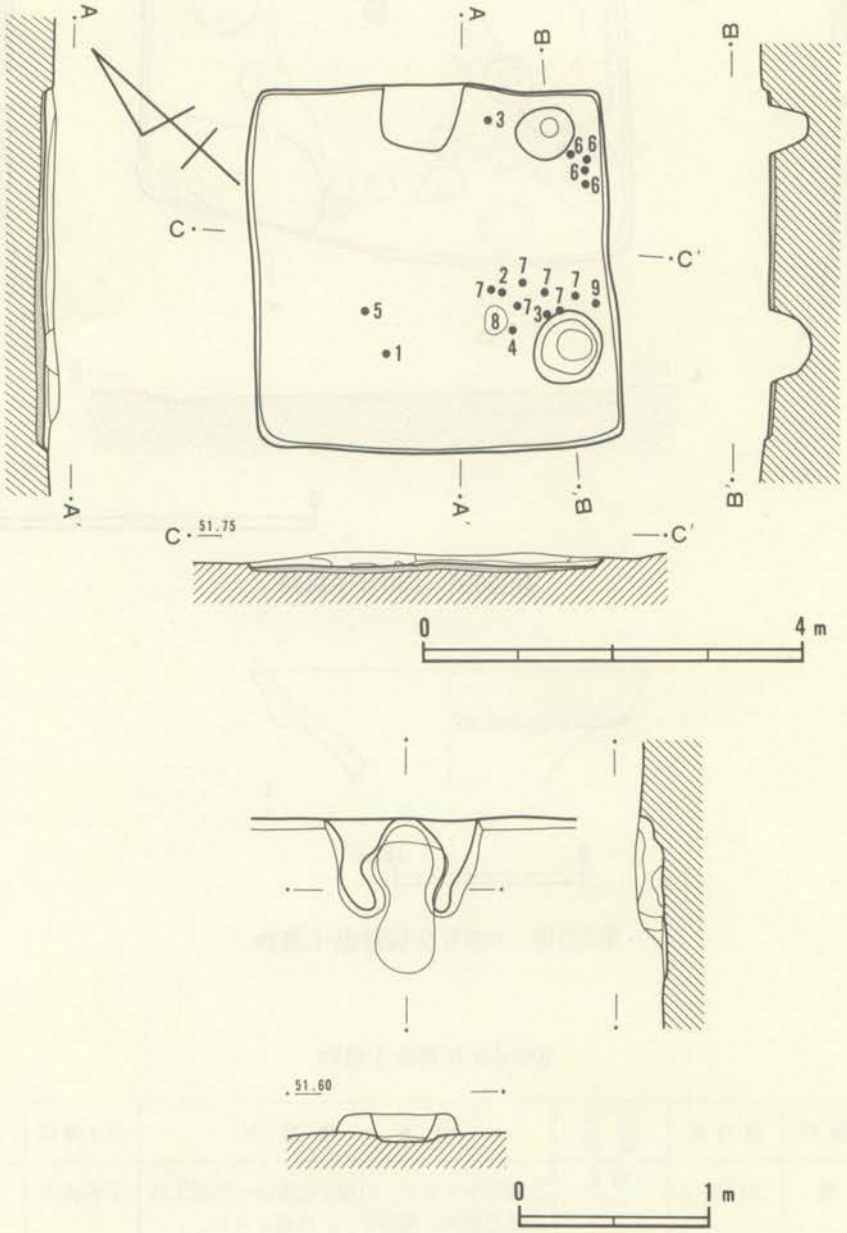
007号住居跡（第222・223図）

概要

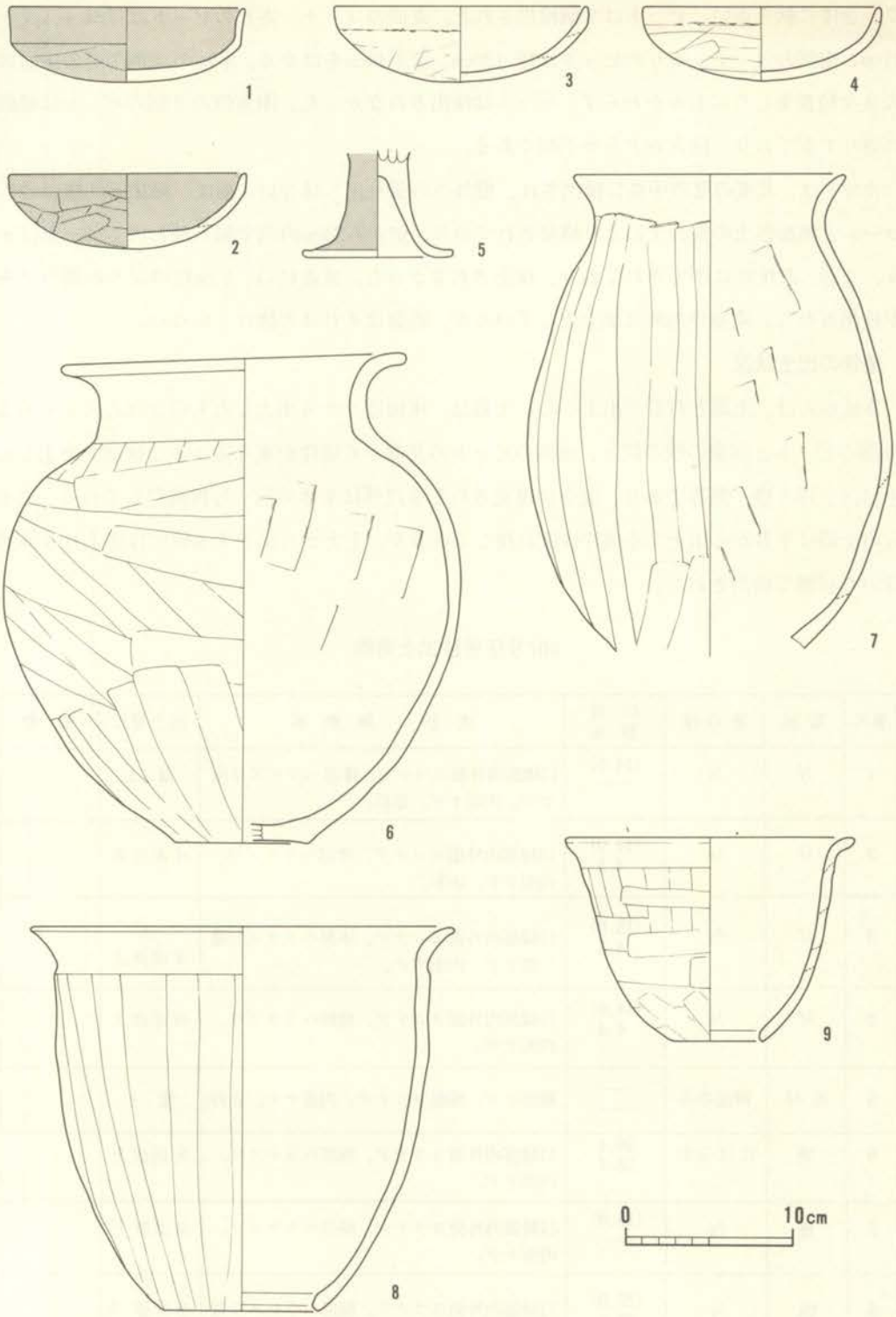
本址は、 009号跡の３ｍ程東側に位置する。地山への掘り込みが浅く、また、覆土中には撹乱が多かったため、確認面は床面に近かった。

構造

本址は、軸長3.8m の方形を呈する。床は、黒褐色土と砂質ローム粒子の混合土による貼床



第222図　007号住居跡及びカマド



第223図　007号住居跡出土遺物

で、全体に軟らかい。ピットは2個検出された。東側のコーナー寄りのピットは径64cm、深さ41cm、南側のコーナー寄りのピットは径 120cm、深さ44cmをはかる。本址の北西部分の床面は入念な精査をしたにもかかわらず、ピットは検出されなかった。南東側の2個のピットは壁際に寄りすぎており、柱穴かどうか不明である。

カマドは、北東の壁の中央に検出され、壁外への張り出しはない。袖は、貼床と同様に砂質ロームと黒褐色土の混合土により構築されており、壁から24cm内側で幅が最も広く30cmをはかる。なお、天井部は削平されており、検出されなかった。底面には、6cm程の深さの掘り込みが検出された。両袖の内側は焼土化していたが、底面はそれほど焼けていない。

遺物の出土状況

本址からは、土器と石器が出土した。土器は、床面近くから出土したものがほとんどである。西側のピットと南東の壁の間と、南側のピットの北側から破片が重なるような状態で出土した。土器は、坏・甕・甑等であり、完全に復元された6以外は全体の⅔～½程遺存している。これらの土器は下方から出土する破片は床に接しているが、上方から出土する破片は床より6cm程浮いた状態で検出された。

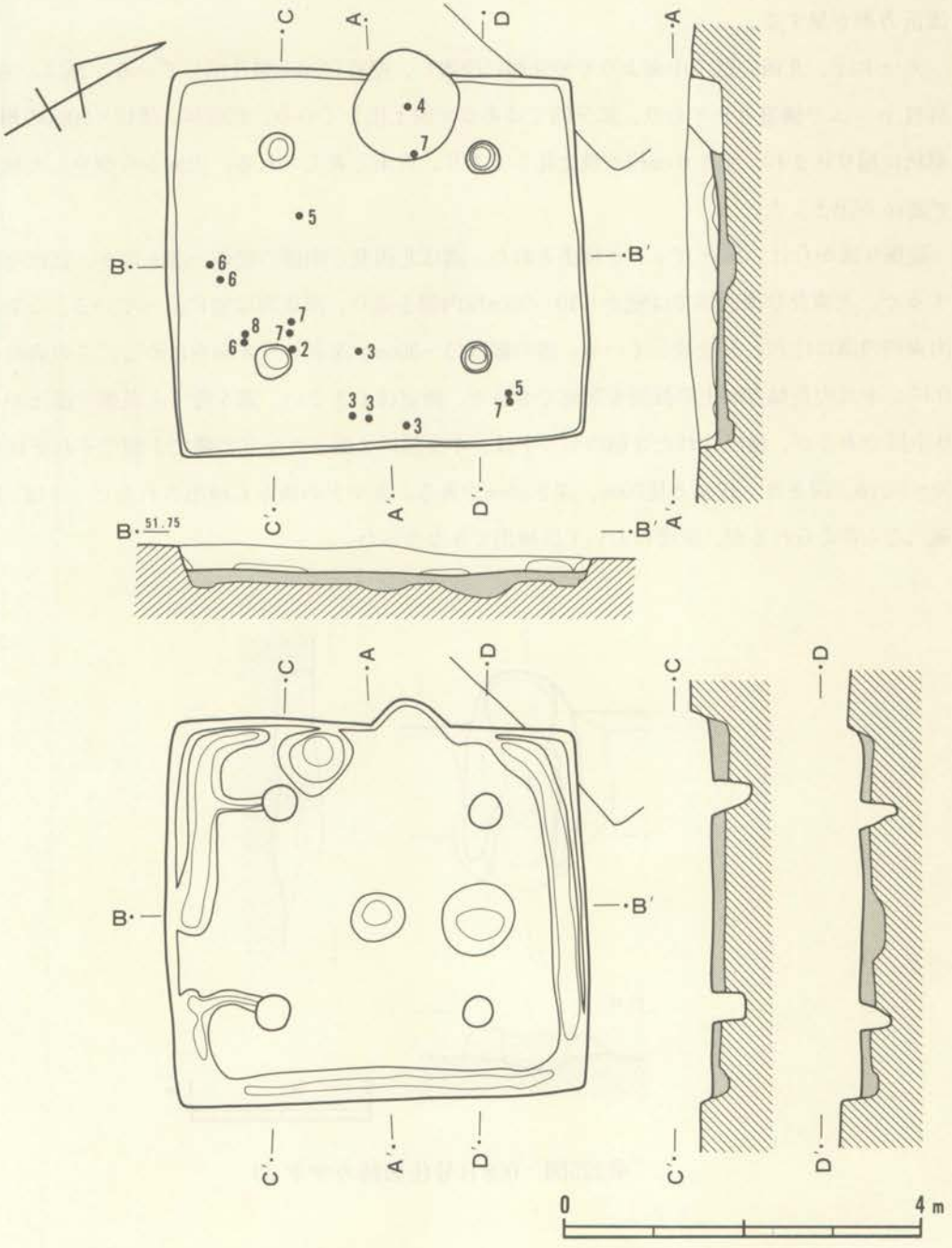
007号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坏	¼	(14.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。赤彩。	覆土	
2	坏	½	(14.0) 4.5	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面ナデ。赤彩。	床面密着	
3	坏	⅔	(15.0) 4.5	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ後一部ナデ。内面ナデ。	床面直上	
4	坏	½	(14.0) 4.4	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面直上	
5	高坏	脚部のみ	—— ——	脚部ナデ、裾部ヨコナデ。内面ナデ。赤彩。	覆土	
6	甕	ほぼ完形	20.4 28.7	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面直上	
7	甕	⅓	(16.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面直上	
8	甑	½	(25.0) 22.5	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後一部ナデ。内面ナデ。	床面直上	
9	甑	⅔	(17.0) 11.9	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面密着	

008B号住居跡（第224～226図）

概要

本址は、008A号跡の南壁の一部を切って構築されている。本址は、地山への掘り込みも比較的深く、住居跡の遺存は良好である。



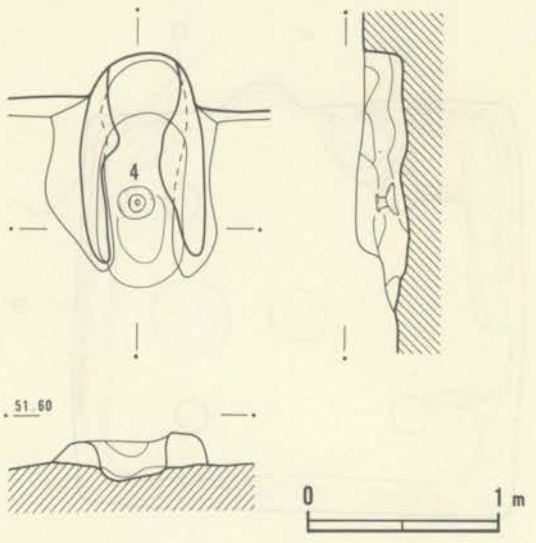
第224図　008B号住居跡(1)

構造

本址は、長軸4.68m、短軸4.13mをはかり、長軸は北東を向く。形状は整った長方形を呈する。床は、砂質ロームの小ブロックを主体にした貼床で、全体に比較的堅い。ピットは、各コーナーの対角線上に規則的に4個が配置されており、柱穴と考えられる。径32～38cm、深さ36～46cmで、柱穴間の距離は、長辺で2.3m、短辺で2.2mをはかり、各柱穴間を結ぶ形状はほぼ正方形を呈する。

カマドは、北西の壁の中央よりやや北側に位置し、壁外に26cm張り出している。袖は、主に砂質ロームで構築されており、部分的ではあるが焼土化している。底面は、径45×90cmの楕円形状に掘り込まれ、厚さ6cm程が焼土化しており、火床と考えられる。火床から倒立した状態で高坏が出土した。

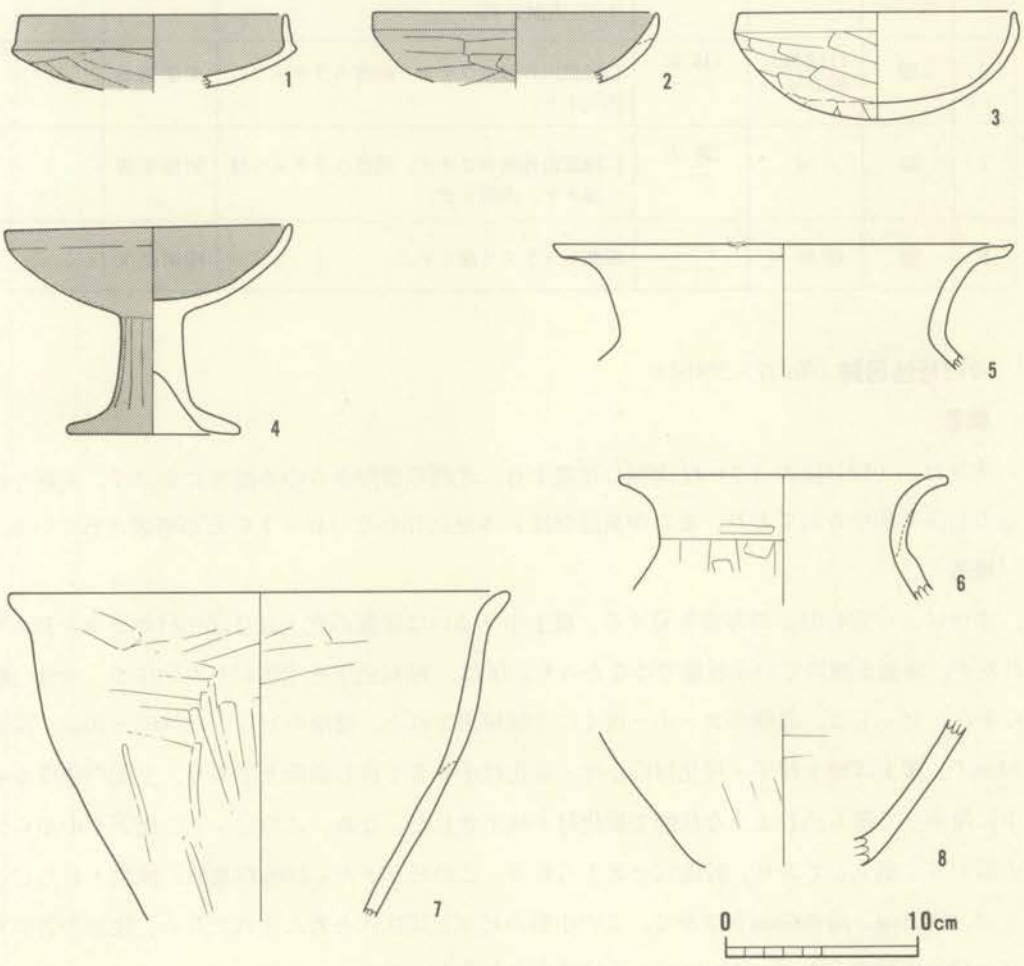
荒掘り面からは、溝とピットが検出された。溝は北西及び南西の壁の一部を除き、ほぼ全周するが、北東及び南西側では壁から10～20cm程内側を巡り、南東側は壁に沿っている。なお、南東側の溝は柱穴とも接続している。溝の幅は15～30cm、深さ6～8cmをはかる。この溝の存在は、本址の長軸方向上の拡張を想定できるが、断定はできない。溝を除くと荒掘り面はかなり平坦であるが、検出された3個のピットは、中央部に2個、カマドの隣に1個でそれぞれ径50～82cm、深さ8～17cmと径70cm、深さ30cmである。カマドの隣から検出されたピットは、貯蔵穴とも考えられるが、床面においては検出できなかった。



第225図　008B号住居跡カマド(2)

遺物の出土状況

本址からは、土器が 150片程出土した。出土した土器は、床面から５～10cm浮いているものが大半であり、北側のコーナーから南側のコーナーを結ぶ対角線上に多い。４はカマドの中央に坏部を下にした状態で出土した完形品であり、支脚として使用されたものと考えられる。



第226図　008Ｂ号住居跡出土遺物

008Ｂ号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坏	⅛	(14.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面ナデ。赤彩。	覆土	
2	坏	¼	(15.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面ナデ。赤彩。	床面直上	

3	坏	2/3	(14.4) 5.7	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面密着	
4	高坏	完 形	15.0 10.8	口縁部内外面・裾部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	カマド内	
5	甕	1/5	(24.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。	床面直上	
6	甕	口縁部1/8 胴部1/3	(15.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面密着	
7	甑	1/5	(26.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後一部ナデ。内面ナデ。	床面密着	
8	甕	底 部 2/3	—— ——	胴部ヘラケズリ後ナデ。	床面直上	

013号住居跡（第227・228図）

概要

本址は、012号跡の3.5m程南側に位置する。北西の壁際から中央部分にかけて、荒掘り面よりも深く削平されており、また中央部分は、本址に伴わないピットのため破壊されている。

構造

本址は、一辺4.93mの方形を呈する。覆土中あるいは床面の直上には炭化材がかなり認められたが、床面が焼けている状態ではなかった。床は、暗褐色土を主体にした貼床で、全体に軟らかい。ピットは、北側のコーナー近くに2個検出された。壁際のピットは径65×70cm、深さ54cmで、覆土は焼土粒子・炭化材の小片・炭化粒子を多く含む黒色土であり、上面の壁際から中に向かって落ち込むような状態で炭化材が検出された。なお、このピットの周囲や中からは土器が多く出土しており、貯蔵穴と考えられる。このピットから10cm程東側に検出されたピットは、径21cm、深さ62cmをはかる。この小形のピットは柱穴と考えられたため、住居の各コーナー付近を精査したが、ほかのピットは検出されなかった。

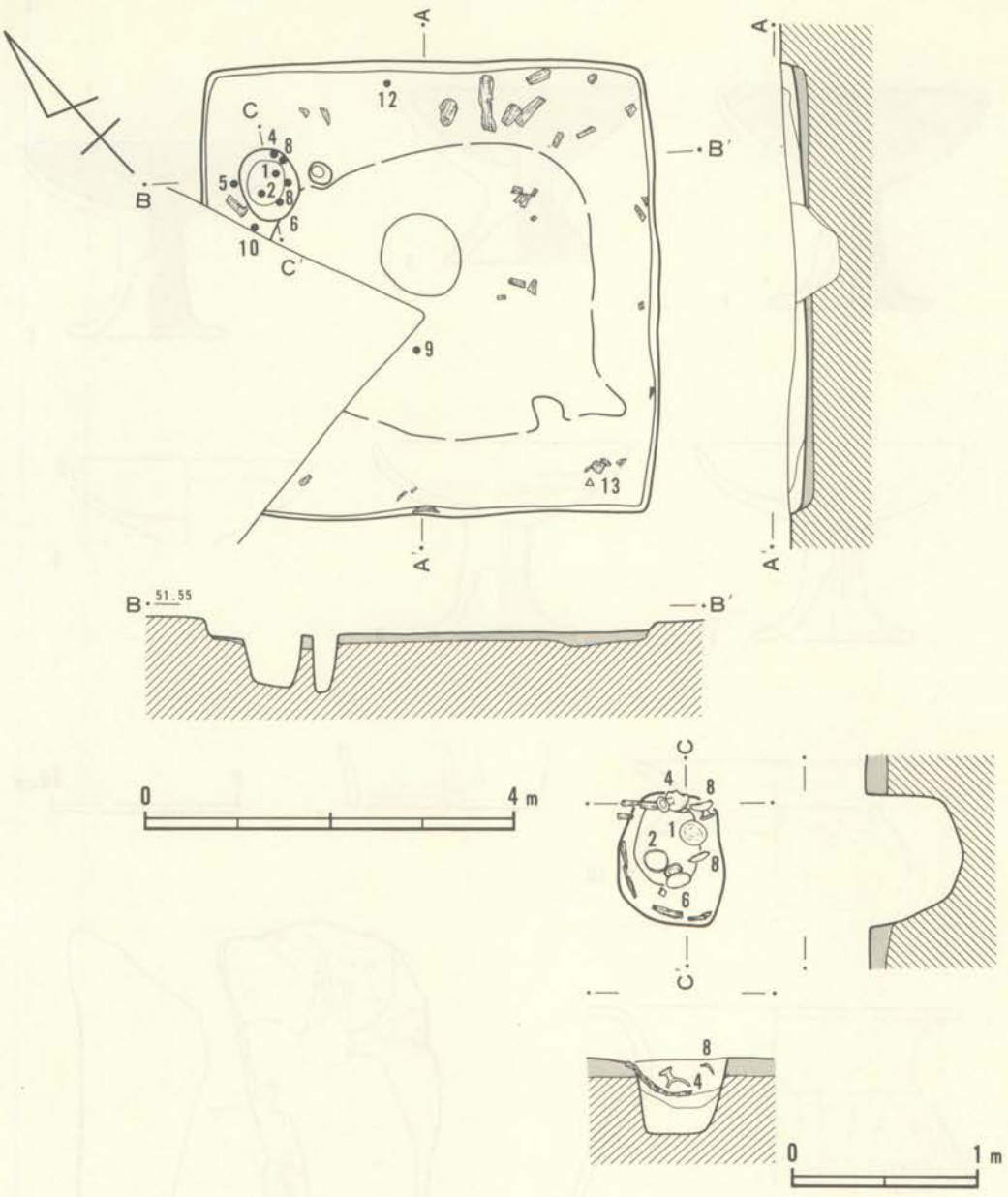
カマドは、北西の壁に構築されていたと考えられるが、削平されており遺存していない。

荒掘り面は、わずかな比高差であるが、中央部が高く、壁側の周辺部が低い。

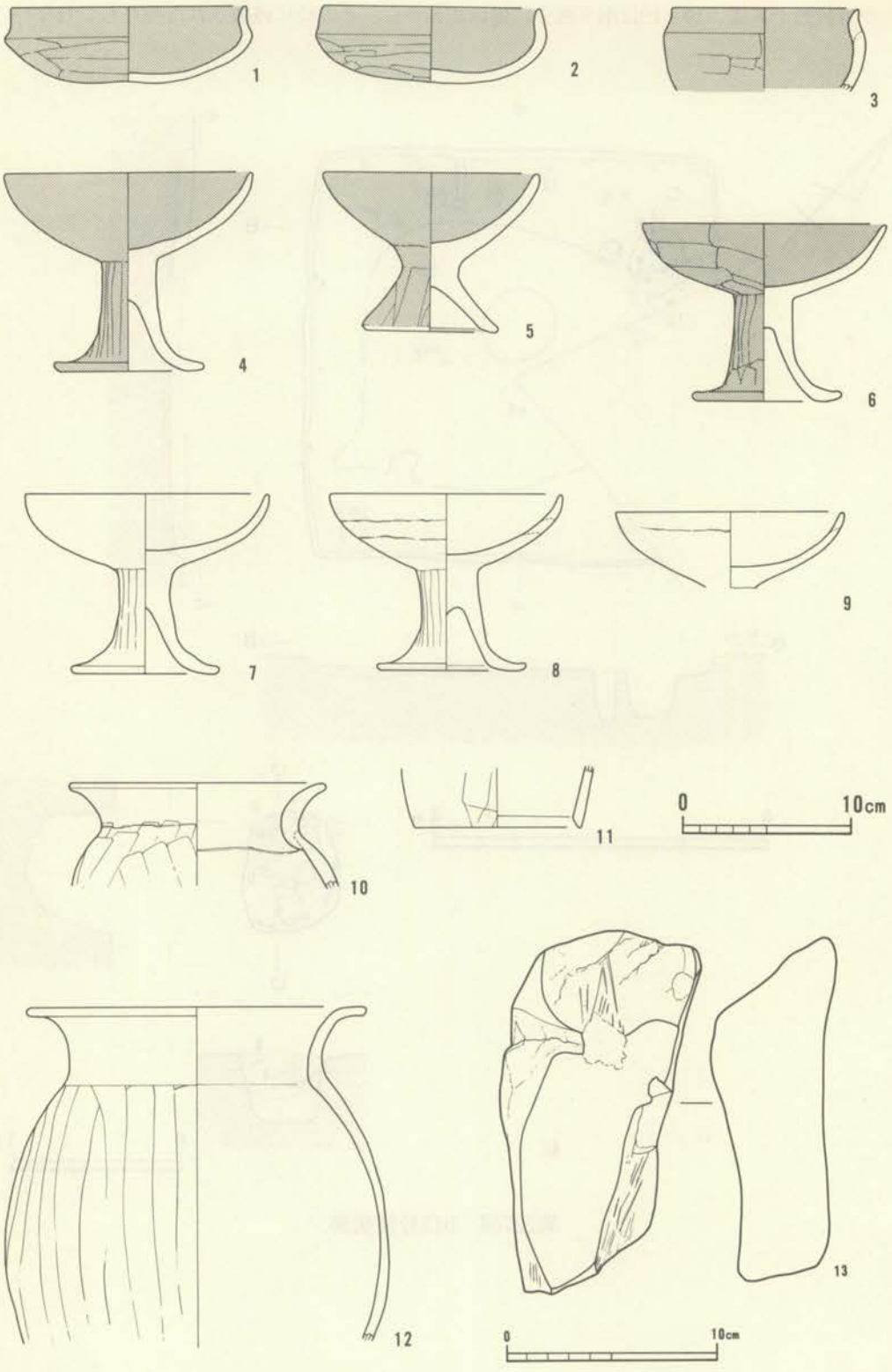
遺物の出土状況

本址の床面近くの壁際において、炭化材が多く検出された。出土した遺物は、土器と石器であるが、土器は北側の貯蔵穴の内外からがほとんどで、そのほかには破片が10数片出土したにすぎない。貯蔵穴周辺から出土した土器は、ほぼ床面密着の状態であり、中から出土した土器は覆土上面の壁側及び底面近くから検出された。なお、貯蔵穴の内外から出土した土器の中で、10・12を除く坏・高坏は、ほとんどが完形あるいは完形に近い状態の大形の破片で出土したこ

とが特徴的である。10・12は削平部分に近いことから、その時に破壊されたのかもしれない。



第227図　013号住居跡



第228図　013号住居跡出土遺物

013号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坏	完形	14.0 4.5	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面ナデ。赤彩。	ピット底面	
2	坏	完形	13.0 4.6	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面ナデ。赤彩。	ピット底面	
3	埦	口縁部1/6	(11.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ。赤彩。	貼床内	
4	高坏	完形	14.6 11.8	口縁部内外面・裾部内外面ヨコナデ、脚部ヘラケズリ。赤彩。	ピット壁際	坏部磨耗
5	高坏	完形	12.8 9.5	口縁部内外面ヨコナデ、坏部内外面ナデ、脚部ヘラケズリ。赤彩。	床面密着	
6	高坏	完形	14.4 10.5	口縁部ヨコナデ後ヘラケズリ、脚部ヘラケズリ、裾部内外面ヨコナデ。内面ナデ。赤彩。	ピット底面	
7	高坏	坏部1/3 脚部完形	(14.4) ——	口縁部内外面・裾部内外面ヨコナデ、脚部ヘラケズリ。内面ナデ。	攪乱部より	坏部磨耗
8	高坏	完形	14.0 10.4	輪積み。脚部ヘラケズリ、裾部内外面ヨコナデ。	ピット	坏部磨耗
9	高坏	坏部1/2	(13.6) ——	輪積み。	床面密着	器面磨耗
10	甕	口縁部3/4	(15.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面密着	
11	甑	1/6	—— ——	ヘラケズリ。	覆土	
12	甕	口縁部ほぼ完形 胴部1/3	20.2 ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	ピット覆土	
13	砥石	長さ16.5cm、最大幅8.5cm、厚さ5.3cmをはかる。両面が使用面である。なお、線刻状の使用痕も認められる。泥岩。床面直上。				

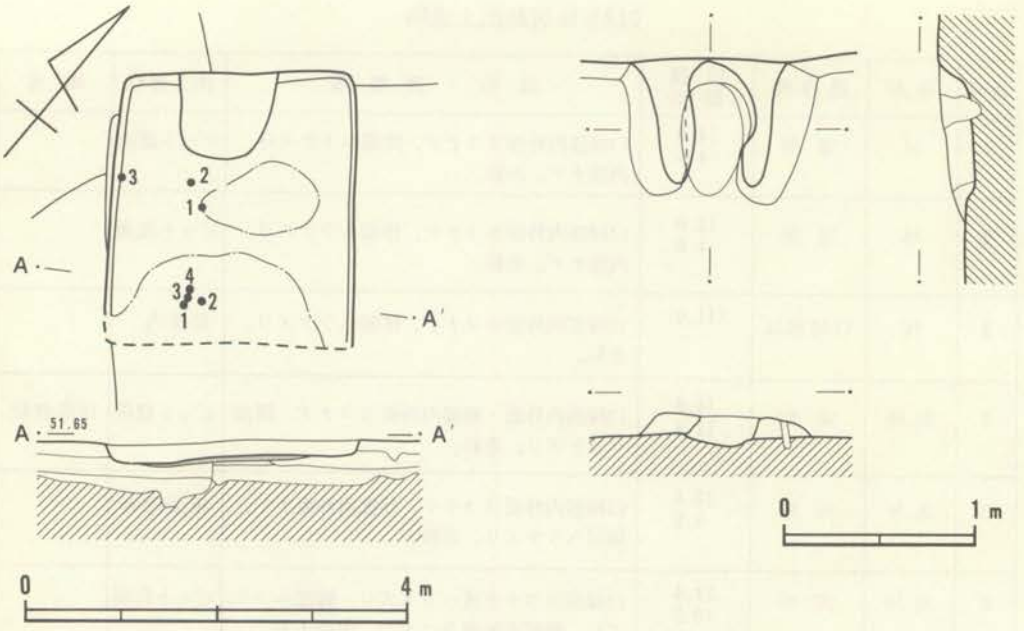
029G号住居跡（第108・229・230図）

概要

本址は、029D・E号跡の土層断面を精査中に確認されたものである。南東の壁は既に削平されており、壁は3辺しか遺存していない。

構造

本址は、遺存部における壁間の距離が2.53mをはかり、方形を呈する。床面は029D・E号



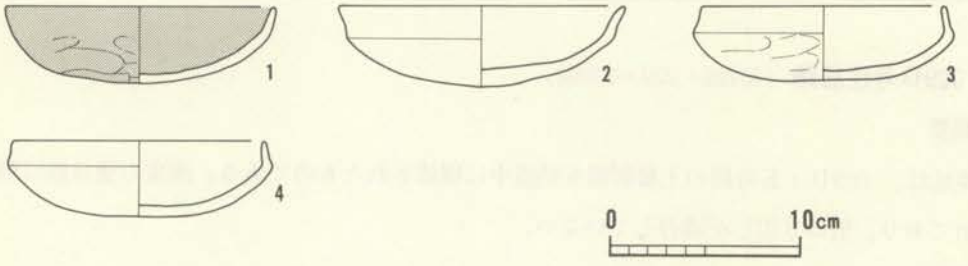
第229図　029G号住居跡及びカマド

跡の覆土を掘り込み、部分的な貼床をもって構築されており、中央部分と南東側との床面が堅い。ピットは検出されなかった。

カマドは、北西の壁の中央に位置し、壁外への張り出しはない。カマドの天井部は削平されており、また、攪乱が多く、遺存状態は悪い。袖は、砂質ローム・山砂・暗褐色土で構築されており、内側は焼土化しているが、火床部分の焼土は堆積が薄い。

遺物の出土状況

本址からは、土器が40片程出土した。住居南東部分の床面からは、坏がほぼ完形に近い状態で4個出土した。これらの坏は上から1→3→4の順で重なっていたもので、この3個と接する位置に2が出土した。



第230図　029G号住居跡出土遺物

029G号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坏	ほぼ完形	(14.1) 3.8	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面ナデ。赤彩。	床面直上	器面磨耗 2・3・4と伴出
2	坏	ほぼ完形	15.2 4.2	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ、体部内外面ミガキ。	床面直上	1・3・4と伴出
3	坏	完形	12.5 3.9	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ後一部ナデ。内面ナデ。	床面直上	1・2・4と伴出
4	坏	ほぼ完形	(13.2) 3.8	口縁部内外面ヨコナデ。	床面密着	器面磨耗 1・2・3と伴出

030号住居跡（第231・232図）

概要

本址は、 031A号跡の北5mの平坦面に位置する。

構造

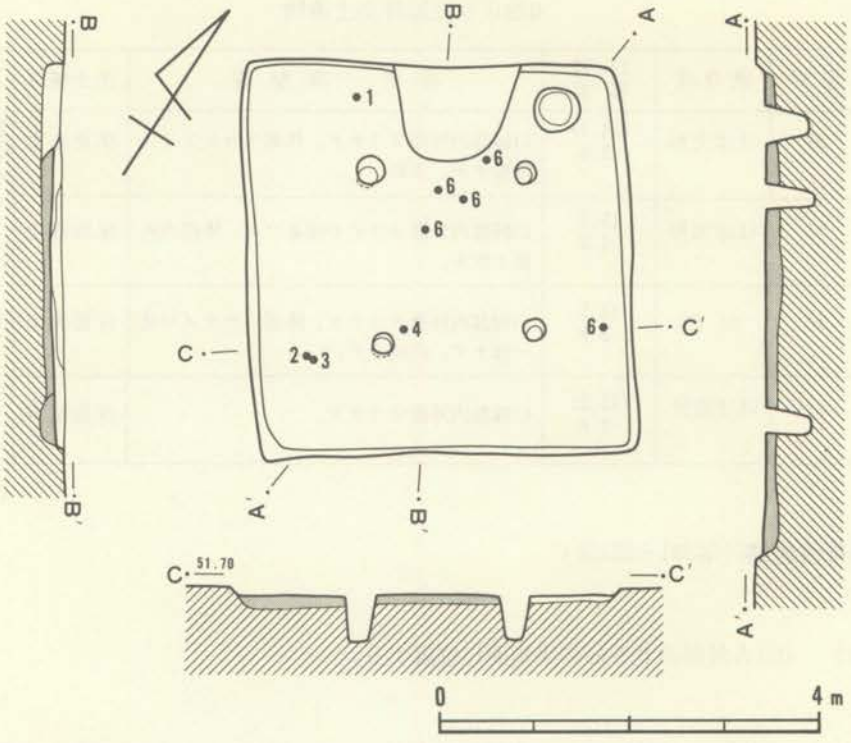
本址は、一辺約 4.0m をはかり、方形を呈する。床は、砂質ロームと暗褐色土の混合土による厚さ10cm程の貼床で、全体に堅い。ピットは5個検出された。北側のコーナー近くのピットは径47cm、深さ44cmをはかり、貯蔵穴と考えられる。そのほかの4個は径21～28cm、深さ38～49cmで、柱穴と考えられる。柱穴間の距離は、各辺共に 1.7m をはかり、各柱穴間の形状はほぼ正方形を呈する。

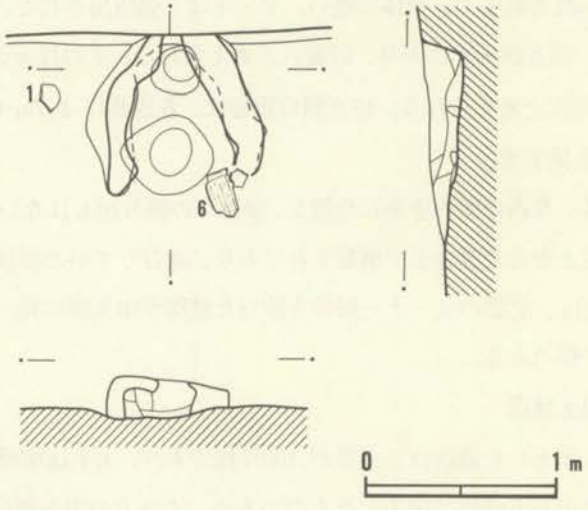
カマドは、北西の壁の中央に位置し、壁外への張り出しはない。袖は、砂質ロームを主体とし、暗褐色土を含む混合土で構築されており、遺存していた形状は「ハ」の字状を呈する。

荒堀り面は、北側のコーナー部分を除いた壁際が中央部に比べ6～8cm程低いが、その範囲は極めて不整である。

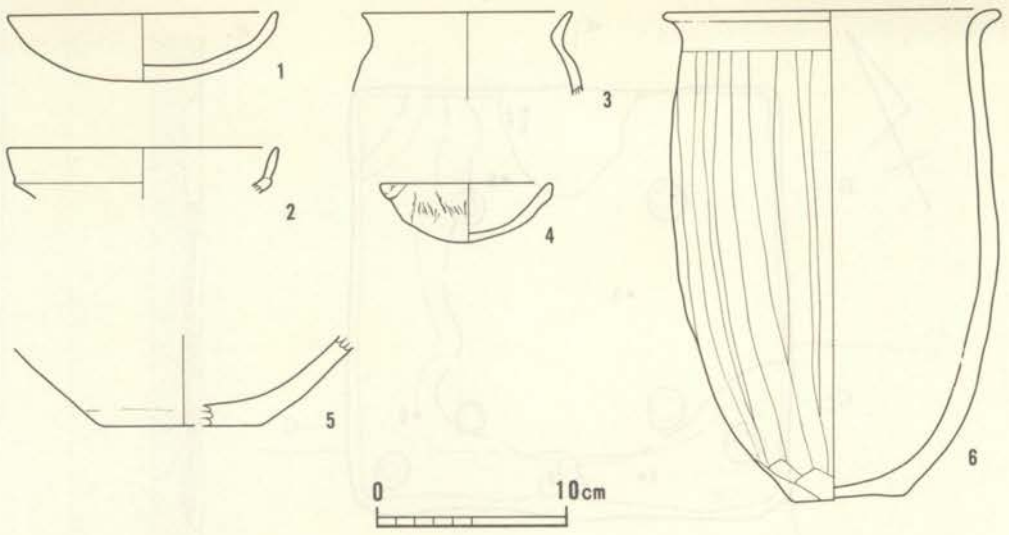
遺物の出土状況

本址から出土した遺物は、土器が 100片程であり、大半は床面近くからの出土である。 6は住居中央付近から破片で出土したものである。カマドの中央部分から土製支脚が出土したが、水分を受けていたため脆く、取り上げることができなかった。出土した土製支脚は径6cm、長さ10cm程である。





第231図　030号住居跡及びカマド



第232図　030号住居跡出土遺物

030号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坏	完形	14.0 3.6	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ、体部ヘラケズリ後ミガキ。内面ミガキ。	床面密着	
2	坏	1/6	(14.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ、体部ヘラケズリ後ミガキ。内面ミガキ。	覆土	
3	坏	1/6	(11.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ（？）。	床面直上	器面磨耗
4	ミニチュア	完形	8.9 3.2	内外面ナデ。	覆土	
5	甕	底部1/3	—— ——	ヘラケズリ後ナデ。	覆土	
6	甕	完形	12.2 25.7	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面直上	

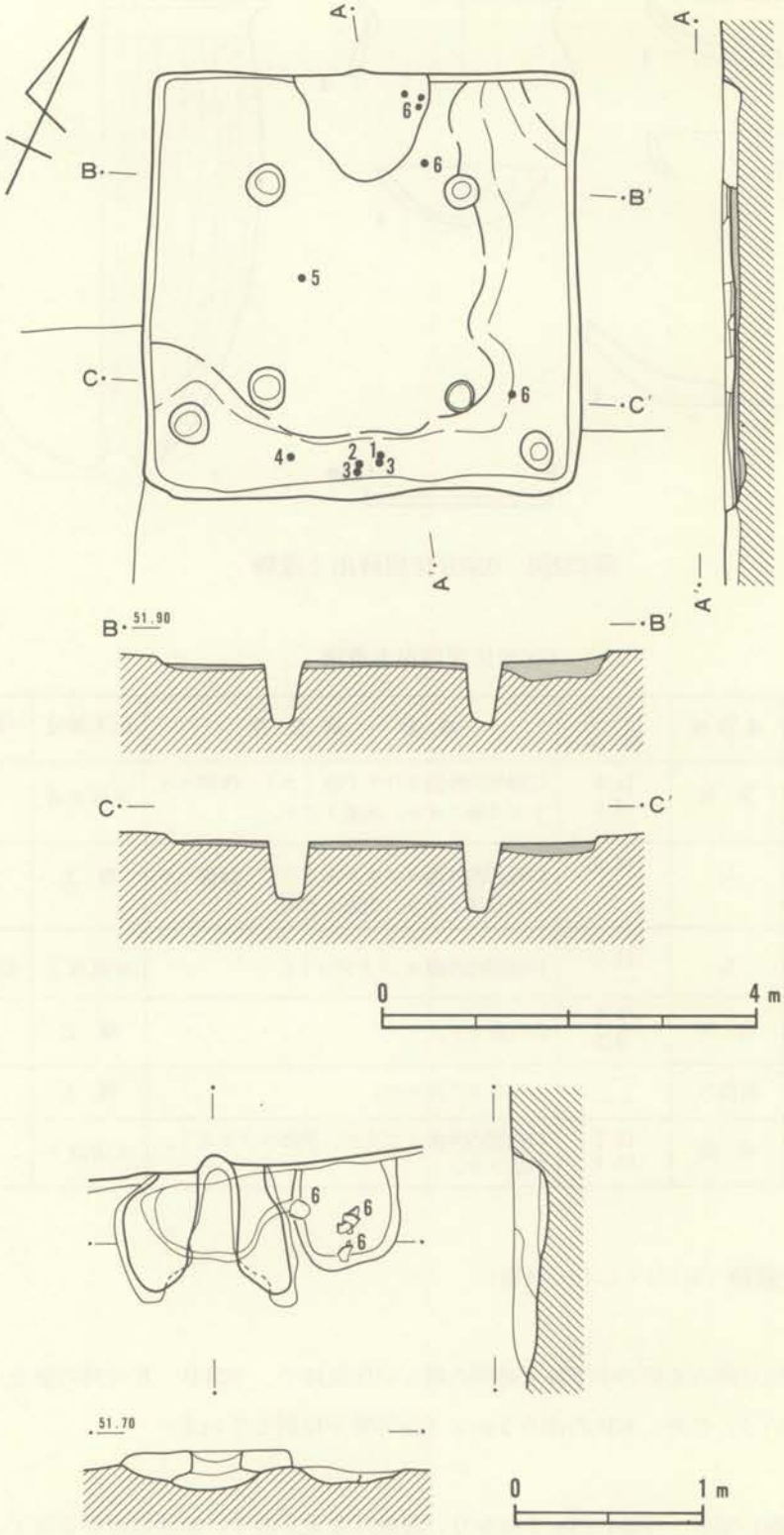
031A号住居跡（第121・233・234図）

概要

本址は、031号跡の6軒の中で最も時期の新しい住居跡で、031B・E号跡の壁を一部切って構築されている。なお、本址の南方5mに030号跡が位置している。

構造

本址は、長軸4.58m、短軸4.39mをはかり、長軸は北東を向く。形状は方形を呈する。床は、暗褐色土を主体にして砂質ロームの粒子を含む貼床であるが、全体に軟らかい。ピットは、6



第233図　031A号住居跡及びカマド

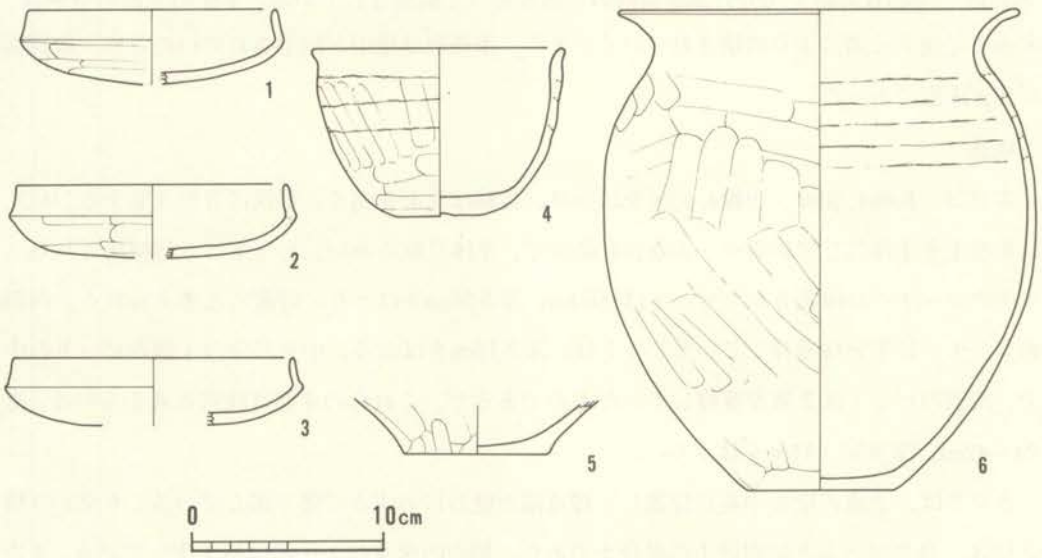
個検出された。南と東側のコーナー近くに検出された2個のピットは、それぞれ径42cm、深さ19cmと径30cm、深さ46cmをはかる。このほかの4個は柱穴と考えられ、径28～40cm、深さ61～74cmをはかる。柱穴間の距離は、長辺で 2.2m 、短辺で 2.1m をはかり、各柱穴間を結ぶ形状はほぼ正方形を呈する。

カマドは、北西の壁の中央部に位置し、煙道と考えられる部分だけが壁外にわずか6 cm程張り出している。袖は、砂質ロームを主体にして構築されており、内側は焼土化している。底面は灰色を呈する砂質の土層で、熱変化のため赤変している部分がある。また、カマドの右側のピットは中から焼土粒子が多量に認められた。このピットの底面は砂質ロームによる堅い貼床である。

荒掘り面は、北西及び南西の壁の一部を除く壁際が中央部より7 cm程低い。 031E号跡と重複する南東の壁際も中央に比べ低いことから、本址は 031E号跡の荒掘り面をも掘り直して形成されている。

遺物の出土状況

本址からは、土器が80片程出土した。大半は覆土中であり、南東の壁近くからの出土が多い。6はカマドの隣のピット上面からの出土であり、 3.5m 程離れた床面直上出土の破片が接合した。



第234図　031A号住居跡出土遺物

031A号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坏	⅓	(12.8) ——	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ後一部ナデ。内面ナデ。	覆土	
2	坏	⅓	(14.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。	覆土	
3	坏	½	(14.6) ——	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ（?）。	覆土	器面磨耗
4	埦	完形	13.2 8.7	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後一部ナデ。内面ナデ。	覆土	
5	甕	底部½	—— ——	ヘラケズリ。内面ナデ。	覆土	
6	甕	口縁部⅓ 胴部½	(21.0) 24.7	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	ピット・床面密着	

035A号住居跡（第235・236図）

概要

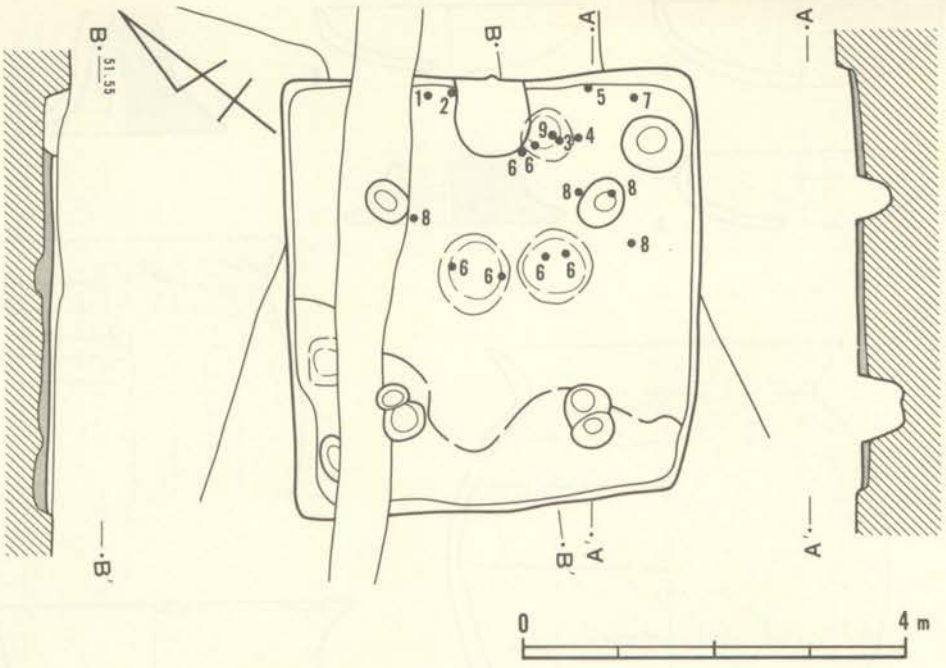
本址は、035B号跡・092号溝状遺構の一部を切って構築されている。本址の北西の壁側は床面まで達する溝により破壊されている。また、南西側は地山が削平されていたため、確認面がほぼ床面であった。

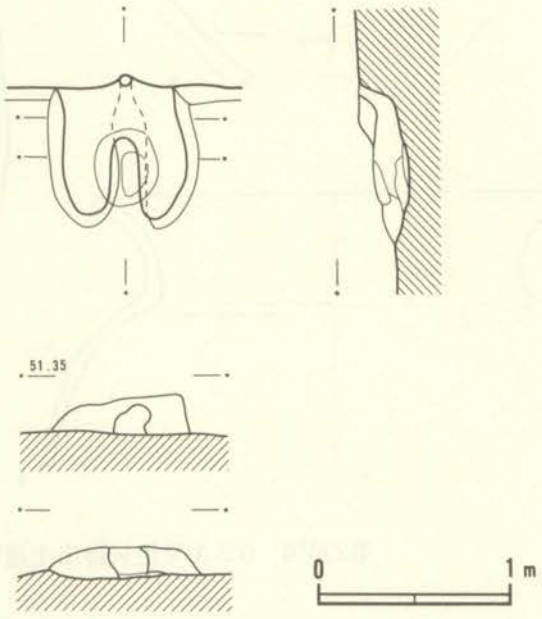
構造

本址は、長軸4.50m、短軸4.40mをはかり、長軸は北東を向く。形状は方形を呈する。床は、暗褐色土を主体にして砂質ロームを含む貼床で、全体に軟らかい。ピットは6個検出された。東側のコーナーに検出されたピットは径60cm、深さ58cmをはかり、貯蔵穴と考えられる。西側のコーナーに半分程遺存していたピットは、深さ16cmをはかる。中央部分の4個のピットの中で、南西のピットは2個が重複していたものであるが、これらの4個は柱穴と考えられる。径24～42cm、深さ36～44cmをはかる。

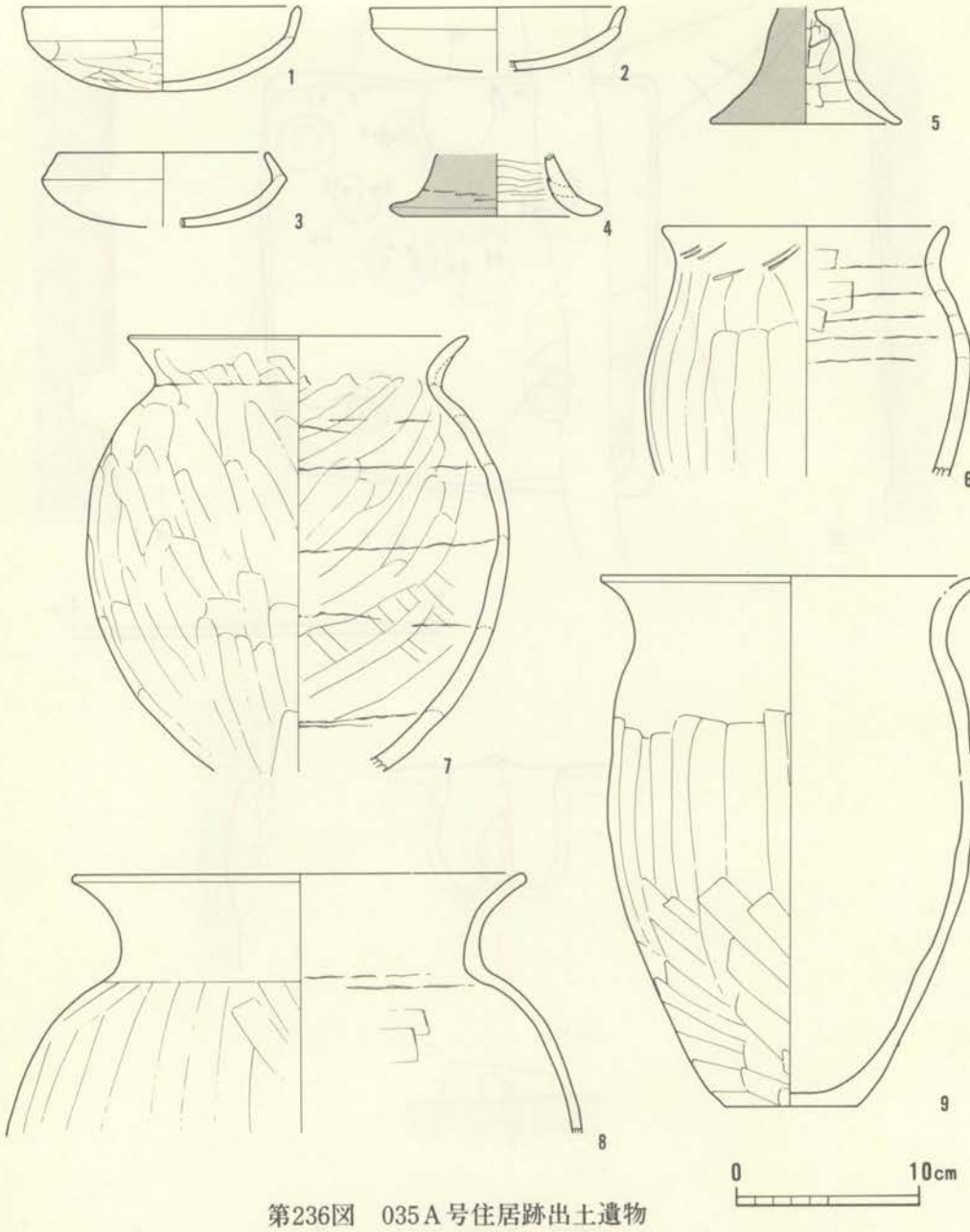
カマドは、北東の壁の中央に位置し、煙道部が壁外にわずかに張り出している。カマドの構築材は、砂質ロームと暗褐色土の混合土であり、袖の内側及び天井部は焼土化している。また、カマド内の底面も良好な焼土が検出された。

荒掘り面は、全体に平坦であるが、4個のピットが検出された。カマドの隣に検出されたピットは径50cm、深さ25cmで、暗褐色土を主体にして砂質ロームを含む覆土である。中央部に並ぶ2個のピットは砂質ロームのブロックを主体にして暗褐色土を含む覆土であり、北側のピッ





第235図　035A号住居跡及びカマド



第236図　035A号住居跡出土遺物

トは径78cm、深さ25cm、南側のピットは径72cm、深さ13cmをはかる。また、北西の壁際のピットの覆土は焼土ブロック・焼土粒子を多く含み、規模は40×50cmの方形で、深さ39cmをはかる。

遺物の出土状況

西側がほとんど削平されていたため、本址から出土した約 100片程の土器は東側からの出土である。多くの土器は床面あるいは床面近くから出土したが、完形の状態で出土したものはなく、完全に復元されたものもない。

035A号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坏	½	(15.2) 4.7	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面密着	
2	坏	ほぼ完形	14.2 ——	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。	覆土	
3	坏	½	(11.5) ——	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。	床面密着	
4	高坏	脚部ほぼ完形	—— ——	輪積み。脚部ヘラケズリ後ナデ、裾部内外面ヨコナデ。内面ナデ。赤彩。	床面直上	
5	高坏	脚部ほぼ完形	—— ——	脚部ヘラケズリ後ナデ、裾部内外面ヨコナデ。内面ヘラケズリ。赤彩。	覆土	
6	甕	胴下部以外完形	15.3 ——	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面直上	
7	甕	口縁部½ 胴部⅓	(18.5) ——	輪積み。口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ヘラケズリ後一部ナデ。	覆土	
8	甕	口縁部⅙ 胴上部完形	(24.2) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面密着・ピット	
9	甕	口縁部¼ 胴部⅓	(20.6) 28.6	口縁部内外面ヨコナデ、胴上部ナデ、胴中部以下ヘラケズリ。内面ナデ。	床面密着	

036A号住居跡（第237・238図）

概要

本址は、床面がほとんど削平されていた。

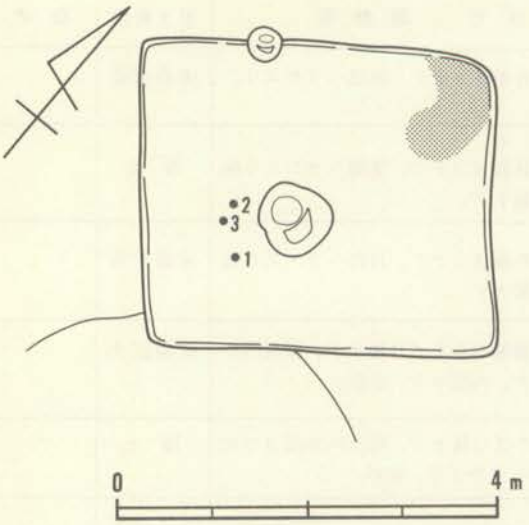
構造

本址は、長軸3.70m、短軸3.25mをはかり、長軸は北東を向く。形状は方形を呈する。床面は、中央付近に一部遺存していただけであるが、黒褐色土を主体にした厚さ5cm程の貼床である。ピットは2個検出された。壁際のピットは径39cm、深さ75cm、住居中央のピットは径76cm、深さ81cmをはかる。

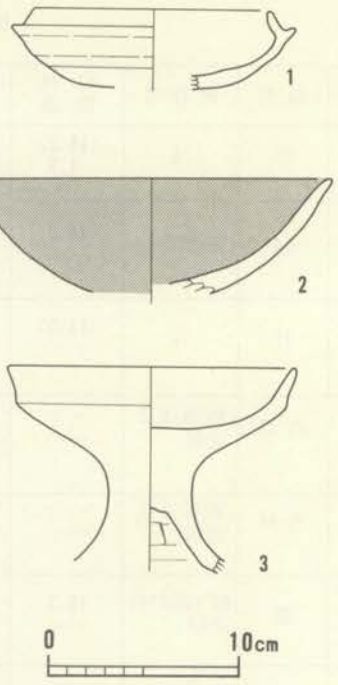
カマドは、削平されていて遺存していなかったが、北側のコーナー部分の荒掘り面から焼土が検出され、この位置にカマドがあったと考えられる。

遺物の出土状況

本址から出土した遺物は、図示した土器3個だけであり、いずれも床面からの出土である。



第237図　036A号住居跡



第238図　036A号住居跡出土遺物

036A号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坏	¼	(12.6) —	口縁部内外面ヨコナデ、体下部回転ヘラケズリ。	床面密着	須恵器
2	高坏	坏部¼	(19.0) —	口縁部内外面ヨコナデ、坏部内外面ナデ。赤彩。	床面密着	
3	高坏	坏部⅔ 脚部¾	15.2 —	口縁部ヨコナデ後ミガキ、脚部ミガキ。脚部内面ヘラケズリ。	床面直上	

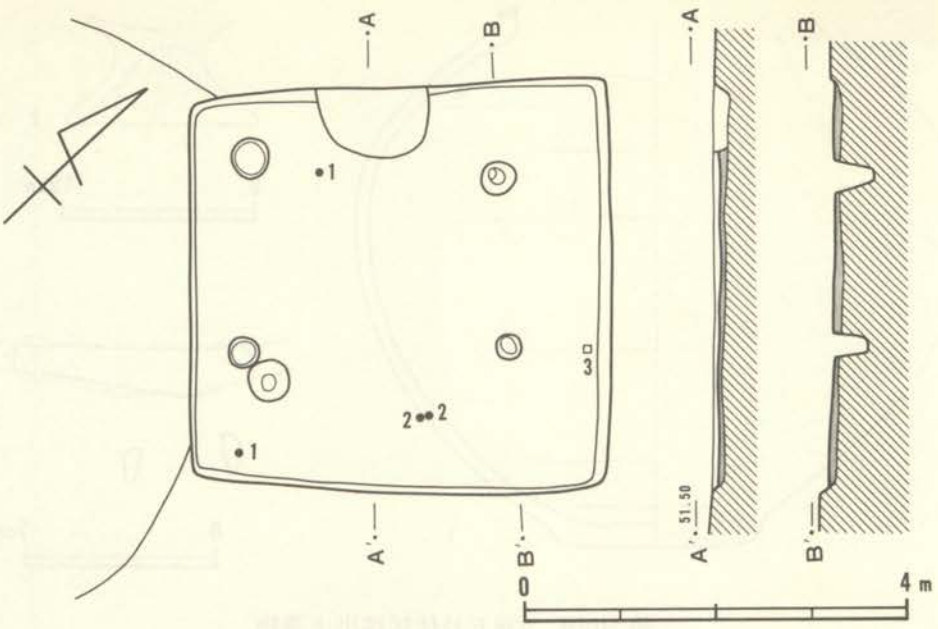
038F号住居跡

概要（第143・239・240図）

本址は、覆土の大半が削平されており、確認面から床面まではわずか8cmである。

構造

本址は、長軸4.43m、短軸4.30～4.00mをはかり、長軸は北東を向く。南西の壁は北東の壁に比べ30cm程短く、全体としてはやや不整の方形を呈する。床は、砂質ロームを主体にした貼床で、全体に堅い。ピットは5個検出された。径26～42cm、深さ20～42cmをはかり、南側部分



第239図　038Ｆ号住居跡

では2個のピットが接している。これらのピットは柱穴と考えられる。柱穴間の距離は、長辺で2.7 m、短辺で1.8 m をはかり、各柱穴間を結ぶ形状は長方形を呈し、全体に北西に片寄っている。

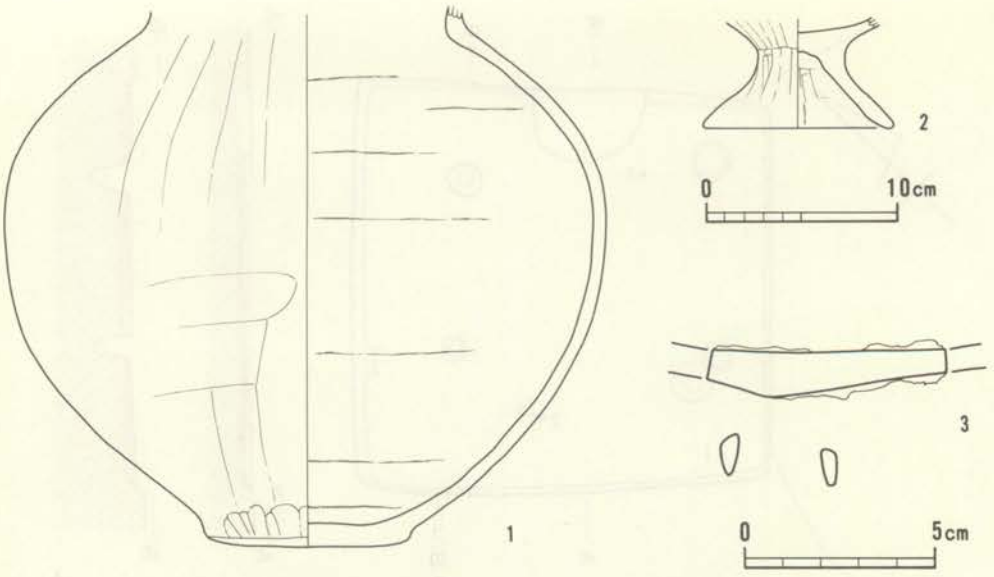
カマドは、北西の壁の中央に位置する。ほとんどが削平されており、袖の一部が遺存していただけである。カマドの底面からは焼土・炭化粒子が検出された。

遺物の出土状況

本址は、覆土の上部が削平されていたため、出土した遺物は床面近くのものばかりである。土器・鉄器が出土したが、住居中央部からの出土は少ない。土器は約70片程であり、細片が多い。1は南側のコーナー部分からその大半が出土し、3 m 程離れた小破片と接合した。

038Ｆ号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	甕	胴部⅓ 底部完形	—— ——	胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面直上	器面磨耗
2	高坏	脚部完形	—— ——	脚部ヘラケズリ、裾部内外面ヨコナデ。 坏部内面ミガキ、脚部内面ヘラケズリ。	覆土	
3	刀子	刃部の長さ 2.4cm、茎の長さ 3.8cm、厚さ 0.2cmをはかる。全体に錆化が著しい。刃部は内湾して細くなっており、茎には木質の錆着は認められない。刃部・茎共に欠損は新しい。床面直上。				



第240図　038Ｆ号住居跡出土遺物

039Ａ号住居跡（第153・241・242図）

概要

本址は、039Ｂ・Ｃ号跡を切って構築されている。地山への掘り込みは浅く、確認面と床面の比高差はわずかである。

構造

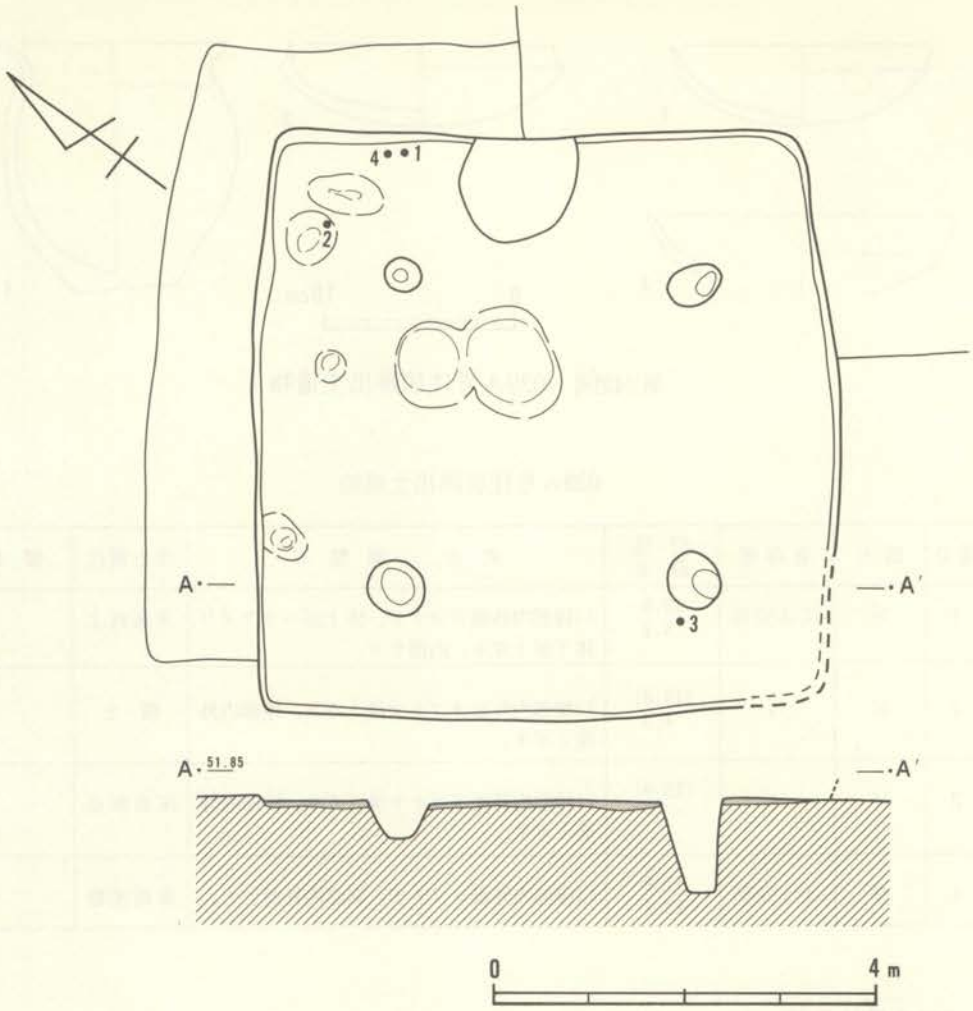
本址は、長軸6.22m、短軸6.04mをはかり、長軸は北西を向く。形状は方形を呈する。床は、黒褐色土と砂質ロームによる厚さ８cm程の貼床で、全体に軟らかい。ピットは、径24～54cm、深さ38～90cmのものが４個検出され、柱穴と考えられる。柱穴間の距離は、各辺共に3.3mをはかり、各柱穴間を結ぶ形状はほぼ正方形を呈する。

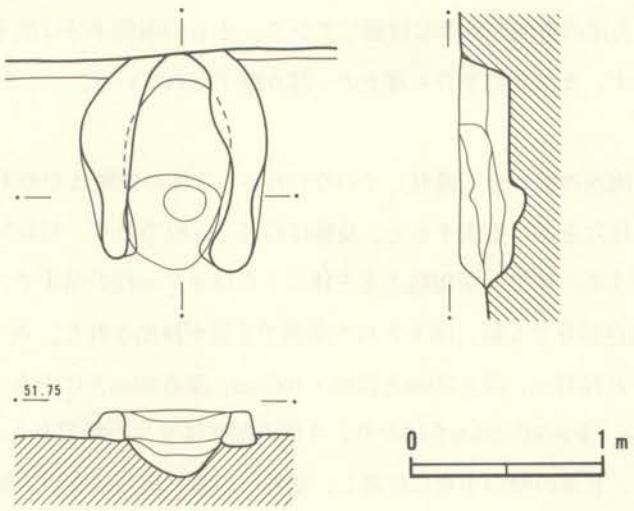
カマドは、北東の壁のほぼ中央に位置し、壁外への張り出しはない。袖は、砂質ロームで構築されており、内側が焼土化している。カマド底面は、床面から20cm低く、火床には多量の焼土が検出された。

荒掘り面は、比較的平坦であるが、６個のピットが検出された。径33～90cm、深さ20～54cmであるが、この中には039Ｂ号跡に伴うピットも含まれていると考えられる。

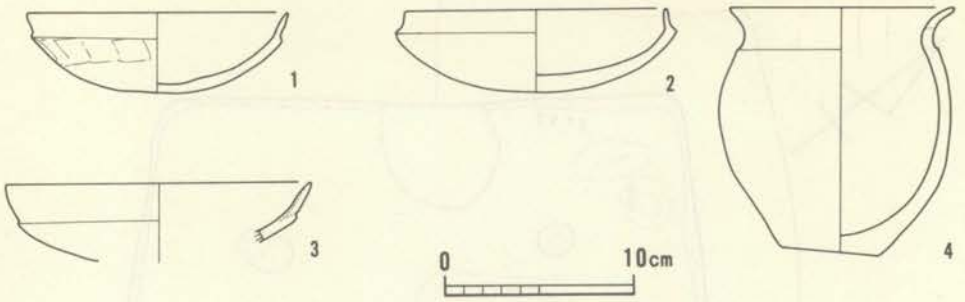
遺物の出土状況

本址からは、約200片程の土器が出土した。土器は、住居中央からはほとんど出土せず、壁際から出土するものが多いが、細片ばかりである。完形に近い状態に復元された土器は１・４の２個だけである。また、カマド付近に多く出土するという傾向も指摘できない。





第241図　039A号住居跡及びカマド



第242図　039A号住居跡出土遺物

039A号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坏	ほぼ完形	13.6 4.2	口縁部内外面ヨコナデ、体上部ヘラケズリ、体下部ミガキ。内面ナデ。	床面直上	
2	坏	¼	(13.8) 4.3	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ、体部内外面ミガキ。	覆土	
3	坏	½	(15.9) ——	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ、体部内外面ミガキ。	床面密着	
4	甕	ほぼ完形	11.8 13.1	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	床面密着	

040A号住居跡（第243・244図）

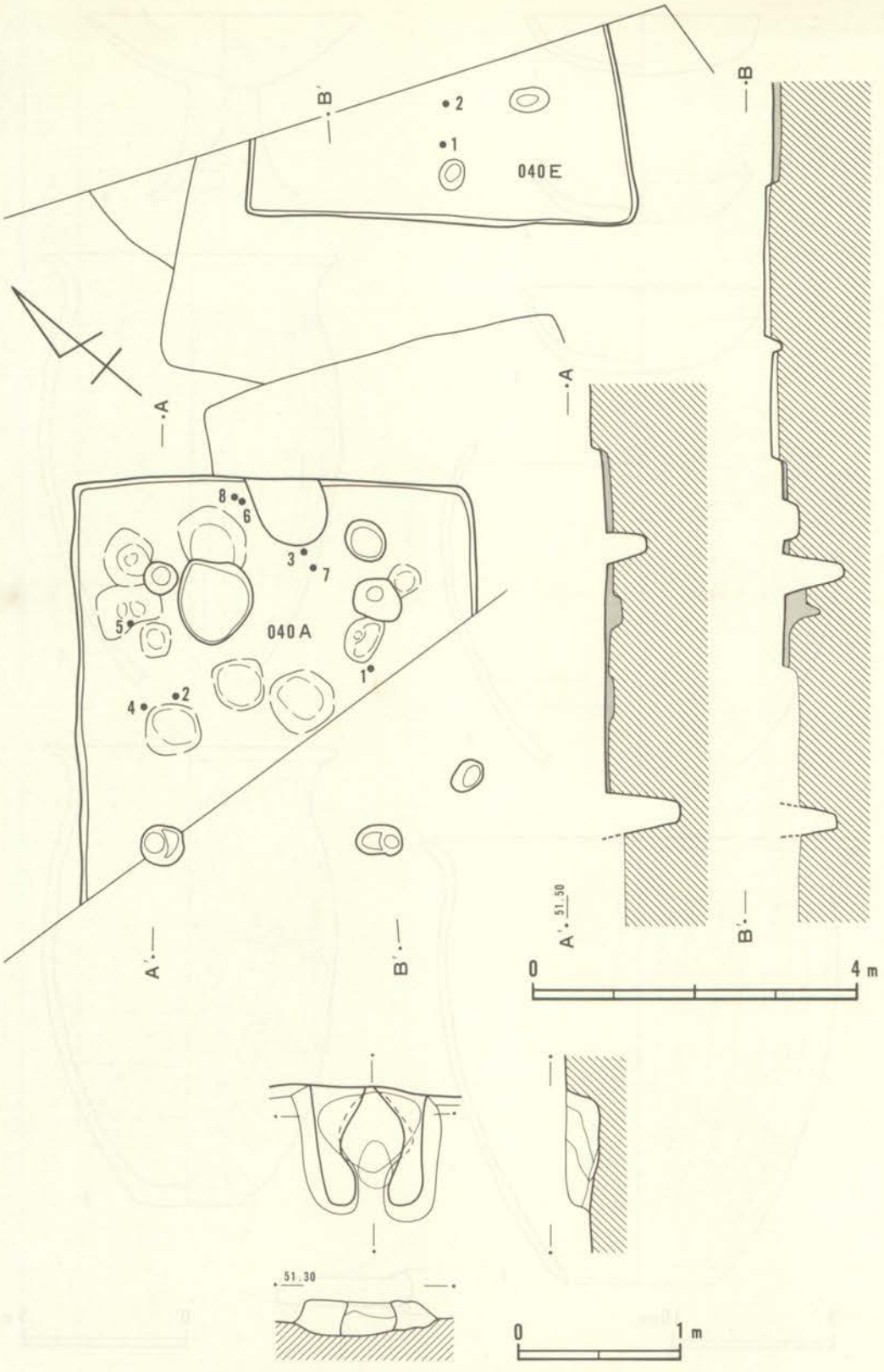
概要

本址は、台地の東側の外れに位置している。本址の南側半分は削平され、ピットだけしか遺存しておらず、また北側半分も覆土の一部が削平されている。

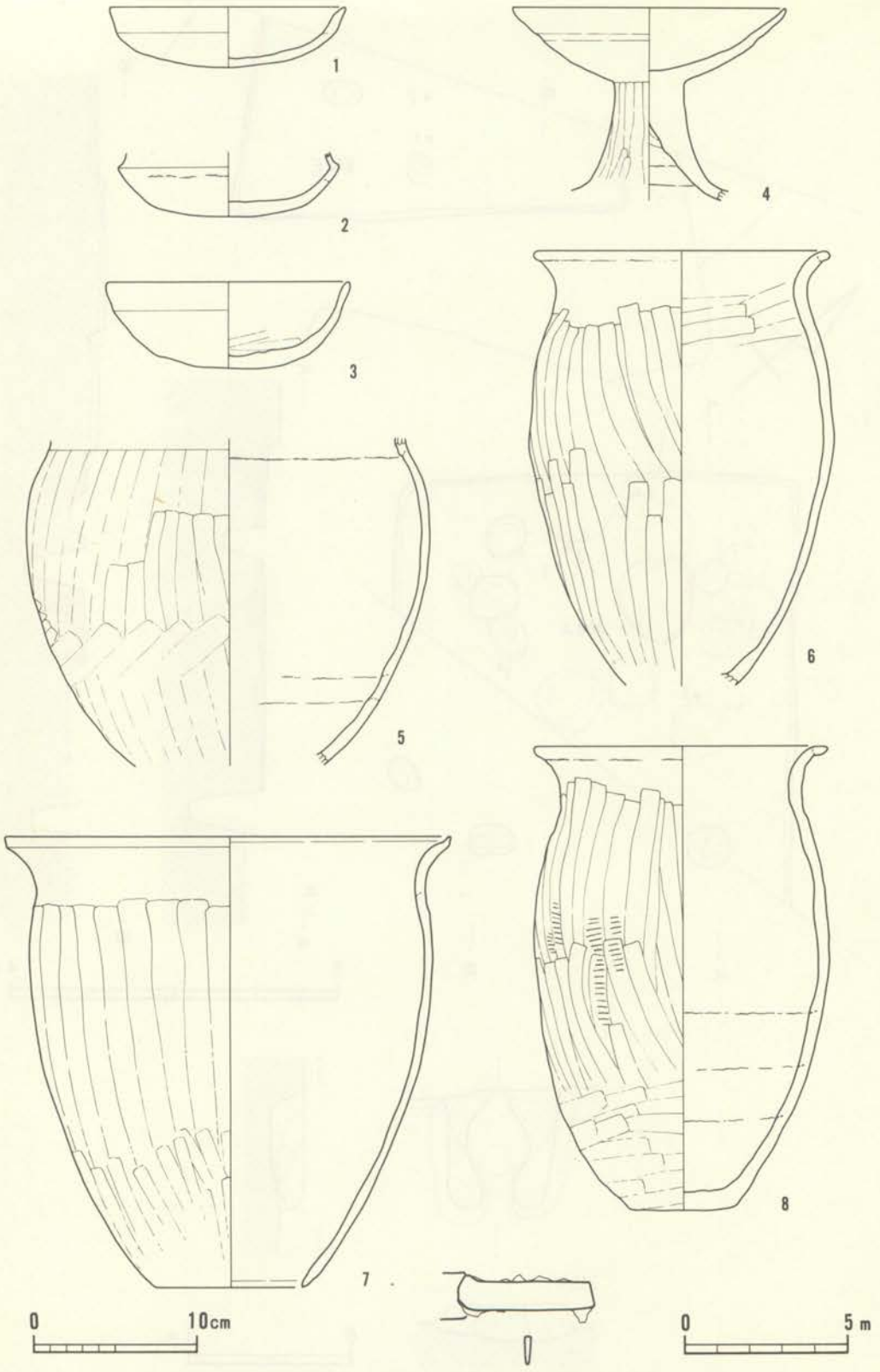
構造

本址は、南西の壁が全く遺存していないため、全体の規模はやや不明瞭であるが、削平部に検出された柱穴を基に推測すると、長軸は約 5.5m 程であり、短軸5.00m の、長軸が北東を向く方形を呈する。床は、茶褐色土を主体にした厚さ7㎝程の貼床で、比較的軟らかい。ピットは床面の遺存部分で5個、削平された南側で2個が検出された。カマドの南側及び西側のピットはそれぞれ径47㎝、深さ20㎝と径95×100 ㎝、深さ30㎝をはかる。柱穴と考えられる4個は径38～53㎝、深さ50～93㎝をはかり、4個の配置はやや不整である。

カマドは、北東の壁の中央に位置し、壁外への張り出しはない。袖は、茶褐色土と砂質ロームで構築されており、内側は若干焼土化している。底面に検出された焼土は少量である。



第243図　040A・E号住居跡及び040A号住居跡カマド



第244図　040A号住居跡出土遺物

荒掘り面は、比較的平坦であるが、9個のピットが検出され、床面で検出されたピットと重複しているものが多い。柱穴と重複しているピットの深さは20～58cm、住居中央部に検出されたピットの深さは10～32cmをはかる。

遺物の出土状況

本址は北側の半分が遺存しているだけであるが、約 150片程の土器が出土した。住居中央部から出土した土器は少なく、壁際からの出土が多い。特にカマド周辺から出土した土器が多く、これらは完形に近い状態のまま床面近くから出土した。

040A号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坏	完形	14.4 3.6	口縁部内外面ヨコナデ、体部ナデ。内面ミガキ。	床面直上	
2	坏	1/4	(12.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ。	覆土	
3	坏	完形	14.8 5.2	口縁部内外面ヨコナデ、体部ナデ。体下部内外面ヘラケズリ。	床面密着	
4	高坏	坏部1/2 脚部完形	(16.8) ——	口縁部ヨコナデ、坏部内外面ミガキ、脚部内外面ヘラケズリ。	覆土	
5	甕	胴部完形	—— ——	輪積み。胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	覆土	
6	甕	口縁部完形 胴部1/2	18.2 ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。頸部内面ヘラケズリ、胴部内面ナデ。	床面直上	
7	甑	胴部3/3 以外完形	27.3 27.0	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面密着	
8	甕	ほぼ完形	18.0 27.9	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴部タタキ後ヘラケズリ。内面ナデ。	床面直上	
9	刀子	長さ 4.1cm、茎幅 1.2cmをはかる。両関式の刀子と考えられる。覆土。				

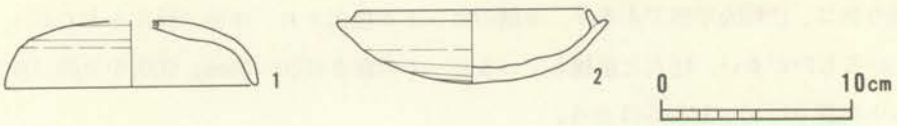
040E号住居跡（第243・245図）

概要

本址は、 040C・D号跡を切って構築されており、 040A号跡の3m程南西に位置する。なお、北東側は未調査である。

構造

本址は一部しか調査していないが、遺存している側の軸長は4.75m をはかり、不整の方形を呈すると考えられる。床は、砂質ロームを主体にした厚さ8cm程の貼床で、比較的堅い。ピッ



第245図　040Ｅ号住居跡出土遺物

トは２個検出され、径・深さ共に約30cm前後である。

カマドは北西あるいは南東の壁に位置すると考えられる。

遺物の出土状況

本址から出土した遺物は、礫が４点と土器が15片程であり、床面近くからの出土である。須恵器の坏と坏蓋が出土したが、セットにはならない。

040Ｅ号住居跡出土遺物

番品	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坏蓋	¼	(13.2) ——	口縁部内外面ヨコナデ、体部回転ヘラケズリ。	床面直上	須恵器
2	坏	完形	12.4 3.9	口縁部内外面ヨコナデ、体下部回転ヘラケズリ。	床面密着	須恵器

041号住居跡　(246～249図)

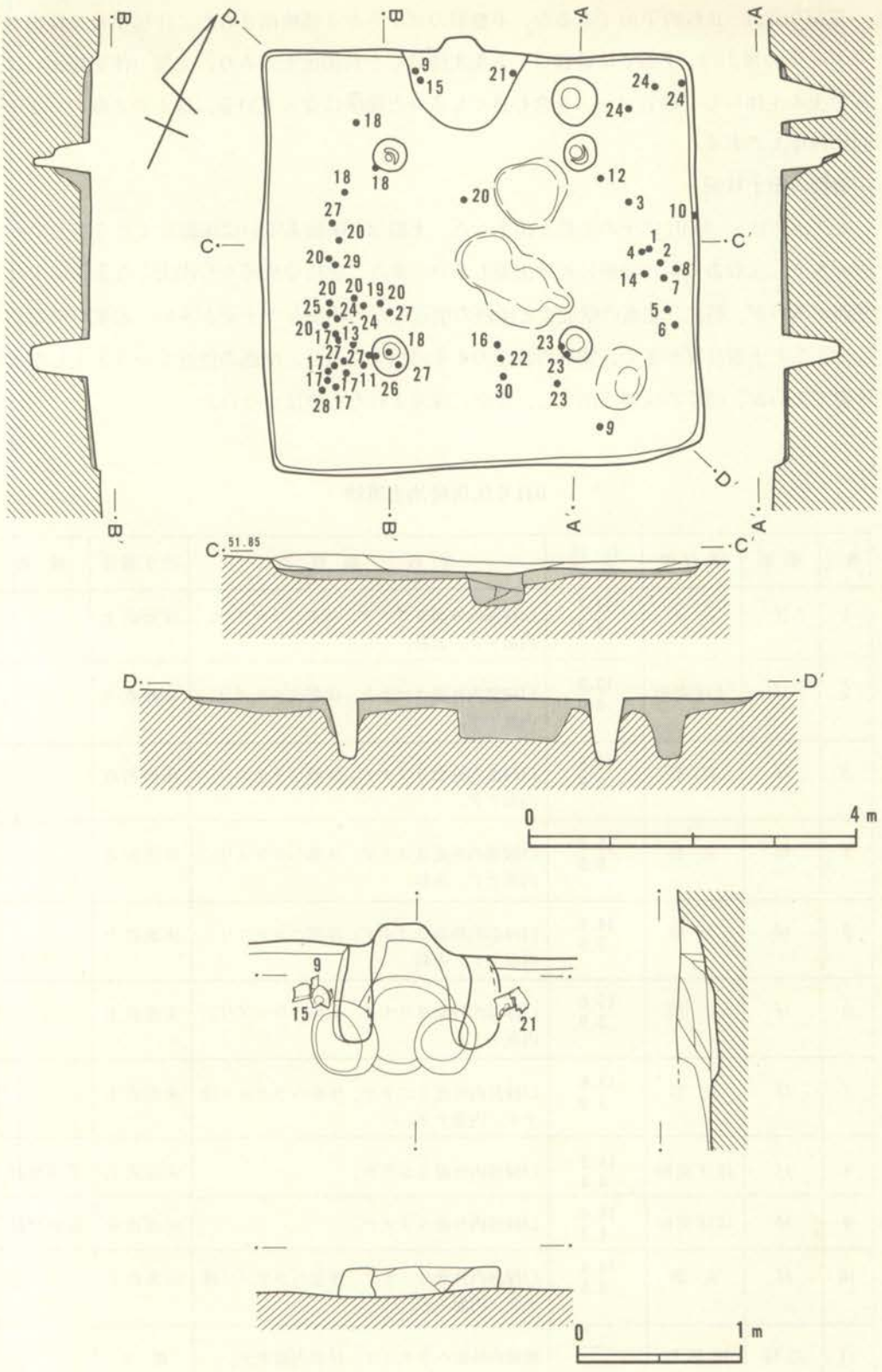
概要

本址は、042号跡の 0.5m 程北側に位置する。地山は比較的平坦である。なお、覆土の上部が削平されている。

構造

本址は、長軸5.38m、短軸5.08m をはかり、長軸は北東を向く。形状は方形を呈する。床は、砂質ロームを主体にした厚さ10cm程の貼床で、全体に堅い。ピットは５個検出された。カマドの隣に検出されたピットは貯蔵穴と考えられ、径54cm、深さ75cmをはかる。ほかの４個は柱穴と考えられ、径40～43cm、深さ68～74cmをはかる。柱穴間の距離は、長辺で2.4m、短辺で2.3m をはかり、各柱穴間を結ぶ形状はほぼ正方形を呈する。

カマドは、北西の壁の中央に位置し、壁外に15cm張り出している。袖は、上部が削平されているが、砂質ロームを含む黒褐色土で構築されている。底面は、円形に４cm程掘り込まれているが、両隣には深さ約10cmで、焼土粒子を多く含むピットが２個検出された。



第246図　041号住居跡及びカマド

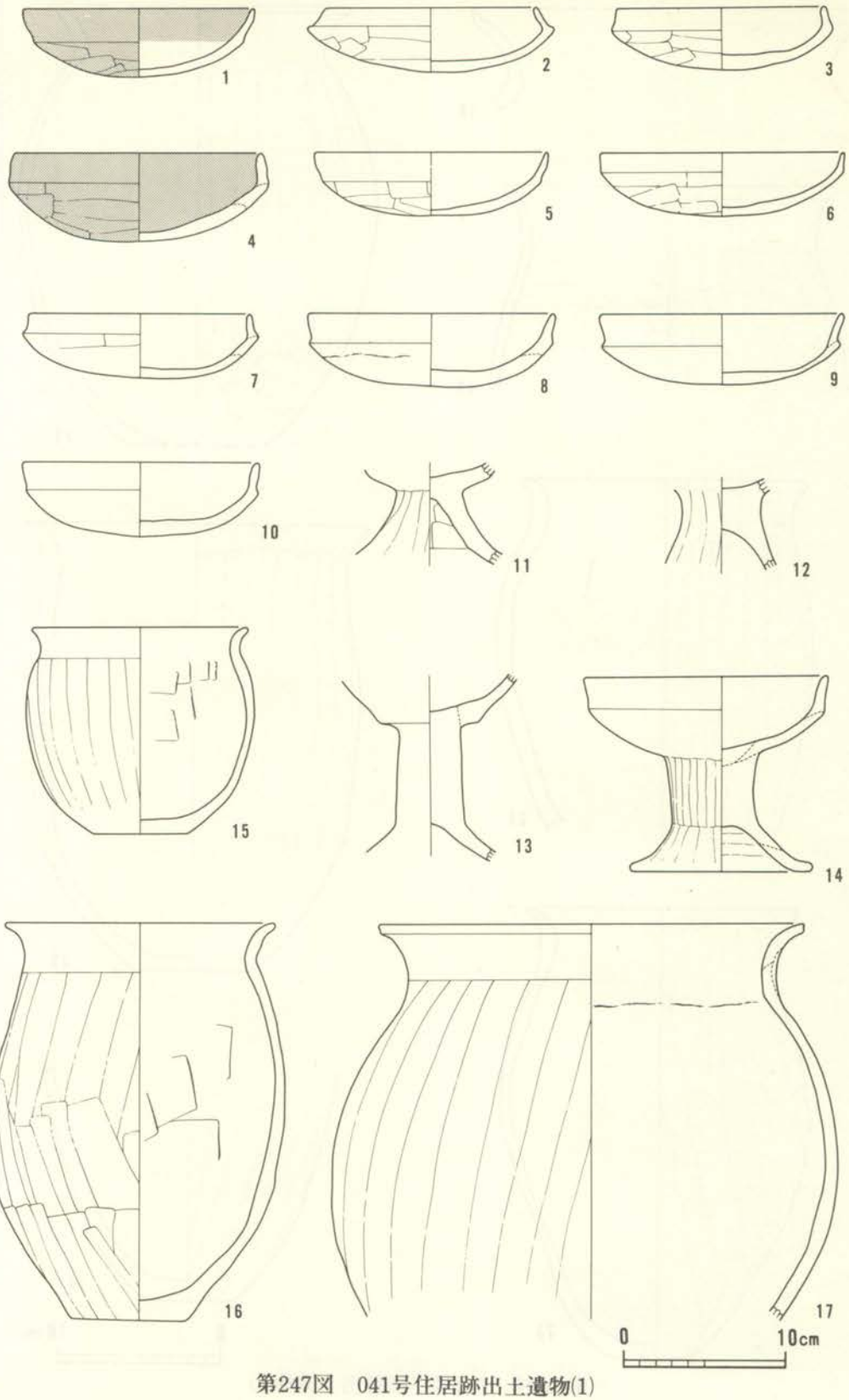
荒掘り面は、比較的平坦であるが、不整形のピットが3個検出された。住居中央に検出されたピットの覆土は、下部では砂質ロームを主体にした黄褐色土であり、上部（住居床面）は黒褐色土を主体にして砂質ロームを含む良くしまった貼床になっている。ほかの2個のピットも同様の覆土である。

遺物の出土状況

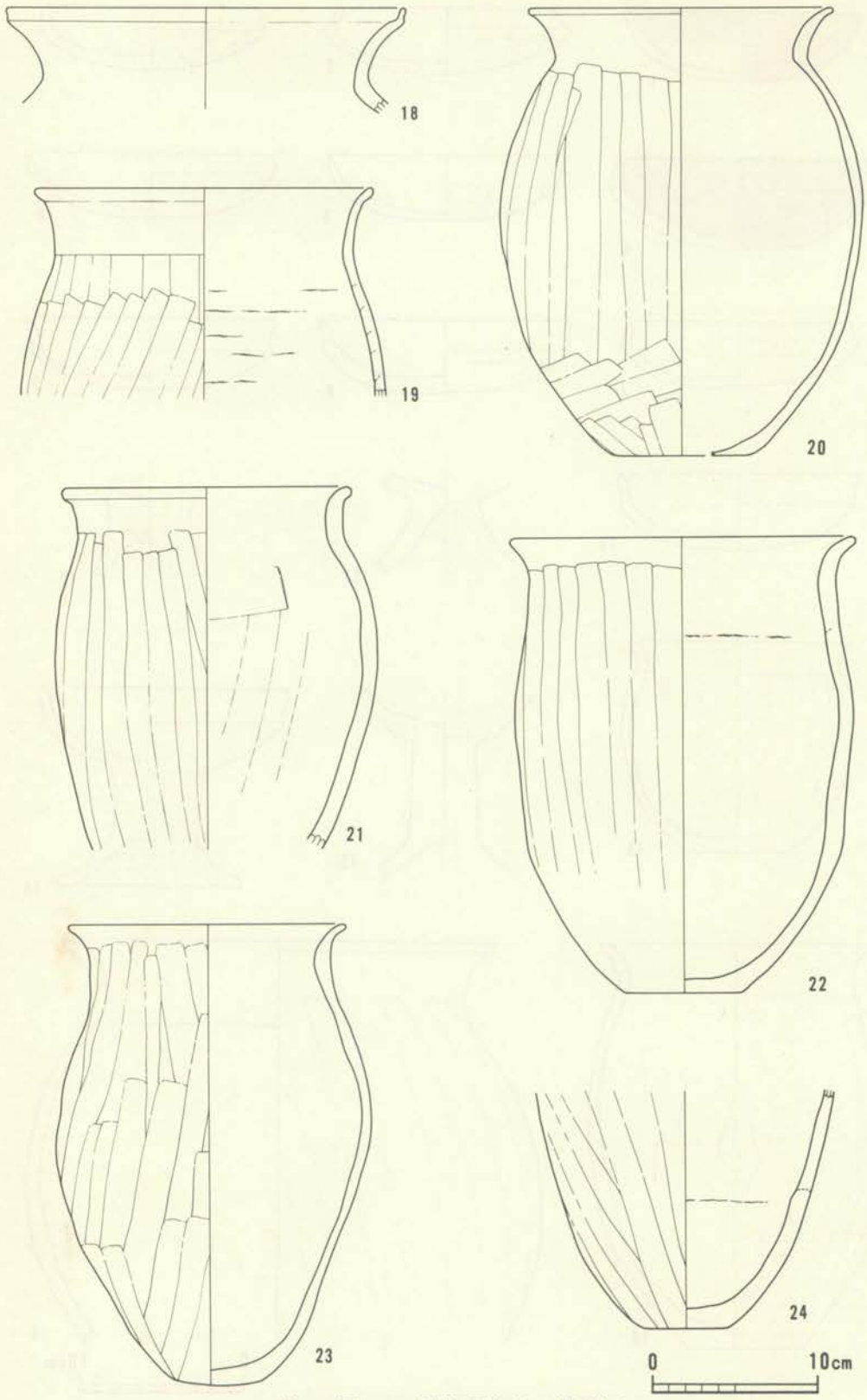
本址からは、300片以上の土器が出土した。土器は、床面あるいは床面近くから出土するものが多く、完形あるいは完形に近い土器も多い。また、住居中央部から出土した土器は少なく、壁側が多いが、特に、北東の壁近くと南西の壁近くから出土した土器が多い。北東の壁近くから出土した土器は坏が多く、完形の状態のままの出土であり、南西の壁近くから出土した土器は甕が多いが、破片の状態で出土し、完全に復元されたものは少ない。

041号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坏	完形	14.2 4.3	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面ナデ。赤彩。	床面直上	
2	坏	ほぼ完形	13.0 4.0	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面直上	
3	坏	完形	12.8 3.9	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面密着	
4	坏	完形	15.2 5.5	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面ナデ。赤彩。	床面密着	
5	坏	完形	14.4 3.9	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面ナデ。赤彩。	床面直上	
6	坏	完形	15.0 3.9	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面直上	
7	坏	完形	13.6 3.9	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。	床面直上	
8	坏	ほぼ完形	15.2 4.4	口縁部内外面ヨコナデ。	床面直上	器面磨耗
9	坏	ほぼ完形	15.0 4.3	口縁部内外面ヨコナデ。	床面密着	器面磨耗
10	坏	完形	14.4 4.5	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。	床面直上	
11	高坏	脚部⅔	—— ——	脚部内外面ヘラケズリ。坏部内面ナデ。	覆土	

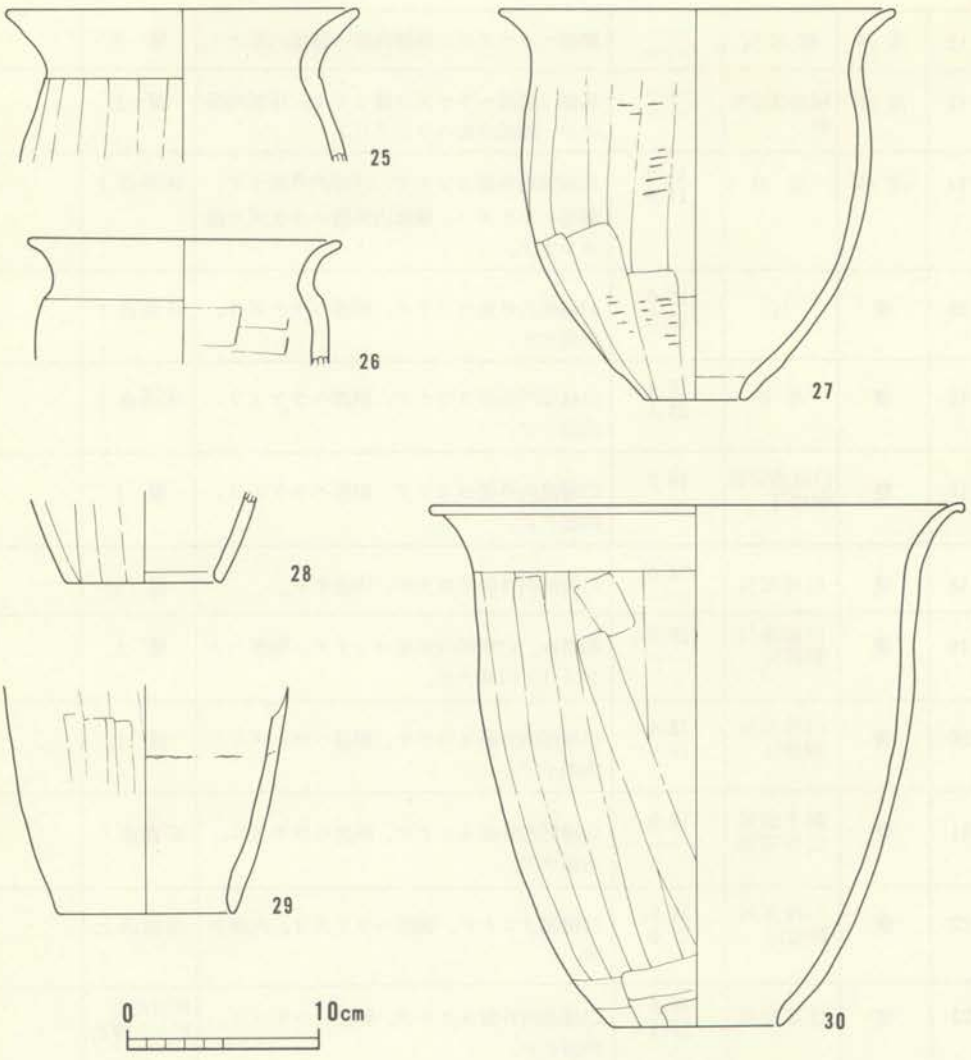


第247図　041号住居跡出土遺物(1)



第248図　041号住居跡出土遺物(2)

12	高 坏	脚 部 3/3	—— ——	脚部ヘラケズリ。坏部内面・脚部内面ナデ。	覆 土	
13	高 坏	脚部ほぼ完形	—— ——	坏部・脚部ヘラケズリ後ミガキ。坏部内面ナデ、脚部内面ヘラケズリ。	覆 土	
14	高 坏	完 形	14.9 11.8	口縁部内外面ヨコナデ、坏部内外面ナデ、脚部ヘラケズリ、裾部内外面ヘラケズリ後ヨコナデ。	床面直上	
15	甕	1/3	(13.0) 12.5	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面直上	
16	甕	完 形	16.4 24.1	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面直上	
17	甕	口縁部完形 胴部1/2	16.2 ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	覆 土	
18	甕	口縁部1/2	(24.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ。	覆 土	
19	甕	口縁部1/6 胴部1/4	(20.0) ——	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	覆 土	
20	甕	口縁部1/2 胴部1/3	(18.4) 27.0	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	覆 土	
21	甕	胴下部1/2 以外完形	17.0 ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面直上	
22	甕	口縁部1/2 胴部1/3	(21.0) 27.0	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面直上	
23	甕	ほぼ完形	16.6 27.3	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面直上 ピット覆土	
24	甕	胴下部1/3 底部完形	—— ——	胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面密着	
25	甕	1/3	(18.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	覆 土	
26	甕	1/6	(16.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	覆 土	
27	甑	2/3	20.6 20.5	口縁部内外面ヨコナデ、胴部タタキ後ヘラケズリ。内面ナデ。	覆 土	
28	甑	胴下部1/4	—— ——	胴部ヘラケズリ。	覆 土	
29	甑	胴下部1/5	—— ——	胴部ヘラケズリ。	覆 土	器面磨耗
30	甑	2/3	(28.0) 26.8	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面直上	



第249図　041号住居跡出土遺物(3)

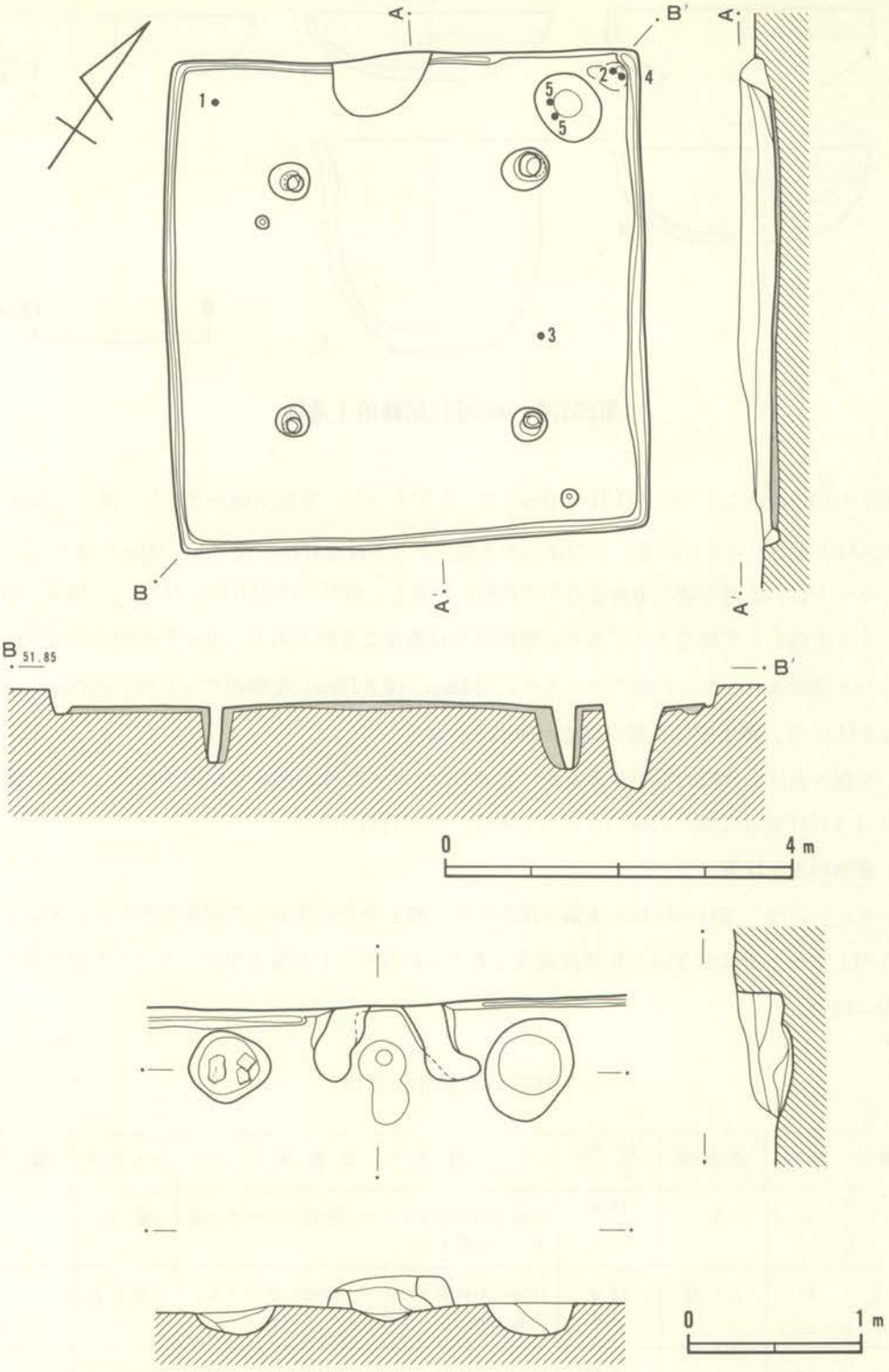
045号住居跡（第250・251図）

概要

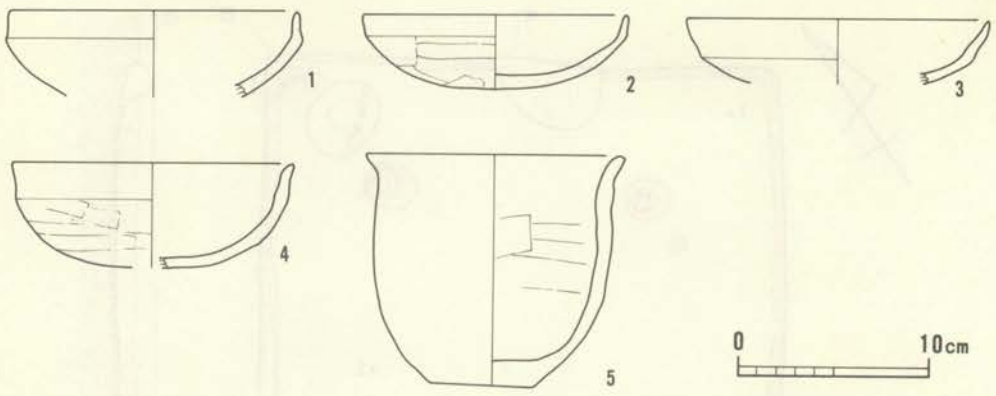
本址は、 044号跡の２ｍ程東側に位置する。地山は比較的平坦である。

構造

本址は、一辺5.57ｍの整った方形を呈する。北西の壁の一部を除き、 幅10～20cm、 深さ４～８cmの壁溝が全周する。 床は、 砂質ロームを主体にした厚さ５cm程の貼床で、全体に堅い。ピットは７個検出された。南側のコーナー近くのピットは径70cm、深さ94cmをはかり、貯蔵穴と考えられる。各コーナーの対角線上に位置する４個のピットは径15～26cm、深さ76～86cmをはかり、柱穴と考えられる。この柱穴の覆土は周囲に比べ、非常に軟らかく、床面を剝がした



第250図　045号住居跡及びカマド



第251図　045号住居跡出土遺物

荒掘り面においては4個共径34～50cmのピットであった。床面で検出された、径15～26cmの柱穴は柱の太さと考えられる。このほかの2個のピットは径17cm、深さ40～90cmをはかる。

カマドは、北西の壁の中央よりやや西側に位置し、壁外への張り出しはない。袖は、砂質ロームを主体にして構築されており、壁際の方が遺存は良好である。カマドの袖の両側にはピットが2個検出された。右側のピットは、径48cm、深さ15cm、左側のピットは、径40cm、深さ13cmをはかり、覆土中に多量の焼土が検出された。

荒掘り面は、比較的平坦であるが、北側のコーナーに浅い凹みが検出された。また、前述したように柱穴は径34～50cmのピットであることが判明した。

遺物の出土状況

本址からは、約150片程の土器が出土した。覆土中からは多くの細片が出土し、床面近くから出土する土器は少ない。6は貯蔵穴と考えられるピットの覆土中から出土した甕であり、完形に近い。

045号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坏	¼	(13.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。	覆土	
2	坏	完形	14.0 4.4	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面密着	
3	坏	¼	(17.8) ——	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ミガキ。	床面直上	
4	坏	⅓	(14.6) ——	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面密着	

5	甕	ほぼ完形	13.7 12.1	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。 内面一部ヘラケズリ。	ピット	器面磨耗

046号住居跡（第252～255図）

概要

本址は、 039E号跡の１ｍ程東側に位置する。地山は比較的平坦である。北東部分は、住居跡構築以前の風倒木の痕跡を残すピットの上に床、カマドを構築している。

構造

本址は、長軸6.30m 、短軸6.10m をはかり、長軸は北西を向く。形状は方形を呈する。床は、暗褐色土を主体にした厚さ８cm程の貼床で、全体に堅い。ピットは８個検出された。東側のコーナー近くのピットは柱穴も含め５個が重複し、複雑な形状であるが、深さは70～90cmをはかる。各コーナーの対角線上に位置する４個のピットは柱穴と考えられ、径35～60cm、深さは71～80 cmをはかる。

カマドは、北東の壁の中央よりやや北西側に位置し、壁外に23cm張り出している。本址のカマドは、本址より古い時期のピットの東側に砂質ロームを貼って構築されており、袖の内側はくびれをもたず、壁に対して直角方向に検出された。

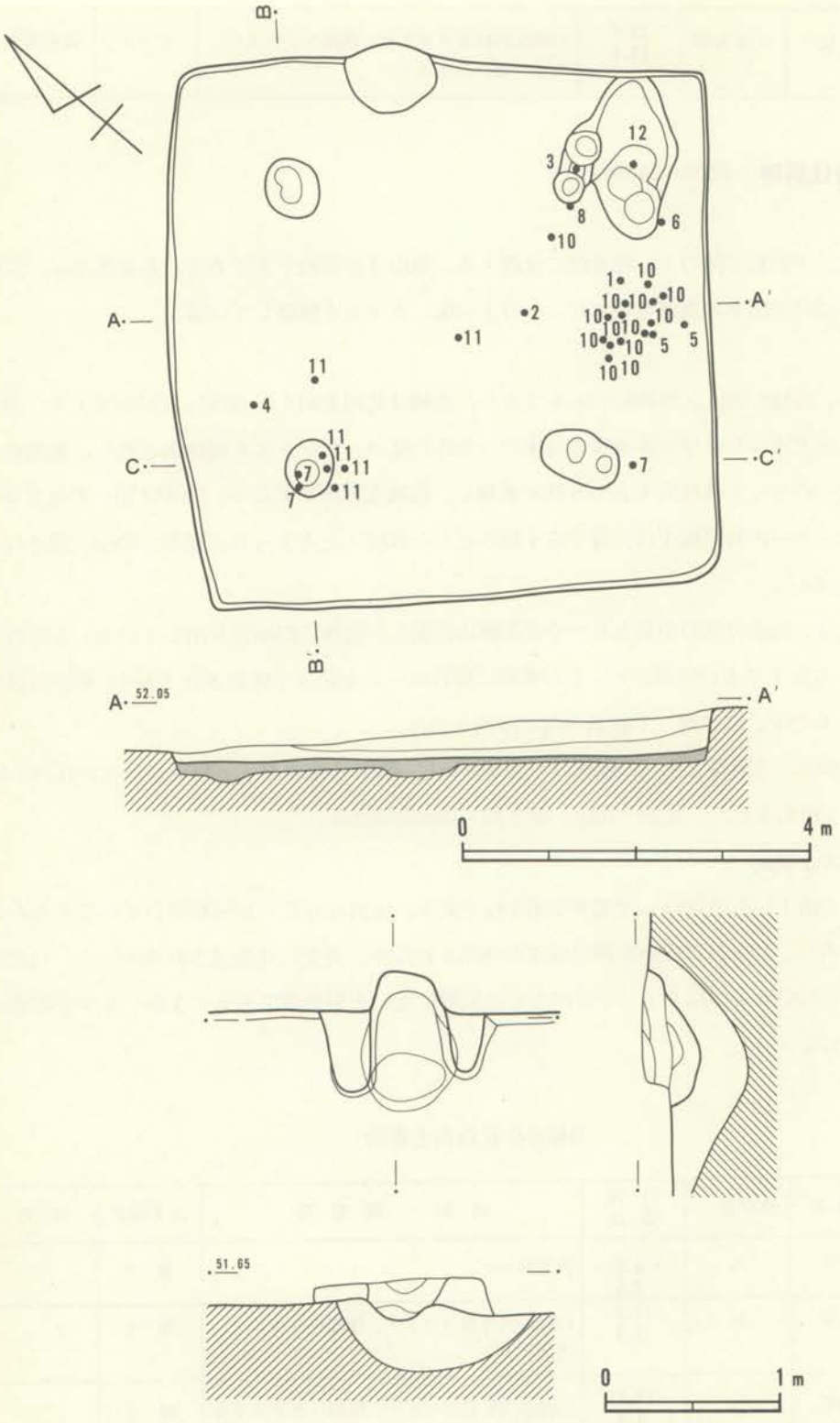
荒掘り面は、北西及び南西の壁際の一部が60cm程の幅で中央より５cm程低い。このほか７個のピットが検出された。径20～70cm、深さ13～18cmをはかる。

遺物の出土状況

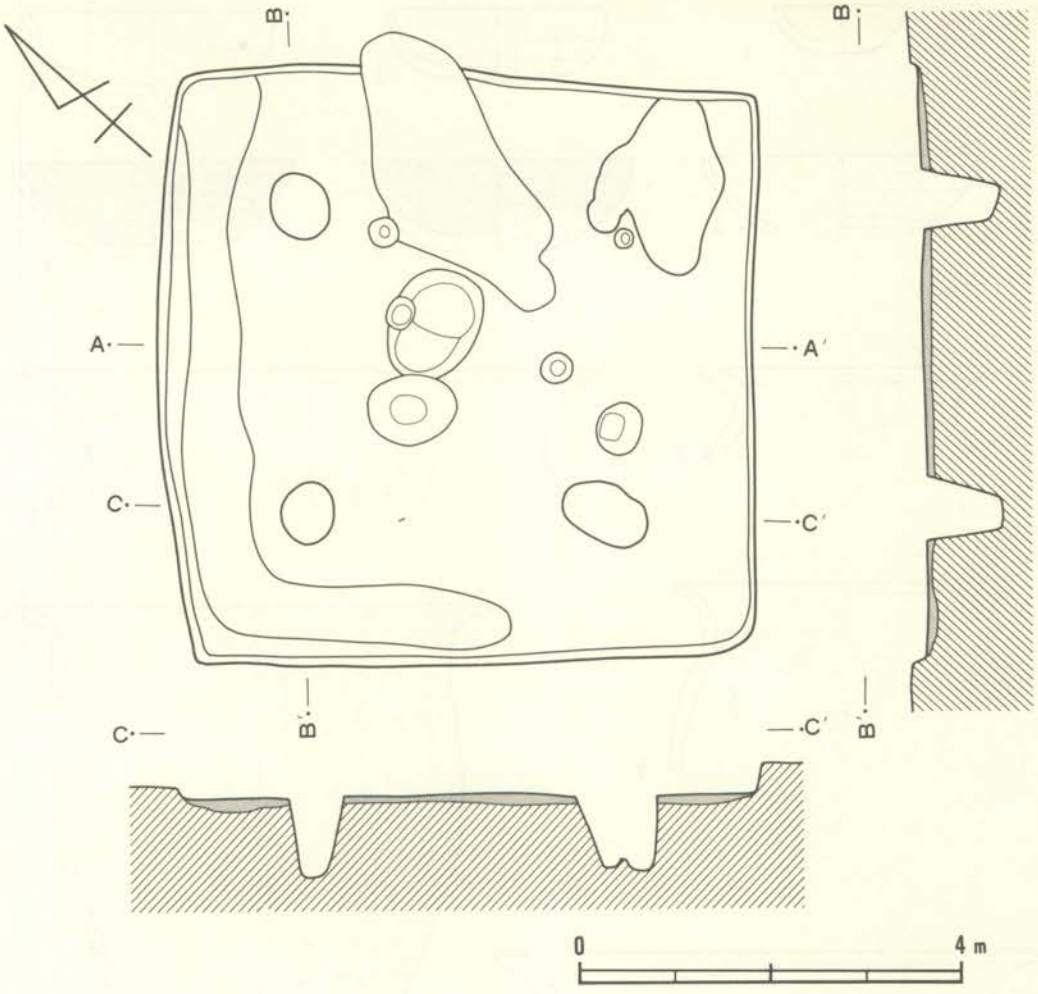
本址から出土した遺物は、土器が200片程である。床面から５～10cm程浮いているものがほとんどであり、10・11は広い範囲に破片が検出されたが、完全には復元されなかった。12は東側のピットの中から口縁を下にして出土した完形に近い大形の甕である。なお、カマド周辺からの遺物はなかった。

046号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坏	½	(6.8) 2.5	内外面ナデ。	覆土	
2	坏	⅔	11.3 3.9	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ。 内面ナデ。	覆土	
3	坏	½	(13.2) 4.3	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。	覆土	

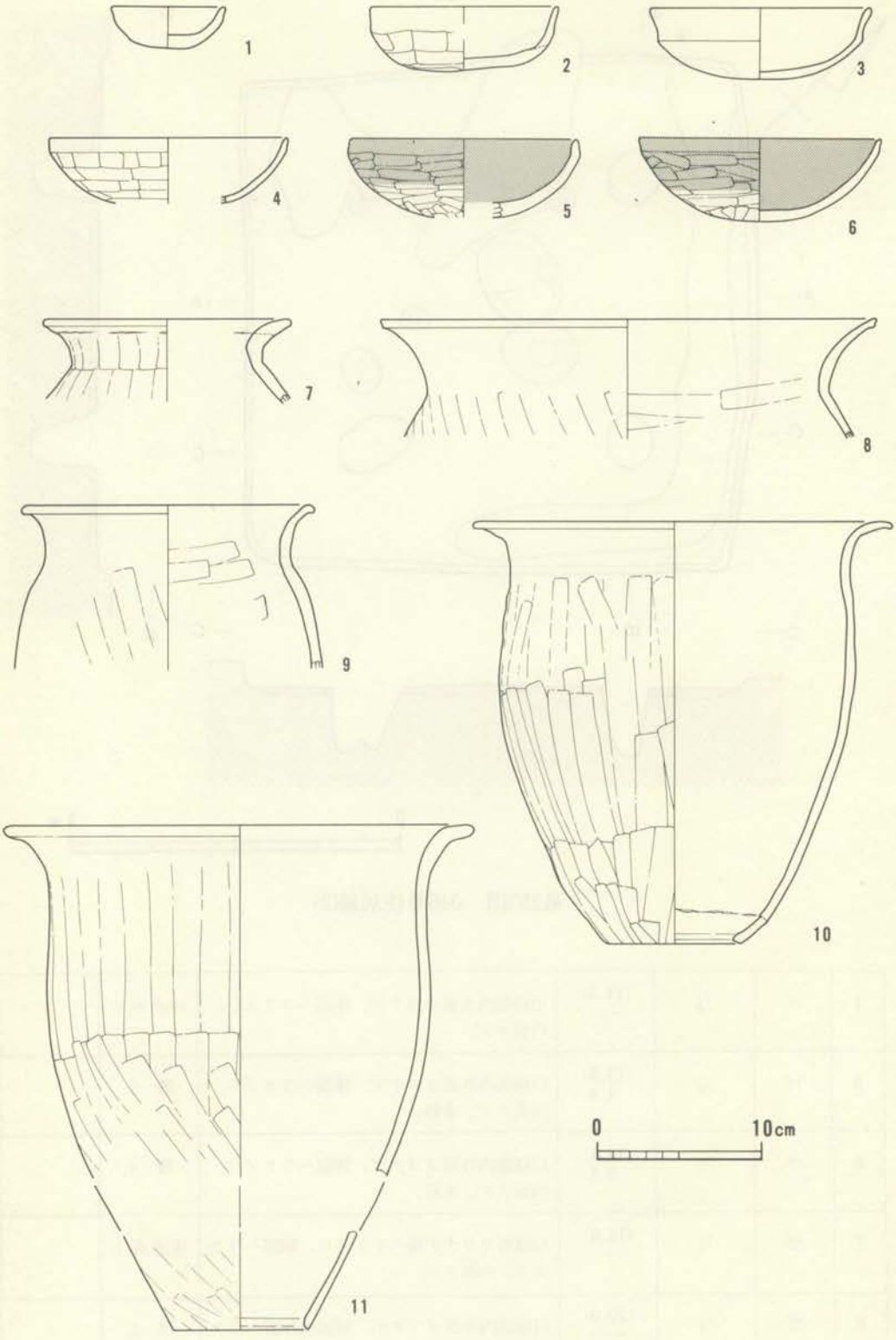


第252図　046号住居跡及びカマド(1)

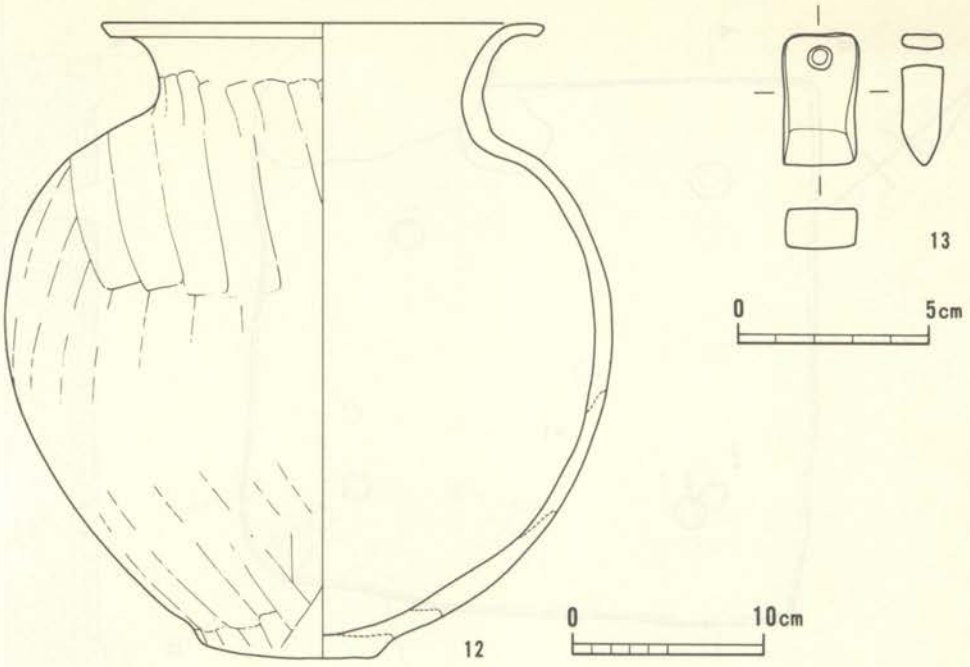


第253図　046号住居跡(2)

4	坏	1/3	(14.2) ——	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面直上	
5	坏	1/4	(13.6) 4.8	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面ナデ。赤彩。	覆　土	
6	坏	1/2	(14.6) 5.1	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面ナデ。赤彩。	覆　土	
7	甕	1/2	(14.5) ——	口縁部ヨコナデ後ヘラケズリ。胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面直上	
8	甕	1/4	(30.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ヘラケズリ後ナデ。	覆　土	



第254図　046号住居跡出土遺物(1)



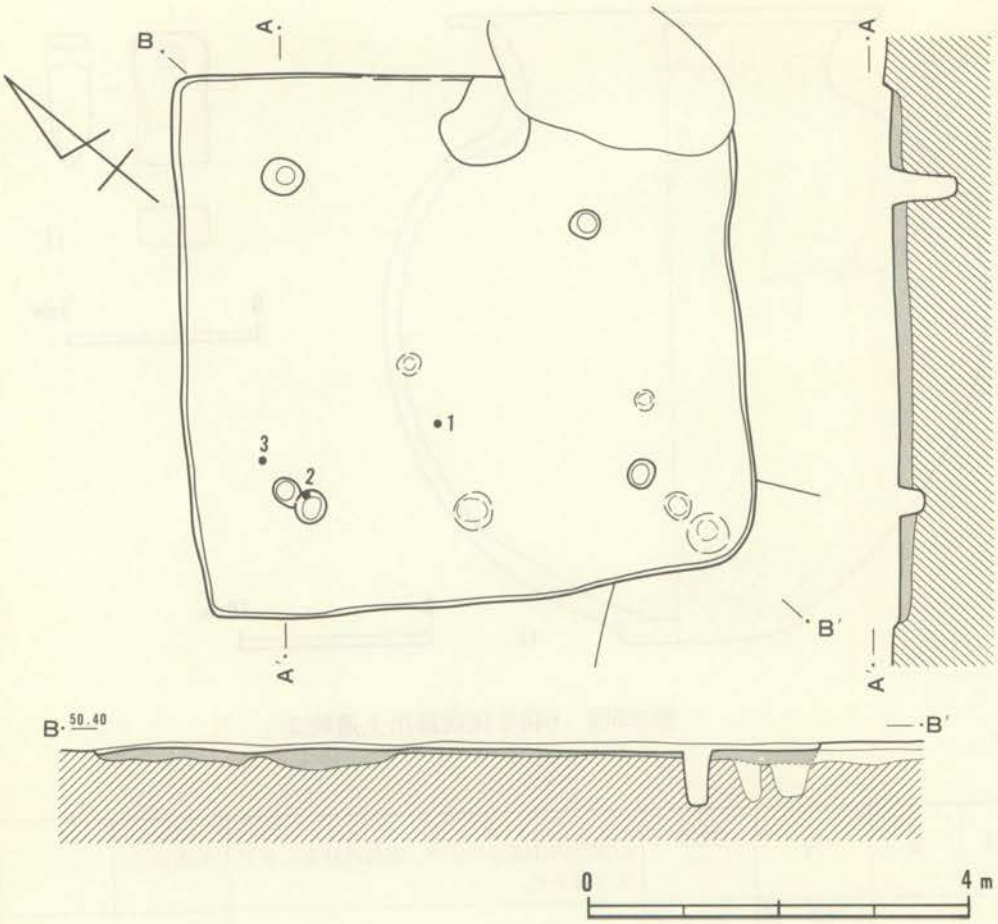
第255図　046号住居跡出土遺物(2)

9	甕	1/3	(17.0)	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ヘラケズリ後ナデ。	床面直上	
10	甑	口縁部・胴上部1/4 胴下部1/2	(25.5) 25.0	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、内面ナデ。	覆　土	
11	甑	口縁部完形 胴部1/2	27.8 (20.9)	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面直上	
12	甕	ほぼ完形	23.0 33.0	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	ピット	
13	石製品	長さ 3.5cm、最大幅 2.0cm、厚さ 1.0cmをはかる。基部に 0.6cmの小孔が認められる。全面が研磨されており、磨製石斧状を呈する。滑石。覆土。				

055A号住居跡（第256・257図）

概要

本址は、台地上南側の先端部近くに位置し、055B号跡の北側のコーナーを切っている。なお、地山まで削平されているため、住居跡の遺存は極めて悪く、確認面がほぼ床面であった。また、東側のコーナー付近には攪乱があり、床面及びカマドの一部が破壊されている。



第256図　055A号住居跡

構造

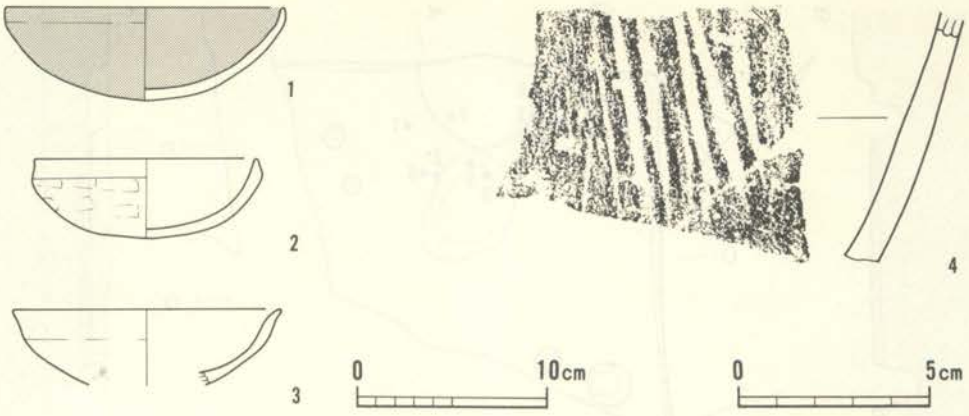
本址は、長軸5.90m、短軸5.60mをはかり、長軸は北西を向く。南側のコーナーがやや丸みを有するが、全体としては、方形を呈する。床は、黒褐色土を主体にした貼床である。ピットは5個検出された。これらのピットは径25～38cm、深さ28～67cmをはかり、配置は整っていないが柱穴の可能性が強い。

カマドは、北東の壁のやや東側に位置するが、削平されていたためにほとんど遺存しておらず、詳細は不明である。

荒掘り面で検出されたピットは、径20～40cm、深さ20～40cmをはかる。北側のコーナーに検出された2個のピットは、055B号跡に伴うものと考えられる。

遺物の出土状況

本址は、覆土の大半が削平されていたため、出土した遺物は、すべて床面近くのものばかりで量は少なく、土器が30片程出土したのみである。



第257図　055A号住居跡出土遺物

055A号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坏	ほぼ完形	14.4 4.9	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ。赤彩。	床面密着	
2	坏	ほぼ完形	11.5 4.1	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。	ピット	
3	坏	¼	(13.8)	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ。	床面密着	
4	甕			断面三角形を呈する使用痕が7条認められる。	床面直上	

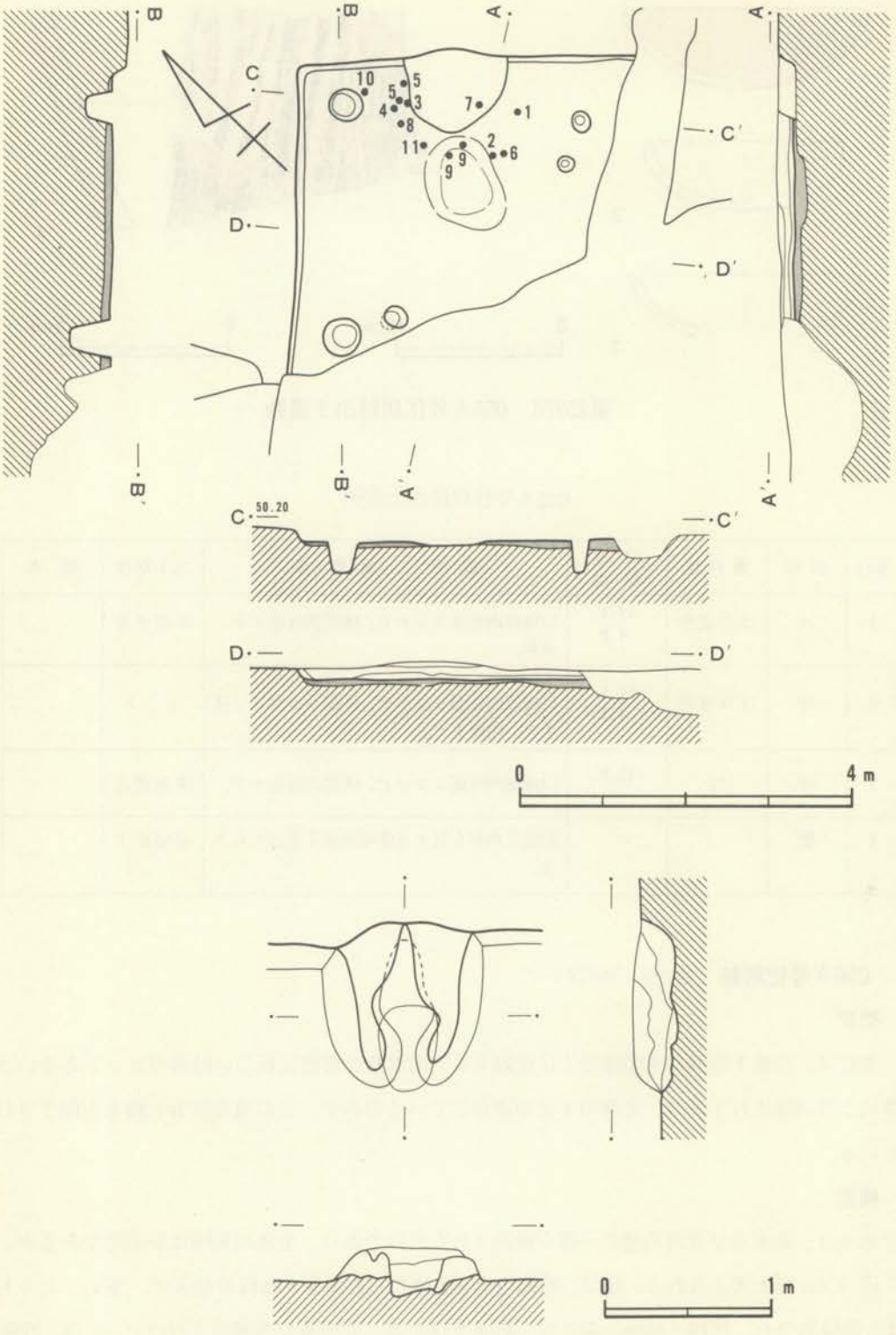
056A号住居跡（第258・259図）

概要

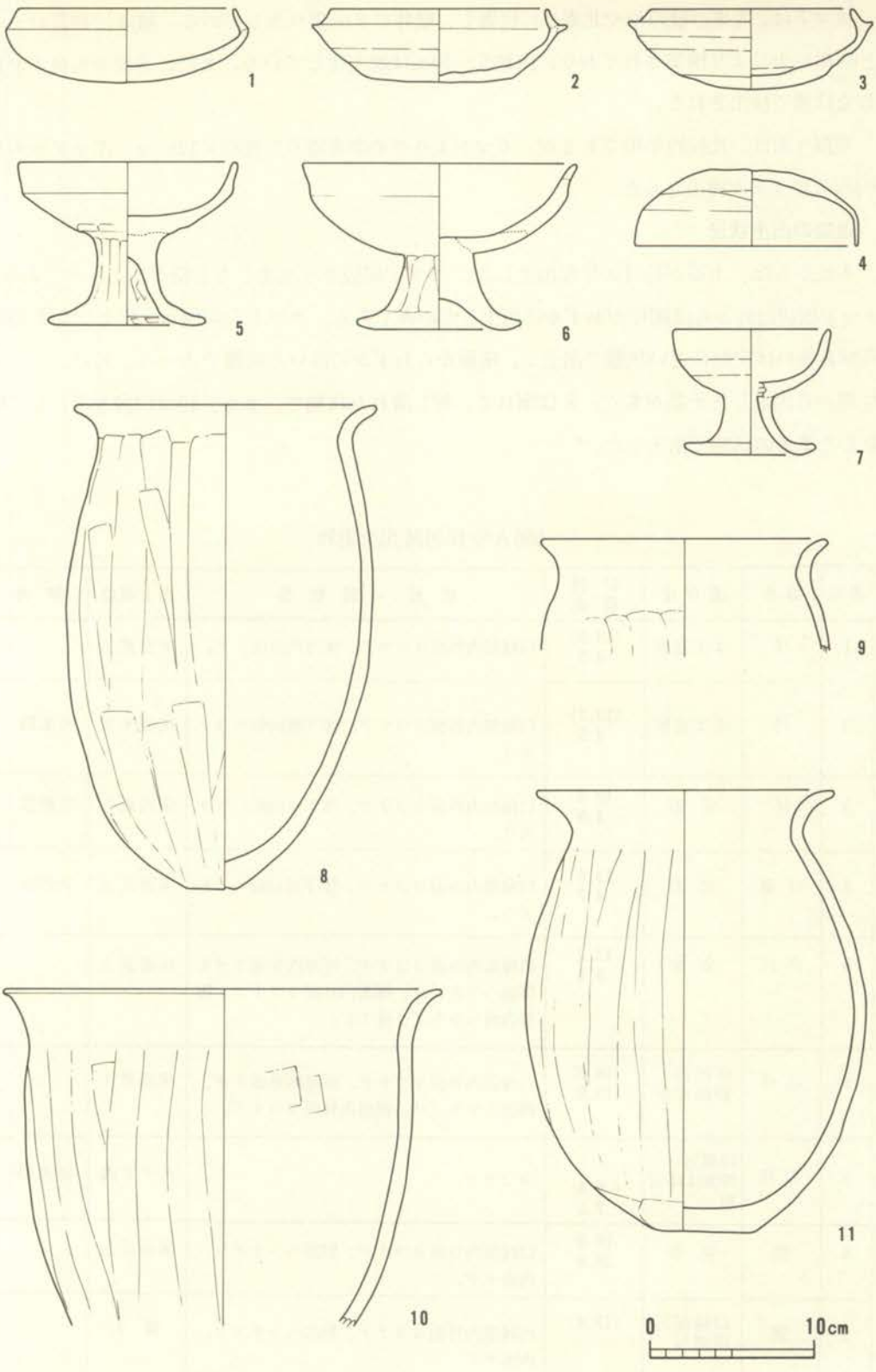
本址は、台地上南側の先端部近くに位置する。南側及び東側は新しい時期のピットあるいは溝により破壊されており、北側の半分が遺存しているのみで、この遺存部分も覆土が削平されている。

構造

本址は、北東及び北西の壁の一部が検出されただけであり、全体の規模は不明瞭であるが、一辺 4.4m 程と考えられる。床は、暗褐色土を主体にした厚さ8cm程の貼床で、堅い。ピットは5個検出され、径16～45cm、深さ32～45cmをはかる。北側及び西側の大形のピットは、貯蔵穴と考えられる。柱穴は、東側及び西側に検出されたが、北側の部分は精査したにもかかわらず、検出されなかった。



第258図　056A号住居跡及びカマド



第259図　056A号住居跡出土遺物

カマドは、北東の壁のやや北寄りに位置し、壁外に7cm張り出している。袖は、砂質ロームと暗褐色土により構築されており、内側5～10cmは焼土化している。また、底面でも焼土が良好な状態で検出された。

荒掘り面は、比較的平坦であるが、カマドよりやや中央寄りに径85×120 cm、深さ7cmの楕円形のピットが検出された。

遺物の出土状況

本址からは、土器が約 100片程出土した。カマド周辺から出土した土器がほとんどであり、カマド周辺以外からは細片がわずかに出土したのみである。カマドの両側から出土した土器は、完形あるいは完形に近い状態で出土し、床面からわずかに浮いた状態であった。特に、カマド左側から出土した土器が多く、8は倒れて、押し潰れた状態で、また、10は口縁を下にして倒立したままの状態で出土した。

056A号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坏	ほぼ完形	(13.0) 4.5	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ。	床面直上	
2	坏	ほぼ完形	(13.2) 4.5	口縁部内外面ヨコナデ、体下部回転ヘラケズリ。	床面密着	須恵器
3	坏	完形	12.3 4.9	口縁部内外面ヨコナデ、体下部回転ヘラケズリ。	床面直上	須恵器
4	坏蓋	完形	13.5 4.7	口縁部内外面ヨコナデ、体下部回転ヘラケズリ。	床面直上	須恵器
5	高坏	完形	13.2 9.9	口縁部内外面ヨコナデ、坏部内外面ミガキ、脚部ヘラケズリ、裾部内外面ヨコナデ。脚部内面ヘラケズリ後ナデ。	床面直上	
6	高坏	坏部1/3 脚部完形	(16.8) 10.0	口縁部内外面ヨコナデ、坏部内外面ナデ、脚部ヘラケズリ、裾部内外面ヨコナデ。	床面直上	
7	高坏	坏部1/3 脚部ほぼ完形	(9.8) 7.5	ヨコナデ。	カマド内	須恵器
8	甕	完形	18.0 28.8	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面直上	
9	甕	口縁部1/3 胴部1/6	(17.4) ——	内縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	覆土	

10	甑	胴下部以完形	16.6 ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面直上	
11	甕	完　形	17.6 26.3	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面密着	

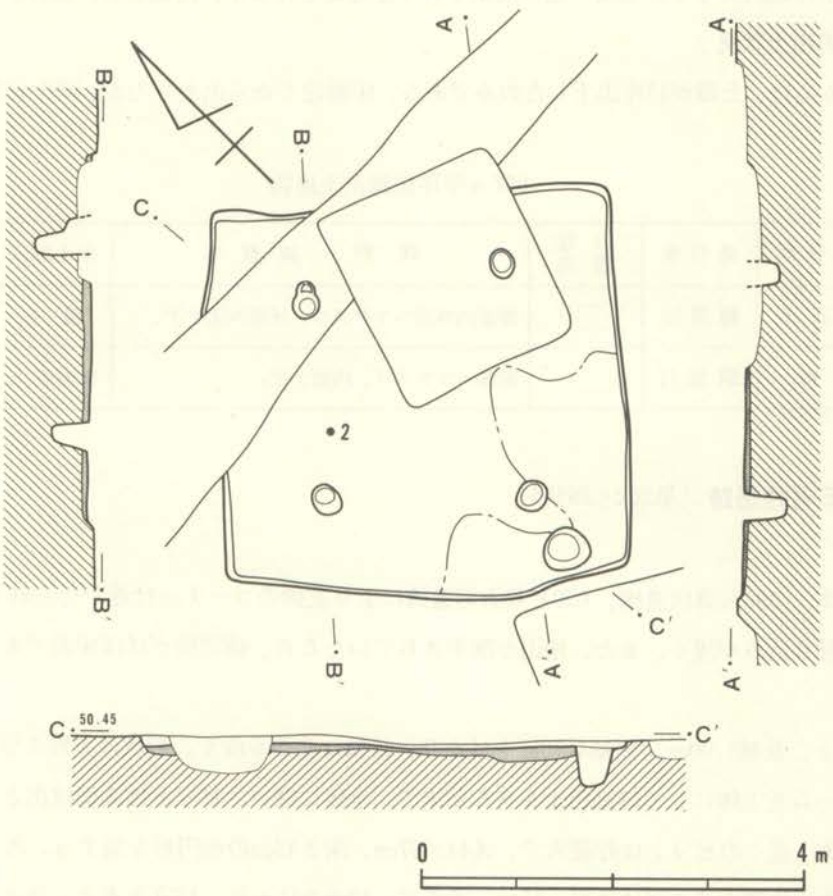
057A号住居跡（第260・261図）

概要

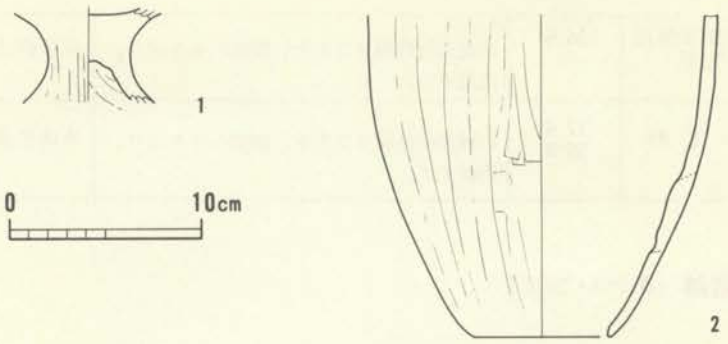
本址は、096号溝状遺構、057B号方形遺構により、壁及び床面を切られている。なお、本址付近は地山が削平されており、覆土の大半が失なわれていた。

構造

本址は、長軸4.35m、短軸4.10mをはかり、長軸は北西を向く。形状は方形を呈する。床は、暗褐色土と砂質ロームによる厚さ6cm程の貼床で、南側のコーナー付近を除いた範囲が堅い。ピットは床面で3個、057B・096号遺構の底面から2個検出された。南側のコーナー寄りの



第260図　057A号住居跡



第261図　057A号住居跡出土遺物

ピットは径55cm、深さ41cmをはかり、貯蔵穴と考えられる。ほかの4個は径25～30cm、深さ36～58cmをはかり、柱穴と考えられる。東側の柱穴はやや北に寄りすぎており、各柱穴間を結ぶ形状は歪んだ方形を呈する。

カマドは北西あるいは北東の壁に構築されたと考えられるが、破壊され、遺存していない。

遺物の出土状況

本址からは、土器が15片出土したのみである。床面近くから出土したが、細片が多い。

057A号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	高坏	脚部½	― ―	脚部内外面ヘラケズリ。坏部内面ナデ。	覆土	
2	甕	胴部¼	― ―	胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面直上	

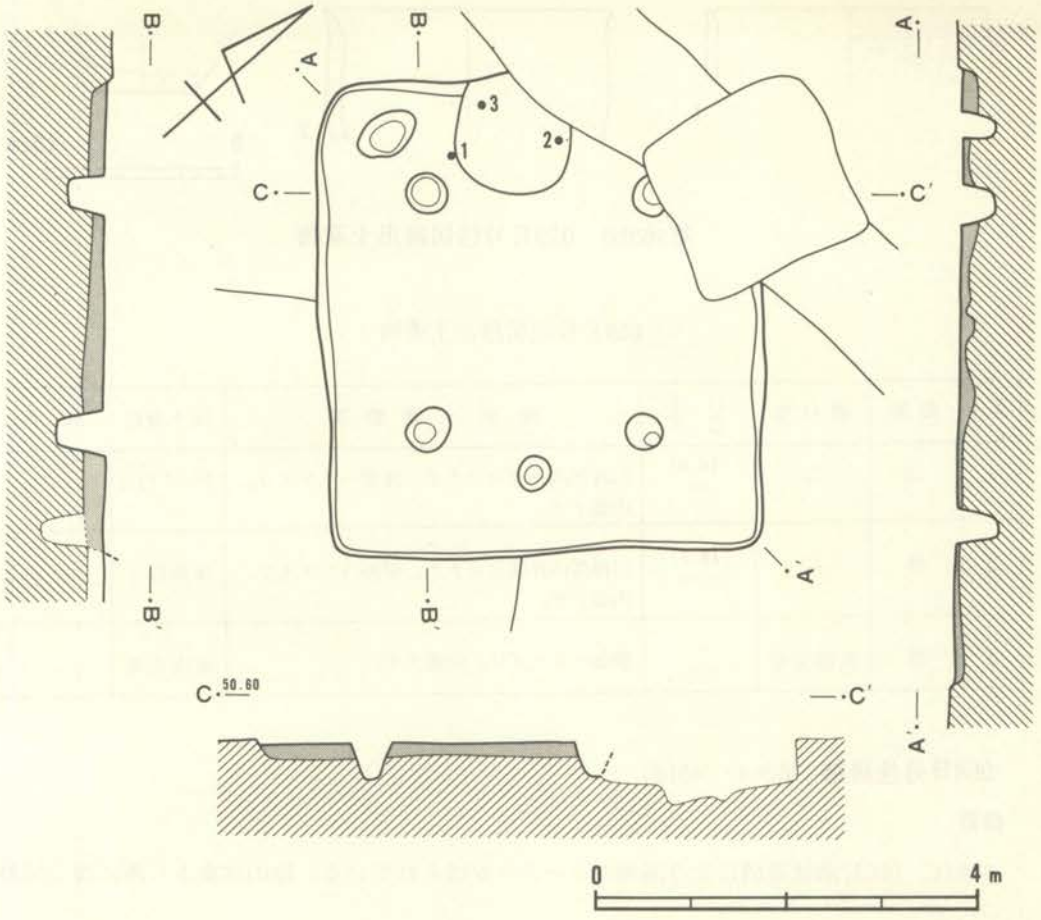
059E号住居跡（第262・263図）

概要

本址は、096号溝状遺構、059F号方形遺構により北側のコーナー付近が切られている。地山への掘り込みが浅く、また、地山が削平されていたため、確認面がほぼ床面であった。

構造

本址は、長軸5.00m、短軸4.70mをはかり、長軸は北西を向く。形状は方形を呈する。床は、砂質ロームを主体にして暗褐色土を含む貼床で、全体に堅い。ピットは6個検出された。西側のコーナー近くのピットは貯蔵穴で、径44×67cm、深さ42cmの楕円形を呈する。各コーナーの対角線上に位置する4個は径37～45cm、深さ30～49cmをはかり、柱穴と考えられる。柱穴間の



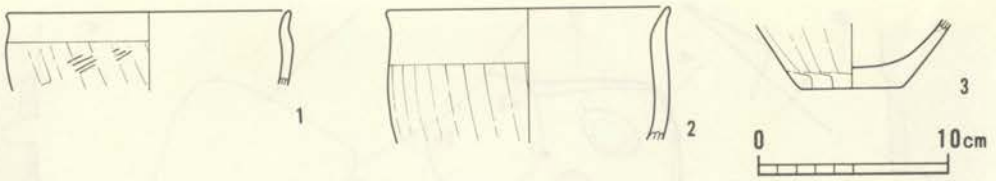
第262図　059Ｅ号住居跡

距離は、長辺で 2.5m 、短辺で 2.4m をはかり、各柱穴間を結ぶ形状はほぼ正方形を呈する。

カマドは、北西の壁のほぼ中央に位置し、わずかではあるが壁外に張り出しを有する。本址のカマドは、 096号遺構により破壊され、なお、上部が削平されており、遺存状態は極めて悪い。

遺物の出土状況

本址は、覆土の大半が削平されていたため、出土した遺物はわずかで、ほとんどがカマドの周辺から出土した。



第263図　059Ｅ号住居跡出土遺物

059Ｅ号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	埦	1/6	(14.6) ——	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面ナデ。	カマド付近	
2	甕	1/8	(14.7) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面直上	
3	甕	底部完形	—— ——	胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面密着	

064Ｂ号住居跡（第264・265図）

概要

本址は、096号溝状遺構により南側のコーナーが切られている。地山は東から西に緩く傾斜している。

構造

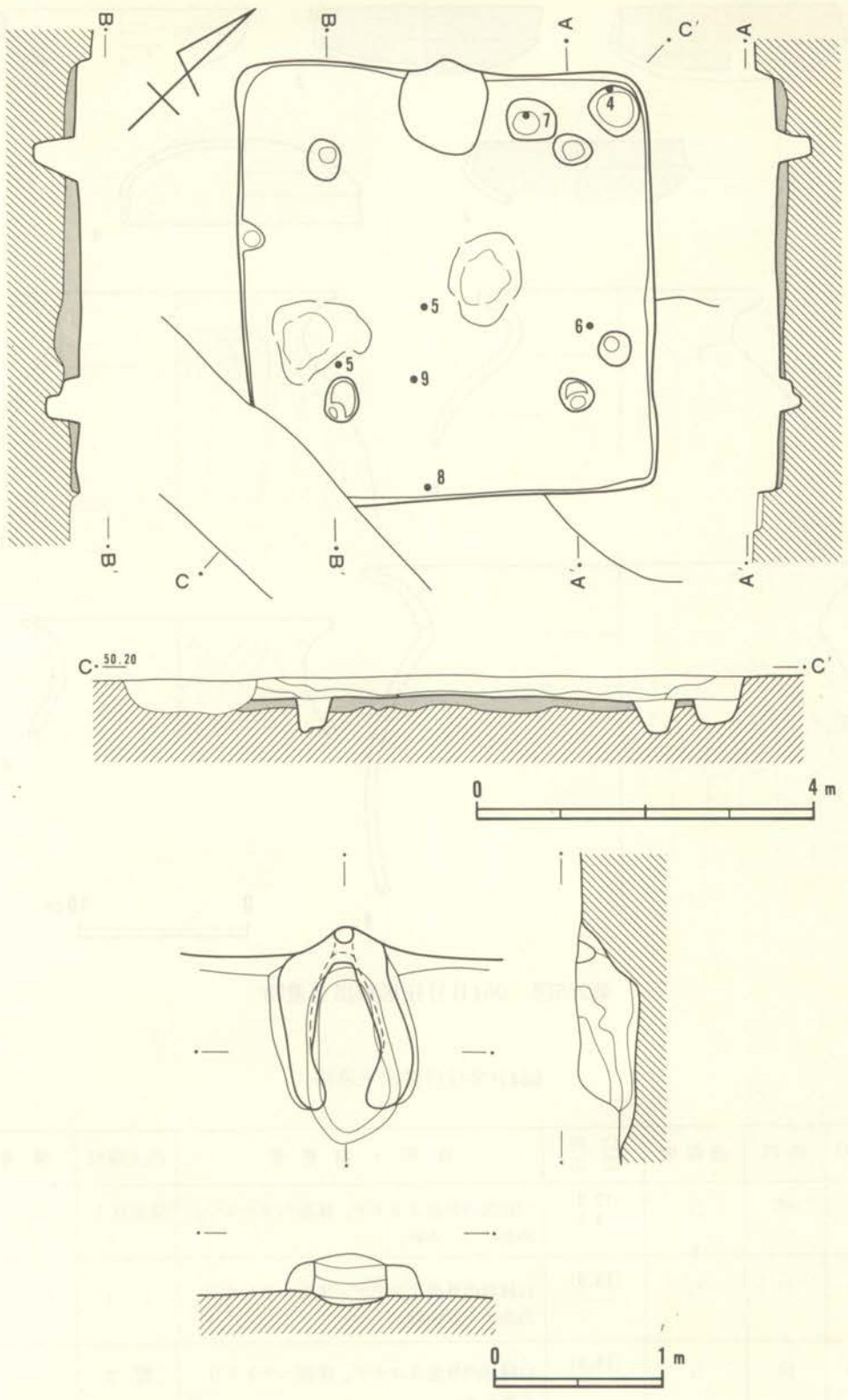
本址は、一辺4.90m の方形を呈する。床は、暗褐色土を主体にした貼床で、全体に堅い。ピットは８個検出された。北側のコーナー及びカマドの隣のピットは貯蔵穴と考えられる。コーナー近くのピットは径60cm、深さ30cm、カマドの隣のピットは径50cm、深さ50cmをはかる。各コーナーの対角線上に位置する４個のピットは径34～40cm、深さ30～50cmをはかり、柱穴と考えられる。柱穴間の距離は、長辺で 3.0m 、短辺で 2.9m をはかり、各柱穴間を結ぶ形状はほぼ正方形を呈する。北東の壁側と南西の壁際のピットは共に16cmの深さである。

カマドは、北西の壁の中央に位置し、壁外に27cm張り出している。袖は、砂質ロームで構築されており、内側８cm程は焼土化している。煙道は径10cmである。カマドの底面も焼土化しており、炭化粒子が多く検出された。

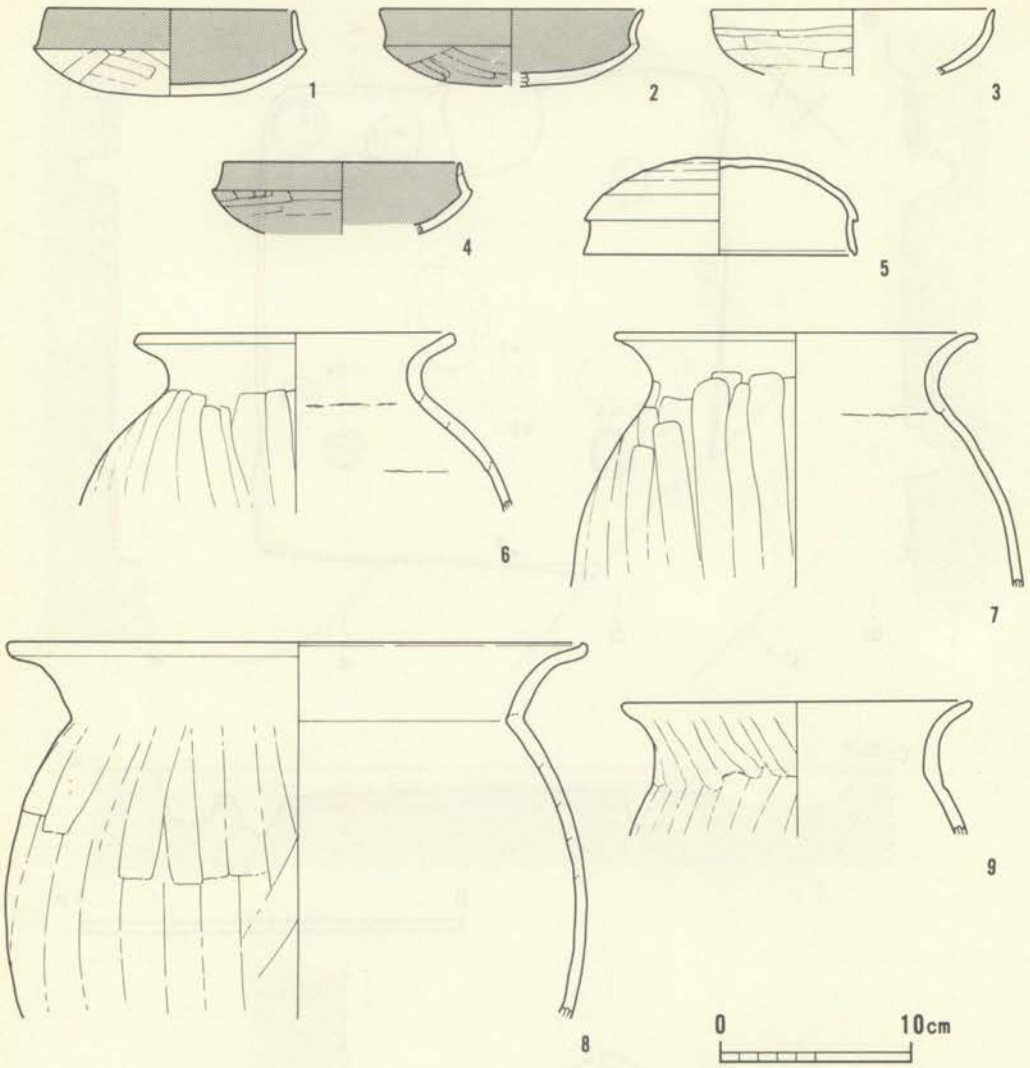
荒掘り面では、住居中央と南西の壁側に径１m 前後の不整円形の浅い凹みが検出された。

遺物の出土状況

本址からは、土器が 150片程出土した。東側のコーナー付近と南側の柱穴付近に床面近くから破片で出土したものがほとんどで、カマド周辺からの出土はなかった。



第264図　064Ｂ号住居跡及びカマド



第265図　064Ｂ号住居跡出土遺物

064Ｂ号住居跡出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坏	¼	(12.8) 4.5	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面ナデ。赤彩。	床面直上	
2	坏	½	(13.9) —	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面ナデ。赤彩。	ピット	
3	坏	¼	(14.8) —	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面ナデ。	覆土	

4	坏	¼	(12.4)	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面ナデ。	ピット	
5	坏蓋	ほぼ完形	14.3 5.0	口縁部内外面ヨコナデ、体下部回転ヘラケズリ。	床面密着	須恵器
6	甕	¼	(16.4)	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面密着	
7	甕	胴下部以外完形	18.8	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	ピット	
8	甕	⅙	(30.4)	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	床面直上	
9	甕	⅛	(18.2)	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	覆土	

2．そのほかの遺構と遺物

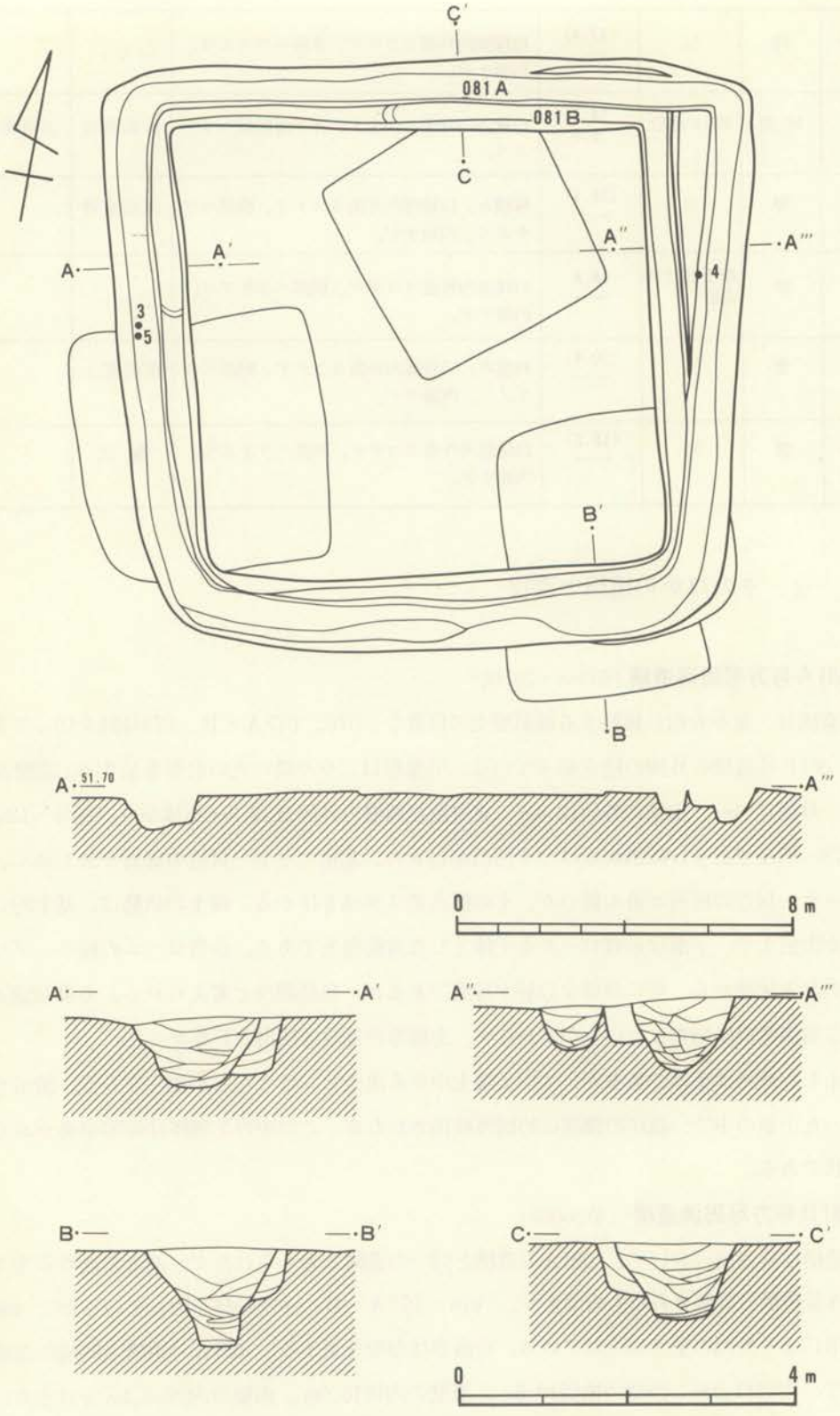
081A号方形周溝遺構（第266・267図）

本遺構は、東から西に傾斜する緩斜面上に位置し、076、077A・B、078号跡を切っており、更に081B号遺構の外側の壁を切っている。平面形は、やや隅の丸い台形を呈する。北壁が最長で、外周15.4m、南壁の外周12.8m、東壁及び西壁の外周は12.3mをはかり、幅96～124 cm、深さ78～95cmである。周溝底面はやや凹凸が目立ち、北東コーナー付近の底面が最も高く、南西コーナー付近の底面が最も低いが、その標高差は36cmをはかる。覆土の状態は、基本的には上部が黒色土で、下部は砂質ロームを主体とした黄褐色土である。砂質ロームの粒子・ブロック等の混入状態から、更に詳細な分層が可能であるが、自然埋没と考えられる。方形周溝の内側及び周溝底面は精査したにもかかわらず、土壙等の施設は検出されなかった。

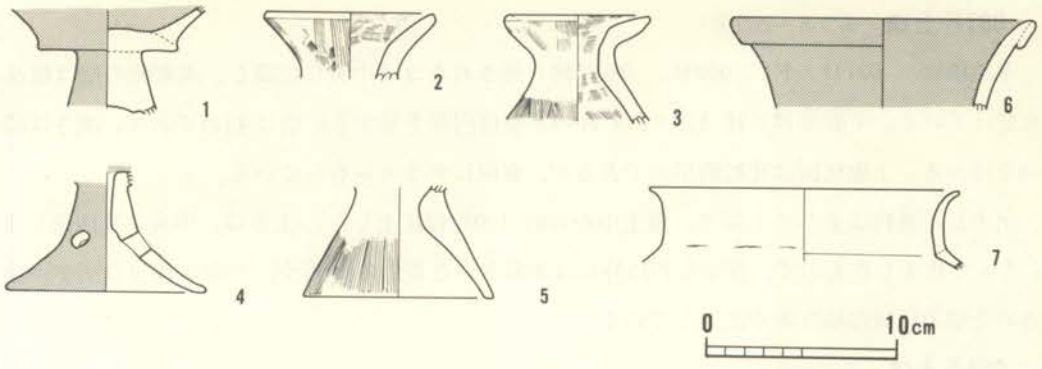
出土した遺物は土器であるが、すべて覆土中から出土し、ほとんどが細片である。図示できなかった土器の中で、高坏の脚部は13個体検出されたが、この中の7個体は脚部中央がふくらむ形状である。

081B号方形周溝遺構（第266図）

本遺構は確認面において、081A号遺構と同一の遺構と考えられたが、調査を進める中で、081A号遺構と分離されたものであり、076、077A・B、078号跡を切っているが、081A号遺構により外側の壁を切られている。平面形は台形を呈する。081A号遺構と同様に北壁が最長で、内周11.2m、南壁の内周10.6m、東壁の内周10.0m、西壁の内周10.4mをはかり、東側における溝の幅80cm、深さ43～65cmである。周溝底面は凹凸が目立ち、081A号遺構同様に



第266図　081A・B号方形周溝遺構



第267図　081A号方形周溝遺構出土遺物

北東コーナー付近の底面が最も高く、南西コーナー付近の底面が最も低いが、その差は38cmをはかる。覆土の状態も、基本的には 081A号と同様であり、上部が黒色土、下部が黄褐色土で、自然埋没と考えられる。方形周溝の内側及び周溝底面からは土壙等の施設は検出されなかった。

出土した遺物は、覆土中から土器が少量検出されたが図示することはできなかった。

081A号方形周溝遺構出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	高坏	脚部ほぼ完形	—— ——	坏部内外面・脚部ミガキ。赤彩。	覆土	
2	器台	受部½	(8.6) ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ。	覆土	
3	器台	受部½	(7.2) ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、脚部内外面ハケメ後ナデ。	覆土	
4	器台	脚部完形	—— ——	脚部ミガキ。脚部内面ナデ。	覆土	
5	器台	脚部⅓	—— ——	脚部ハケメ後ナデ。内面ナデ。	覆土	
6	壺	口縁部⅓	(13.6) ——	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ、頸部内外面ミガキ。	覆土	
7	甕	口縁部⅕	(16.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ。	覆土	

082号土壙（第268図）

本遺構は、001号跡の8m西側に位置し、091号溝状遺構とはわずか10cm程離れている。平面形は、径90×98cmの不整円形を呈し、深さは86cmで、壁はほぼ垂直である。覆土は、砂質ロームを含む茶褐色土であり、粘性に富み軟らかい。土壙底面は平坦である。

遺物の出土はなかった。

083号土壙（第268・269図）

本遺構は、 031D・F、 069B、 080号跡に囲まれたほぼ中央に位置し、南東側の壁は攪乱を受けている。平面形は、径 1.9×2.3 m の不整楕円形を呈する。壁は斜めであり、深さは53cmをはかる。土壙底面は比較的平坦であるが、東側にテラスを有している。

出土した遺物はすべて土器で、覆土中から約 100片程出土した。土器は、中央より西側にまとまって出土したもので、図示した以外には赤彩された器台の脚部や、ハケメ後ヨコナデが施された甕の口縁部破片等が出土している。

084号土壙（第268図）

本遺構は、 093号溝状遺構の60cm西側に位置し、 086号土壙とはこの溝をはさんで3m程離れている。平面形は、径66×112 cmの楕円形を呈する。壁は、わずかに斜めであり、深さは52cmをはかる。土壙底面は平坦であるが、南から北の方向に傾斜している。

覆土の上部から約30片の土器が出土した。細片ばかりで図示することはできなかったが、ハケメ調整された甕の胴部破片や、高坏の脚部等が出土している。

085号土壙（第270～272・310・312・313図）

本遺構は、 093号溝状遺構の東側に位置し、 086号土壙とは 1.3m 北側に離れている。平面形は、径 3.1×3.4 m の不整円形を呈する。西側を除く壁はほぼ垂直であり、深さは73cmをはかる。覆土は焼土粒子・炭化粒子を多く含む暗褐色土である。土壙底面は比較的平坦である。

出土した遺物は、約 200片程の土器と土製品である。完形あるいはほぼ完形の土器が多く、大形の破片で出土した。本土壙から出土した遺物は、ほとんどが底面から20cm程浮いており、西側の壁に密着の土器（13・14）も中央部から出土する破片は浮いた状態である。これらの土器は、土壙底面に、ある程度土が埋まった時点で一括して廃棄されたと考えられ、その方向は13・14から推察すると、南西方向からであろう。

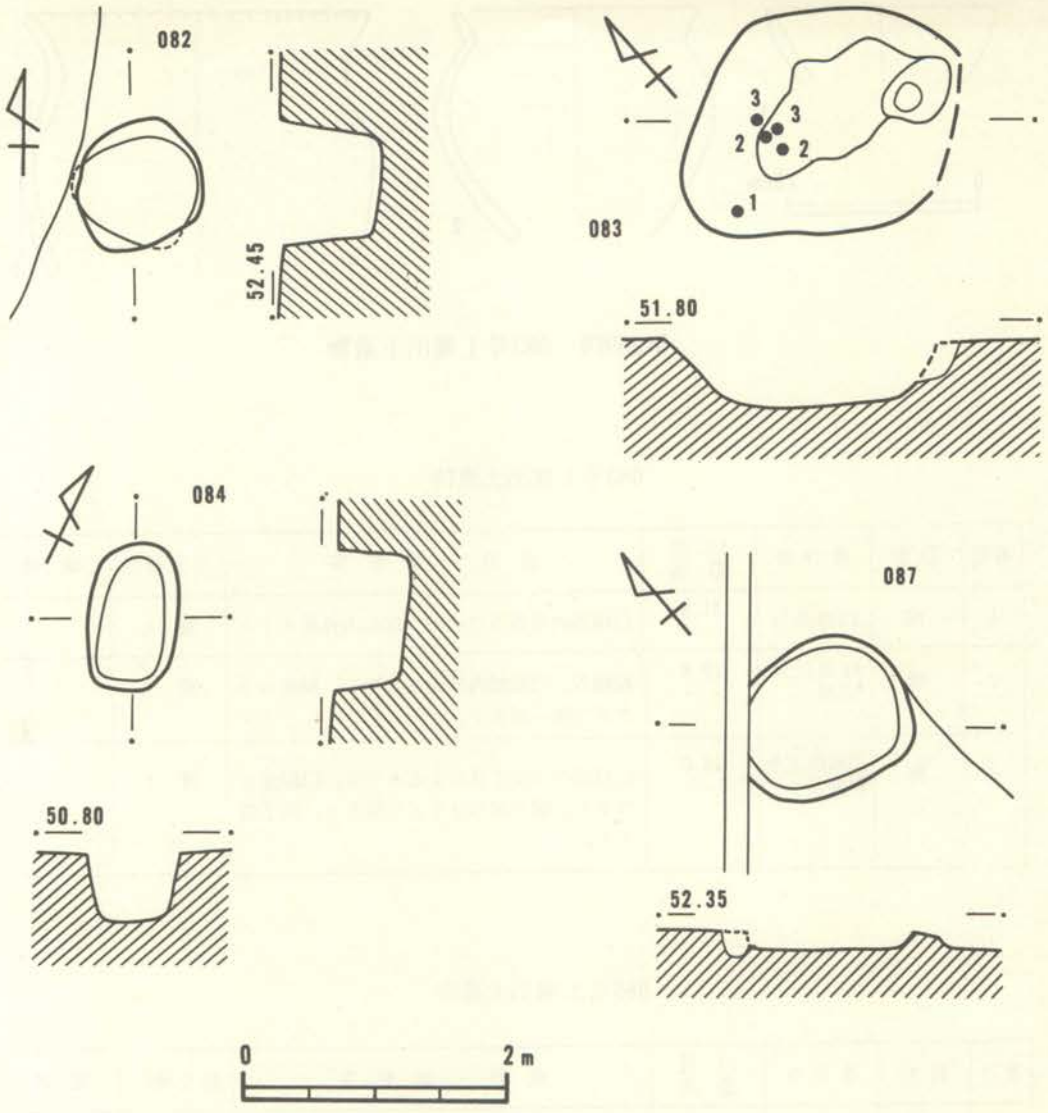
086号土壙（第270・273図）

本遺構は、 093号溝状遺構の東側に位置し、085号土壙とは 1.3m 南側に離れている。南東部分においては、住居跡の壁の立ち上がりのような状態であるが、 北東に進むにつれて、この壁は消滅し、西側では（1.6～2.7）×3.7 の不整形の落ち込みになっている。壁は、斜めであり、 深さは42cmをはかる。覆土中からは焼土粒子・炭化粒子が多く検出された。底面は「く」の字形を呈し、比較的平坦である。

出土した遺物は、土器が約 200片程で、これらの土器はほとんどすべてが浮いており、細片で出土したものが多い。大半は胴部の破片で、口縁部あるいは底部の破片は非常に少なく、接合されたものも少ない。

087号土壙（第268・274図）

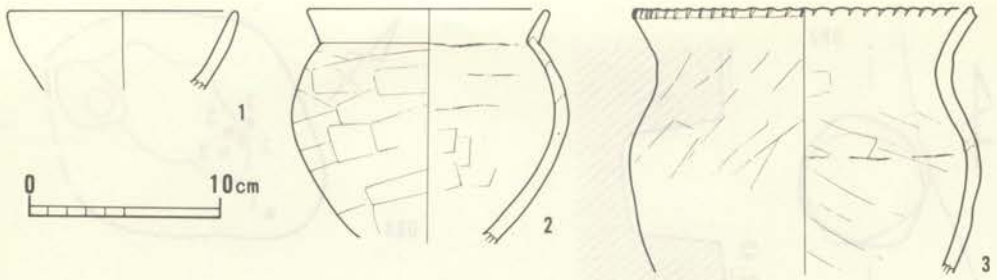
本遺構は、 004号跡の北西側に、ほぼ接する状態で検出された。北西側は攪乱を受けている。



第268図 082・083・084・087号土壙

平面形は、径1.10×1.35mの楕円形を呈する。壁は、斜めであり、深さは15cmをはかる。土壙底面は比較的平坦である。

出土した遺物は、土器が約40片である。土器は、本土壙の確認面より10cm程上で検出されたものであり、土壙底面からは25cm程浮いている。約40片の内訳は縄文中期の細片が約20片、土師器の細片が約10片、図示した土器の破片が約10片である。これらはすべて器面が剝落あるいは磨耗しているため、採拓は不可能であった。



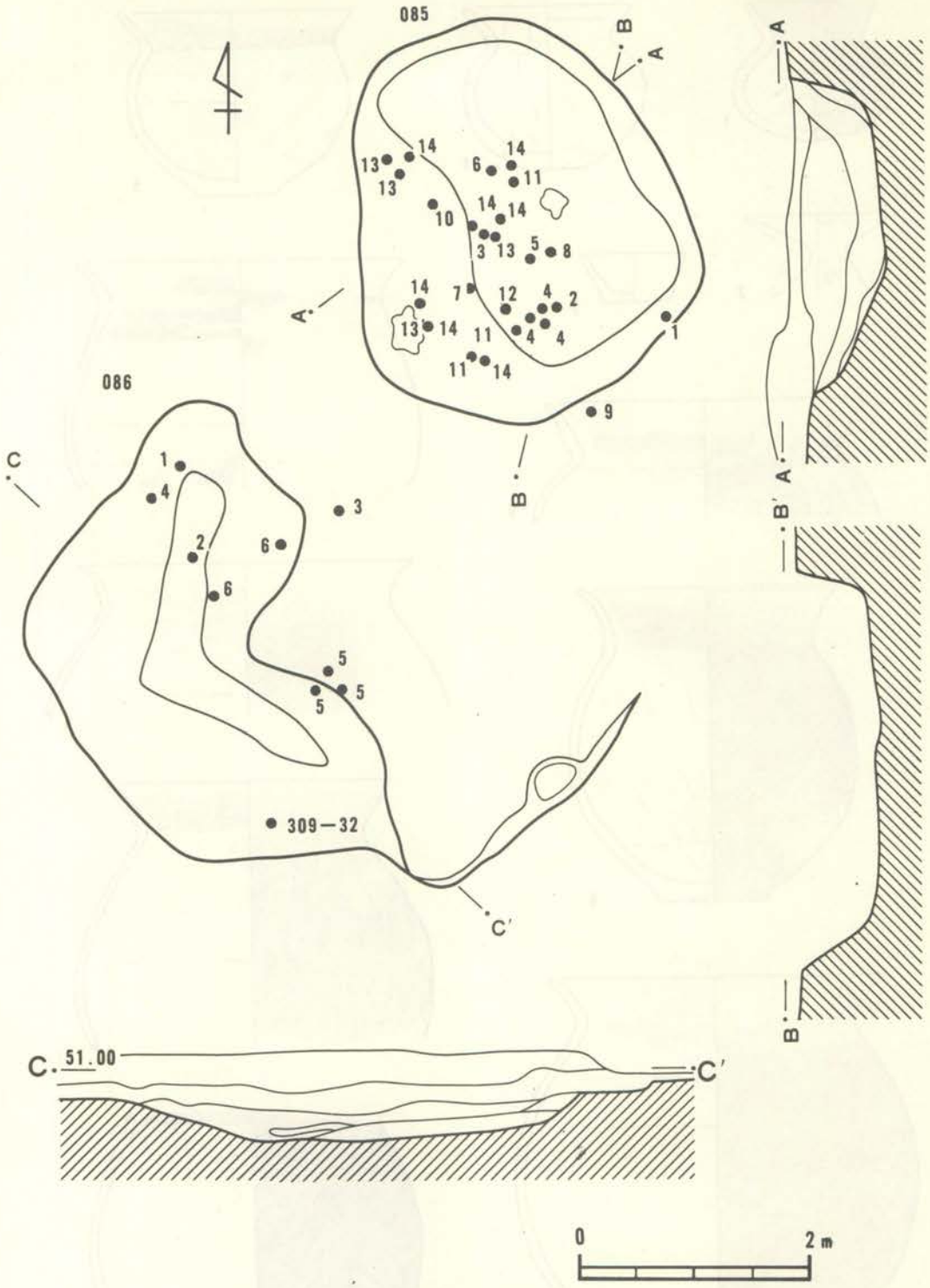
第269図　083号土壙出土遺物

083号土壙出土遺物

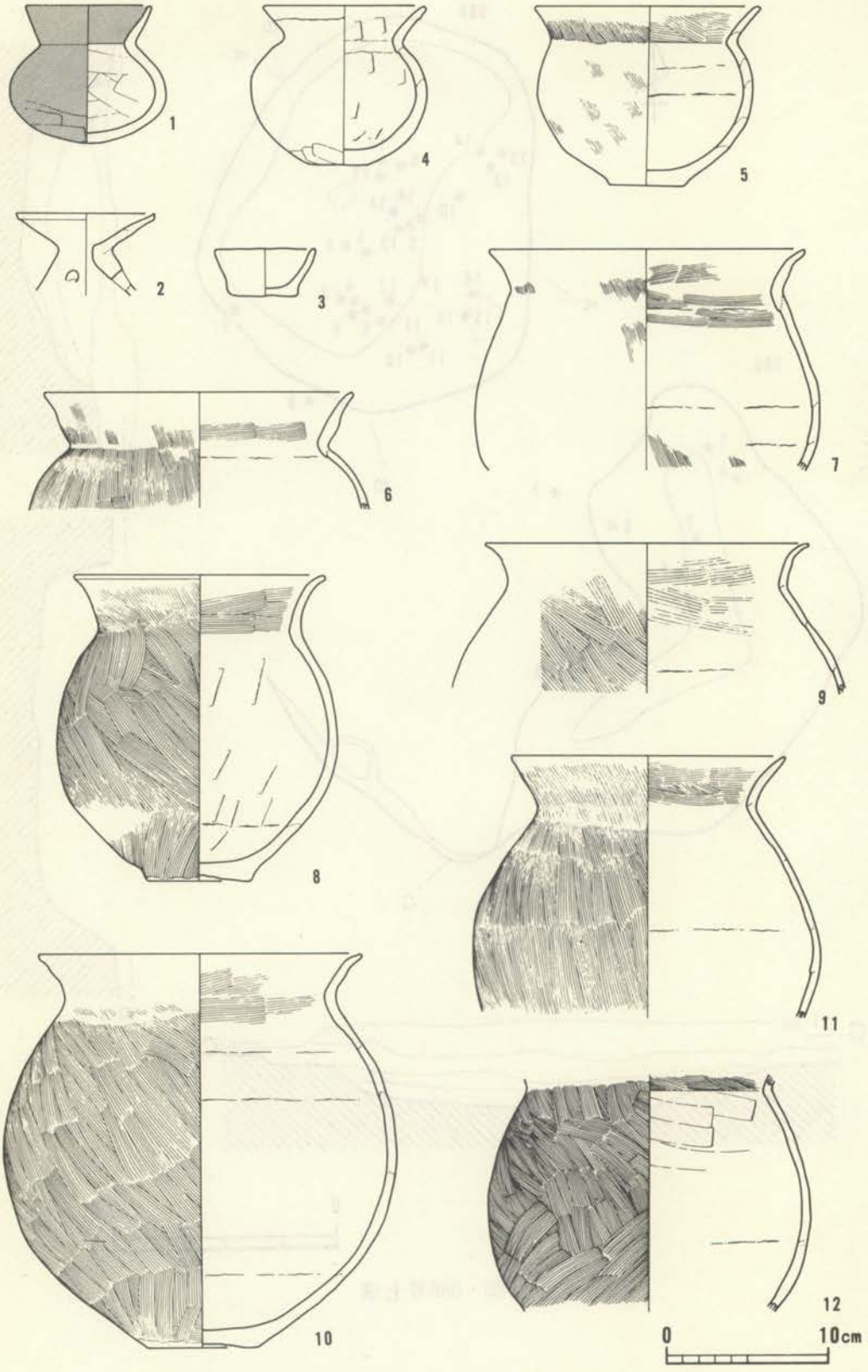
番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	埦	口縁部⅔	11.6 ——	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ。	覆土	
2	甕	底部以外完形	12.6 ——	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後一部ナデ。	覆土	
3	甕	口縁部完形 胴部½	18.0 ——	口唇部ヘラ状工具によるキザミ。口縁部ヨコナデ、胴上部ヘラケズリ後ナデ、胴下部ナデ。	覆土	

085号土壙出土遺物

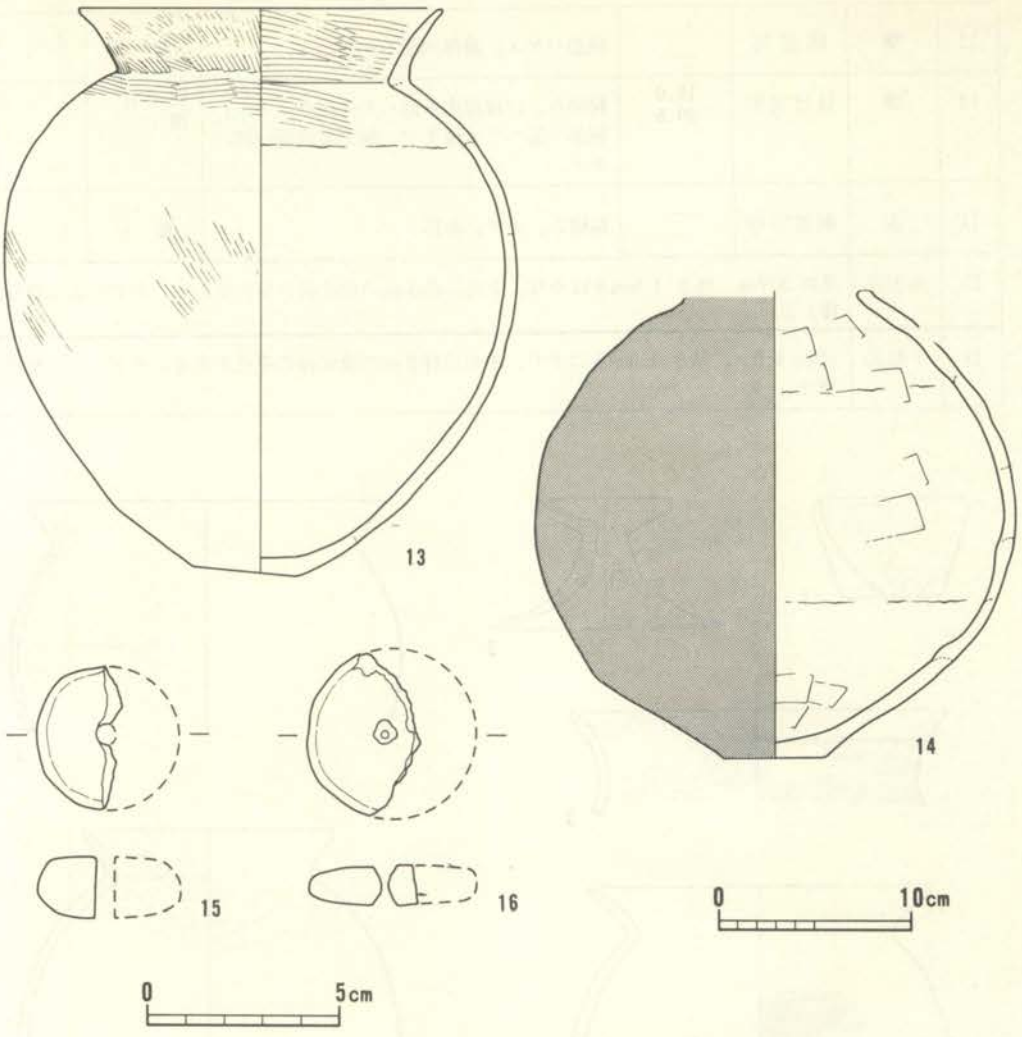
番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坩	ほぼ完形	7.6 8.6	口縁部内外面ヨコナデ、胴上部ナデ、胴下部ヘラケズリ。赤彩。	覆土	
2	器台	½	8.6 ——	受部内外面ミガキ、脚部ミガキ。脚部内面ナデ。3孔。	覆土	
3	鉢	ほぼ完形	6.2 2.9	内外面ナデ。	覆土	
4	壺	ほぼ完形	10.0 9.9	口縁部内外面ヨコナデ、胴上部ナデ、胴下部ヘラケズリ。	覆土	
5	甕	口縁部⅓ 胴部完形	(14.0) 11.2	輪積み。口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	覆土	
6	甕	½	(19.2) ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後一部ナデ。	覆土	



第270図 085・086号土壙



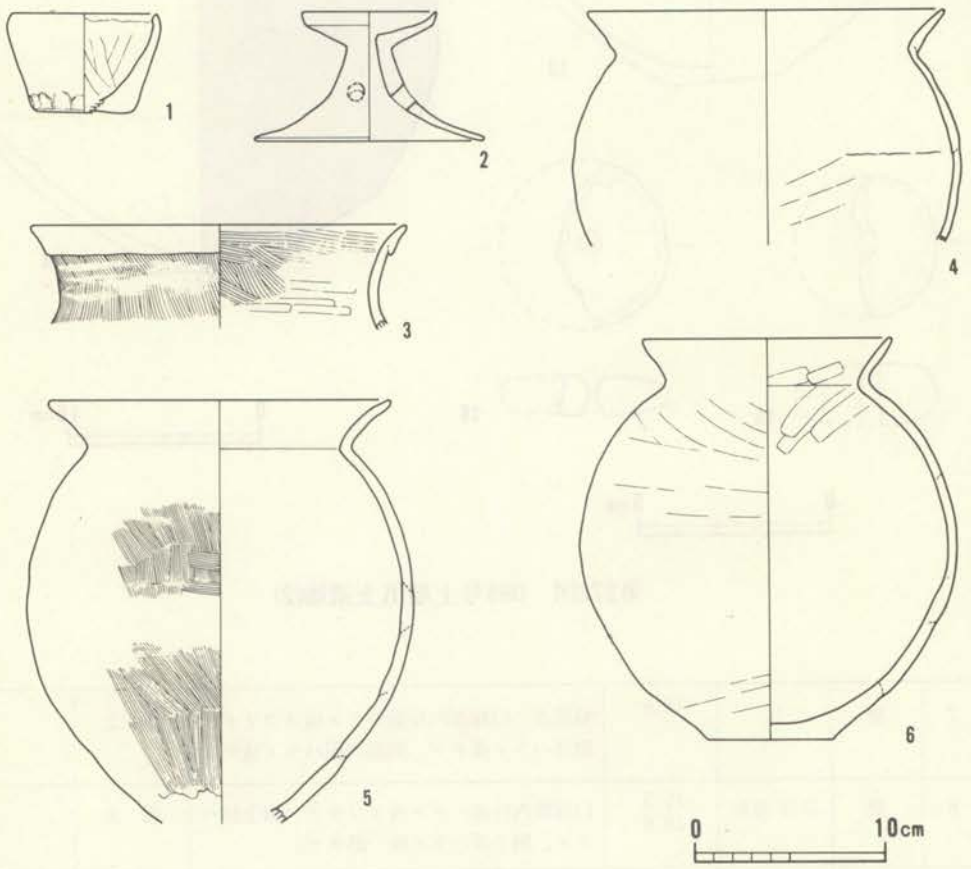
第271図　085号土壙出土遺物(1)



第272図　085号土壙出土遺物(2)

7	甕	½	(19.6)	輪積み。口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。胴部内面ハケメ後ナデ。	覆　土	
8	甕	ほぼ完形	15.5 18.6	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴上部ハケメ、胴下部ハケメ後一部ナデ。	覆　土	
9	甕	¼	(20.2)	輪積み。口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ。	遺構外	
10	甕	口縁部・胴下部½ 胴下部完形	(20.0) 23.8	輪積み。口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ。	覆　土	
11	甕	胴下部以外ほぼ完形	17.0	輪積み。口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後一部ナデ。	覆　土	

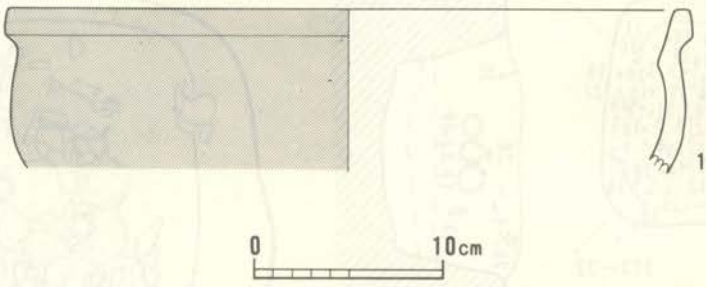
12	甕	胴部 1/3	―	胴部ハケメ。頸部内面ハケメ。	覆土	
13	甕	ほぼ完形	19.0 29.6	輪積み。口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部一部ハケメ後ナデ。胴上部内面一部ハケメ。	壁密着 覆土	
14	壺	胴部完形	―	輪積み。ナデ。赤彩。	覆土	
15	土製品	径約 3.7cm、厚さ 1.5cmをはかり、中央に径5㎜の焼成前の穿孔がある。ナデによる整形。覆土。				
16	土製品	径約 4.0cm、厚さ 1.0cmをはかり、中央に径2㎜の焼成後の穿孔がある。ナデによる整形。覆土。				



第273図　086号土壙出土遺物

086号土壙出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	埦	¼	(7.7) 5.1	口縁部内外面ヨコナデ、体部ナデ、体下部指頭押捺。内面ヘラケズリ。	覆土	
2	器台	受部ほぼ完形 脚部½	7.0 6.7	受部内外面ナデ、脚部内外面ナデ。3孔。	覆土	
3	壺	口縁部¼	(19.6) ——	口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ後一部ナデ。口縁部内面ハケメ。	覆土	
4	甕	⅓	—— ——	口縁部内外面ヨコナデ（?）。胴部内面ヘラケズリ後ナデ（?）。	覆土	器面磨耗
5	甕	口縁部⅕ 胴部⅓	(17.8) ——	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後一部ナデ。	覆土	
6	壺	口縁部⅓ 胴上部½ 胴下部完形	(13.0) 20.6	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。頸部内面ヘラケズリ。	覆土	



第274図　087号土壙出土遺物

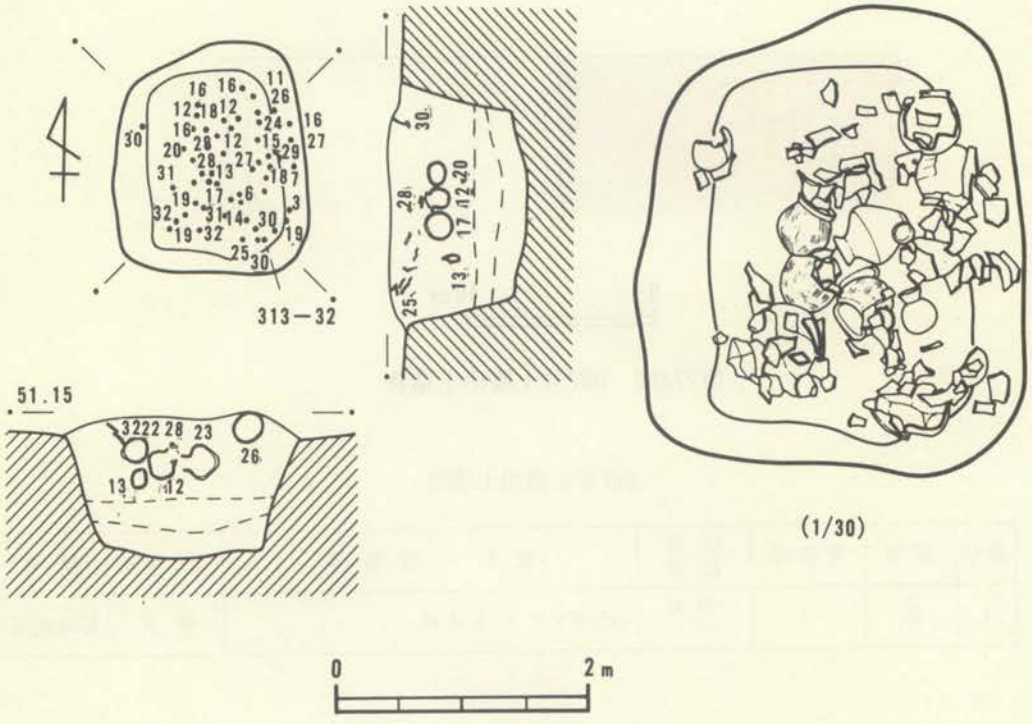
087号土壙出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	鉢	⅓	(35.4) ——	内外面ナデ（?）。赤彩。	覆土	器面剥落

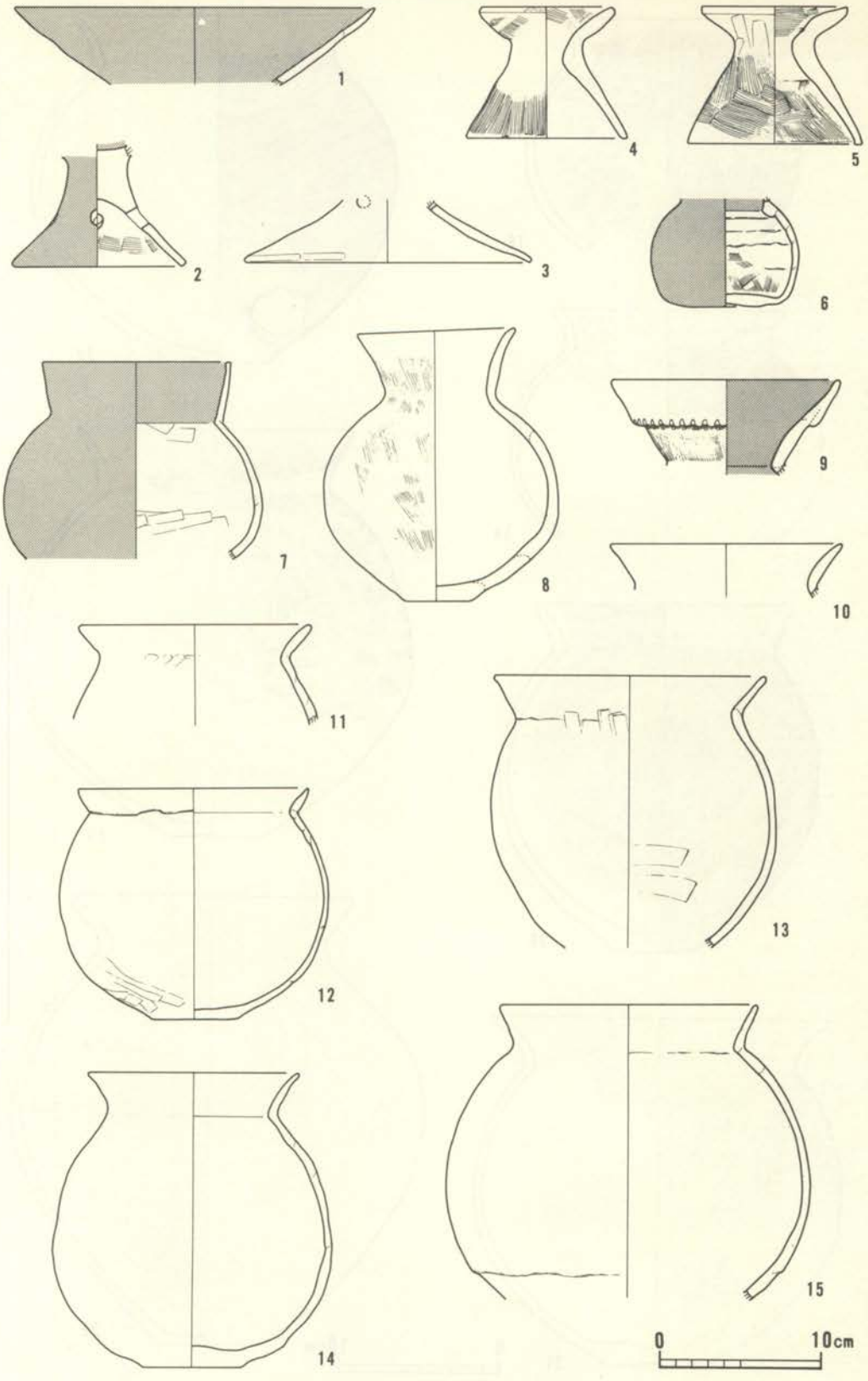
088号土壙（第275～279・312・313図）

本遺構は、078号跡の6m西側に位置する。平面形は、長軸 1.8m、短軸 1.5m の隅丸方形を呈し、長軸は北を向く。壁は、やや斜めであり、深さは 1.0m をはかるが、土器の出土状況から判断すると、土壙の掘り込み面は、更に20cm程高い位置であり、深さは 1.2m 程になると考えられる。土壙底面は、中央部がわずかに低い。覆土は、上層が茶褐色土、下層が暗褐色土であり、底面に近づくにつれて砂質ロームの粒子・ブロックを多く含み、粘性に富む。

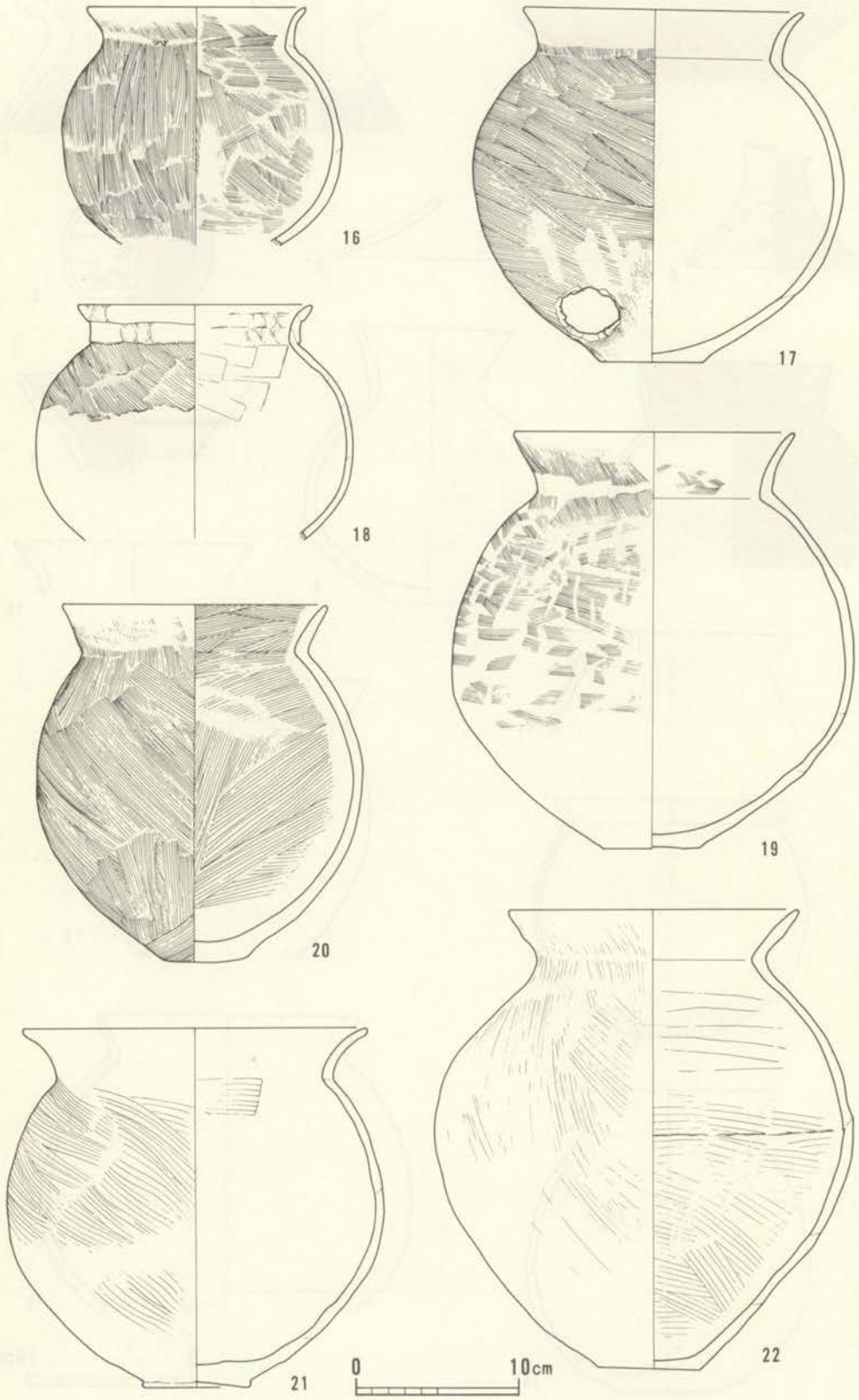
出土した遺物は、覆土上層の幅60cmの間に集中しており、下層からの出土はない。土器は、約300 片程出土し、完形あるいは完形に近い状態の土器も多く、特に、土壙中央からは完全な形の土器が出土した。出土した土器は、甕が多く、坩、器台、高坏等の小形の土器は非常に少ない。図示できなかったが、高坏の脚部破片が5個体あり、このうちの3個体は、脚部中央がふくらむ形状の土器である。これらの土器の出土状態を土壙内における土層断面で推測すると、壁際の破片はすべて中央に向いて傾斜しており、土壙底面から45cm程砂質ロームを含む暗褐色土が埋まった後に、壁際の周囲から廃棄されたと考えられる。



第278図　088号土壙



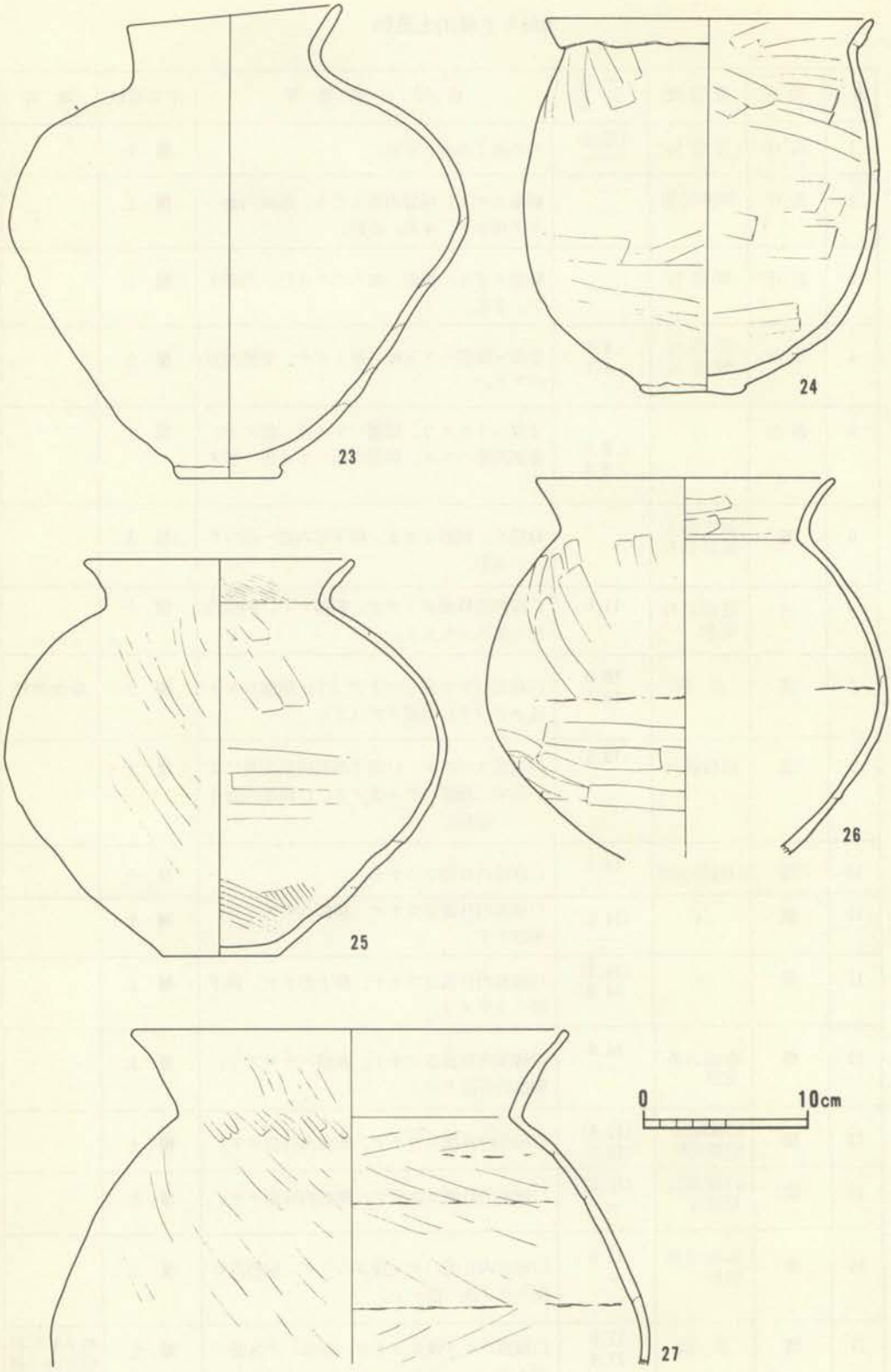
第276図　088号土壙出土遺物(1)



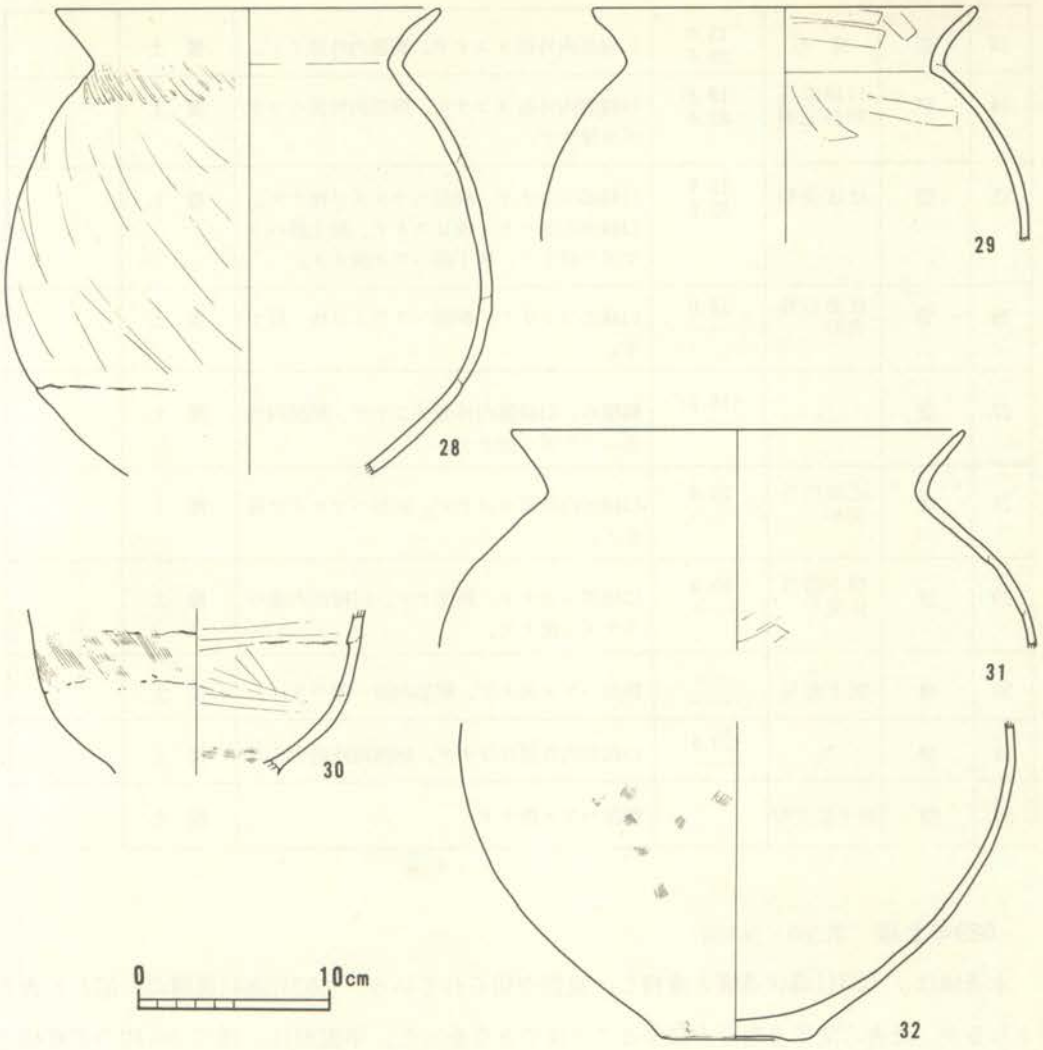
第277図　088号土壙出土遺物(2)

088号土壙出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	高坏	坏部½	(22.2) ——	内外面ミガキ。赤彩。	覆土	
2	高坏	脚部完形	—— ——	脚部ミガキ。坏部内面ミガキ、脚部内面ハケメ後ナデ。4孔。赤彩。	覆土	
3	高坏	脚部½	—— ——	脚部ミガキ、裾部一部ヘラケズリ。内面ナデ。3孔。	覆土	
4	器台	受部⅔ 脚部⅓	8.1 8.1	受部・脚部ハケメ後一部ミガキ。受部内面ハケメ。	覆土	
5	器台	½	(9.0) 8.5	受部ヘラケズリ、脚部ハケメ後一部ナデ。受部内面ハケメ、脚部内面ハケメ後一部ナデ。	覆土	
6	壺	胴下部½ 底部完形	—— ——	輪積み。胴部ミガキ。胴下部内面一部ハケメ。赤彩。	覆土	
7	坩	底部以外完形	11.6 ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ナデ。胴部内面一部ヘラケズリ。	覆土	
8	壺	完形	10.0 16.5	口縁部ハケメ後ヨコナデ（?）、胴部ハケメ後ナデ（?）。内面ナデ（?）。	覆土	器面磨耗
9	壺	口縁部¼	(13.6) ——	口縁部ヨコナデ、口縁下端部棒状工具による刺突、頸部ハケメ後ナデ。口縁部内面ミガキ。赤彩。	覆土	
10	甕	口縁部完形	14.2 ——	口縁部内外面ヨコナデ。	覆土	
11	甕	⅙	(14.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、頸部ヘラケズリ、胴部ナデ。	覆土	
12	甕	½	(14.2) 14.0	口縁部内外面ヨコナデ、胴上部ナデ、胴下部ヘラケズリ。	覆土	
13	甕	底部以外完形	16.6 ——	口縁部内外面ヨコナデ、頸部ヘラケズリ、胴部内外面ナデ。	覆土	
14	甕	口縁部⅓ 胴部完形	(12.8) (18.0)	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	覆土	
15	甕	口縁部⅙ 胴部⅓	(15.6) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	覆土	
16	甕	底部以外完形	13.0 ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部内外面ハケメ後一部ナデ。	覆土	
17	甕	完形	17.0 21.4	口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後一部ナデ。	覆土	胴下部に径約5cmの焼成後の穿孔を有する。



第278図　088号土壙出土遺物(3)



第279図　088号土壙出土遺物(4)

18	甕	口縁部・胴上部完形 胴下部½	14.0 ——	口縁部指頭押捺後ヨコナデ、胴上部ハケメ、胴下部ナデ。	覆　土	
19	甕	口縁部⅙ 胴部完形	(17.0) 24.7	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴上部ハケメ後一部ナデ、胴下部ナデ。底部木葉痕。	覆　土	
20	甕	完　形	16.0 21.1	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ。胴部内面ハケメ後一部ナデ。	覆　土	
21	甕	口縁部⅒ 胴上部½ 胴下部完形	(20.8) 21.2	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。胴部内面一部ハケメ。	覆　土	
22	甕	口縁部½ 胴部完形	(17.6) 27.4	口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴部内外面ハケメ後ナデ。	覆　土	

23	壺	完　形	13.0 28.6	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	覆　土	
24	甕	口縁部½ 胴部完形	(19.8) 22.8	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ヘラケズリ後ナデ。	覆　土	
25	甕	ほぼ完形	15.9 23.5	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。口縁部内面ハケメ後ヨコナデ、胴上部ヘラケズリ後ナデ、胴下部ハケメ後ナデ。	覆　土	
26	甕	底部以外完形	18.0 ——	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後一部ナデ。	覆　土	
27	甕	¼	(16.2) ——	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ヘラケズリ後ナデ。	覆　土	
28	甕	底部以外完形	20.0 ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。	覆　土	
29	甕	胴下部以外完形	20.0 ——	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。口縁部内面ヘラケズリ後ナデ。	覆　土	
30	甕	胴下部½	—— ——	胴部ハケメ後ナデ。胴部内面一部ハケメ。	覆　土	
31	甕	½	(23.6) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	覆　土	
32	甕	胴下部完形	—— ——	胴部ハケメ後ナデ。	覆　土	

089号土壙（第280・283図）

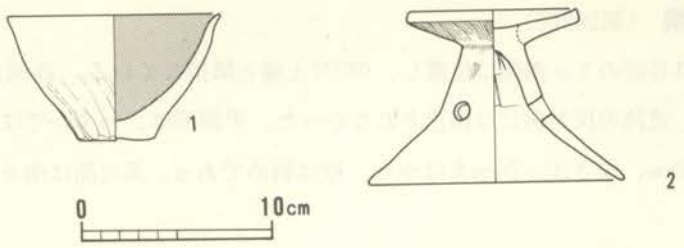
本遺構は、093号溝状遺構と重複し、東側が切られている。092号溝状遺構の一部とも考えられるが、両者の関係を明らかにすることはできなかった。平面形は、径 3.5m 程の不整楕円形を呈すると考えられる。壁は、斜めであり、深さは40～50cmをはかる。土壙底面は、平坦ではなく、凹凸が著しい。北側には径30cm、深さ17cmのピットが検出された。

出土した遺物は土器で、細片が多く出土した。これらは土壙底面から10～40cm程浮いた状態で出土した。

090号土壙（第281・283図）

本遺構は、093号溝状遺構に西側の壁が切られている。平面形は、径60×150 cmの不整楕円形を呈する。壁は、斜めであり、深さは30～40cmをはかり、土壙底面は西側に傾斜している。覆土は、焼土を多量に含む暗褐色であり、東から西に斜めに堆積していた。

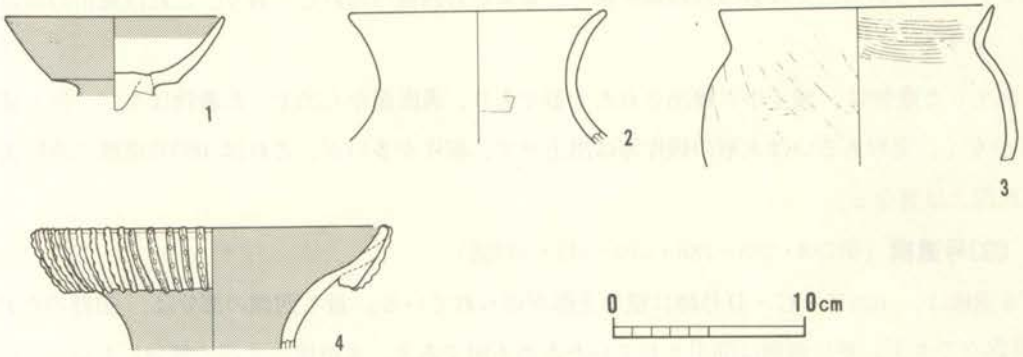
出土した遺物は、土器が80片程である。これらの土器は土壙底面から10cm～30cm程浮いた状態であり、特に、中央より北側から多く出土した。



第280図　089号土壙出土遺物

089号土壙出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	鉢	½	(11.0) 6.6	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。	覆土	
2	器台	½	(8.8) 9.0	受部ハケメ、脚部ハケメ後ミガキ。受部内面ナデ、脚部内面ナデ。	覆土	



第281図　090号土壙出土遺物

090号土壙出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	高坏	口縁部完形	11.4 ——	内外面ミガキ。赤彩。	覆土	
2	壺	口縁部⅓ 胴部½	(13.3) ——	口縁部内外面ヨコナデ（？）。	覆土	器面磨耗
3	甕	口縁部½ 胴部完形	(14.2) ——	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。口縁部内外面ハケメ後ナデ。	覆土	
4	壺	口縁部¼	(17.6) ——	口縁部にキザミを有する棒状付文、口縁部内面・頸部内外面ミガキ。	覆土	

091号溝状遺構（第282図）

本遺構は、001号跡の5m西側に位置し、082号土壙と隣接している。西側は、道路のため未調査であるが、道路の反対側には検出されなかった。平面形は、わずかではあるが、弧状を呈する。幅64～80cm、深さ20～26cmをはかり、壁は斜めである。溝底面は南から北に若干傾斜している。

遺物の出土はなかった。

092号溝状遺構（第283・284図）

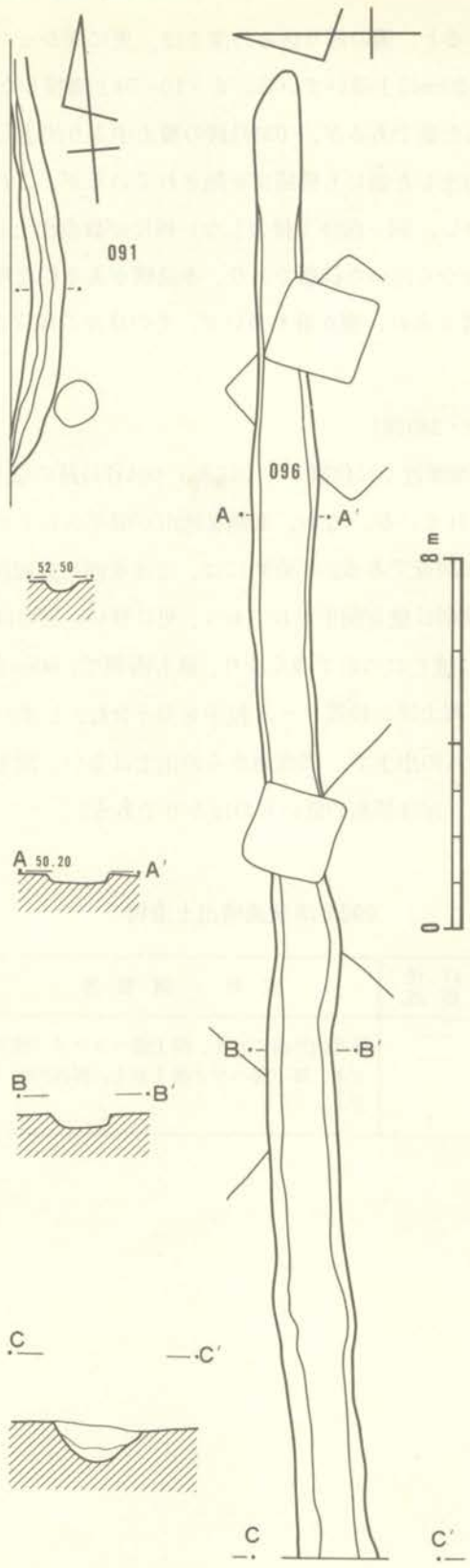
本遺構は、029B・C、033、035A、036A号跡により一部切られ、更に、093号溝状遺構と重複し、南側の壁が破壊されている。本遺構は、029E号跡の南側の柱穴付近を中心として半径約13.2mの半円形を呈するが、東側は036A号跡に、西側は093号遺構に切られている。東側は、地山が削平されていたため、どこまで延びるか不明であるが、南側には検出されなかったことから、093号遺構と完全な重複関係にない限り、029E号跡の北側に半円状に巡っていたと考えられる。幅は約1m、深さは45cm程であるが、036A号跡とわずかに重複する部分は、地山が削平されており、壁の立ち上がりはほとんど検出されなかった。溝底面は平坦であるが、東側と西側のでは44cm程西側が深く、東側から西側へ傾斜しており、これは地山の傾斜と一致する。

出土した遺物は、覆土中に検出された土器であり、溝底面から出土した遺物はない。出土量は少なく、完形あるいは大形の破片等は出土せず、細片が多いが、これは093号遺構の遺物出土状況とは異なる。

093号遺構（第283・285～288・310・312・313図）

本遺構は、029B・C・D号跡に壁の上部が切られている。最も西側の部分は、道路のため調査ができず、更に西側は削平されていたため不明である。本遺構は北側の部分においては029E号のほぼ中央を中心とし、029E号跡の北側を半円状に巡り、南側では東から西へ傾斜する地山の等高線と直交し、西進する。調査した全長は約62.4mをはかり、半円状に巡る北側は幅平均1.0m、深さ平均80cmで、壁は斜めであり、南側では幅平均50cm、深さ平均40cmで、壁はほぼ垂直である。溝底面は平坦であり、東端は029D号跡に一部切られているが、壁が斜めになって切れている。東端と西端との標高差は溝底面において90cm程で、地山の傾斜と同様に西側が低い。溝の底面近くの覆土は、すべて砂質ロームを含むもので、水が流れた時に生じる砂泥性の黒色土は検出されなかった。

出土した遺物は、そのほとんどが土器であり、2000片以上である。土器は、溝底面より浮いた状態であり、底面に密着で出土した土器は一片もない。また、完形に近い状態で出土した土器はかなり検出されたが、完形のままの出土はほとんどない。溝の幅の広い029E号跡周辺よりも、溝の幅の狭い西側からの出土が顕著で、溝の西側においては、溝の確認面より上からも



第282図　091・096号溝状遺構

土器が出土したことを考えると、溝の掘り込みの深さは、更に深かったことが推察されるが、いずれにしても、底面より20cm以上浮いている。6・19・54と隣接した位置から出土した土器は、肩部に櫛描文が施された壺であるが、033号跡の覆土中より出土した破片と接合した。また、089号土壙周辺から出土した壺にも櫛描文が施されているが、これは029E号跡の床面直上から出土した破片と接合し、同一個体で接合しない破片が数点出土した。本遺構から出土した遺物は、すべてが溝底面から浮いた状態であり、本遺構がある程度埋まった後に、溝の凹みの中に廃棄されたものと考えられ、甕が最も多いが、そのほかの破片からは特に顕著な器形は認められなかった。

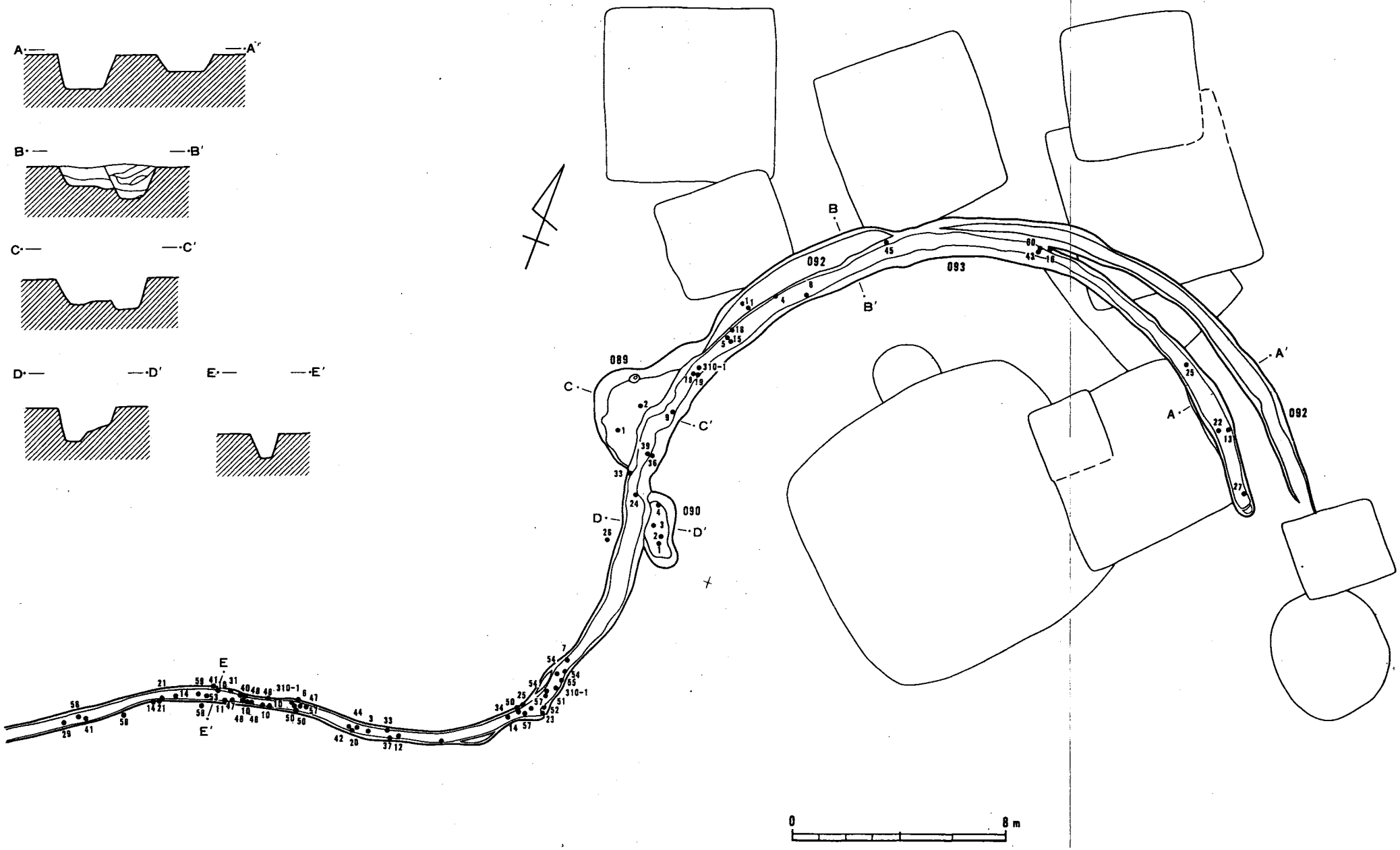
096号溝状遺構（第282・289図）

本遺構は、台地南側先端部近くに位置し、057A・064B号跡の壁を切っているが、057B・059F号遺構に一部切られている。なお、東側な地山が削平されており、本遺構の壁は途中で消滅している。西側は未調査である。平面的には、ほぼ東西に直線状に延びている。幅は、平均約1.7mであるが、東側は壁が削平されており、更に狭い。深さは、地山が削平されていない場所でも、西から東に進むにつれて浅くなり、最も西側で、60cmをはかる。壁は斜めで、溝底面はやや凹凸である。覆土は、砂質ローム粒子を少々含む、しまりのある黒色土である。

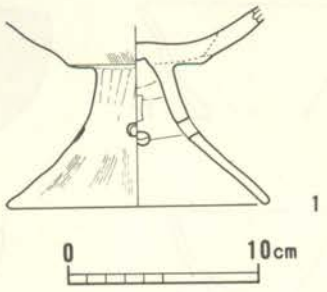
遺物は、すべて覆土中からの出土で、溝底面からの出土はない。出土した土器は、すべて破片であり、甕、坏等が多い。坏は器高の低いものばかりである。

092号溝状遺構出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	高坏	脚部完形	—— ——	坏部内外面ミガキ、脚上部ヘラケズリ後ミガキ、脚下部ハケメ後ミガキ。脚部内面ミガキ。	覆土	



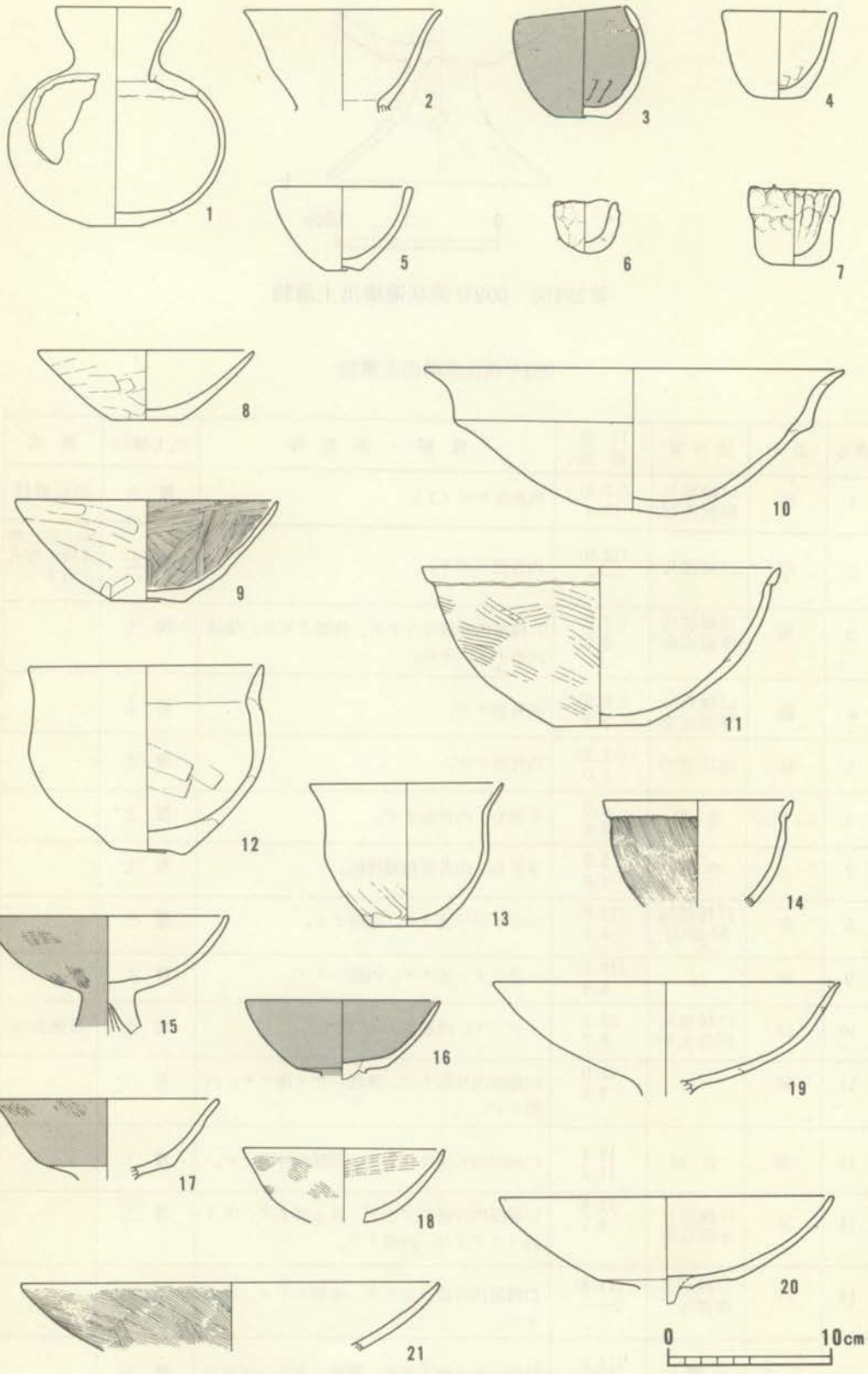
第283図　089・090・092・093号遺構



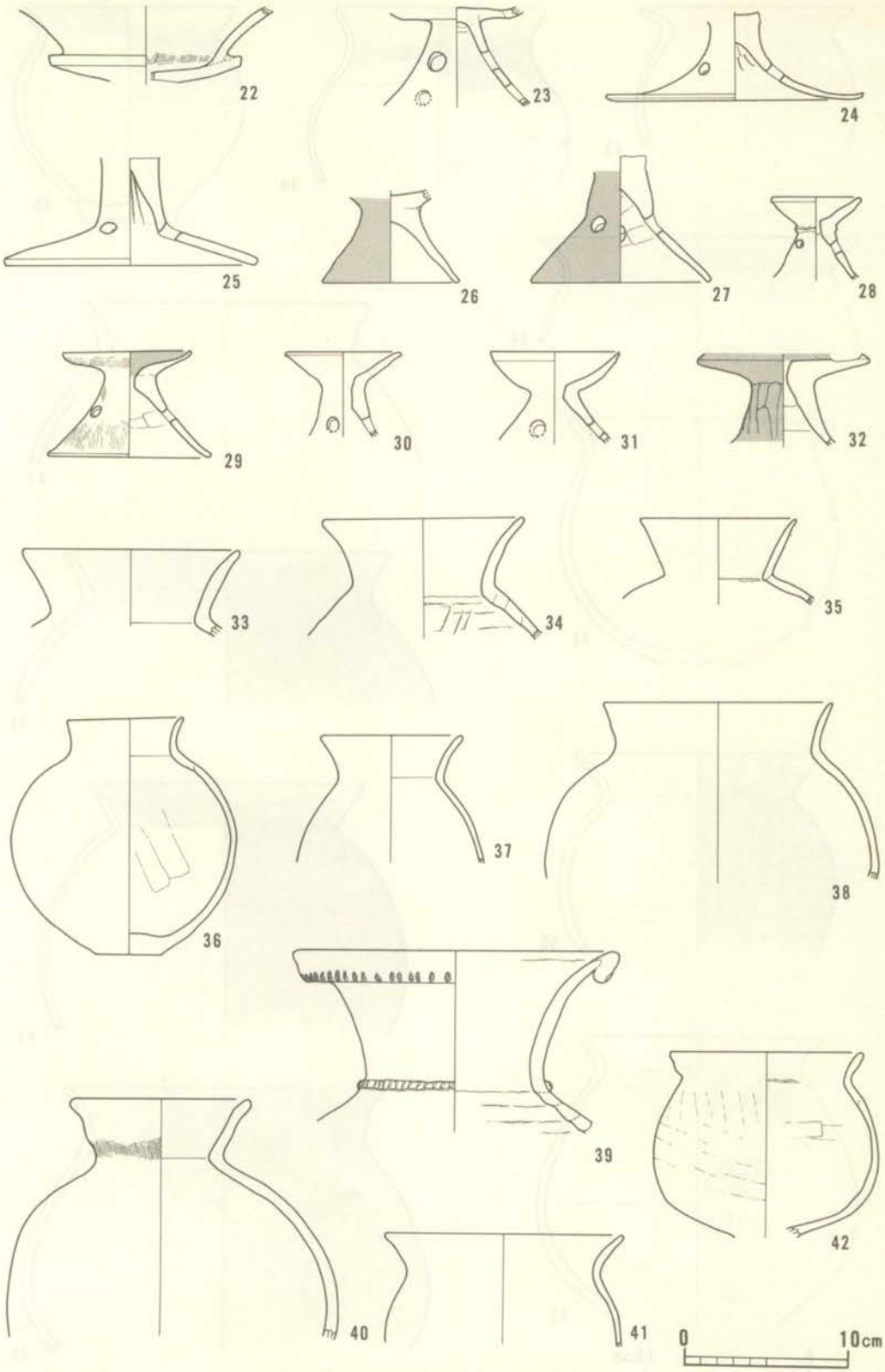
第284図　092号溝状遺構出土遺物

093号溝状遺構出土遺物

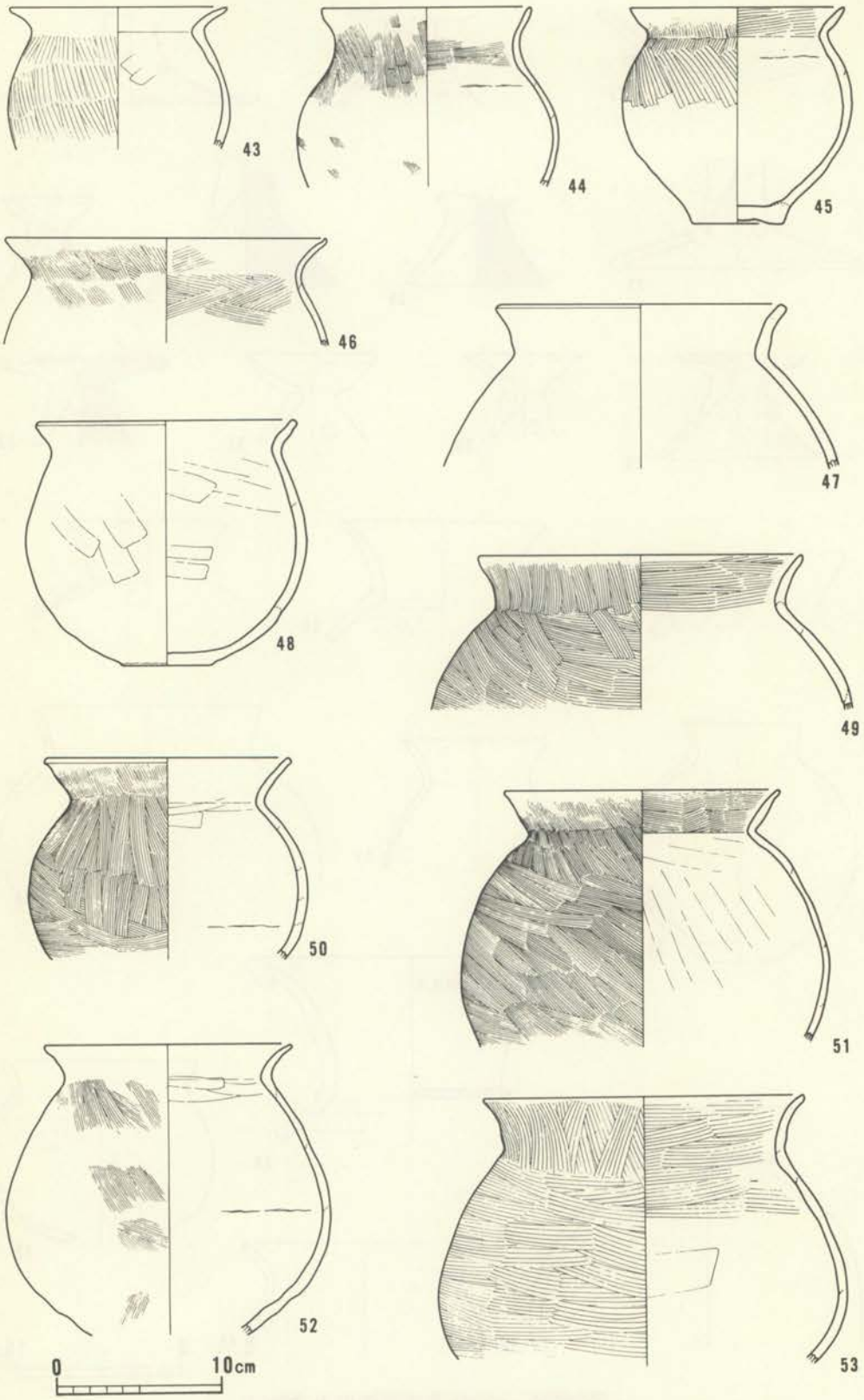
番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坩	口縁部1/3 胴部完形	(7.4) 13.4	内外面ナデ（?）。	覆土	器面磨耗
2	坩	口縁部1/4	(12.0) ——	内外面ミガキ。	覆土	胴上部に焼成後の穿孔を有する。
3	埦	口縁部1/3 体部完形	(7.0) 6.9	口縁部内外面ヨコナデ、体部ミガキ。体部内面ナデ。赤彩。	覆土	
4	鉢	口縁部1/4 体部完形	(6.8) 5.2	内外面ナデ。	覆土	
5	鉢	ほぼ完形	(8.2) 5.0	内外面ナデ。	覆土	
6	ミニチュア	完形	4.0 3.4	手捏ね。内外面ナデ。	覆土	
7	ミニチュア	完形	5.3 4.8	手捏ね。内外面指頭押捺。	覆土	
8	鉢	口縁部1/10 胴部1/2	(13.0) 4.2	ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。	覆土	
9	鉢	1/2	(16.0) 6.0	ヘラケズリ後ナデ。内面ハケメ。	覆土	
10	坏	口縁部2/3 胴部完形	25.8 8.7	ナデ（?）。内面ミガキ（?）。	覆土	器面剝落
11	鉢	2/3	22.0 9.6	口縁部内外面ナデ、体部ハケメ後ナデ。内面ナデ。	覆土	
12	甕	完形	14.4 11.3	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	覆土	
13	鉢	口縁部1/5 体部完形	(11.9) 8.7	口縁部内外面ヨコナデ、体上部ナデ、体下部ヘラケズリ。内面ナデ。	覆土	
14	埦	口縁部1/3 体部1/2	(11.6) ——	口縁部内外面ヨコナデ、体部ハケメ。内面ナデ。	覆土	
15	高坏	坏部1/2	(14.8) ——	坏部ハケメ後ミガキ、脚部ミガキ。坏部内面ミガキ。赤彩。	覆土	



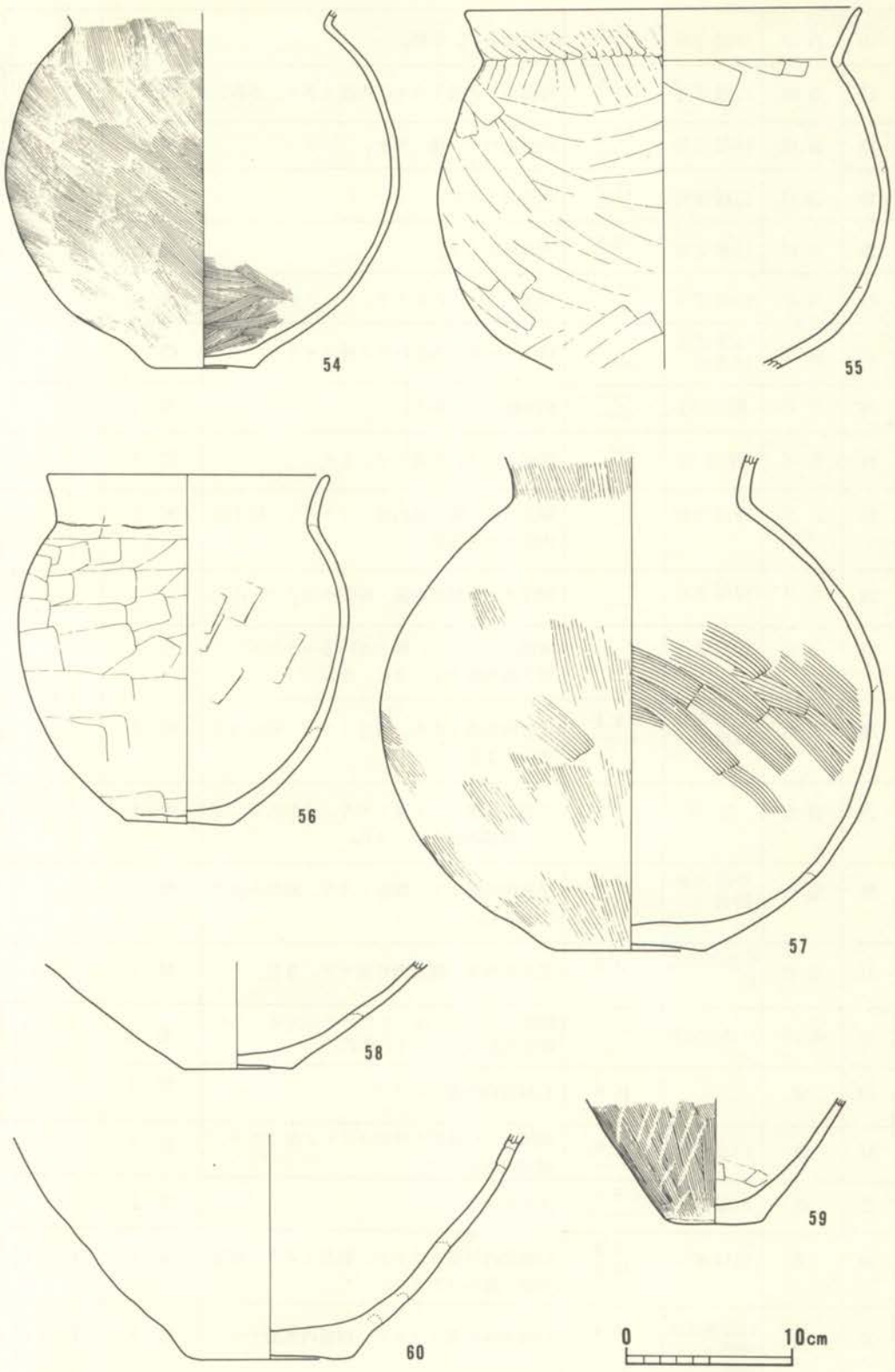
第285図　093号溝状遺構出土遺物(1)



第286図　093号溝状遺構出土遺物(2)



第287図　093号溝状遺構出土遺物(3)

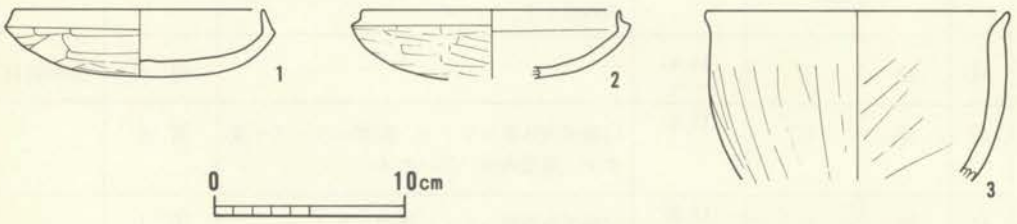


第288図　093号溝状遺構出土遺物(4)

16	高 坏	坏部完形	11.8	内外面ナデ。赤彩。	覆 土	
17	高 坏	口縁部½	(13.6)	坏部ハケメ後ミガキ。内面ミガキ。赤彩。	覆 土	
18	高 坏	坏部完形	12.3	内外面ハケメ後ミガキ。	覆 土	
19	高 坏	口縁部⅔	21.2	内外面ミガキ。	覆 土	
20	高 坏	坏部完形	20.6	内外面ミガキ。	覆 土	
21	高 坏	口縁部¼	(25.6)	坏部ハケメ。内面ナデ。	覆 土	
22	高 坏	坏体部ほぼ完形	——	坏部ミガキ。内面ハケメ後ミガキ。	覆 土	
23	高 坏	脚 部 ⅔	——	内外面ナデ。6孔。	覆 土	
24	高 坏	脚 部 ⅓	——	脚部ミガキ。内面ナデ。3孔。	覆 土	
25	高 坏	脚部完形	——	脚部ナデ。脚上部内面ヘラケズリ、脚下部内面ナデ。3孔。	覆 土	
26	高 坏	脚部完形	——	脚部ナデ。坏部内面・脚部内面ナデ。赤彩。	覆 土	
27	高 坏	脚部完形	——	脚部ヘラケズリ。脚上部内面ヘラケズリ、脚下部内面ナデ。3孔。赤彩。	覆 土	
28	器 台	受部完形 脚部½	5.4	受部内外面ミガキ、脚部ミガキ。脚部内面ナデ。3孔。	覆 土	
29	器 台	完 形	7.8 6.5	受部・脚部ハケメ後ミガキ、受部内面ミガキ、脚部内面ナデ。3孔。	覆 土	
30	器 台	受部完形 脚部½	7.2	受部内外面ナデ、脚部ミガキ。脚部内面ナデ。3孔。	覆 土	
31	器 台	受部ほぼ完形	7.8	受部内外面・脚部内外面ナデ。3孔。	覆 土	
32	高 坏	坏体部完形	——	脚部ヘラケズリ後ミガキ。受部内面ミガキ、脚部内面ヘラケズリ。赤彩。	覆 土	
33	壺	⅔	15.0	口縁部内外面ヨコナデ。	覆 土	
34	壺	口縁部⅓	(11.9)	輪積み。口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ、胴部内外面ナデ。	覆 土	
35	壺	口縁部½	(9.4)	内外面ナデ。	覆 土	
36	壺	口縁部¼	7.0 14.3	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ミガキ。胴部内面一部ヘラケズリ。	覆 土	器面磨耗
37	壺	口縁部ほぼ完形 胴部½	8.4	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ(?)。	覆 土	器面磨耗
38	壺	½	(13.9)	内外面ナデ(?)。	覆 土	器面磨耗

39	壺	口縁部½	(19.2) ——	輪積み。口縁下端部ＬＲ縄文押捺、頸部・胴部ナデ。口縁部内面ミガキ。	覆　土	
40	壺	胴下部以外完形	10.6 ——	口縁部内外面ヨコナデ、頸部ハケメ、胴部内外面ナデ。	覆　土	
41	甕	¼	(14.4) ——		覆　土	器面磨耗
42	甕	½	(11.6) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。頸部内面一部ハケメ。	覆　土	
43	甕	½	(13.0) ——	口縁部内外面ハケメ、胴部ハケメ。	覆　土	
44	甕	口縁部⅛ 胴部¼	(12.6) ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、頸部内外面ハケメ、胴部ハケメ後ナデ。	覆　土	
45	甕	口縁部⅛ 胴部½	(13.0) 13.2	口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴上部ハケメ、胴下部ナデ。	覆　土	
46	甕	口縁部⅓	(19.4) ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、頸部内外面ハケメ。	覆　土	
47	甕	¼	(17.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	覆　土	
48	甕	口縁部⅙ 胴部½	(15.4) 14.6	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ヘラケズリ後ナデ。	覆　土	
49	甕	⅓	(19.6) ——	口縁部内外面ハケメ、胴部ハケメ。	覆　土	
50	甕	口縁部½ 胴部完形	(14.6) ——	口縁部ハケメ後ヨコナデ、頸部ハケメ。頚部ヘラケズリ。	覆　土	
51	甕	胴下部以外完形	16.6 ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ。胴部内面ヘラケズリ後ナデ。	覆　土	
52	甕	口縁部⅒ 胴部⅓	(14.8) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	覆　土	
53	甕	½	(19.5) ——	口縁部内外面ハケメ、胴部ハケメ。胴上部内面ハケメ。	覆　土	
54	甕	胴部ほぼ完形	—— ——	胴部ハケメ後ナデ。胴下部内面ハケメ。	覆　土	
55	甕	⅓	(23.6) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。	覆　土	
56	甕	完　形	17.0 20.7	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。	覆　土	
57	壺	胴部½ 底部完形	—— ——	胴部ハケメ後ミガキ。胴部一部ハケメ。	覆　土	
58	甕	底部完形	—— ——	胴部内外面ナデ。	覆　土	
59	甕	胴下部½ 底部完形	—— ——	胴部ハケメ後一部ナデ。胴下部内面一部ヘラケズリ。	覆　土	

60	壺	胴下部⅓ 底部完形	— —	胴部内外面ナデ。	覆　土	



第289図　096号溝状遺構出土遺物

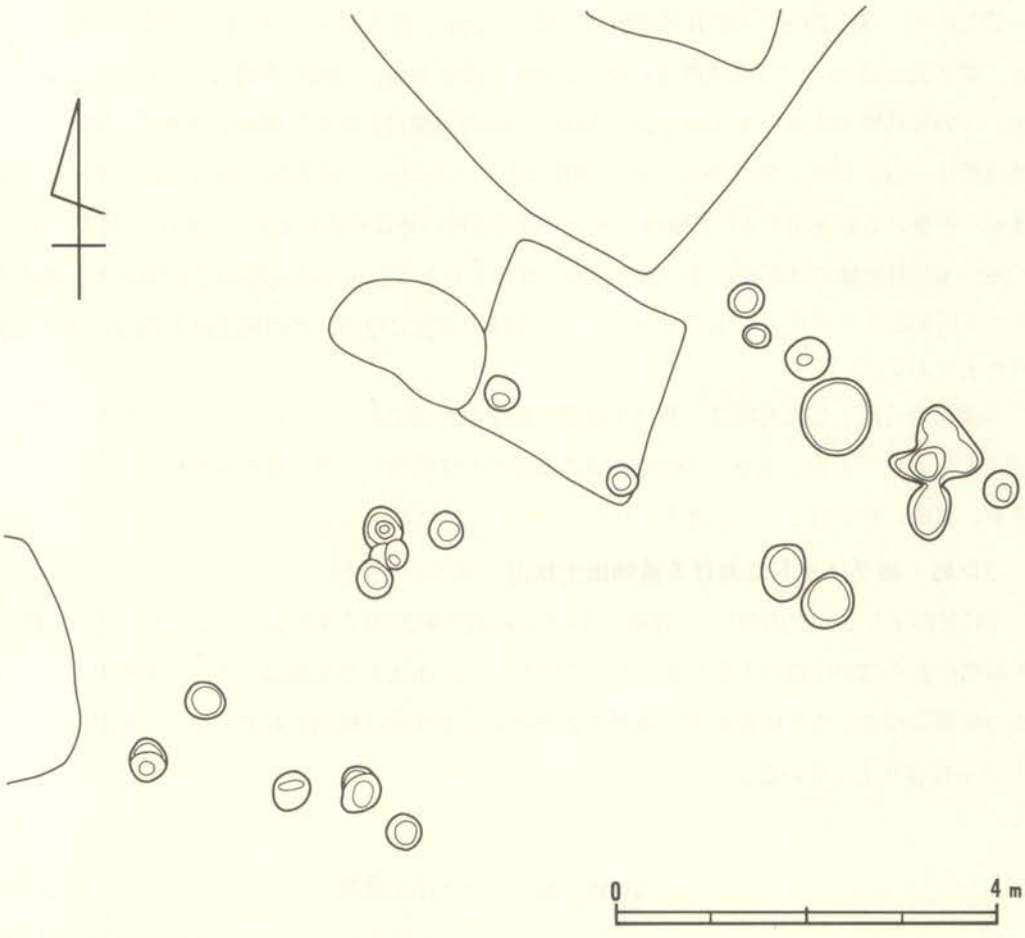
096号溝状遺構出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	坏	ほぼ完形	(13.0) 3.5	口縁部内外面ヨコナデ、体部へラケズリ。内面ナデ。	覆　土	
2	坏	½	(13.6) —	口縁部内外面ヨコナデ、体部へラケズリ。内面ナデ。	覆　土	
3	甕	½	(15.8) —	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面へラケズリ。	覆　土	

ピット群（第290図）

053号遺構の周辺から19個のピットが検出された。これらのピットは、確認面において、径25～73cm、深さ14～58cmであり、30～40cmが最も多い。覆土は、砂質ロームを含む黒色土で、軟らかい。この053号遺構の周辺は地山が削平されていることを考慮すると、これらのピットは、住居跡に伴うピットの可能性が強いが、何軒の住居跡が存在していたかは不明である。

ピットの中から出土した遺物は、極めて少なく、器面の磨耗した土器の細片ばかりである。



第290図　ピット群

053・057A・059F・062・063・065・066・067・068号遺構（第291図）

これら9基の方形遺構は、調査当初一軒毎の住居跡と考えられたが、規模・形状・覆土の状態等が共通しており、これら9基の配置に規則性が認められることから、全体で一つの遺構と考えられるものである。9基共に地山が削平されており、東側（062・063・068号遺構）程地山が深く削平されている。全体の平面形は、外周において長軸23.7m、短軸11.0～11.2mをはかり、長軸は北西を向く。形状は長方形を呈し、長軸及び短軸の中間にそれぞれ方形遺構が存在する。各方形遺構間の距離は南北2.5～2.8m、東西8.8～9.1mをはかる。053号遺構は一辺2.0m、深さ20cm、057B号遺構は1.95×2.10m、深さ20cm、059F号遺構は1.86×1.90m、深さ35～45cm、062号遺構は1.88×2.00m、深さ8cm、063号遺構は一辺1.90m、深さ13cm、065号遺構は1.80×1.90m、深さ30cm、066号遺構は1.90×2.00m、深さ20～38cm、067号遺構は一辺2.08m、深さ35cm、068号遺構は2.16×2.23m、深さ26～30cmをはかり、各遺構はやや不整の方形を呈する。壁は、062・068号遺構以外は垂直に近い。また、053・059F・066・068号遺構では底面に浅い落ち込みが検出されたが、ほかは比較的平坦である。覆土は、すべて暗褐色土と砂質ロームのブロックで、全体が非常に堅い。この覆土は人為的に埋め戻された土である。

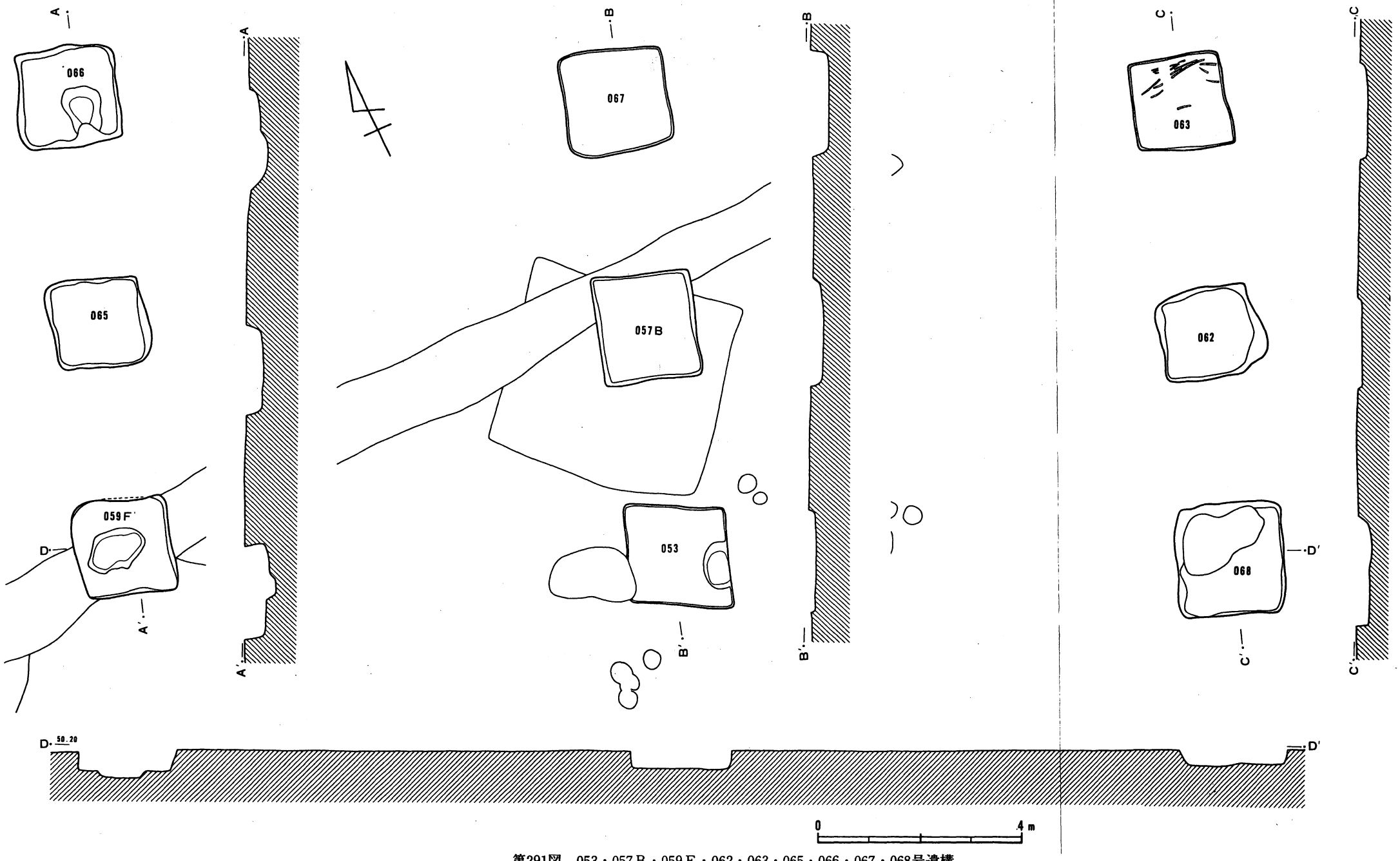
各遺構から出土した遺物は、共に土師器の細片が数点である。これらは人為的な埋土の中に混入したものである。なお、063号遺構の底面からは腐蝕した竹（または木材の皮？）が検出され、底面に敷かれていたと考えられる。

3D45・46グリッドにおける遺物出土状況（第292～294図）

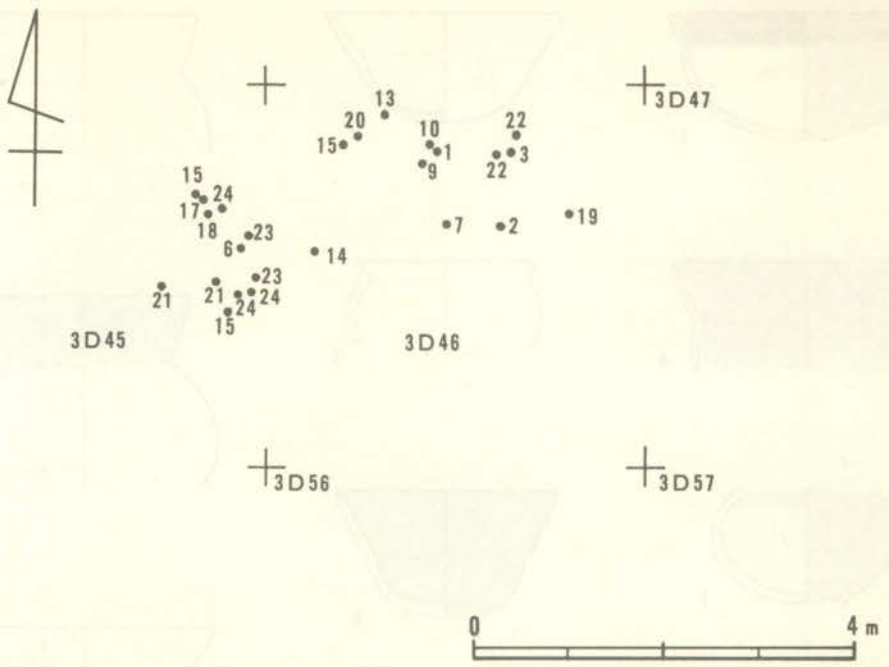
047号跡より3m程西側に、径約1.6×5.0m程の範囲内で完形あるいは完形に近い状態の土器等を含め250片程の土器がまとまって出土した。出土した土器は、すべて黒色土中である。この範囲は精査したが床面あるいは落ち込みのような状況は検出されず、逆に、地山は周囲より15cm程盛り上っていた。

3D45・46グリット出土遺物

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	埦	口縁部½ 体部完形	(14.0) 6.7	口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ、胴部ナデ。口縁部内面ハケメ、胴部内面一部ハケメ。赤彩。	黒色土	
2	坏	口縁部⅒ 体部¼	(12.5) 5.7	口縁部内外面ミガキ、体部ミガキ。体部内面ナデ。	黒色土	
3	坩	口縁部⅛ 体部½	(11.8) ——	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ミガキ。	黒色土	

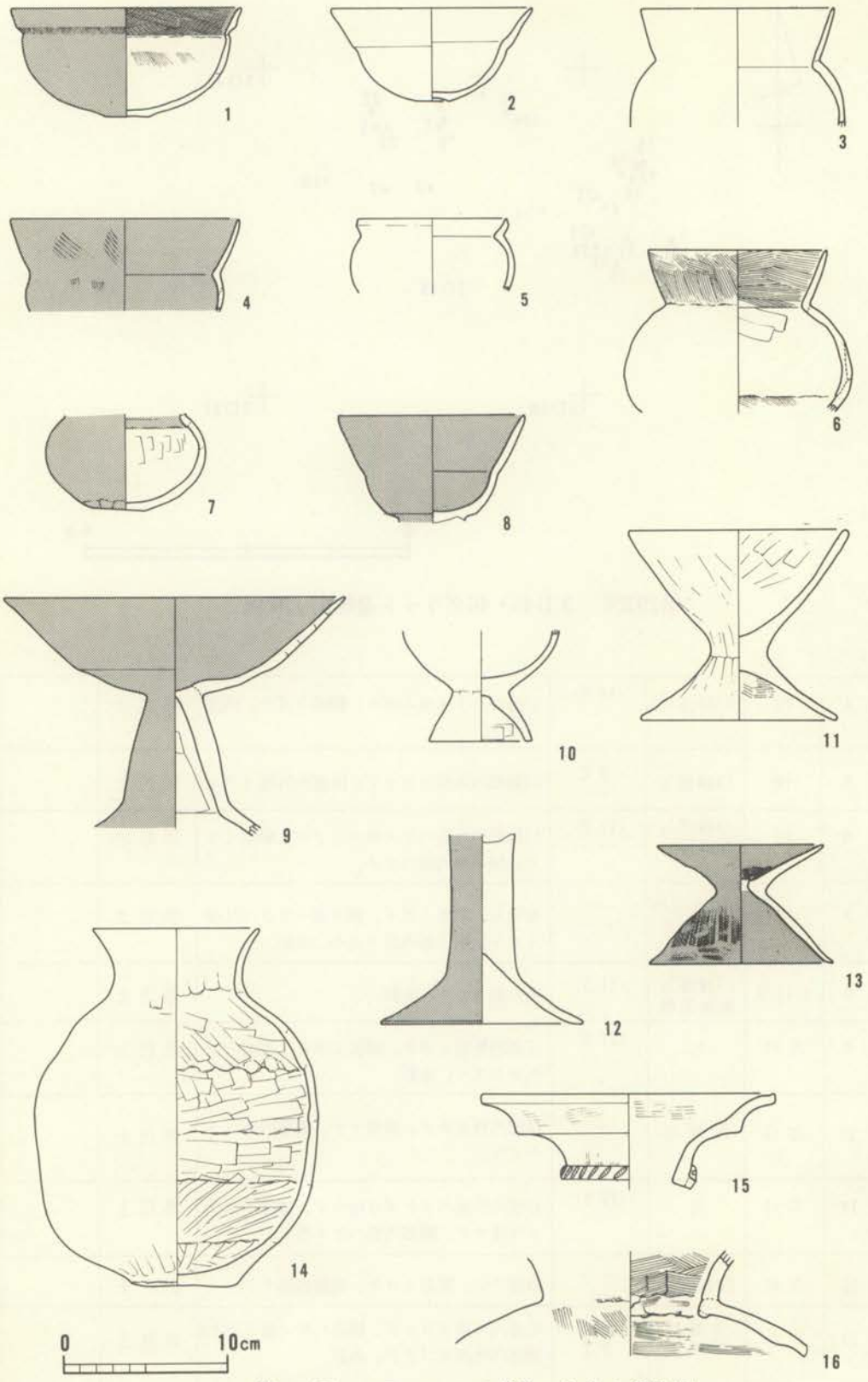


第291図　053・057B・059F・062・063・065・066・067・068号遺構

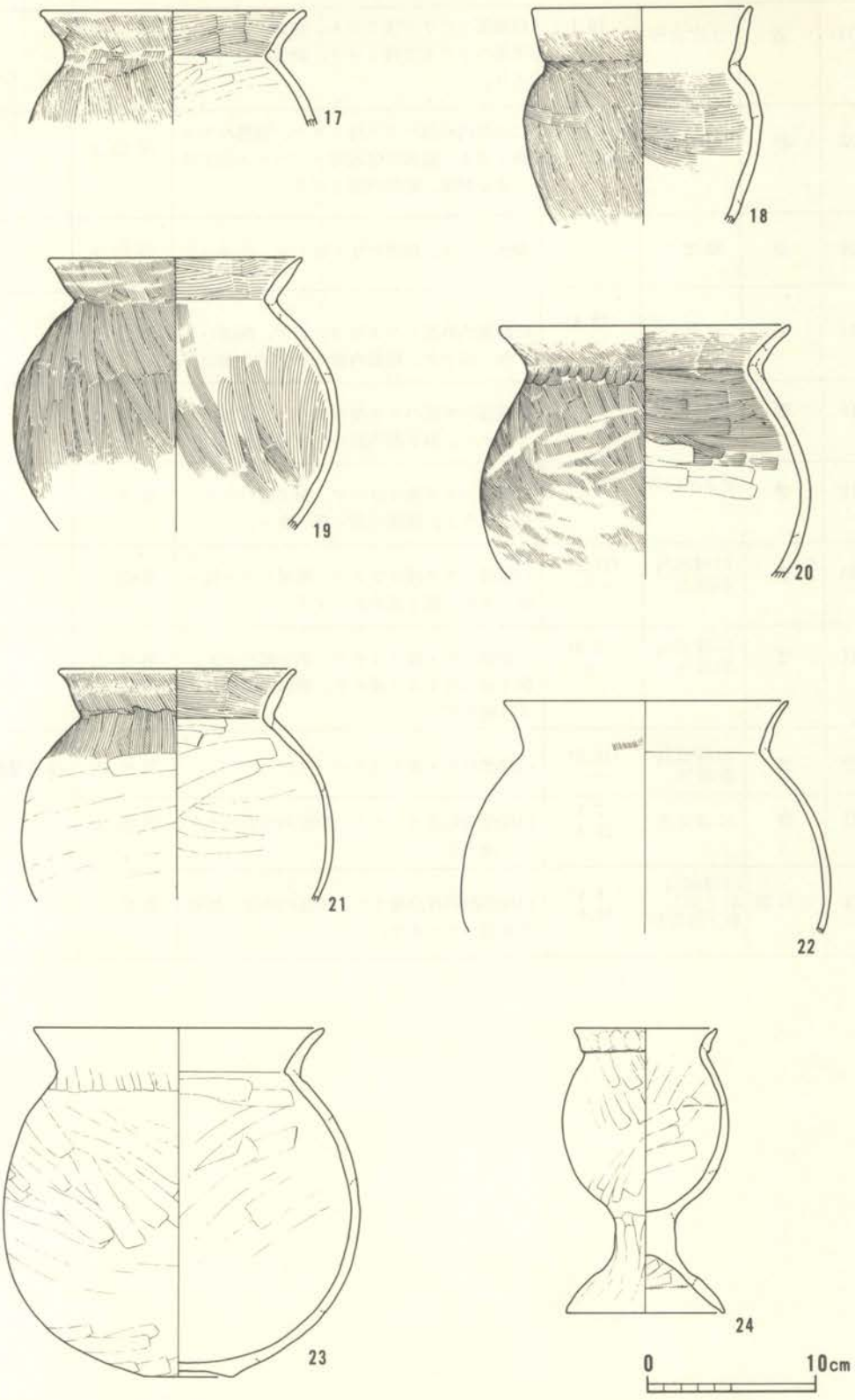


第292図　3 D45・46グリット遺物出土状況

4	坩	口縁部⅙	(14.0) ——	口縁部ハケメ後ミガキ、胴部ミガキ。内面ミガキ。	黒色土	
5	埦	口縁部⅛	(9.2) ——	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ミガキ。	黒色土	
6	坩	口縁部⅕ 胴部½	(11.0) ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ミガキ。胴下部内面ハケメ。	黒色土	
7	坩	胴上部完形 胴下部½	—— ——	輪積み。胴部ミガキ、胴下部ヘラケズリ後ミガキ。胴上部内面ミガキ。赤彩。	黒色土	
8	台付坩	口縁部⅕ 胴部完形	(11.5) ——	内外面ミガキ。赤彩。	黒色土	
9	高坏	½	(21.0) ——	坏部内外面ミガキ、脚部ミガキ。脚部内面ヘラケズリ。赤彩。	黒色土	
10	高坏	脚部½	—— ——	坏部内外面ナデ、脚部ナデ。脚部内面ヘラケズリ。	黒色土	
11	高坏	⅓	(12.6) ——	坏部内外面ヘラケズリ後ナデ、脚部ヘラケズリ後ナデ。脚部内面ハケメ後ナデ。	黒色土	
12	高坏	脚部完形	—— ——	脚部ナデ、裾部ミガキ。裾部内面ナデ。	黒色土	
13	器台	受部⅓ 脚部¾	(10.2) 7.2	受部内外面ヨコナデ、脚部ハケメ後ミガキ、裾部内外面ヨコナデ。赤彩。	黒色土	



第293図　3 D 45 ・46グリット出土遺物(1)



第294図　3 D45・46グリット出土遺物(2)

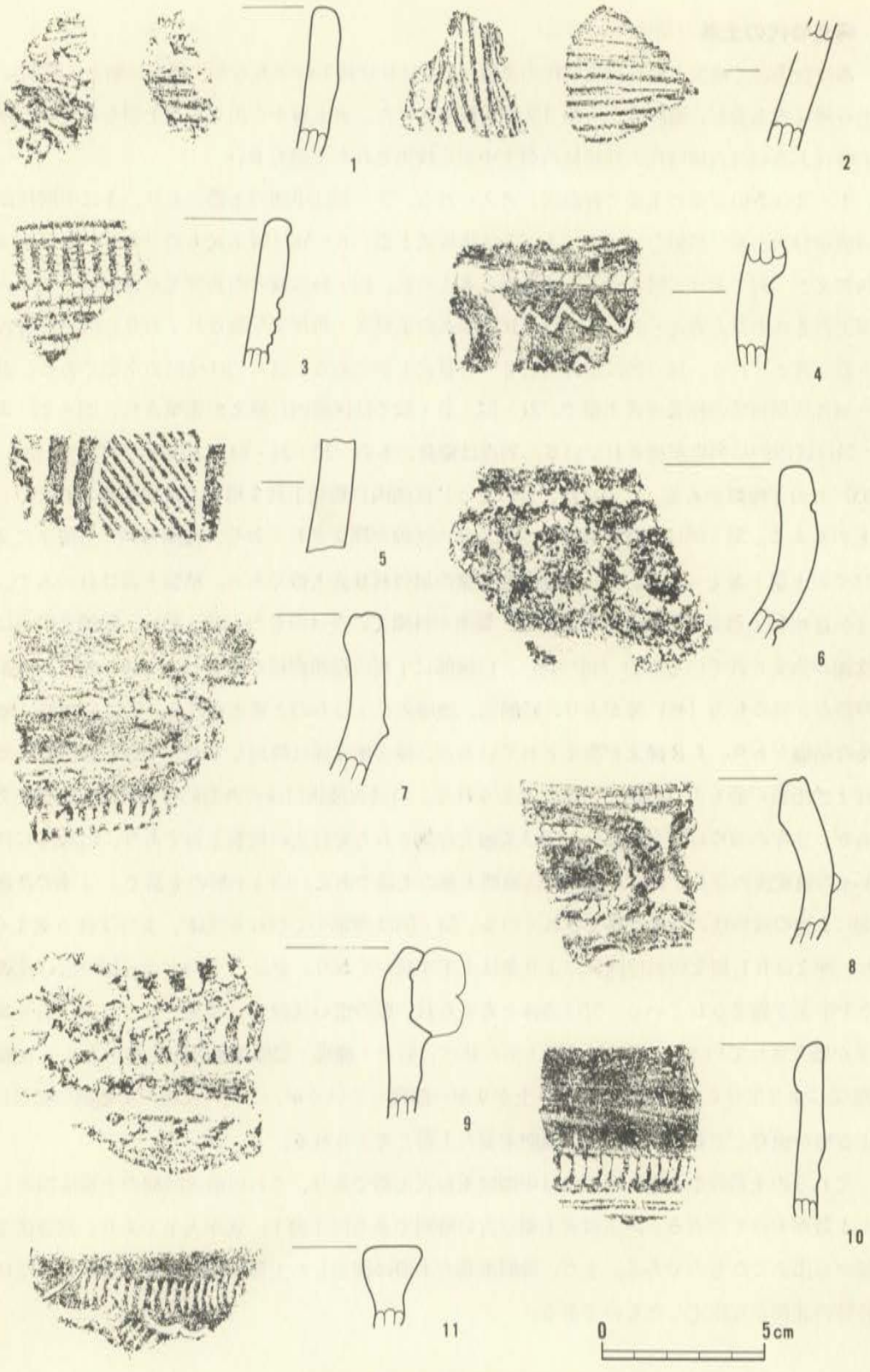
14	壺	ほぼ完形	10.1 21.6	口縁部ヨコナデ後ミガキ、胴部ミガキ、胴下部ヘラケズリ後ミガキ。胴部内面ヘラケズリ。	黒色土	
15	壺	口縁部完形	18.2 ——	口縁部内外面ハケメ後ミガキ、頸部ハケメ後ミガキ、頸部の隆起帯上にハケメ状工具による刺突。頸部内面ミガキ。	黒色土	
16	壺	頸部 ½	—— ——	頸部ハケメ、胴部ハケメ後ナデ。内面ハケメ。	黒色土	
17	甕	⅓	(15.4) ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後一部ナデ。胴部内面ヘラケズリ後ナデ。	黒色土	
18	甕	口縁部¼ 胴部½	(12.8) ——	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。胴上部内面ハケメ後ナデ。	黒色土	
19	甕	胴下部以外 ½	(15.0) ——	口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴上部ハケメ、胴下部ナデ。胴部内面一部ハケメ。	黒色土	
20	甕	口縁部½ 胴部¼	(17.2) ——	口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後一部ミガキ。胴上部内面ハケメ。	黒色土	
21	甕	口縁部½ 胴部⅓	(13.8) ——	口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴上部ハケメ、胴下部ヘラケズリ後ナデ。胴部内面ヘラケズリ後ナデ。	黒色土	
22	甕	口縁部¼ 胴部⅓	(16.8) ——	口縁部ハケメ後ヨコナデ（？）。	黒色土	器面磨耗
23	甕	ほぼ完形	17.1 20.4	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ヘラケズリ後ナデ。	黒色土	
24	台付甕	口縁部⅙ 胴上部⅓ 胴下部完形	(8.4) 16.6	口縁部指頭押捺後ナデ、胴部内外面・脚部内外面ヘラケズリ。	黒色土	

縄文時代の土器（第295～300図）

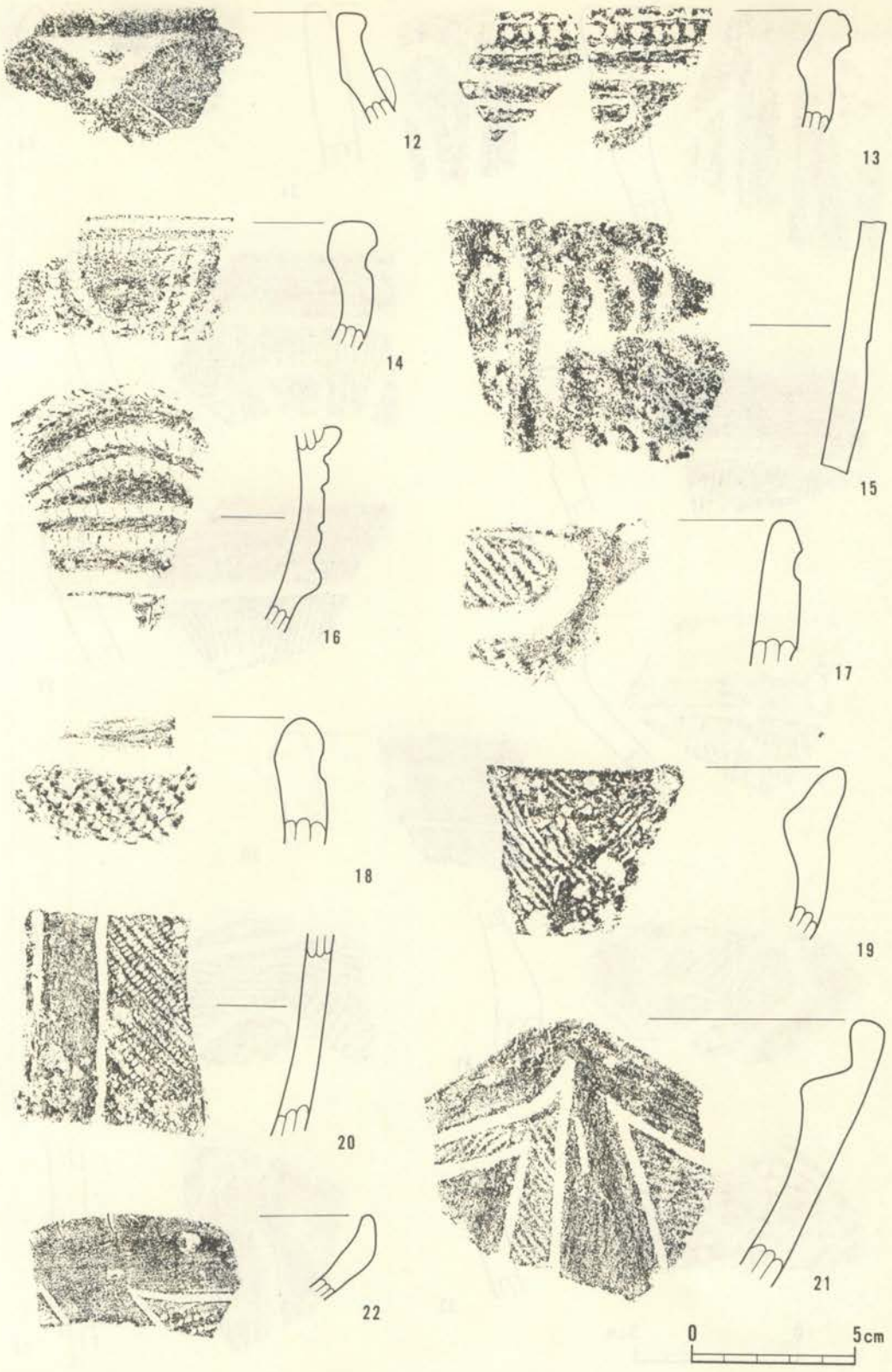
番後台遺跡で検出された縄文時代の遺構は、002B号跡1軒であるが、縄文早期から晩期に至る縄文式土器が、遺跡内から約150片程検出された。表土層から出土した土器もあるが、弥生時代あるいは古墳時代の住居跡の覆土中から検出された土器も多い。

1・2は条痕文系の土器で野島式と考えられる。3～20は中期の土器であり、3は中期初頭の清水台式土器に類似している。4・5は勝坂式土器、6～16は阿玉式土器である。6～9は角押文が一列であり、阿玉台Ⅰb式土器と考えられ、13・14は複列の角押文が施されており、阿玉台Ⅱ式土器と考えられ、10・11・16は幅広の瓜形文・角押文が施されており、阿玉台Ⅲ式土器と考えられる。16～20は加曽利EⅡ～EⅢ式土器である。21～52は後期の土器である。21～34は後期初頭の称名寺式土器で、21・22・31・32では区画内に縄文が充填され、23～25・33・34は区面内に列点が施されている。列点は縦長のもの（23・24・34）と円形の刺突文（25・33）との2種類がある。このほか、27のように区画内に櫛状工具を用いた沈線が施されているものもある。35・38は櫛状工具による螺旋状の沈線が施文されており、後期初頭から前半にかけての土器と考えられる。41～49は後期中葉の加曽利B式土器である。精製土器は41のみで、ほかは粗製土器であるが、粗製土器は、器面が斜縄文のだけのもの（42・43）、斜縄文の上に沈線が施文されているもの（46～49）、口縁部に1列の指頭押捺があるもの（46・47）、指頭押捺が2列のもの（45）等があり、時間差、地域差によるものと考えられる。50は口縁部に縦長の貼瘤があり、LR縄文が施文されているが、縄文施文部は隆起しておらず曽谷式土器か安行1式土器の最も古い時期のものと考えられる。51は大波状口縁の典型的な安行2式土器であるが、3片の破片は接合しない。52は条線文が施された安行式の粗製土器であり、口縁部に径1cmの焼成後の穿孔がある。53～57は晩期末葉の土器である。53は小形の土器で、3本の沈線間に2列の綾杉状の沈線が施文されている。54・55は頸部のくびれる浅鉢、または鉢と考えられ、地文はRL縄文の斜位回転により条は上下を向いており、更に、その上から幅の広い沈線で工字文が施文されている。57は浅鉢と考えられ、幅の広い沈線が3条施され、以下はLR縄文が施文されている。56は53～55・57に比べ、胎土・焼成・器面調整等が粗雑であり、沈線施文により生じる両側の粘土の盛り上がりが一部残っているが、3条の沈線の集結部に粘土による瘤が遺存しており、やはり、晩期末葉の土器と考えられる。

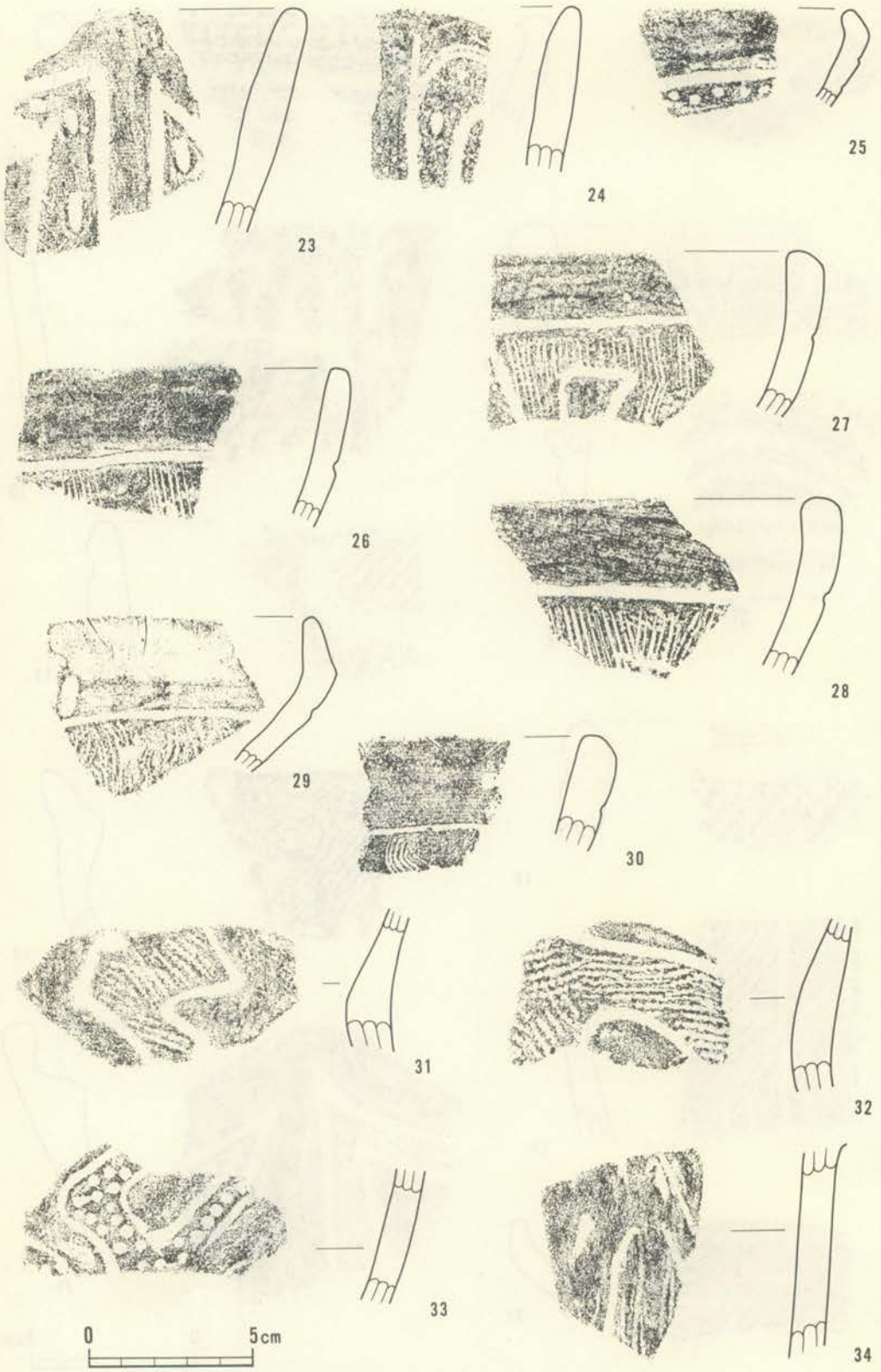
これらの土器の中で最も多いのは中期阿玉台式土器であり、それ以前の時期の土器は図示した土器がすべてである。阿玉台式土器は古い時期である阿玉台Ⅰb式が大半であり、調査区全域から出土したものである。また、晩期末葉の土器は図示した土器がすべてであるが、073C号跡の北側から出土したものである。



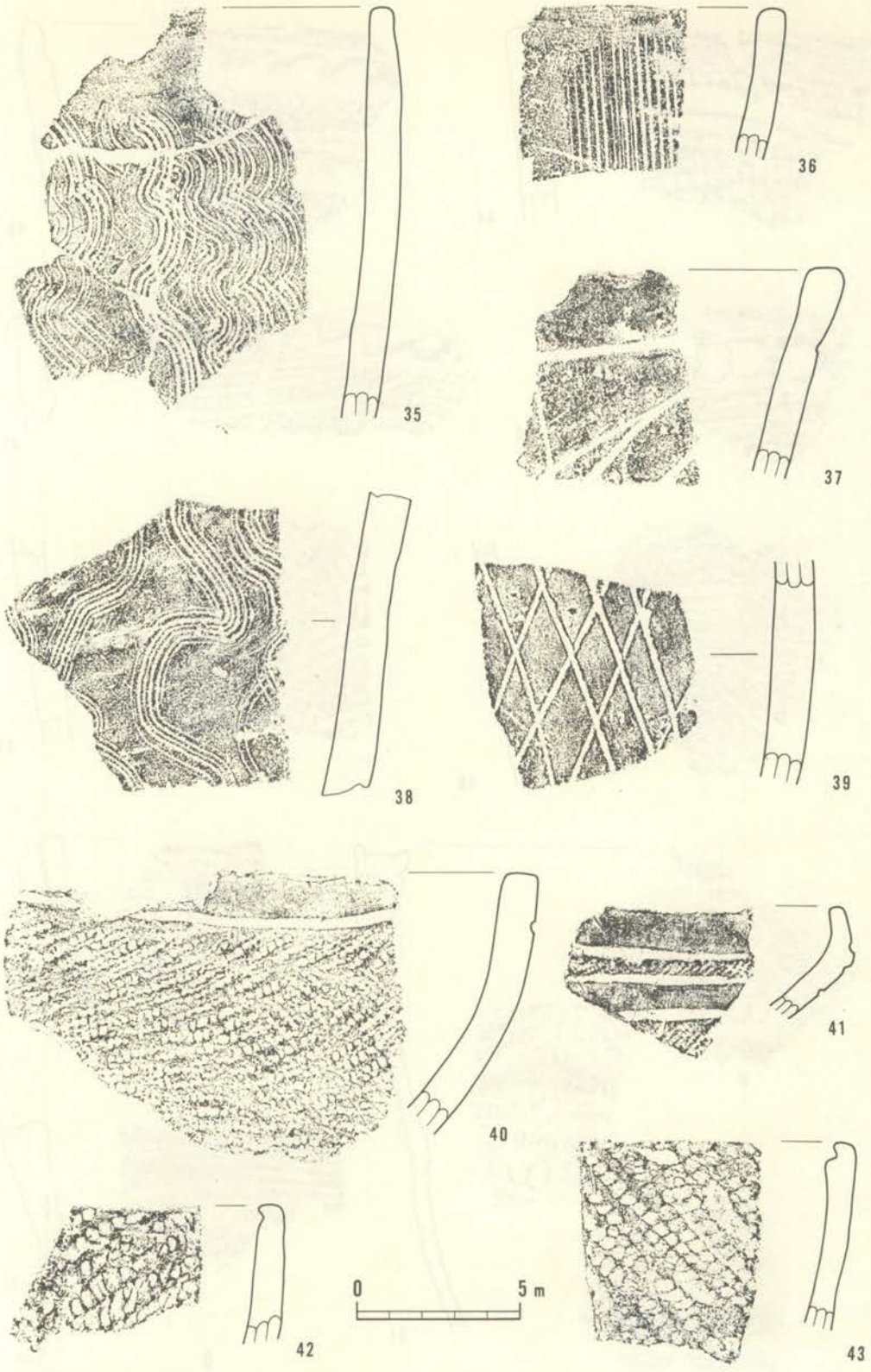
第295図　縄文時代の土器(1)



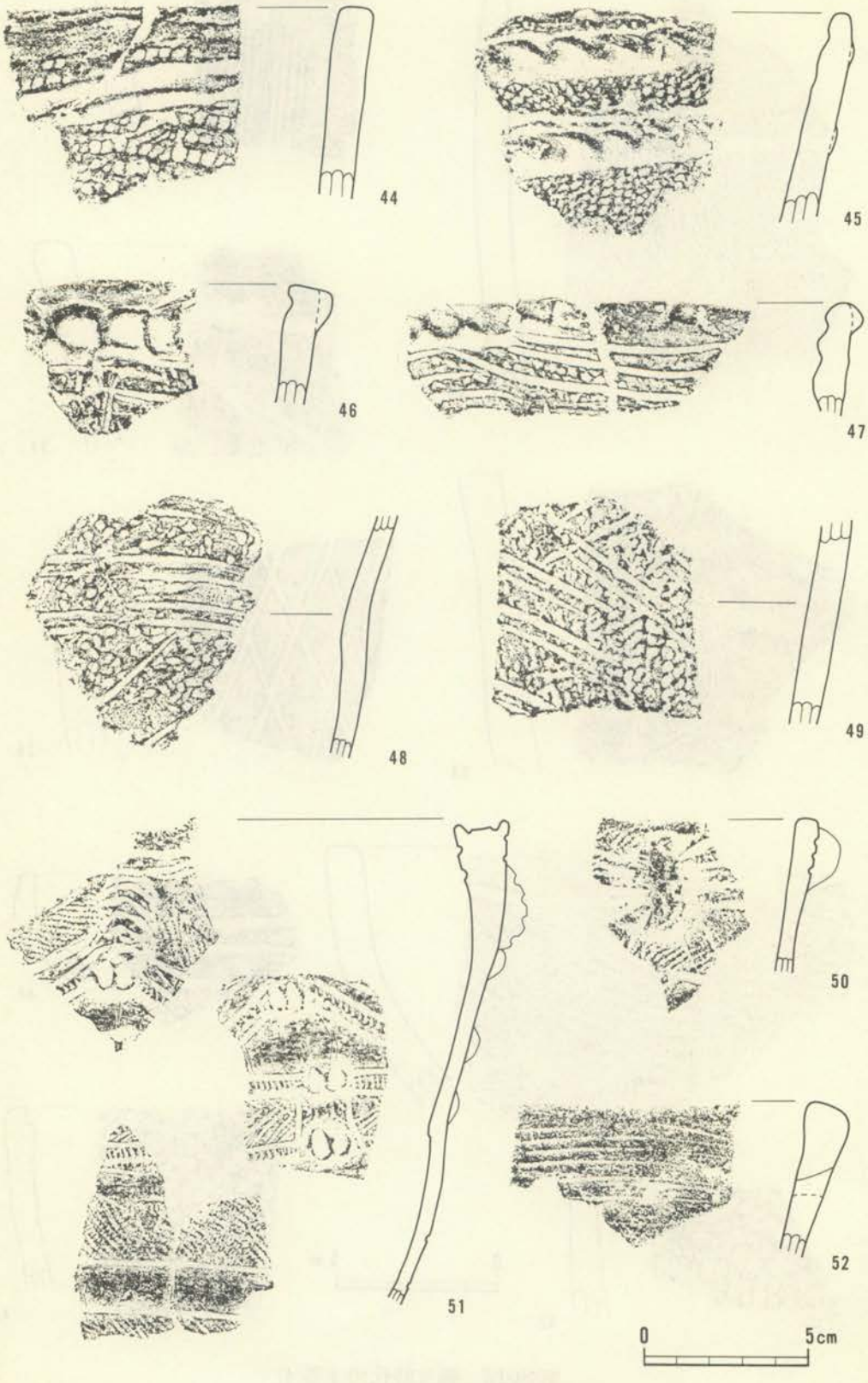
第296図　縄文時代の土器(2)



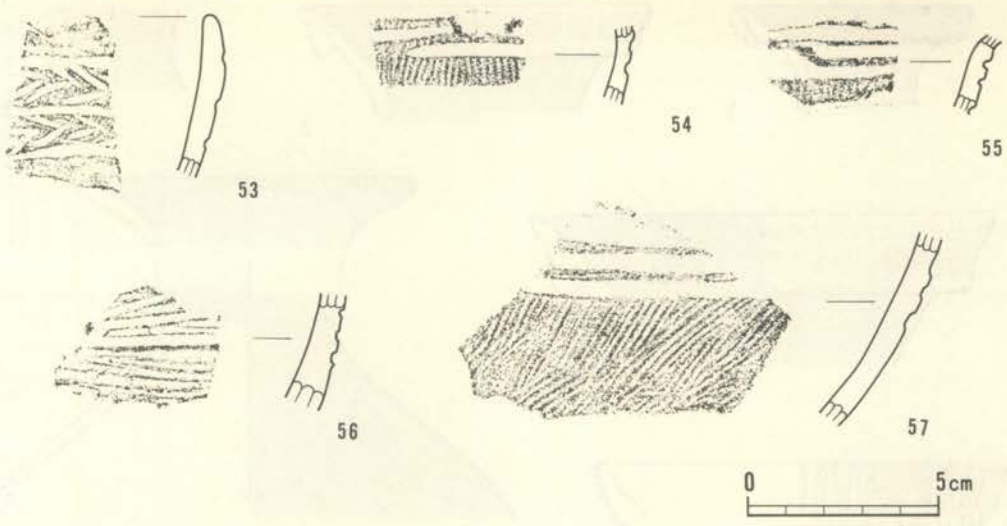
第297図　縄文時代の土器(3)



第298図　縄文時代の土器(4)



第299図　縄文時代の土器(5)



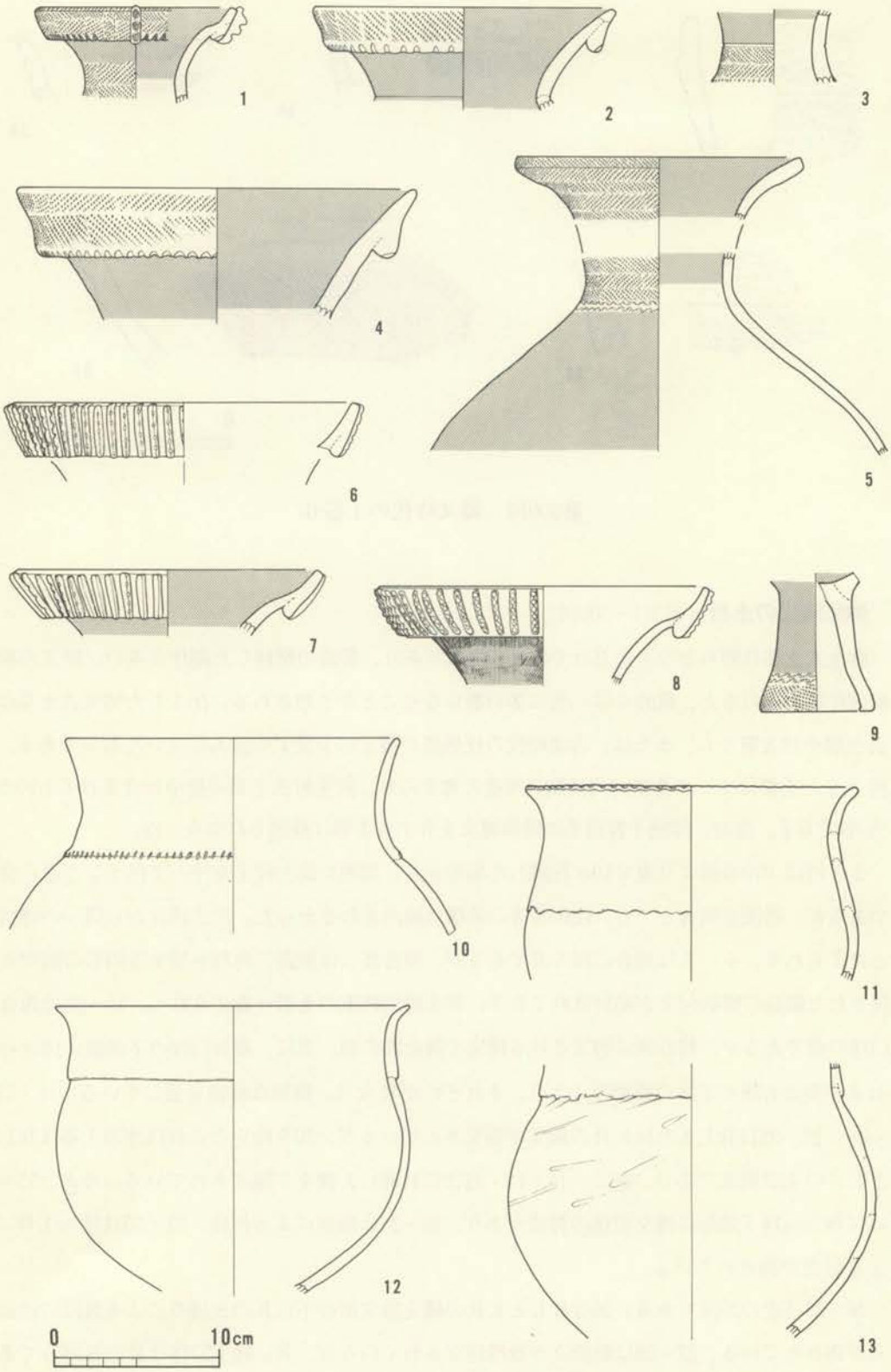
第300図　縄文時代の土器(6)

弥生時代の土器（第301～306図）

弥生式土器は明らかなものだけで約 150片程であり、器面の磨耗した細片が多い。無文の胴部破片等を含めると、量的には、更に多い数になることが予想される。出土した弥生式土器は表土層や包含層から、または、古墳時代の住居跡の覆土に少量ずつ混入していたものである。出土した土器はすべて弥生時代後期の所産と考えられ、弥生町式土器の範中に含まれるものが大半である。なお、印旛手賀沼系の附加縄文を有する土器は検出されなかった。

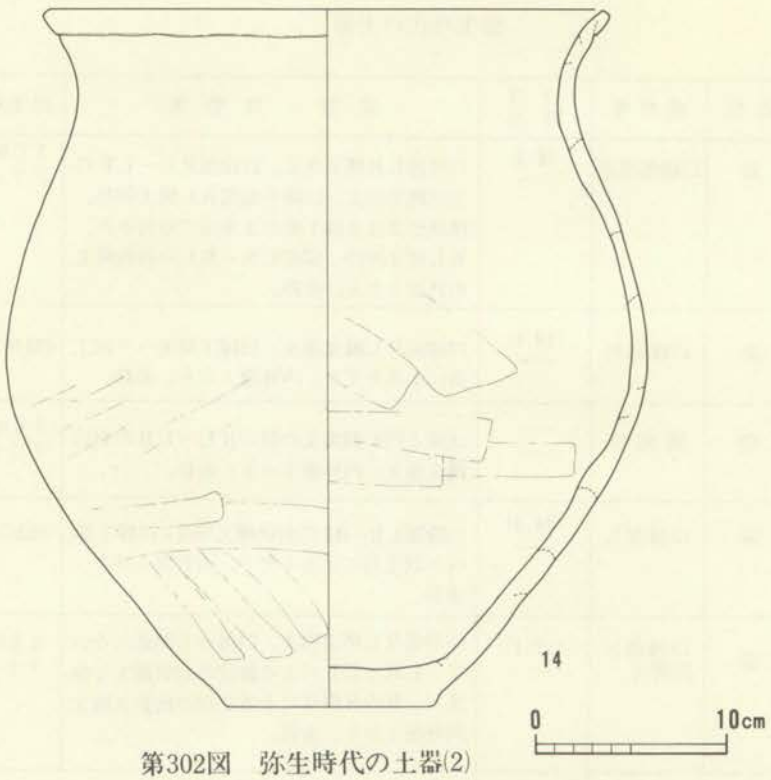
5と12は 070号跡より東に10m 程離れた場所から、周囲に焼土粒子を伴って出土した壺と甕であるが、周囲を精査しても、住居跡等の遺構は検出されなかった。出土状況から同一の時期と考えられる。6～8は複合口縁の壺であるが、複合部には断面三角形を呈する円形の刺突が施された縦長の棒状付文が貼付されており、弥生時代終末の土器と考えられる。15～25は複合口縁の壺であるが、複合部に施文される縄文や複合部の幅、更に、複合口縁の下端部に付けられる刺突の有無や工具の種類等により、それぞれが異なり、複雑な様相を呈している。15・19・21・23～25はＲＬまたはＬＲの縄文が施文されているが、20を除いたこれ以外の土器はＲＬとＬＲの羽状縄文であり、更に、16・17・22は口唇部にも縄文が施文されている。なお、15～20は複合口縁下端部に縄文原体の押捺があり、22・24は指頭による押捺、21・25は棒状工具による刺突が施されている。

26～29は壺の頸部である。26はＲＬとＬＲの縄文施文部の下にＲのＳ縛りによる数段の結節文が施されている。27・28は結節文が数段施文されているが、共に縄文原体はＲのＳ縛りである。29は竹管による円形刺突文が施されている。



第301図　弥生時代の土器(1)

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形・調整等	出土層位	備考
1	壺	口縁部完形	12.2 ——	口唇部ＬＲ縄文施文。口縁部ＲＬ－ＬＲの羽状縄文施文。口縁下端部ＲＬ縄文押捺。棒状付文は２個１組で３単位で貼付され、ＲＬ縄文押捺。頸部ＬＲ－ＲＬの羽状縄文。内外面ミガキ。赤彩。	５Ｃ96 グリット	
2	壺	口縁部⅓	(19.4) ——	口縁部ＲＬ縄文施文。口縁下端部ヘラ状工具によるキザミ。内外面ミガキ。赤彩。	038Ｂ号跡	
3	壺	頸部⅓	—— ——	沈線と円形刺突文の間にＲＬ－ＬＲの羽状縄文施文。内外面ミガキ。赤彩。	６Ｃ06 グリット	
4	壺	口縁部⅛	(24.3) ——	口縁部LR－RLの羽状縄文施文。口縁下部ヘラ状工具によるキザミ。内外面ミガキ。赤彩。	032号跡	
5	壺	口縁部⅙ 胴部¼	(17.1) ——	口唇部ＲＬ縄文施文。口縁から頸部にかけて、ＬＲとＲＬによる数段の羽状縄文を施文し、ＲのＳ縛りによる２列の結節文施文。内外面ミガキ。赤彩。	３Ｅ07 グリット	12と伴出
6	壺	口縁部⅓	(20.4) ——	口縁部にキザミを有する棒状付文。内面ミガキ。	079Ａ・080 号跡	
7	壺	口縁部⅕	(18.0) ——	口縁部にキザミを有する（？）棒状付文。内外面ミガキ。赤彩。	４Ｃ38 グリット	
8	壺	口縁部⅕	(20.2) ——	口縁部にキザミを有する棒状付文。頸部ハケメ後ミガキ。内面ナデ。赤彩。	032号跡	
9	高坏	脚部½	—— ——	脚部内外面ナデ。裾部ＲのＳ縛りによる２列の結節文とＲＬ縄文施文。赤彩。	046号跡	
10	甕	⅓	(20.0) ——	口縁部内外面・胴部内外面ナデ、頸部の接合部に縄文押捺。	３Ｄ39 グリット	器面磨耗
11	甕	¼	(20.0) ——	口唇部はヘラ状工具によるキザミで小波状を呈する。内外面ナデ。頸部に接合痕。	038Ａ号跡	
12	甕	口縁部完形 胴部½	21.4 ——	輪積み。内外面ナデ。	３Ｅ07 グリット	5と伴出
13	甕	胴部完形	—— ——	輪積み。ヘラケズリ後ナデ。頸部に接合痕。	３Ｅ04 グリット	
14	甕	⅓	—— ——	輪積み。口縁部・胴上部ナデ。胴下部ヘラケズリ後ナデ。	４Ｄ90 グリット	

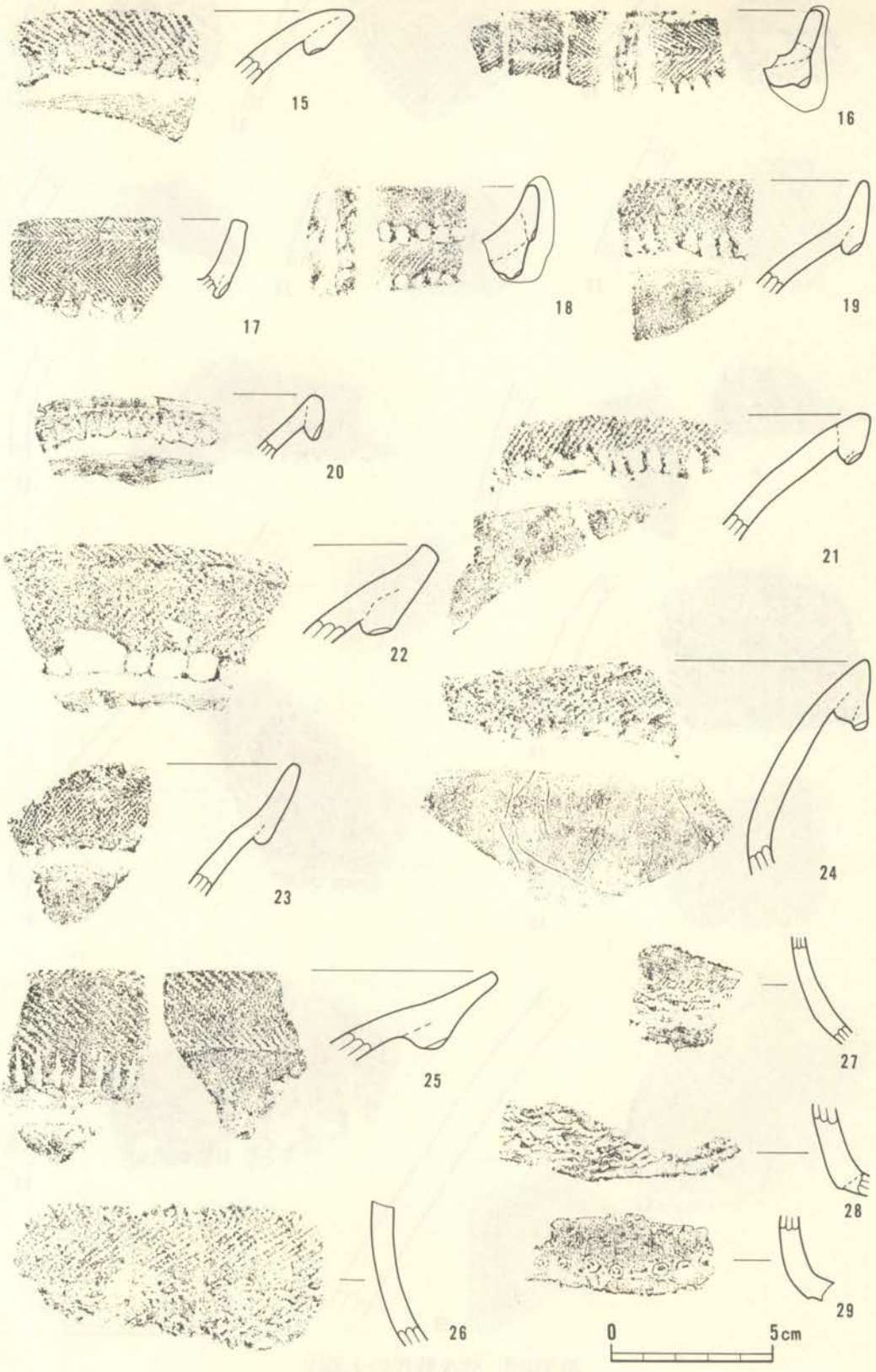


第302図　弥生時代の土器(2)

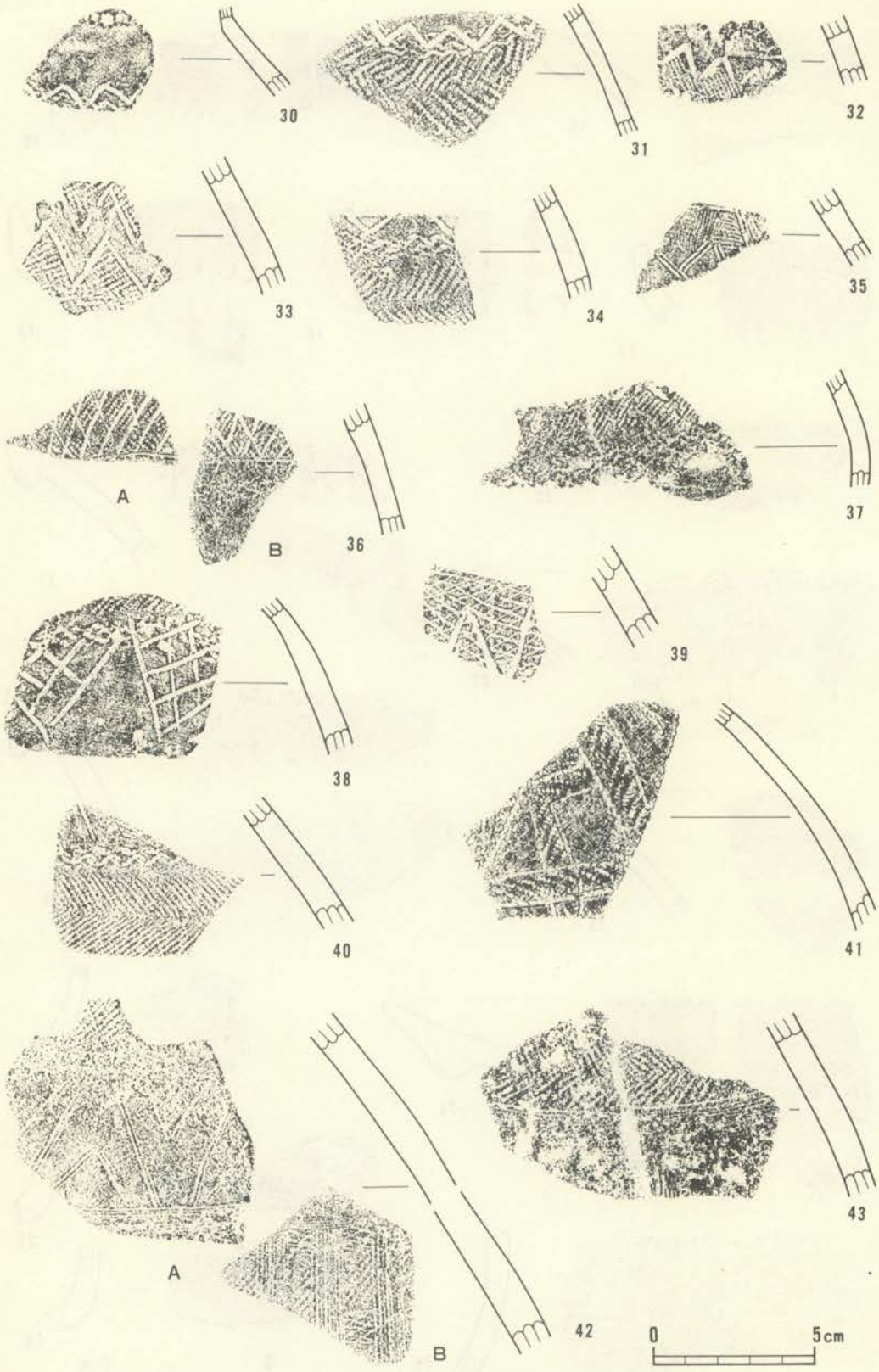
30～57は壺の胴上部であり、56・57は竹管による円形の刺突が施文されているが、これら以外の土器は縄文と沈線により施文されている。30・32・33は鋸歯状の山形文が施され、ＬＲまたはＲＬの縄文が区画内に充填されている。41もＲＬ縄文が充填されるが、区画は複雑である。31・34・36～38は山形または網目状の沈線が施されているが、地文にはＬＲ縄文（36～38）ＬＲとＲＬの羽状縄文（31・34）が施されている。なお、31・34はＬのＺ縛りによる結節文も施されている。39は地文に格子目状の細い沈線が施され、更に山形文が施されている。42～45はＬＲとＲＬによる羽状縄文が、数状単位の楕状の細い沈線で区画されている。42は縄文施文部の下に２本同時施文具による「Ｖ」字文が施され、接合しないもう一方の破片は、網目状沈線・縄文が施された上に縦位の楕状の沈線が施文されている。46～55は結節文が施された土器で、49・52～55は縄文が地文である。結節はＲのＳ縛りによるものが多い。

58は無頸壺、59・60は鉢と考えられ、口縁部はＲＬとＬＲによる羽状縄文で構成されている。なお、58・59は羽状縄文の下端部に縄文原体の押捺が認められる。

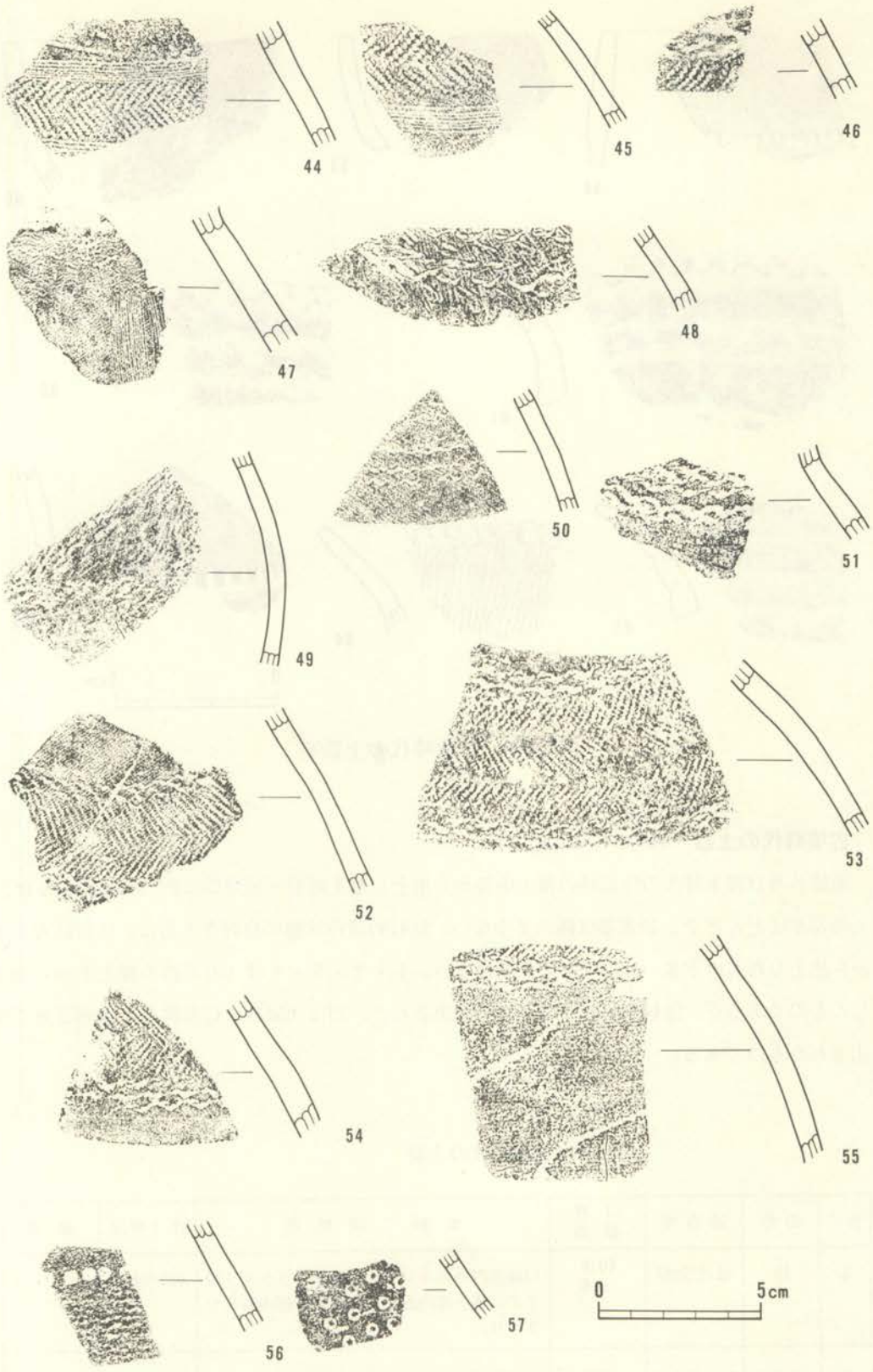
61～65は甕である。61～63は口頸部に指縄（？）による押捺があり、以下は粘土の接合面を明瞭に残している。64は器面に縦位の細い沈線が施され、口唇部には縄文原体に類似するような工具の押捺が認められる。65は胴部最大径付近に接合面を有し、棒状工具による刺突が施されている。



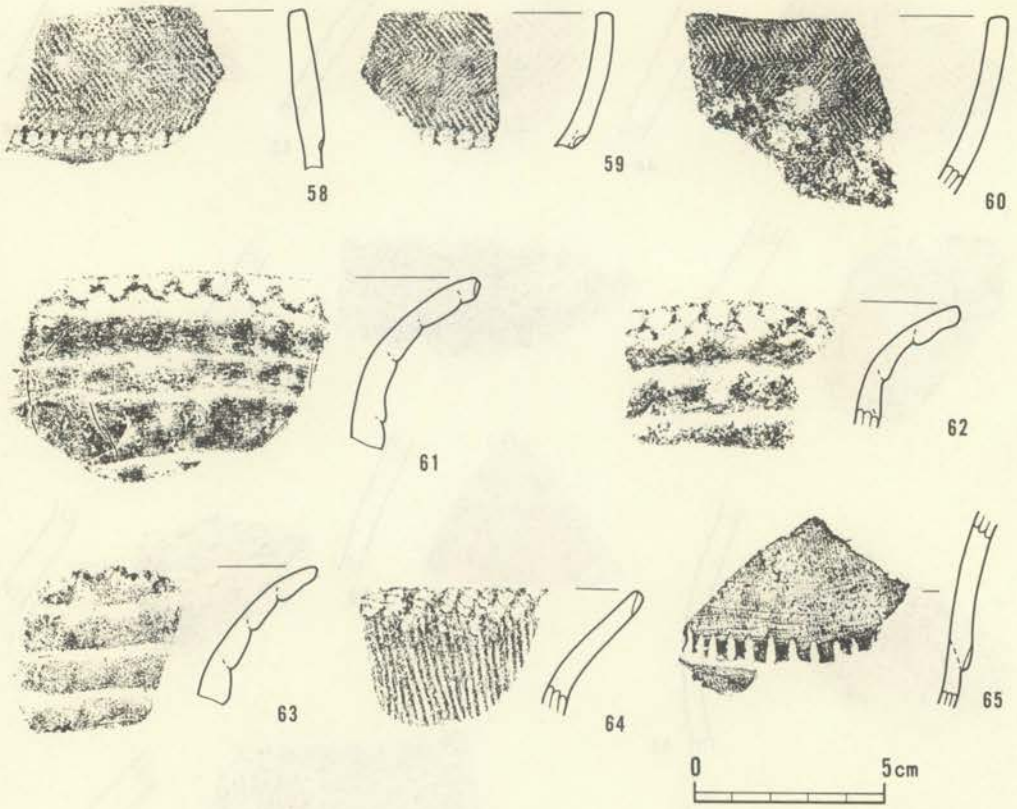
第303図　弥生時代の土器(3)



第304図　弥生時代の土器(4)



第305図　弥生時代の土器(5)



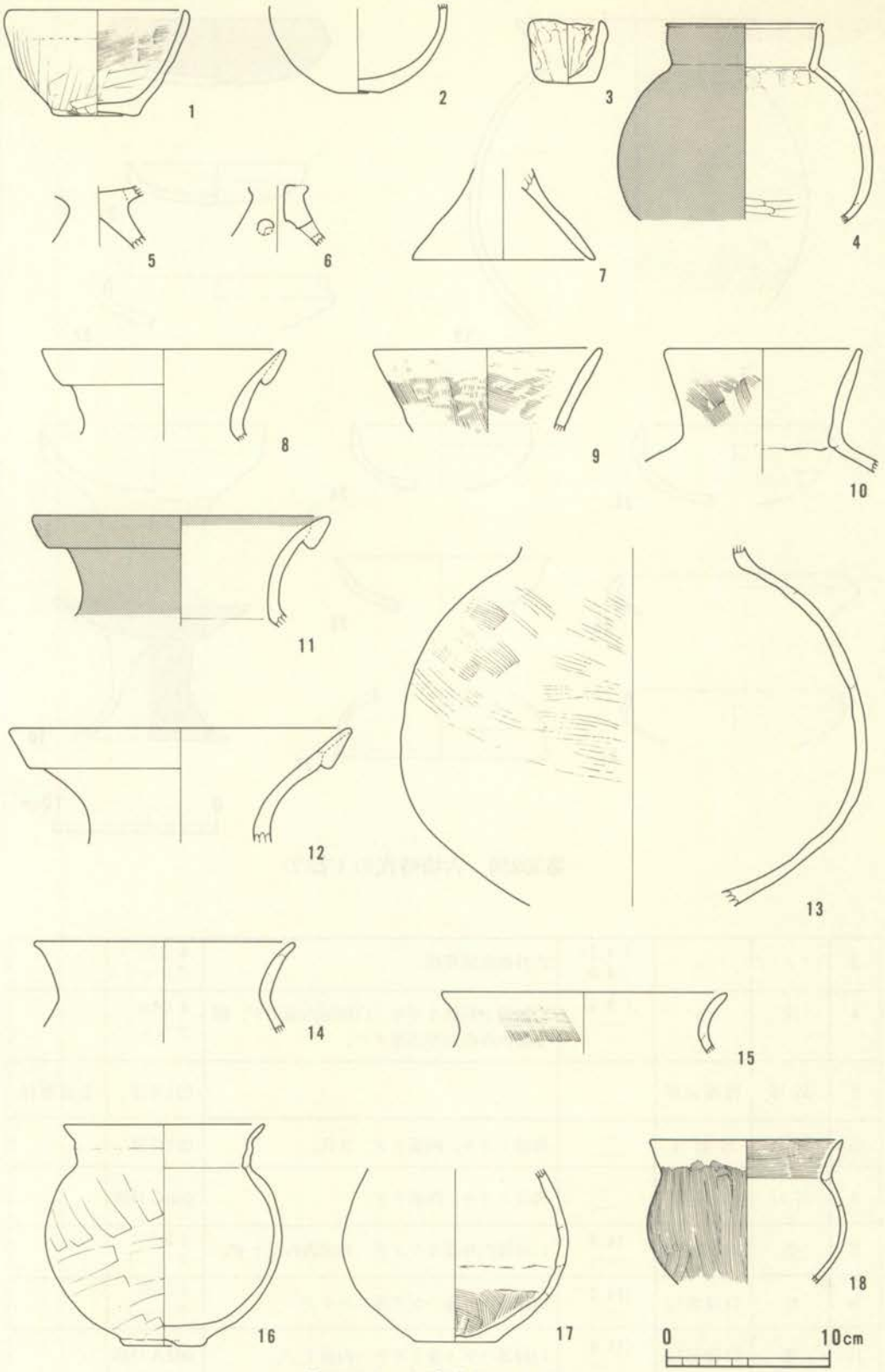
第306図　弥生時代の土器(6)

古墳時代の土器（第307～309図）

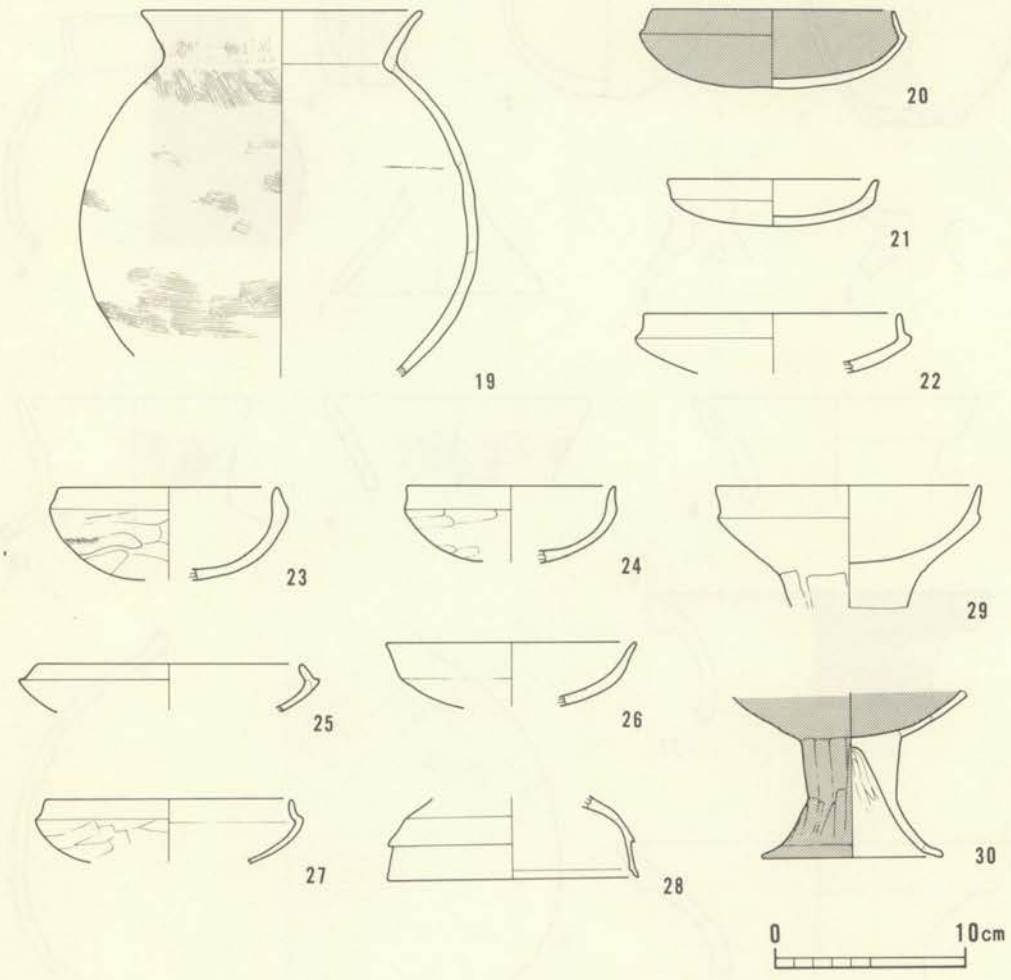
遺構外及び弥生時代の住居跡の覆土中等から出土した土師器・須恵器は約 300片程あるが、土師器がほとんどで、須恵器は極めて少ない。比較的遺存状態の良好な土器は、住居跡覆土中から出土したものが多いが、完形の土器はない。1・2・5・6は 021号跡の覆土中から出土したものであるが、住居中央にまとまって検出された。13は 056B・C号跡の遺構確認面で検出されたものである。

古墳時代の土器

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形　調整等	出土層位	備考
1	鉢	ほぼ完形	10.8 6.6	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ。体上部内面ハケメ、体下部内面ヘラケズリ。	021号跡	
2	坩	胴下部完形	― ―	内外面ナデ。	021号跡	



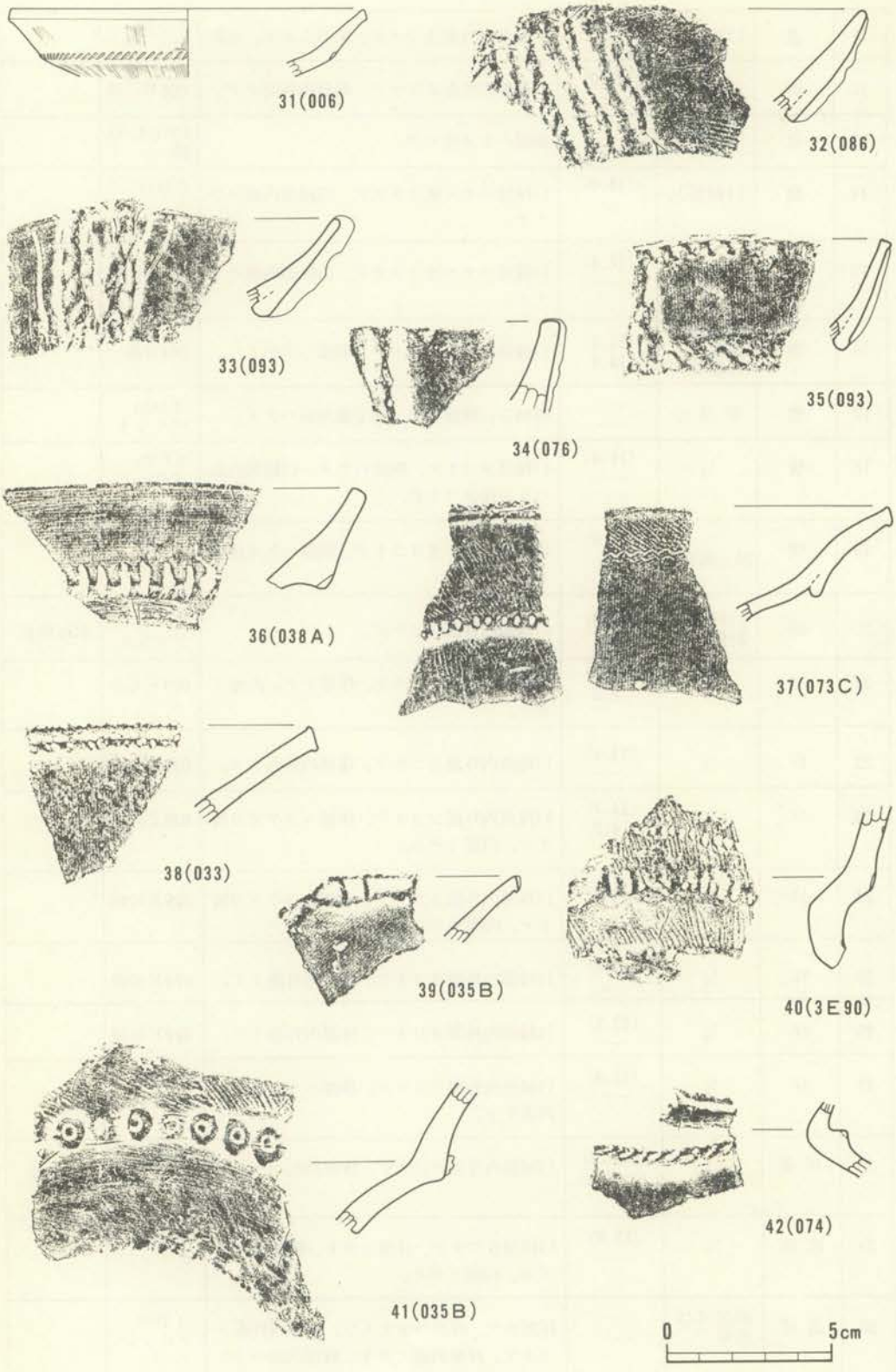
第307図　古墳時代の土器(1)



第308図　古墳時代の土器(2)

3	ミニチュア	½	(4.3) 4.0	内外面指頭押捺。	4 D70 グリット	
4	坩	½	(9.6) —	口縁部・胴部ミガキ。口縁部内面ナデ、胴上部内面指頭押捺後ナデ。	4 C79 グリット	
5	高 坏	脚部完形	— —		021号跡	器面磨耗
6	器 台	脚 部 ½	— —	脚部ミガキ。内面ナデ。3孔。	021号跡	
7	高 坏	脚 部 ⅙	— —	脚部ミガキ。内面ナデ。	056C号跡	
8	壺	口縁部完形	14.8 —	口縁部内外面ヨコナデ、頸部内外面ナデ。	3 E26 グリット	
9	坩	口縁部⅓	(14.0) —	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ。	4 C79 グリット	
10	壺	口縁部⅕	(11.6) —	口縁部ハケメ後ミガキ。内面ナデ。	002A号跡	

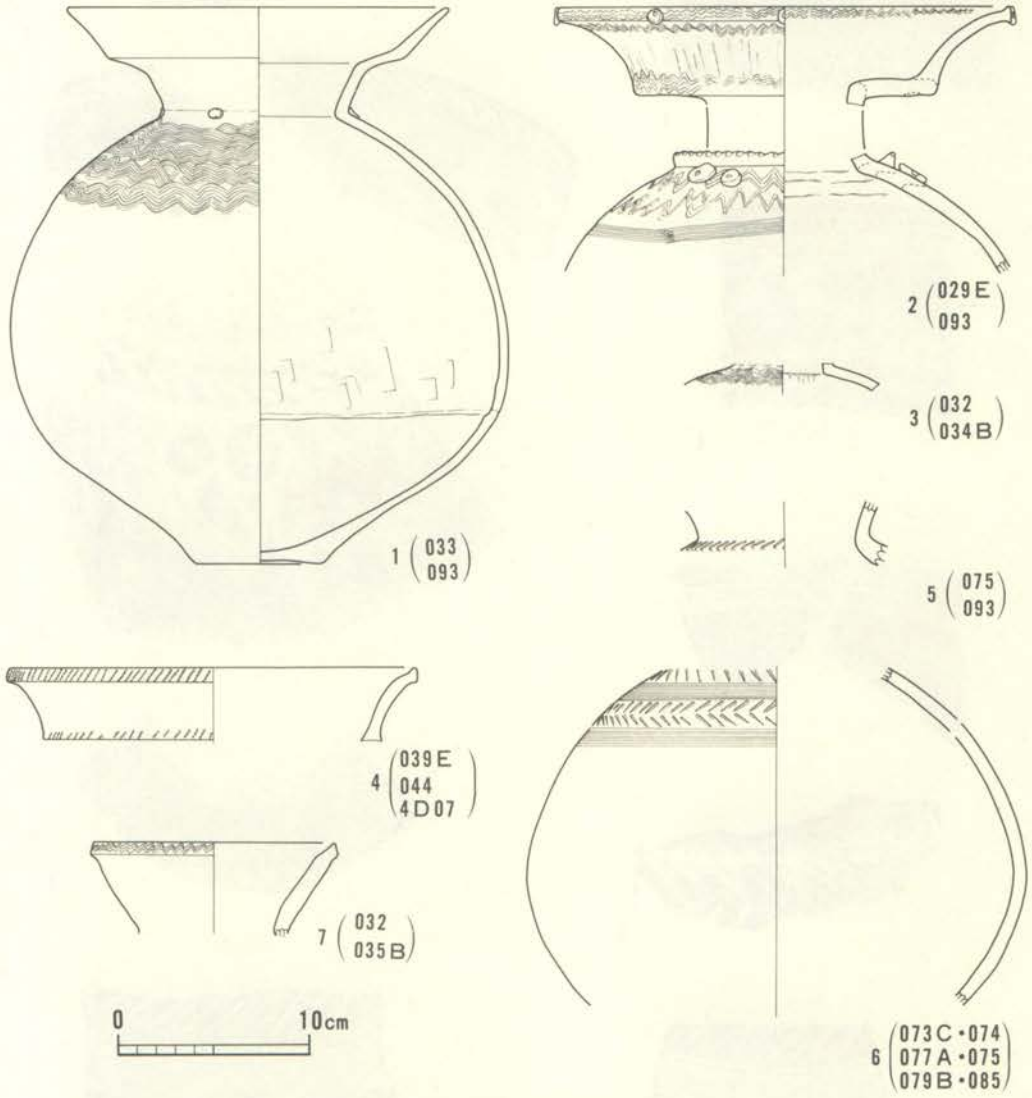
11	壺	口縁部1/5	(19.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、頸部ミガキ。赤彩。	2 D50 グリット	
12	壺	口縁部1/6	(21.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、頸部内外面ナデ。	008B号跡	
13	壺	胴部1/3	—— ——	胴部ハケメ後ナデ。	056B・C号跡	
14	甕	口縁部1/10	(16.0) ——	口縁部ハケメ後ヨコナデ、口縁部内面ヨコナデ。	5 D74 グリット	
15	甕	口縁部1/5	(17.4) ——	口縁部ハケメ後ヨコナデ、口縁部内面ヨコナデ。	002A号跡	
16	甕	口縁部1/6 胴部1/2 底部完形	(12.2) 13.4	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。	004号跡	
17	甕	胴部1/2	—— ——	輪積み。胴部ナデ。胴下部内面ハケメ。	4 D20 グリット	
18	甕	1/2	(11.8) ——	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ。口縁部内面ハケメ後ヨコナデ。	3 C09 グリット	
19	甕	胴上部完形	(17.6) ——	口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ。	4 C98 グリット	
20	坏	口縁部1/4 胴部1/2	(12.6) 4.1	口縁部内外面ヨコナデ。	2 D50 グリット	器面磨耗
21	坏	1/6	(11.0) 2.5	口縁部内外面ヨコナデ、体部ナデ。内面ミガキ。	029E号跡	
22	坏	1/5	(13.4) ——	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ。	029E号跡	
23	坏	1/3	(14.7) 4.7	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ。内面ミガキ。	029E号跡	
24	坏	1/5	(11.0) ——	口縁部内外面ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。	029E号跡	
25	坏	1/5	(13.6) ——	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ。	029E号跡	
26	坏	1/4	(13.2) ——	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ。	029E号跡	
27	坏	1/3	(12.8) ——	口縁部内外面ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面ナデ。	3 E26 グリット	
28	坏蓋	1/4	(13.2) ——	口縁部内外面ヨコナデ。体部回転ヘラケズリ。	6 C06 グリット	須恵器
29	高坏	1/4	(13.8) ——	口縁部ヨコナデ、坏部ミガキ、脚部ヘラケズリ。内面ミガキ。	3 E26 グリット	
30	高坏	脚部ほぼ完形	—— ——	坏部ナデ、脚部ヘラケズリ、裾部内外面ヨコナデ。坏部内面ミガキ、脚部内面ヘラケズリ。赤彩。	1 D70 グリット	



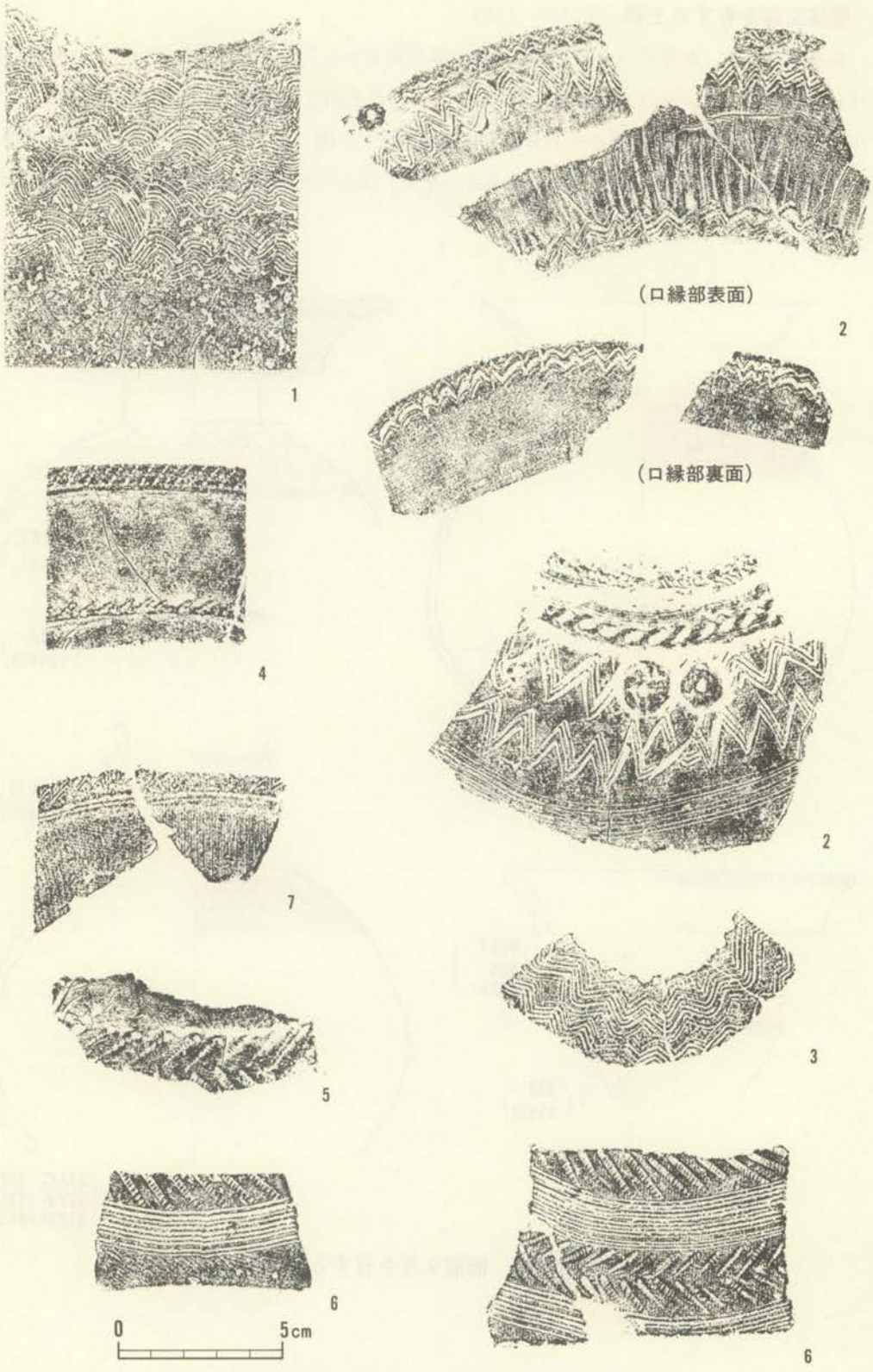
第309図　古墳時代の土器(3)

櫛描文等を有する土器（第310～313図）

本遺跡からは、東海系の土器である櫛描文等が施文された土器が出土しているが、実測可能の土器は1～7で、そのほかは破片である。これらの土器は住居跡、土壙、溝等の遺構からの出土であるが、複数の遺構から出土したものが接合する例（1・2・4・7等）や同一個体ではあるが接合しない例（2・6等）である。なお、ほとんどが壺で、完全に復元された土器はない。



第310図　櫛描文等を有する土器(1)



第311図　櫛描文等を有する土器拓影

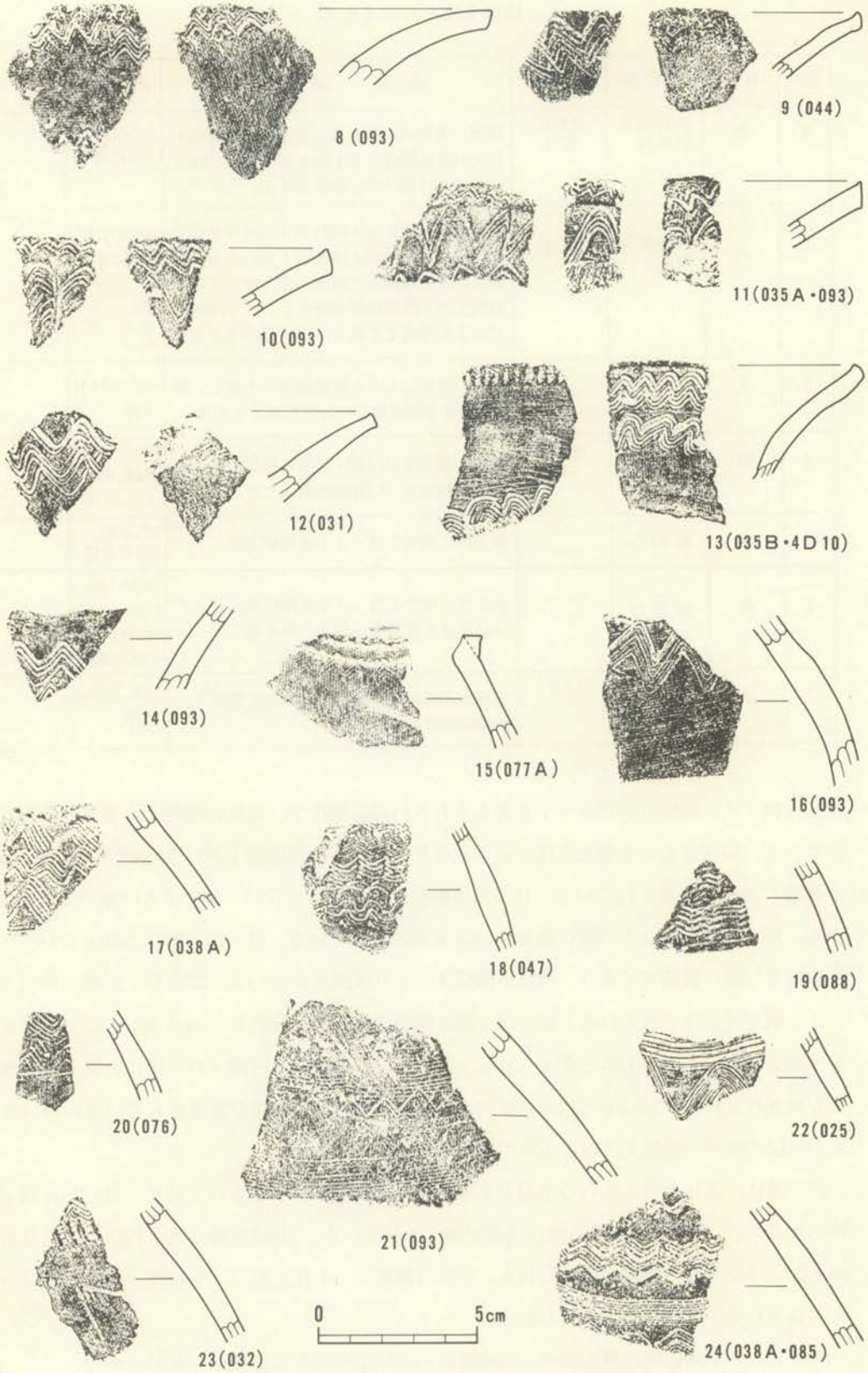
櫛描文等を有する土器

番号	器形	遺存度	口径 器高	成形　調整等	出土層位	備考
1	壺	口縁部½ 胴部⅔	(19.8) 28.5	頸部に6個の円形付文。胴上部に8本同時施文の波状櫛描文を4段または5段に施文。口縁部内外面ナデ。胴下部ナデ。	033号跡 093号遺構	
2	壺	口縁部¼ 頸部½	(24.5) ——	口唇部内外面に3本同時施文の波状櫛描文を、更に、口縁部上端及び下端に5本同時施文の波状櫛描文を施文。胴上部に3本同時施文の山形櫛描文を施文し、7本同時施文による櫛描文を施文。口縁部内面ミガキ。	029E号跡 093号遺構 4C89グリット	
3	壺	胴上部½	—— ——	頸部に竹管による3連続刺突文を施し、胴上部に8本同時施文の山形櫛描文を施文。	032・034B号跡	
4	甕	口縁部½	(21.2) ——	口縁上端部及び口縁下端部に櫛状工具による連続刺突文。口縁部内面ミガキ。	039E・044号跡、4D07グリット	
5	壺	頸部¼	—— ——	胴上部に櫛状工具による連続刺突文。	075号跡 093号遺構	
6	壺	胴部¼	—— ——	胴上部に櫛状工具による連続刺突文と8本同時施文の櫛描文を施文。胴下部ミガキ。	073C・074・075・077A・079B号跡・085号遺構	
7	壺	口縁部¼	(13.5) ——	口縁上端部に3本同時施文の波状櫛描文。口縁部内外面ミガキ。	032・035B号跡	

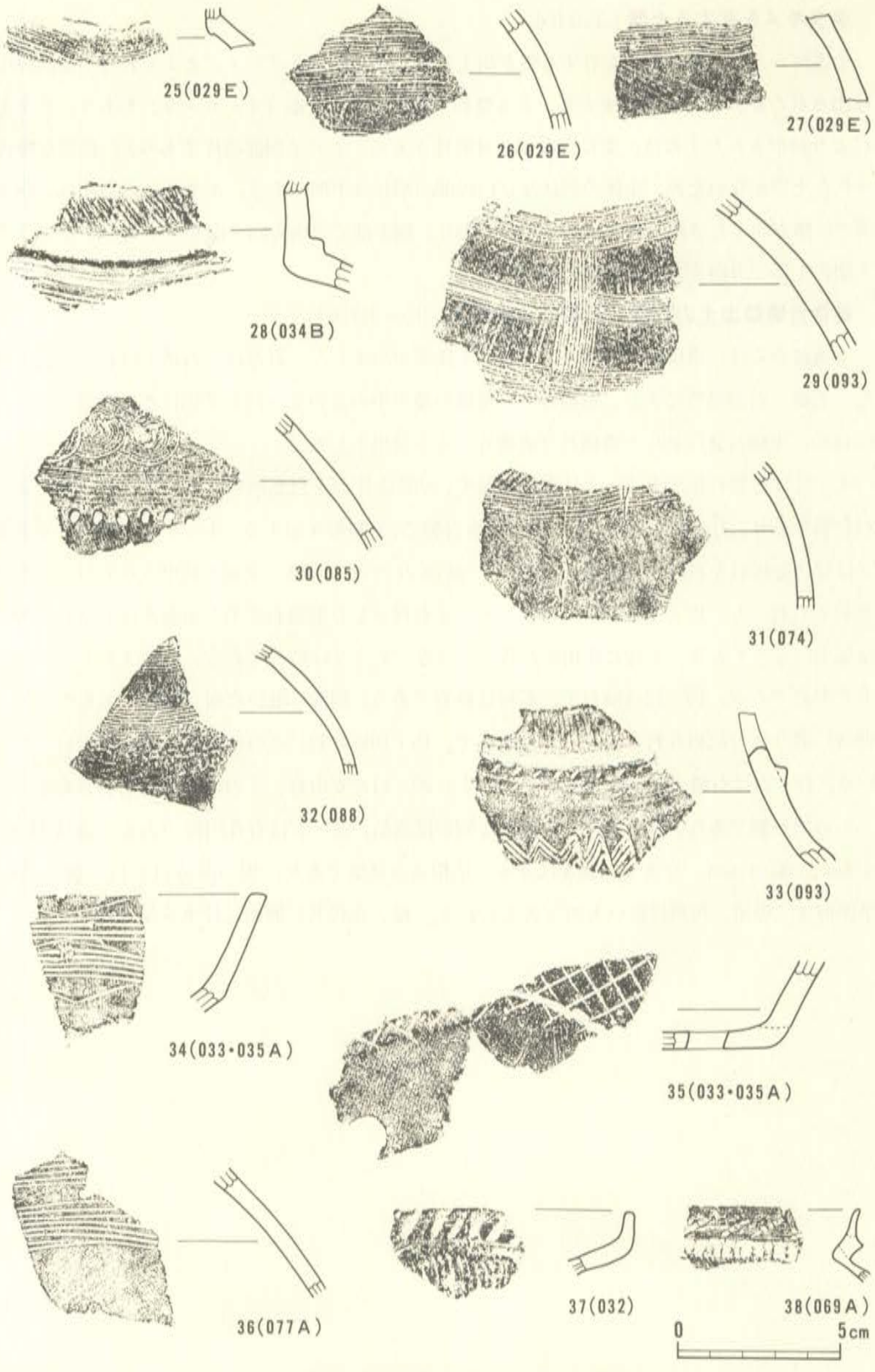
8～14は2と同様の形状を示すと考えられる口縁部破片で、波状の櫛描文が表裏面に施文されている。13はほかの土器と文様が若干異なり、口唇部には櫛状工具による刺突があり、口縁下端部に波状文が施されている。15～32は胴部上半の破片で、15～16は2と同様の文様構成である。17～20は1・3と同様に数列の波状文が施されている。21・22・24は波状文というより鋸歯状文に近い櫛描文であり、横位の櫛描文により区画されている。23は13と同様に櫛状工具による刺突文が施されている。25～28・32は横位の櫛描文が施されているが、波状文・山形文等が施文されるものもあると考えられる。29は横位の櫛描文で区画された中に、縦・横の櫛描文が施されている。30は半円状及び横位の櫛描文と米粒状の刺突が施文されている。31は5・6と同様に横位の櫛描文と櫛状工具の押捺が施されている。

33～36は、高坏と考えられる土器である。33は波状櫛描文が施されている。34・36は同一個体の土器で、横位及び斜位の細い沈線が施文されている。35は沈線が格子目状に施文され、無文部には焼成前の円窓が認められる。37は口縁部にハケ状工具による押捺、胴部に粗いハケメが施されており、器台と考えられる。

38は「S」字状口縁の甕であり、口縁部にハケ状工具による押捺が施されている。



第312図　楕描文等を有する土器(2)



第313図　楕描文等を有する土器(3)

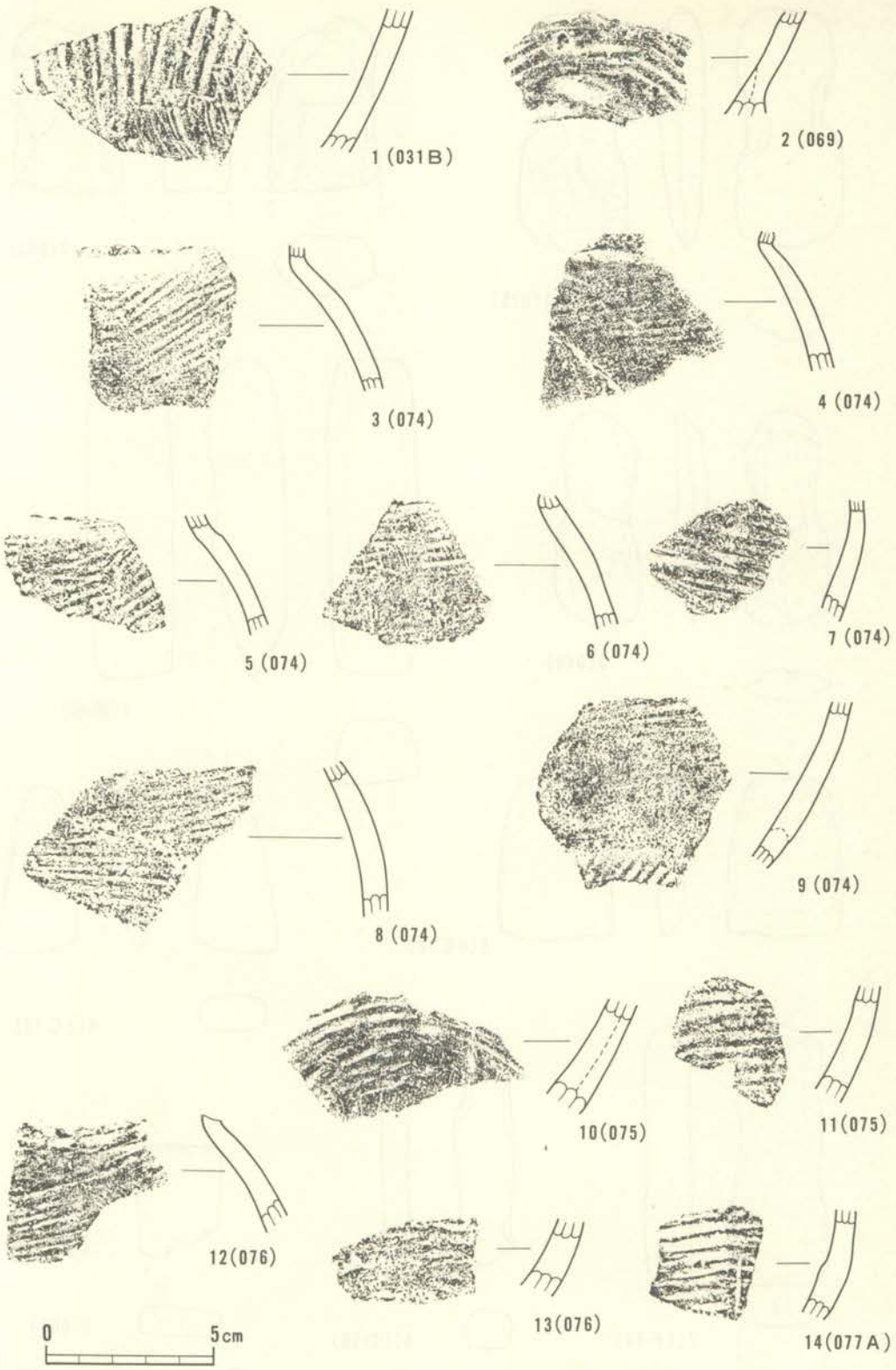
タタキメを有する土器（第314図）

本遺跡からは、タタキメを有する甕が出土した。明らかにタタキメと考えられる土器は17片検出されたが、タタキメの後ナデによる整形が加えられる土器（4・6・9）もあり、タタキにより整形された土器は、更に存在する可能性がある。すべて胴部破片であり、口縁部が接合された土器がないため、全体の形状及び口縁部の形状は不明である。タタキメの方向は、胴上部では横方向または斜め方向（右上り）であり、胴下部では横方向を向く。また、9のように1個の土器で方向が変わるものも存在する。

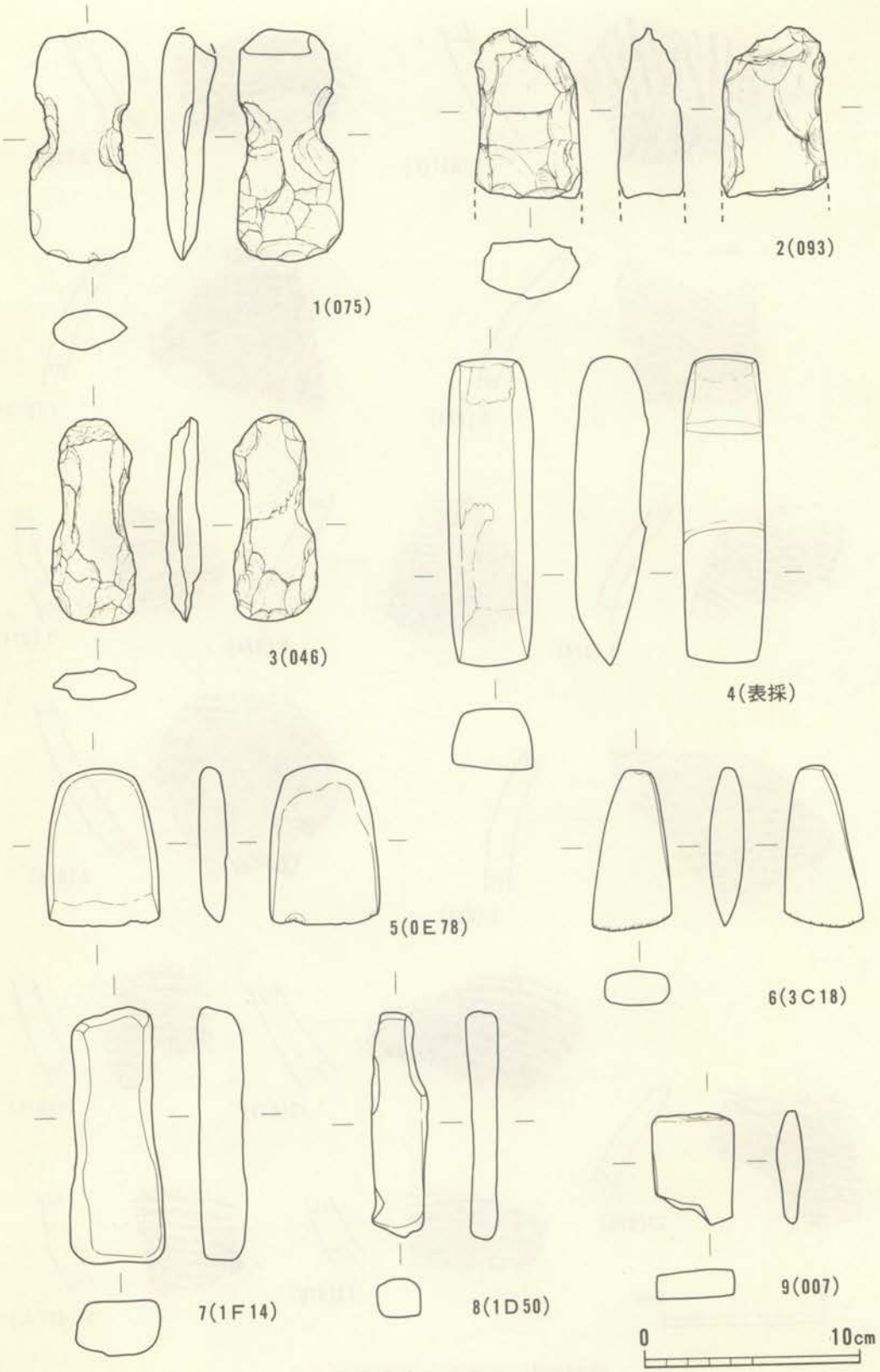
番後台遺跡出土の石器・石製品・鉄器（第315～317図）

本遺跡からは、遺構及び遺構外から石器・鉄器が出土した。石器は、石斧・砥石・敲石・磨石・石鏃・石製品等であり、遺構外や、遺構の覆土中のものを一括して掲げたものである。このほか、黒耀石製の剝片が遺構及び遺構外から少量出土した。

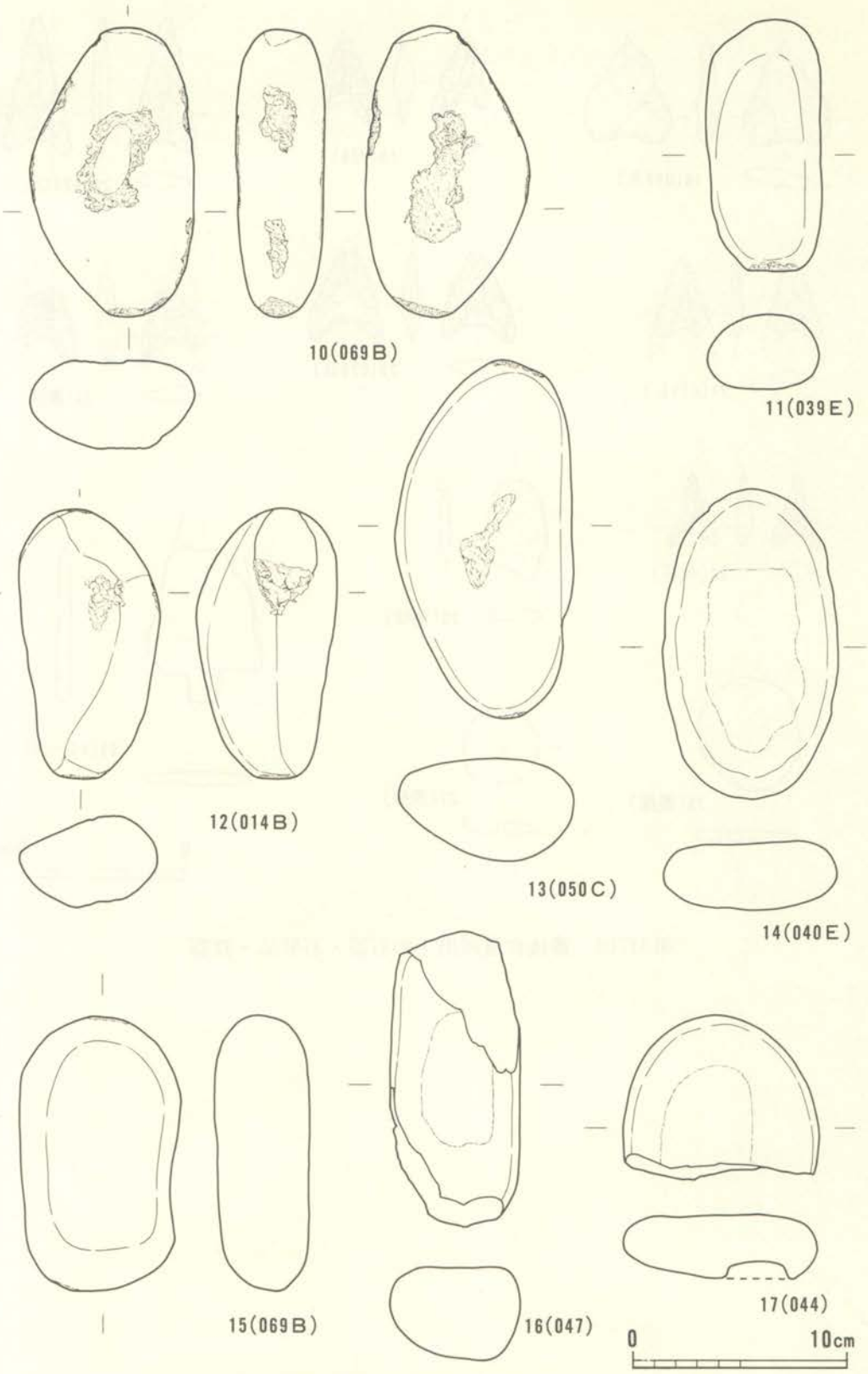
1～3は打製石斧である。1は安山岩製で、刃部は片面を自然面のまま利用している。2は砂岩製であり、刃部側を欠損する。3は粘板岩製で、分胴形を呈する。4～6は磨製石斧である。4は緑色凝灰石を石材とした抉入石斧で、基部の一部を除き、全面が研磨されている。5は砂岩を石材とし、片刃である。6はチャートを石材とした磨製石斧で、全面が研磨され、刃部は偏刃になっており、刃縁に使用痕が残っている。7～9は砥石である。石材は7・8が砂岩9が泥岩である。10～12は敲石で、石材は砂岩である。側縁に敲いた面が顕著であるが、同じ側縁に磨り面も認められる。13～17は磨石で、15・16は砂岩、そのほかは花崗岩を石材としている。18～24は石鏃で、石材は18がチャート、20・21が安山岩、そのほかは黒耀石である。25～27は滑石製であり、25は鏑のない偏平な剣形模造品、26・27は有孔円板である。28は長さ4.8cm、幅3.4cm、厚さ0.3cmをはかる。広根式の鉄鏃であり、根の部分は欠損が著しいが平面形は二等辺三角形に近いものと考えられる。根、篦代共に断面は片丸を呈する。



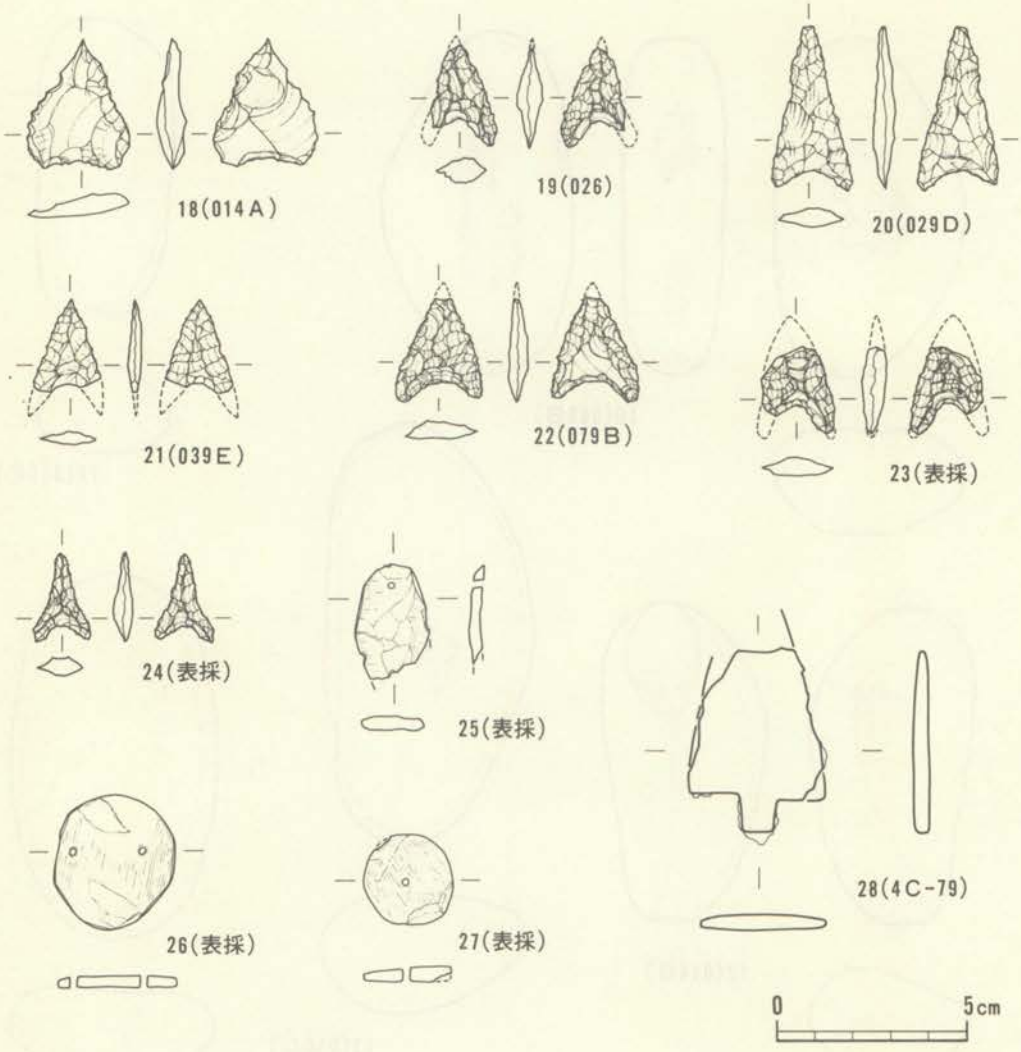
第314図　タタキメを有する土器



第315図　番後台遺跡出土の石器(1)



第316図　番後台遺跡出土の石器(2)



第317図　番後台遺跡出土の石器・石製品・鉄器

2．小結

1．縄文時代

本遺跡で縄文時代に属する遺構は、縄文中期の住居跡が1軒検出されただけであるが、早期から晩期に至る土器が少量ずつ出土し、石斧、石鏃等の石器も、弥生時代、古墳時代の住居跡の覆土等から出土した。

2．弥生時代

本遺跡で弥生時代の住居跡は30軒検出された。弥生時代の住居跡から出土した遺物は、大半が土器で、ほかは少量の石器、鉄器である。002A・004号跡からは、床面に近い状態で比較的多くの土器片が出土した。038C号跡は、焼失家屋と考えられ、床面から、炭化材等と共に完形に近い状態の土器が出土したが、そのほかの住居跡で、完形あるいは完形に近い土器の出土は稀である。従って、弥生時代の集落構成等を検討するには資料不足であると言わざるを得ない。

070号跡の覆土から出土した土器は、宮ノ台式土器に類似した甕であるが、これ以外の住居跡から出土した土器は、すべて弥生後期の所産である。050A・B・C号跡、056B・C・D号跡、059B・C・D号跡のように住居跡が重複していることから判断しても、これらの住居跡は、すべて同一時期に存在したとは考えられない。

本遺跡における弥生時代の住居跡の形状は、楕円形、隅丸長方形、隅丸方形、不整円形、不整隅丸方形等があり、更に、一部しか遺存していないため、形状の不明なものもある。住居跡の形状を大別すると、

楕　円　形…… 021・029F・036B・070号跡

隅丸方形…… 002A・037・038C・040C・050B・050C・051・056C・059B・061B・069G号跡

隅丸長方形…… 001・004・049・056B・060B号跡

不整円形…… 048・050A・059C・064A号跡

不整隅丸方形… 038G・056D・059D・072A号跡

であり、隅丸方形が多い。隅丸方形の住居跡は、更に、胴張りのものと壁が直線的なものとがある。

規模は、002A号跡が最大で、径9.50×10.90 mをはかり、029F号跡が最少で、軸長約2.5 mである。一辺 3.6～5.2 mが平均的な規模である。規則的な位置に柱穴を配置する住居跡は少なく（002A・021・037・056B・069G号跡)、不規則な配置のもの、柱穴のない住居跡等が多い。炉跡が検出され住居跡は半数の15軒である。

検出された30軒の住居跡は、発掘調査が遺跡全体ではないため、明確ではないが、養老川右岸に近い東側に多い。遺跡内では最高の標高をはかる場所に、最大規模の 002A 号跡が位置し、北東側に傾斜する緩斜面に 001・ 004号跡が位置するが、大半の住居跡は南西に傾斜する緩斜面上に所在している。台地南側の先端部近くには、特に、多くの住居跡が検出されたが、少なくとも、 001・ 002A・ 004号跡等の北東部に位置する住居跡群と南側の先端部付近に位置する住居跡とはグループを異にすると考えられる。なお、弥生時代の住居跡の形状は、楕円形から隅丸長方形、更に、隅丸長方形から隅丸方形への変遷が一般的であるが、本遺跡においても、 059C 号跡（不整円形）→ 059B 号跡（隅丸方形）・ 059D 号跡（不整隅丸方形）の重複関係があり、 056B 号跡（隅丸長方形）→ 056C 号跡（隅丸方形）の重複関係も肯首されるものである。

3．古墳時代

古墳時代の住居跡は、カマドを有さない古墳時代前半のものが、建て替えのあった住居跡を含め、79軒、カマドを有する後半のものが20軒である。

古墳時代前半の出土土器について

古墳時代前半の住居跡の遺物出土状況は 6 種類に分類することが可能である。

A．覆土中から多量の土器（大形の破片が多い）が出土する住居跡… 029E・ 035B・ 038E・ 044・ 077A 号跡等

B．床面あるいは床面直上から完形あるいはほぼ完形の土器が出土する住居跡… 009・ 014A・ 014B・ 022・ 032・ 038A・ 047号跡等

C．床面あるいは床面直上から坩、高坏等の小形土器が多量に出土する住居跡… 019・ 020・ 025・ 026・ 034C 号跡等

D．覆土中から土器の破片が、更に、床面あるいは床面近くから完形あるいは完形に近い土器が少量出土する住居跡… 003・ 015・ 016A・ 029A・ 031B・ 031D・ 031E・ 031F・ 033・ 038B・ 039C・ 042・ 054・ 069A・ 069B・ 073A・ 073B・ 076 号跡等

E．覆土中から土器の破片が出土し、床面からはほとんど出土しない住居跡… 069C・ 073C・ 074A 号跡等

F．土器がほとんど出土しない住居跡… 005・ 006・ 008・ 011・ 012号跡等30軒をこえる大半の住居跡が含まれる。

ただし、覆土が削平されている住居跡が多く、一概に分類することには危険性が伴う。Fとした住居跡大半は、覆土が削平されており、本来の姿を呈していたとは考えられないものも含んでおり、この中には、A～Eの中に含まれる住居跡も存在すると考えられる。Aは、出土する多量の土器等の遺物がほとんど覆土からの出土であり、完形のまま、あるいは完全に復元さ

れる土器はほとんど出土しないことから、住居跡が廃棄され、ある程度埋没した時点で一括して廃棄されたと考えられる。Bは、完形あるいは完形に近い状態の土器と共に炭化材・炭化粒子・焼土等を伴う例が多く、それらの状態から、焼失家屋と考えられるものである。Cは、Bに類似するが、炭化材等はほとんど出土せず、住居跡のコーナー付近に検出される貯蔵穴の中、あるいはその周囲から坩、高坏等が出土し、小形の土器に比べ、甕等の大形の土器の出土は非常に少ない。D・Eの遺物出土状況は、AとBの中間的様相を呈するもので、EよりDの方が比較的多くの遺物が出土する。

古墳時代前半の79軒の住居跡の中で、重複している住居跡は、010A・B号跡、014A・B号跡、029A・B・C・D・E号跡、031B・C・D・E・F号跡、034A・B・C号跡、038A・B・D・E号跡、039B・C・E号跡、069B・C・D・E・F号跡、072B・C号跡、073A・B・C号跡、077A・B号跡、079A・B号跡等であるが、これらの重複する住居跡から出土する遺物で、両者共にセットとして把えられる例は非常に少ない。更に、重複関係にある住居跡で、床面あるいは床面近くから複数の土器が出土した例は、数例しか存在しない。先の遺物出土状況B・C・Dであるのは、014A号跡と014B号跡、073A号跡と073B号跡の重複だけである。

014A号跡は014B号跡とわずかではあるが、重複しており、014B号跡の壁を切っている。014A号跡の甕（4）は、胴部がハケメにより調整され、一部ナデによってハケメが消されている土器であるが、014B号跡の甕（5）は、口唇部にキザミが加えられ、頸部に輪積みによる接合痕が意識的に残されており、くびれが緩やかである。なお、胴部はナデにより調整されている。また、073A・B号跡の甕をみると、073A号跡の甕（4・5）は、一方がハケメによる調整であり、もう一方はヘラケズリによる調整であるのに対し、073B号跡の甕（4～11）は、6・9のように胴部がハケメ調整のものと、8・10・11のようにナデによる調整（また、11の場合は口唇部にキザミが加えられている。）のものとがあり、特に、6・9・10はセットとして把え得る出土状況を呈していた。このことから推察すると、甕においては、口唇部にキザミが加えられ（ないものもあるが）、頸部は輪積みによる接合痕を残すが、はっきりとしたくびれをもたず、ナデによる調整の土器は、ハケメによる調整の土器より前出的であることがうかがえる。このほかの器種については、同種のものの出土がないためやや不明瞭ではあるが、073A号跡の坩（2）、小形土器（3）や073B号跡の高坏（1・2）は一つの指標になり得る土器と考えることが可能である。

遺物の出土状況A・B・Cの中でも、まとまった数量の土器が出土したのは、009・029E・032・035B・038E・047・077A号跡等である。

009号跡の土器は、覆土中あるいは床面から、坩、高坏、甕等が出土したが、甕の出土例が多い。坩は、頸部のくびれが弱く、全体に外反する形状であり、高坏は、坏部の器高が高く、

口径も大きなものである。甕は、ハケメ調整によるもの、ナデが施されているもの、ヘラケズリの後ナデが施されているものが存在し、ヘラケズリ後ナデ調整されているものが多い。

019号跡の土器は、床面あるいは床面直上からの出土で、坩、埦、高坏、壺、甕等があり、坩、坏、高坏等が甕に比べ多い。坩は、頸部が強くくびれて、口縁が直線上に外反するもの、口縁が内反ぎみに外反するもの、更に、頸部があまりくびれないもの等があり、胴部は、一般的に算盤玉状を呈し、ヘラケズリによる調整のものも多い。埦は、口唇部が外反するものである。高坏は、大半のものが赤彩されている。坏部は、底部近くに稜を有するものが一般的で、内面に底面の稜を有するものと稜をもたないものとがある。脚部は、円筒状で、裾部が開くものである。壺は、有段口縁であり、胴上部は強い張り出しがみられない。甕は、やや反する口縁を有し、口唇部はつまみによるわずかな凹凸が認められるものもある。胴部はハケメ調整後部分的なナデが施されている。

029E号跡の覆土一括の土器は、坩、高坏、器台、壺、甕等ほとんどの器種が揃っているが、甕が多い。坩、高坏等は赤彩されているものも多く、器台は、頸部にわずかなくびれを有し、口縁が外反するものと、「く」の字形の強いくびれを有するものとがあり、高坏は、坏部が直線的に外側に広がる口縁を有し、脚部は坏部に比してかなり小さい。壺は、有段口縁のものと直口縁のものとがある。有段口縁の壺は肩が大きく張るもので、ハケメ調整またはハケメ調整後ナデが施されている。直口縁の壺も同様である。甕は、強く外反する口縁を有し、頸部が「く」の字形にくびれて、球形を呈する胴部に移行するものと、やや直立ぎみの口縁を有し、やや長胴のものとがある。口縁部はハケメ調整後ヨコナデが施されているものが一般的である。この場合、胴部にもハケメ調整後一部ナデが施されているものが多いが、ハケメがわずかしか遺存していないものや、ナデまたはヘラケズリによるものも存在する。

032号跡は床面あるいは床面近くから、小形の鉢（埦？）、坩、高坏、器台、壺、甕等が出土しているが、甕が多い。小形の鉢は、本址において特徴的な遺物で、口唇部が極端に外反し、内面に稜を有するものと、そうでないものとが存在する。坩は、小形のものと大形のものとがあり、両者共に頸部が強くくびれる。高坏は、口縁が外反するものと直線的でやや丸みを帯びるものとが存在する。壺は、有段口縁のものと直口縁のものとがある。有段口縁の壺は、ハケメ調整後部分的なミガキが施されており、直口縁の壺は頸部が強くくびれ、ミガキが施されている。壺は、ハケメによる調整のものが多く、口縁はやや外反する。

035B号跡の覆土中の土器は、小形の鉢（埦？）、坩、坏、高坏、器台、壺、甕等であるが、甕が多い。坩は、大形のものと小形のものとがあり、器台は、受部と脚部の径が同じ位の大きさである。壺は、有段口縁（48は有段というより有稜口縁の呼ぶ方が適切かもしれない。）と直口縁とがあり、両者共に球形の胴部を呈し、直口縁の壺は直立ぎみの口縁を有する。甕は、ハケメによる調整のものとナデによる調整のものがあるが、ハケメが施されている例が多い。

口縁部付ヨコナデが施されるのが一般的である。

038E号跡の覆土中の土器は、坩、坏、高坏、器台、壺、甕等があるが、甕が最も多い。高坏は、赤彩されているものがほとんどであり、外反する坏部の底部付近に稜を有する大形のものと、稜をもたない小形のものとがある。なお、脚部は直線的である。壺は、有段口縁と直口縁のものとがある。甕は、ハケメ調整後ナデが施されたものと、ナデのみによる調整のものとがあり、口唇部が極端に外反するものも存在する。

047号跡の土器は、覆土中のものと、床面あるいは床面直上のものがあり、後者には、坩、埦、高坏、甕等がある。坩は、比較的大形で、頸部が強くくびれ、丸底である。高坏は、赤彩されており、坏底部近くに稜を有する。なお、覆土中の高坏は、赤彩が施され、坏底部近くに稜を有するもの、脚部が直線的に広がり、坏部の径に比べ小さいもの、脚部が直線的で裾部が開くもの等がある。甕は、強く外反した短かい口縁部に比較的長い胴部が付するものであり、口縁部付近にハケメ調整の痕跡が残っているものもあるが、胴部はヘラケズリの後ナデが施されているものが多い。

077A号跡の土器は、ほとんどが覆土中から出土したもので、坩、高坏、器台、壺、甕等があるが、甕が多い。高坏は、口縁が直線的に開く、口径の大きなものと、口縁が内反ぎみの小さなものとがあるが、赤彩されている例が多い。器台は、脚部の裾が開くものと直線的なものとがあり、赤彩されている。壺は、有段口縁と直口縁とがあり、14の場合、胴部に比べ、口径が小さく、直立ぎみの口縁である。甕は、内外面共にハケメが施されているものが多く、胴部は球形を呈するものが一般的である。

上記した住居跡出土の土器は、本遺跡から出土した土器の一部ではあるが、出土状況でも述べたように、1軒の住居跡からまとまって出土したものであり、それぞれが一つの様相を呈している。

本遺跡における古墳時代前半の土器は、住居跡の重複関係、住居跡出土土器の組成等から、大きく3時期に大別することが可能であり、先の住居跡出土の土器は、

Ⅰ期. 014B・073B号跡出土土器

↓

Ⅱ期. 009・014A・029E・032・035B・038E・047・073A・077A号跡出土土器

↓

Ⅲ期. 019号跡出土土器

の順に配列される。

Ⅰ期及びⅢ期と考えられる土器は少なく、大半の土器はⅡ期に含まれる。Ⅰ期には、上記のほかに、016A号跡、074A号跡出土の甕等が含まれ、Ⅲ期には、019号跡出土土器のほかに、020号跡、025号跡、026号跡、034C号跡、039E号跡出土土器等が含まれる。このほかの003

005・006・008A・010A・010B・011・012・015・017・018・022・023・027・028・029A・029B・029C・029D・031B・031D・031E・031F・033・034A・034B・038A・038B・039C・040B・042・043A・044・054・055B・059A・061A・069A・069B・069C・069D・069E・071・072B・072C・073C・075・076・078・080号跡出土土器等はII期に含まれる。

II期の土器は、住居跡の重複関係及びII期とIII期との断絶を繋ぐ土器群の追求を積極的な根拠として、また、集落の構成における同時存在の住居跡の軒数を消極的な根拠として、更に細分される可能性がある。

また、本遺跡からは、櫛描文、タタキメ等東海系の土器が出土したが、これらの土器は、幾つかの遺構から同一個体が出土するものが多く、ほとんどが覆土からの出土で、明確に伴出する土器を指適できない。

なお、土壙及び溝状遺構出土の土器は、その大半がII期に含まれるものである。

I期の土器は弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての時期と考えられ、II期は古墳時代前期（五領期）、III期は古墳時代中期（和泉期）と考えられる。関東地方においては、従来から、古墳時代前半における甕は、底部に台が付く所謂台付甕の存在が一般的であるが、本遺跡から検出された台付甕は2個体であり、多く見積っても数個体と考えられ、甕の大半は平底である。木更津市田川遺跡においても、同様の報告がされているが、同じ養老川流域で、本遺跡より7.5㎞程下流に位置する土宇遺跡からは台付甕が多く検出されている。本遺跡における台付甕の欠除は、古墳時代前半における時間の問題ではなく、空間の問題と考えられ、ひいては、生活用式の問題と考えられるが、どのような理由によるものかは、今後の資料増加をまって、結論をだすことにしたい。

古墳時代前半の住居跡について

古墳時代前半（I～III期）の住居跡は79軒であるが、形状は、基本的には隅丸方形、方形の2種に大別でき、更に、削平されていたために形状が不明瞭で、不整形を呈するものも存在する。

隅丸方形を呈する住居跡…005・006・010A・010B・011・014B・016A・022・028・029E・031E・061A・069B・069C・069F・072C・073C・074A・074B・075・077B号跡等

方形を呈する住居跡…008A・009・012・014A・015・019・020・023・024・025・026・027・029A・029B・029C・029D・031D・033・034C・035B・038A・038A・038B・038E・039B・039C・039E・040B・042・044・047・055B・060A・069A・069D・071・072B・073A・073B・076・077A・079A・079B号跡等

なお、隅丸方形を呈する住居跡は、胴張りのもの（028・029E号跡等）や長方形のもの（006・010B・022・028・031E・072C号跡等）、正方形に近いもの（014B・074B号跡等）があり、長方形のものも多い。方形を呈する住居跡は、長方形のもの（009・027・

029C ・ 033号跡等)、正方形に近いもの（ 008A ・ 019 ・ 029B ・ 035B号跡等）があり、方形とは言うものの、コーナーがやや丸みを帯びているものが多く、コーナーがほぼ直角の整った方形を呈する住居跡は少ない。

規模は、 029E号跡の一辺10.45 m が最大であり、 014B号跡が3.27×3.21m と最も小さい。隅丸方形を呈する住居跡の規模は、029E号跡が最大で、014B号跡が最少であるが、A．4.5×5mのもの（ 005 ・ 010B ・ 011 ・ 016A ・ 022号跡等）とB．6m前後のもの（ 006 ・ 031E ・ 069C ・ 074A ・ 074B号跡等）の2グループに大別できる。それらすべてを平均した場合、隅丸方形の住居跡の規模は約 5.7×5.3mである。方形を呈する住居跡の規模は、039C号跡の一辺9.67m が最大であり、 023号跡の 3.1×3.43m が最も小さいが、A．4～5mのもの（ 003・ 009・ 012・014A ・ 015・024・027・029A・031D・047・060A・072B・073A・073B号跡等)、B・6～7cm のもの（ 025・026・029B・029C・029D・033・035B・038A・039E・069A号跡等)、更に、C．8mをこえるもの（ 019・039C・042・044号跡等）の3グループに大別でき、4～5mの住居跡が最も多い。すべてを平均した場合の方形の住居跡の規模は、約 5.5×5.6 mであり、隅丸方形の住居跡の規模とあまり変化がない。

住居跡の内部施設である壁溝、炉跡、柱穴、貯蔵穴等は、存在するものとしないものとがある。隅丸方形のAグループの住居跡において、壁溝が全周するのは 010号跡のみであり、炉跡を有するものは半分の3軒（ 010B ・ 011 ・ 016A号跡等）、また、柱穴が整った4本柱のものは 005 ・ 010B ・ 011号跡と少なく、貯蔵穴を有するものは 022号跡だけである。Bグループの住居跡において、壁溝が壁に沿って全周するのは 010B ・ 031E号跡、炉跡が検出されたのは 006 ・ 031E号跡であり、比較的整った4本柱の柱穴を有するのがほとんどである。なお、貯蔵穴を有するのは 006号跡だけである。方形のAグループの住居跡において、壁溝がほぼ全周するのは 038A ・ 060A号跡だけであり、炉跡は 024号跡を除き検出された。また、 014A ・ 015号跡を除いたほかの住居跡は比較的整った柱穴を有する。貯蔵穴は 003 ・ 024 ・ 027 ・ 047号跡において検出された。方形のBグループの住居跡において、壁溝が全周するのは 029B ・ 029C ・ 035B ・ 069A号跡とほとんどのものであり、炉跡を有するものは 029B ・ 033 ・ 035B ・ 069A号跡である。また、柱穴はすべての住居跡が規則的な4本柱であり、貯蔵穴を有するのは 025 ・ 026 ・ 029D ・ 035B号跡である。大形の住居跡であるCグループにおいては、 039C ・ 042号跡に壁溝が検出され、炉跡が伴うのは 042号跡だけである。また、柱穴はすべてが整った4本柱であり、貯蔵穴は 044号跡を除いたほかの住居跡に検出された。

これらを整理すると、隅丸方形のAグループの住居跡は、壁溝を有するものは稀で、炉跡のあるものとないものがあり、柱穴は不整のものが多く、貯蔵穴はほとんど有さない。同じくBグループの住居跡は、壁溝及び炉跡はあるものとないものとがあり、柱穴は規則的な4本柱で

あるが、貯蔵穴はほとんど有さない。方形のAグループの住居跡は、壁溝を有するものは稀で、炉跡はほとんどのものに存在し、柱穴は規則的な4本柱であるが、貯蔵穴を有するものは少ない。同じくBグループの住居跡は、壁溝はほとんどのものに存在し、炉跡のあるものとないものとがあり、柱穴は規則的な4本柱であり、貯蔵穴のあるものとないものとがある。

古墳時代前半の住居跡の形状は、弥生時代からの変遷過程にあり、一般に隅丸方形から方形への変化が考えられている。本遺跡で検出された住居跡の重複関係において、隅丸方形の住居跡が方形の住居跡に切られている例は、014B号跡 → 014A号跡、029E号跡 → 029D号跡、034B号跡 → 034C号跡、072C号跡 → 072B号跡、073C号跡 → 073A号跡、077B号跡 → 077A号跡等があり、方形の住居跡同志の重複例も存在するが、方形の住居跡が隅丸方形の住居跡に切られている例は存在しない。すなわち、本遺跡においても、一般的には、隅丸方形から方形への変化がうかがえる。

なお、先に述べた出土土器のⅠ期の住居跡は隅丸方形（A・B）と方形（A）、Ⅱ期の住居跡は隅丸方形（A・B）と方形（A・B・C）、Ⅲ期の住居跡はすべて方形（B・C）であり、比較的大形の住居跡が多い。

本遺跡におけるほとんどの住居跡は、貼床による構造を有している。荒掘り面の形状は、比較的平坦なものが多いが、009・012・018・019・022・029B・031D・031E・035B・044・047・069A・069B・073C・074B・075・076号跡等は、壁際が低く、中央部高い形状であり、これらの住居跡において、柱穴は高い部分と低い部分との斜面上に位置する例が多い。また、荒掘り面から溝が検出される住居跡が何軒かある。溝が全周する住居跡（029E・031D・031E・033・038A・073B・078号跡等）、部分的に巡る住居跡（009・029D・044．072C号跡等）があるが、溝が二重に巡るもの（029E・031E・038A・039C号跡等）もあり、更に壁際ではなく、住居中央部に溝が検出された033・073A号跡等もある。荒掘り面において検出された溝は、本来、床面上に存在する可能性があり、実際に、床面で検出された住居跡も存在するし、床面が貼床であり、住居の壁際の貼床は軟らかいため、容易に区別し難いことも事実である。しかし、床面に壁溝が存在した場合、壁側の床が軟らかいということは、貼床が崩れてしまうことが予想され、更に、壁際からやや住居中央寄りに壁溝が巡る例や、住居中央に溝が検出される例があること等を考え合わせると、本遺跡における住居の壁溝は、床面においては存在し難いと推測される。本遺跡において、住居跡が貼床構造であることや荒掘り面で住居跡の壁側が低いこと、更に、壁溝の存在は、湿気を防ぐための施設ではないかと考えられる。

古墳時代後半の住居跡と土器について

古墳時代後半のカマドを有する住居跡は20軒検出されたが、重複しているものはない。これらの住居跡はカマドの位置から二つに大別することができる。すなわち、

北西の壁の中央にカマドを有する住居跡… 008B ・ 029G ・ 030 ・ 031A ・ 038F ・ 041 ・ 045 ・ 059E ・ 064B号跡

北東の壁の中央にカマドを有する住居跡… 007 ・ 035A ・ 039A ・ 040A ・ 046 ・ 055A・ 056A号跡

であり、 013号跡も北西の壁にカマドを有すると考えられる。住居跡の規模は、最大が 046号跡（ 6.3×6.1 m）、 最小が 029G号跡（2.5 m程）であるが、4 ～ 5 m の規模の住居跡が半数を示める。柱穴は整った4本柱がほとんどであり、貯蔵穴をカマドのある壁のコーナー近くに設けている住居跡が多い。

これらの住居跡は、覆土が削平されているものもあり、 013・ 041・ 056A号跡以外は出土遺物は少ない。

出土した土器は、ほとんどが土師器で、ほかには少量の須恵器が出土している。土師器は、甕、甑、鉢、坏、高坏等であり、土器の特徴から、古墳時代後期の鬼高式土器と考えられるものであるが、各器種には何種類かの変化が認められる。甕は、 a．長胴のもの、b．胴部が球形を呈するものとがあり、坏は、 a．素縁口縁のもの、b．素縁口縁に類似し、口縁部が面とりしてあるもの、c．口縁下部に稜を有し、口縁が外に開くもの、d．立ち上がり口縁で、口縁が内傾するもの等がある。高坏は、坏部が素縁口縁のものが大半である。なお、坏、高坏は赤彩されているものとそうでないものとがある。

鬼高式土器の分類は、一般に、甕の場合はaよりbが古いとされ、坏のc・d等は新しい要素、更に、赤彩されている土器は古い要素とされている。本遺跡の鬼高式土器は、坏c・dの存在から、新しい時期であるが、その中でも、 013号跡の赤彩された多量の高坏の存在や 064B号跡の赤彩された坏等はやや古い様相を示している。

須恵器は、坏、坏蓋、高坏が出土しているが、 064B号跡出土の坏蓋とそれ以外のものの2時期に大別される。 064B号跡の坏蓋は陶邑古窯址群のTK10のそれに類似し、 036A・ 040E・056A号跡の坏、坏蓋は陶邑古窯址群のTK 209の土器に類似している。

須恵器及び土師器から、本遺跡出土の鬼高式土器は2細分され、古い時期は 064B ・ 013号跡等、新しい時期は 056A ・ 040E号跡等である。推測を加えるならば、古い時期の住居跡は北西の壁にカマドを設け、新しい時期の住居跡は北東の壁にカマドを設けており、これらの年代は、須恵器からすると、前者が6世紀中頃から後半、後者が6世紀末葉から7世紀初頭と考えられる。

4．結語

番後台遺跡から検出された遺構は、住居跡 130軒、方形周溝遺構2基、土壙9基、溝状遺構4条、方形遺構9基、更に、住居跡の柱穴と考えられるピット群、土器の集積が1か所で、これらの遺構に伴い、数多くの土器、鉄器、石器等が出土した。

住居跡は、縄文時代（1軒）、弥生時代（30軒）、古墳時代（99軒）にわたるが、古墳時代前期、特に、五領期の住居跡が多い。また、方形周溝遺構、土壙、溝状遺構等も、出土した土器から、古墳時代の前半の遺構と考えられるものが多い。

遺跡は、階段上に造成されていたため、地山面における地形図を作成したが、それによれば、002A・002B・003号跡の位置する場所の標高が最も高く、ここより東側、西側へと緩斜面を形成している。西側における地山面は、52.00mの等高線付近でいったん急になり、平坦面が続くが、51.60mからは西側に延びる緩斜面を形成している。住居跡は、南北に延びる等高線に沿って、形成されており、特に五領期の住居跡は、地山面の51.60m付近の平坦な場所に検出されるものが多いようである。なお、次期の和泉期では、平坦な場所より1m前後下がった緩斜面上に占地している。

番後遺跡における弥生時代、古墳時代と続く集落は、五領期に著るしい発展を遂げ、鬼高期に終焉を迎える。このような大規模集落の生産基盤はどこにあったのか、現在のところ不明であるが、飲料水等の生活用水は、南遺跡の東側及び北西側の崖面からの湧水で確保されたことは想像に難くない。ちなみに、養老川の蛇行により囲まれた本遺跡を含む台地が水田として利用されたのは、明治以降のことである。

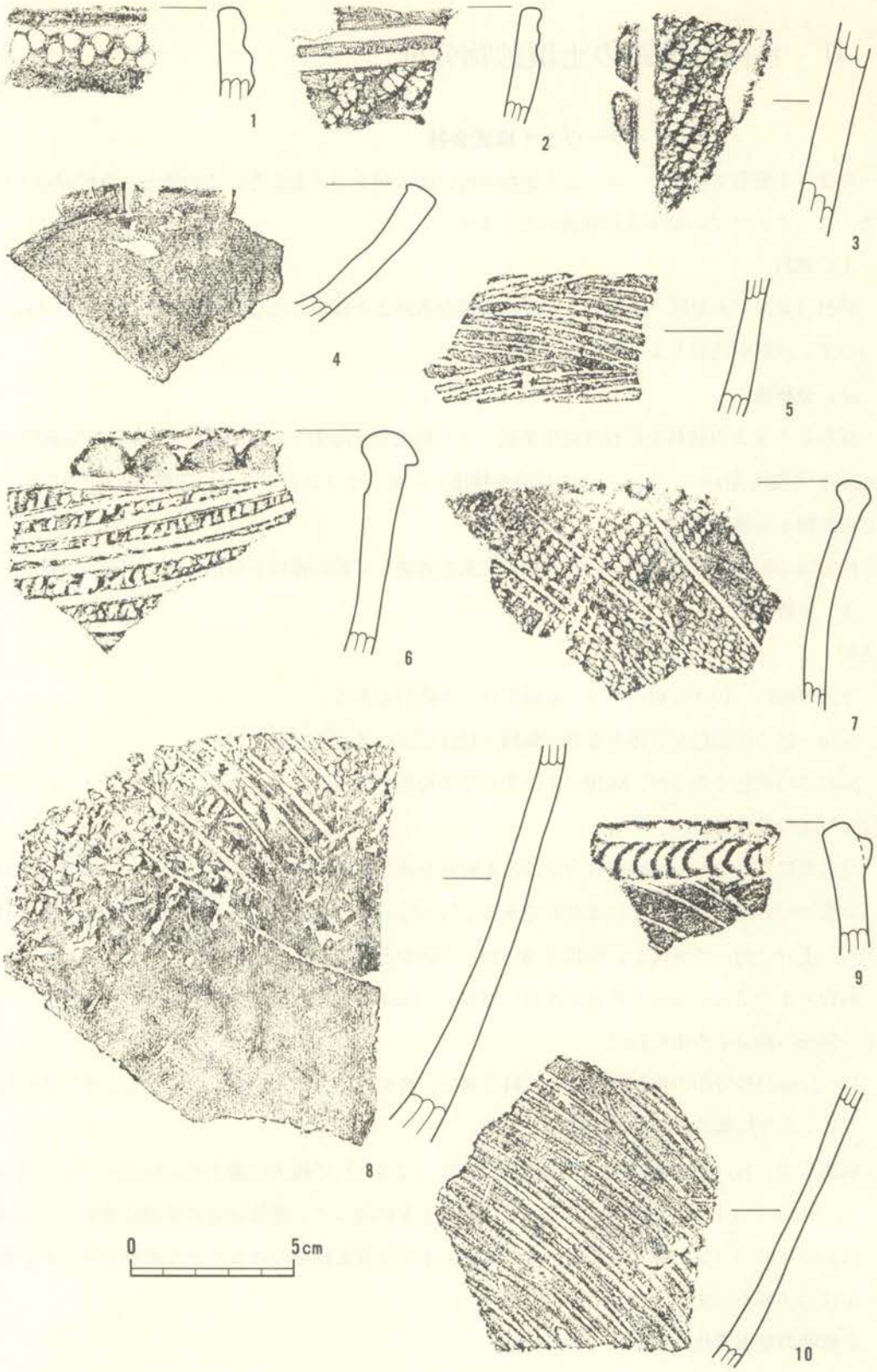
参考文献

岡崎文喜他「外原」船橋市教育委員会　1972年2月
柿沼修平他「千葉県市原市土字遺跡発掘調査報告」『日本文化財研究所報告』6　1979年4月
関根孝夫他「諏訪原遺跡」『松戸市文化財調査報告』等5集　松戸市教育委員会　1974年8月
千田私明他「田川遺跡群」田川遺跡群発掘調査会　1980年12月
田辺昭三「陶邑古窯址群」平安学園考古学クラブ　1966年
沼沢豊他「東寺山石神遺跡」千葉県文化財センター　1977年3月

V　神明台遺跡

神明台遺跡（6095㎡）は、確認調査を行ったが、遺構は検出されなかった。確認調査で約40片の縄文式土器と礫が数点出土した。

1～3は加曽利E式土器、4～8は加曽利B式土器、9・10は安行式土器である。



第318図　神明台遺跡出土遺物

Ⅵ　番後台遺跡の土壌鉱物分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

今度、千葉県文化財センターより鉱物分析の御依頼を受けました。このほど、分析が終了いたしましたのでその結果を御報告いたします。

1．試料

試料は高滝ダム地区（No. 219－005 ）番後台遺跡より採取した合計23点で、これらの試料について、試料No.色調をまとめた。（表1）

2．分析法

採取したままの試料を超音波発生装置により粘土分を除去し、¼mm（60mesh）と⅛mm(120 mesh）の篩を用いて、¼～⅛mmの砂分を抽出し、テトラブロムエタン（比重≒2.96）によって重鉱物を分離した。

検鏡は 300個体程度観察し、各鉱物の比重を考慮して鉱物組成を算出した。（第 319 図）

3．分析結果

色調

下部のNo.23～19は暗褐色を呈する砂質ロームの砂である。

No.18～15では褐色が主体となり、No.14～12はにぶい黄褐色を呈す。

No.11は暗褐色であるが、No.10～1はすべて黒褐色である。

¼～⅛mmの砂分量

全試料に占める¼～⅛mmの砂分量は、本断面を通じ非常に高い割合を示す。これは試料中にかなりの砂粒が含まれているためである。¼～⅛mmの砂分量はNo.21（43.4%）で最大値を持ち、上方に向って漸減し、No.12（ 8.3%）で最少となる。

No.12～4では¼～⅛mmの砂分が次第に増加し、No.4～1において、20.0%台の値を保つ。

¼～⅛mmの砂分中の重鉱物量

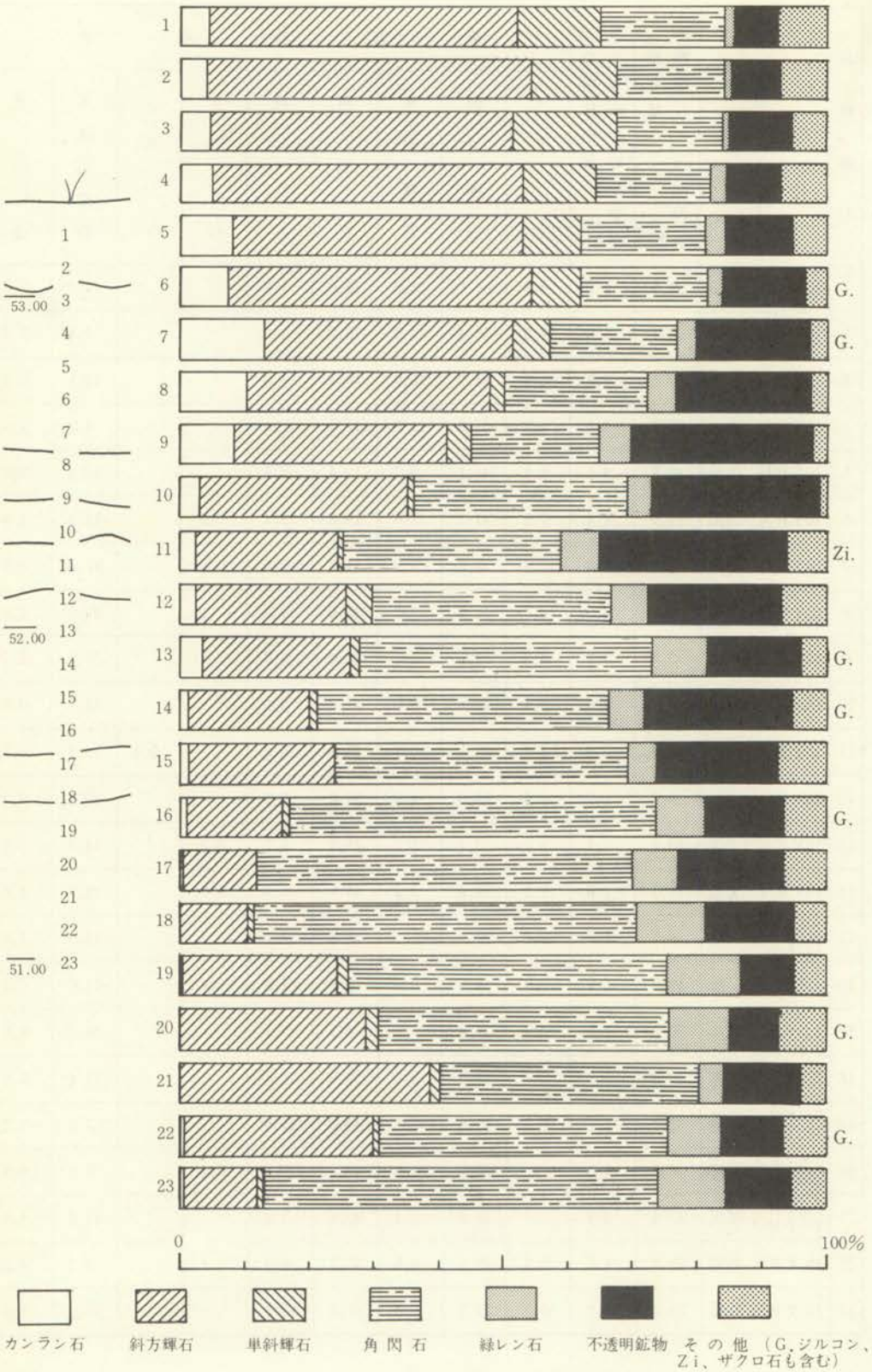
¼～⅛mmの砂分中の重鉱物量が全試料を通じ、数%以下と非常に少ない。然し、その変化はなめらかな特徴のある曲線を描いている。

No.23（ 0.7%）から重鉱物量は増加し、No.21（ 2.4%）で極大に達する。No.20～18では減少し、No.18（ 0.7%）で極小となる。No.17から上方に向って、重鉱物量は単調に増加し、No.4においては 5.1%の最大値に達する。No.3～1では重鉱物量のゆるやかな減少が見られ、No.1は 4.0%を示す。

各鉱物の産出変化

カンラン石

試料番号	色調	試料中砂分量 1/4～1/8 mm の (w%)	1/4～1/8 mm の重鉱物量 砂分中 (w%)	重鉱物粗成								
				カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	緑レン石	ザクロ石	ジルコン	不透明鉱物	その他
1	10YR 3/2 黒褐	21.5	4.0	4.3	47.7	13.0	19.0	1.2			7.3	7.5
2	10YR 3/2 黒褐	22.7	4.8	4.0	50.4	13.3	16.7	1.0			7.4	7.2
3	10YR 3/2 黒褐	20.4	4.8	4.7	46.7	16.0	16.2	0.8			10.5	5.1
4	10YR 3/2 黒褐	22.7	5.1	4.9	48.2	11.2	17.8	2.4			8.5	7.0
5	10YR 3/2 黒褐	15.8	4.5	8.1	45.1	8.7	19.4	3.1			10.4	5.2
6	10YR 3/2 黒褐	11.5	4.4	7.3	47.1	7.6	19.5	2.4	0.3		12.9	2.9
7	10YR 3/2 黒褐	9.3	4.4	12.8	38.8	5.7	19.7	2.8	0.3		17.4	2.5
8	10YR 3/2 黒褐	9.0	3.5	10.2	37.9	2.2	22.2	4.3			20.6	2.6
9	10YR 3/2 黒褐	9.2	3.2	8.3	32.9	3.9	20.0	5.0			27.7	2.2
10	10YR 3/2 黒褐	8.7	2.8	3.1	32.1	0.6	33.7	3.6			26.0	0.9
11	10YR 3/3 暗褐	8.4	2.0	2.4	22.1	0.3	34.4	5.6		0.4	29.3	5.5
12	10YR 4/3 にぶい黄褐	8.3	1.7	2.5	23.0	4.0	37.3	5.7			20.8	6.7
13	10YR 4/3 にぶい黄褐	10.1	1.7	3.5	23.1	1.2	45.2	8.7	0.4		14.3	3.6
14	10YR 4/3 にぶい黄褐	11.3	1.6	1.2	18.8	0.9	45.7	5.3	0.7		22.8	4.6
15	7.5YR 4/4 10YR 4/4 褐	16.7	1.3	1.2	22.9		45.6	4.2			18.6	7.5
16	7.5YR 4/3 褐	19.7	1.1	1.0	14.8	0.6	58.3	7.2	0.4		11.6	6.1
17	7.5YR 3/4 暗褐	26.6	1.1	0.3	11.8		58.1	7.1			16.1	6.6
18	7.5YR 4/4 褐	19.8	0.7		10.5	0.6	59.6	10.8			13.4	5.1
19	7.5YR 10YR 3/4 暗褐	33.4	1.2	0.3	23.9	1.7	49.6	11.6			7.8	5.2
20	7.5YR 10YR 3/4 暗褐	36.8	1.3		28.8	1.9	45.6	9.2	0.4		7.3	6.8
21	7.5YR 10YR 3/4 暗褐	43.4	2.4		38.8	1.4	40.4	3.8			11.6	4.0
22	10YR 3/4 暗褐	25.8	1.7	0.3	29.6	0.6	45.3	8.3	0.4		9.3	6.2
23	10YR 3/4 暗褐	23.4	0.7	0.3	11.7	0.6	61.6	10.3			10.0	5.5



第319図　番後台遺跡重鉱物組成図

本地点において重鉱物に占めるカンラン石の割合は非常に少ない。下部のNo.23～17ではカンラン石が出現しないか、或いは 0.3%と極めて低率で見られる程度である。No.16～10では、グラフ上でNo.13 (3.5%) において小さな突出部が見られるものの、上方に向ってカンラン石がゆるやかに増加する。No.9 から増加量を増し、No.7 において12.8%の最大値に達する。No.5 (8.1%) でやや増加する傾向がうかがえるが、大局的にはNo.6 から上方へ、カンラン石は漸減する。産出するカンラン石は半自形～他形の円磨された粒子が多く、自形を示すものは稀れである。No.10以下のカンラン石は赤～赤褐色に風化したものが多く、これより上位のカンラン石は赤褐色～褐色に風化した粒子が多い。

斜方輝石

斜方輝石の変化を大まかに見ると、下部に明瞭なピークがあること、及びNo.18から上方へ斜方輝石が漸増することが特徴となっている。No.23 (11.7%) から急増して、No.21 (38.8%) で極大値に達した後、斜方輝石は急激に減少し、No.18 (10.5%) で最小となる。No.18～6 においては幾つかの凹凸を繰返しながらも上方へ増加し、No.6 は47.1%の値を示す。No.6 ～1 では斜方輝石の産石に大きな変化はなく、45.1～50.4%の値をとる。産出する斜方輝石は、下半部では半自形～他形の壊れた粒子が多く、上半部では自形結晶も幾らか含む。

単斜輝石

単斜輝石は壊れた他形を示すものが多く、上部においては半自形あるいは自形の単斜輝石がまれに見られる。No.23～10では単斜輝石が検出されない試料や、 1.0%以下の産出を示すものが多いが、No.20 (1.9%) を極大値とし、No.21～19及びNo.12 (4.0%) において小さな増加部が見られる。No.9 ～3 では、No.8 (2.2%) を極小にして、上方へ単斜輝石が増加し、No.3 (16.0%) で最大値に達する。No.2 ～1 はやや減少し、13.0%台の値を持つ。

角閃石

角閃石が多産することが、本地点の鉱物組成の大きな特徴の一つである。角閃石はNo.23 (61.6%) の最大値から急減し、No.21 (40.4%) で極小となった後、上方へ漸増し、No.18 (59.6%) の極大に達する。No.17から上方へと角閃石は減少するが、段階状に減少する傾向が見られる。

すなわち、No.18～16 (58.1～59.6%) 、No.15～13 (45.2～45.7%) 、No.12～10 (33.7～37.3%)及びNo.9 ～1 (16.2～22.2%) の5つの段階状に分けることができる。角閃石の形態は、自形から壊れた他形まで種々である。

緑レン石

緑レン石が全試料を通じ出現すること、下部において数%以上の産出があることは、本地点の重鉱物組成上の特徴の一つとなっている。No.23 (10.3%) から減少し、No.21 (3.8%) で極小となった後、緑レン石は増加し、No.19 (11.6%) で最大に達する。No.18～15においては緑レン石は減少し、No.15 (4.2%) で極小となり、再び増加して、No.13 (8.7%) で極大値となる。

No.12～1では小さな凹凸が見られるものの、緑レン石が上方へ減少する傾向が見られる。産出する緑レン石には自形の形態を示すものはない。

ザクロ石・ジルコン

ザクロ石は断続的に出現するが、どの試料においても、1.0%未満と極めて微量である。ジルコンはNo.11において1個体検出されたのみである。

不透明鉱物

不透明鉱物の産出産化は比較的複雑であるが、大局的に見ると下位から凹凸を繰返しながらも漸増し、No.11の頂点を境として上方へ減少する傾向を示す。No.23～21は10.0%前後の値をとる。No.20（7.3%）を極小に不透明鉱物は増加し、No.17（16.1%）で極大となった後、No.16では11.6%に減少する。No.20～17と同様に、No.16（11.6%）を極小として不透明鉱物は増加し、No.14（22.8%）で極大となった後、No.13では14.3%に減少する。また、同様にNo.13（14.3%）を極小として不透明鉱物は増加し、No.11（29.3%）で最大値となる。No.20～17、No.16～14、及びNo.13～11に見られる不透明鉱物の増加は鋸歯状の段階的な増加を示している。No.3（10.5%）で小さな増加部が見られるものの、No.9～1を通じて不透明鉱物は単調に減少する。

軽鉱物中における海綿動物の骨針

本地点の試料は重鉱物量が非常に少ないことから、重液に浮いた軽い砂分がかなりある。これらの砂分中には火山ガラスがどの試料中にも含まれるが、非常に微量であり、形態も軽石型からバブル型及びその中間型と一定しない。

さて、今回の試料の中で1～2の試料を除くと、ほとんどの中に海綿動物の骨針が含まれていた。骨針は長い円柱状で、その中心には細い管が通っており、形態としては一軸型・三軸型・四軸型等が認められる。骨針の表面が平滑なものが一般的であるが、凹凸の模様を持つ骨針も幾つか含まれる。また、骨針を塩酸に浸しても反応しないこと、及び光学的に等方体であることから、ガラス質の物質で構成されているものと考えられる。

4．考察

試料中の$\frac{1}{4}$～$\frac{1}{8}$mmの砂分量が多いこと、$\frac{1}{4}$～$\frac{1}{8}$mmの砂分中における重鉱物量が多いこと、及び角閃石・緑レン石が多産すること等が、本地域における重鉱物分析での大きな特徴となっており、千葉県下の他遺跡のローム層中の分析結果と性質を異にしている。このことは、どこからか砂が運搬され、推積したためと考えられる。砂がローム中に流入することから、海水の影響下での堆積が推測されるが、軽鉱物中での海綿骨針の存在もこれを支持している。

また、角閃石・緑レン石の減少、$\frac{1}{4}$～$\frac{1}{8}$mmの砂分量の変化、及び岩相の変化等から、砂の流入量は下の方が大きかったであろうと考えられる。他の遺跡のローム層中に現われる特徴的な鉱物組成や産出変化が本地点で見られないのは、流入した砂分中に含まれた多量の角閃石や緑レン石等が、ローム層中の重鉱物組成の特徴を薄めてしまったかと思われる。また、水の環境

下において、カンラン石の風化が促進され、カンラン石の量が減少した可能性も考えられる。No.21は、重鉱物量の極大、斜方輝石の極大、及び角閃石と緑レン石の極小を示し、斜方輝石の部分的な増加（No.20）にも近い。これは角閃石と緑レン石等を含む砂の流入が減少したためなのか、あるいは斜方輝石や単斜輝石を含むテフラの供給が増大したためなのか、いずれとも考えられる。ただし、後者と考えた場合、カンラン石の漸増しはじめより下位にNo.21が位置することや、斜方輝石・単斜輝石等の重鉱物を含むことから、そのテフラは東京軽石層（ＴＰ）である可能性も考えられる。

成田地域、権現後遺跡、前原Ⅰ遺跡、花前Ⅱ－Ⅰ遺跡等では、カンラン石の最も大きな極大が一般にⅦ層中に存在し、このⅦ層は褐色を呈する場合が多く、重鉱物組成の特徴などから武蔵野台地の立川ローム第２黒色帯に対比されている。本地域においては、重鉱物量の増加に伴ってカンラン石が漸増し、No.7で極大に達する。ただし、このカンラン石の極大が他遺跡のⅦ層に見られる極大と同様の意味を持っているかは判らず、No.7が黒褐色を呈することを考えに入れても、立川ロームの第２黒色帯に対比されるかは不明である。

カンラン石がNo.7の極大から上位へ単調に減少すること、斜方輝石が上方へ単調に増加すること、及び単斜輝石が上方へ増加すること等は、花前Ⅱ－Ⅰ遺跡・中山新田Ⅰ遺跡とよく類似した傾向である。花前Ⅱ－Ⅰ遺跡や中山新田Ⅰ遺跡の始良Th火山灰（ＡＴ）の位置から推測すると、本地域のNo.6～5が相当する可能性がある。ただし、軽鉱物中の火山ガラスは、軽石型からバブル型まで混入しており、形態的にも、量的にも他試料と差異は認められなかった。従って、今回の分析ではＡＴの位置は確認できなかった。

Summary

This report concerns archaeological investigations carried out at the Bangodai and the Sinmeidai Sites by the Cultural Properties Center of Chiba Prefecture.

〈Bangodai Site〉

This site is located at Yōrō, Ichihara City, Chiba Prefecture. The site is located on the terrace about 53 meters above sea level on the right bank of the Yōrō River. This investigation was done from April to December, 1979 and from March to July, 1980. The following features and artifacts from Jōmon period to the Kofun period were discovered.

		Pit-dwelling	Artifact
Jōmon Period (Middle)		1	Jōmon potteries Stone implements
Yayoi Period (Late)		30	Yayoi potteries Stone implements Iron objects
Kofun Period	(Early)	74	Potteries (Hajiki, Sueki Type) Stone implements Iron objects Bronze object
	(Middle)	5	
	(Late)	20	

Dateless	Pit 9	Ditch 4	Quadrangular ditch 2

〈Shinmeidai Site〉

Shinmeidai site is located at Takataki, Ichihara City, Chiba Prefecture. This site is located on the terrace about 59 meters above sea level on the right bank of the Koshikiya River, which is one of the tributary of the Yōrō River. Prelimary investigation was done in January and February, 1980. Alittle artifacts in Jōmon Period were discovered.

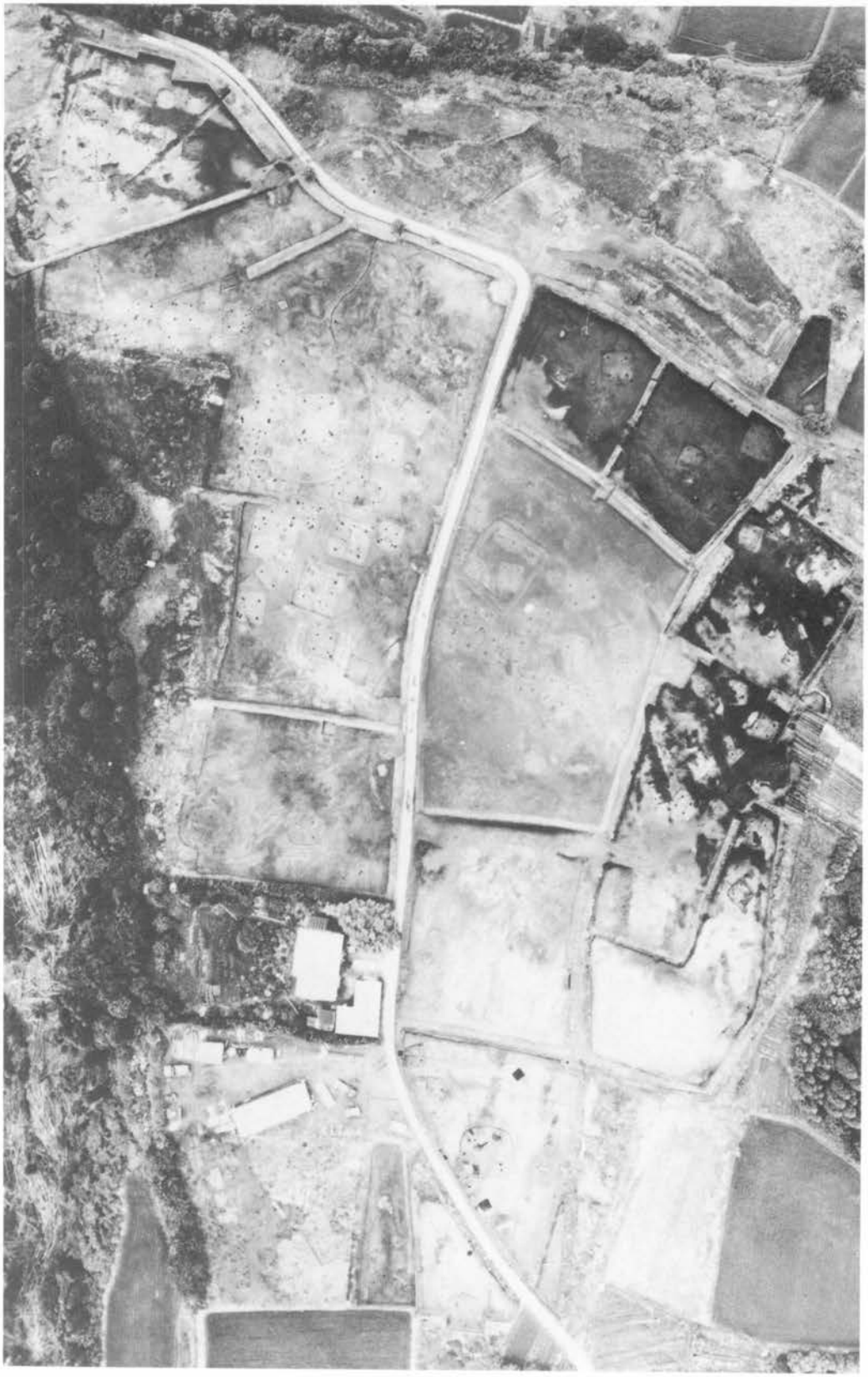
図　　版

遺跡遠景

図版 2

1．遺跡遠景（北西から）

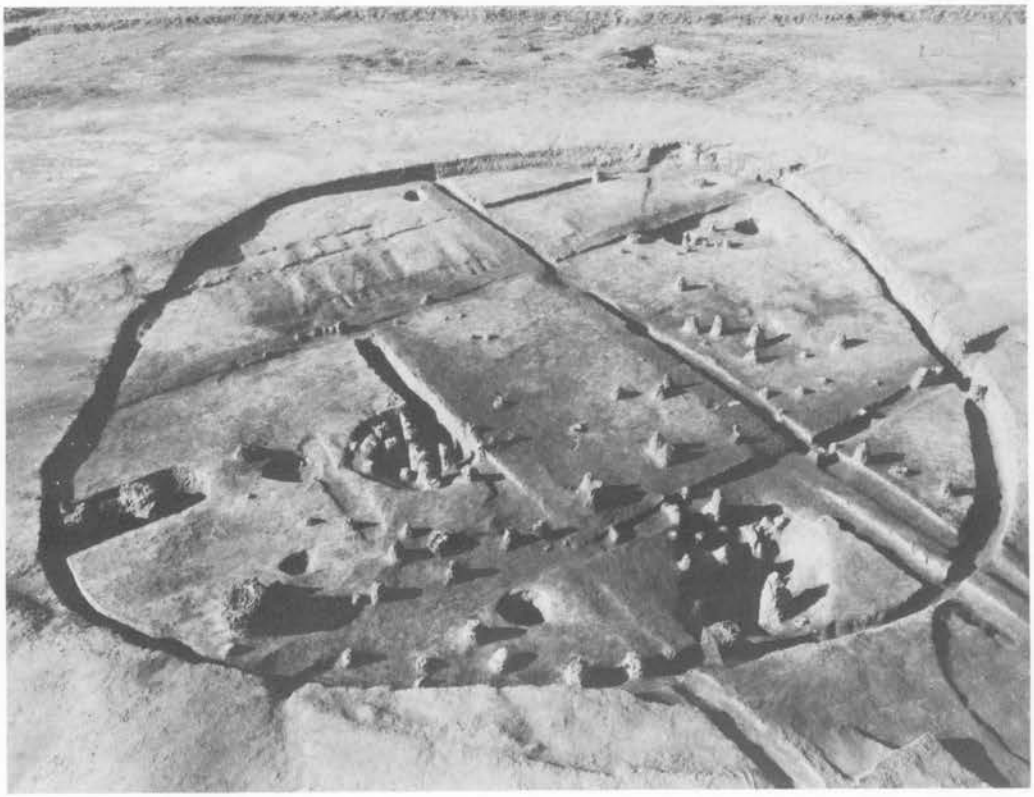
2．遺跡全景



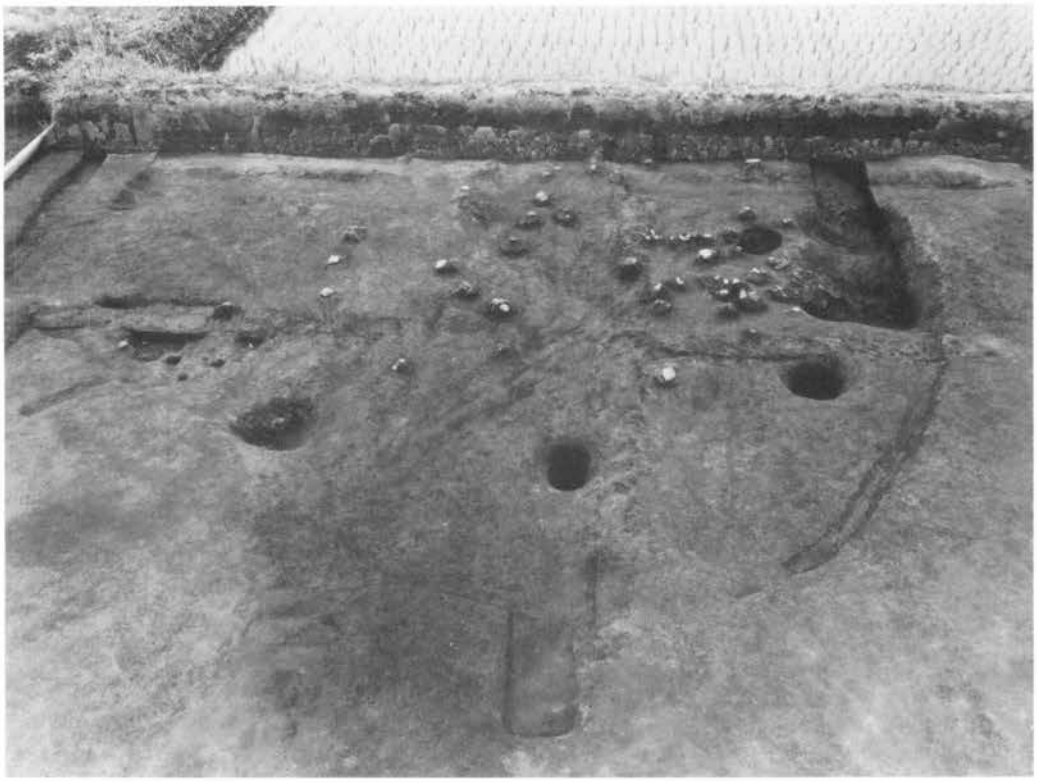
遺構配置状況

図版 4

1．002 B 号住居跡



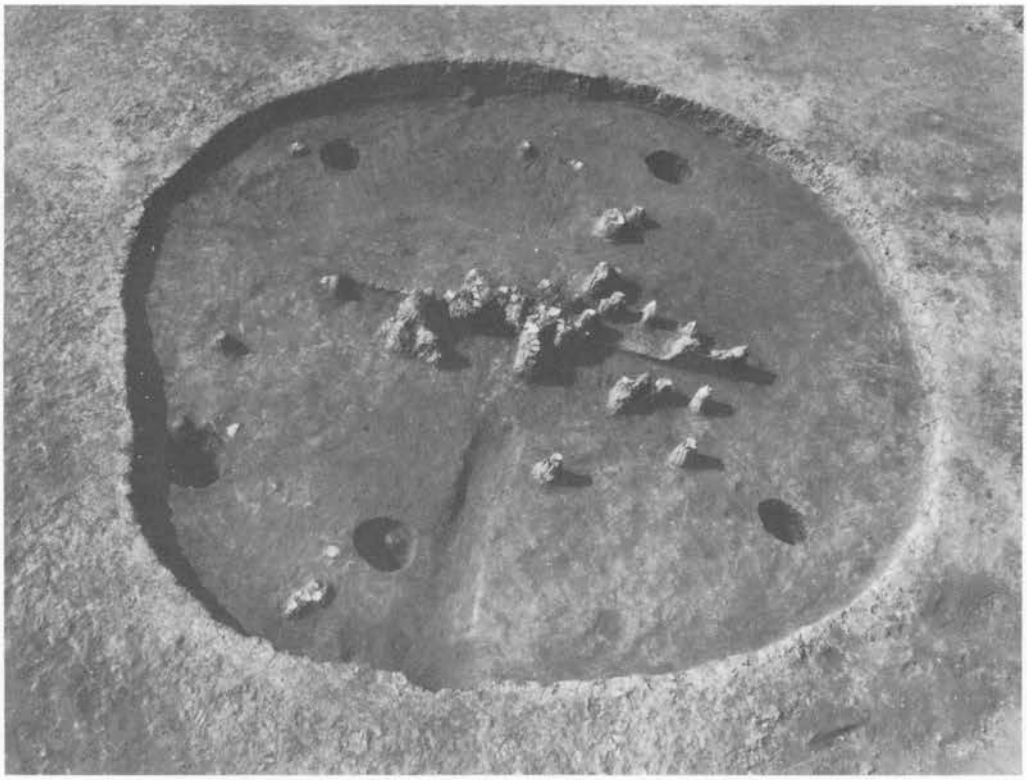
2．002 A 号住居跡



1．004号住居跡

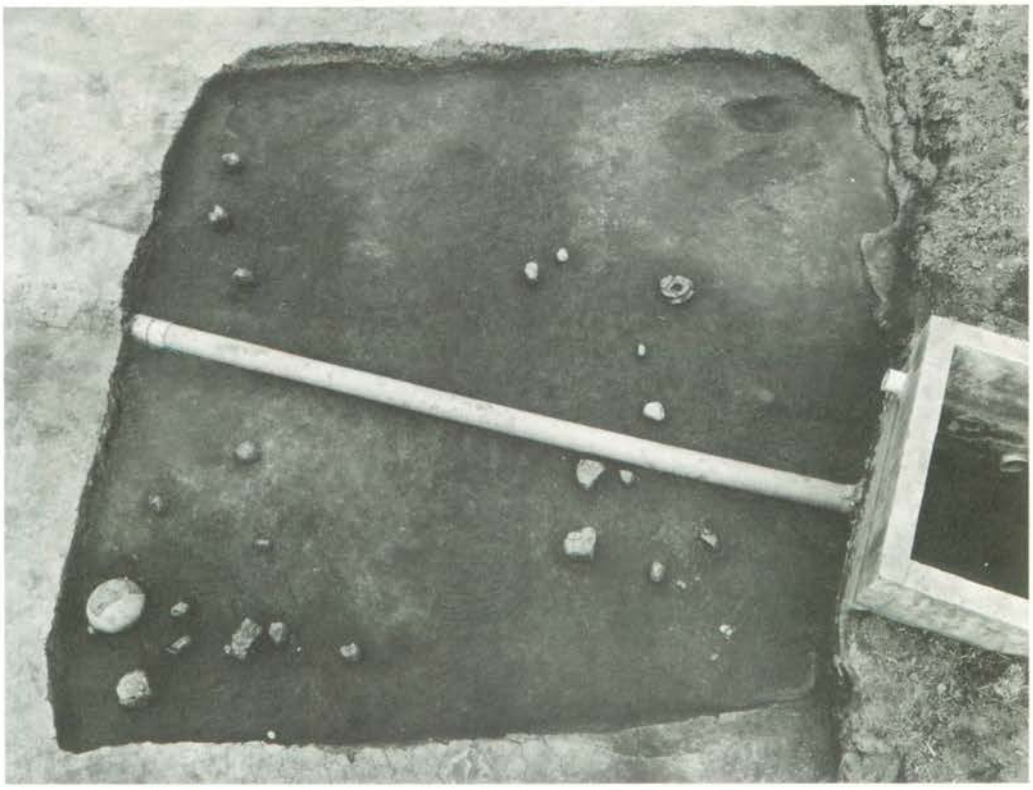
2．004号住居跡遺物出土状況

図版 6



1．021号住居跡

2．051号住居跡



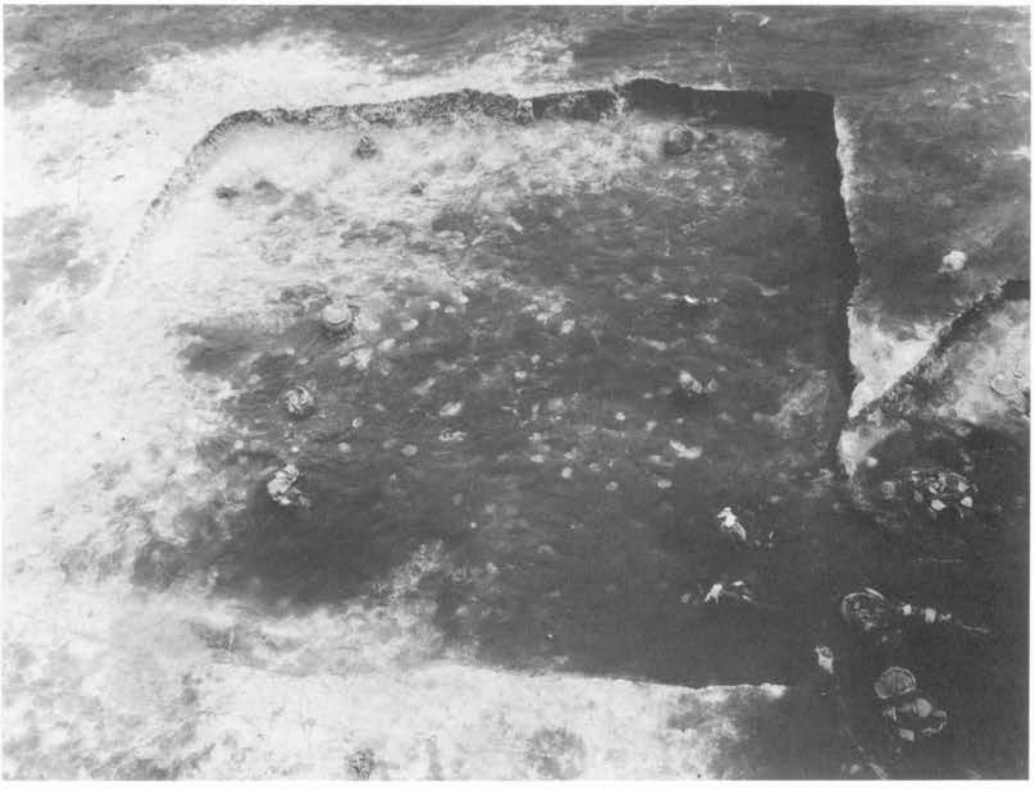
1．003号住居跡

2．008A号住居跡（手前は008B号住居跡）

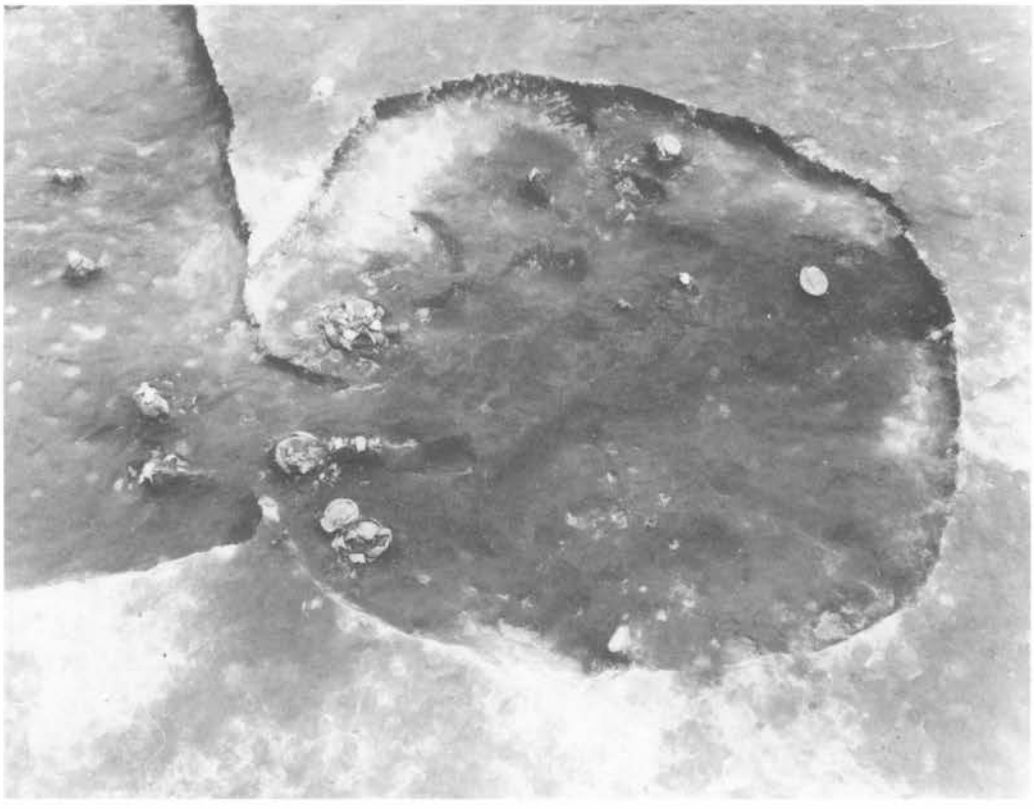
図版 8

1．009号住居跡

2．010A・B号住居跡



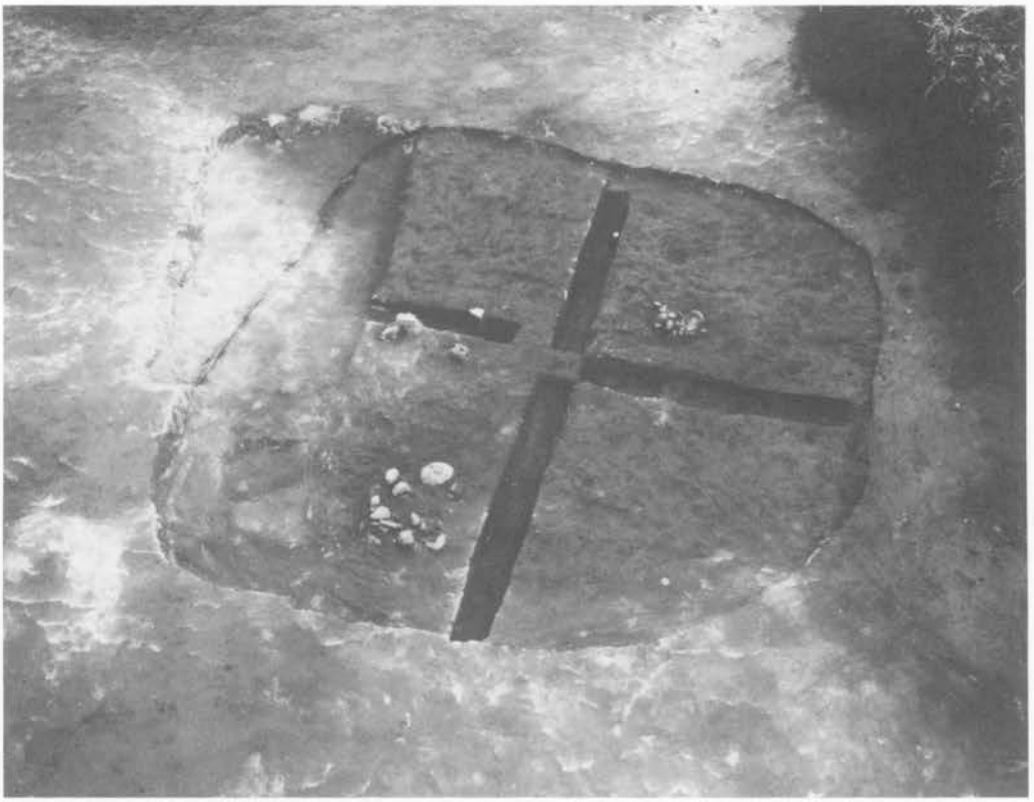
1．014A号住居跡



2．014B号住居跡

図版10

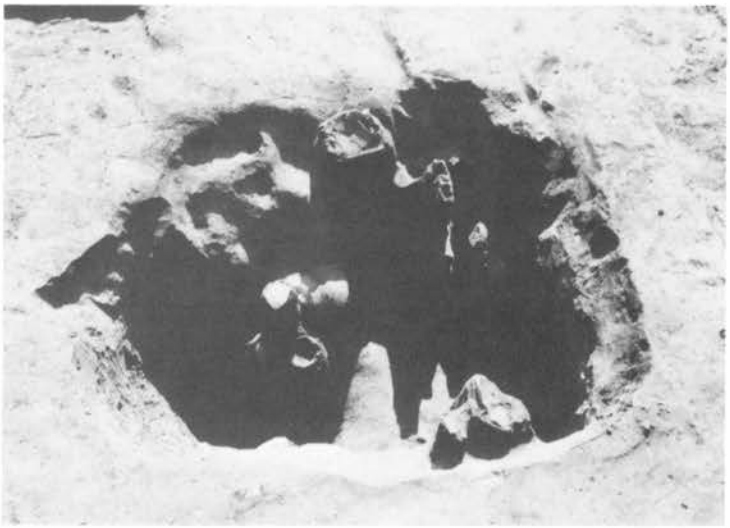
1．015号住居跡



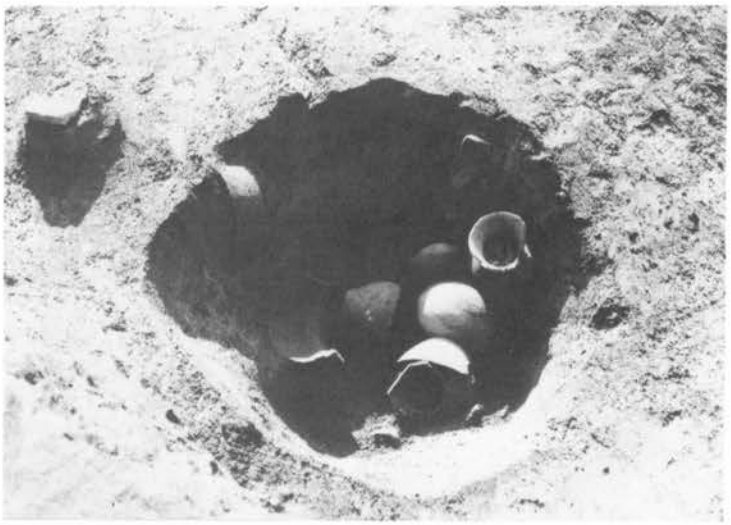
2．016A号住居跡

1．019号住居跡

南西コーナー部のヒット



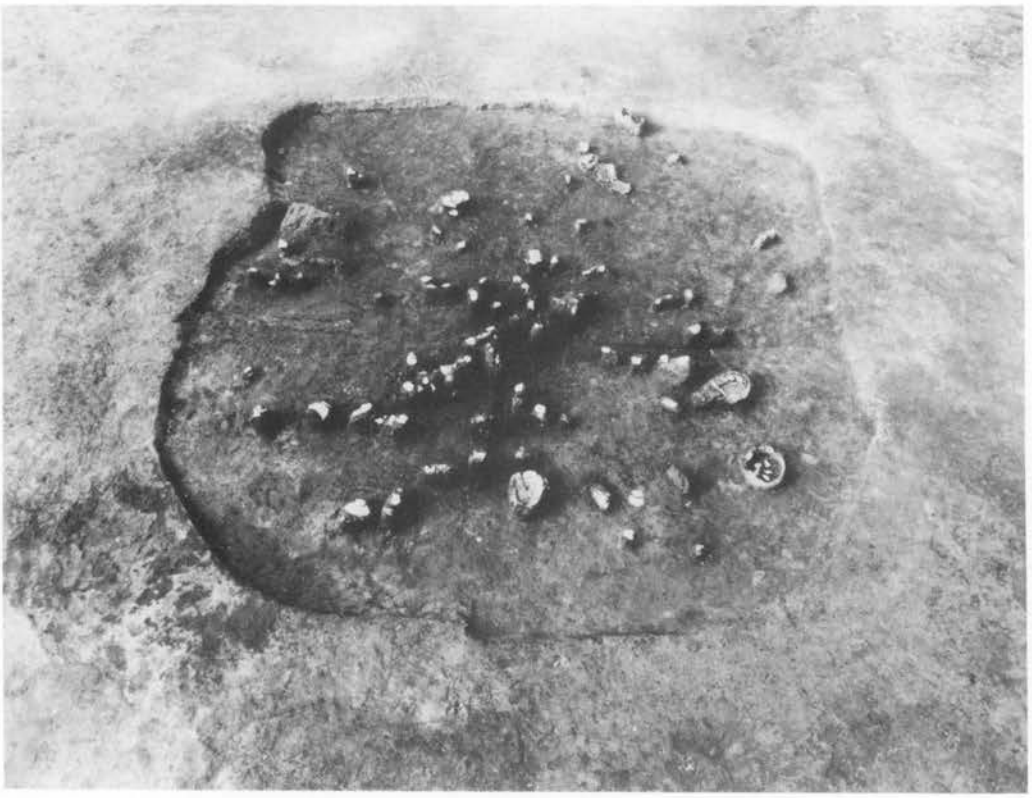
北東コーナー部のヒット



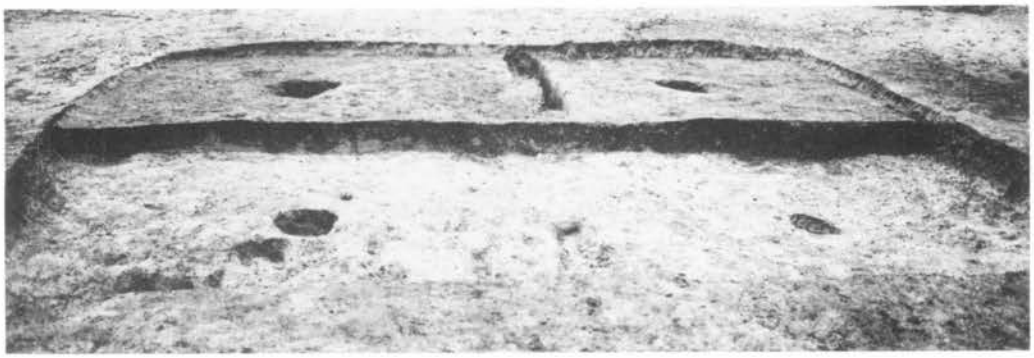
2．019号住居跡遺物出土状況

図版12

1．020号住居跡

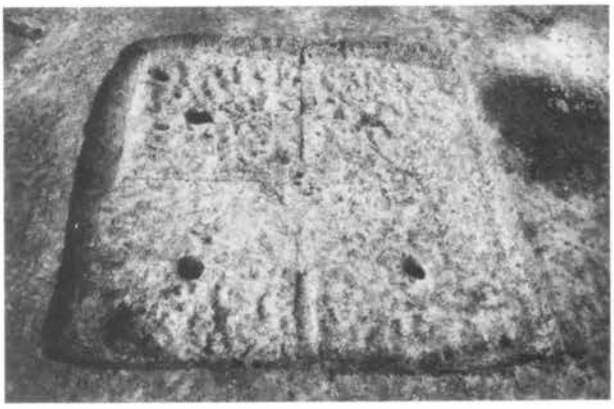


2．022号住居跡



024号住居跡貼床断面

024号住居跡荒堀り



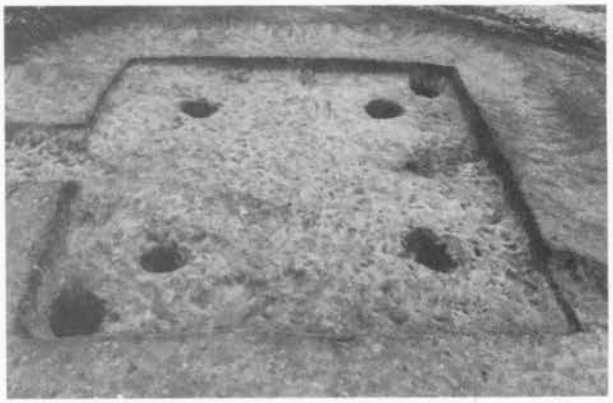
1．024号住居跡

2．025号住居跡

図版14

南側コーナー部のピット

026号住居跡荒堀り



026号住居跡

1．029A・B・C号住居跡荒堀り

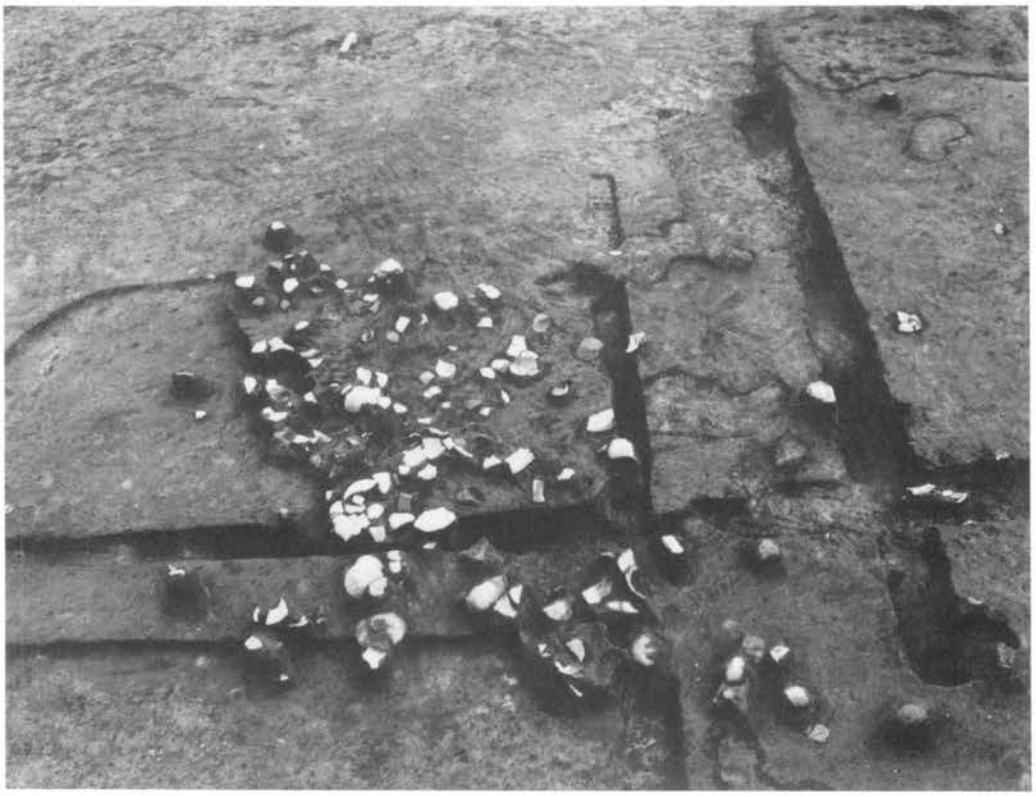
2．029E号住居跡遺物出土状況

図版16

1．029E・D号住居跡荒堀り

2．031D号住居跡

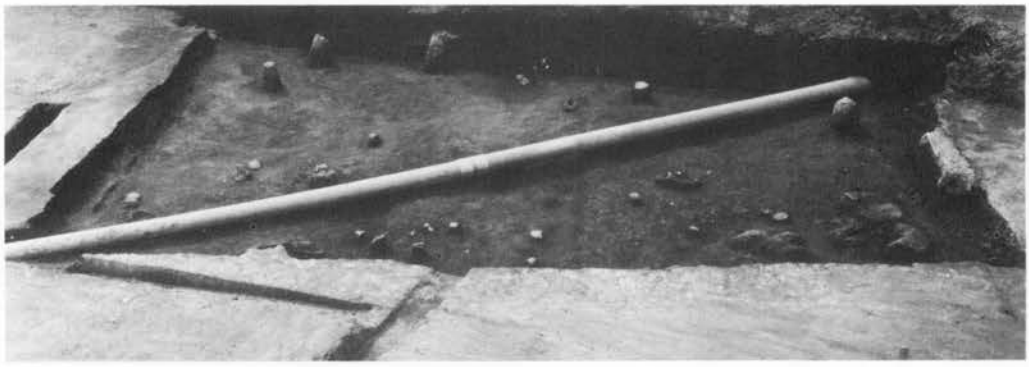
1．031A・B・C・E・F号住居跡荒堀り



2．032号住居跡

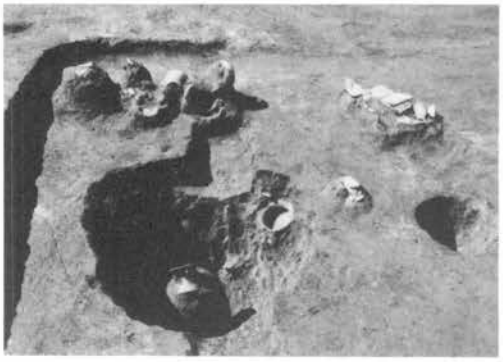
図版18

1．033号住居跡荒堀り



南側コーナー部のピット

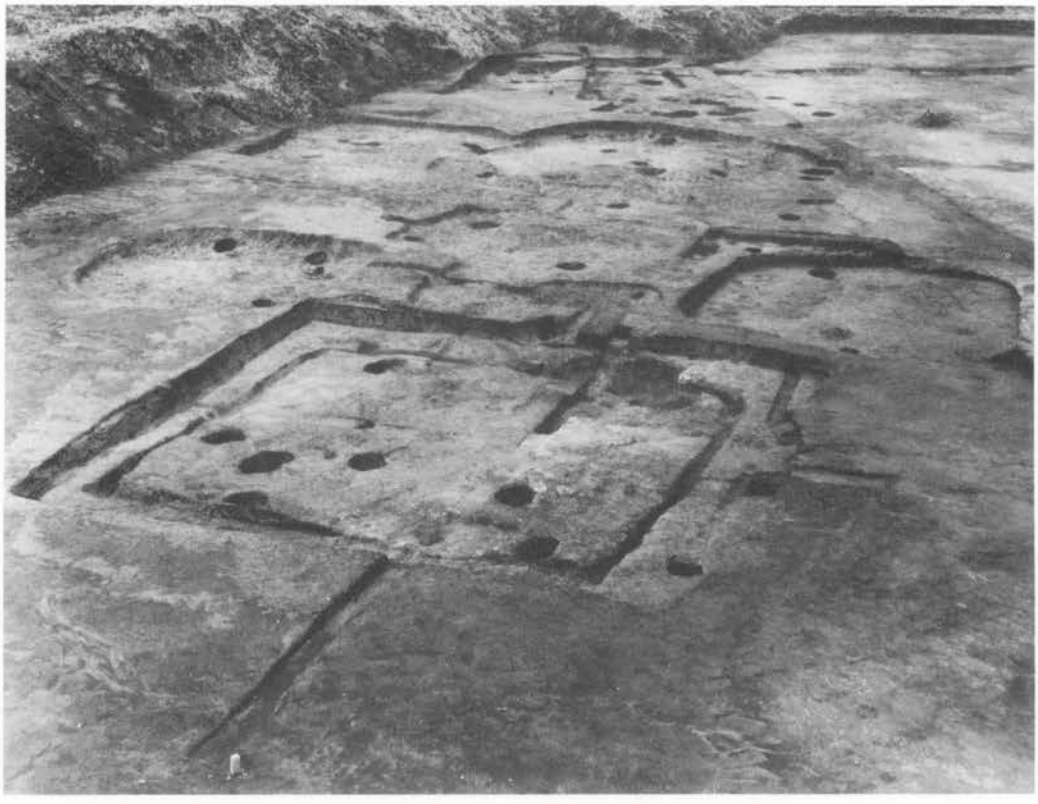
2．034C号住居跡



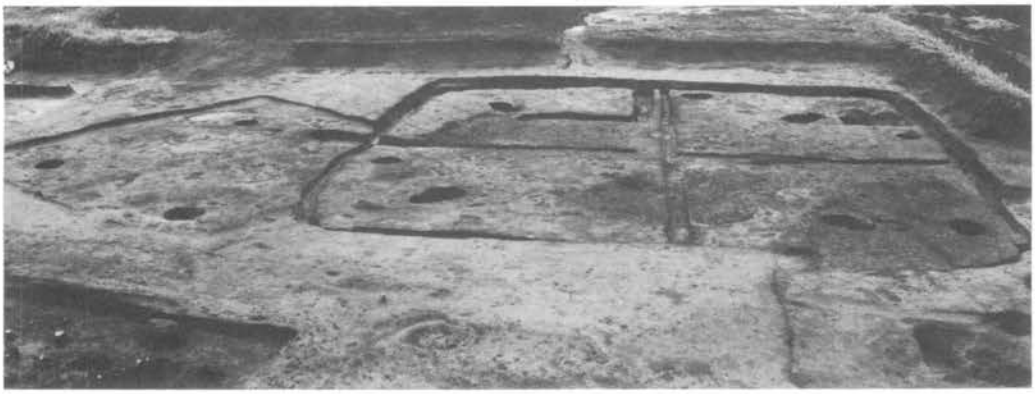
035 B 号住居跡

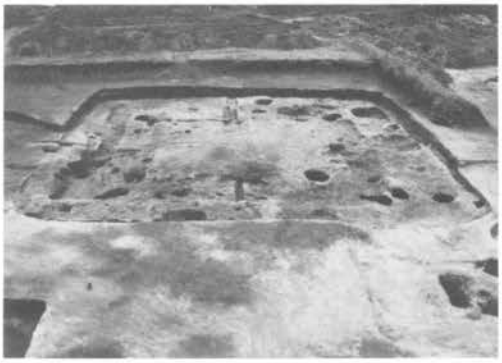
図版20

1．038A号住居跡

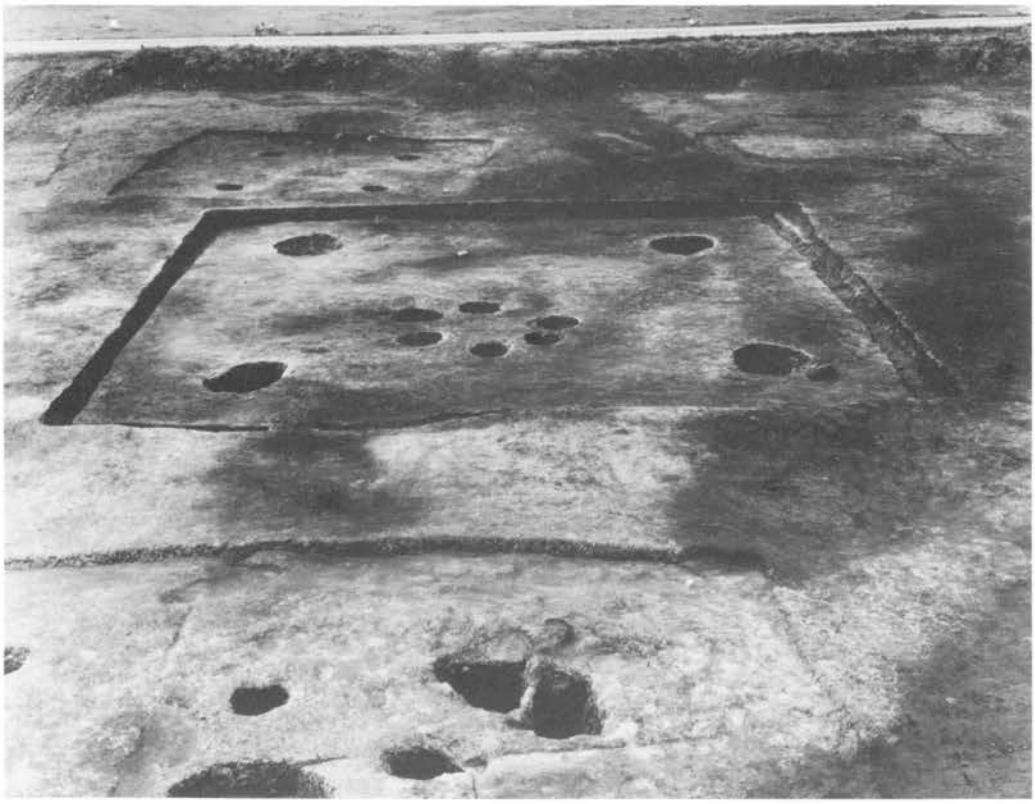


2．037・038A・B・C・D・E・F・G号住居跡荒堀り



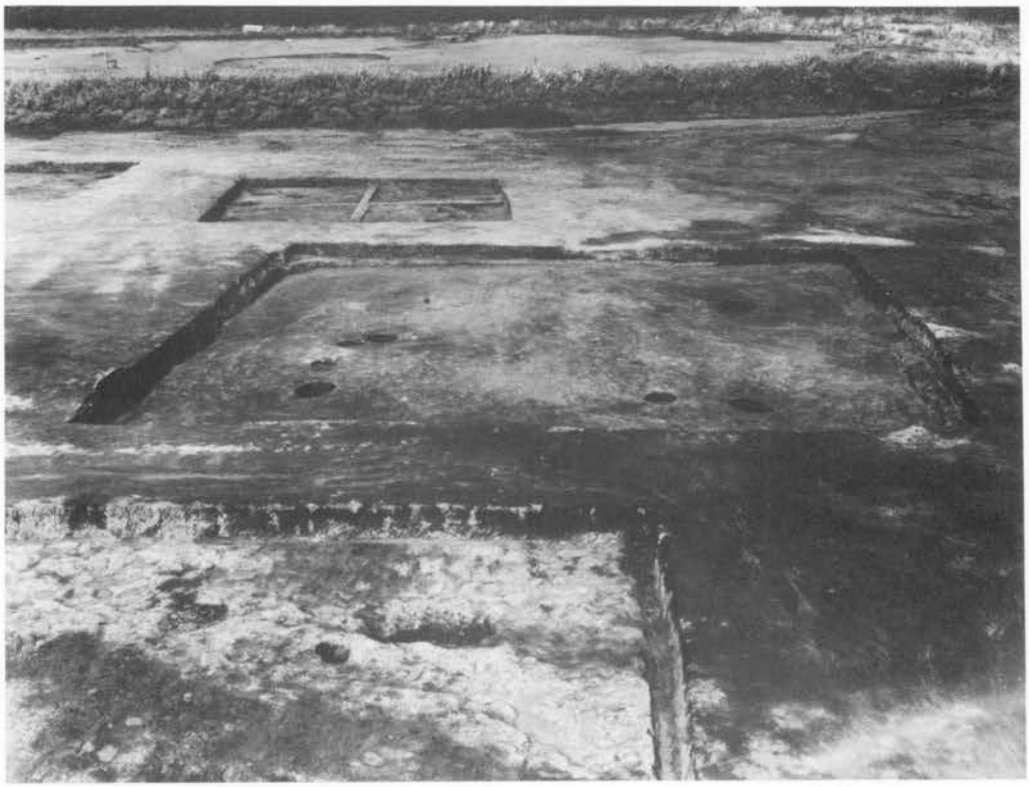


1．039C号住居跡

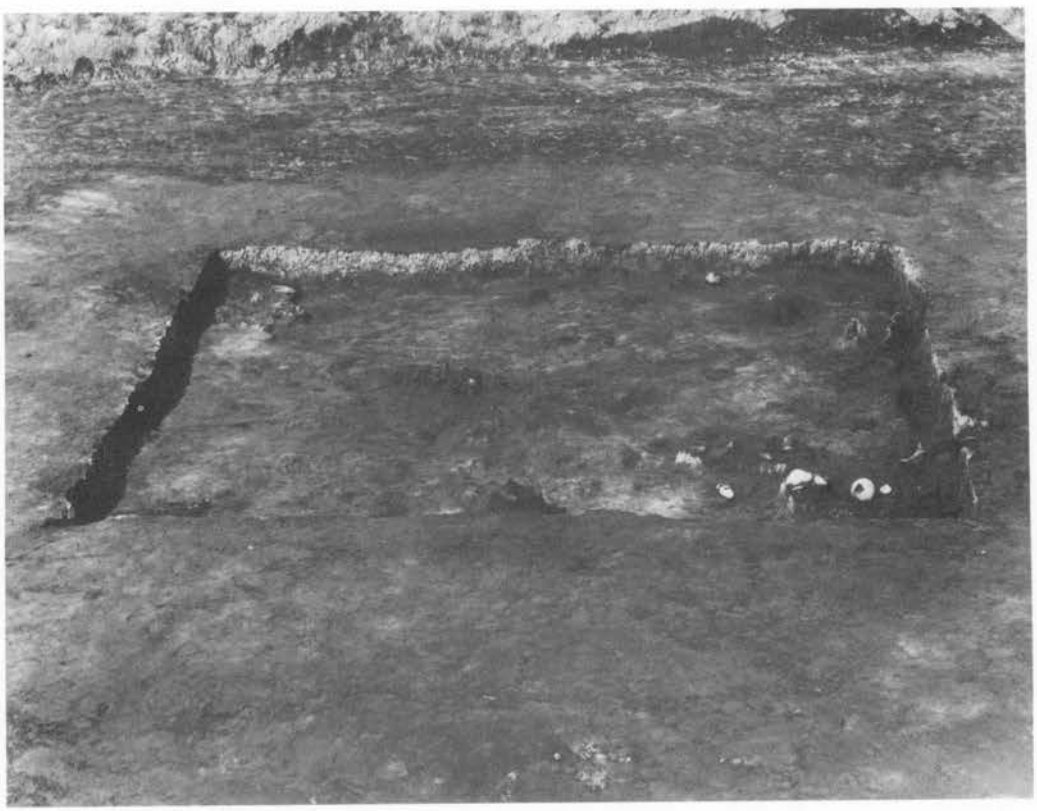


2．042号住居跡

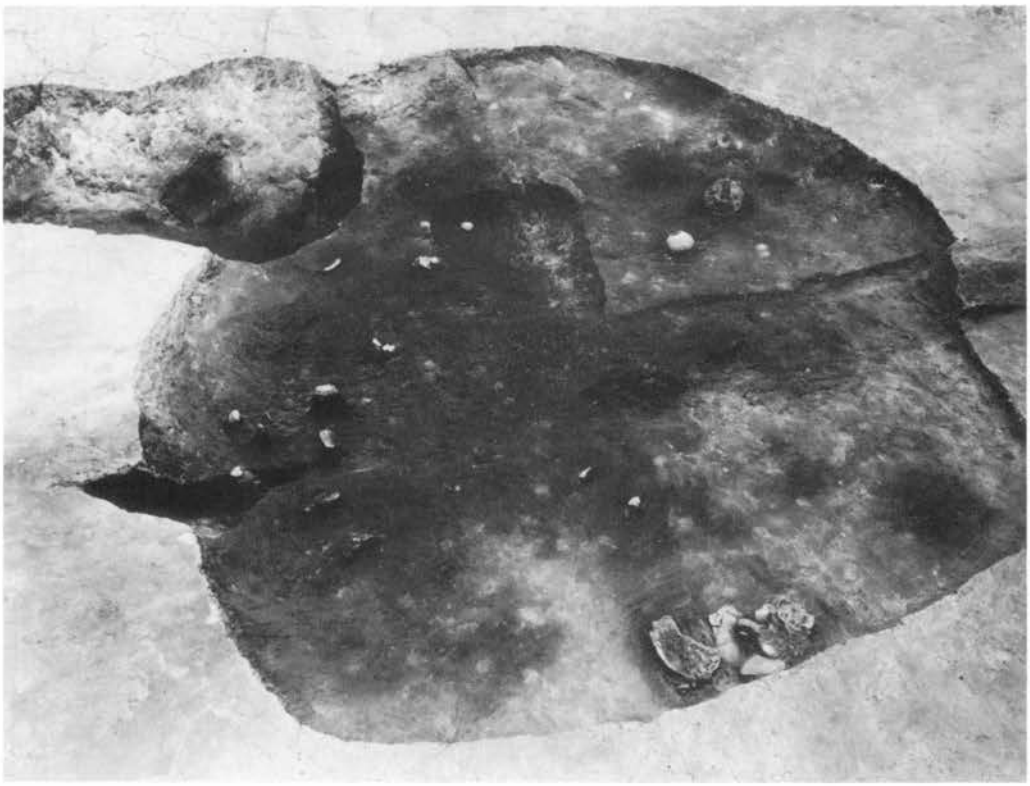
図版22



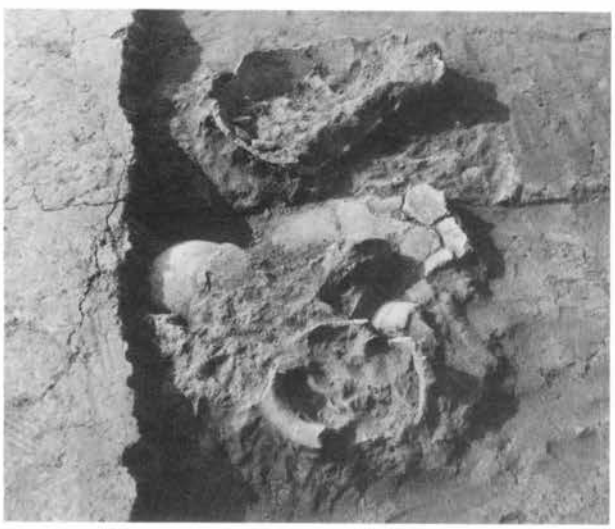
1．044号住居跡



2．047号住居跡

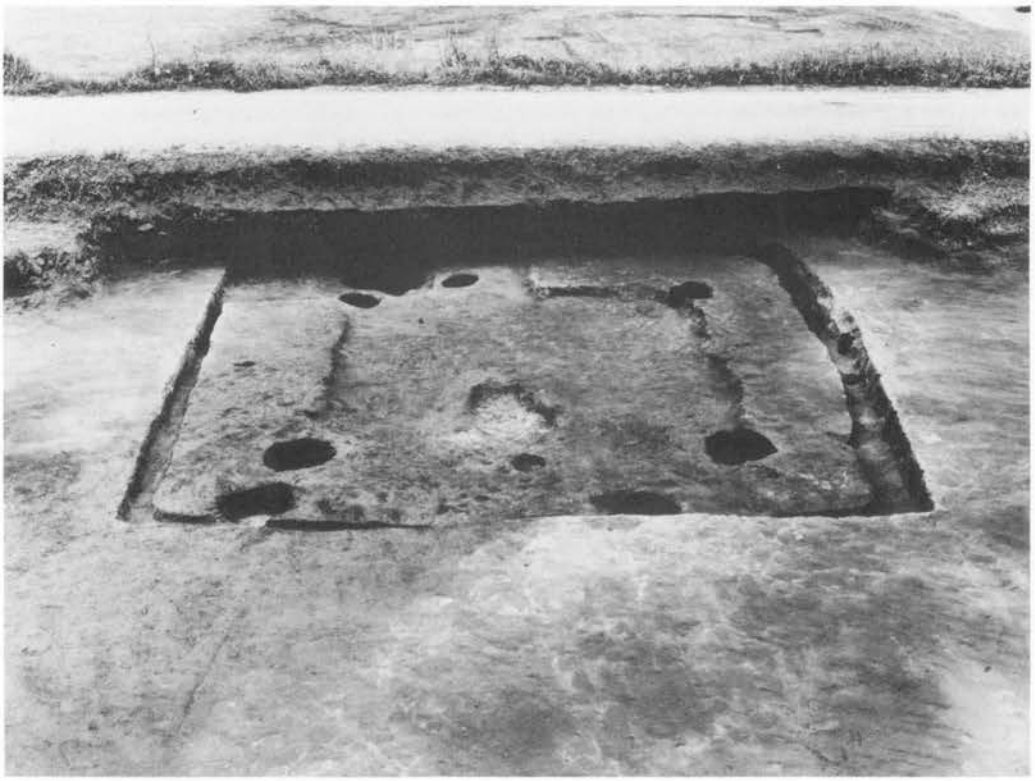


1．054号住居跡



2．054号住居跡遺物出土状況

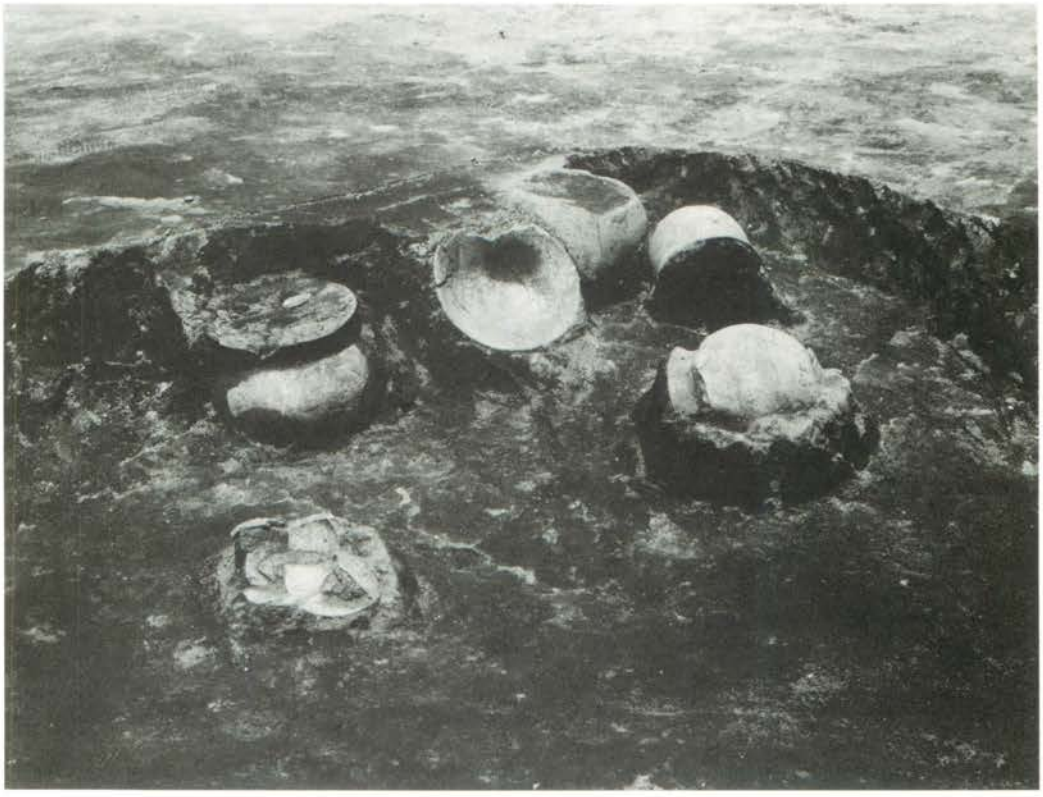
図版24



1．069A号住居跡

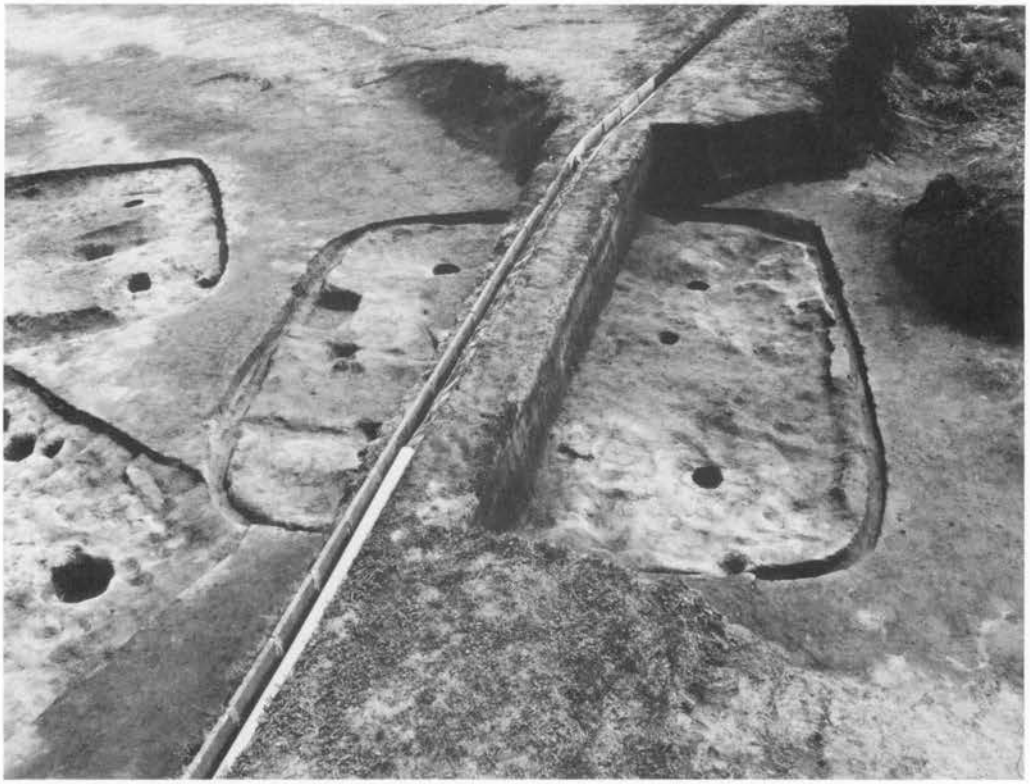
2．069B・C・E・F号住居跡荒堀り

1．073A・B号住居跡（手前は074A号住居跡）

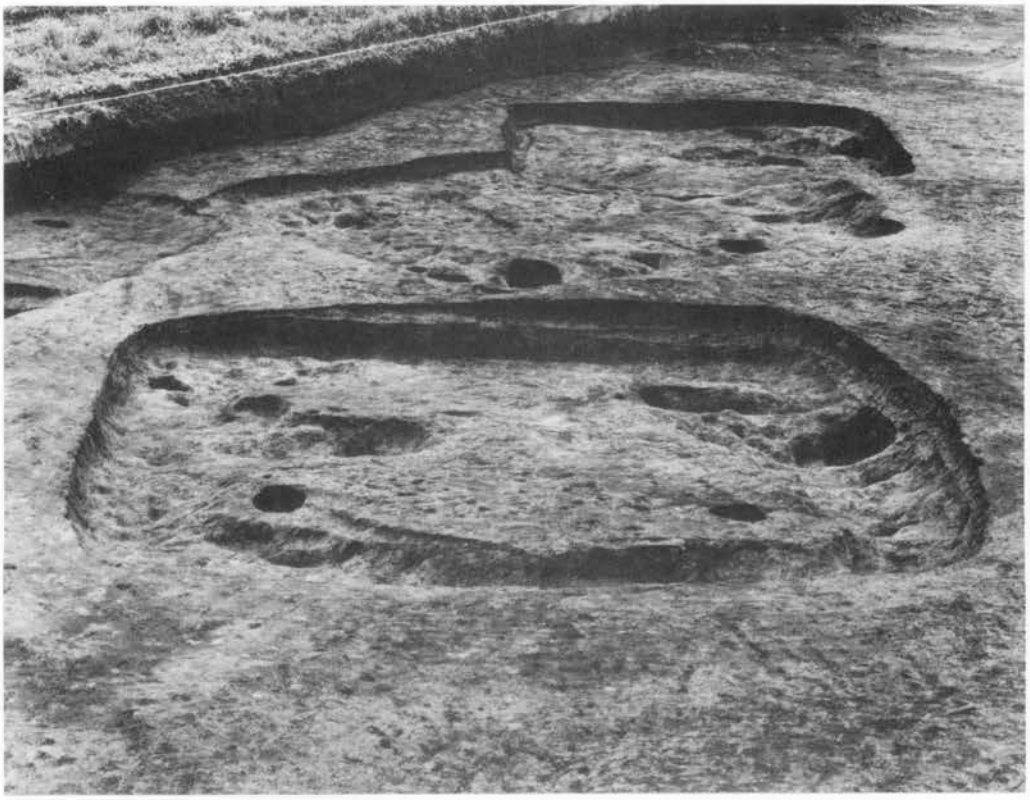


2．073B号住居跡遺物出土状況

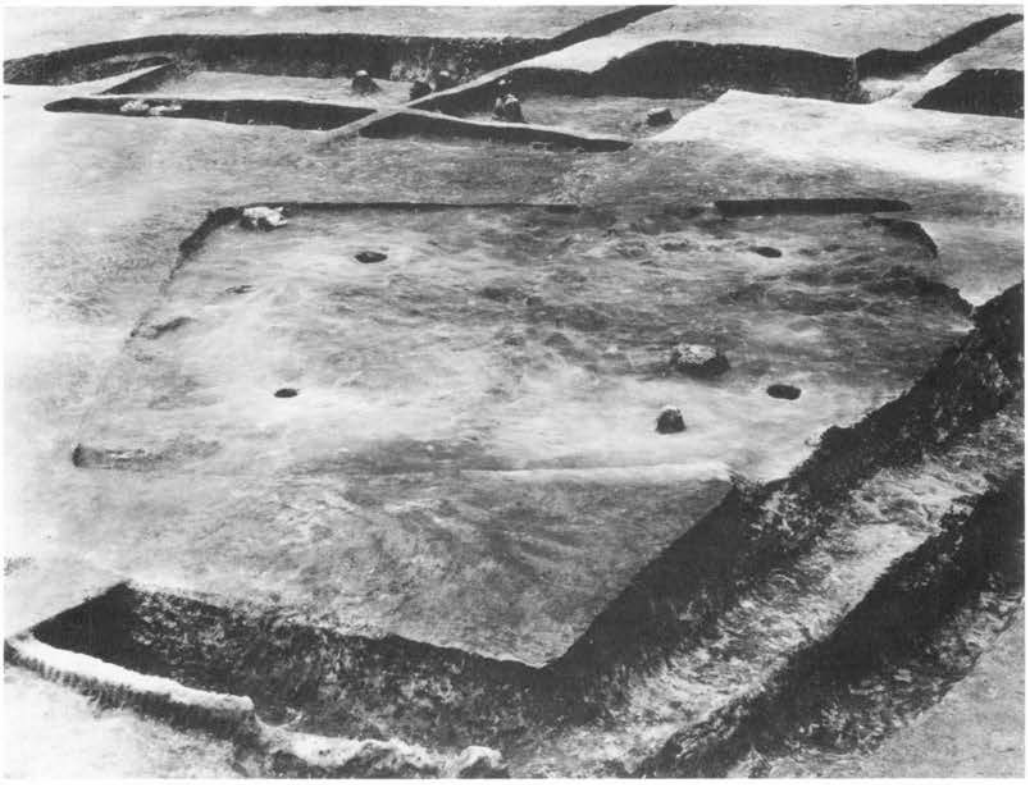
図版26



1．073C号住居跡荒堀り



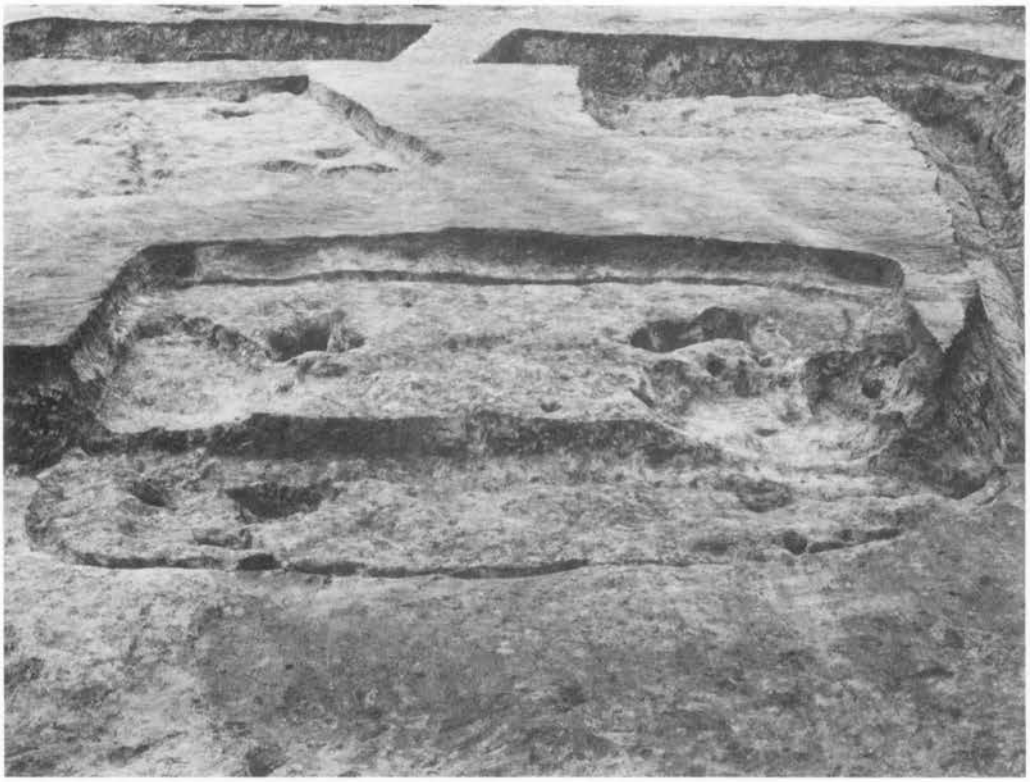
2．074A・B号住居跡荒堀り



1．076号住居跡

2．077A号住居跡

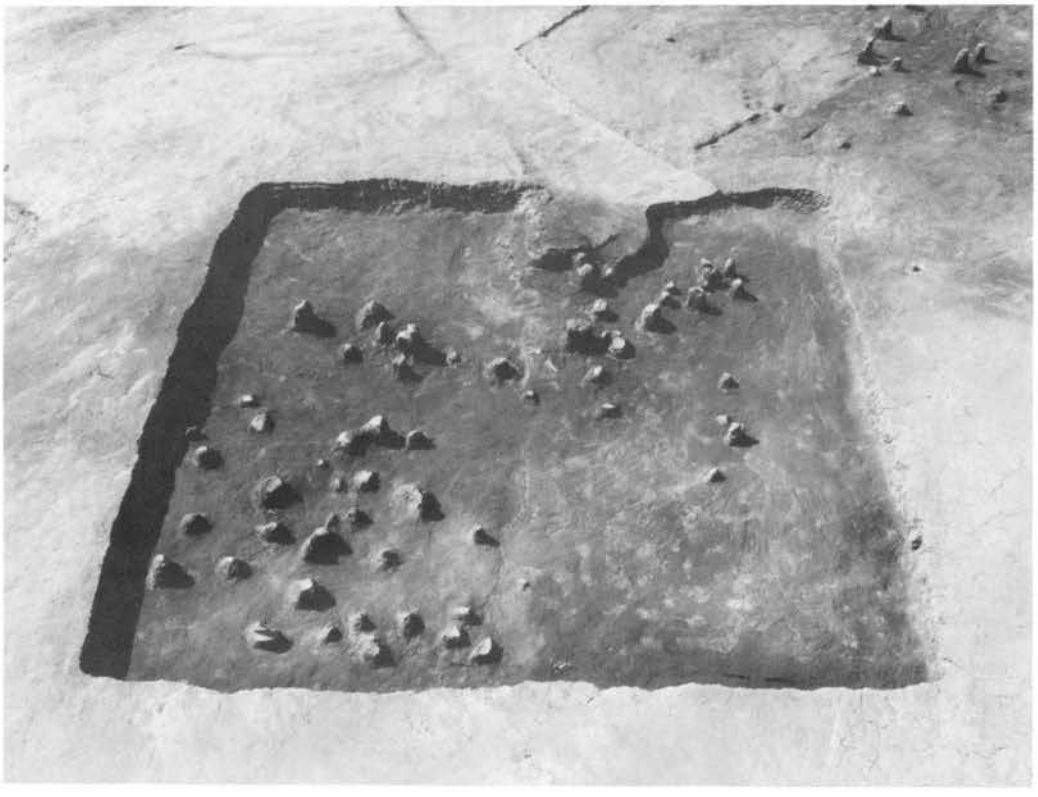
図版28



1．078号住居跡荒堀り

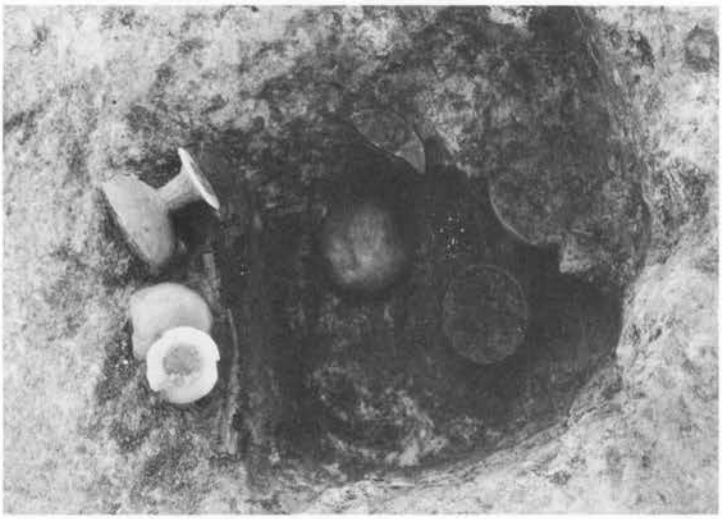
2．080号住居跡荒堀り

1．007号住居跡



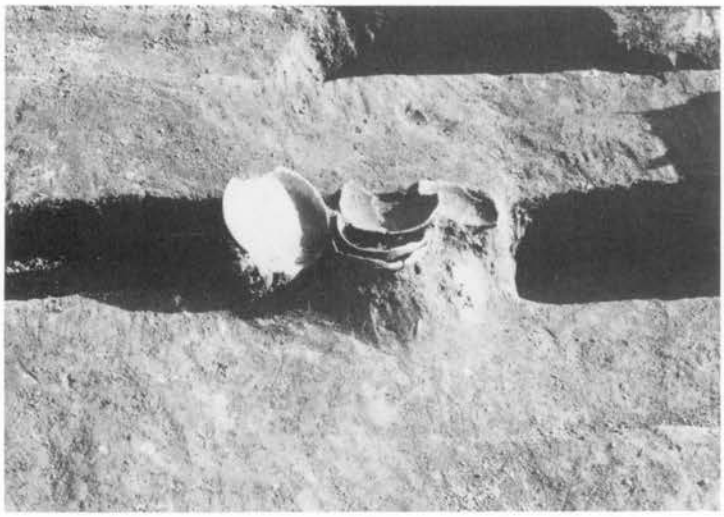
2．008B号住居跡

図版30

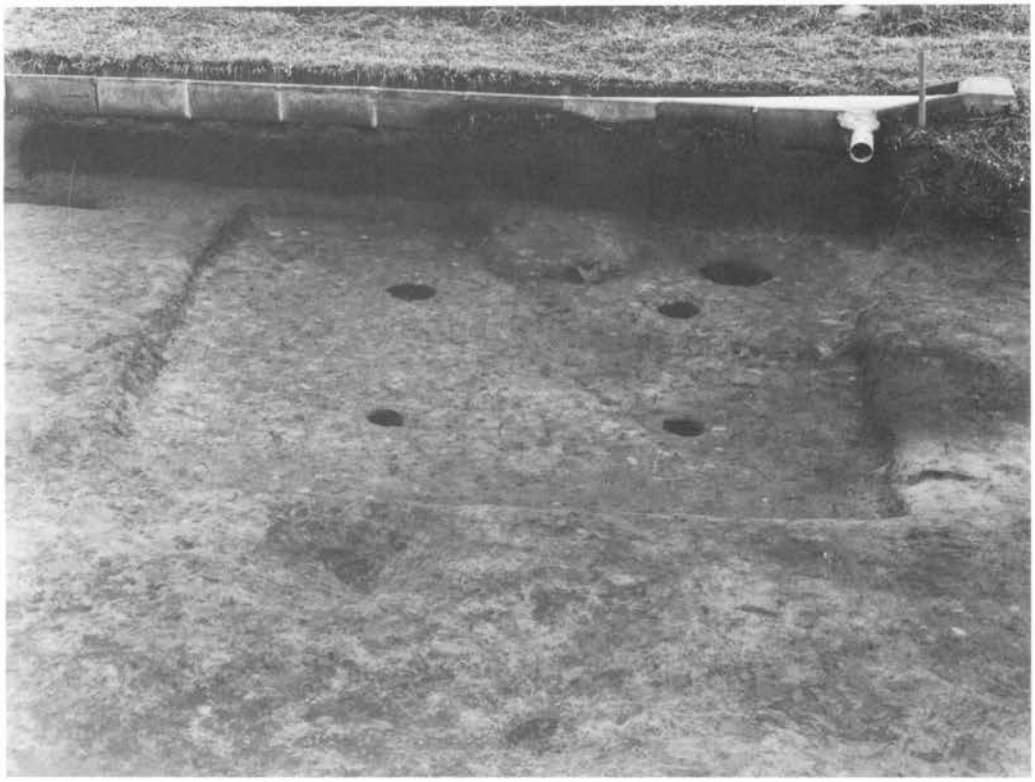


北側コーナー部のヒット

1．013号住居跡



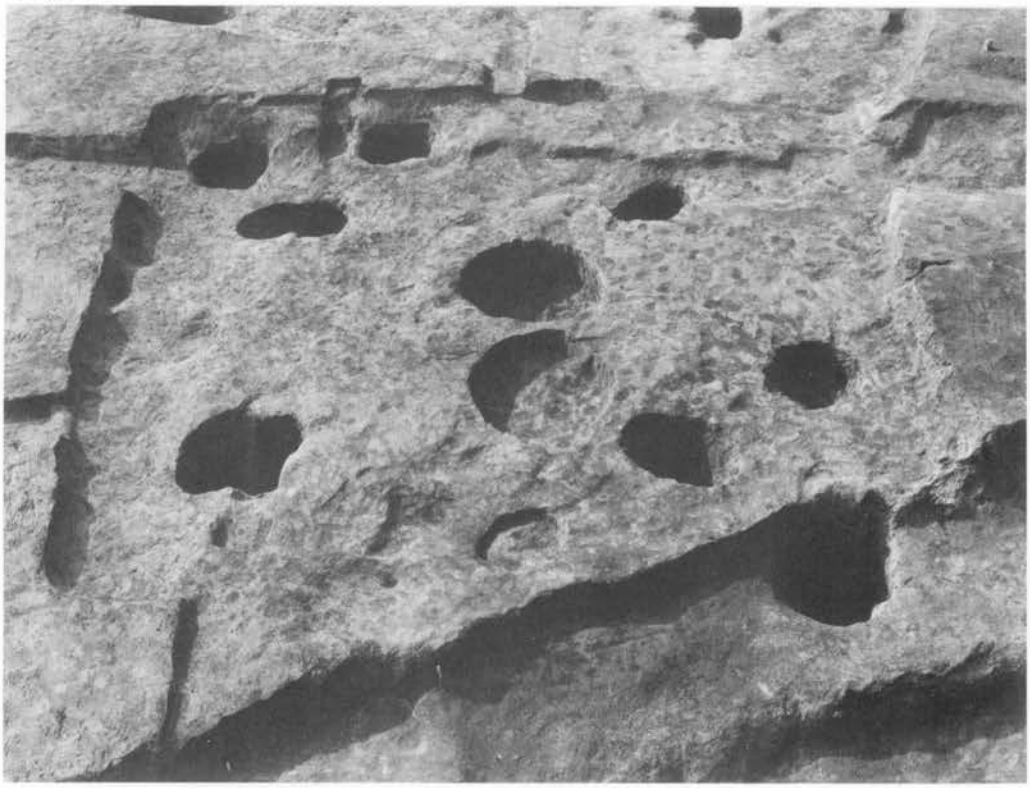
2．029G号住居跡出物出土状況



1．030号住居跡

2．031A号住居跡

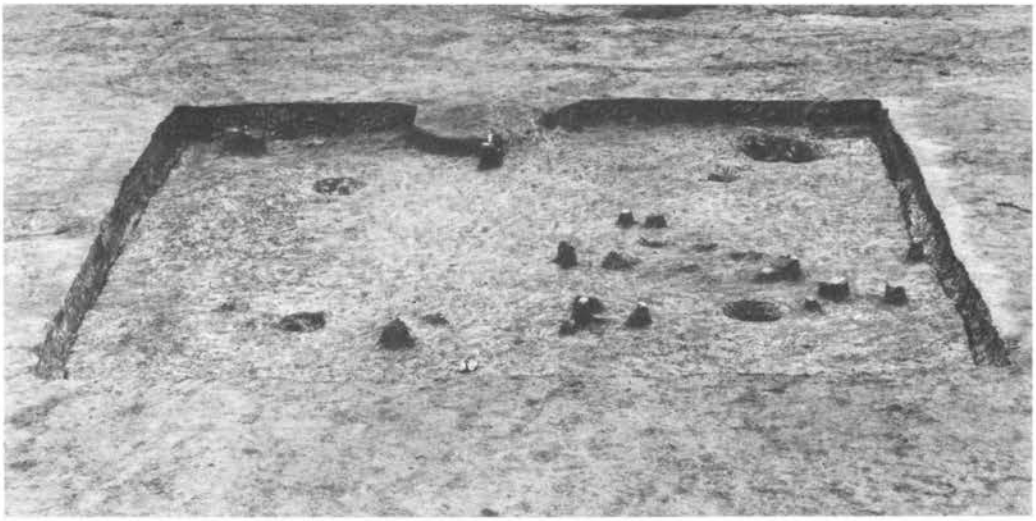
図版32



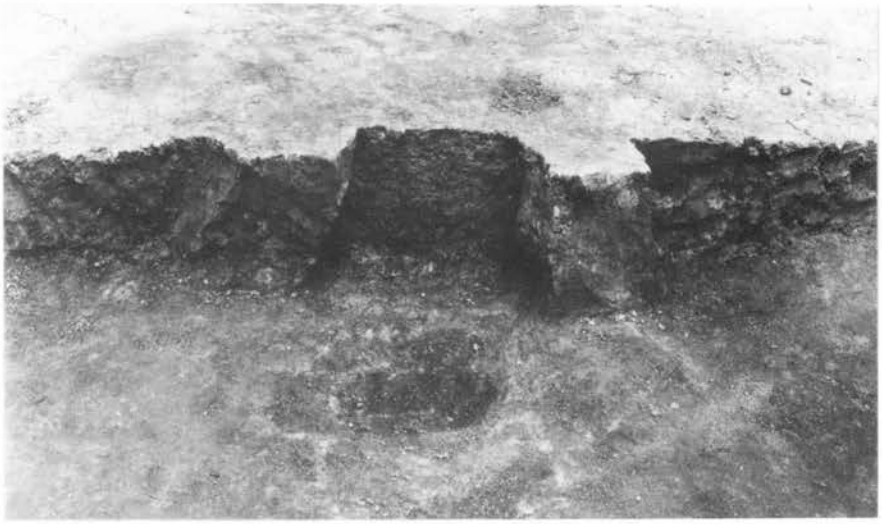
1．035A号住居跡荒堀り

2．041号住居跡

1．041号住居跡遺物出土状況



カマド



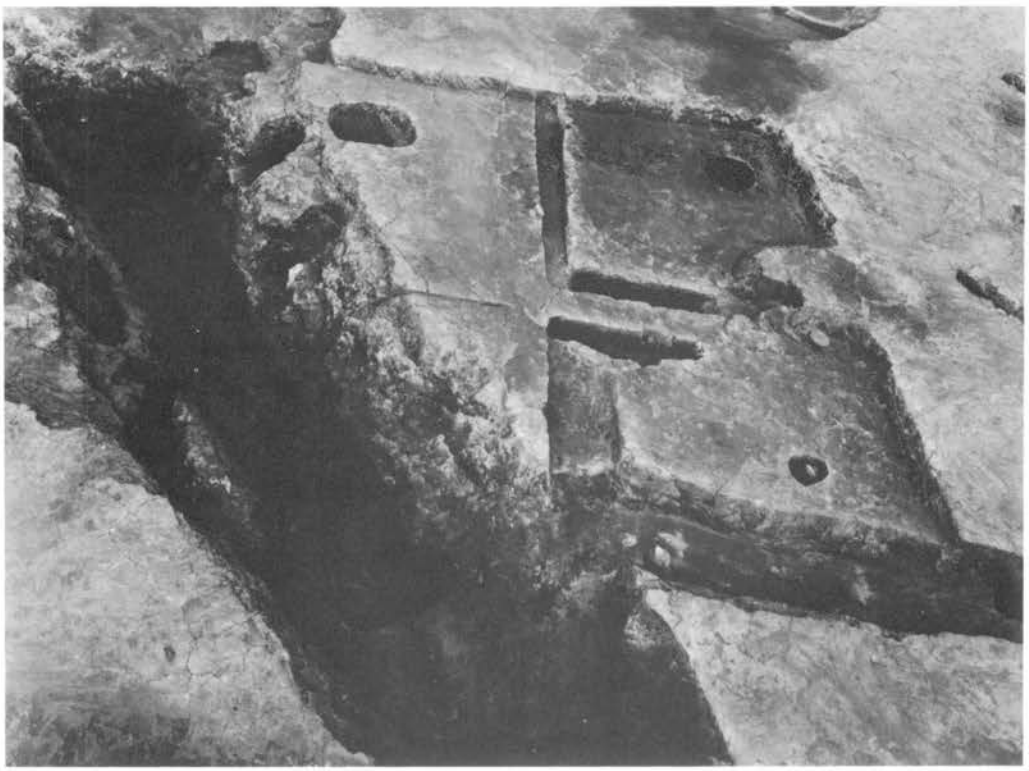
2．045号住居跡

図版34

西側コーナー部のピット

荒堀り

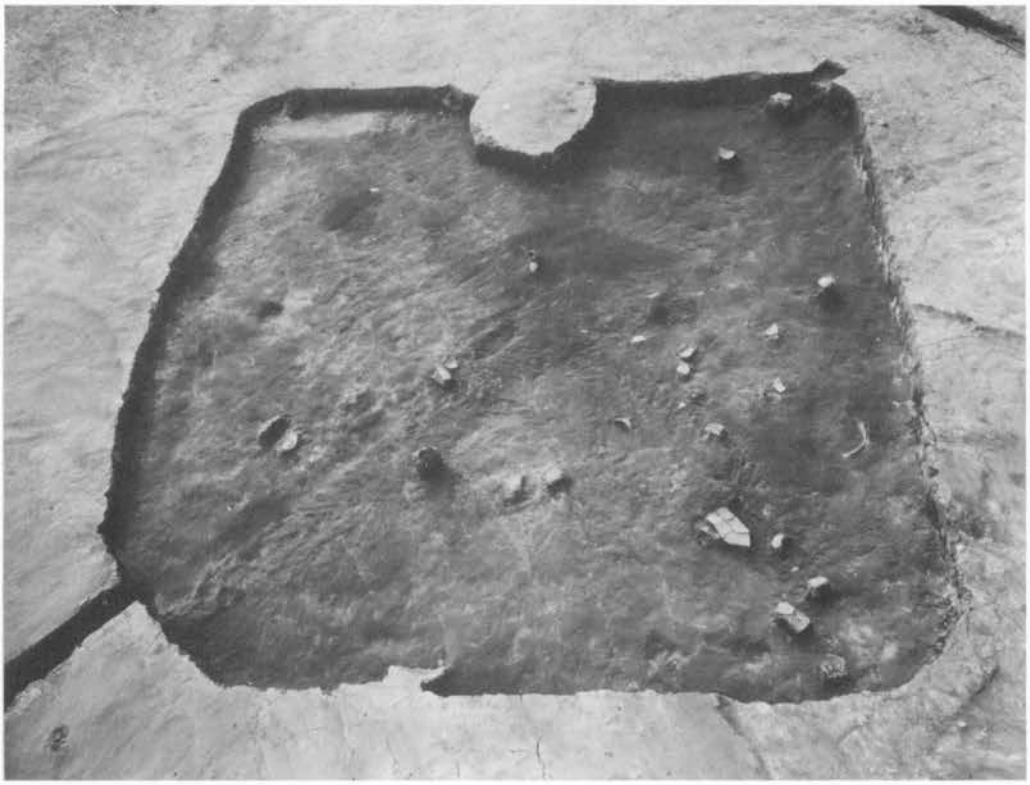
046号住居跡

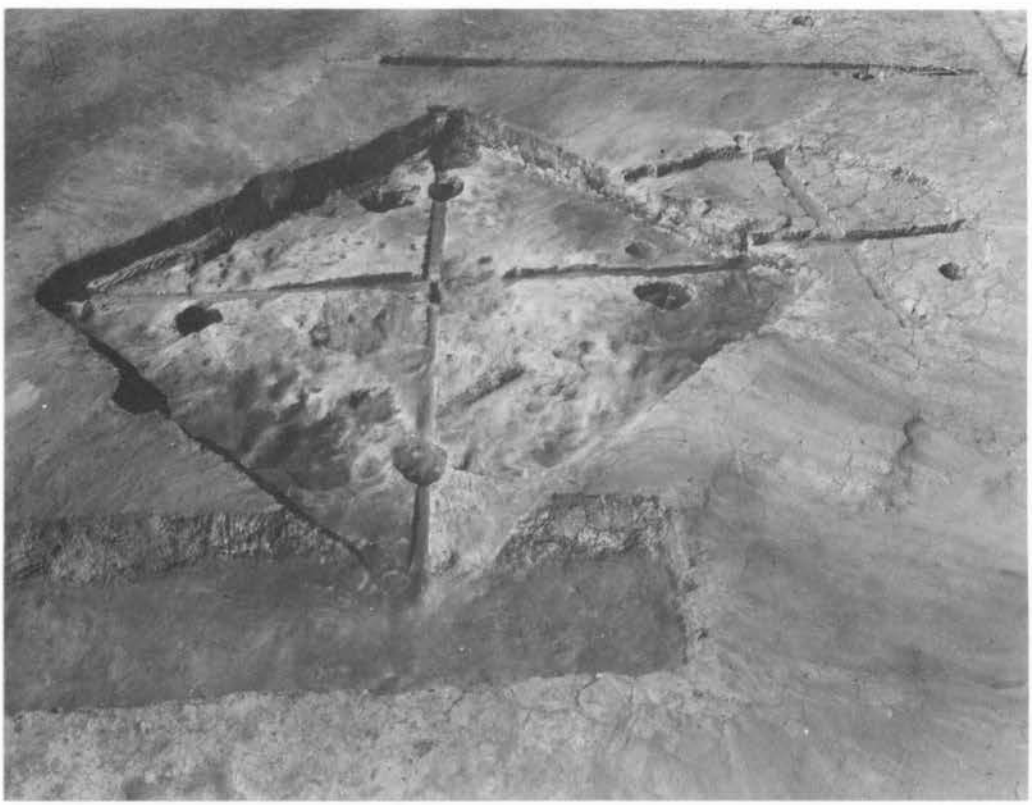


1．056A号住居跡

2．056A号住居跡遺物出土状況

図版36

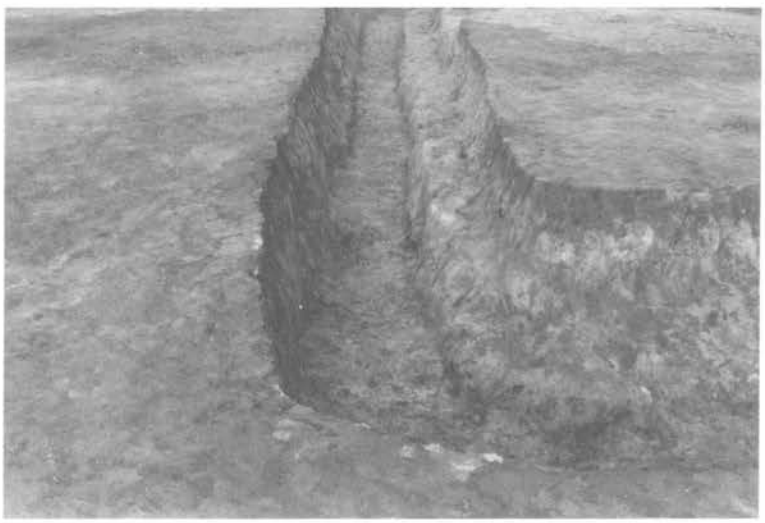




064 B 号住居跡

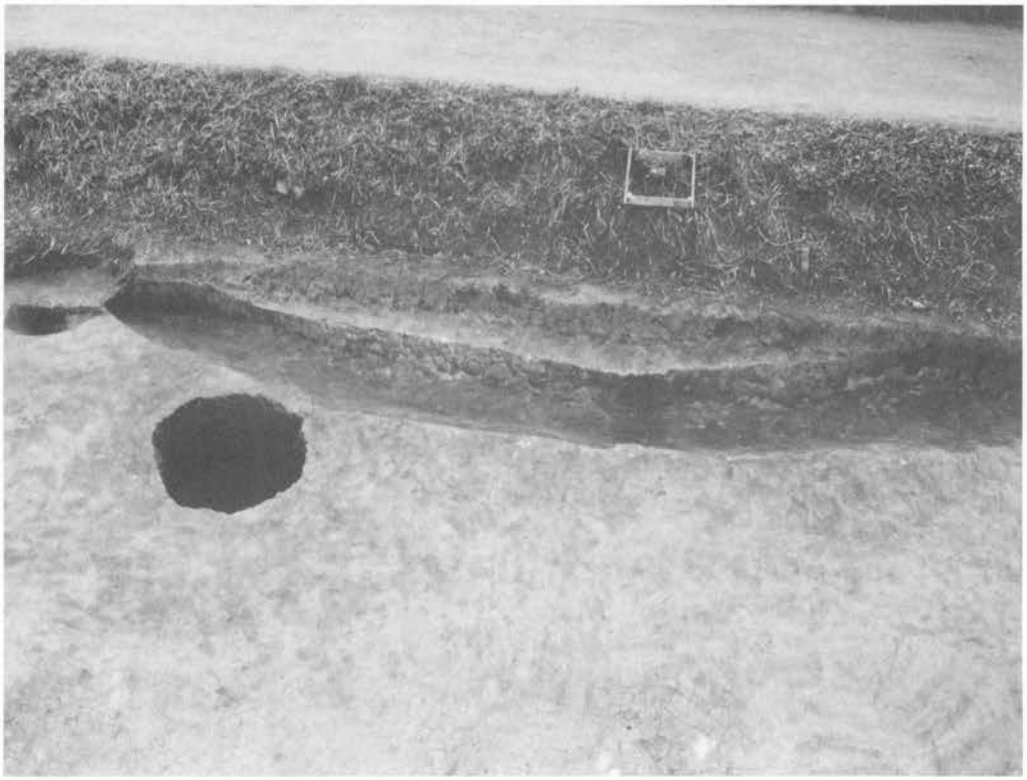
東側の周溝

北側の周溝



081 A・B号方形周溝遺構

図版38



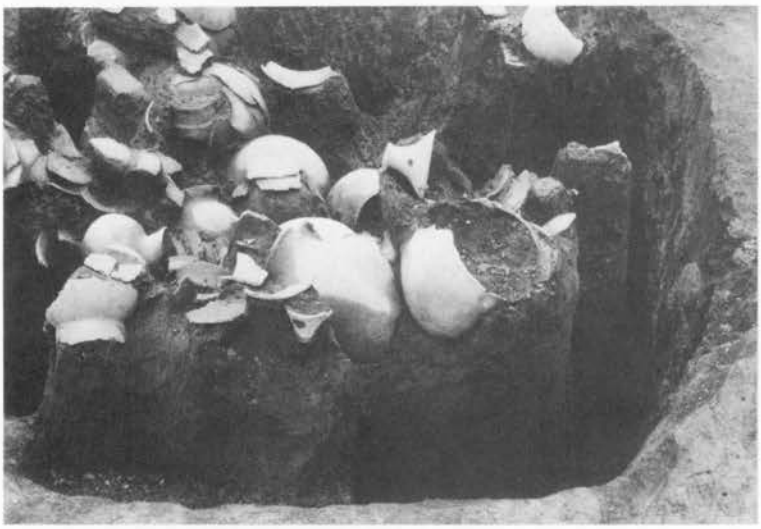
1．082号土壙・091号溝状遺構

2．083号土壙

1．085号土壙

2．086号土壙

図版40



1．088号土壙遺物出土状況

2．088号土壙

092・093号溝状遺構

図版42　002A・002B・004・021・029F号住居跡出土土器

002B-1

002A-2

004

004-2

021

029F-1

038C-2

038C-3

038C-1

003-7

048-2

048-1

056B-1

003-3

図版44

009号住居跡出土土器

009-1

009-11

009-2

009-8

009-5

009-13

009-10

010A-1

010B-4

010B-3

014A-4

014A-3

014A-2

014B-5

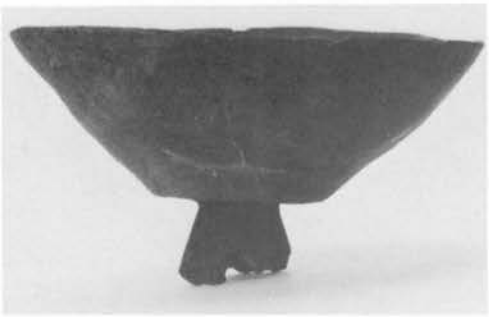
図版46　014B・015・016A・018号住居跡出土土器

014B-1

015-10

014B-3

015-9



016A-1

018-3

019-1

019-2

019-5

019-4

019-3

019-11

図版48

019・020・022号住居跡出 土土器

019-12

019-25

019-24

019-27

020-4

022-6

022-4

022-10

022-1

024-3

025-1

025-6

025-9

025-3

図版50

026号住居跡出土土器

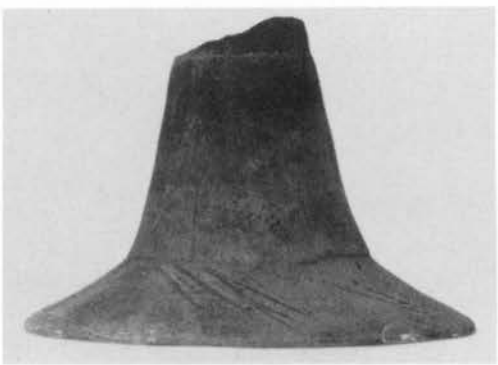
026-3

026-2

026-8

026-1

026-6



026-25

029 A -7

029 A -6

029 A -5

029 A -1

029 D -8

029 D -2

029 D -1

図版52

029E号住居跡出土土器

029E-1

029E-15

029E-13

029E-29

029E-2

029E-24

029E-25

029E-27

029E-52

029E-39

029E-32

029E-28

031B-2

031B-1

031B-4

図版54　　031D・031E・031F・032号住居跡出土土器

031D-1

031D-4

031D-6

031E-4

031F-1

031F-4

032-16

032-4

032-6

032-3

032-14

032-30

032-20

032-29

032-24

032-28

033-5

034A-1

033-6

034C-2

034C-18

034 C -15

034 C -9

034 C -16

035 B -12

034 C -17

035 B -15

図版58

035 B 号住居跡出土土器

035 B -5

035 B -2

035 B -8

035 B -4

035 B -10

035 B -7

035 B -11

035 B -3

035 B -20

035 B -21

035 B -38

035 B -44

035 B -42

035 B -43

035B号住居跡出土土器

035B-40

035B-32

035B-37

035B-13

035B-41

035B-39

035 B -48

035 B -9

038 A -6

038 A -8

038 A -7

038 A -10

038A・038B・038E号住居跡出土土器

038A-1

038B-3

038E-1

038E-8

038E-27

038E-3

038E-28

039C-6

039C-8

039C-9

039E-1

039E-10

039E-2

042・043A・044号住居跡出土土器

042-11

042-10

042-12

043A-2

043A-1

044-14

044-16

044-24

044-37

044-35

044-34

044-4

044-2

図版66

044・047号住居跡出土土器

044-6

047-3

047-4

047-1

047-2

047-15

047-16

047-17

047-12

054-3

054-2

054-6

図版68　　054・069A・069B・069E号住居跡出土土器

054-5

069A-2

069A-3

069A-5

069B-1

069B-3

069B-6

069E-1

072 B - I

073 A - I

073 A -3

073 A -4

073 A -5

073 B -2

073 B -4

073B-1

073B-9

073B-11

073C-1

073B-6

073B-10

075-2

077 A -8

077 A -5

077 A -28

077 A -29

077 A -26

077 A -27

007・077A号住居跡出土土器

077A-23

077A-14

077A-15

007-2

007-1

077A-32

007-6

007-4

007-8

007-9

008 B -4

008 B -3

013-1

013-2

013-5

013-4

013・029G・030号住居跡出土土器

013-7

013-6

013-8

013-12

029G-2

029G-3

029G-4

030-6

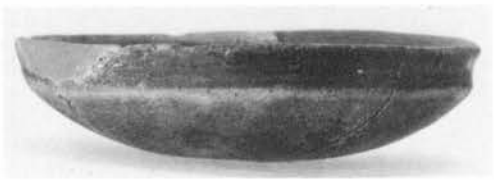
030・031A・035A・036A・039A号住居跡出土土器　図版75

030-1

031A-1

031A-4

035A-1



035A-2

035A-3

031A-6

035A-6

036A-3

図版76　039 A ・040 A ・040 E ・041号住居跡出土土器

039 A -4

040 A -7

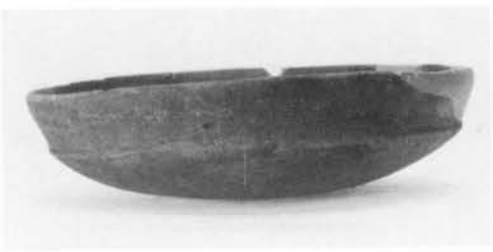
040 A -6

040 A -1

040 A -8

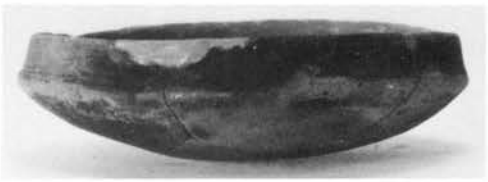
040 E -2

041-1



041-5

041-2



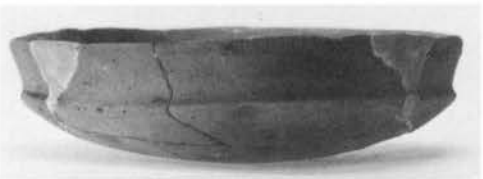
041-3

041-4

041-6

041-7

041-8



041-9

041-27

041-10

041-14

041-17

図版78

041・045号住居跡出土土器

041-16

041-20

041-21

041-23

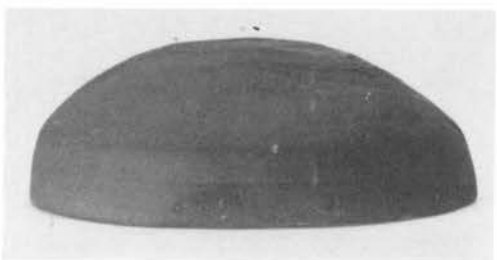
045-2

045-5

046-3

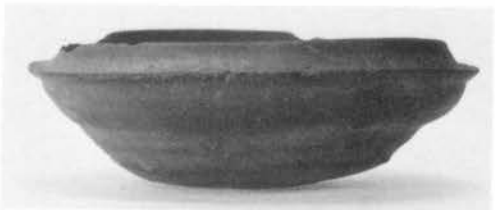
046-12

046-10



056A-4

046-11



056A-3

056A-7

056A-5

図版80　056 A ・ 064 B 号住居跡・083号土壙出土土器

056 A -8

064 B -2

064 B -5

056 A -11

083-2

056 A -10

083-3

085-3

085-1

085-4

085-5

085-8

085-13

085-10

図版82

085・086・088号土壙出土土器

085-11

086-2

085-14

086-6

088-4

088-5

088-7

088-14

088-8

088-22

088-20

088-26

088号土壙出土土器

088-19

088-24

088-17

088-23

088-25

088-28

088-13

088-12

088-16

088-18

093-7

089-1

093-9

093号溝状遺構出土土器

093-10

093-11

093-3

093-20

093-25

093-15

093-29

093-40

093-39

093-1

093-45

093-36

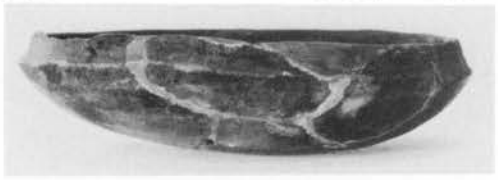
093-12

093-56

093-51

093-53

図版88　　096号溝状遺構3D45・46グリッド等出土土器等

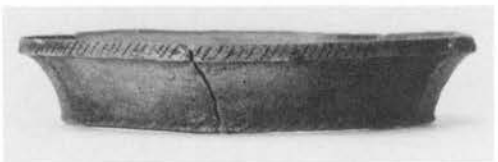


096-1

3D46-15

3D46-13

3D46-14

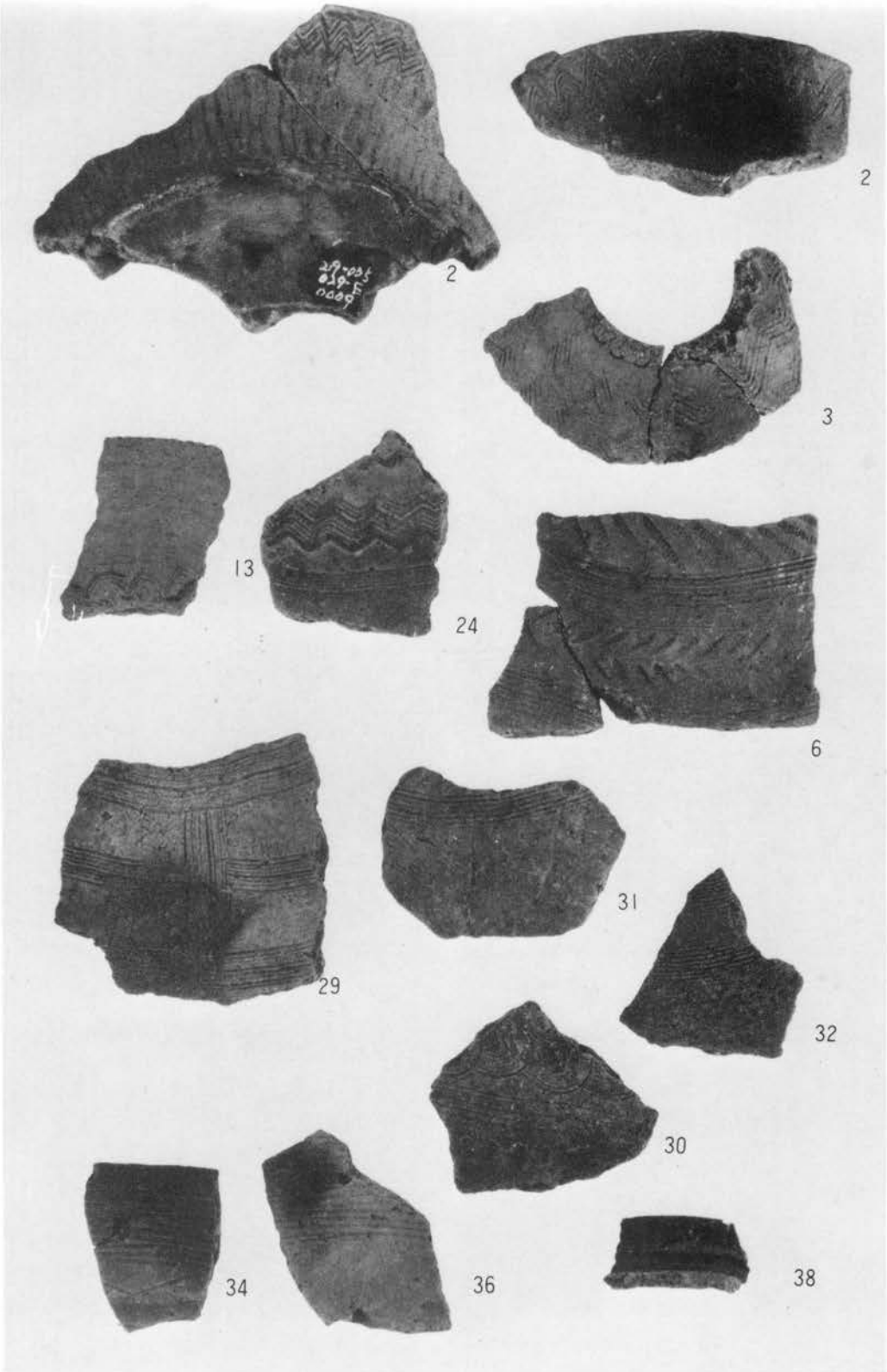


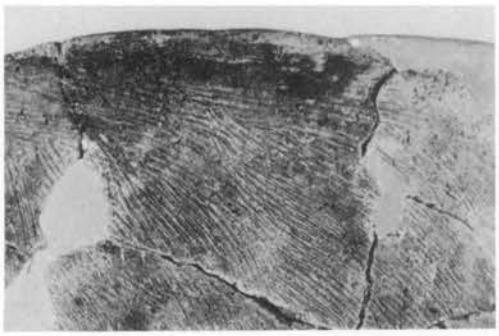
第310図-4

3D45-23

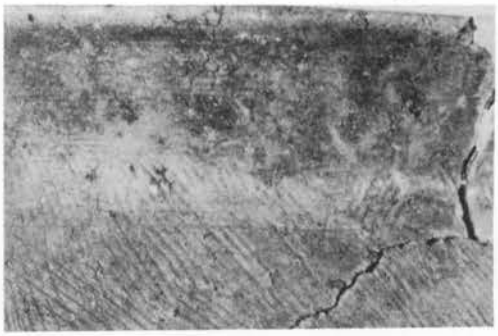
3D46-19

第310図-1


2
2
3
13
24
6
29
31
32
30
34
36
38

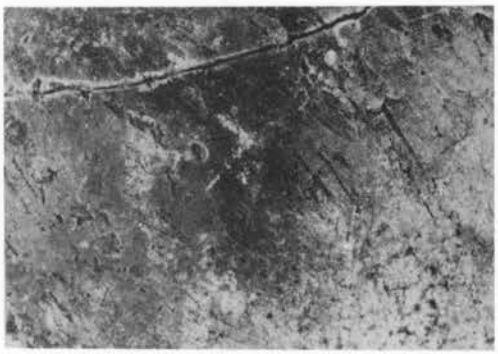


(038A-10)



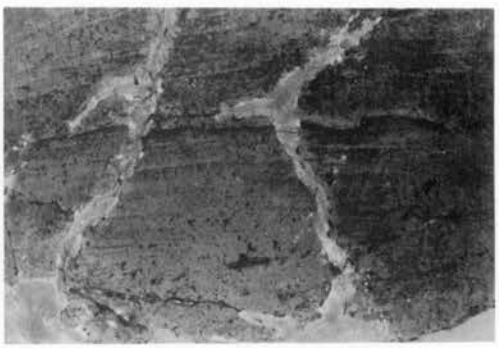
(077A-3)

(077A-3)



(3D45-23)

(054-3)

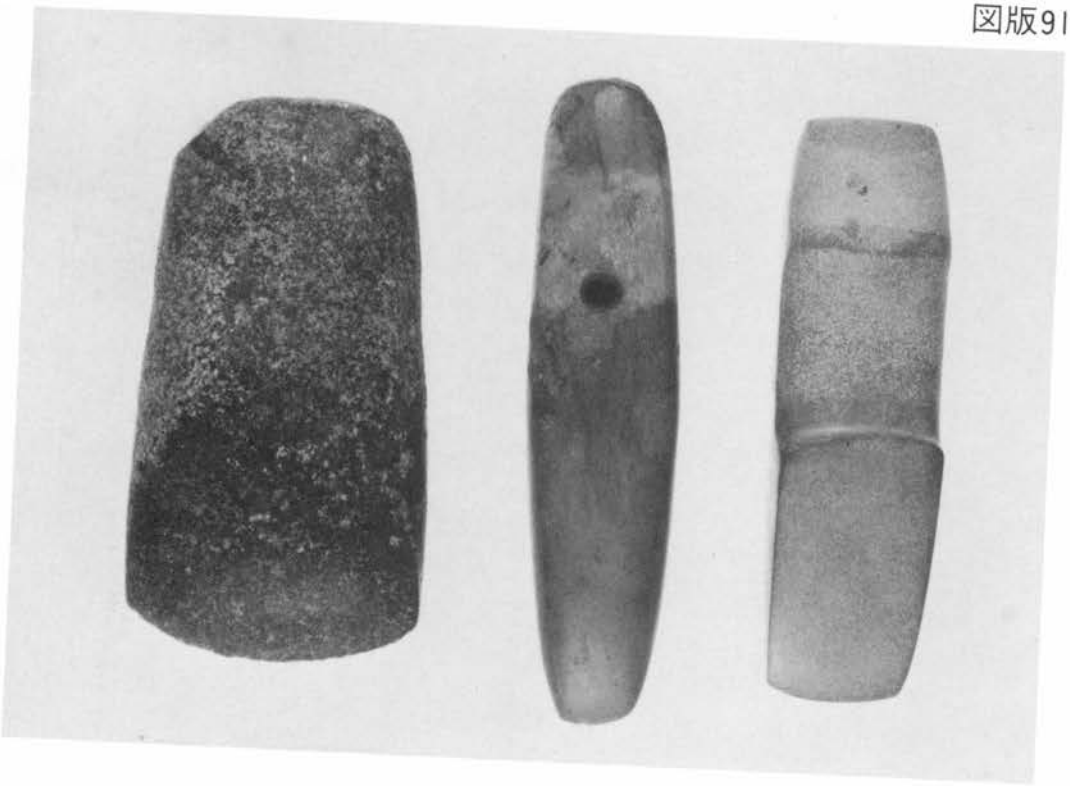


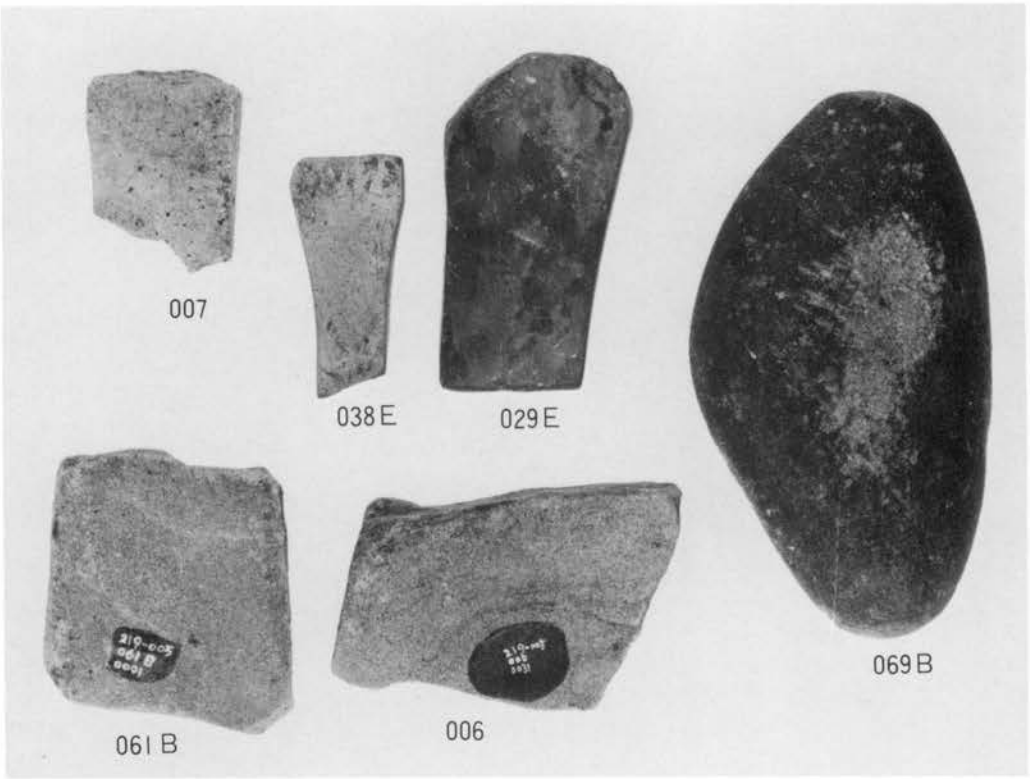
(038C-3)

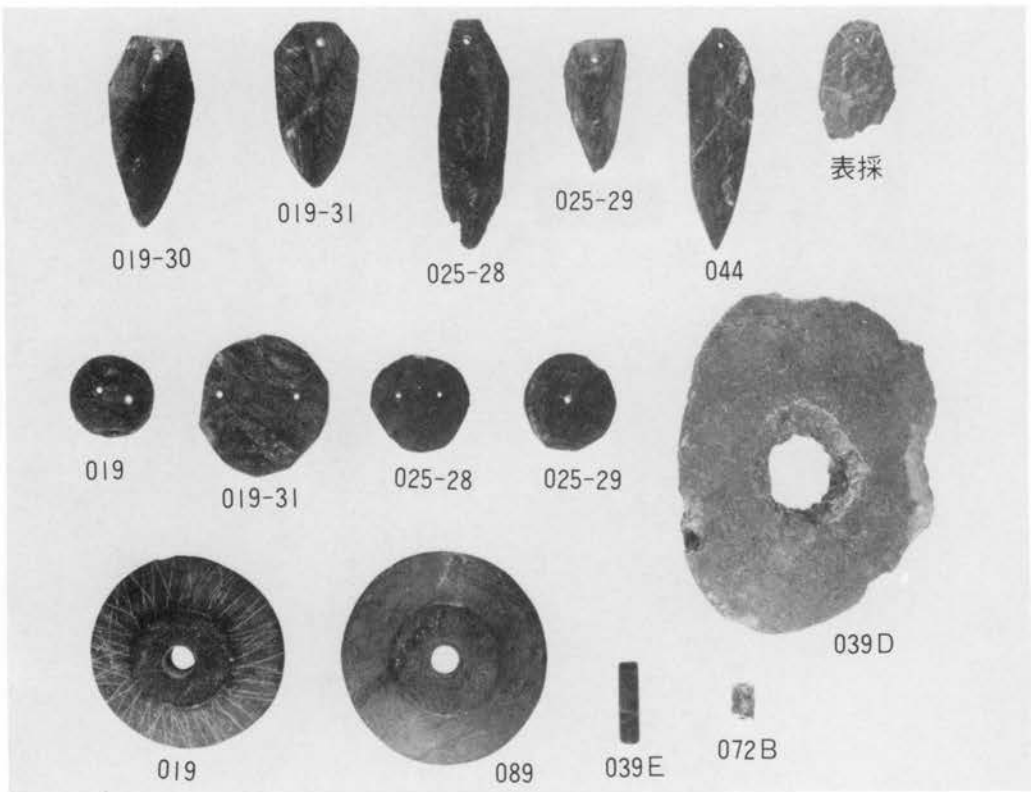
(第310図-1)

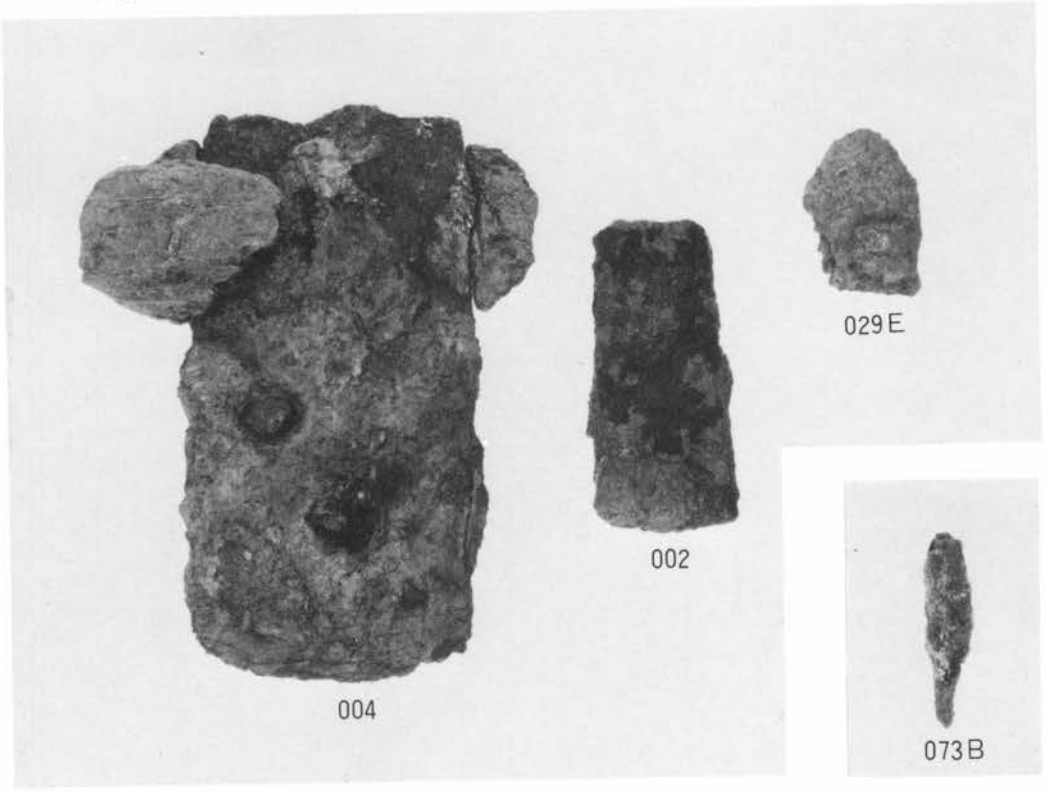
(032-24)

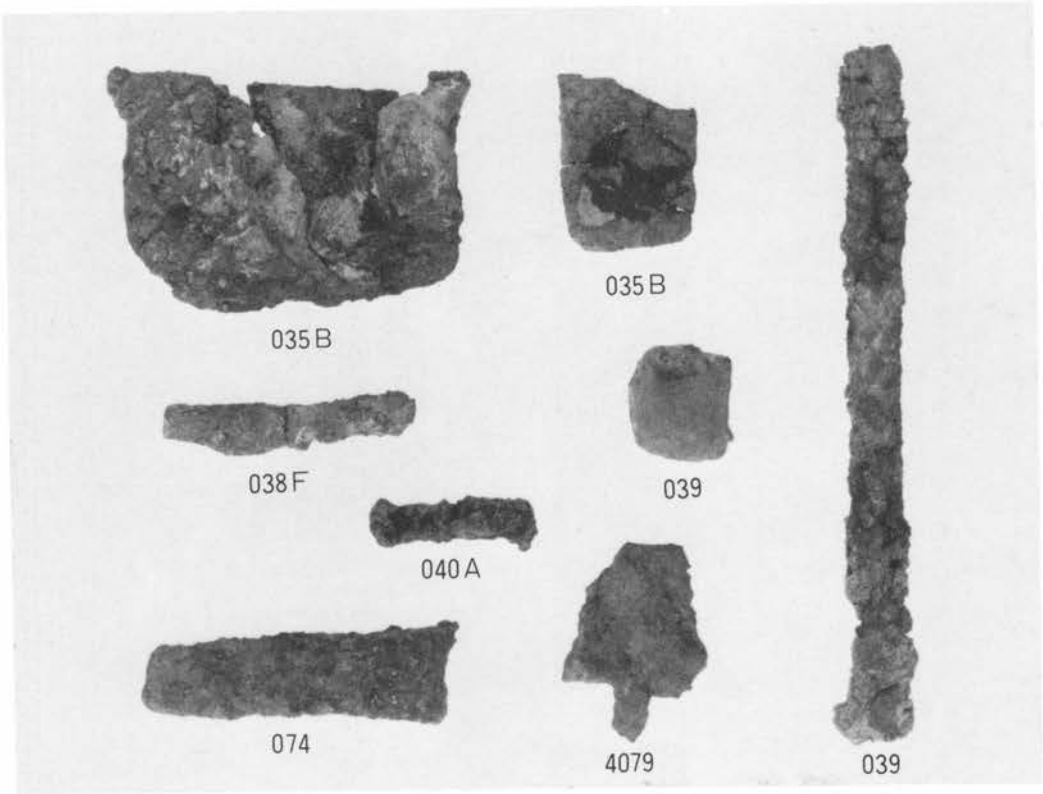
図版91



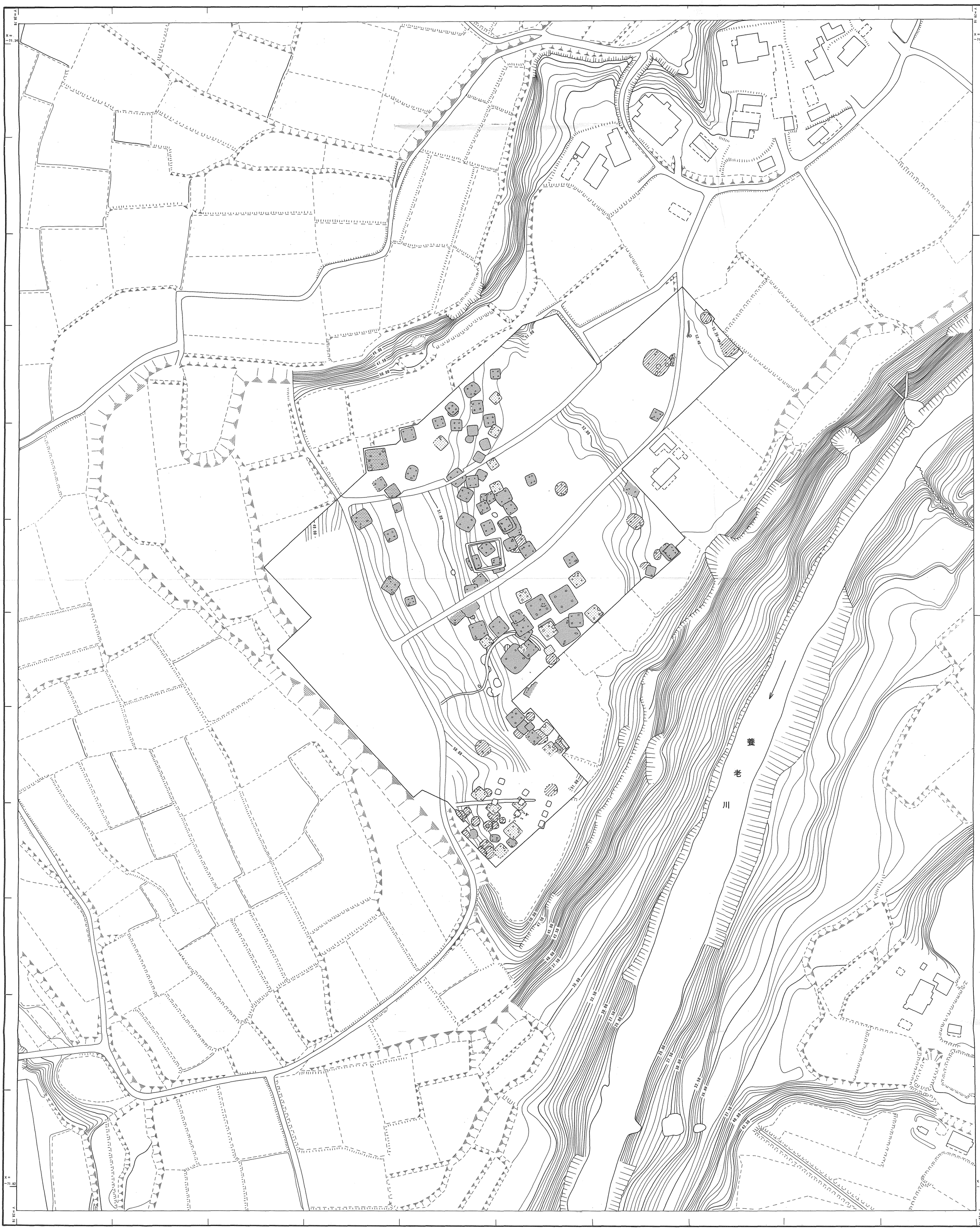

007
038E
029E
069B
061B
006


019-30
019-31
025-28
025-29
044
表採
019
019-31
025-28
025-29
039D
019
089
039E
072B


004
002
029E
073B


035B
035B
038F
040A
039
074
4079
039

付図　番後台遺跡全測図



縄文時代の住居跡　弥生時代の住居跡　五領期の住居跡　和泉期の住居跡　鬼高期の住居跡

0　80 m

註、調査区内の等高線は地山面における等高線である。

昭和57年３月20日　印刷
昭和57年３月31日　発行

市原市番後台遺跡・神明台遺跡

発行　千葉県土木部
千葉県千葉市市場町１－１
財団法人　千葉県文化財センター
千葉県千葉市亥鼻１－３－13
印刷　株式会社　ヤカ東京工場
千葉県松戸市田中新田５－５

市原市番後台遺跡・神明台遺跡 正誤表

頁	行	誤	正
目次3	9（右）	040号住居跡	040Ａ号住居跡
〃	14（右）	055Ａ号住居跡……321	055Ａ号住居跡……319
			056Ａ号住居跡……321
図版目次80	18	056Ａ・064Ｂ住居跡	056Ａ・064Ｂ号住居跡
39	5	径28～40cm	径28～40cm、
79	3.4	一群	1群
86	17	出土　た。	出土した。
87	第75図		Ａ－Ａ′（右下の土層断面図の位置）
90	3	2cm程	2m程
97	12	本址は　覆土	本址は、覆土
107	8	完形　ほぼ完形	完形、ほぼ完形
133	第108図		（Ｃ→Ｄ→Ｅを削除）
164	1	2・7・27・28	2・7・20・28
171	表	鉢	坏
232	18	本跡から	本址から
244	2	はかり南側	はかり、南側
251	3	073Ａ号跡の重複	073Ａ号跡と重複
314	11	6は	5は
334	26	（1.6～2.7）×3.7	（1.6～2.7）×3.7m
350	23	9Ｅ号の	9Ｅ号跡の
364	2	一軒毎の	1軒毎の
380	4	（36～38）	（36～38）、
〃	13	指縄	指頭
394	16	砂岩	砂岩、
403	1	口縁部付ヨコナデ	口縁部はヨコナデ
〃	11	短かい	短い（かを削除）
404	28	038Ａ・038Ａ・038Ｂ	038Ａ・038Ｂ（038Ａを削除）
405	11	Ｂ・6～7cm	Ｂ・6～7m
408	4	階段上	階段状
〃	13	南遺跡	遺跡（南を削除）
〃	19	等5集	第5集
〃	20	千田私明他	千田利明他
図版75			039Ａ－1（右下の土器）
図版88		096号溝状遺構3Ｄ45・46グリット	096号溝状遺構・3Ｄ45・46グリット
図版90		（077Ａ－3）	（077Ａ－26）